大正四年度

滿洲輿信錄

滿洲通信社

汗用志臣
第乃英武大

戊寅守宮白仁武題

滿洲興信錄序

滿洲發達の趨勢に伴ひ此地に關する諸般の事業施設に就き其內部の情形事實を知悉するの必要日に益々痛切を感ずるは復た呶々の辯を須ゐさる也乃ち此種の機關は日下世人の最も要求渇望する所にして而して今や滿洲人事興信錄出でゝ以て此の需要を充たさむとす其內容を觀るに滿洲各地の要部に活動せる各階級者約八百名の身分履歷と此地に於ける邦人の事業即ち官衙、會社、銀行、工場、各種法人團體、公共機關等の沿革內容現情等とを將て最も公平に最も確實に一々詮考記述して漏らすなからむことを期せり蓋し亦た容易の業にあらさる也而して是れ實に友人武內止戈氏の編纂に係り氏は其の特絶の精力と該博の知識とを以て幾多の困難を排し拮据黽勉遂に此書を成せり其勞や大なりと謂つへし是れ豈滿洲の情形を窺はむとする者に在つて迷海の寶筏、暗夜の明燈ならすとせむや其價値に至つては目ある者必す能く之を見ん

何そ余の贅言を待たむや是を序と爲す

大正四年十二月

國澤新兵衛

滿洲興信錄序

武内止戈氏滿洲興信錄を編して成り將に之を梓に上さんとし來りて序を余に請ふ披きて之を閲すれは人事、事業の二編に分ち滿洲に關する事物は收拾して遺さす網羅して餘さす實に滿洲人名辭書、滿洲社會事業、滿洲經營指針の三者を兼ねたるものにして家々必携の書と謂ふへし

顧ふに此書の刊行や其の費す所少ならすして以て失ふ所を償ふに足らさるへきに武内氏か之を顧みす東奔西走苦辛慘憺して遂に此の編を成せしは其の勞や多とすへきなり若し夫れ多少の缺漏ありとするも是れ白璧の微瑕のみ再版を待つて之を訂正すれは可なり從來滿洲に於て這種の編述なかりしは吾人の久しく遺憾とする所なりしか今は則ち武内氏の興信錄出てて之を補ふことを得たるを喜ひ聊か一言を卷首に冕すと云爾

大正四年十二月

大内丑之助

序

凡そ一事業を爲し 一計畫を立てむと欲する者は 必ず先つ其事及其地に關する精密確實の知識を要す 否らざれば 則ち施設に臨んて齟齬乖戻し克く目的を達すること尠し 故に曰く知彼知己百戰百勝と古人豈我を欺かむや

英人の香港を經營するや 茲に數十年夙に「ダイレクトリー」の發行あり 此書や東亞各地の有力者を網羅し 其人物業務を記載して細大漏らさす 而して時々之を訂正刊行して以て 視察者の指鍼となし大に企業界の信用を博せり 又露國の極東露領を經營するや亦「西比利亞」及「浦鹽斯德」の二書あり 此二書は東亞露領の各首要都市及其他に於いて活動せる中軸人士の氏名閲歷を詳記し且つ現下其地 社會萬般の事を登載して漏らさす 而して之を年々補修出版して以て世人の參考に便す 即ち一部の興信錄たると共に 又一つの地方案内記及殖產興業の手引書たるの性質を備へたり

顧ふに今や日支鄰交上將た東亞の大勢に鑑みて滿洲經營の急務たる何そ英の香港、露の極東に於けるに讓らむや然らは則ち之を促進完成せしむる機關として以上の各書に抵すへき好著述を要するは復た多辯を須ゐさる也然り而して今や玆に武內君著す所の滿洲興信錄出つ是れ豈上記各書と同く時勢の要求に應せる好著ならすとせむや書已に成り君來りて一言を請ふ顧ふに君は博覽能文の士なり而して百忙中許多の心血を濺きて獨力周旋此書を作れるは其勞や大にして其意豈徒爾ならむや則ち此書の價値亦問はすして知るへき也隨つて他日滿洲に於て各種事業計畫の此書に資して起るもの余亦其限量すへからさるを知る余焉んそ樂んて此に序せさるを得んや於是乎言ふ

大正四年冬十二月

淮海田岡正樹

自序

凡そ社會の事は皆人を待ちて成り、人は業に由りて現はる。故に其人なければ其業興らず、其業なければ其人現はれず、其業に觀て其人を察し、其人を察して其業に觀ば、人と業との關係因果する處、其興仆盛衰の來る處、都べて推知す可きなり。

予や在滿幾多年なるも、未だ滿洲に於ける人と業とを知悉すること能はず。在滿同胞纔に十萬、在滿事業は尨大なる滿鐵會社を外にして觀る可き者摟指するに過ぎず。滿洲果して人と業となき歟。若し滿洲に察し且つ觀る可きの人と業と無んば、百戰以て贏ち得たる我が大陸勢力圈は、知らず何人何業に由りて其經營發展を望む可きや。予は滿洲に於ける我が經營の既に十年を經過せる今日に於て、必ず多望有力なる人と業との存在するを信じ、此等人物事業の來歷及現情を詳悉して、以て我が滿洲經營の過現將來の功程を測定するの指針たらしめんことを期し、本年四月中旬より之れが調査を開始し、社員を督勵して八方に分手奔走し、役々栖々たること幾閱月、同年十一月中旬漸く大體の調査を了へて、急遽編輯に着手し、臘尾此書を成し、名けて滿洲

興信錄と云ふ。

顧ふに此書は豫想外の苦心勞身を重ねたる割合に内容振はず、且つ過誤缺漏の極めて多きを信ずるも、現在滿洲開發上の有ゆる機關の爲めに活動しつゝある最重要なる人と業とは、一も遺失する處なきを信ぜんと欲す。我が興信眼より觀たる現下滿洲に於ける人と業とは、先づ大體に於て斯の如きのみ。

予は之れに對して甚く滿足もせず、亦た甚く失望もせざる也、何となれば、之れを以て現在滿洲に於ける最重要の人物事業の總べてなりとしては、猶物足らずとして滿足せざるも、又一方より觀れば、此等の人物事業は多く皆相當の年處を滿洲に送りて、既に成功の要素たる經歷あり基礎あり、或は基礎を作りつゝあれば、今後益々努力して、更に其才識經驗を長じ、其財力富資を造くらば、數年ならずして成功せる多數の人物事業を出して、滿洲開發の爲めに大に貢献する處ある可きを信じて、失望せざればなり。況んや又我政府が今後積極的政策「滿蒙銀行設立案の如き」を採りて滿洲に臨み、母國の有力者亦風を聞いて起り、其豊富なる智力と財力とを提げ來りて以て滿洲の開發に任ずる大興公司、又は將に成らんとする滿蒙興業公司の如き者が接踵輩出するあるに於てをや、而して我が興信錄は年と與に成長伸展する此等の人

こ業こに就きて增記追訂し、聊か以て滿洲の開發に資する處あるを得ば、我が素願足らむ。

大正四年十二月

滿洲通信社に於て　武内止戈識

例言

◉本書は之れを人事と事業との二部に別てり。
◉人事の部に於ては、現下南北滿洲の官民業務の要處に於て、之れか主腦者、又は重要の臂助者として活動しつゝ、ある有らゆる階級の有資格者約八百名を選定して、其人事上の要項を記載せり。而して之れか資格選定の標準は、本著者の最も苦心せし處なるが、先づ滿洲に於て紳士的階級の最大多數を包容せる滿鐵會社を基本として、同社員の本俸月額八拾圓者（同社に於て準高級社員として待遇する者にて、加俸を加へて月收百貳拾八圓と爲る）を入選の最低標準と定め、民間側は地位及收入の略ぼ之に當る者を選出し、又官吏側も此の標準に應じて判任二級以上者を選ぶを原則とせり。されど幾多の除外例なきに非らず。即ち滿鐵社員中の地方事務所主任（元の經理主任）及驛長（小驛長は此限りに非らず）の如き其職責地位が在勤地に於て太た重要なる者は、其俸給が上記標準額に少しく達せざるとも、之れを入選とせり。又官吏中判任一二級者と雖も、責任ある職務に在らざる者は之れを除外せることあるに反し、三四級者にして局署科の主腦として民間に接觸多き重任に在る者、

例之へは警務支署長、郵便局長の如き多く之れを載錄したり。又各領事館員は、其收入豐かにして社交的地位亦高きを以て判任四級以上を收めたり。或は又單に收入の多寡を以て其社會上の地位勢力を論定す可からざる宗教、教育、慈善に從事する者、乃至新聞記者の如きは、其著名なる者又は責任の位置に在る者は、亦之れを載錄したり。而して軍人階級は特別の立場を有し、民間其他との直接の接觸事件尠きを以て、駐紮軍を除ける他の在滿軍隊及憲兵隊に就きて、大尉以上及同相當官の、人事の梗概のみを記載する事とせり。

◎事業の部に於ては、現在滿洲に於て日本人の從事（日支合辦をも含む）しつゝある官民一切の事業中の有資格者約八百を選定して、其經過及現情の概要を記述せり。而して之れが資格の標準は、大連に於ては、民政署調査の收稅臺帳に據り、營業稅年額五拾圓以上の者を選出して、一々嚴正なる實際の調查詮考を加へて之を取捨したり。而して沿線各地に於ては、滿鐵所管の鐵道附屬地と、領事所管內とは其課稅の比率及等級を異にするのみならず、各地每に特種事情の下に其課稅の輕重一律ならずして、大連に於けるが如き略ぼ一定せる標準を見出す能はざるを以て、沿線各地は、各地每に其地に相應する標準を立て、資格者を選定したり。故に事業の部に載せたる者は人事の部に於

ける者の如くに、略ぼ共通標準の下に在る同一資格者なりとして觀るを得ざる也。

◉本書は興信錄たるの性質上、人事及事業の部共に各個人及各事業の收入程度、又は收入の標的たる納稅額の發表を必要とすること勿論なるも、未だ劃一なる所得稅又は營業稅の施行せられざる滿洲に於て、各地特殊なる課稅率に據る納稅額を記するとも、納稅者の共通せる資格を審定すること能はざる可し。又各人各業の收入に就きては、著者は其大體の調査を遂げたるも、滿洲の現狀に於ては、之れを發表するを不可とするの事情あるに餘儀なくせられて、今回は全く之れを記載せざる事とせり。故に本書に載せたる者の財的資格は、人事の部に於ては、各地を通じて最低百圓內外の收入ある者(前記除外例者を除く)、又事業の部に於ては、大連にては最低營業稅年額五拾圓內外を納付するの資力ある者、沿線各地にては其納稅が此額に達せざるも、其在留地方に於て信用の確實なる者、或は現在の收入未だ太だ豊饒ならざるも、其經營せる業務の基礎既に確立し、或は確立するの見込ある者なりと觀は大過なし。

◉本書編纂に於て甚だしく苦心し多大の精力と時間とを消磨したるは人事の調査なりき。有資格者中極少數者を除くの外は多く自己の經歷を語らず、或は之

れを語るも極控目にして詳ならず、或は其經歴及家庭の事柄が社會に發表せらるゝを好まずして絶對に之れが告白を拒斥する者あり、又稀れには其發表せられざらんことを懇求せし者もあり。是れ著者の寧ろ意外とする處にして謙遜抑退なる我國民性の美風は玆處に在りとするも、此風あるが爲めに本書の調査上實に言ふ可からざる苦心と面倒とを重ねたり。故に有資格者中に於て已むなく之を遺脱せしもあり、或は疾病旅行其他事故の爲め調査を終ふる能はずして之を遺脱せし者もあり、特に旅順法院が平石院長を除き、滿鐵會社の撫順炭鑛が米倉坑長を除きたる其他の幹部員、及本溪湖煤鐵公司の幹部員全部が或る出來事の爲めに調査することを能はずして、之れが人事を脱漏せるは、本書の深く遺憾とする處なり。されども滿洲に於ける有らゆる階級、有らゆる事業の代表的人物に到りては一も遺漏する處なし。

◎本書人事の部に載する處が官吏、會社、銀行員等の有給者側に多くして、獨立自營の民間商人側に尠きは、民間商人等の人事的調査の困難なること、且つ彼等は現在相當の信用資力あるに拘らず、其經歴としては少年より單調の商業に從事すと云ふの外特記す可きの事項なき者多きとに因る。故に此等は事業の部中各自營業の下に其人事の要點を記載せり。

◉本書事業の部に於ては、各業の起源、沿革、及現情を詳記するを目的とし、內には畧ぼ此の目的を盡くせる者あるも、記事の極めて簡略なる者亦太だ多し。是れ調査の當時本人が自ら實情を告白するを拒斥したるか、又は其旅行不在なりしか、或は種々の出來事の爲めに調査不能なりしか、或は調査するの機會を失ひたるかに因る者なり。

◉本書は著者最初の計劃に據れば、其內容を人事、事業、及調査の三部に別ち、人事に於ては滿洲に於ける人物の信用、事業に於ては滿洲に於ける事業の信用、調査に於ては滿洲の殖産興業的信用を表示す可き調査、並に滿洲に關する政事、經濟、外交、歷史、交通、社會等一切の智識を包含する諸資料の精萃を摺拾し、此の一書を以て滿洲の人事興信錄、紳士錄、商工信用錄に併せて滿洲案內記、滿洲百事要覽等の諸要素を悉く具備せしめんことを期せり。故に著者は人事及事業の調査と同時に有らゆる材料を都督府、滿鐵會社、各領事館及民間の團體互商等より蒐集して獲る處は案頭に山を爲せり。然るに本書の刊行を舊臘末に終る可きの必要に迫られて非常に編輯を急ぎたると、本書紙數が人事と事業とのみにて既に豫定に達し、此上更に調査の部を加ふる時は餘りに浩瀚となり、印刷諸費の一時に暴騰せるに際し、豫約定價にては

實費を償ふ事能はず、何等外援なき著者の貧嚢は此れが負擔に堪へざるとに因り、萬遺憾ながら本書の精彩とも云ふ可き調査の全部を削除することゝし、唯だ各地毎に概說を附して其大勢を明かにせり。此の概說は著者親ら執筆せるあるも、其多くは編輯助手に材料を提供し要項を指示して記述せしめ、著者之れに加筆したる者なるを以て、體裁の一樣ならざる者多きを免れず。

◉滿洲の經營及施設に於て最も觀る可き者は、關東都督府と南滿洲鐵道株式會社となり。故に本書は大連の部に於て滿鐵會社の大要を說盡し、都督府に關しては旅順の部に於て其沿革及組織の一般のみを略說し、其各機關各施設に關しては調査の部に於て之れを詳述するの積りなりし處、調査の全部を削除したる爲め終に此等の記事を缺如せるに到れるは、著者の深く遺憾とする處なり。

◉本書調査の爲めに著者は社員を督勵して再々沿線を巡回したるも、終に新民屯、昌圖、四平街、吉林に到るの機會を有せざりき。以上の處は日本人の人事及事業上の有資格者尠きも、亦四五の記す可き者なきに非らざるに、其多くを遺漏したるは太だ遺憾なり。

◉本書の標的とする處は我が日本人に在るを以て、支那人及歐米人の一切を除

外したり。然れども滿洲興信錄本來の目的よりすれば、彼等を包容することが内外に對して實際上の利便あるに似たり。故に次回の訂正期には汎く彼等をも網羅し、且つ其範圍を浦鹽、青島、天津、北京方面迄擴張せんと欲す。

◉本書の刊行は滿洲に於ける最初の企劃にして豫想外の困難多く、隨ふて内容の不備不振なる割合には多大の勞費を消糜したり。然れども著者は之れに因りて滿洲現在の人と業との大體を知悉したれば、今後之れを增減補訂することは甚だしき難事に非らず。故に次回に於ては調査の誤謬及缺漏を補正し、登載の範圍を擴大し、正確有益の資料に富む調査の部を加へて、滿洲興信錄及滿洲百事要覽の性質を兼有する紙數浩瀚の萬人必携書を安價を以て社會に提供し得べきを信ず。

◉本書は大正四年四月中旬始めて調査を開始し、同年十一月中旬より編輯に著手すると同時に印刷に附し、同十二月二十九日十中九迄の印刷を終はりし儘に中止越年するの已む無きに到れり。故に本書記載の事項中、印刷開始後の變更は之れを訂正するを得ざりき。

◉著者は初め其本職たる通信社業務の餘閑を割きて此書を成すの冀望なりし處、著手後事の容易ならざるを知るや、終に挺身して親ら難局面に當り、四月以

降は自己の有する全時間の八分迄を此書の爲めに投じたり。而して著者を佐けて調査又は事務に鞅掌したるは社員田山正十、田中直記の二君、編修に補助せしは柴田閑君、此外の應援者に社員星、廣瀨の二君ありたり。著者は本書を成すに就きて都督府、滿鐵會社、大連民政署、各領事館、各公共團體、其他官民有志が尠なからざる援助を與へられたるに對し、特に都督府五泉事務官、滿鐵久保庶務課長兩氏の厚意に負ふ處多きに對して、滿腔の感謝を表せんと欲す。

大正五年一月中旬

著者識

滿洲興信錄

索引

人事之部

（イ）

（チ）

（オ）

（ヨ）

（ム）

（ウ）

（キ）

（ユ）

（ミ）

（セ）

（ス）

在滿洲陸軍武官同相當官並ニ關東憲兵隊員〔自二〇八 至二一四〕



事業の部

（イ）

（オ）

（ワ）

人事之部

◉伊藤武一郎　滿洲日日新聞編輯長　大連記者團幹事　士族

原籍　東京市牛込區辨天町一五七番地
現住　大連市春日町二七番（電話一〇五一番）

明治三年八月十六日東京下谷區に生る生後幾許もなく舊藩地伊勢龜山に伴はれ同地にて小學教育を卒り三重縣中學校に入りて卒業後東京に出て早稻田專門學校に入りしも中途志望を變じて海軍に入り明治二十九年轉じて文藝界に投じ同三十五年始めて新聞界の人となり横濱貿易新報の擴張に際し入りて編輯長となる四十一年九月滿洲日日新聞に入り四十五年三月一度び辭して東京每夕新聞社に入りしも同年七月再び聘せられて滿洲日日新聞社に入り現に編輯長たり

母堂　みつ子　七十二歳　夫人　銈子　三十九歳
長男　武雄　二十一歳　長女　君代　九　歳
次女　紀子　一　歳

◉伊藤寛　三井物產會社牛莊出張所長　三泰油房取締役　營口民團行政委員

原籍　愛知縣海部郡鍋田村
現住　營口新市街南本街

明治十二年一月九日生る三十四年東京高等商業學校卒業後直ちに三井物產に入社し香港マニラ其他海外各支店を經て三十九年三月滿洲勤務となり營口鐵嶺哈爾賓を經て大正二年三月現任に就く

夫人　壽枝　三十歳　長男　鐵夫　六　歳
長女　數子　八　歳　次女　春江　三　歳

◉伊藤原藏（號冰山）　滿鐵會社大石橋經理係主任　士族

原籍　秋田縣平鹿郡橫手町
現住　大石橋大街社宅

慶應二年十月二十九日生る明治三十三年より同四十年二月迄八箇年間秋田縣警部奉職同年三月一日滿鐵會社入社今日に至る

母堂　でん　六十五歳　夫人　すま　四十九歳
長男　健治　二十一歳　次男　庫藏　十六歳
三女　しゅん二十四歳（女教員奉職）　四女　とみ　十八歳

◉伊東小三郎　橫濱正金銀行奉天支店支配人　奉天商業會議所議員

原籍　佐賀縣佐賀郡神野村
現住　奉天城內四平街舍宅（電話一一番）

元治元年十月十一日生る東京外國語學校淸語科を卒業し明治二十四年日本銀行に入り二十九年臺灣支店臺中出張所詰に轉じ三十二年轉じて橫濱正金銀行員

となり同年牛莊支店詰を命ぜられ三十五年天津支店に轉じ三十八年更に北京支店勤務となり四十年鐵嶺出張所主任に拔擢せられ四十五年四月現職に昇轉す

伊藤清四郎　滿鐵會社奉天車輛係主任

原籍　島根縣簸川郡神西村大字神門三一六番地
現住　奉天驛前街露路ト街三八號地の一

明治十八年六月二十日生る同四十三年七月京都帝國大學理工科大學機械科卒業四十三年八月南滿洲鐵道株式會社に奉職し本社、公主嶺、撫順の車輛係に歴任し大正二年二月現職に轉ず

父君　清三郎　六十八歳　　母堂　ふみ子　六十六歳
夫人　たら子　二十四歳　　男　正夫　三歳

伊地知正治　[illegible]警視　遼陽警務署長　高等官六等從七位　士族

原籍　鹿兒島縣姶良郡加治木町一七七番地
現住　遼陽新市街地警務署官舍

明治十一年八月十日生る明治三十七年二月警視廳警部拜命三十九年十月關東都督府に轉任し公主嶺警務署長四十年十一月遼陽警務署長四十一年五月大石橋支署長、四十三年五月警察官練習所教官等に歴任して大正三年二月遼陽警務署長を命ぜられ現任に至る

父君　[illegible]　七十五歳　　母堂　[illegible]子　七十歳
夫人　[illegible]子　二十三歳　　長女　[illegible]智子　五歳
次女　[illegible]子　三歳

樣崎彌五郎　滿鐵會社長春經理主任　兼吉林貿易公司主任　吉林燐寸會社長

原籍　茨城縣[illegible]
現住　長春新市街[illegible]號地（電話二一番）

明治八年七月一日生る明治三十九年十月東京帝國大學獨法科卒業翌年三月滿鐵會社に入り會計課勤務となる四十三年八月遼陽經理係主任に昇轉し四十四年九月遼陽市營公司支配人を兼務せしが大正二年九月長春經理係主任に轉じ同四年三月吉林貿易公司主任兼務同年四月吉林燐寸會社長兼務を命ぜられ今日に至る

夫人　綠子　二十六歳　　長女　いさ子　三歳
二女　春子　一歳

岩崎　勳　大連[illegible]合資會社支配人

原籍　横濱市[illegible]町四の六二番地
現住　大連市[illegible]（電話六六六番）

明治四年八月一日生る家世[illegible]横濱に於て金物商を

營むを以て幼少より家業に從事したりしが四十四年渡連岩崎次三郎、横山治兵衛氏等の合資經營に係る大連煉瓦製造會社を二三の同士と買收して大連煉瓦合資會社と改稱し爾來同社經營に專任せり

夫人　なか子　三十七歳　男　一　名　女　三　名

◉岩崎正一　鴨綠江採木公司總務課長　從七位勳六等

原籍　大分縣北海部郡臼杵町

現住　安東縣鴨綠江採木公司社宅（電話三一七番）

明治七年七月十四日生る同二十八年七月東京帝國大學農科大學林學科乙科卒業同年八月東京大林區署營林主事、三十二年二月陸軍砲兵少尉、同年五月林務官補、三十七年十二月任陸軍砲兵中尉、四十一年北海道廳在勤同年五月北海道廳技師等を歷て四十一年十二月鴨綠江採木公司技師に任ぜられ大正元年十二月同公司總務課長を命ぜらる

夫人　つぎ子　男兒　三　名　女兒　二　名

◉岩永龜次　牛莊局郵便部主任　通信書記　勳七等

原籍　熊本縣飽託郡清水村大字室園六五六番地

現住　營口舊市街牛莊郵便局內官舍

明治九年九月四日生る明治三十一年四月東京郵便電信學校郵便科卒業通信書記に任ぜられ熊本長崎上海等の各郵便局を歷任し四十三年八月牛莊郵便局在勤を命ぜられ爾來勤續

夫人　登女子　三十三歳　長男　巖　十五歳

長女　瓊江子　十一歳　次女　清子　九歳

三女　節子　二歳

◉岩永裕吉　南滿洲鐵道株式會社長春驛長　士族

原籍　東京府荏原郡下目黑一五六番地

現住　長春滿鐵社宅一三七號（電話九番）

明治十六年九月十二日生る同四十二年京都帝國大學法科大學英法科卒業同四十三年文官高等試驗合格、同年十二月南滿洲鐵道株式會社に聘用、四十四年九月長春驛助役拜命、大正二年九月長春驛長に昇任す

母堂　鄰子　五十六歳　夫人　すゞ子　二十五歳

男　信吉　四　歳　女　あい子　二　歳

◉岩野俊治　滿鐵會社南滿醫學堂教授

原籍　千葉縣君津郡竹岡村四五〇番地

現住　奉天新市街

明治十一年八月十三日生る同三十六年岡山醫學專門

學校卒業同時に東京醫科大學附屬醫院勤務、三十七年九月醫師開業免狀下附さる三十八年臺灣總督府專賣局事務囑託となり三十九年四月臺北醫院醫務囑託に轉じ四十年七月滿鐵會社醫員に補せられ四十一年四月獨逸留學被命四十五年二月歸朝同年三月南滿醫學堂教授となる

夫人　蜂子　二十三歳　長男　啓　二　歳

◉岩間德也　關東都督府囑託 公學堂南金書院長心得

原籍　秋田縣由利郡本莊町仲町一六番地
現住　金州城東門外南金書院內（電話一〇番）

明治五年三月二十六日生る明治二十七年秋田中學校卒業後縣下の教員となり又郡市役所に學務主任たること數年同三十四年三月南京同文書院に入り三十七年三月商務科を卒業し當時突發せる日露戰爭に關して或る任務を囑托せられて上海に滯在せしが尋て歸京外務省に奉職す同年末金州軍政署の聘に應じて來滿今の公學堂南金書院の前身たる民立南金學堂創立の任に當り三十九年十月同學堂は公學堂南金書院と改稱し其院長を命せられ又同院內設置の蠶業傳習所長を兼ね專ら支那子弟の教養に任せり

夫人　喜久子　二十九歳　長男　寧　八　歳
次男　正雄　一　歳　次女　靜江　四　歳

◉岩藤與一郎　川崎造船所大連出張所事務長 兼技師長　勳五等　士族

原籍　東京府豐多摩郡千駄ヶ谷
現住　大連市濱町三〇號地（電話五〇八番）

文久二年五月三日岡山縣岡山市に生る明治十三年三菱商船學校卒業後汽船の運轉士となり同二十一年船長となる二十七、八年日清戰役中陸上勤務に轉じ日本郵船株式會社宇品出張所在勤監督となる二十八年日清戰役の功に依り單光旭日章を下賜せらる二十九年監督助役に進み橫濱在勤となる三十二年社用にて歐洲に出張の處翌年北清事件の爲め歸朝を命せられ同時に宇品出張所勤務となる三十七年日露戰役に際し宇品にて御用船事務係となり戰役の功に依り勳五等を賜はる四十四年依願郵船會社解雇大正四年八月川崎造船所に入り同時に大連出張所事務長兼技師長として渡來す

夫人　もと子　四十八歳　長女　春子　二男　俊正
三男　重正　二女　英子

◉岩瀨治三郎　株式會社三泰油房取締役、兼大連支店主任 滿洲重要物產同業組合評議員

原籍　群馬縣北甘樂郡一ノ宮村大字宮崎村
現住　大連市軍用地區第二區二號地　（電九九三番）

明治十六年五月二十九日生る三十九年七月東京高等商業學校卒業同時に三井物産株式會社に入り本店に勤務す同年十一月同社大連出張所に轉任大正二年九月株式會社三泰油房取締役となり今日に至る

夫人　秀　子　二十八歳　男　泰　治　四　歳
女　順　子　二　歳

◉飯田　郁　滿鐵會社電氣作業所計算主任

原籍　東京市下谷區御徒町二丁目一八番地
現住　大連市近江町ヒ區六號

明治八年十一月十日信州松本に生る、明治二十九年三井銀行本店勤務三十六年辭職三十九年横濱米商ブライト、コーツ、カムベル商會に入り四十年五月大阪に於てビルブローカーを開業し同年九月滿鐵會社に入る

母堂　きゝ子　五十九歳　夫人　せん子　二十八歳
長女　文　子　六　歳　長男　正　武　四　歳
次女　道　子　二　歳

◉飯田耕一郎　滿鐵會社技術局保線課員　勳六等　士族

原籍　靜岡縣駿東郡沼津町城内
現住　大連市霧島町ォ區三一號地

明治三年五月十九日生る同二十三年十月鐵道廳國府津保線勤務、二十七年四月遞信省鐵道局工務課勤務二十九年九月上越鐵道創立事務所技術部、三十年十月七尾鐵道工務課、三十二年六月紀和鐵道技術課、三十四年十月北海道廳鐵道部保線課、三十八年七月野戰鐵道提理部工務課等に歷任して四十年四月南滿洲鐵道株式會社工務課に轉ず

母堂　ミツ子　六十一歳　夫人　意　誠　三十八歳
長男　鳳　夫　六　歳

◉飯塚松太郎　飯塚工務局主（土木請負業）大連市會議員　ノ連商業會議所常議員　滿洲土木建築業組合聯組合長　勳八等　士族

原籍　岡山市東中山下町二十七番地
現住　大連市西公園町ヶ區三八號地　（電話一六二番）

明治元年二月二十二日生る同二十三年上海貿易研究所に入り廿六年卒業二十七、八年の日清役に際し陸軍通譯官として出征功に依り勳八等白色桐葉章を下賜せらる二十九年渡臺臺北縣廳通譯官拜命同三十三年北淸事變に際し岡澤侍從武官長に隨行して天津に至り同年十月歸還と同時に官界を辭して再び天津に航し軍の用達商となる三十四年天津專管居留地域擴

大せらるゝに及び其埋立工事の請負をなす其後日露の戰役に際し遼河の陸軍輸送に從事す卅八年七月營口に入り飯塚工程局を開設して專ら土木請負業に從事す營口新市街の建設は大部分其手に成りしなり三十九年秋大連に支店を設置し四十一年本據を大連に移して營口を支店に改む四十四年老虎灘、于家屯に農場を設け土木請負業の傍ら田園を開拓しつゝあり

夫人　さく子　四十七歲

◉市川林太郎　旅順工科學堂敎授 高等官六等　士族

原籍　新潟縣高田市裏川原町五番戶
現住　旅順新市街旭川町三番地

明治二年十二月一日生る同二十六年七月帝國大學理科大學數學科專科卒業し爾來各學校の敎職に歷任し四十四年旅順工科學堂敎授を拜命す

夫人　美和子　長男　秀一　次男　春二　三男　秋和
四男　文三　五男　正夫　長女　美代（他嫁）　二女貞子

◉市田三郎　近江洋行主（時計貴金屬商） 營口民團行政委員　士族

原籍　滋賀縣犬上郡彥根芹橋一ヶ丁目
現住　營口舊市街西北街　（電話國二〇七番）

明治元年十一月二十四日生る早年より根彥に於て時計及雜貨業を營み明治二十七年より露領に年々出張して漁業を經營し三十六年には沿海州及カムサッカに七個の漁場を有する程に業務發達せし處日露開戰に際し其企業を拋ちて歸朝し三十八年三月營口に來り近江洋行を開設して今日に及ぶ

夫人　春子　三十八歲　女　勝子　二十八歲
男　友二　五歲

◉市田菊次郎　滿鐵會社技術局建築課員

原籍　滋賀縣神崎郡南五个庄村大字石川一五〇番地
現住　大連市霧島町ヶ區三七號地

明治十三年三月二十三日生る同三十九年東京帝國大學工科大學土木科を卒業し四十一年滿鐵會社に聘用され同時に現職就任今日に至る

夫人　梅子　十九歲

◉井上初之助　奉天開埠局應聘員

原籍　大阪府西成郡鷺洲町字浦江
現住　奉天西小門外開埠局官舍

明治十六年三月十五日生る明治三十五年大阪外國語學校卒業三十八年二月旅順鎭守府幕僚附を拜命し翌年十一月奉天支那農業試驗場に聘せられ農學堂を兼

勤す四十三年十月期限滿了にて解聘同年十一月より四十四年四月迄奉天居留民會會計主任書記在職同年六月復た現職に聘せられ今日に迨ぶ

母堂　くめ子　六十七歳　夫人　八重子　三十四歳
長男　一　滿　七　歳　次男　次　夫　五　歳

井上瀧藏　井上醫院主（醫師）

原籍　鳥取縣岩美郡字倍野村大字宮下三一七番地
現住　大連市浪速町い一〇（電話一二六〇番）

明治十七年九月二十七日生る明治四十年内務省醫術開業試驗に及第し翌年春大連に來たり滿鐵會社に勤務せしが大正元年辭任し九月より開業して今日に到る皮膚病科は其長技とする處なり

夫人　ふさ子　三十一歳　長男　武　一　歳

井上一男（クニオ）　横濱正金銀行大連支店支配人　大連市會議員　大連商業會議所會頭　重要物産取引所商議員　日露協會幹事　十旗

原籍　山口縣岩國町
現住　大連市兒玉町二番地（電話一四〇番）

文久三年五月二十二日生る東京帝國大學選科を卒業し明治二十三年外務省留學生となりて米國及墨西哥に渡航二十七年歸國翌年一月正金銀行に入り神戸支店に勤務すること一年にして長崎支店長に升任し日露戰爭後奉天、牛莊、天津、北京各支店支配人を歴任し明治四十三年六月現職に轉ず

父君　唯　輔　八十歳　母堂　りう子　七十七歳
夫人　もと子　三十九歳　長男　信太郎　十　四　歳
長女　春　枝　十九歳　次女　順　子　六　歳

井上房吉　大連高等小學校長

原籍　愛媛縣東宇和郡俵津村二五二番地
現住　大連伏見臺民政署宿舍八區一八號

慶應元年五月四日生る明治二十三年三月愛媛師範學校卒業後東宇和郡郡視學及高等小學校長を經て三十六年六月德島縣視學被任同時に小學校敎員檢定常任委員を命ぜらる四十二年四月關東都督府小學校訓導大連第二尋常高等小學校長任命大正四年八月大連高等小學校新設と與に其校長に轉任す昨大正三年六月帝國敎育會より永年敎育に從事したる功に依り功杯を授けらる

夫人　たかよ子　長男　徹　十八歳　三男　幡三郎　十四歳
長女　かづ子　十一歳　次女　しづ子　二歳

井上信翁　滿鐵會社南滿洲工業學校敎諭　兼同會社地方課勤務

原籍　新潟縣東頸城郡牧村大字岩神
現住　大連市天神町ヨ區五六號地

明治十一年二月十日生る同三十八年東京帝國大學文科大學倫理科卒業、三十九年六月米國紐育に渡航、四十一年七月佛國巴里に轉航、四十一年十二月更に露都に轉任す、大正二年六月歸朝滿鐵會社に入る

父君　行翁六十四歳　母堂　キクヱ　六十五歳
夫人　徳　二十五歳　長女　フミ子　一　歳

◎井田孝平　滿鐵會社總務部交渉局第二課員　日露協會幹事　勳六等　士族

原籍　東京市赤坂區青山南町五丁目四五番地
現住　大連市近江町五區三の四

明治十三年十二月二十九日生る明治三十四年東京外國語學校露語科卒業後陸軍大學校幼年學校等に教鞭を執り日露役に通譯として參加し勳六等に叙せらる明治四十二年九月南滿洲鐵道株式會社に入り現今に迨ぶ

父君　南　草　六十五歳　母堂　りき子　五十　歳
夫人　菅子　三十　歳　長男　麟一　七　歳
長女　篤子　十　歳　次女　道子　五　歳

◎井波壽吉　關東都督府醫院醫員　鼻耳咽喉科主任　高等官六等　陸軍一等軍醫　正七位

原籍　東京市神田區宮本町一番地
現住　旅順舊市街乃木町一丁目官舍

明治十八年六月十二日生る同四十一年千葉醫學專門學校卒業、四十二年六月三等軍醫步兵第五十七聯隊附拜命、四十四年八月陸軍軍醫學校入學成績優良にて恩賜の銀時計を拜受す四十五年二月より同校にて耳鼻咽喉科專攻修了後東京衛戍病院に勤務し又日本赤十字社病院の耳鼻咽喉科を囑托せらる大正四年五月關東都督府醫院醫員を拜命す

母堂　ちぶ子　七十二歳　夫人　つや子　二十六歳
長男　優　七　歳　二男　英房　四　歳

◎石原逸太郎　鴨綠江採木公司總書役　勳七等　士族

原籍　長崎市東上町二三番地
現住　安東縣採木公司社宅

元治元年四月九日名古屋市山市場に生る早年より支那語を研鑽し外務省に奉職して在支那各領事館に歷勤し日露戰爭後牛莊領事館に於て上級書記生たりしが明治四十四年歸朝終に外務省より退身靜養すること年餘にして採木公司に聘せられ現職に就けり

家族　皆在京

◎石原正信　旅順工科學堂教授機械科長　高等官三等　從五位勳五等　士族

原籍　埼玉縣大里郡岡部村大字岡部一〇四番地
現住　旅順新市街常盤町一〇七號官舍（電三七二番）

明治六年一月十二日生る同三十一年七月東京帝國大學工科大學機械科卒業三十一年七月山陽鐵道株式會社運轉課長となり三十九年十月同社設計課長に轉じ四十一年四月帝國鐵道廳技師、四十二年鐵道院技師拜命、四十三年旅順工科學堂教授に轉官す

母堂　しげ子　夫人　かめ　女　松枝

◉石川力雄　本溪湖郵便局長　關東都督府通信書記　從七位勳七等　士族

原籍　東京市牛込區辨天町三番地
現住　本溪湖永利町二八番地官舍（電話五〇番）

明治十一年六月二十九日生る同二十八年四月郵便爲替貯金管理所に入り卅二年十二月通信書記に任せらる爾來遞信省通信局、經理局、東京郵便局臨時在勤等を歷て卅七年十二月遼東守備軍司令部野戰郵便附を命せられ更に遼東兵站監部及關東總督府附等に轉じ卅九年九月關東都督府通信書記に任せられ管理局勤務奉天局在勤を歷て四十三年十二月現任に就けり之より先き明治三十九年四月日露戰役の功に依り勳七等を下賜せられ大正四年六月卅日從七位に叙せらる

家嚴　正近　六十六歲　母堂　貞子　六十二歲
夫人　政子　二十九歲　長男　貞夫　五　歲
次男　明夫　三　歲

◉石川憲一　陸軍用達

原籍　德島縣美馬郡脇町一六〇番地
現住　大石橋大街第六五番地

明治六年十二月八日生る內地に於て公吏たること數年日露の役香川縣善通寺にて陸軍用達に從事し三十九年三月渡滿引續き大石橋に居住し軍隊用達に從事す大石橋區滿鐵諮問委員、大石橋補習學校商議員、大石橋實業會幹事、大石橋金融會會計等を兼務し又明治四十三年十二月より太平生命保險株式會社大石橋代理店を兼營せり

夫人　たまの　三十四歲　長男　憲一　十八歲
二男　二郎　三　歲　長女　すみゑ　十七歲
三女　孝子　五　歲

◉石田武亥　義和公司主（雜貨支質商）　奉天倉庫金融株式會社長　奉天信託株式會社取締役　奉天居留民會長

原籍　滋賀縣犬上郡高宮町
現住　奉天城內小南門裡（電話三〇六番）

明治八年四月二十六日生る同二十九年七月東京專門

學校政治科卒業、同三十一年同二年日本銀行在勤、同三十二年より同三十五年迄商業及農業に從事す同三十五年より同三十九年迄は新聞記者となり三十七年十月通信員として日露役に從軍し平和克復後奉天に於て商業を營み現今に至る

夫人　秀子　二十八歳（東京音樂學校出身）

◉石田榮　大連海關幇辦

原籍　愛知縣三河國渥美郡高師村
現住　大連市外星ヶ浦藤乃莊

明治十四年十二月二十五日生る上海同文書院を卒業し明治三十八年十二月天津海關に入り四十三年十月上海海關に轉じ大正三年一月現住に就けり

父君　秀太郎　母堂　しん　夫人　都城
子女　禮一郎　信仁　義郎
佐智

◉石本鏆太郎　和盛公司主（鑛山、羊毛、賣藥、銃砲火藥業）滿洲殖產會社監査役、滿洲興信所長、大陸社長、大連市長、高知縣選出代議士、正六位勳五等、士族

原籍　高知縣長岡郡岡豐村九三九番地
現住　大連市松山臺（電話二〇三番）

元治元年四月生る夙に東京に遊學し帝國大學豫科を修め明治十五年支那に留學し十九年西郷副使に隨ふて天津に入り通譯となる日清戰役の際陸軍通譯を以て第二師團に隨ひ臺灣征討に從軍し平和克復後臺灣總督府飜譯官となり阿片に關する事務に關與す日露戰爭起るや又復た陸軍通譯として第三軍に從ひ旅順奉天等の大戰に參加す三十九年關東都督府の特許を得て關東洲阿片總局を開設し同局總辦として專ら其經營に任じ大正三年十二月期限滿了と與に其特許消滅し爾來殘務を整理して同四年三月末限り阿片局を閉鎖せり同年五月總選擧に高知縣選出代議士に當選し又同十月一日大連市制創始に際し推されて初代市長となれり最近數年間阿片の販賣に於て巨資を作くり其管理或は關係する事業は鑛山、賣藥、銃砲、土地家屋、溫泉、雜誌、會社、銀行等頗る廣汎にして滿洲有數の暴富者を以て稱せらる

母堂　雪　八十三歳　夫人　フサ　四十五歳
長男　貫一　二十四歳

◉石本權四郎　日支合辦牛心臺煤礦公司協理　和盛公司奉天出張所主任　正八位勳六等功五級　士族

原籍　高知縣長岡郡岡豐村
現住　奉天新市街西塔大街

明治十三年九月生る同三十五年十二月明治學院にて英語修業中徴兵に適齡し一年志願兵として近衛第二聯隊入營三十七年七月日露戰役に依り臨時召集に遭ふて丸龜步兵第十二聯隊に編入出征同時に陸軍少尉に任じ正八位に叙せらる三十九年二月戰役の殊功に依り金鵄勳章功五級勳六等を賜はる同年五月漁業の目的を以て漁夫を率ゐ大連に入り之を經營したるも蹉跌せり爾來多く奉天に在住し實兄石本鏆太郎氏の事業を佐けて專ら鑛山採掘の畫策經營及滿蒙の產業調查に任せり

◉石井博一　東亞煙草株式會社鐵嶺出張所主任　居留民會議員　士族

原籍　佐賀縣佐賀市水ヶ江町七三番地
現住　鐵嶺城內鼓樓北社宅　（電話四五番）

明治十四年三月一日生る明治三十二年四月日比谷中學校卒業翌年十二月海軍兵學校入學、三十六年退校、三十七年七月日本移民監督學校入學、三十八年三月江副商店に入り渡滿大連支店勤務、同年六月遼陽支店勤務、同年十一月鐵嶺官製煙草專賣所勤務、四十年十二月營口東亞煙草株式會社出張所勤務、四十四年十二月同所主任、大正元年十一月吉林出張所主任、同三年七月奉天東亞煙草株式會社滿洲總販賣所庶務課主任、同四年五月鐵嶺出張所主任として赴任す

母堂　さと子　五十九歲　夫人　こゆき　三十一歲
長男　滿　五　歲　次男　正　四　歲
三男　昇　二　歲

◉石塚受祿　滿鐵會社瓦斯作業所員

原籍　長野縣北佐久郡小諸町內三十號地
現住　大連市西公園町一區五一號地

明治十一年五月廿五日生る同四十年東京帝國大學工科大學土木科卒業、同年十月滿鐵會社に入り現在に到る

夫人　幸子　三十四歲　長男　一（マサト）　六　歲
長女　信子　八　歲　二女　愛子　四　歲
三女　慶子　二　歲

◉石丸小一　旅順工科學堂教授　高等官五等　從六位

原籍　福岡縣三井郡小郡村大字端之里
現住　旅順新市街特權地一番地官舍

明治十五年二月十八日生る同四十年七月京都帝國大學理工科大學數學科卒業同年十二月一日志願兵として步兵四十八聯隊に入隊步兵伍長拜命、四十二年一月大阪府市岡中學校教諭任命明治四十三年四月一日旅順工科學堂に轉任す

夫人　すなを　二十六歳

◉石埼震一　大阪商船會社大連支店長　大連海務協會副會長　大連商業會議所交通部長　大連市會議員

原籍　富山縣西礪波郡林村大字小島村二六〇番地

現住　大連市越後町五號地（電話三四五番）

明治六年五月廿六日金澤市に生る明治三十二年七月東京帝國大學法科大學獨逸法律科を卒業し同年九月大阪商船株式會社に入り翌年九月文書課助役となり三十五年九月大阪支店助役兼務に進み三十七年十二月釜山支店長に轉任し四十一年六月大連支店長として來任大正二年汎く歐米を視察して歸來續きて其職に在り

母堂　ひさ子　六十六歳　夫人　ゆた子　三十三歳
長男　一　十一歳　二男　保國　八歳
三男　三郎　三歳　長女　咲子　六歳
二女　周子　一歳

◉石見　積　大連土木課出張所王家店會水道工事主任　關東都督府土木事務囑託　從七位　士族

原籍　大分縣速見郡日出町

現住　大連市西公園町ヤ區二九號

明治三年十一月七日生る同二十五年東京攻玉社土木工學科卒業同年東京市水道助手奉職三十一年技手となる三十五年二月臺灣民政部土木局雇に轉し翌年三月技手に昇進、三十八年十一月關東州民政署技手に轉し翌年九月更に都督府技手に轉し四十四年四月關東都督府作業所技師大連作業所長に昇任、大正元年兼任關東都督府技師同二年八月休職大正三年四月土木に關する事務を囑託せられ王家店會水道工事主任を命せらる

母堂　かよ子　七十四歳　夫人　ため子　三十七歳
長男　幸藏　十六歳　長女　ふみ子　九歳

◉今井長治郎　滿鐵會社瓦房店保線係主任　勳八等

原籍　岡山縣久米郡大倭村大字神代一二一一番地

現住　瓦房店東街滿鐵社宅

明治三年五月二十四日岡山縣津山町に生る同三十八年六月十九日野戰鐵道提理部第五運轉班保線班保線手拜命同四十年四月南滿洲鐵道株式會社技手に轉職して大連蘇家屯間復線建設業務に從事す四十一年十二月四平街保線係主任となり四十五年三月現主任を命せらる

夫人　たき子　四十三歳　長男　史郎　十八歳
次男　駿　十六歳　三男　節夫　十四歳

四男　重節　十二歳　長女　靜野二十一歳（他嫁）

◉今村貫一　日滿商會主　銃砲火藥業　從七位勳六等

原籍　佐賀縣西松浦郡西山代村大字楠久
現住　大連市吉野町一の二三號地（電話二六六番）

明治七年四月二十五日生る中學校を卒りて名古屋甲種商業學校に入り明治二十七年卒業後東京に出で經濟學を學ぶ翌年一年志願兵として歩兵第二十九聯隊に入營二十九年除隊三十年歩兵少尉正八位に任叙せらる同年北海道炭鑛會社に入り同三十八年十一月退社日露戰役に應召して任歩兵中尉叙從七位戰功に依り勳六等單光旭日章を賜ふ三十九年渡滿大連に於て現業を開始し今日に及ぶ

母堂　うら子　夫人　つるゑ子　長女　芳枝子　次女　雪子

◉今村春逸　遼東病院長（醫師）　關東都督府囑託　關東州水産組合囑託

原籍　大分縣日田郡中川村五〇番地
現住　旅順市八島町二番地（電話一四二番）

明治元年二月生る同二十八年東京濟生學舍卒業直に東京傳染病研究所に助手となり北里博士に就き查菌學の研究を爲すこと三年歸郷して福岡市直方町に今村病院を設立す三十九年二月旅順に來り遼東病院を開設して今日に至る

夫人　この子　二十八歳　長女　滿子　八歳

◉稻葉逸好　滿鐵會社南滿醫學堂教授　奉天醫院小兒科部長　從七位

原籍　三重縣阿山郡友生村大字蓮池
現住　奉天新市街

明治十二年四月十九日生る明治三十三年京都帝國大學醫科大學卒業三十七年同校副手三十八年六月同大學助手より四十二年十二月同大學助教授に進み叙高等官七等四十三年一月在官の儘南滿洲鐵道株式會社醫長となり同年二月叙從七位四十四年六月南滿醫學堂教授に轉す四十四年十月獨逸留學被命大正二年十二月歸朝同年同月南滿醫學堂教授醫長兼務奉天醫院勤務を命せらる

夫人　とめ子　三十六歳　長男　好夫　六歳
長女　光子　五歳

◉稻葉正太郎　牛莊郵便局長　通信事務官補　高等官六等　正七位勳六等　士族

原籍　東京府豊多摩郡戸塚町下戸塚四四一番地
現住　營口牛莊市街牛莊郵便局官舍（電話五四番）

明治八年五月二十一日生る同二十九年三月郵便電信

學校卒業後爲替貯金管理所在勤を命ぜらる三十三年七月通信局外信課員に轉ず翌年七月より北京郵便局在勤三十五年四月上海郵便局に在勤四十年七月南京郵便局長に昇任し四十三年四月東京中央郵便局在勤外國郵便課となつて歸京し四十五年二月牛莊郵便局長を命ぜられて營口に來れり

父君　稻　淸　　母堂　ひ　さ　　夫人　さき子

女六人（何れも在鄕）

◉稻垣刀利太郎

大連官人醫院內務醫務囑託　從七位　關東都督府　士族

原籍　東京市麹町區飯田町五の三五番地

現住　大連市天神町ミ區二五號地

明治四年十二月二十一日生る大阪高等醫學校出身にして兵庫縣黴菌部、縣立福岡病院、愛媛縣警察部等に奉職し四十四年ペスト流行の爲め黑龍江省に招聘せられて渡滿す四十四年七月臨時防疫部勤務となり翌年關東都督府海務局勤務に轉じ大正二年二月現職に轉す

母堂　榮　六十一歲　　夫人　恒　三十歲

長男　敏郎　五　歲　　次男　恂也　一　歲

◉出原　佃

滿鐵會社電氣作業所員

原籍　愛知縣愛知郡日進村字野方六四番地

現住　大連市北大山通六の六號

明治十七年一月五日生る同四十二年七月東京帝國大學工科大學電氣工學科卒業後滿鐵會社工場勤務となり四十五年神戶電氣鐵道株式會社に轉し大正二年復た滿鐵電氣作業所に入る

大母　か　ね　八十三歲　　父君　三　郞　五十八歲

母堂　の　う　五十一歲　　夫人　千　葉　二十五歲

長女　滿　子　二　歲

◉出雲喜之助

名利洋行主（貿易及質商）

原籍　石川縣能美郡小松町四一番地

現住　奉天小西關　（電話四五三五番）

明治十九年六月五日生る家世は商を以て業とす明治三十五年渡滿旅順口に於て露國人を顧客とし貿易商を營む三十七年日露の開戰と同時に歸國し同年十一月再び營口に來航し翌年一月山海關に入りて駐在軍隊の副食物供給並に輸送に從事す平和後奉天に來り小西邊門內に現業を開始して今日に到る

夫人　新　子　二十八歲　　長男　敏　夫　五　歲

◉廠谷（イスリヤ）　忱（マコト）

牛心臺煤鑛公司董事　三有公司主　平安貿易商會主（石炭及雜貨、食糧販賣業）　鴨綠江木商組合長　平安精鹽組代表者　食鹽輸入同業組合長　勳六等

原籍　岡山縣兒島郡鄉內村
現住　奉天新市街鐵路八街（電二四三番）

明治九年十二月一日生る同三十五年鶴岡永太郎、横川省三、二氏と共に滿洲に派遣せられ特別任務に服事す三十七年日露戰役と同時に山東省に派遣せられ後青島より召喚を受け第一軍司令部附を命せらる三十八年平和克復後引續き滿洲に在住し實業に從事す現に五龍背溫泉場を所有するのみならず牛心臺炭坑經營の衝に當り奉天に於ては三有公司なる商號にて石炭販賣商を營み朝鮮に於ては黑鉛鑛を經營せり

父君　彌太郎　七十六歲　　夫人　常代　二十六歲
女　澄子　三歲

● 絲井仙之助　横濱正金銀行奉天出張所長代理　奉天市會議員

原籍　京都府與謝郡岩崎村字木一二五番地
現住　奉天乃木町一丁目五番戸の一

明治七年五月三十日生る明治三十七年東京帝國大學法科大學政治科を卒業し翌年正金銀行に入りて本店に勤務し其後上海支店及長春出張所等に歷勤し大正四年夏現任に昇轉す

夫人　貞子　二十八歲　　長男　富士郎　七歲
長女　あや子　四歲　　次男　雄次郎　一歲

● 板谷丈夫　板谷醫院主（醫師）　大連醫師會々長　大連市會議員

原籍　兵庫縣宍粟郡山崎町四百三十一番地
現住　大連市奥町二丁目四十四番地（電話二一七番）

明治五年二月二十一日生る同三十二年京都醫學專門學校卒業同年九月より明治三十八年三月迄原籍地に於て開業同年四月現地に開業今日に至る

夫人　俊子　三十七歲　　長男　秀夫　五歲
長女　丈子　十四歲　　次女　千鶴子　十二歲
三女　信子　七歲　　四女　滿洲子　三歲

● 磯田信之助　關東都督府民政部技師　高等官七等　從六位　林業主任

原籍　京都府加佐郡由良村字由良
現住　旅順新市街特權地二一番官舍

明治十四年三月三十一日生る東京帝國大學農科大學林學科を卒業し北海道小樽木材會社に一年間在職せしが明治四十一年十月關東都督府技師拜命同時に現職に就任す

母堂　從　六十七歲（在京都）　　夫人　春　二十七歲
長女　愛　八歲　　次女　富美　五歲

● 猪股忠次　滿鐵會社運輸部營業課旅館係主任　判任八等　士族

原籍　千葉縣千葉町
現住　大連市近江町

明治九年八月十日上總國松尾町に生る同二十五年五月東京郵便電信學校電氣通信技術科修業同二十五年五月電氣通信助手同二十九年八月電信書記同四十一年二月關東都督府通信書記等を經て四十一年四月滿鐵會社に轉務四十四年三月歐洲に留學大正二年九月歸社現職に在り

母堂　きん　六十七歳　夫人　八重子　二十九歳
次男　功　三男　啓二　長女　英子

◉蠟山長次郎　關東都督府外事總長兼財務課長 事務官高等官二等 正五位勳五等

原籍　新潟縣刈羽郡大洲村
現住　旅順新市街特權地一四番

明治九年二月四日生る同三十三年七月東京帝國大學法科大學英法科卒業同十一月高等文官試驗に及第し同年十二月司稅官に任ぜられ大阪稅務管理局勤務となる三十四年七月稅關事務官となり神戸稅關に轉任三十七年九月稅關事務官兼稅關監視官となりて橫濱稅關勤務に轉ず三十九年七月關東州民政署財務部長拜命同九月關東都督府事務官民政部財務課長に任ぜられ大正三年十月關東都督府外事總長兼事務官拜命官房外事課長民政部財務課長の職にあり

夫人　くに　三十四歳　長男　武夫　十三歳
長女　隆子　十一歳　次女　和子　四歳

◉原田猪八郎　原田組主（金物機械商）士族

原籍　福岡縣糸島郡一貴山村
現住　大連市磐城町（電話四一〇番）

明治十一年十月十日生る同三十五年六月鄕里福岡にて原田組を創立す三十七年八月渡滿し陸軍碇泊場司令部に附隨し運輸業を營む三十九年八月現地に原田組を設立して今日に到る

夫人　光子　二十八歳　女　部子　六歳
泰子　四歳　篤子　二歳

◉原田虎太郎　株式會社正隆銀行常務取締役 大連市會議員 大連商業會議所常議員

原籍　東京日本橋濱町三の一
現住　大連市但馬町二三號地（電話一二一〇番）

安政五年三月二十七日鳥取縣に生る本姓は岩谷氏出でゝ同縣原田氏の養子となり後ち分れて一家を創立す明治七年慶應義塾に學び同十三年卒業して第四十四銀行に就職後安田銀行に入りて多年其重鎭たりし

が明治四十四年安田家が營口の正隆銀行を繼承して其整理擴張を策するや選ばれて大連に來り同行常務取締役として今日に到る滿洲に於て正隆銀行を主裁するの外東京に於ては安田銀行其他幾多の銀行會社重役を兼ねて中央財界に於ける名望厚つし

夫人　きぬ　五十三歳
養女　かづみ　二十三歳（安田善衛妹）

●原田鐵造　滿鐵會社奉天經理係主任　勳六等

原籍　佐賀縣東松浦郡佐志村字佐志
現住　奉天鐵路大街九號地（電話三二一番）

明治十三年四月一日生る中學卒業後東京詠歸舍及善隣書院にて支那語學を修業す三十一年八月支那に渡航し揚子江沿岸各省より四川雲貴方面を遊歷すること五個年日露戰端開くるや三十七年二月陸軍通譯を命ぜられ大本營附として特別任務に服し休戰後三十九年十月迄關東都督府附として軍政署に勤務す四十年三月南滿洲鐵道株式會社成立と同時に入社して大連本社に勤務す同年八月より奉天公所に轉じ四十一年十二月奉天經理係主任に任ぜらる四十二年八月より約一個年間購地局第二分局長として安奉線に出張し四十三年八月購地終了の上再び奉天經理係主任を命ぜられ今日に到る

母堂　みち子　六十八歳　夫人　まつしま子二十七歳
長男　季彦　三　歳

●原田光次郎　原田洋行主（輸出入貿易業）重要物産同業組合評議員　日露協會幹事

原籍　栃木縣足利町
現住　大連市山縣通五三號地（電話六四三番）

明治九年九月三日生る明治三十三年農商務省海外實業練習生拜命米國に滯在して英佛露獨其他歐洲諸國を歷遊して三十六年歸朝三十七年小栗洋行天津支店に勤務し三十八年大阪江商合資會社事務長となり四十年迄勤務す同年大連に來り原田洋行を開設し今日に到る

夫人　千代　長男　成一　四歳　長女　みち子　十歳
次女　さし子　六歳

●原口聞一　世界新聞社滿韓特派員　士族

原籍　長崎縣西彼杵郡瀨戶村
現住　奉天鐵路大街

明治六年九月二十三日生る同三十二年東京帝國大學法科大學三年生の時東亞同文會廣東支部副會長とし

て赴任し日本語學校の創設及漢文新聞社の經營に任ず三十五年福建省樟腦專賣の官腦局創設の際三五公司員として延平邵武建寧三府總管理として三十九年迄延平府駐在同四十年滿洲日々新聞主幹となりて其創設に當り四十一年同社奉天支局管理となる四十二年日清合辦清和公司を創設して董事となり大正二年迄同公司に在職し同年京城日報特派員となり奉天支局を管理す同年秋居留民會長に推され翌三年十月辭して歸國す本年八月現職就任再び奉天に來れり

父君　七十歲　　夫人　藤子　四十歲
女　九歲

● 早野重右衛門　早野材木店主（材木業）　大連礦裝株式會社監査役　大連商業會議所常議員　大連材木商同業組合長

原籍　山口縣下關市西細工町
現住　大連市美濃町七九號地（電話二〇七番）

慶應元年七月累代材木商の家に生れ四十年より家業を營む明治三十八年十月大連支店を開設同時に渡連今日に到る

夫人　ゑん　四十二歲　　長男　重藏　二十八歲
次男　康治郎　二十六歲　　三男　直藏　二十四歲

● 早間正志　鐵嶺商品陳列館長　滿鐵諮問委員　正八位勳六等功七級

原籍　廣島縣尾之道市十四日町
現住　鐵嶺附屬地商品陳列館內

壯年の頃廣島縣下の小學校教員たりしが明治二十三年軍籍に入り二十七八年日清戰役に威海衛方面に出戰し三十三年拳匪の亂には天津北京間に在りて軍務に服し三十七、八年役には大本營附として特別勤務に服事す後滿洲軍總司令部附となり憲兵少尉として軍事警察事務を執れり三十九年二月豫備役編入同時に解任鐵嶺に居をトし故川崎軍政官の依囑を以て商品陳列館の設立事務を擔當し同三十九年四月三日開設其の館長となり大正二年五月同館の株式會社に變改さるや其取締役社長として現在に到る

● 林　平太　東亞煙草株式會社營口製造所長　兼理事　營口民會副議長　從七位勳六等　士族

原籍　鹿兒島縣姶良郡加治木町反土四七九番戶
現住　營口新市街青柳町十番戶（電話一三八番）

明治六年三月十日生る同十九年七月より同二十五年七月迄鹿兒島高等中學造士館に學ぶ同二十五年十月稅務官署に奉職し三十六年六月葉煙草專賣局準備の爲め專賣局に轉じ三十八年一月專賣局技師となり同

四十四年二月退官直に東亞煙草株式會社に入り現職に就き今日に到る

夫人　こう子　二十九歳　長女　素枝子　五　歳

◉林　堯賀（タカヨシ）　林洋行主（雜貨陶磁器、煉瓦製造業）遼陽實業會幹事

原籍　福岡縣田川郡川崎村
現住　遼陽東洋街

慶應元年九月九日生る明治三十一年臺灣總督府廳屬及通信書記を勤め三十八年八月渡滿遼陽に來たり陶磁器雜貨藥種業を營むの傍遼陽日本人副會長、居留民會副會長、實業會幹事、滿鐵諮問委員等の公職に從事し以て今日に到る

夫人　さく　男　一人

◉林　國彥　正隆銀行開原支店長　士族

原籍　熊本縣宇土郡宇土町八一四番地
現住　開原鐵道附屬地第三區第一號地（電話一一〇番）

文久三年七月二十七日生る十九歳の時熊本師範學校を卒業し訓導たること五年後宇土第百三十五銀行に入り八代支店支配人、博多支店支配人、本店支配人等に歴任し三十四年七月辭す三十八年渡滿營口取引所副支配人たりしが解所と同時に辭す四十三年六月正隆銀行に入り現職に在り

夫人　めい　四十九歳　女　みき　二十二歳

◉林　榮　滿鐵會社大連醫院醫長　從七位

原籍　三重縣一志郡本村大字本村一〇番屋敷
現住　大連市山城町四番地六

明治十五年六月二十一日生る明治四十年京都帝國大學醫科大學卒業同大學助敎授となる四十三年八月滿鐵會社醫長として渡滿し大正元年一月二箇年間獨逸留學を命ぜられ同三年十月歸朝同時に京都醫科大學留學被命翌年七月歸社現職に在り

養母　コー　五十二歳　夫人　しげ　十六歳

◉橋口大次郎　遼東牧場主（牛乳業）大連牛乳共同販賣所組合長

原籍　鹿兒島縣薩摩郡鶴田村柏原
現住　大連市監部通二丁目六〇號地（電話五三七番）

明治十六年九月生る同三十六年四月東京獸醫學校卒業同年九月東京警視廳に奉職三十九年九月辭して十月渡滿奉天府巡警總局顧問に聘せらる四十一年三月大連に轉來し遼東牧場を創立す四十四年七月大連牛乳共同販賣組合長に擧げられ同時に合資會社旅順牧場代表社員となり猶現職に在り

父　仲太郎　母　よせ子
夫人　千代子　二十五歳　長男　俊雄　九歳
女　喜美子　五歳

◉橋本清愼　營口警務署長　都督府警視　高等官六等　正七位勳六等　士族
原籍　岩手縣盛岡市仁王村馬場小路
現住　營口警務署長官舍七〇號

慶應二年十月二十五日生る三十九年九月五日任外務省警部四十一年三月關東都督府警部に任命同時に外務省警部を兼務す四十四年六月關東都督府警視遼陽警務署長に昇任し大正三年一月營口警務署長を命ぜらる

夫人　富　男　秀　女　繁子

◉濱竹松　濱恒支店主（材木業）
原籍　和歌山縣東牟婁郡田原村三五三番地
現住　大連市淡路町九號地（電話三五六番）

明治元年十一月二十一日生る同二十七年迄實姉の中川商店に入り同年より兄弟四名の共同にて濱恒商會を組織し紀州方面の材木買入に從事す同三十八年渡連濱恒支店を開設し今日に到る

母堂　こさん　七十歳　夫人　はるゑ　二十八歳

◉濱田豐樹　滿鐵會社長春醫院城内分院長　在鄕軍人分會副長　長春　從七位勳六等
原籍　福岡縣遠賀郡蘆屋町山鹿二一六一番地
現住　長春城内西三道街

明治十二年九月三十日生る同三十四年長崎醫學專門學校卒業翌年一年志願兵として入營、三十七年二月充員召集に應じ同年六月任陸軍三等軍醫同年八月出征大連兵站病院勤務、三十八年十二月大連第一關東陸軍病院と改稱引續き勤務、同四十年四月召集解除同年十月南滿洲鐵道株式會社醫員拜命遼陽醫院勤務大正三年七月長春醫院城内治療所に轉じ翌四年一月亦た現職に轉ぜり

夫人　靜子　二十六歳　長男　豐博　七歳
次男　到　二歳　長女　淑子　四歳

◉濱村善吉　マンチユリア、デーリニユース主筆　滿鐵會社庶務課員　大連新聞記者團幹事　步兵中尉　從七位勳六等
原籍　長野縣上田町
現住　大連市北大山通り八番地三號ノ一

明治二年十月生る同二十九年九月渡米カリフヲルニヤに居ること三年後セントポール府保險會社、シカゴ府スプリングフヲールド火災保險會社等に就職し

シカゴより十里のホニートン大學選科に在學したりしも郷里の事情の爲め半途に退學歸朝す二十九年志願兵として佐倉聯隊に入隊三十一年陸軍歩兵少尉となる其後滋賀縣商業學校敎諭上田中學校敎諭に歷任して奏任待遇を受く三十六年春正則英語學校講師となり翌年日露の役に出征三十九年十二月滿鐵會社に入り東京支社に勤務す四十年七月本社勤務となりて渡滿同年十月犬塚理事の斡旋により滿洲日日新聞に英文欄を設けて之れを擔當したりしが四十三年一月四頁英文新聞となし大正元年八月獨立して別にマンチユリアデリーニユースを發刊し之れが執筆及經營に任せり

夫人　二十九歳　養女　當　歳

◉蜂屋可秀　關東都督府中學校敎諭　英語科主任　高等官四等　正六位　士族

原籍　宮城縣仙臺市北一番丁一一四番地
現住　新旅順特權地二八の一

元治元年八月二十四日生る明治二十四年文部省英語科檢定試驗に及第す三十年五月より京都府尋常中學校大阪府第一尋常中學校敎諭及臨時敎員養成所敎授兼第三高等學校敎授に歷任し四十三年四月現官を拜命す

夫人　福子　四十三歳　長男　可一　二十一歳
次男　可忠　十一歳　三男　可孝　九　歳
四男　可正　三　歳　長女　かほる　十五　歳

◉幡田義之助　滿洲石鹼製造所主（石鹼製造業）

原籍　山口縣玖珂郡柳井町二八五番地
現住　大連市加賀町二三番地（電話一一四四番）

慶應三年七月二十一日生る明治二十七年日清戰役に際し渡淸柳樹屯に於て水雷敷設隊酒保及旅順知港軍酒保を營む翌年八月臺灣臺南に於て商業の傍ら山林伐採業に從事す此間臺灣總督府より度量衡調査の命を受けて廣東に出張せり三十六年家兄の芝罘に於ける船舶代理及石炭販賣の支店を協營する爲め同地に赴きし處會ま日露役起りて持船の全部御用船に徵發せられしを以て一時閉店し朝鮮鎭南浦より安東縣大連を經て同年九月營口に到り當時尤も缺乏せる軍隊用の木炭及石炭を同年結氷前に外國船四艘に滿載輸入せり其後引續き材木金物及建築材料等を營業し傍ら行政委員及官有財產管理委員等の職に任ぜしが不幸にして失敗に畢り四十三年十一月居を大連に移つ

し翌年より石鹼製造を開始せり爾來徐々發展し最近會社組織の工場設立を計策しつゝあり

夫人　三常子　三十三歲　長男　義裕　十五歲
次男　邦彥　十二歲　長女　滿洲美子　九歲
次女　喜久代　四歲　四男　克彥　二歲

◉畠山六之助　滿鐵會社開原經理掛主任

原籍　富山縣上新川郡豊田村大字下富居村
現住　開原附屬地第七區四號

明治六年六月五日生る富山師範學校東京專門學校等に學ぶ明治三十年十二月二十七日文官普通試驗に合格す二十九年六月富山縣中新川郡書記となる以來石川縣河北郡書記三重縣度會郡書記を歷て同三十七年十月內務屬となり地方局に勤務す四十年九月南滿洲鐵道株式會社に入り大石橋在勤となる四十四年一月より六月迄檢疫委員及臨時防疫部書記となり營口停留所主任たり大正二年五月鐵嶺經理掛開原在勤となり同三年四月一日現職に昇任今日に到る

夫人　郁　三十六歲　長男　重信　八歲
二男　重義　七歲　四男　重憲　五歲
五男　重政　二歲

◉服部精四郞　關東都督府中學校敎諭　歷史科主任　高等官五等　從六位

原籍　高知縣香美郡夜須村字西山村三六三番地
現住　新旅順春日町八十二番地

明治十一年一月十五日生る同三十四年東京帝國大學文科大學卒業師範學校高等女學校歷史科敎員免狀を受く三十五年四月宮崎縣立延岡中學校敎諭卅八年六月大分縣立杵築中學校長兼敎諭四十二年二月奈良縣立畝傍中學校長に歷任し四十四年一月現官を拜命す

夫人　さしゑ　三十五歲　女　靜枝　十六歲
延子　十　歲　豊比古　九　歲
順子　三　歲　二三子　・　歲

◉花岡千波　日本賣藥株式會社取締役兼大連支店長　大連藥業組合長　大連商業會議所常議員

現籍　長野縣小縣郡上田町千五百二十一番地
現住　大連市播磨町ヌ區三三號地　（電話七五〇番）

明治十四年二月十日生る同三十九年十二月渡連日本賣藥株式會社大連支店を開設し其支店長として現在に到る

夫人　英子　女　三名　男　一名

◉塙繁彌太　滿鐵會社南滿醫學堂敎授　兼奉天醫院皮膚科部長　士族

原籍　北海道石狩國空知郡沼貝村
現住　奉天新市街

明治十年七月二十八日生る明治三十四年四月東京醫科大學外科選科修業同年十月同大學皮膚學黴毒學教室囑託に補せらる三十八年十一月關東州民政署醫務囑託三十九年九月關東都督府醫務囑託四十年十一月南滿洲鐵道株式會社醫員任命四十三年一月皮膚病泌尿病科研究の爲め獨逸に留學し四十五年五月歸朝四十五年六月醫長に昇進大正三年九月南滿醫學堂教授を命せらる

夫人　新子　二十八歳　長男　金太　七　歳
二男　周次　六　歳　三男　眞三　二　歳
四男　四郎　一　歳

箱田琢磨　長春日報社長　長春居留民會長　士族

原籍　福岡縣糟屋郡和白村大字三苫一三一五番地
現住　長春商埠地新立屯　（電話五五番）

慶應三年十二月二十二日生る明治二十五年東京專門學校卒業後福岡臺灣東京北海道等にて政治又は實業に從事す三十九年一月渡滿大連奉天を經て同年十一月長春に來り四十年六月東部蒙古地方に入り四十一年八月末長春に歸着し四十二年一月一日より長春日報を發刊し之れが經營に任ぜり

夫人　さな　二十九歳　長男　宗雄　十八歳
次男　宗六　四　歳　三男　大輔　三　歳

長谷川作次　三井物産株式會社哈爾賓出張所長

原籍　石川縣金澤市下傳馬町六〇番地
現住　哈爾賓三井物産會社内

明治十三年三月六日生る同三十四年東京外國語學校露語科卒業後三井物産株式會社に入り東京本店、長崎、大連、牛莊等に在勤明治四十年より四十一年迄鐵嶺出張所長四十一年より大正二年迄長春出張所長大正二年より哈爾賓出張所長として今日に至る

母　とみ子　五十五歳　夫人　とよ子　三十六歳
長女　清子　三　歳

阪東末三　奉天總領事館員外務書記生　勳六等

原籍　兵庫縣多紀郡日置村八上新四三三
現住　奉天總領事館内官舍

明治十三年二月九日生る同三十七年四月東亞同文書院卒業の時恰も日露役に際會し陸軍通譯を命せられ奏任待遇を受く三十九年四月日露役の功に依り勳六等旭日章金四百圓を下賜さる三十九年通譯を辭し四

十二年四月統監府臨時間島派出所通譯生に任命同年十二月外務通譯生間島在勤被命四十三年七月韓國皇帝より同國暴徒鎮壓事件の功により勳六等太極章及金百圓を賜はる同年十一月間島總領事館琿春分館在勤に轉じ同五年六月奉天在勤を命せらる

夫人　きしよ　二十八歲

◉服部誠藏　滿鐵會社庶務課員　勳七等

原籍　山形縣西田川郡鶴岡町
現住　大連市播磨町シ區一四號地

明治十年十二月二十五日生る同三十年明治法律學校に入り翌年東京法學院に轉じ法律を學ぶ三十二年文官普通試驗に合格し同年鐵道書記に任せられ鐵道作業局勤務を命せらる日露戰役起り野戰鐵道提理部勤務を命ぜられ大連に赴任す四十年南滿洲鐵道會社創立せられ野戰鐵道提理部の解散するに及び引續き同社に就職し現今に至る

母堂　つな　六十歲　夫人　ふく　二十七歲
長男　謙吉　當年生

◉服部直樹　滿鐵會社工場木工科長　從六位勳五等　士族

原籍　名古屋市下竪杉町四七番地
現住　大連市外沙河口六丁目南三七號社宅

明治八年一月二十三日生る同三十三年七月東京帝國大學理科大學機械科を卒業し鐵道作業局に入りて勤續せし處三十八年四月野戰鐵道附として渡滿し滿鐵會社成立と與に入社して今日に到れり

夫人　鎮　三十二歲　長男　直　十一歲

◉原　丑年　滿鐵會社工場鍛工科兼[illegible]科主任

原籍　佐賀縣東松浦郡濱村八七番地
現住　大連市外沙河口三丁目北一三號社宅

明治十五年十月一日生る同四十年七月東京帝國大學工科大學造兵科卒業直に東京砲兵工廠に奉職す四十三年十一月滿鐵會社に入り工場に勤務す大正三年一月英米に留學を命せられ大正四年十月歸社現職に在り

◉西村信敦　滿鐵會社運輸部營業課長　勳六等　士族

原籍　宮崎縣高鍋
現住　大連市神明町八號地

慶應三年十一月生る東京高等商業學校に學び卒業の前年退學して明治二十三年九州鐵道會社に入り勤續

十五年に及ぶ三十七年七月野戰鐵道提理部員として渡滿し滿鐵會社創立と同時に入社し三個月間遼陽に勤務して後本社に返へり營業課に勤務して今日に到る

夫人 信子 男 三名 女 二名

◉西村誠三郎（號 濤陰） 大連小供館長

原籍 東京市淺草區田町一丁目三番地

現住 大連市若狹町二十七號地

明治十六年四月七日生る同四十一年七月東京早稻田大學專門部政治經濟科卒業四十二年十一月滿洲日日新聞社記者に被聘四十四年二月辭任翌四十五年六月より大連子供館を創立し引續き該事業に從事す

夫人 琴子

◉西村巳之助（號 夷洲）滿洲日日新聞記者旅順支局長

原籍 神奈川縣横濱市蓬萊町

現住 旅順市八島町一二（電話三九番）

明治十年十月一日生る中學を卒りて中央大學に學ぶ其後函館日日新聞、横濱の京濱新聞、横濱新報、横濱貿易新聞、太平洋通信社等に入り四十年十一月滿洲日日新聞創立と同時に入社營口長春安東縣の各支局長を經て現時に及ぶ

夫人 梅子 男 二名 女 二名

◉西川嘉一 遼陽自縣衙門應聘員 外務省兼關東都督府醫務囑託 遼陽居留民會行政委員 正八位勳六等

原籍 東京市神田區金澤町二十七番地

現住 遼陽城内縣設醫院内（電話一二番）

明治十一年十一月十日生る同三十三年六月二日醫術開業免狀下附さる三十三年六月警視廳檢疫醫員拜命三十五年四月栃木縣々醫兼娼妓健康診斷醫拜命三十六年一月警視廳檢疫官拜命三十七年十一月陸軍三等軍醫野戰鐵道提理部附被命三十七、八年戰役の功に依り勳六等單光旭日章及金四百圓を賜はる同年八月遼陽州官設醫院應聘四十一年九月遼陽居留民會行政委員囑託四十五年二月清國皇帝陛下より三等第二雙龍寶章を受領す四十五年五月外務省醫務囑託又大正二年三月關東都督府醫務囑託となる

母堂 ふさ子 六十三歲 夫人 八重子 三十一歲

◉西川芳太郎 鈴木商店大連出張所主任 正八位

原籍 滋賀縣高島郡今津町

現住 大連市紀伊町二十三號地

明治十九年一月二十三日生る同三十八年神戸商業學校卒業同年五月高等商業學校入學同四十二年鈴木商店に入り本店及下ノ關門司支店勤務を經て大正四年夏大連に轉勤す

父君　文次郎　七十歲　母堂　いく子　六十四歲
夫人　よし子　十八歲

◉西川光太郎　サミユル、サミユル商會員　從六位勳六等

原籍　滋賀縣犬上郡彥根町
現住　大連市但馬町三十三號地（電話一六〇〇番）

明治七年六月十八日生る同二十九年六月京都同志社高等普通學校卒業、三十年九月米國スタンフォート大學入學、三十四年九月同加州大學專攻科入學、三十五年六月マスターオブアーツを受け同年八月歸朝す三十六年四月より東京高等師範學校講師及東京府立第四中學校教員奉職同年十二月中學校師範學校教員免許狀を受く三十七年三月出征第二軍司令部附となる三十八年關東都督府陸軍通譯官拜命（高等官六等）四十年三月高等官五等從六位に昇敍せらる四十二年四月サミユル、サミユル商會に入社翌年勳六等旭日單光章を拜受す

父君　幸七　七十二歲　夫人　淸　二十一歲
長男　高嶺　十八歲　二男　不次男　十三歲
三男　櫻　九歲

◉西川菊次郎　西野商行主（材木及建築材料業）旅順市會議員　勳八等

原籍　下關市關後地町一〇五〇番地
現住　旅順乃木町三丁目三番地（電話六八番）

慶應三年八月十六日生る家世商業を營む十三歲にして父を喪ひ共に艱苦を嘗め二十三歲より土木建築業に從事し二十八年井上全權大使の一行に從ふて朝鮮に入り公使館を建築す三十三年天津に航して諸建築をなすの傍ら支那語を研究し三十七年戰役に際し第一軍通譯となりて從軍し三十八年十一月凱旋同時に旅順に來り翌年一月現處に西野商行を開設して今日に至る

夫人　かね　四十二歲　養嗣子（義弟）孝一　二十七歲
孫　二人

◉西山　茂　關東都督府事務官　土地調査部總務課長　高等官七等　從七位

原籍　福岡縣三池郡銀水村大字上內一八三六番地
現住　旅順新市街特權地三九番官舍

明治十二年七月三十一日生る同三十二年五月農商務

營林主事補拜命四十年京都帝國大學法科大學選科法律科に入り四十二年十一月文官高等試驗に及第す四十四年六月京都帝國大學法科大學法律科所定の全科目修了四十四年六月關東都督府屬となり大正元年九月屬兼警視拜命三年七月事務官兼警視となり更に現職に轉ず

長女 華子 六歲 夫人（死亡）

◉西岡永太郎 滿鐵會社南滿洲工業學校敎諭

原籍 德島縣美馬郡郡里村
現住 大連市西公園町ヶ區七

明治三年十月生る同二十五年德島縣師範學校を卒業す三十二年より三十九年迄中等學校敎諭奉職三十九年秋より四十四年秋迄淸國江蘇省蘇州兩級師範學堂に招聘四十五年二月南滿洲工業學校に奉職す

夫人 園子 四男 二女

◉新田神量 東本願寺大連別院輪番 開敎師

原籍 滋賀縣東淺井郡朝日村佛心寺
現住 大連市若狹町大連別院內（電一二一四番）

明治十七年六月十五日生る三十八年東京哲學館卒業後東京、京都、北京等に遊學し或は橫濱別院に勤務し四十三年四月大連に來りて現職に就かる

父君 德丸 六十歲 夫人 操 二十七歲

◉堀三之助 滿鐵會社總務部技術局長 從四位勳三等

原籍 鹿兒島縣鹿兒島市
現住 大連市乃木町六番地（電話四一番）

明治元年二月一日生る同二十五年七月東京帝國大學工科大學土木科卒業二十六年十一月任遞信省鐵道技師、二十九年三月より三十年六月迄臨時臺灣鐵道隊附、三十一年六月鐵道作業局建設部鹿兒島出張所技師、三十七年六月野戰鐵道提理部工務課長に歷任す三十七八年戰役の功に依り勳四等旭日小綬章及年金を賜はる四十年三月野戰鐵道附を免じ南滿洲鐵道株式會社建設課長に被任後ち同社工務課長となる四十一年四月より四十二年一月迄歐米各國視察の爲め出洋す大正三年五月總務部技術局長心得を命せらる

夫人 アイ子 三十五歲 長男 昇 十六歲
二男 猛 十四歲 三男 旭三 十二歲
長女 篤子 十一歲

◉堀純一 滿鐵會社總務部技術局職員 勳七等 士族

原籍　東京市麻布區新網町一丁目二番地
現住　大連市兒玉町八番地

明治九年十一月二十四日越前國坂井郡に生る同二十九年二月任鐵道書記補、三十一年任鐵道書記、三十九年四月三十七、八年戰役の功に依り白色銅葉章及年金下賜、四十年三月在官の儘南滿洲鐵道株式會社に入る、大正三年六月勳七等瑞寶章を賜はる

父君　純雄　六十歳　夫人　文子　三十八歳
滿子　八歳

◉堀　親道　滿鐵會社築港事務所職員

原籍　大分縣大野郡東大野村
現住　大連市濱町二十九號ノ三

明治十二年八月一日生る同四十年七月京都帝國大學理工科大學土木科卒業、同年八月大阪市役所港灣課に奉職、大正三年一月南滿洲鐵道株式會社に入り現職に就けり

母堂　ナチ　五十九歳　夫人　三重子　二十六歳
長男　威比古　五歳　二男　亨二郎　三歳

◉堀部次郎　三井物産株式會社大連支店機械掛主任

原籍　東京市芝區白金三光町六十七番地
現住　大連市越後町三井社宅（電話五六五番）

明治十一年三月十七日生る同三十七年東京帝國大學工科大學機械科卒業後三井物産會社に入り大正元年十月大連支店勤務となる

父君　直臣　六十二歳　母堂　しげ　五十三歳
夫人　あつ子　二十九歳　長男　一夫　四歳
次男　次雄　三歳　長女　ふぢ子　七歳

◉堀内驛三郎　堀内商店主（貸家業、和洋文房具紙類販賣業）大連商業會議所庶務部副部長　大連市會議員

原籍　廣島縣加茂郡廣村
現住　大連市信濃町六九號地（電話五五六番）

文久元年二月一日生る明治十四年より愛媛縣警察部に奉職する事十年後讃岐に於て傳馬船會社社長となり又石炭受賣販賣を開始す日露戰役の起るや數艘の蒸氣船を買入れ瀨戸内海沿岸師團の馬糧を調達し後更に軍の輸送受負を爲す當時株式界に於て鐵道株の暴落となり爲めに少なからざる損失を受けて渡連し信濃町に現業を開始して今日に迨ぶ

夫人　さご子　四十七歳　養嗣子　敬壽郎　三十歳
女　さかゑ子　二十七歳

◉本郷　榮　正金銀行牛莊支店支配人　營口居留民團行政委員

原籍　京都府與謝郡宮津町字波路
現住　營口元神廟街正金銀行內

明治九年二月四日生る本姓は河合氏出で本鄉家を嗣ぐ夙に正金銀行に入り明治三十三年牛莊支店詰となり其後遼陽出張所に轉じ三十九年病の爲め歸國し四十年五月再び牛莊に勤務し四十五年春大連支店に轉じ同年十月現職に昇任す

夫人　國子　長女　秀子　長男　義雄
二女　久子　二男　正

●本間又吉　關東都督府海務局屬庶務課長　勳七等功六級　士族

原籍　山形縣米澤市上花澤中町
現住　大連市石見町

明治十二年五月二十六日生る三十七八年戰役に從軍の功に依り勳七等功六級を賜はる四十年一月關東都督府屬に任し同府海務局庶務課長を命せらる

父君　眞一　母堂　園　夫人　たか
女　一名　男　二名

●星野貞治　滿鐵會社南滿醫學堂教授　士族

原籍　東京市小石川區茗荷谷町九十二番地
現住　奉天新市街社宅

明治十八年八月十五日生る同四十三年十一月京都帝國醫科大學卒業同年十二月同大學副手囑託四十五年二月同大學助手に任命大正二年滿鐵會社大連醫院耳鼻咽喉科部長を命せられ大正三年九月南滿醫學堂教授奉天醫院醫長兼務に轉任す

夫人　鶴江　十九歳

●保々（ホボ）勉（ツトム）　東亞煙草株式會社滿洲總販賣所主任

原籍　岐阜縣土岐郡綠戶村
現住　奉天小西邊門外社宅

明治十一年十一月一日生る同二十六年一月大阪麥酒株式會社に就職四十年十一月東亞煙草株式會社に入り營口安東縣天津の出張所を經て大正二年十二月營口に轉勤し三年七月現職に昇任す

父君　喜重郎　母堂　たじ子　夫人　光子

●富田忠雄　旅順工科學堂教授　高等官二等　正五位勳四等

原籍　東京市牛込區辨天町一七一番地
現住　旅順新市街日進町一四一番地（電話三六九番）

明治五年六月二日丹波國龜岡に生る同二十九年七月東京帝國大學工科大學電氣工學科卒業同年八月農商務省特許局審査官拜命三十三年三月佛國に派遣せらる三十六年十月特許局發明審査課長となり四十二年

十一月同局發明課長に轉す四十三年一月旅順工科學堂敎授となり同年四月同校電氣工學科長拜命今日に到る

夫人　京子　三十二歲　長男　勇　十一歲
二男　進　八歲

● 富次素平　滿鐵會社瓦斯作業所職員

原籍　山口縣阿武郡萩町字河添一九八
現住　大連市若狹町ラ區四十三號地

明治十三年二月二十六日神戶に生る、同三十九年七月東京帝國大學工科大學卒業後直に大阪瓦斯株式會社に入りて技師となり四十二年八月滿鐵會社に轉す

夫人　アイ　二十九歲　女　滿壽子　五歲

● 富田孝四郎　川崎造船所大連出張所員　士族

原籍　鹿兒島縣鹿兒島市樋ノ口町
現住　大連市濱町四十號地

元治元年九月十三日生る二十六年日本銀行に入り三十二年臺灣銀行創立に際し同行創立事務囑託を命せられ四年同行開業と共に渡臺臺北本店詰となり三十四年基隆支店長に昇任す三十六年辭して實業に從事し四十四年川崎造船所大連出張所に入り今日に到る

母堂　みつ　七十三歲　夫人　縫子　四十三歲
男　充　十六歲　長女　稻子　二十二歲
三女　清子　十九歲

● 東畑英夫（トウハタ）　關東都督府警視　民政部勤務　兼旅順民政署警務係主任　從六位勳六等

原籍　和歌山縣伊都郡笠田村二一〇番地
現住　旅順市新市街特權地二七番地（電話一〇番）

元治元年十二月三日生る同四十年五月滿鐵地方部勤務四年九月關東都督府警視拜命今日に到る

夫人　すま子　三十六歲　長女　和子　二　歲

● 東鄕茂德　領事官補　從七位　奉天總領事館在勤

原籍　鹿兒島縣日置郡下伊集院村字神之川三〇三番地
現住　奉天總領事館內官舍

明治十五年十二月十六日生る同四十一年七月東京帝國大學文科卒業大正元年九月外交官及領事官試驗合格同年十一月高等官七等同二年一月從七位に敍し同年七月奉天總領事館領事官補に任せらる

● 戶口茂里　戶口法律事務所主（辯護士）　關東州辯護士會々長　正七位

原籍　東京市麴町區飯田町三丁目九番地
現住　大連市山縣通三番地（電話七四三番）

文久二年八月十五日埼玉縣秩父郡に生る長じて司法省法律學校卒業明治二十二年判事に任せられ同二十九年五月まで高知、松山、新潟等の裁判所に奉職し其間常に豫審事務に從事す二十九年五月臺灣總督府法院判官に任せられ臺北地方法院の豫審事務に從事す三十年五月新竹地方法院長に轉補せられしも當時天下の問題となりし臺灣高等法院長高野孟矩氏に對する違憲處分撤廢運動の爲め赴任せずして同年十月辭職上京し翌三十一年六月辯護士を東京に開業し三十九年二月渡連現地に辯護士を開業し今日に到る

夫人　登代子　四十二歳　長男　武男　十七歳

◉戸塚金三郎　横濱正金銀行大連支店出納主任

原籍　橫濱市翁町五丁目一四三番地
現住　大連市播磨町七區四號ノ一

明治四年六月二十二日生る年少にして正金銀行に入り横濱本店及神戸支店に多年在勤して行務に練達し大正三年九月來連現任に就けり

夫人　萬壽　長男　五郎　次男　正秀

◉戸川喜吉　滿鐵會社南滿洲工業學校教諭　正七位　士族

原籍　岡山縣岡山市廣瀬町
現住　大連市伏見臺滿鐵宿舍

明治七年八月十三日生る同三十一年京都第三高等學校土木科卒業後四十年迄九州鐵道會社に奉職それより大正二年迄鐵道院に奉職、以後南滿鐵道會社に入り現任に就けり

父君　夫人　男　一　女　二

◉徳久愛馬（トクヒサアイマ）　奉天居留民會理事　士族

原籍　東京市麴町區三番町三八番地
現住　奉天小西關第三區第一號

明治四年七月七日高知縣高知市水通町に生る本姓嶋田、後徳久家を續く明治二十七年三月滋賀縣彦根尋常中學校卒業同年九月京都第三高等學校入學二十九年四月中途退學三十年日本郵船株式會社入社三十三年同社陸軍御用船三池丸事務長として北清事變に從軍功に依り金七十圓及從軍記章を下賜せらる三十六年退社同年七月渡清凌西錦州に凌川學館を開き支那人子弟に英語を敎修す日露戰役後奉天に來りて商業

及農業を營む四十四年二月居留民會に入り今日に至る

母堂 榮子 七十三歳　夫人 鎮子 二十九歳
長女 信子 五歳　二女 康子 一歳
男 正 三歳

● 栃内壬五郎（トチナイジンゴロウ）　滿鐵會社産業試驗場長兼地方部産業課主任 正五位勲五等

原籍 北海道石狩國長沼村
現住 大連市山城町六番地（電話一五四五番）

明治五年十月十五日宮城縣に生る同二十九年七月東北帝國大學農科大學卒業後同大學研究生として一箇年間在學三十年北海道廳に奉職殖民課長拓殖課長並に通商課長に歴任し四十年五月樺太廳開廳と同時に同廳に轉任し拓殖課長兼農事試驗場長となる大正二年三月辭して滿鐵會社に入り今日に至る

養母堂 里子 六十五歳　夫人 基子 三十五歳
長女 千枝子 十四歳　次女 壽子 十二歳
長男 千里 十歳　三女 千鶴子 七歳
次男 寛 四歳　四女 幸子 一歳

● 鳥取末次郎　滿鐵會社築港事務所技師 從七位 士族

原籍 福岡縣久留米市櫛原町八三番地
現住 大連市播磨町七區第二號

明治七年十二月十八日生る同三十一年七月第三高等學校工學部土木科卒業、同年八月福岡鑛山監督署に奉職、三十三年八月鹿兒島縣廳技師拜命、四十一年六月任官の儘南滿洲鐵道株式會社築港事務所技師被命大正二年十二月廢官引續き任勤

夫人 セキヤ 三十八歳　長男 辰雄 十二歳
次男 正男 十一歳　三男 忠雄 四歳
長女 タキ 八歳　次女 キク 六歳
三女 久 二歳

● 飛工重利（トビク）　滿鐵會社鑛業部販賣課職員 營口出張所主任

原籍 福岡市他行五番町
現住 營口新市街鑛業部販賣課内（電話一六六番）

明治十七年九月十日生る舊姓は杉村、後飛工家を繼ぐ少年より三井物産會社に入り香港、廣東其他南方各支店に勤務する事多年明治四十三年四月廣東支店より滿鐵會社に轉じ鑛業部勤務となり大正三年八月現任となる

養父君 守人　夫人 うめ 二十八歳
女 滿子 三歳

◉豊田秀造　滿鐵會社南滿醫學堂教授

原籍　長野縣下伊那郡且開村一四四番地
現住　奉天新市街

明治十五年七月二十日生る同三十四年三月東京醫學專門學校濟生學舍卒業同年十一月醫術開業試驗及第三十六年十月內務省血淸藥院技術部事務取扱囑託及傳染病研究所技手を經て四十三年八月大連民政署檢疫委員となり同年五月滿鐵醫員に轉じ四十四年九月獨逸留學被命大正三年二月歸朝同年十二月醫學堂敎授となり今日に迨ぶ

◉豊浦宗太郎　辰馬商會支配人

原籍　兵庫縣有馬郡長尾村ノ內宅原村五三番地
現住　大連市山縣通九九號地（電話一三四三番）

文久二年三月二十日生る大正元年十一月二十九日辰馬商會大連支店支配人として來任海運業に從事して今日に及ぶ

夫人　ゆう　五十一歲

◉友野正一　增田合名會社大連出張所主任　士族

原籍　岡山縣岡山市上西川町一四九番地
現住　大連市寺內通一番地

明治二十年三月七日生る同四十二年大阪高等商業學校卒業後直ちに住友銀行に就職し四十四年十一月辭して增田合名會社に入り終に現任に進む

父君　正忠　母堂　さく　夫人　義子　二十三歲
長男　正淸　當歲

◉友淸義一　福義洋行主（麥粉、砂糖、雜貨業）

原籍　福岡縣三池郡三池町七〇五番地
現住　大連市監部通二丁目九七號地（電話四一三九四番）

明治十六年八月二十二日生る同三十五年三井物產會社鑛山部に就職し四十年十二月渡滿四十一年一月南滿洲鐵道株式會社に轉職大正二年七月辭して獨立福義洋行を創立し今日に迨ぶ

夫人　さき　四十一歲　長女　秋子　十七歲
次女　富子　十三歲　長男　仁介　八歲

◉土井菊次郎　若狹町郵便所長　正八位勳八等　士族

原籍　愛媛縣松山市柳井町三五番戶
現住　大連市若狹町ヤ區一號地（電話五九九番）

明治五年九月九日生る同二十六年七月東京郵便電信學校卒業以來大阪及長崎に勤務し日露の役第一軍電

信豫備員技手として從軍戰役の功に依り勳七等に敍せらる凱旋後更に臨時電信隊附被命再渡滿關外並に草河口軍用電信所に勤務す其後營口に轉任し四十三年五月現職を命せらる

夫人　八重子　三十八歲　長男　正數　二十六歲
二男　延年　六歲　女　伊勢野　二十一歲

●土橋義助　土橋商行主（質及古物業）大連銀行監査役 大連貯金株式會社取締役

原籍　和歌山縣和歌山市湊北町二丁目一二番地
現住　大連市伊勢町二八番地（電話六一〇番）

明治十年四月六日生る同三十七年五月日露戰役に際し十一師團司令部野戰病院及兵站司令部酒保として從軍、三十九年酒保を廢業す同年五月大連に來り現地に於て質屋業を開始す大正元年十二月貯蓄銀行を設立して監査役となり又大正二年十一月貯金株式會社を創設し取締役となる

父君　儀右衛門　七十五歲　母堂　てふ　六十六歲
夫人　楠枝　三十五歲　男　正夫　三　歲
長女　南子　十七歲　二女　房子　十四歲
三女　龍子　十二歲　四女　蔦子　五　歲

●千秋穗三郎　關東都督府中學校敎諭 物理化學科主任

原籍　靜岡縣駿東郡沼津町本三四八番地
現住　新旗[illegible]日進町一號地ノ一〇

明治十一年四月二十日生る同三十二年三月靜岡縣師範學校卒業三十八年三月東京高等師範學校本科數物化學部卒業三十二年以來靜岡縣靜岡尋常小學校訓導及盛岡高等農林學校助敎授並に盛岡中學校愛知縣第二中學校敎諭に歷任し四十三年四月現官を拜命す

父君　輝雄　八十一歲　夫人　まつ子　二十八歲
女　千枝子　八　歲　悅子　六　歲
艶子　四　歲　八重子　一　歲

●千村春次　千村商店主（建築材料金物業） 勳六等　士族

原籍　廣島縣深安郡福山町
現住　大連市伊勢町一三號地（電話五三番）

明治三年二月山口縣都濃郡德山町に生る本姓は長西、後原籍地千村家の養嗣子となる大阪にて某汽船會社に在ること數年明治二十七、八年戰役に際し事務長として御用船に乘り軍の輸送に從事す功に依り勳六等を賜はる二十九年辭して賀田組に入り大阪に在勤す三十二年臺灣に轉ず三十七年日露戰役に際し賀田組を退き帆船を以て軍の輸送用達をなす三十九年三月渡連現地に千村商店を開設して今日に到る

夫人　すゑ　四十四歳　長男　庄一　十六歳
二男　信次　四歳　長女　初子　十九歳
二女　重子　十八歳　三女　あい子　十七歳
四女　みさを　五歳

◉値賀　連　値賀法律事務所主　辯護士　大連市會議員　士族
原籍　長崎縣北松浦郡平戸村
現住　大連市越後町三番地（電話九一三番）

明治五年七月八日生る同三十二年東京帝國大學法科大學獨法科卒業同三十三年長崎區裁判所奉職三十四年辯護士開業三十九年渡滿四十一年關東州辯護士名簿に登錄開業法律事務所を開始し爾來大連を根據地として滿洲各地に出張し現に滿洲各地に於ける重なる銀行會社の法律顧問たり

母堂　綾子　七十歳　夫人　思賀子　三十三歳
長男　宏　二歳　長女　良子　十三歳
次女　君子　十二歳　三女　照代子　六歳

◉近森出來治　大連高等女學校囑託　一般音樂教授
原籍　高知縣高岡郡尼川村字山田
現住　大連市但馬町〆區三一號地

明治六年十月十三日生る同二十八年三月高知縣師範學校卒業同年五月東京音樂學校入學三十年七月同校卒業と同時に高知縣師範學校教諭となり舍監を兼任す三十二年新潟縣高田師範學校教諭兼舍監に高田高等女學校教諭拜命三十五年和歌山縣師範學校教諭兼舍監並に和歌山中學校教諭和歌山高等女學校教諭拜命三十八年五月清國直隸省保定府優級師範學堂教習となり四十五年三月北京に於て劉氏私設の中國音樂學堂經營中革命亂の爲め中絶す大正三年八月渡連現業に就けり

父君　榮之助　七十三歳（在鄕）　夫人　靜猪　三十六歳

◉中馬（チウマ）龍造　東濱大藥房主（藥業）　牛莊居留民團行政委員　遼陽銀行取締役
原籍　兵庫縣川邊郡尼崎町
現住　營口永世街（電話四一四八番）

明治十一年五月但馬國養父郡八鹿町に生る本姓は山根、後中馬家を相續す京都藥學校を卒業し明治二十九年藥劑師となる爾來數年間神戸及姫路の公私立病院に奉職して藥局長たり三十五年露領浦鹽斯德に赴き藥局開設を計りたるも許るされず森病院に就職の傍ら露語を研究し三十六年夏より悉比利亞各地を商業視察に巡歷し沿海州尼古來斯克滯留の際會ま日露の開戰となりて露官憲の爲めに幽閉さる後輪送せら

れ歐露及獨逸を經由して三十七年十二月歸朝す翌三十八年一月營口に來り開店して今日に到る

養父君　泰　造　　養母堂　美津子
夫人　貞　子　三十三歲　長女　敦　子　十四歲

◉大内丑之助　都督府事務官大連民政署長　高等官二等　從四位勳三等　士族

原籍　東京府下千駄ヶ谷町原宿一一〇四番地
現住　大連市土佐町官舍（電話七番）

慶應元年四月二十八日福島縣二本松町に生る明治十八年東京外國語學校獨逸語學科及普通學科を卒業又二十一年九月東京私立獨逸協會學校專修科を卒業し同年同月司法官志願獨逸法律高等試驗に及第して同年十二月判事試補に任ぜらる二十三年十月白河區裁判所判事となり二十五年一月豫審係となる同年二月檢査官補に被任二十八年二月高等官七等從七位に叙せられ二十九年七月法政局參事官三十年三月高等官六等に同年同月正七位に叙せらる三十二年三月高等官五等に翌年五月從六位に被叙三十四年四月任高等官四等同六月叙正六位三十五年二月臺灣總督府參事官に轉任同四月歐米派遣被命同六月勳六等瑞寶章拜授三十六年八月歸朝同九年高等官三等同十二月叙從五位三十九年四月三十七、八年戰役の功に依り勳四等旭日章拜授四十一年二月關東都督府事務官高等官三等に被叙同年五月民政部庶務課長となる同十一月高等官二等同十二月正五位に被叙四十二年五月兼任關東都督府外事總長同年六月清國皇帝陛下より贈授の二等第一双龍寶星佩用を允許せらる大正元年十二月勳三等瑞寶章拜受同二年八月現官拜命今日に至る

父君　淳　八十一歲（在東京）
夫人　あ　い　四十三歲　長男　秀一郎　二十三歲
次男　才二郎　二十二歲　三男　英　三　十八歲
四男　雄四郎　六　歲　長女　千　代　二十歲
次女　靜　九　歲　三女　光　八　歲

◉大河内得一　關東都督府海務局技師　高等官四等從五位勳五等

原籍　愛知縣名古屋市南鍛冶屋町
現住　大連市兒玉町五番地五號（電話一〇四五番）接續

明治四年一月二十四日生る同三十二年東京帝國大學工科大學造船學科卒業同年海事官に任ず四十四年關東都督府海務局技師に轉任す

夫人　翠　長女　照　次女　春　香
三女　貞　子　四女　敏　子　長男　正　明

◉大河平（オオコウヒラ）隆光　滿鐵會社公主嶺經理主任兼産業試驗場主事　士族

原籍　鹿兒島縣鹿兒島市新屋敷町三六番戸

現住　公主嶺菊池町四丁目社宅三〇號（電話三番）

明治十二年十月三日生る同三十五年第一高等學校卒業三十八年京都帝國大學法科大學經濟科卒業三十九年五月營口軍政署囑託四十年三月滿鐵會社に入社同年十月奉天出張所長となり四十一年地方課勤務となる四十三年六月公主嶺經理主任に轉じ大正二年六月産業試驗場主事兼任となる日本移民論及營口軍政誌の二著書あり

父君　隆輝　六十五歳　母堂　與利　五十八歳
夫人　聖子　三十一歳　長男　光雄　八歳
次男　聖雄　六歳　三男　輝雄　一歳
長女　公子　四歳

◉大瀧八郎　大連海關副稅務司

原籍　山形縣米澤市門東町

現住　大連市越後町ヰ區三八（電話一〇五八番）

明治元年六月二十一日生る幼少より海軍に志し明治十八年其試驗に應せしも體量輕少の爲め拒斥せられ慨然米國に渡航し中學より預備門を經て二十七年大學を卒業し歸朝後教育界に在ること五年明治三十二年支那稅關に始めて日本人三名を試用するや神田男爵の推擧に依りて被聘爾來漢口廣東廈門寧波の各海關に歷任し大正四年八月大連海關に轉勤現職に就けり

夫人　操　三十六歳　長女　美巴　八歳

◉大來（オオキ）修治（號芝風）遼東新報編輯長、大連記者團幹事

原籍　三重縣松阪町字西町

現住　大連市霧島町ル區三一號

明治十六年三月二十一日生る同三十五年東京人民新聞社に入り在勤二年にして去り三十八年より南勢新報主筆たること一年半三十九年十月遼東新報に入りて現在に到る

大父　茂右衛門　大母　ひさ
父君　珣　母堂　うた　夫人　はな
長男　修平　二男　仁太郎　三男　佐武郎

◉大沼良三　關東都督府醫院醫長外科主任　高等官三等　陸軍二等軍醫正　從五位勳四等功五級　士族

原籍　東京市芝區三田豊岡町一三番地

現住　旅順新市街敷島町官舍

明治五年六月十九日舊高崎藩に生る同三十三年十二月東京帝國大學卒業翌年五月陸軍二等軍醫に任官し大阪及仙臺の衛戍病院附、醫術開業試驗委員輜重兵第二大隊附一等軍醫等に歴任し四十年三月東京帝國大學院に入院、出院後近衛師團勤務、陸軍軍醫學校教官兼補を經て四十四年十二月關東都督府醫院醫長拜命翌年一月旅順婦人醫院長を兼務し大正二年八月陸軍二等軍醫正に昇任今日に至る

夫人　一　枝　二十八歳　　長男　貞　雄　五　歳
次男　正　治　二　歳　　長女　富士子　七　歳

大橋松治　滿鐵會社吉林東洋醫院長兼醫長

原籍　栃木縣上都賀郡西方村大字金崎一〇五番地
現住　吉林省城内糧米行易安胡同（電話二二五番）

明治十八年一月二日生る同四十四年十一月京都帝國大學醫科大學卒業四十五年一月同大學副手大正二年三月吉林省城内東洋醫院副院長任命渡滿大正三年十月一日東洋醫院を南滿洲鐵道株式會社に於て繼承經營するや引續き勤務同時に醫院長となる

母堂　い　さ　六十歳　　夫人　も　よ　二十三歳
女　和　枝　當　歳

大槻滿次郎　關東都督府醫院醫員　病理試驗室主任　高等官五等從六位

原籍　京都市南桑田郡龜岡町字西町一七番地
現住　旅順舊市街鮫島町醫院官舍

明治八年十二月二十七日生る同三十年九月京都府立醫學校卒業後北海道函館藤野病院醫員となり叉渡島國松前郡福島村にて獨立開業し三十七年四月東京醫科大學にて病理研究三十九年九月私立東京醫學校講師囑託文部省醫術開業試驗附屬病院醫員を命ぜられ四十三年一月關東都督府醫院醫務囑託として來滿四十四年二月同醫院醫員任命今日に至る

夫人　た　け　二十三歳　　長男　茂　雄　一　歳

大澤次三郎　滿鐵會社工場設計科員

原籍　福井縣福井市[illegible]川下町一六番地
現住　大連市外沙河口三丁目北四

明治十四年四月二十四日生る同三十九年七月東京帝國大學工科大學機械科卒業同年八月野戰鐵道提理部附遞信省雇として滿洲上陸工場勤務となる四十年四月滿鐵會社に入社工場勤務となり四十二年十一月英國留學四十五年八月歸社爾來現任を命ぜらる

父君　市三郎　六十五歳　　母堂　多　津　六十二歳

夫人　石　二十七歳　長男　信一　三歳
長女　澄　二歳

●大澤富三

東亞煙草株式會社安東縣販賣所長　從六位勳五等　士族

原籍　岐阜縣惠那郡苗木町一三四番地
現住　安東縣三番通二丁目（電話二四九番）

明治十年九月生る同三十三年東京法政大學卒業後埼玉縣屬を勤め靜岡縣周知郡阿部郡岩田郡の各郡長歷任同四十四年辭職と同時に東亞煙草株式會社に入り大正二年八月渡滿安東販賣所長となる

夫人　ふみ子　三十歳　長男　一男　十五歳
次男　次郎　十三歳　三男　三郎　六歳
長女　ちゑ子　十歳

●大塚素（シロシ）

滿鐵會社總務部庶務課員兼慰問掛主任　見習夜學校主事　大連基督教青年會理事　士族

原籍　愛知縣幡豆郡西尾町大字大給三一番戶
現住　大連市濱町八番地ノ三

明治元年二月十一日生る二十五年京都同志社普通學校卒業直ちに北海道釧路監獄教誨師として三年勤續同二十八年冬北米に遊び社會事業を視察研究し三十二年自費にて開きし第六回萬國監獄會議に列席し歐洲を一巡して三十三年歸朝京都同志社幹事兼教授となり三十七年六月辭職再び米國に遊びテキサスの農業を視察し同年歸朝基督教青年會滿洲出征軍慰問事業總主事として滿洲に來り平和克復後青年會同盟幹事として朝鮮鐵道靑年會を組織し四十二年南滿洲鐵道株式會社の聘に應じて入社し現今に至る

夫人　ふみ　四十歳　長男　宏　十二歳
二男　早苗　五歳　長女　和　十三歳
次女　多賀　九歳　三女　小枝　七歳
四女　[illegible]　一歳

●大藪鉦太郎

滿鐵會社鐵嶺驛長　士族

原籍　東京市牛込區山伏町
現住　鐵嶺附屬地滿鐵宿舍

明治二年十二月十八日生る同二十一年始めて日本鐵道會社に入り三十七、八年戰役に際し在社の儘陸軍省線區司令部附となり三十九年五月復員に付き免屬同年十一月私設鐵道國有と同時に鐵道作業局運輸部に移り四十年八月辭職す四十三年五月滿鐵會社に入り翌四十四年十一月現職に就けり

家族　（皆在京）

●大西清

滿鐵會社公主嶺保線係主任　滿鐵諮問委員　正七位勳六等　士族

原籍　東京市本所區横綱町二ノ一八番地
現住　公主嶺滿鐵會社々宅

明治十年七月二十六日生る同三十七年東京帝國大學工科大學土木科卒業翌年五月鐵道作業局雇となり三十九年四月鐵道技手に同七月鐵道技師に進み四十年四月滿鐵會社技師に任命四十一年十二月遼陽保線係主任を命ぜられ四十五年四月現職に轉ず

夫人　さみ　二十八歳　長女　君代　二歳
次女　公子　一歳

大江惟慶　大松號主（農園及精米業）　士族

原籍　高知縣幡多郡宿毛町三十九番地
現住　撫順明石町二ノ二番地　（電話二九番）

安政六年九月生る明治十九年天津に於て東亞貿易商會を開設し其後大阪にて石炭業を營むこと八年同三十八年七月旅順に來りて閉塞船引上げに從事し五隻の引上げを了りて後大連に於て遼陽通運公司長として鐵道運送業を營み四十年千金寨に來り松山氏と石灰販賣を共同經營したりしが四十二年四月より大松號農場を開設して今日に至る

父君　惟英　七十六歳　母　さら　七十四歳（在國）
夫人　いか（林有造氏の女）五十二歳　男　卓爾　二十歳

大久保九内藏　營口尋常高等小學校訓導兼校長

原籍　長野縣東筑摩郡島主村乙五四一番地
現住　營口新市街第一番戸　（電話三八番）

萬延元年七月十日生る明治十四年三月長野縣師範學校師範科卒業同年四月より三十三年三月迄長野縣に於て小學校訓導兼校長勤務同年四月より同四十二年三月迄長野縣に於て郡視學勤務在職中文部大臣より表彰せられ金百五十圓下賜同四十二年三月依願辭職同年四月營口尋常高等小學校訓導兼校長に任ぜられ今日に及ぶ

夫人　ふで子　四十九歳
長男　成雄　（大連川崎造船所勤務）
次男　俊逸　（大阪高工在學）
次女　龍代子　（東京女子職業學校在學）
三女　和子　（東京女子美術學校在學）
三男　義雄　（關東都督府中學校在學）
四女　美智子　五女　操子

大久保喜作　大連信濃町郵便所長　正八位勳七等

原籍　大阪市東區博勞町五丁目三九番地
現住　大連信濃町三三號地　（電話三九九番）

慶應三年三月十八日生る明治十八年七月大阪郵便局

に奉職二十六年十二月郵便電信書記拜命三十七年二月通信手として大阪船場郵便局在勤三十八年五月通信屬に任せられ第四軍兵站監部附從軍鹿兒島丸に乘船途中三十八年五月二十七日の大海戰に遭遇し六月三日大連上陸鐵嶺開原大牛圏等の野戰郵便局に轉務三十九年二月關東總督府分遣被命寨馬集第八野戰郵便局長心得となる同年五月大連野戰郵便局在勤四十一年七月大連郵便局兒玉町出張所長となる四十三年四月依願免官翌月現職被命大正四年八月信濃町々會常議員を囑託さる

夫人　千里　四十一歲　女　千代　二十三歲
養嗣子　象一　二十九歲

● 大室兵右衛門　大連浪速町郵便所長　從七位勳七等　士族

原籍　東京府下豊島郡瀧の川村大字瀧の川七十五番地
現住　大連市浪速町二丁目二五號地（電話四九九番）

文久元年一月二十八日愛知縣岡崎町に生る明治十八年驛遞局傭に出仕し二十年遞信屬に昇任三十年奈良郵便電信局轉任大阪京都岡山神戶の各郵便電信局に歷任三十五年通信屬被任同時に遞信局に轉勤三十七八年戰役に際し長崎臺灣線カラフト線朝鮮の各海底電信布設工事に從事す功に依り勳八等瑞寶章並に從軍記章を下賜せらる三十九年關東都督府通信書記に任せられ四十一年正八位に叙せらる四十三年五月任關東都督府郵便所長同時に浪速町郵便所長被命四十五年勳七等に叙せらる大正二年より引續き浪速町二丁目會副會長たり

夫人　むめ　四十六歲　長女　うめ　十　歲

● 大庭仙三郎　大庭商會主（土木建築請負業）　大連商業會議所常議員

原籍　靜岡縣濱松市元城町三九番地
現住　大連市紀伊町一五番地（電話一三〇五番）

明治三年七月十四日生る同二十三年王子製紙株式會社に入り勤續九ヶ年三十一年獨立材木業に從事し三十五年山葉寅楠氏の切望に隨ひ同氏と共に濱松に日本木工株式會社を創立し建築請負の外各種の木工業に從事す三十七年同社の日本樂器製造株式會社と合併すると與に樂器會社の社員となる三十八年七月山葉寅楠氏と共に滿韓視察の途に上り大連に山葉洋行を設立し爾來四十五年迄其主任となり大正元年十一月山葉洋行に於て建築部を廢するに及び其商號を讓受け獨立請負業に從事せしが大正四年十一月より大

庭商會と改稱したり

母堂 きく 六十九歳　夫人 よし 四十四歳
長男 貞二 十九歳　次男 武年 十二歳
二女 てる 十七歳　三女 連子 八歳

◉大矢麻二郎　合資會社大矢組大連支店長 勳七等 後備陸軍看護長

原籍 大阪市東區内淡路町一丁目一一番地
現住 大連市朝日町一番地（電八一〇番）

明治十一年八月九日生る同三十三年第四師團に入營兵役に服す三十七、八年日露戰に從軍出征功に依り勳七等下賜四十年渡連大矢組に入り現在其支店長たり

父君 李貫吉　母堂 さよ　夫人 ふさ　男 奈貫造

◉大越文平　貸家業 旅順市長 士族

原籍 東京市神田區駿河臺袋町八番地
現住 旅順鯖江町一番地

萬延元年一月二十日宮城縣仙臺市に生る明治五年東京に於て露語を學ぶ同十二年東京外國語學校露語科卒業同年七月東京駐紮露國公使館通譯となり同年九月長崎露國領事館附に轉ず十八年辭して東京に歸り商業を營み露語飜譯を副業とす三十五年十月旅順に航し同軍港用達業に從事す三十六年三月旅順に居留日本人總代に擧げられ總督の認可を得て同年四月一日旅順港居留日本人會會長となり三十七年二月日露開戰と同時に歸國三十七年六月芝罘に航し同漕業に從事す同年九月大連に於て旅順包圍軍及艦隊の用達となる三十八年三月遼東守備軍司令部附として旅順に至り軍政事務に參加し傍ら商業を營む同年六月二十一日軍政撤廢と共に囑託を解かる三十九年六月旅順に衞生組合を組織し其委員となり四十年九月旅順協會を創立し其役員に擧げられ四十四年四月其の會長となる大正四年十月一日市會議員に官選せられ同月二日市長に任せらる

父君 文五郎（在東京）

◉太田信二　小林活版所主任

原籍 靜岡縣庵原郡富士川町岩淵
現住 大連市大山通七四號地（長電話四四二番）

明治十一年十月十四日生る同二十四年十一月東京市麴町區四番地小林又七商店に入り刻苦勤續して印刷業に練達し三十八年四月大連に同支店設置さるゝや其主任に選ばれて渡連す爾來引續き經營し同店今日

の基礎を建設せり

夫人　鋹（シン）

◉小川義和（號小公子）　滿洲新報主幹

原籍　東京市芝區三田松坂町二三番地

現住　營口新市街南本街三號地滿洲新報社內（電話一六九番）

明治十二年八月五日生る東京青山小學校に學び高等二年にて退學東京工業學校附屬職工徒弟學校に入り在學一年出でゝ三吉鐵工所芝浦製作所等に職工となり二十一歲の時警視廳に巡查を奉職す明治三十八年十二月渡滿關東州民政署巡查を拜命して一年未滿にして辭して後北京各地に放浪す四十一年滿洲新報社に入り大正三年六月以來社務全般の責任を負ふ

父君　儀一郎　五十九歲　夫人　さゝ　二十三歲

◉小川勇　日本赤十字社奉天病院長囑託　奉天獨立守備隊第三大隊附軍醫　陸軍一等軍醫　正七位

原籍　愛媛縣北宇和郡三島村

現住　奉天大西關日本赤十字社奉天病院宿舍（電話七番）

明治十三年三月十三日生る三十三年愛媛縣松山中學校卒業、三十六年熊本第五高等學校卒業、四十年九州帝國大學福岡醫科大學卒業、同年十二月熊本步兵第二十三聯隊に見習醫官として入隊四十一年六月任陸軍二等軍醫、同年八月步兵第二十三聯隊附の儘朝鮮に渡る同年九月朝鮮鏡城衞戍病院附咸興分院に在勤四十二年十月廣島衞戍病院同四十三年七月廣島步兵第十一聯隊附に轉じ同時に軍醫學校入學同年十一月陸軍一等軍醫に任ぜらる四十五年七月旅順重砲兵大隊に大正二年八月旅順衞戍病院附に三年九月獨立守備第三大隊定員外に轉じ同時に日本赤十字社奉天病院長を囑託せらる

大母　りよ　七十六歲　夫人　さだ　二十六歲

長男　滿一　長女　眞子　次男　民滿

◉小野六藏　關東都督府醫院醫長眼科主任　高等官二等從五位勳六等

原籍　山梨縣甲府市太田町五〇番地

現住　旅順新市街朝日町

明治四年一月二十六日生る同二十七年第一高等學校在學中日清戰役に充員召集せられて中途退學二十九年六月再入學卒業し更に三十四年三月東京帝國大學醫科大學卒業後同大學副手及助手として附屬醫院に勤務し三十五年二月福島縣立福島病院副院長兼眼科醫長となり三十七年十一月日露の役に充員召集せら

れ三十八年三月陸軍二等軍醫に任せられ三十九年六月北海道函館病院眼科部長、四十年五月釧路國厚岸町立厚岸病院長四十一年五月山口縣立病院眼科部長同年十二月關東都督府醫院醫長拜命今日に至る

夫人　つね　三十五歲　長女　はつ子　十二歲
次女　序子　十　歲

◉小野木孝治　滿鐵會社總務部技術局建築課長　正五位

原籍　東京市芝區車町四十四番地
現住　大連市山城町六番地五號（電話一五三一番）

明治七年三月七日靜岡に生る士族中村茂雅の二男にして同十六年十一月小野木家を相續す三十二年七月東京帝國大學工科大學建築學科卒業同年八月海軍技師に任し高等官七等從七位吳鎭守府經理部建築課員に補せられ三十三年二月依願免官三十五年十月臺灣總督府囑託となり翌年五月同府技師に任せられ高等官六等正七位に敍す三十八年九月高等官五等同十一月從六位三十九年五月陸軍技師兼任高等官五等臺灣陸軍經理部附四十年二月在官の儘滿鐵技師に任せられ四十二年三月高等官四等六月正六位に四十五年三月高等官三等同年六月從五位に昇敍大正二年十二月廢官大正三年三月特旨正五位に敍せらる

夫人　久子　三十五歲　長男　敏雄　十二歲
長女　輝子　九　歲

◉小澤　孟　滿鐵會社大連醫院醫長小兒科部長　士族

原籍　岡山縣上道郡宇野村大字西川原一七一番地
現住　大連市山城町四ノ六二（電話一五五一番）

明治十六年十一月二十日生る同四十二年十一月京都帝國大學醫科大學卒業以來同校附屬醫院小兒科助手たりしが四十四年八月滿鐵會社に入り同時に現職に就任す

夫人　靜代　二十四歲

◉小濱爲五郎　安東縣居留民團理事　安東官有財產管理會委員長　安東商業會議所特別議員　從七位勳六等　士族

原籍　鹿兒島縣姶良郡加治木町
現住　安東縣大和橋通二丁目（電話四五五番）

明治元年二月十五日生る夙に東京外國語學校に於て支那語を學び明治二十年より上海に渡航して日清貿易研究所の英語敎師となる日清役に高等通譯として臺灣に赴き爾來同府の辨務署長其他に任せられしが日露戰役に再び通譯として從軍し三十八年安東縣に來り翌年安東新報社を創刊して其社長となる又滿鮮

運送株式會社を創設し大正二年兩社を辭して現職に就けり

夫人 久子 四十二歲 四男 二女

◉小澤新之輔 大連取引所信託會社支配人

原籍 千葉縣千葉町千葉新町二六二六番地
現住 大連市近江町シ區第一九號地（電話七四一番）

明治十三年三月二十二日東京に生る同三十三年七月東京高等商業學校本科卒業同時に同校專攻部卒業同年七月より三十七年六月迄大阪岩井商店にて貿易事務に從事し三十七年七月東京三井物產會社に入り三十九年八月大日本製糖株式會社に轉ず大正四年一月大連取引所信託株式會社に入り現職に在り

夫人 ゆき 三十四歲 長男 眞一郎 七歲
二男 正典 三歲 女 富子 五歲

◉小澤武之助 滿洲製粉株式會社技師 工務長

原籍 東京市小石川區初音町四番地
現住 長春北二街滿洲製粉會社分工場內

明治十四年三月三日生る同三十九年七月東京高等工業學校機械科卒業後日清製粉株式會社に入り四十五年四月辭職同月滿洲製粉株式會社に入社今日に至る

夫人 よし子 二十九歲 長男 武 七歲
長女 靜枝子 四歲

◉小田半平 小寺洋行支配人 士族

原籍 東京市外千駄ヶ谷町
現住 營口舊市街老爺閣小寺洋行內

明治四年八月十五日兵庫縣三田町に生る幼年より生父郡治氏に漢學を學び神戶商業學校を卒業後明治廿六年三井物產大阪支店に入るの約成りしも家庭の事情の爲めに神戶棧橋會社に就職し爾來勤續十有五年同社輸出入課長に昇任す四十年小寺洋行に轉職して同神戶支店副支配人となり大正二年十月營口本店支配人に昇轉す

夫人 照子 三十四歲 長男 基礎(モトイ) 十七歲
（神戶中學在學） 二男 成就(ゼウジユ) 十五歲 長女 八千代 十二歲

◉小田切豐 大連鐵工場主

原籍 山梨縣甲府市新青沼町四七番地
現住 大連市大山通一丁目一三號地（電話四三四番）

元治元年四月生る同三十八年五月渡連四十年七月大連鐵工場を創設し機械類の製造並に修繕業を營む

夫人　すゑ　三十五歲

岡部次郎

政友會員（長野縣選出代議士）營口水道電氣株式會社監査役　正隆銀行取締役　株式會社鐵嶺陳列館監査役　營口硝子製造會社々長　滿洲電氣株式會社取締役　滿洲新報社長　正七位勳六等

原籍　長野縣北佐久郡春日村

現住　東京府下荏原郡大井町林、三六四番地

元治元年八月三十一日生る幼より漢學を修め又詩を大沼枕山翁に學ぶ年長して北米に遊學經濟及社會學を修了して更に歐洲諸大學を歷遊し轉じて布哇に赴き牧師たること多年故伊藤公の政友會組織に際して歸朝し故俠の知を受け暫く北海タイムス社に社長たり其後東京に於て政治又は教育に關係せしが日露戰役起るや通譯官として從軍し平和後營口軍政署の囑託となり後營口官有財產管理委員會理事に推され牛莊居留民團議長を兼務すること五年、明治四十五年五月總選擧に長野縣代議士に當選し大正四年五月改選に再選せられ多く東京に在住せり

夫人　さく　二十六歲　長男　忠雄　四歲

岡部直

岡部商店主（特產物石灰製造販賣業）滿鐵諮問委員　勳六等

原籍　熊本縣天草郡今津村大字今泉

現住　開原附屬地第一區五號（電話四五六番）

明治十二年五月二十六日生る熊本九州學院を卒業後臺灣に赴き臺中縣廳臨時臺灣土地調査局廳等に歷任し三十七八年戰役に陸軍通譯として從軍凱旋して宮中に拜謁を賜はり三十九年營口支那商東盛和に聘せられて渡滿し遼東新報鐵嶺支局に居り大正元年十一月開原に轉住し獨立現業を開始して今日に到る

母堂　かじ　六十二歲　夫人　うめ　四十歲

男　等　十五歲

岡山源六（號雲介）

大阪朝日新聞記者奉天特派員　士族

原籍　鹿兒島縣肝屬郡鹿屋町

現住　奉天驛前（電話五二一五番）

明治八年十一月三日生る明治三十六年より同七年迄上海に於て育英に從事す爾來某任務を帶びて南北支部中直隸、山西、山東福建及廣東省を除く以外の全部を踏破して審かに各種の調査を遂げ四十四年六月歸朝同九月大阪朝日新聞社に入り大正四年五月現職に就任す

父君　宗源　夫人　枝茂　三十一歲

女　菊　一歲

◉岡野定義　旅順工科學堂教授　高等官三等　從五位勲六等　士族

原籍　福岡縣浮羽郡船越村

現住　旅順鴻ノ臺一一七番地官舍

明治十一年九月二十四日生る同三十五年七月京都帝國大學理科大學物理學料卒業同年十月第五高等學校教授に任ぜらる四十三年四月旅順工科學堂教授に轉任今日に至る

父君　健之亟七十二歲　母堂　婦喜六十三歲（以上在鄕里）

夫人　ふさ子　三十一歲

長女　美　枝　長男　雅　次男　豐

◉岡本芳次郎　滿鐵會社調査課職員　大連市會議員　正五位勲六等

原籍　東京市麴町區飯田町一丁目二番地

現住　大連市乃木町三番地一ノ二

明治元年六月四日岡山に生る同二十二年獨逸協會學校卒業後獨逸に留學しドクトルイリユースの學位を受け二十六年歸朝二十九年第一高等學校教授を拜命す滿鐵會社の創立と同時に任官の儘同社に入り現在に及ぶ

夫人　よ　ふ　四十五歲　長男　保　明　二十一歲

二男　猛　一　七　歲　三男　祐　一　四　歲

四男　堪　一　二　歲

◉岡本辰之助　滿鐵會社地方部地方課教育主任

原籍　東京市麴町區飯田町二丁目廿番地

現住　大連市能登町ヶ區二一號

明治元年四月八日京都に生る同十九年二月京都師範學校高等師範科卒業爾來京都市に於て小學校教育事業に從事す三十一年三月愛媛縣越智郡視學、三十三年四月東京府南豐多摩郡視學三十九年四月東京府視學に歷任し四十一年四月滿鐵會社に入り今日に到る

夫人　よ　ね　三十三歲　次男　但　夫　十　歲

三男　鐸　三　七　歲　長女　てる子　三　歲

◉岡田省胤　三井物産株式會社大連支店員　船舶掛主任　士族

原籍　東京市麴町區内幸町一丁目六番地

現住　大連市能登町ヶ區一七號地（電話一五一四番）

明治三年十月二十五日福島縣中村町に生る二十九年二月三井物産株式會社使用人となり今日に及ぶ

母堂　てつ子　六十　歲　夫人　登勢子　三十八歲

長男　幸　胤　十　六　歲　長女　香　子　十　三　歲

次女　豐四子　十　二　歲

◉岡橋秀造　大連聖公會傳導師

原籍　鳥取縣鳥取市上魚町三二番地
現住　大連市天神町

明治十年六月十二日生る二十四歳より聖公會信者となり明治三十八年神學研究科卒業同三十七年以來傳導に從事し同四十一年京城教會監督所書記たりしが大正三年一月大連教會所傳導師に擢任せられて渡連今日に及ぶ

夫人　ひで子　三十一歲　長女　誠子　一　歲

● 丘　襄二　田中商會顧問　勳六等

原籍　東京市日本橋區米澤町三丁目六番地
現住　大連市加賀町四十四番地（電話二七八番）

安政五年三月十二日三重縣津市に生る明治十二年伊勢津第百五國立銀行取締役兼支配人に翌年頭取に任選す十四年三月三重縣商業會議所會長及水產會會長に當選十五年大日本水產會學藝委員を囑せらる二十年三井物產會社本店に入り二十七年東京電燈株式會社幹事となる二十九年日本電氣協會より有功金章及賞狀を受く三十七年海軍々司令部の特殊命令を以て日露戰役に從ひ潛水器械船六十餘艘を率ひて大連灣の掃海をなす四十一年三十七、八年の功に依り勳六等に敍し從軍紀章を授與せらる以來旅順衛生組合長を勤むること四回旅順協會々長又は會長代理に當選すること四回四十二年南滿洲實業聯合大會の議長となり大正元年關東州居住民總代として大喪儀に參列大正三年青島征討軍に從ひ官憲より賞として銀盃一木杯五、賞狀六通を承く

女　里草子　二十一歲

● 緒方千代治　關東都督府技師　水產試驗場長　關東州水產組合長　高等官三等　從五位勳四等

原籍　福岡縣筑後國山門郡柳河町字新町
現住　大連市老虎灘水產試驗場官舍（電話九一番）

慶應三年三月二十五日生る明治二十三年水產講習所卒業以來石川縣水產講習長、石川縣技師、山口縣水產講習技師兼水產巡回教師等に歷任し三十五年高等官六等正七位に三十七年新潟縣技師水產試驗場長高等官五等從六位に、三十九年日露事件の功に依り勳五等瑞寶章下賜四十二年高等官四等正六位に四十四年關東都督府技師に大正元年高等官三等從五位に大正二年勳四等瑞寶章を下賜せらる目下老虎灘水產試驗場長たり

夫人　ふ　く　三十六歲　長男　彌　十三歲

長女　かの　十九歳

◉緒方丹宮（タミヤ）

遼陽郵便局長　都督府通信事務官補　正七位勳七等　士族

原籍　福岡縣久留米市京町

現住　遼陽白塔街三番地　（電話二〇番）

明治七年五月九日生る同二十七年東京郵便電信學校卒業遞信省に奉職鹿兒島、京都、大阪の各地に轉じ三十七八年戰役に參加し四十年十月關東都督府通信事務官補安東縣郵便電信支局長に任命、大正元年遼陽郵便局長に轉ず

父君　俊藏　七十六歲　　母堂　たつよ子　六十歲

夫人　よしの子　三十三歲　　長男　類母　十三歲

次男　敏雄　十歲　　長女　京子　七歲

◉奥澤耕造

滿鐵會社奉天保線係主任　滿鐵諮問委員　從六位勳六等　士族

原籍　秋田縣秋田郡川尻村二三三番地

現住　奉天新市街鐵路大街一〇號

明治十一年一月二十五日生る同三十七年七月京都帝國大學理工科大學土木科卒業三十七年九月臨時鐵道監部附を拜命渡韓す三十八年七月新義州保線班車輦館保線區南市にて負傷し內地に後送せらる三十八年十月辭職三十九年四月一日三十七、八年戰役の功に依り勳八等白色桐葉章及金八十圓並に從軍記章下賜三十九年五月秋田縣技手兼工師拜命四十一年三月秋田縣技師となる四十年三月在職のまゝ南滿洲鐵道株式會社技師拜命四十年五月從七位に敍せらる四十一年十一月勳七等瑞寶章を授與せらる四十二年十一月高等官六等正七位に敍せらる四十四年十一月勳六等瑞寶章授與大正元年十二月高等官五等に昇敍翌二年二月從六位に敍せらる同年十二月勅令改正と共に秋田縣技師廢官大正二年六月奉天保線係主任拜命今日に至る

母堂　ふゝ　五十四歲　　夫人　さみ　四十二歲

長男　政一　十三歲　　二男　輝　十一歲

三男　勇　八歲　　長女　信子　二歲

二女　淸　一歲

◉奥村順四郎

滿鐵會社中央試驗所醸造科長　正七位勳六等　士族

原籍　福井縣福井市佐佳枝町五五番地

現住　大連市濱町一〇號地ノ三

明治元年八月十一日生る同二十七年七月東京帝國大學農科大學農藝化學科卒業後大學院に入り二十九年十月東京工業學校教授拜命三十三年三月東京農事試驗場技師兼任三十四年九月酒類釀造法研究の爲め獨

逸及び英國佛國に留學被命三十七年一月歸朝同年五月釀造試驗場技師兼任三十九年五月東京高等工業學校應用化學科副長被命四十年三月京都帝國大學理工科大學講師囑託大正元年八月九日依願免本官並に兼官同月現職に就任す

母堂　ため　八十歲　夫人　さき　四十二歲

●尾見　薰

滿鐵會社大連醫院醫長外科部長兼大連婦人醫院長南滿醫學堂教授　衞生課勤務　正六位醫學博士　士族

原籍　京都府與謝郡宮津町字桃縄手一三
現住　大連市山城町八ノ五（電話一五五〇番）

明治七年八月廿日生る同卅年京都府醫學校卒業後京都府立療病院、京都帝國大學醫科大學助手、臺灣總督府醫學校講師等に轉じ三十八年醫學研究の爲め獨逸ブレスラウ醫科大學に留學、四十年七月ドクトルメヂチーネの學位を受く四十二年滿鐵會社大連醫院醫長となり大正二年正六位に被叙三年同社地方部衞生課兼務外科主任として神醫の名あり

夫人　總子　二十九歲　長女　和子　五　歲
長男　正太郎　二　歲

●尾山貫一

滿鐵會社南滿洲工業學校敎諭　建築科主任　正八位士族

原籍　東京府南葛飾郡龜戸町二三
現住　大連市近江町下區四號ノ三

明治十五年三月二十七日埼玉縣忍町に生る同三十七年東京高等工業學校附設工業敎員養成所建設科卒業四十五年六月南滿洲工業學校敎諭を拜命す

母堂　クラ　五十七歲　夫人　茂子　二十五歲
長男　一夫　五　歲

●落合丑彥

營口長壽堂藥房主（藥種業）　士族

原籍　東京市小石川區戸崎町七三番地
現住　營口永世街（電話一一〇番）

明治三年六月十八日舊會津藩に生る同藩沒落後生父の北海道に歸農したる爲め北海道に於て生長し歲長して東京に遊學し東京師範學校を卒業して多年北海道及東京に於て敎育に從事す明治二十八年三越吳服店に入りて勤續十年に及ぶ四十三年七月營口に來り長壽堂を繼承經營して現在に到る

父君　經三郎　七十八歲　母堂　くら　六十八歲
夫人　美登志　二十九歲　長男　澄男　八　歲
次男　利臣　五　歲　三男　照尙　三　歲

●渡邊　淸

都督府警視　長春警務署長領事館警察署長　高等官七等從七位　士族

原籍　高知縣五忠村
現住　長春警務署長官舍　（電話一五〇番）

明治五年九月二十日高知縣瀨江村に生る同三十一年十二月大阪府警部拜命三十八年十一月陸軍省警部に任ぜられ關東州民政署旅順支署勤務となる四十一年五月公主嶺警務支署長に四十五年八月撫順警務支署長に歷任し大正二年九月警視に昇進し鐵嶺警務署長となり大正二年十二月現職に轉補す

夫人　榮　子　四十二歲　長女　鶴　子　二十歲
二女　芳　子　十八歲

◉渡邊德重　遼陽新報社長

原籍　山梨縣西八代郡富里村
現住　遼陽佟家大街　（電話四六九番）

明治十二年十二月十一日生る同三十八年四月鄉里山梨縣甲府市太田町合資會社山梨木材薪炭會社專屬を辭して渡滿營口を經て同年八月遼陽に來り九月遼陽日本人會の組織さるゝと同時に同會理事となり三十九年二月辭職歸省同年五月再渡滿四十一年三月遼陽新報を創刊し主筆兼社長として今日に至る別に滿洲日日新聞朝日新聞及滿洲通信社の遼陽通信を囑託され擔任しつゝあり

◉渡邊喜八郎　安東銀行支配人　安東銀行專務取締役　安東居留民會會計主任

原籍　東京市京橋區高代町八番地
現住　安東縣舊市街

慶應元年一月一日生る夙に東京に於て陶磁器製造竝に貿易商を營む明治三十七年土木建築請負竝貿易商志田組支店支配人として同店を經營し四十年三月安東縣貯蓄會を發起設立して其專務理事に就任す同年十一月株式會社安東貯蓄會取締役同年同月安東居留民團民會議員竝會計檢查員に同四十四年五月株式會社安東銀行專務取締に同年同月安東居留民團役所課稅調查委員等に選任す大正三年三月安東居留民團行政委員に推薦せられしも之を辭す現任安東銀行支配人たり

夫人　はや子　四十二歲　長女　秀　子　十五歲
次女　喜美子　六　歲　三女　たか子　二　歲

◉渡邊精吉郎　滿鐵會社運輸部職員兼總務部技術局保線課勤務

原籍　東京市小石川區關口屋町三五番地
現住　大連市若狹町一七號

明治七年十二月十三日生る夙に日本鐵道に入り多年勤續して鐵道事務に精通し明治三十九年滿鐵會社に入りて現在に到る

夫人 幸 三十五歲 長男 十二歲
二男 焚 九歲 長女 十五歲
二女 清子 七歲 三女 照子 一歲

◉和田由常 滿鐵會社大連醫院醫長耳鼻咽喉科部長 兼南滿醫學堂教授

原籍 東京市牛込區市ヶ谷田町三丁目二番地
現住 大連市乃木町六號地

明治二十年八月十五日生る大正元年東京帝國大學醫科大學卒業同二年八月南滿醫學堂教授任命と同時に耳鼻咽喉科學研究の爲め東京帝國大學留學を命ぜられ同四年一月該社現職に任ぜらる

◉脇山三彌 關東都督府中學校教諭 博物科主任 士族

原籍 福岡縣福岡市伊崎町一三番地
現住 新旅順月見町六三番地

慶應二年一月六日生る本姓津田、後脇山家を續ぐ明治二十五年東京帝國大學理科大學簡易講習科第二部卒業師範中學高等女學校、地理科及博物科教員免許狀を受く二十五年十一月鳥取縣尋常中學校教諭となり後熊本縣尋常中學濟々黌及東京府立第一中學校教諭を歴任し四十二年四月現任に就けり

夫人 やす 四十三歲 男 惟 二十二歲

◉金子平吉 (號雪齋) 泰東日報社長 大陸青年團長 勳六等 士族

原籍 福井縣福井市佐佳枝下町八四番地
現住 大連市[illegible]町二丁目五〇號 (電話一五八番)

元治元年八月十二日生る五歲より讀書を始め藩校明道館に學び詩經を山本居敬翁に受け漢學を廣部鳥道翁に受く次に新明中學(明道館)を出で醫學校に在りて正科及英獨文を學び出京後又漢學を双桂精舍島田重禮翁に受け尋で中村正直氏の門に學び支那語を王治本氏に受け十九歲にして東京鎭臺に入營除隊後牛込區矢來町に私塾を設け漢英の兩科を教授す後北海道に遊び日清役に從軍し臺灣に留りて總督府に奉職し日露役に再從軍し後大連に留り明治四十一年十一月泰東日報社を開設し今日に至る從來肯て娶らず常に天下の士を以て自任し報壇執筆の傍ら大陸青年團を組織して躬踐實行、名節の砥礪、英材の教養に努めつゝあり

母堂 きぬ (在鄕)

金井佐次　合資會社日興油房代表社員

原籍　神奈川縣久良岐郡六浦莊村五一七番地
現住　安東縣江岸通二丁目二番地（電話三二番）

明治十二年一月二十日生る同三十八年五月安東縣に來る翌年三月陳列場を開設して貿易商を營み同年十二月組織を變更し合資會社日隆公司（資本金五萬圓）を設立す四十二年十二月別に合資會社日興油房を起こし製粕製油倉庫業を開始す（資本金八萬圓）此の外滿鮮鐵工場をも兼營し現今に至る

母堂　さよ　五十九歳　　夫人　すゑ　二十七歳
長男　博　七　歳　　二男　秀雄　五　歳
二女　文子　二　歳

金田慶質　滿鐵會社埠頭事務所員

原籍　京都市下京區八條通坊城西入東寺町五二五番
現住　大連市寺兒溝社宅三號

明治五年生る東京商船學校を卒業して後板谷合名會社所屬の船長たること多年滿鐵創立の際入社して現在に到る

夫人　死亡　　長男　薫　十　歳
長女　よし　二　歳

加藤順次郎　關東都督府通信管理局長　高等官二等正五位勳四等　士族

原籍　滋賀縣犬上郡豐郷村
現住　大連市兒玉町八ノ三（電話一〇〇番）

明治二年十月五日生る同二十九年七月帝國大學法科大學英法科卒業同年十二月文官高等試驗に合格して三十年十一月通信事務官兼遞信事務官に出仕し高等官七等從七位に敍す爾來長野、熊本郵便電信局長を歷て三十六年四月一等郵便局長高等官五等に昇敍し再び熊本郵便電信局長に轉ず三十八年八月高等官四等正六位に三十九年四月長崎郵便局長に轉任す同年同月三十七、八年事件の功に依り勳五等旭日章及金七百圓を賜はる同年九月關東都督府通信事務高等官四等に敍し關東都督府郵便電信局長、關東都督府事務官等に歷任して四十一年十一月關東都督府通信管理局長高等官三等に昇任し四十四年十二月高等官二等四十五年二月正五位同年六月勳四等に敍し瑞寶章を賜はる大正四年都督府勅任官代表者として御大典に參列したり

父君　寬　　母堂　やさ
夫人　春子　三十七歳　　女子　三　人

●加藤與之吉　滿鐵會社技術局土木課長　從四位勳五等
原籍　埼玉縣入間郡高麗川村上鹿山
現住　大連市乃木町六番地（電話一五三五番）
慶應三年六月九日生る明治二十七年七月帝國大學工科大學土木科卒業二十九年八月新潟縣技師三十年二月新潟縣土木課長に歷任して四十年五月南滿洲鐵道株式會社技師に轉じ大正三年五月同社技術局土木課長に昇任す
母堂　フサ　夫人　孝子　子女　六人

●加藤博　滿鐵會社電氣作業所電鐵主任
原籍　金澤市小橋町十三番地
現住　大連市近江町十區二號
明治十七年三月二十一日生る同四十二年二月京都帝國大學理工科大學電氣工學科卒業四十三年二月南滿洲鐵道株式會社に入り電氣作業所に勤務す
夫人　文子　二十歲

●加藤定吉　合資會社加藤洋行代表社員（雜貨、土木請負業）靜岡縣選出代議士
原籍　靜岡縣小笠郡土方村百九十二番地
現住　大連市山縣通四八號地（電話二八二番）
明治三年十二月十二日生る同二十四年慶應義塾卒業二十八年臺灣に航し商業に從事す三十三年渡清天津北京等にて請負業並に商業を營みたりしが後日露戰役後營口に加藤洋行を設立し其後之れを大連に移したり大正四年五月總選擧に出陣して靜岡縣代議士に當選す
夫人　ちゑ子

●加茂貞次郎（號方外）大阪每日新聞大連特派員兼方外軒主（支那骨董業）勳六等
原籍　滋賀縣大津町鹿關町三一番地
現住　大連市監部通一ノ一七（電話四一四〇番）
明治七年十二月十日生る年長して京都同志社に學び其後多年支那に放遊して支那語に通じ日露戰役に高等通譯官として從軍し平和後滿洲各地に在りて遼陽時報、遼東新報等に執筆し後大阪每日新聞通信に專心して其特派員となり近頃餘業に支那骨董店方外軒を開設經營しつゝあり
母堂　六十五歲（在國）　夫人　すて子　二十三歲
義妹　はつね　十八歲　義弟　一眞　十五歲

●加唐復太郎　滿鐵會社大連驛長　埠頭事務所兼務　從七位勳七等　士族
原籍　東京府豐多摩郡西大久保二三〇番地

現住　大連市山城町四番地
明治六年十一月二十四日生る、夙に慶應義塾に學び明治二十六年鐵道院(當時鐵道局)に奉職、四十年三月滿鐵會社に入り同年八月大連驛長となりて今日に到る

母堂　さ　と　六十八歳　　夫人　て　る　三十三歳
長男　一　重　十　七　歳

●改野耕三　滿鐵會社理事地方部長　大連商業會議所特別常議員　正五位勳四等

原籍　兵庫縣揖保郡東南村
現住　大連市山城町一〇ノ三（電話六五九番）

安政四年三月五日生る、明治十九年四月家督相續、廢藩置縣の際飾磨小學校係兼東南村戸長を命ぜられ後郡書記、農會議員同副議長、縣會議員同常置委員等に推さる、二十三年第一議會以來衆議院議員に當選すること十回、政友會に置籍して令名あり、三十三年伊藤內閣成るや農商務省官房長に任ぜられしも同內閣瓦解と與に辭職す、三十九年日露戰役の功に依り勳四等旭日小綬章を賜はる、其他農商務省博覽會評議員、內閣工場調査員、文部省教育調査委員等に推薦され、又大正二年十二月衆議院豫算委員に任ぜらる　三年三月滿鐵會社理事仰付けられ同年十二月衆議院議員を辭す

夫人　やすゑ　四十七歳　　長男　五　郎　十　三　歳
二男　七　郎　七　歳　　三女　せつ　十八歳（東京在學）
五女　ふ　み　十　一　歳

●樺山資英　滿鐵會社理事鑛業部長　從五位勳六等

原籍　東京市麴町區平河町五丁目二八番地
現住　大連市山城町八番地（電話一二番）

明治元年十一月十九日鹿兒島に生る少壯北米に遊學し故陸奥伯の知遇を受け華聖頓府コロンビア大學に學び轉じてコンネチカット州エール大學に入りバチエラヲブロース、マスターヲブロース、ドクトルヲブシビルロースの三學位を受け明治二十六年十月歸朝二十八年四月廣島に於て大本營附を命ぜられ樺山臺灣總督赴任の際同總督府參事官心得を以て臺灣基隆廳開設の任に當り福島大佐と同時に同地に入りて民政創始に參與し其後淡水稅關受渡事務並に臺北廳顧問として重もに外交關係の衝に當り總督府外事部長心得を以て在臺外人所有土地の整理に任ず南進軍の渡臺するに及び外交顧問として從軍を命ぜられ安

平、打狗稅關の受渡を了し二十八年十一月南進軍の凱旋と與に歸朝し臺灣事務局の事務に從事す拓殖務省の新設さるゝや其秘書官に尋で內閣總理大臣秘書官に任せらる明治二十七八年戰役の功により勳六等單光旭日章竝に金二千圓下賜さる三十一年十月文部省秘書官に轉補し三十三年辭職す爾來民間に在りて諸種の事業に從事せしが大正三年三月南滿洲鐵道株式會社理事仰付けらる

母堂　直子　七十一歲　夫人　球磨子　三十五歲
長女　華子　十一歲　次女　夫佐子　九　歲
三女　貞子　八　歲　四女　雅子　六　歲

◉河原探重忠

關東都督府通信事務官　大連郵便局長　高等官六等從六位勳五等

原籍　新潟縣中蒲原郡村松町
現住　大連市乃木町五番地（電話一〇〇〇番）

明治元年四月二十八日生る同二十七年郵便電信書記に任せられ東京、函館、長崎等に勤務し同三十五年京都荒神口郵便局長に昇任す、三十九年關東總督局附郵便監査を命せらる同年關東都督府郵便電信局庶務課長兼大連郵便局長に轉し同四十四年大連郵便局長に專任し今日に及ぶ

夫人　いく子　四十歲　長女　はな子　二十二歲
次女　たつ　十八歲　皆在京

◉河原忠二郎

關東都督府民政部屬　臨時土地調査部總務課員　勳七等

原籍　京都市上京區丸太町通猪熊東入仲ノ町五百七番地
現住　旅順赤羽町九四號地

明治八年一月二十一日生る同三十三年早稻田大學校外生行政科を卒業後東亞同文會京都支部に於て支那語講習本科を卒業して三十七年七月陸軍通譯官試驗に合格す之れより前き多年稅務屬として京都府に奉職せしが三十八年六月滿洲出征軍に從軍して關東州民政署に任せらる爾來大連民政署、通信管理局に歷職して大正四年三月民政部臨時土地調査部勤務を命せらる

夫人　くま　三十六歲　長男　忠　三　歲

◉河西健次

滿鐵會社大連醫院長兼醫長兼地方部衞生課長　南滿醫學堂教授豫備陸軍一等軍醫正　在鄉軍人會大連支部長　正五位勳四等功四級　醫學博士

原籍　長野縣小縣郡和田村二四番地
現住　大連市兒玉町五ノ一（電話二八八）

明治元年二月二十四日生る同二十六年帝國大學醫科大學卒業、二十七年五月任陸軍三等軍醫叙正八位二

十八年十月日清戰役の功に依り勳六等瑞寶章を賜ふ爾後累進し日露戰役に三等軍醫正として從軍功に依り功四級金鵄勳章及勳四等旭日小綬章を賜ふ、三十九年獨逸に留學、四十一年三月醫學博士授與、同年四月滿鐵大連醫院長となり地方部衛生課長を兼務す奉天南滿醫學堂の設立さるゝや其堂長を兼ねて創始の衝に當りしが大正三年九月兼務を解きたり

夫人 東　名 三十八歳　長女 つ　や 十七歳
長男 東　一 十四歳　次男 守　雄 八　歳

河濟友吉　瓦房店警務支署長　關東都督府警部　兼外務省警部

原籍　山口縣都濃郡戸田村四八二番屋敷
現住　瓦房店東街第二區九號

明治十四年六月二十日生る同三十八年四月上海東亞同文書院政治科卒業同年八月陸軍通譯として從軍三十九年十二月陸軍通譯を解かれ四十年八月關東都督府通譯生大石橋警務署附拜命同年十一月遼陽警務署に轉任四十一年二月兼任關東都督府警部兼外務署警部同年五月營口警務署に轉勤牛莊領事館兼務四十二年八月專任關東都督府警部同年十二月より大正三年二月迄支那營口廳警務教習に應聘同年同月現職を命せられ今日に及ぶ

父君 粂　吉 六十二歳　母堂 たか子 六十三歳
夫人 わか惠子 二十五歳　長女 正　子 一　歳

河野嚴男　奉天稅捐分所協理　從五位勳五等　七級

原籍　宮崎縣兒湯郡高鍋町大字北高鍋七八〇番地ロ號
現住　營口新市街南本街八番戸　（電話一六七番）

明治八年八月九日千葉縣旭町に生る幼年より父に隨ひ各地に轉住し三十三年七月東京帝國大學法科大學政治科を卒業し大學院に學ぶ翌年四月大藏省に出仕同年十月文官高等試驗に合格し三十五年五月司稅官函館稅務管理局在勤被命同年十一月官制改正により稅務官函館稅務署長に補せらる是れ大學出身者の稅務署長に補せられたる嚆矢なり其後稅務監督局事務官神戸在勤、味野鹽務局長專賣局參事同局收納部鹽務課長を歷任し四十一年十二月高等官四等に陞叙す四十二年四月樺太及露領亞細亞に被差遣同年十月七日歸京四十四年六月勳五等瑞寶章を拜受す四十三年より二ヶ年間鹽田整理の事業に從事し四十五年六月双光旭日章拜受大正元年十二月高等官三等從五位に陞叙同年六月廣島專賣支局長同年八月專賣局事業部

勤務同月支那へ出張を命せられ同十月支那政府に聘用契約締結同年十月三十日より任官の儘現職に任じ今日に及べり

母堂　さわ子　六十一歳　夫人　靜子　二十九歳
長男　通（トホル）　十一歳　長女　初子　十三歳

◉河野喜一郎　滿鐵瓦房店車輛係主任　正八位勳七等

原籍　大阪市南區清水町一丁目
現住　瓦房店滿鐵社宅

明治十四年九月四日生る同三十三年八月大阪高等工業學校卒業三十七年五月鐵道作業局技手を經て四十四年四月野戰鐵道提理部附となり南滿洲鐵道株式會社創立の際入社四十四年十一月瓦房店詰となり今日に及ぶ

夫人　富居子　二十五歳　長女　きみ子　八歳
次女　ふさ子　四歳　三女　三重子　一歳

◉河島義人　正隆銀行旅順支店主任

原籍　東京市芝區下高輪町一八番地
現住　旅順鯖江町二ノ二

明治九年十一月十七日生る十八歳の時苦學の目的を以て上京し後安田銀行の小僧となり爾來勤續明治四十年病氣の爲め同行を辭して靜養し同年十二月營口に來りて正隆銀行に入り四十二年十二月同行奉天支店の開設せらるゝや往て同支店創始の任に當り大正四年九月現任に轉ず

夫人　（死亡）
長女　珂都子　九歳　二男　滿洲雄　六歳
二女　滿都子　四歳　三女　濃子　三歳

◉河邊勝　松茂洋行主（海運業）大洋汽船會社社長　大連汽船株式會社取締役　大連市會議員　大連商業會議所常議員　從七位勳六等

原籍　大阪市西區西道頓堀通二丁目六七番地
現住　大連市若狹町二一號地（電話三〇二番）

明治五年三月二十四日茨城縣眞壁町に生る二十六年東京高等商業學校卒業同時に一年志願として近衞步兵第二聯隊に入隊二十八年歸鄕同時に日本海陸保險株式會社入社卅三年大阪に於て海運業に從事す卅五年松茂洋行を創立す日露戰役に際し出征の功に依り從七位勳六等に叙せらる卅九年海外視察四十一年大連に松茂洋行を設立して海運業に從事す四十四年北清輪船公司を創立し同年組織を變更し大連汽船株式會社を設立して其取締役となる大正四年五月大洋汽船株式會社を創立し專務取締役に就任今日に到る

父君　九真三郎　六十歳　母堂　玉　五十九歳

夫人 信 三十八歲 長男 肇 十五歲

◉川村鉚次郎

滿鐵會社調査課長 營口水道電氣株式會社社長 大連汽船株式會社監査役 遼陽電燈公司監事 勳六等 士族

原籍 長野縣南佐久郡田口村一七七番地
現住 大連市乃木町六（電話一二三番）

明治二年四月二十一日生る同十六年十月家督相續、二十七年帝國大學法科大學政治科卒業、同年七月より二十八年八月迄大藏省官房に勤務し、其後卅八年二月迄日本中立銀行、三十四銀行、岡橋銀行、百三十銀行等に奉職す同年二月京都市助役に任じ四十一年九月滿鐵會社に入り現職に就く

夫人 はつ 三十一歲 長男 一次 三歲

◉河村百平

滿鐵會社中央試驗所庶務科員 士族

原籍 山口縣山口町字荒高一六番屋敷
現住 大連市北大山通一八ノ六

明治元年八月四日生る同二十一年下の關商業學校卒業二十二年三井銀行に入り二十五年辭す二十八年より三十一年迄磐城國双葉炭坑支配人となる三十五年東京日宗生命保險會社に入りて會計係長兼庶務課長となり三十九年辭す四十年四月滿鐵に入り撫順炭坑秘書本社庶務課詰等を歷て大正四年夏現任に就く

長男 暎男 十四歲 二男 丙午 十歲
三男 大三郎 七歲 四男 三千雄 四歲
二女 撫子 八歲 四女 早苗 當歲

◉河村晉吉

滿鐵會社奉天小學校長 奉天實業補習學校主事兼講師 士族

原籍 石川縣金澤市並木町一二番地
現住 奉天小學校寄宿舍內

明治元年九月十八日生る同二十三年四月學術操行共優等の査定を得て石川縣師範學校卒業爾來同縣內の各小學校長師範學校訓導教諭廣島高等師範學校訓導に歷任し其間町村學務委員縣教育諮問會員小學校教員檢定試驗委員被命三十三年二月文部大臣より普通免許狀を授與せらる四十一年五月奉天小學校長として着任今日に至り實科女學校長實業補習學校主事を兼任す大正三年五月帝國教育會より功績狀並に功牌を受領し其他町村團體より功績褒狀又は感謝狀を授與せられたること數回に及べり

夫人 籐子 四十五歲 長男 紀文 二十歲
長女 幸子 二十二歲 二女 文子 十五歲
三女 千代子 十二歲

◎河盛恒治郎　河又分店主（醬油味噌製造販賣業）

原籍　大阪府堺市新在家町三七番地

現住　大連市山縣通一ノ一六（電話九三〇番）

慶應二年十一月十四日生る郷里堺市に於て海產物及肥料商を營む明治三十八年四月家兄の命を受け龜甲又醬油販路視察の爲め大連に來り同七月開店せしも販路思しからず木材、米穀類の販賣に從事し又數十戶の家屋を建築して其の賃借をなせり既にして各軍隊に於て漸次醬油を需要するに至り一方豪商政記公司の主人と特約し支那人の嗜好を促進し全然原價を以て販賣せる結果頗に需要を增加し現今にては南北支那の各都會其他朝鮮露領方面に迄販路を開拓しつゝあり

長女　いく子　二十七歳　次男　吉文　六歳

◎河合藤七　湯淺洋行主任　大連商業會議所常議員　滿洲重要物產同業組合評議員

原籍　岐阜縣武儀郡關町

現住　大連市山縣通二五號地（電話三三四番）

明治四年九月六日生る同三十七年迄獨立經營し三十七年より湯淺商店員となり三十九年四月より大連出張所主任となる

夫人　そミ　四十四歳　長男　諒太郎　二十三歳

◎河合芳太郎　河合洋行主（貿易業）

原籍　愛知縣名古屋市東區呉服町

現住　安東縣大和橋通六丁目四番地（電話一三二番）

明治六年八月十七日生る同三十八年四月安東縣に河合洋行を開設して雜貨貿易及保險代理店等を營む大正元年十二月安東窯業株式會社を創設して其の專務取締役たり又株式會社安東油房取締役を兼ぬ

夫人　千代子　三十歳　長男　誠一　十一歳

三男　健三　六歳　二女　春子　三歳

三女　秋子　一歳

◎河井松之介　北滿製粉會社取締役　哈爾賓居留民會長　松花銀行取締役

原籍　東京府下荏原郡上大崎町八〇五番地

現住　哈爾賓モストワ街（電話四一〇番）

明治元年四月四日生る同十六年外國語學校露語科入學同十九年廢校東京商業學校に轉學後高等商業學校と改稱同二十五年一月退校同六月浦港に赴く二十七年十月病を以て歸朝三十年西比利亞視察に赴く三十二年三井物產株式會社に入り旅順大連に在勤す三十七年の戰役中朝鮮滿洲樺太に出張す三十九年長春出

張所を開始す四十年歐洲出張を命せられ英佛獨の諸國を經て主として歐露各地を視察す同四十一年三月哈爾賓出張所を開始す大正二年三井を退社同年北滿製粉會社を創立し專務取締役に就職今日に及ぶ

母堂 みち子 七十七歲　夫人 理代子 三十九歲
長男 新平 十 歲　次男 弘 二 歲
長女 多喜子 十六歲　次女 玉子 十三歲
三女 淑子 六 歲（家族皆在京）

◉川井平太郎 旅順工科學堂教授 採礦冶金科長 高等官四等 正六位 士族

原籍 東京市麻布區網代町一番地
現住 旅順新市街特權地五五番地（電話二五六番）

明治四年五月十九日生る同三十年七月東京帝國大學工科大學採礦冶金科卒業同年八月宮崎縣日平銅山に奉職同年十月坑業課長、三十六年二月製煉課長となる四十三年五月旅順工科學堂教授拜命同年六月採礦冶金學科長となり同七月歐米各國に差遣せられ今日に至る

母堂 せつ子 六十二歲　夫人 てる子 三十五歲
長女 津多惠 十四歲　長男 芳一 八 歲
二男 清二 四 歲

◉川上賢三 滿洲協同野金會社代表社員 大連市會議員 市民協會幹事 日露協會幹事

原籍 長崎縣○野平一〇七番地
現住 大連市越後町五一（電話二四八番）

元治元年八月十八日佐賀縣唐津町に生る中學を卒業して明治十六年浦鹽斯德に渡航し爾來明治卅一年に至る迄露領沿海州各地に在り主として建築請負業に從事す三十一年より三十七年に至る迄露治下の旅順口に在り主として土木建築請負に從事す三十七年の戰時大連に在り戰後引續き大連に在り主として會社員たり傍ら大連實業會會長たりしが信託會社の一頓と與に退任し爾後現業を專心經營せり

夫人 とみ子 四十五歲　長女 柯枝 十一歲

◉川上俊彥 滿鐵會社理事 總務部交涉局長 日露協會々長 從四位勳三等 士族

原籍 新潟縣岩船郡村上町
現住 大連市兒玉町八番地（電話五二番）

文久元年十二月東京に生る明治十七年七月外國語學校卒業、十九年十月領事館書記生より公使館書記生に進み二十九年五月任公使館二等通譯官、爾來公使館一等通譯官、貿易事務官、公使館二等書記官に歷任す就中貿易事務官として浦港に駐任すること多年

露國通の名あり四十年九月哈爾賓總領事に任じ四十五年三月莫斯科總領事に轉じ大正二年十二月在官の儘南滿洲鐵道株式會社理事仰付けらる、翌三年一月罷官現職に專任す

母堂　よう　六十七歳（在東京）
夫人　常磐　三十七歳　長男　俊秀　十四歳
次男　俊雄　十二歳　長女　花子　八歳
三男　俊三　七歳　二女　清子　五歳
三女　千代子　二歳

◉川口　泉　關東都督府醫院醫員庶務部長兼外科勤務 高等官五等 從六位勳五等 士族

原籍　長野縣北佐久郡小諸町
現住　旅順舊市街一戸町官舍（電話二五二番）

明治十年四月二十九日生る同三十一年十月第一高等學校醫學部醫學科卒業後一年志願として入隊三十四年三月陸軍三等軍醫に任ぜられ東京衛戍病院第一師團軍醫部員東京豫備病院東京第一衛戍病院附として勤務し其間三十七八年戰役衛生史編纂委員を命ぜられ四十四年十二月關東都督府醫院醫員拜命今日に至る

母堂　きん　五十六歳　夫人　露野　三十三歳
長男　邑之　八歳　次男　忠之　三歳
長女　きよ　十二歳　三女　愛子　五歳

◉川邊末吉　株式會社正隆銀行支配人

原籍　茨城縣水戸市上市鐵砲町一一三番地
現住　大連市神明町レ區一〇號（電話一一九五番）

明治四年九月二十五日生る同二十八年東京專修學校經濟科卒業二十九年神戸日本商業銀行に奉職し三十八年第三銀行に轉じ各支店に支店長として勤續すること殆んど十年大正三年十月同銀行大阪支店長より現職に轉じて今日に至る

夫人　みの　四十一歳　長男　正吉　十三歳

◉川北筑太郎　滿洲與信公所主事　士族

原籍　滋賀縣滋賀郡膳所町字中庄一六五番屋敷
現住　大連市監部通三八（電話七六六番）

明治元年二月六日生る本姓岡より川北氏を相續す初め遞信屬たりしが辭して北海道物産商會員となり小樽築港事務を兼務す解散後大倉組に入り石狩川汽船會社を兼掌すそれより日本麥酒株式會社の前身たる札幌麥酒株式會社に轉じ別に印刷事業を起して經營中老父篤病の爲め歸國し終に事業を他人に讓與せり北清事變に際し用達業を始めて宇品に趣き又た横須

賀に轉じ同地鎭守府經理部造船所等の用達及土木請負業を兼營す三十八年旅順鎭守府開廳に付隨行を命ぜられ旅順に於て海軍用達をなし且つ關東都督府の指定請負人となれり四十三年滿洲興信公所代表人中野寅次郎氏の依囑に依り同公所を擔任し翌年石本鏆太郎氏を代表人に推し爾來主事として斯業に從事し今日に至る

夫人　よね子　四十七歳　四女　清子　十四歳
五女　留子　十二歳　(長女、二女、三女は既に歸嫁)

◉川崎流三一　關東都督府屬土木課員

原籍　福岡縣宗像郡上西鄕村
現住　旅順新市街旭川町二番地官舍

明治元年四月二十八日生る同三十二年四月臺灣總督府土木局勤務となり三十九年十二月現任に就き今日に至る

母堂　すゑ　七十九歳　夫人　たけ　四十三歳
長男　滿壽夫　九歳　二男　清　七歳
三男　節三　二歳　長女　秋　十五歳

◉勝浦輌雄　關東都督府中學校長　高等官四等正六位勳五等　士族

原籍　宮崎縣兒湯郡高鍋町字南高鍋
現住　旅順常盤町八八號地　(電話三三一番)

嘉永三年十二月二十八日生る廢藩後藩務に從事す明治六年十二月和歌山縣下にて專ら教育に盡くす同八年和歌山師範學校長を兼ね同校創始の事務に當り後兼務を解かる二十年八月東京府尋常師範學校幹事となる二十三年四月東京尋常中學校長となり三十一年より四十二年迄全國公立中學校長互選の結果五回高等教育會議々員仰付らる四十二年四月關東都督府中學校長兼教諭拜命四十一年三月文部大臣より多年教育に從事し勤勞少なからざるにより金二百圓下賜せらる大正三年五月帝國教育會長より多年中等教育に從事し功績尠からざるに依り評議員會の決議を以て帝國教育會功牌を贈らる

夫人　直子　五十歳　長男　圭　二十歳
二男　卅一郎　十七歳　長女　春子　十四歳
二女　望子　十一歳　三女　博子　八歳

◉勝本永次郎　合資會社高田商會大連出張所主任　士族

原籍　香川縣高松市兵庫町
現住　大連市西公園町ク區四〇號地　(電話二七一番)

明治十四年八月三十日生る同四十一年東京帝國大學

工科大學機械科卒業同年高田商會に入り大正三年九月大連支店主任として渡連今日に到る

母堂　かつ子　夫人　にゐ子

◉勝弘貞次郎　奉天勝弘農場主（農業及精米業）

原籍　兵庫縣神戶市神戶元町一丁目五番地
現住　奉天西一條街二十二號地（電話二五九番）

明治二年五月二十一日大阪府下豊能郡細河村に生る地方の普通小學卒業後神戶商業學校及大阪泰西學館等に學び二十五年五月神戶にて雜貨及天產物の貿易業を營む卅一年上海に支店を開設し一箇年にして閉鎖せり其後淸國貿易を中止し專ら神戶に於て貿易業に從事す三十八年五月陸軍大臣の允許を得て滿洲商業視察の爲め渡來し各種事業を試みたるも永遠の志望に副はず四十一年滿鐵會社土地貸下規則に基きて農場を借入れ種々試驗の結果四十三年に至り水田の有望なるを確信し同年十一月農場を開設し之れが經營に任じて今日に至る

夫人　たま子　三十三歲　長女　やゑ子　七　歲
次女　さだ子　三　歲

◉嘉納二治　安東新報社理事

原籍　兵庫縣武庫郡御影町ノ內御影村
現住　安東縣安東新報社內

明治十三年三月七日生る同三十九年安東新報の創立以來社務に從事し外交記者たり同四十一年十一月別に安東每夕新聞を興して之れが社長たりしが大正元年九月協議の上安東新報と併合し之れが理事として專ら外交方面に立ちつゝ今日に至る

◉鎚介靈鎧　關東都督府醫院醫官、婦人科部長　高等官四等正六位勳六等　士族

原籍　新潟縣長岡市長五町七番地
現住　旅順新市街鮫島町官舍

明治十一年二月廿一日生る同卅七年十二月東京帝國大學醫科大學卒業同卅八年三月陸軍三等軍醫に任ぜられ以來東京豫備病院、樺太守備軍、東京衞戍病院等を歷任し卅九年九月休職同十月より東京帝國大學醫科大學副手及び助手勤務四十一年六月松山病院婦人科主任、同副院長を經て四十三年一月關東都督府醫院醫員に任ぜられ四十四年五月同醫院醫長拜命今日に至る

夫人　たつ　三十二歲　二男　修德　八　歲
三男　尚德　六　歲　四男　四郎　三　歲

五男　元徳　一　歳

● 上村重傳　大連海關檢査官

原籍　高知縣長岡郡東豐永村川井
現住　大連市若狹町海關官舍

明治四年一月四日生る同二十五年第三高等學校醫學部藥學科を修了す二十八年稅關に入り歷進して神戶稅關鑑定官補に任じ四十年大連海關開關と與に大藏省の推薦にて來連し現職にあり

父君　房造　七十八歲　母堂　波津　六十五歲
夫人　榮子　四十歲　二女　輝子　十六歲
三女　千鶴子　十三歲　四女　田鶴子　十一歲
五女　清子　八歲　六女　倭子　四　歲
長男　博美　二　歲

● 彼末徳松（カノスエ）　鴨綠江採木公司技師 從七位勳六等功五級

原籍　岐阜縣稻葉郡加納町
現住　安東縣鴨綠江採木公司社宅

明治十一年八月二十三日高知縣高知市に生る同三十一年東京帝國大學農科大學乙科林學科卒業同年宮內省御料局技手に任じ三十二年兵役の爲め辭職一年志願兵として入營三十三年宮內省御料局技手に復職す三十五年岐阜縣立農林學校教諭同年步兵少尉に任ぜらる三十七年征露の役旅順攻圍軍に參加して第一回旅順總攻擊に負傷內地に後送され陸軍步兵中尉に昇任す三十八年軍用木材廠附として鴨綠江森林事業に從事四十一年鴨綠江採木公司技師となり今日に及ぶ

夫人　さき子　三十歲　長女　あい子　八　歲
次女　のぶ子　六　歲

● 神谷豐太郎　旅順工科學堂教授 高等官三等正五位勳五等　士族

原籍　東京府牛込區若松町四三番地
現住　旅順新市街日進町官舍　電話三七三番

明治元年六月十五日生る同二十六年七月東京帝國大學理科大學純正化學科卒業同年九月より二十八年八月迄東京高等商業學校講師二十八年九月より三十年四月迄第二高等學校教授三十年七月より三十六年九月迄第五高等學校教授となり同年同月文部省留學生として獨逸に留學三十八年十二月歸朝三十九年四月熊本高等工業學校教授となる四十二年十二月撫順工科學堂教授に轉任今日に至る

夫人　春子　四十歲　長女　千代子（他嫁）

◉神谷　薫　露國領事館通譯　勳六等　士族

原籍　北海道函館區大森町二二番地
現住　大連露國領事館内（電話一三三七番）

明治十六年十二月二十六日三重縣關町に生る同三十七年東京外國語學校露語科卒業同時に日露戰役に際會し通譯官として從軍出征す功に依り勳六等を賜はる四十年大連に露國領事館開設せらるゝや同館通譯となり今日に迨ぶ

◉神成季吉　三井物產株式會社大連支店次席　株式會社三泰油房監査役　遼東汽船會社監査役　從七位勳六等　士族

原籍　福島縣田村郡三春町
現住　大連市播磨町三八番地（電一三三〇番）

明治八年二月二十八日生る同三十年東京高等商業學校卒業三十一年一年志願兵として入營同年日本郵船株式會社に入る三十七、八年戰役に際し大本營陸軍幕僚附にて出征三十九年日本郵船株式會社を辭し四十年三井物產株式會社に入りて今日に及ぶ

母堂　この　五十九歳　夫人　春野　二十八歳
長男　芳男　七　歳　長女　知惠子　八　歳
次女　滿壽子　三　歳

◉神田重一　橫濱正金銀行大連支店計算主任

原籍　大阪市西區京町堀通二丁目二九番地
現住　大連市播磨町々區二六號地

明治七年三月十一日大分縣玖珠郡森町に生る同二十五年五月橫濱正金銀行に入り二十九年香港支店に轉じ三十八年八月大阪支店詰となる三十九年十一月大連支店に轉任今日に至る

父君　謙次　六十六歳　母堂　たか　六十　歳
夫人　もと　三十五歳　長女　信子　九　歳

◉柏原孝久（號門老）　遼東新聞長春支局長　大阪毎日新聞通信員　士族

原籍　東京市牛込區早稻田鶴卷町二九番地
現住　長春鐵道附屬地東二九區四二號地（長電話三四番）

明治十一年六月二十三日生る同三十六年より二六新聞社電報通信日本通信社等に勤務し三十九年四月同志と共に東亞通信社を東京に創立して滿洲に來り同社の引揚げと與に四十年九月遼東新報社に入り長春支局の設置さるゝや其支局長となり又大阪毎日新聞社通信員たること七年に及ぶ此間長春日本人會の設立に盡力して其評議員となり又明治四十年居留民會の設立さるゝや其常議員となり理事を兼掌し四十三年

副會長となり四十五年鐵道附屬地に移居すると共に民會を辭す近く內蒙古事情及外蒙古と露國關係に付き編纂中なり

◉柏田鍵太郎　關東都督府通信書記奉天郵便局電信課長　勳七等　士族

原籍　新潟縣岩船郡村上本町
現住　奉天郵便局官舍（電話三〇〇番）

明治十年六月一日生る同二十九年三月東京郵便電信學校電信科卒業と同時に郵便電信書記拜命三十二年遞信屬となる三十五年九月東京郵便電信學校書記兼助敎に轉任三十七年九月電信隊附として日露戰役に參加し功に依り勳七等下賜三十九年九月關東都督府通信書記拜命四十四年奉天郵便局通信課長となり翌四十五年四月奉天郵便局電信課長に轉じ今日に至る

夫人　ちよ　二十七歲

◉粕谷好助　天理敎大連宣敎所長　勳六等

原籍　埼玉縣入間郡藤澤村一五番地
現住　大連競賣地區一ノ三區ノ一ノ三、四、五、號地

明治十年十一月十二日生る同三十四年東京外國語學校卒業同時に農商務省より綿布綿糸研究の爲め天津に派遣さる三十六年辭して第七師團に附隨し語學敎師として北海道に航し居ること一年日露戰役に際會し陸軍通譯として出征戰功により勳六等を下賜せらる去る明治二十六年頃より天理敎信者となり同四十三年二月終に脫俗して天理敎布敎師となり今日に到る

父君　俊平　五十七歲　母堂　ふみ子　五十六歲
夫人　すゑ子　三十歲　長男　好彦　七歲

◉笠島陽三　南滿醫學堂敎授兼奉天醫院醫長產婦人科部長

原籍　新潟縣中頸城郡高田町大字上小三〇番地
現住　奉天新市街

明治七年三月八日生る同三十七年十一月京都帝國大學醫科大學卒業同時に同大學副手囑託三十八年二月醫術開業免狀下附同年十月同大學醫院看護婦見習科講師囑託三十九年同大學助手となる其後高知縣下の私立民田醫院產婦人科長同縣衞生會產婆科講師等の職を經て四十一年五月滿鐵會社醫長被命四十二年獨逸留學大正元年十一月歸朝大正二年一月奉天醫院產科婦人科部長兼南滿醫學堂敎授を命ぜられ今日に到る

夫人　しん子　三十五歳　長男　陽　十二歳
二男　馨　一歳　長女　靜枝　八歳
二女　喜美子　六歳　三女　滿代　二歳

◉唐津準吉　滿鐵會社大連醫院醫長心得　從七位　士族

原籍　京都府下京區三條通白川橋東三丁目夷町二八番地
現住　大連市山城町八ノ一號地

明治十四年四月十六日生る同三十六年京都府立醫學專門學校卒業後公立彥根病院、臺灣臺北醫院、日本赤十字社臺灣支部醫院等に歷任し四十二年臺灣總督府醫院醫員被命同時に高等官七等從七位に叙せられ四十三年五月滿鐵會社大連醫院醫員被命大正元年十二月獨逸留學同二年二月歸任三年醫長心得となる

夫人　しな　三十歳　長男　惟義　六歳
三男　惟信　三歳

◉海江田新之丞　海江田商會代表人（滿洲特產物並ニ食糧品雜貨業）滿鐵諮問委員

原籍　鹿兒島市荒田町一五四番地
現住　公主嶺鮫島通（電話長八番　九番）

明治十三年七月十一日生る同三十九年一月渡滿し昌圖附大牛圈駐屯騎兵第十八聯隊の酒保となる同年十月同隊の公主嶺に移轉すると同時に同地に轉住し同隊の營內酒保及副食物並に消耗品納入に從事す後酒保官營となるに及び現在所に移轉し、食料品諸雜貨の販賣を營む四十四年四月より獨立守備第一大隊の用達を開始し四十年十一月より大豆、豆粕其他滿洲雜穀の販賣を開始す目下大連奉天、長春に出張所を設け專ら特產物の販賣を營む

母堂　さこ　五十五歳　夫人　芳子　二十八歳
男　芳雄　三歳　弟　榮之助　三十四歳
同上　直議　二十九歳

◉可兒鶴一（カニ）　退役陸軍砲兵大尉戰利品陳列場主管　正七位勳五等　功五級

原籍　岐阜縣大垣町字郭
現住　旅順舊市街大阪町陳列場內（電話一二二五番）

明治九年九月二日生る同三十年陸軍士官學校入學三十三年陸軍砲兵少尉第九師團野砲兵第九聯隊附となる日露戰役に旅順攻圍軍に參加し三十八年三月一日奉天省四方臺に於て砲彈負傷の爲め終に左脚を喪失し四十一年一月退役四十三年八月陳列場主管となる陳列場參觀の戰跡觀光團特に學生團の到るあれば義足に縋りつゝ親ら各砲壘を案內し其實歷せる當年の戰壚を指點說話して以て報國の熱情を青年の心血に

注ぎつゝあり

父君　春垰　七十歳　　母堂　花　五十歳
夫人　節　三十一歳　　長男　一郎　十二歳
次男　二郎　七歳　　三男　三郎　四歳
長女　淑子　十歳　　次女　きみ子　一歳

鎌田彌助　滿鐵會社奉天公所次席　勳六等　士族

原籍　鹿兒島縣揖宿郡指宿村西方
現住　奉天大南門內社宅（電話六一番）

明治七年十月十九日生る同三十二年東京外國語學校清語科卒業三十三年八月北清事變に從軍し三十五年四月保定府警務學堂教習に招聘せらる三十六年五月西太后光緒皇帝皇后陛下に特に謁見を賜はり勳章を授贈せらる三十七年二月陸軍通譯となり大本營附特別任務に服す三十九年二月北京高等巡警學堂教習內務部教練所教官兼務となる四十年五月滿鐵會社に入り奉天公所に勤務す安奉線改築工事の際購地第一分局長兼總局副長拜命工事終了と同時に復任今日に至る

夫人　きく　二十八歳　　長女　亨　五歳
次女　元　二歳

甲斐九十九　大連海關檢査官兼外勤部長

原籍　長崎市樺島町五七番地
現住　大連須磨町海關官舍（電話一〇五九番）

明治五年八月廿三日生る壯年より英米人に就き英語を研究す明治二十七年稅關に入り長崎稅關鑑定官に任ぜられ四十年大連海關開始と與に大藏省の推薦に依り同關檢査官となり四十四年十月外勤部長心得を命ぜらる

夫人　しき子　三十八歳　　長男　清太郎　十五歳
次男　泰次郎　九歳　　三男　禮三郎　五歳
次女　てる子　七歳　　三女　すみ子　三歳

貝瀬謹吾　滿鐵會社運輸部運轉課長兼鐵道從事員養成所主事

原籍　東京市下谷區竹町一二番地
現住　大連市兒玉町八番地（電話二九七番）

明治十一年三月二十一日生る本姓島野後貝瀬家を繼ぐ明治三十四年京都帝國大學理工科機械科卒業後鐵道技手に任ぜられ三十七年五月技師に昇任日露の役に野戰鐵道提理部運轉班車輛長として渡滿し四十年四月滿鐵會社に入りて今日に至る

母堂　よね　六十九歳（東京）

夫人　ふゝ　二十四歳　長女　壽子（ヒサ）　三歳
次女　富貴子　二歳

◉貝原收藏　東亞煙草會社大連販賣所主任

原籍　福岡縣福岡市瓦町五七番地
現住　大連市大山通二の六七（電話二七三番）

明治十三年十二月三日生る同三十三年福岡中學修猷館卒業三十八年臺灣協會專門學校を卒業し江副廉藏氏の經營せる江副商店煙草部に入り滿洲勤務となる三十九年東亞煙草株式會社創立と同時に前記煙草部と共に東亞煙草會社に轉じ現今に至る

母堂　はつ　五十三歳　夫人　たきを　二十七歳

◉筧　文造　筧商會主　建築材料、貿易業　匿名組合大東公司代表者

原籍　東京府下豐多摩郡澁谷町三〇七番地
現住　大連市山縣通五五號地（電話一五二番）

明治六年十月十七日生る同三十八年九月渡滿同四十四年迄大連市伊勢町藤原商會支配人を勤む同年より大連市信濃町岩佐洋行の支配人となり大正三年十一月辭職同時に筧商會を開設し今日に及ぶ

夫人　すゞ子　三十二歳　長男　相郎　十三歳

◉樫村フヂ　樫村洋行主（時計商）

原籍　熊本市下洗馬町一丁目
現住　大連市伊勢町四九號地（電話七三八番）

明治三年一月鹿兒島市に生る明治二十四年樫村家に嫁す明治三十八年渡滿し主人死亡後は單身之を經營して今日に至る

長男　健次　二十一歳

◉片山　嵓　滿鐵會社中央試驗所々員應用化學科

原籍　東京市芝區白金三光町二七三番地
現住　大連市伏見臺四五ノ一

明治十四年一月一日生る明治三十六年六月東京帝國大學醫科大學藥學科選科修業後同校助手拜命三十八年九月内務省傳染病研究所技手拜命同時に東京帝國大學醫科大學にて醫化學研究被命明治四十年十一月滿鐵會社に入りて現職に就く

母堂　はなゑ　四十九歳
夫人　みわ　三十三歳　長男　浩弌　八歳
次男　健二　六歳　三男　力雄　四歳

◉吉田豐次郎　關東都督府事務官旅順民政署長　高等官四等勳五等

原籍　北海道瀬棚郡瀬棚村大字瀬棚
現住　旅順市學臺一番地官舍（電話二一番）

明治六年四月二十六日山形縣飽海郡酒田村に生る同三十五年七月臨時臺灣土地調査局屬拜命三十八年四月税務監督局税務屬に轉じ同年五月又關東州民政署屬に轉じ同六月十七日大連上陸三十九年九月關東都督府通信事務官補兼關東都督府事務官に昇任し四十一年十一月通信事務官補廢官四十四年五月旅順民政署長に任命今日に至る

母堂　よしの　六十五歲　夫人　綾重　三十歲
男　金藏　十　歲

吉田　茂　在安東領事館領事　高等官五等　從六位勳六等

原籍　東京府豐多摩郡澁谷村八八番地
現住　安東縣領事館內官舍

明治十一年九月生る同三十九年東京帝國大學法科大學政治科卒業三十九年九月外交官及領事館試驗合格同年十一月領事官補高等官七等四十年二月從七位奉天在勤四十一年八月清國皇帝陛下より贈與されたる三等第一双龍寶星を受領し及び佩用するを允許せらる同年十一月倫敦在勤高等官六等四十二年三月正七位同年十二月大使館三等書記官伊國在勤四十四年十二月高等官五等四十五年三月從六位大正元年八月韓國併合記念章を賜ふ同年領事に任じ安東在勤を命ぜられ關東都督府事務官を兼任す同二年九月勳六等單光旭日章を授與さる同年十月伊國皇帝陛下より贈與されたる王冠第四等勳章を受領し及び佩用するを允許せらる

夫人　いさ子　二十六歲　長女　櫻子　五　歲

吉田　鎔　關東都督府通信事務官補　鐵嶺郵便局長　高等官六等從六位勳六等

原籍　和歌山縣和歌山市湊通町北四丁目一七番地
現住　鐵嶺中央街官舍　電話五〇番

萬延元年五月一日生る明治九年小學校教員十二年和歌山日々新聞記者同年和歌山中學校及和歌山師範學校教師十五年富山縣高梁中學校教師十六年和歌山縣訓導十七年驛遞局雇三十三年辭職と同時に神戶日本貿易銀行庶務課長に就任三十四年辭職三十六年名古屋郵便局庶務課長に就任三十七年大分郵便局長四十年旅順郵便局長として赴任四十四年大連通信管理局庶務課長に任ぜられ大正二年現職に轉す

夫人　いそ子　四十八歲　長男　達一郎　三十歲
次男　正元　二十四歲　六女　節子　七　歲

◉**吉倉汪聖**（號洗兵庵）遼東新報主筆　士族
原籍　石川縣金澤市味噌藏町下中町四〇番地
現住　大連市出雲町ワ區一八號地

明治元年十一月三日生る同二十三年初めて朝鮮滿洲露領の間に遊び後釜山に足を留め二十六年東亞貿易新聞を同地に興す故山座圓次郎氏最も力を之に致たす又二十九年元山に元山時事を創刊す此間二十七年春末に於て朝鮮東學黨を同志十三名と共に說て兵を擧げしめ一進會隆興の地を作す三十五年東京に黑龍會を組織して專ら露國事情を日本に紹介す三十六年伊藤、山縣、井上諸公の贊助を得て日露協會を東京に創立す三十八年以後現職に就き今日に迨ぶ

夫人　豐子　三十二歲　長男　成一　十八歲
次男　大一　十二歲　三男　守人　一　歲
長女　しづ子　七　歲　次女　久子　五　歲

◉**吉雄**（ヨシヲ）**豐**（ユタカ）　松花銀行取締役兼支配人
原籍　大分縣東國東郡上國崎村
現住　哈爾賓プリスタニ松花銀行內（電話七三五番）

明治十六年八月八日生る同四十年外國語學校卒業同年三井洋行に入り營口鐵嶺大連長春の勤務を經て大正三年松花銀行設立するや同行に入り現職に就く

父君　長平　七十六歲　母堂　さい子　七十三歲（在鄉）
夫人　可奈子　二十四歲

◉**吉村秀策**　關東都督府中學校囑託生徒監　體操科主任　陸軍步兵中尉　從七位勳六等
原籍　大分縣宇佐郡四日市町五四九番地
現住　新旅順大迫町官舍

明治十一年二月十日生る同三十一年三月大分尋常中學校卒業三十八年十二月以來大分縣師範學校助教諭心得鹿兒島縣師範學校教諭心得兼寄宿舍舍監及兵庫縣立第二神戶中學校教諭に歷任し四十四年師範中學高等女學校體操教員免許狀を受く大正三年八月現職を囑託せらる

父君　陸藏　五十八歲　母堂　しも　五十歲
夫人　澄子　二十八歲　長男　武夫　八　歲
次男　忠夫　六　歲　三男　孝典　三　歲

◉**吉屋種廣**　滿鐵會社築港事務所職員　士族
原籍　山口縣阿武郡萩
現住　大連市近江町E區五號ノ二

明治七年一月廿三日生る同二十四年東京工手學校卒業、同年より三十三年迄鐵道局、山陽鐵道紀和鐵道

會社に奉職。三十三年鐵道局に復歸し三十五年技手に任じ鹿兒島線建設工事に從事す、三十八年野戰鐵道提理部附及安奉線鐵道監部附として渡滿す四十年三月鐵道技手に任じ在官の儘南滿洲鐵道株式會社に入る大正二年十二月三十一日廢官引續き在社

父君　種萬　八十歲　夫人　貞子　三十歲
長女　俊子　十三歲　長男　秀一　八歲
次男　博輔　六歲　三男　昌雄　四歲

◉吉野直治　遼東新報社會計主任

原籍　石川縣金澤市池田町立町五番地
現住　大連市播津町ユ區二八番地

明治七年七月二十日生る同三十八年十一月遼東新報社に被聘渡連し庶務を擔任す四十年七月遼東新報奉天分局竝に同社經營の奉天公報社の事務主任に轉ず同年十一月本社會計主任に復任し勤續今日に至る去る明治四十二年四月南滿洲鐵道唱歌を著作發行し同年七月再版發行す大正四年十月十二日遼東新報發行人を認可さる

母堂　すゑ　六十四歲　夫人　きく　四十歲
長男　金眞　九歲　次男　治夫　七歲
三男　加生　三歲　長女　嘉枝　三歲

◉吉野越次　貸家業　大連禮裝株式會社々長　株式會社花月館社長　大連市會議員　大連商業會議所常議員　大連市民協會幹事　大連貸家業組合長

原籍　千葉縣香取郡多古町
現住　大連市若狹町ソ區四七號地　（電話八四〇番）

慶應二年一月二十五日生る多年役人生活を營みたりしが明治三十一年土木建築業に轉じて中央線の工事を請負ふ三十七年九月渡滿四十二年請負業を廢し爾來貸家業を營み現に貸家業附屬管理部監督たり

夫人　いちい　四十八歲

◉吉野瀧二郎　滿鐵會社―鍛鐵工科第一分科員

原籍　東京市芝區櫻川町一七番地
現住　大連市外沙河口三丁目北八號社宅

明治七年十一月二十八日生る同二十年組立工として新橋工場に入りて爾來勤續す三十七年五月野戰鐵道附工長を命せられて渡滿し滿鐵會社成立の際技手として入社し今日に到る

夫人　さめ　三十三歲　長男　博　六歲
次男　仁　四歲

◉米岡規雄　米岡法律事務所主（辯護士）旅順市會議員　關東洲辯護士會副會長　勳八等　士族

原籍　鳥取縣鳥取市元鍛物町二四番地

現住　旅順鯖江町八番地　（電話二六〇番）

明治四年二月五日生る本姓は谷口氏二十一歳の時鳥取縣の判任官見習となり翌年縣屬に採用せらる明治二十九年四月西伯郡書記に轉じ同年十二月再び縣屬に轉ず三十年七月東京葉煙草專賣所屬大藏省主税局經理課に勤務す三十一年九月法政大學入校三十四年七月卒業三十六年十二月辯護士試驗に及第す三十九年二月關東州民政署屬旅順民政署財務課長となり四十年十一月休職と同時に辯護士開業今日に至る

夫人　石子　四十歳　長男　敏雄　二十二歳
次男　郁　十二歳　長女　萬壽子　十歳

◎米倉清族　滿鐵會社撫順炭坑長　勳六等　工學博士

原籍　東京府荏原郡大崎村
現住　千金寨炭坑社宅

文久三年一月十六日生る明治十九年東京帝國大學工科大學採鑛科を卒業して北海道廳技師を拜命す後辭して北海道炭鑛鐵道會社に入り多年勤務の後八幡製鐵所囑託に任命さる明治四十四年滿鐵會社に招聘せられて現職に就く大正四年工學博士を授けらる

◎横田多喜助　滿鐵會社瓦房店經理係主任　士族

原籍　三重縣津市中新町六二番屋敷
現住　瓦房店東街社宅

明治十四年十月二十一日生る長じて三重縣廳に奉職し四十年九月渡滿して南滿洲鐵道株式會社公主嶺出張所に勤務し翌四十一年五月現職に轉じ今日に及ぶ

父　民藏　六十六歳　長男　部茂　十五歳
次男　武史　十二歳　三男　義夫　七歳
長女　喜代子　十三歳　次女　千代子　十歳

◎横山信毅　大倉組土木部主任　滿洲土木建築業組合副組合長　勳六等功七級　士族

原籍　茨城縣水戸市下市町[illegible]町
現住　大連市加茂川町シ區二　（電話二三二二番）
奉天新市街西三條七號地　（電話三四八番）

明治八年十二月二十二日生る同二十七年三月茨城縣立中學校卒業翌年十二月一年志願兵として第一師團第二聯隊入營二十九年十一月滿期退營三十一年東京私立攻玉社工學校入學同年歩兵少尉に任せらる三十二年攻玉社卒業同年十一月より大倉組に入り三十九年五月同組滿洲一圓の土木請負主任となる三十七年七月日露戰役に出征して三十八年十月中尉に進む三十九年二月凱旋後引續き大倉組に在りて現職に在り

父君 信好 六十四歳 夫人 定子 三十五歳
長男 信也 十七歳 次男 信吾 十四歳
三男 信平 六歳 長女 好子 十二歳

◎横瀨千里 榎本商店大連主任 士族

原籍 福井縣阪井郡丸岡町高畠
現住 大連市武藏町二號地 （電話一四三七番）

明治六年生る同二十八年三井物産本店に勤務し專ら米穀及肥料を擔任す三十八年辭して横濱市に於て獨立米穀及肥料商を營み大正三年中止す同時に榎本商店の業務を囑託せられ大正四年一月同商店主任となり今日に迨ぶ

夫人 よし子 二十九歳 男 二名 女 二名

◎横井謙介 滿鐵會社技術局建築課員

原籍 愛知縣碧海部安城村
現住 大連市霧島町才區二五號地

明治十一年十一月二十六日生る同三十八年東京帝國大學工科大學建築科卒業同年大阪住友臨時建築部に奉職四十年三月南滿洲鐵道株式會社に入りて今日に至る

父君 俊藏 六十四歳 夫人 喜美子 二十三歳

男 一 四 歳

◎余村松之助 奉天光明洋行主（紙類印刷材料業） 奉天商業會議所議員

原籍 島根縣八束郡津田村字西津田四一五番地
現住 奉天城内大南門裡大街 （電話四二一九番）

慶應三年九月二十七日生る明治十七年松江市中學校卒業二十年陸軍教導團工兵科入學二十二年卒業二十八年三月より巨姫事件迄朝鮮政府軍部補佐官たり三十年三月實業界に入り臺灣基隆にて獨立營業す三十八年二月大連を經て營口に入り商業を營む四十年春より奉天に高等雜貨店蓬萊號を開設す大正四年六月一日株式會社光明洋行奉天支店の全部を讓受け商號を奉天光明洋行と改稱し引續き營業す

夫人 智賀子 三十九歳

◎田原禎次郎（號天南） 株式會社滿洲日日新聞社主筆兼監査役 大連新聞記者團幹事

原籍 山形縣西村山郡谷地町字北口
現住 大連市山縣通二二號地 （電話四九番）

明治元年十一月七日生る宮城縣本吉郡津谷村小學校卒業後仙臺片平町岡萬里翁の家塾に入りて漢學を修め更に東京芝區愛宕下の岡千仭塾に遊ぶ年餘にして本郷臺町の獨逸語學校に入り更に神田西小川町の獨

逸學協會に轉じ普通科專修科兩科を卒業し飜譯著述を業とす明治三十四年臺灣日日新聞の招聘に應じて渡臺し記者編輯長、主筆となり四十三年筆を載せて歐洲に遊び殊に獨都伯林に在ること一年獨逸の社會狀態を研究す歸朝後滿洲日日新聞の副主筆より主筆に進み今日に至る著書として膠州灣、露國の暗黑面露國皇室の内幕、光榮の日本、西太后、蒙古征歐史等あり世に行はる

夫人　りう子　男　丈夫　徹夫　文夫
女　菊子　正子

田中千吉　關東都督府秘書官文書課長 高等官五等正七位

原籍　東京市芝區金杉新濱町一番地
現住　旅順朝日町二丁目七番地（電話四三三番）

明治十八年三月十五日福井縣小濱町に生る同四十三年東京帝國大學法科大學政治學科卒業同年十一月警視廳警部拜命四十四年四月警視に昇任高等官七等富阪警察署長に補せらる大正二年七月關東都督府秘書官（高等官六等）に又大正四年秋高等官五等に昇敍す

父君　熊吉六十六歲　母堂　しか六十四歲（以上在京）
夫人　清子　二十三歲　男　泰　二　歲

田中剛輔　都督府警視 從六位勳六等 大連民政署警務係長

原籍　新潟縣岩船郡村上町
現住　大連市佐渡町三一號地（電話二八番）

慶應三年七月二十五日生る鄉里新潟に於て官公職に在ること六年爾來臺中縣警察部に五箇年臺灣總督府警察本部に五箇年奉職し明治三十八年關東州民政署屬兼警部に任ぜられ翌三十九年九月關東都督府警視に昇任同時に旅順民政署警務課長となる夫れより遼陽、營口、奉天の各警務署長に歷任し四十二年九月大連民政署警務掛長となり今日に到る

母堂　八重子　七十歲　夫人　繁子　四十歲
長女　政子　二十三歲　長男　精一　十三歲
二男　貫一　九　歲　三男　守一　七　歲
四男　敏夫　五　歲　五男　五郎　五　歲

田中末雄　田中商會主（海運及倉庫業） 大連汽船會社取締役 龍口銀行董事 大連市會議員 大連商業會議所常議員

原籍　三重縣河藝郡箕田村
現住　大連市霧島町レ區三一號地（電話一四四九番）

明治三年四月三日生る同二十一年末米國カルフォニアに到り私立桑港商業學校に入學卒業後商店に入り二十八年二月歸朝し安田烏羽造船所支配人たること

三年横濱富多山商會汽船會社に居ること二年にして三十五年芝罘に來り船舶業を開始す三十九年十二月大連に轉任し爾來船舶業に從事す

夫人	壽子	三十三歲	長男	勇吉	十二歲
次男	雄二郎	九歲	三男	雄三郎	七歲
五男	五郎		長女	清子	十六歲
二女	元子	十五歲	三女	禮子	十歲
四女	信子	五歲			

●田中元次郎　滿鐵會社撫順驛長　撫順炭坑運炭課兼務、撫順區諮問委員　勳八等　七級

原籍　福岡縣福岡市奥堀町六七番地
現住　撫順吉野町社宅社内　（電話六四一番）

明治七年一月一日生る同二十二年十二月九州鐵道會社に入る三十七年十二月野戰鐵道附として渡滿す四十年四月滿鐵會社に引繼き後任運輸部運輸課勤務公主嶺在勤、四十二年奉天在勤、大正二年四月撫順驛長を命ぜられ今日に及べり

母堂	つち子		夫人	雄子	三十六歲
長男	秋介	十七歲	二男	次男	十五歲
三男	滿雄	十一歲	長女	公子	八歲
次女	春子	六歲	三女	秀子	四歲
四女	ふで子	二歲			

●田中行善　本派本願寺安東出張所主任　滿洲開教師　親授二等

原籍　島根縣美濃郡鎌手村
現住　安東縣本派本願寺出張所内　（電話二二二番）

慶應二年一月二十七日生る明治二十八年十二月本派本願寺大學林卒業二十九年七月臺灣開教使受任臺北に駐在三十五年七月辭任同年十一月本派本願寺第五弘教中學校監事兼教員受任三十七年七月軍隊布教員受任後備兵第九旅團出征に從軍し戰地に勤務す三十八年十二月同旅團の凱旋と共に歸國三十九年一月滿洲開教使受任安東縣に駐在今日に及ぶ臺灣開教、從軍布教、滿洲開教の功績に依りそれ〳〵褒賞を受く

●田口富藏　救世軍士官中校　遼東部長兼婦人及育兒ホーム監理

原籍　東京市京橋區銀座二ノ一番地
現住　大連市播磨町下區一番地　電話一四四〇番）

明治十九年三月十五日和歌山縣海草郡内海村に生る本姓は重根氏同三十三年十月和歌山中學校三學年にて退校翌年四月基督教を信じて更生し三十六年三月救世軍士官候補生となる三十七年四月東京救世軍士官養成所卒業三十八年五月より同年十一月迄救世軍見學の爲め濠洲巡回同年十二月倫敦救世軍萬國士官

學校に留學三十九年十二月同校卒業歸朝大正元年十二月大連に着任前四ヶ年間は東京救世軍本營に在りて山室大佐の秘書官たりし外一年間は救世軍士官學校教官を勤む其他數年間は桐生本郷下谷神戸横須賀等にて専ら傳道に從事したり

夫人　なか子　二十五歳　長女　允子（ノブ）　四　歳

田沼義三郎　滿鐵會社總務部事務局職員　大連汽船會社社長

原籍　神奈川縣横濱市南太田町一七六五番地
現住　大連市乃木町七ノ二（電話五七番）

慶應三年一月十五日新潟に生る明治二十七年分家す四十三年一月渡滿々鐵會社に入り作業所長兼旅館監督たり四十四年六月滿鐵會社を代表して營口水力電氣會社長となり大正四年二月辭して大連汽船株式會社長を勤む

夫人　たま　三十八歳　長男　富士太郎　十九歳
長女　峰子　十五歳　二女　みち子　十三歳
二男　弟次郎　八　歳

田岡正樹（號淮海）　滿鐵會社總務部調査課職員兼南滿醫學堂講師、教育研究所講師、南滿洲工業學校附設補習學校夜學部講師　士族

原籍　高知縣土佐郡小高坂村
現住　大連市攝津町ユ區二七號

慶應元年十月七日生る幼少より漢學を修め大學豫備門に入る中途退學し各處の中學校に教鞭を執ること數年三十六年七月上海同文書院の教授となり三十九年四月退任五月保定陸軍學堂に招聘せられ四十三年三月迄勤務同年七月滿鐵株式會社に入り爾來主として教育方面に勤務す漢學に精通し詩を能くし淮海詩伯として推さる

夫人　美惠子　四十三歳　長女　美保　十七歳
次女　喜代　十四歳　長男　正明　十一歳

田村幸作　領事官補在安東領事館　高等官七等從七位

原籍　山口縣大島郡家室西方村第一一五番地
現住　安東縣三番通領事館官舍

明治二十年三月生る同三十九年四月山口高等商業學校を半途退學し四十年八月外務書記生試驗に合格して四十年九月書記生に任じ漢口在勤同年十月新嘉坡在勤四十三年十一月文官高等試驗合格外務屬に任す四十四年七月取調局勤務大正二年六月政務局第二課勤務大正三年十月外交官及領事官試驗に合格し現職に任せらる

妻　みよ子　二十一歳　長男　幸久　一　歳

◉田村貞一　大阪毎日新聞記者奉天特派員　正八位

原籍　大阪市東區船越町一丁目一七番地
現住　奉天十間房（電話四一〇五番）

明治十三年八月生る同三十三年大阪府立天王寺中學校卒業三十八年東京慶應義塾大學理財科卒業同年大阪毎日新聞社に入る四十年一月志願兵として入隊四十二年陸軍三等主計に任し同時に豫備役に編入さる四十四年六月現職に就き今日に到る

夫人　みつ子　二十五歳　男　賜一　三　歳

◉田村忠一　東亞醫園主（醫油製造業）　營口硝子製造株式會社取締役

原籍　山口縣阿武郡萩町御許町一二番地
現住　營口二道街（電話一〇二番）

明治十二年二月一日生る同二十三年明倫高等小學校高等科三學年修業直ちに私立萩學校入學二十七年七月同校卒業同年九月山口高等中學校入學二十八年退學上海に渡り郵便局に奉職三十年蘇州博習書院に入學三十二年卒業農商務省海外實業練習生を命せられ同年牛莊に來り三十五年滿期同年十月現業を開始して今日に到る

父君　知輔　五十九歳　母堂　由加子　五十四歳

夫人　夏子　二十七歳　長男　忠彦　三　歳

◉田邊敬吉　滿鐵會社大連醫院瓦房店分院長　關東都督府囑託　正八位勳六等

原籍　廣島縣比婆郡西城町字入江二番邸
現住　瓦房店滿鐵社宅

明治十一年十一月二十五日生る同四十年四月任陸軍二等軍醫同年六月南滿洲鐵道株式會社醫員拜命瓦房店出張所長撫順炭坑醫院安東出張所長本溪湖醫院長を經て大正三年七月瓦房店分院長を命せらる明治三十九年四月一日三十七八年戰役の功に依り勳六等瑞寶章下賜同四十四年十二月二十日清國皇帝陛下より勳三等第二寶星章を贈與せらる

父君　芳郎　六十二歳　母堂　さよ子　五十五歳
夫人　倫子　三十二歳　長男　輝彦　十二歳
次男　龍彦　八　歳　三男　正雄　三　歳
長女　彰子　六　歳

◉田邊猛雄　田邊醫院主（醫師）　士族

原籍　愛媛縣北宇和郡日吉村字父野川二〇番地
現住　大連市磐城町八五號（電話四四三番）

明治三年十月六日高知縣幡多郡に生る同二十九年内務省開業試驗の出身醫にして其修學中は日本橋病院

に於て研究を重ね醫師となるや更に醫科大學婦人科に於て實習し其後宇和島に於て開業し長年に亘れるが三十八年十一月來連開院して今日に到れり其長所は内科及婦人科なり

夫人 きくゑ 四十二歳 長男 家橘 二十歳
二男 家重 十八歳

◉田畔勉 滿鐵會社職員大連保線掛 勳七等

原籍 福井縣足羽郡下父殊村大字太田
現住 大連市寺兒溝社宅一五號

明治四年八月四日生る同二十八年八月鐵道局傭となり北陸鐵道建設工事に從事し三十四年一月鐵道技手に任ぜられ中央舞鶴の鐵道建設工事に從事す三十八年五月野戰鐵道提理部付を命ぜられて來連し輸送工事に從事す三十九年四月勳七等に叙せられ四十年四月在官の儘滿鐵會社に入り複線及安奉線改築工事に從事す大正二年十二月勅令に依り廢官となり引續き在社す

父君 彦右衛門 七十六歳 母堂 きな 七十歳
夫人 ふき 三十八歳 長男 忠彦 十六歳
次男 孝 十四歳 長女 清子 九歳
次女 千代子 四歳

◉田實優 瀋陽館主（旅館業） 南滿銀行取締役 滿鐵諮問委員 勳六等

原籍 鹿兒島縣日置郡上伊集院村字春山一九五番地
現住 奉天新市街西六條一六號地 （電話二一四番）

明治九年一月五日生る同三十三年東京善隣書院卒業北清事變に際し陸軍通譯として從軍す三十四年北清駐屯軍通譯拜命翌年辭職北京警務學堂教習となる三十七年二月辭職淸國政府は其功勞を賞して双龍四等勳章を贈る同月高等通譯として日露戰役に從軍三十八年十一月軍政署附として奉天に來り軍政署引上げと共に辭職す三十九年十二月戰役の功に依り勳六等旭日單光章並に一時金四百圓下賜せらる同年十月より現地に旅館業を開始し今日に至る

父君 喜左衛門 七十四歳 夫人 のぶ 三十五歳

◉田崎綱三郎 田崎銃砲店主（銃砲火藥業）

原籍 愛媛縣北宇和島町吉田町北小路三番地
現住 大連吉野町五五號地 （電話七四五番）

明治三年十一月三日生る同三十七年陸軍御用達として來滿し戰後蛭田萬次郎氏と共同にて大連に銃砲火藥店を開業し四十二年蛭田氏と分離し田崎銃砲店と

改名し獨立經營して今日に及ぶ
母堂 （在鄉）

◉高濱　素　大連市役所助役心得　士族

原籍　熊本市外大江村
現住　大連市兒玉町一二番地

明治十一年四月七日生る同三十四年十二月山口縣廳に出仕し翌年五月德島縣廳に轉任す三十八年八月渡滿翌年二月より關東州民政署に勤務し大連民政署を兼務せしが四十一年一月大連民政署專務となり其後庶務課長に昇進勤續し大正四年十月一日より大連市制の施行せらるゝ前後大連市役所の創立に鞅掌して功勞あり同年十一月助役心得に任命せらる

夫人　朝子　三十四歲　長男　功　十二歲

◉高島大次郎　滿鐵會社營口實業學堂長　士族

原籍　京都府葛野郡衣笠村字松原
現住　營口新市街南本街三番地

明治九年三月八日生る京都中學より東京高等商業學校に轉學し更に同文書院に轉學し同院第一期生として三十七年卒業後雲南高等學堂及東文學堂の教習を兼ね在職三年にして歸朝後京都府の囑託にて江蘇、浙江、湖南、湖北、江西等を歷遊視察す大正二年四月滿鐵會社に入社現職に就任す

夫人　たま　二十八歲　長男　三歲　二男　二歲

◉高橋聿郎（號大豪）　滿洲日日新聞記者　政治部長

原籍　德島縣德島市富田浦町五三八番地
現住　大連市淡路町二一號地（電話一四四一番）

明治十四年三月六日生る　三十七年京都帝國大學法科大學獨法科及統計學を除き政治科終了同年大學院入學三十九年中止す（專攻刑事訴訟法と民事訴訟法との關係上）それより少時裁判所に入り轉じて大阪朝日新聞社に入りて北京に赴き歸來大阪本社に在り傍ら法律事務に從事し關西大學刑法教師たり其後大正三年に至り銀行其他の實業を自ら經營せむとして悉く失敗し同年八月現職に就けり

夫人　敬身　二十五歲　長男　弘　一歲

◉高橋孝千代　滿鐵會社技術局職員保線課　從七位勳七等

原籍　福島縣安達郡小濱町
現住　大連市加茂川町三一號地

明治三年一月二日生る郵便電信學校卒業後遞信省に

奉職、三十七、八年戰役に際し野戰鐵道建築班に勤務し引續き滿鐵會社に入りて現職に至る

夫人　種子　三十二歳

◉高橋貞一　達摩商會主（貿易業）安東銀行取締役、安東居留民會行政委員　安東商業會議所常議員

原籍　愛媛縣新居郡泉川村
現住　安東縣市場通五丁目（電話七〇番）

明治三年十二月五日生る中學校卒業後三十八年迄神戸銀行に勤務し三十八年渡滿現業を經營して今日に至る

夫人　しげ　三十九歳　長男　宗一　二十二歳
二男　達敏　十歳　女　信子　六歳

◉高橋庄之助　高橋商會主（材木商）

原籍　北海道札幌北一條西十二丁目
現住　長春東區四一號地（電話四七番）

明治六年十一月生る同二十四年より三十七年迄西比利亞ブラゴウエチエンスクに在住し請負業に從事す三十七年日露開戰と同時に獨逸を經て內地に歸還す戰役中陸軍提理部の囑託を受け滿洲各地の物資調査に從事す三十八年渡滿大連に住す四十年長春に移轉し材木商を開始し今日に至る

夫人　いり　三十三歳　長女　すみゑ　七　歳
長男　庄一郎　四　歳

◉高木成德　株式會社正隆銀行奉天支店長　士族

原籍　鳥取縣鳥取市下臺町一番地
現住　奉天小西關正隆銀行舍宅

明治九年二月十四日生る二十三年八月鳥取第八十二國立銀行に入り鳥取、東京及境等の支店に勤務三十年株式會社第三銀行に合併引續き米子支店橫濱支店及東京本店等に勤務す四十四年正隆銀行の安田家に依りて改革せらるゝに當り轉じて同行に入り營口支店長に任ぜられ大正四年九月奉天支店長に轉ず

父君　政重　七十歳　養母堂　とよ子　八十歳（在鄕）
夫人　さめ子　三十七歳

◉高木銑次郎　都督府通信事務官　奉天郵便局長　高等官四等正六位勳四等　士族

原籍　石川縣江沼郡大聖寺町字見聽山町四番地
現住　奉天新市街西四條一〇號地（電話二〇〇番）

慶應二年十一月四日生る東京法學院英語法學科卒業遞信省に奉職して天津郵便局長、南京郵便局長及東京郵便局外國郵便課長に歷任し明治三十九年都督府に轉じ安東縣及長春の郵便局長を經て現職に轉ず

夫人　しん子　四十二歳　長女　節子　十二歳
二女　廣子　八歳　長男　一郎　九歳
次男　二郎　四歳

● 高木鐵太郎

滿鐵會社經理部會計課職員
大連汽船會社監査役

原籍　東京市牛込區矢來町三番地
現住　大連市山代町八番地

元治元年十二月十二日埼玉縣川越町に生る明治十八年東京商業學校（高商の前身）卒業後三井物産會社天津支店に勤務し廿六年退社して藤田組神戸コークス商會等に入る三十年より正金銀行員として四十年迄勤續す四十一年五月安東縣商業會議所の組織に參與して其書記長に任ぜられ更に採木公司參事たること一年四十三年十一月滿鐵會社に入りて現職に在り

夫人　直子　四十二歳　長女　濱子　十三歳
長男　智雄　五歳

● 高頭（タカトウ）正太郎

通信事務官通信管理局業務課長
高等官五等從六位

原籍　新潟縣三島郡深才村字親澤五七二番地
現住　大連市乃木町七ノ一號（電話八一番）

明治十四年五月五日生る四十一年七月東京帝國大學法科大學獨法科卒業同年同月遞信屬に任ず同年十一月文官高等試驗合格四十二年三月關東都督府通信事務官高等官七等四十三年三月高等官六等大正二年三月同高等官五等に昇叙して現職にあり

父君　忠造　七十歳　母堂　竹子　六十歳
夫人　國子　二十五歳　長女　明丸　四歳

● 高杉要二郎

關東都督府醫院藥局長　陸軍一等藥劑官
高等官五等正六位勳四等

原籍　岡山縣淺口郡玉島町大字勇崎八五九番地
現住　旅順新市街朝日町官舍

明治六年一月二十四日生る同二十七年第三高等學校醫學部藥學科卒業二十八年十二月一年志願兵となり三十年一月陸軍三等藥劑官に任ぜられ廣島、山口、臺南、臺中、姫路、熊本の各衞戍病院に歷任し三十九年五月第一關東陸軍病院附拜命同時に日本赤十字社關東洲病院調劑主幹を囑託せられ陸軍衞生部下士候補者教官關東都督府醫院藥局長囑託を歷任し四十二年三月關東都督府醫院藥局長拜命今日に及ぶ

夫人　じゆん　三十六歳　長男　清繁　六歳
長女　直子　三歳

● 高田友吉

合名會社進和商會代表社員
滿洲水產會社取締役
大連商業會議所常議員

原籍　福井縣遠敷郡小濱町廣峯二九番地
現住　大連市佐渡町二七號地（電話一七三番）

明治十三年二月五日生る幼少より商業に従事し同三十八年七月渡連現住地に進和商會を開設し今日に到る

夫人　つや　二十八歳　勇太郎　六　歳
滿壽子　三　歳　むめ子　一　歳

高田熊吉　合名會社大矢組大連支店主任　勳七等　士族

原籍　和歌山市小阪原通三丁目七番地
現住　大連市淡路町四一號地（電話九二四番）

明治十一年五月二十六日前橋市に生る三十三年東京和佛法律學校（法政科）卒業三十七年より四十年迄陸軍省經理局に奉職し四十年より四十二年迄日清通商株式會社に奉職す四十二年渡連大矢組に入り現職に在り

母堂　ゆき　六十六歳　夫人　ゐい　三十四歳

高垣德治　大連市兒玉町郵便所長　正八位勳七等　士族

原籍　秋田縣平鹿郡横手町本町二八番地
現住　大連市兒玉町九番地六號

文久元年十月十四日生る明治二十四年十一月東京電信學校英語教授囑託二十五年郵便局書記芝罘郵便局在勤被命二十七年八月日清戰役の爲め歸朝同年十月朝鮮釜山郵便局臨時在勤二十九年五月芝罘郵便局長被命三十八年六月通信事務官補に任せらる同年十一月關東都督府事務囑託同時に渡連す四十二年三月關東都督府飜譯生四十三年四月休職同五月關東都督府郵便所長兒玉町郵便所長被命今尚現職に在り

家族　（皆在國）

竹內廣彰　外務書記生、在奉天總領事館新民府分館主任　勳七等　士族

原籍　高知縣土佐郡小高坂村二四番地
現住　新民府日本領事分館内（電話一番）

明治九年十二月八日生る同二十九年高知尋常中學校卒業後裁判所書記農商務屬を經て三十四年外務屬に任せらる三十七、八年戰役の功に依り勳八等瑞寶章並に金八十圓下賜さる三十九年四月外務書記生に任す四十二年十一月奉天領事館勤務となり大正三年現任に就く

母堂　光　六十五歳　夫人　ゐい　三十二歳
長男　廣巳（ヒロミ）　十一歳　次男　次郎　三　歳

竹內坦道　（號默庵）滿洲新報記者大連支社主任、大連記者團幹事

原籍 相模國高座郡寒川村
現住 大連市監部通 （電話七三〇番）

明治八年十二月八日生る夙に岡千仭塾に漢學を修め又長兄に就きて蘭學を講ず其後東京工手學校に入り土木科修了後官海に遊びて各地に勤務數年にして辭職後土木業に從事す明治三十九年八月渡滿土木業に關係して公主嶺に在住せしが四十三年一月より滿洲新報社に入り現任に就きて今日に到る

夫人 あい子 三十一歲 長男 正 一 十四歲

武内和吉 横濱正金銀行鐵嶺出張所主任 居留民會議員

原籍 兵庫縣城崎郡城崎町
現住 鐵嶺西町二號地 （電話長二六番）

明治八年六月十七日生る同三十一年東京高等商業學校卒業三十二年二月横濱正金銀行に入り布哇及倫敦支店に勤務し四十五年三月大連支店副支配人となり大正二年三月現職に就き今日に及ぶ

父君 市右衞門 夫人 順子 二十七歲

武内忠次郎 （號止戈） 滿洲通信社長

原籍 大分縣日田郡日田町番外三四番
現住 奉天十間房警五區一二四號 （電話長六三二番）

明治二年四月十六日生る本姓は園田幼より漢學を藩儒園田鷹城氏（生父）に受く明治二十四年京都同志社卒業後農商務省奉職の傍ら經濟學を修む二十九年四月臺灣總督府員に轉じて渡臺し間もなく辭職土倉家の事業を佐けて蕃地を探險す三十年冬辭任歸京善隣譯書館に在りて漢譯書出版に從事す康有爲一派の失脚と與に同事業一蹶後は京濱間に在りて諸種の企業及著述英語教師に從事す三十七年より上海南清及香港地方に放遊し四十年春北清に遊び同年七月營口滿洲日報社に入る翌年二月同志と滿洲新報社を創立し在社五年編輯長主筆主幹に歷任す此間又日刊漢字新聞華商報を創刊して社長となる四十五年二月歸國大正二年八月雜誌大陸社主幹となり翌三年春辭して同八月滿洲通信社を創立して今日に到る

母堂 園田はつ 七十六歲 夫人 晋子 二十六歲
男 睦 哉 二 歲

立川雲平 立川法律事務所主（辯護士）

原籍 淡路國本清水町
現住 大連市越後町十區二七號地 （電話一〇三七番）

安政四年八月二十八日生る壯年より志を抱いて四方

に放遊し遂に信州北佐久郡岩村田町に家を成して辯護士を業とし數次衆議院議員に選ばれ臣雲平の名は一時天下に鳴りしが明治四十二年議院を辭して老を養ひ大正三年六月十二日滿洲に渡來し現業の傍ら詩酒に隱れて世外に嘯傲しつゝあり

夫人 鎭 家 四十五歲
長男 平 二十五歲（在東京帝大）
次男 嚴 介 二十三歲（在東京高商）
長女 和 子 十九歲

◉立石豊造 磐城ホテル主（旅館業）

原籍 佐賀縣西松浦郡牧島村木須八〇番地
現住 大連市磐城町六九號地（電話一六七番）

明治十一年八月五日生る同三十年京都府立商業學校卒業直に臺灣に航し臺北に在る叔父の經營する用達業に從事す三十三年義和團事變に第五師團に從軍し三十八年迄北京に在りて恩氏に就き支那語を研究す三十八年大連に來りて視察し三十九年現住地に居をトし旅館業の傍ら陸軍納品並に鐵器類の代理業を兼營す

母堂 信 子 六十五歲 夫人 和 子 二十七歲
長女 尚 子 六 歲 二女 禮 子 五 歲
長男 輝太郎 二 歲

◉宅島猛雄 宅島回漕店主（回漕及代理業）旅順市會議員

原籍 長崎縣南高來郡北串山村
現住 旅順嚴島町五番地（電話一〇三番）

明治十一年一月一日生る同二十七年より露語研究の爲め浦鹽港に在留し三十一年十一月旅順に來りて商業に從事す三十七年二月日露役の爲め引上げ三十八年一月再び旅順に來り四月より商業を開始し十月より回漕業に從事し今日に至る

父君 筆造 六十歲 母堂 ちさ 五十八歲（在鄉）
夫人 みつ 三十二歲 女 道 子 十三歲
百合子 九 歲 妙 子 六 歲
輝 子 五 歲 敦 子 四 歲
英 子 一 歲 長男 秋 雄 十 歲
二男 開 一 二 歲

◉唯根伊與（タマネコレトモ） 滿鐵會社交涉局職員第一課主任 正八位

原籍 茨城縣稻敷郡奧野村大字正直
現住 大連市神明町チ區一五號地

明治十五年六月十五日生る同三十九年早稻田大學政治科卒業同年高等文官試驗に及第し四十年山林事務

官に任ぜられ四十三年病氣のため辭職同年拓殖局囑託となり大正二年拓殖局廢止と共に滿鐵會社に入る

大父　長兵衛　八十六歳　父君　長壽老　五十七歳
母堂　琴子　五十八歳（以上在國）
夫人　芳子　二十六歳　長女　綠子　九歳
次女　俊子　七歳　三女　鈴江子　五歳
四女　八重子　二歳

◉玉置萊次郎　三井物産會社大連支店綿類掛主任

原籍　神戸市熊内町二四番地
現住　大連市神明町二二號地（電話二〇二番）

明治十四年七月十九日生る三十八年東京高等商業學校卒業同年三井物産會社に入り大阪支店に勤務す四十五年五月大連支店に轉勤し今日に到る

夫人　文代子　二十四歳　長男　二歳

◉武村清　滿鐵會社工場職員設計科長　從六位勳六等　士族

原籍　徳島縣徳島市佐古町一八一番地
現住　大連市兒玉町一四ノ一號地

明治十一年六月二十四日生る同三十五年東京帝國大學工科大學機械科卒業後鐵道作業局雇神戸工場勤務となる爾來三十六年九月同局運轉掛勤務三十七年六月鐵道技手三十七年八月山北機關庫主任三十八年七月鐵道技師新橋工場勤務三十九年七月鐵道國有準備局技師兼遞信省技師に歴任し四十年四月南滿鐵會社技師に任し四十年八月第一區車輛監督四十一年十月運轉課勤務に轉じ四十四年三月外國留學大正元年十二月現任に就く

夫人　留意　二十七歳　長男　進　十　歳

◉谷村正友　滿鐵會社運輸部職員營業課

原籍　東京市麻布區富士見町三六番地
現住　大連市播磨町一四番地（電話九〇八番）

明治六年一月十一日鹿兒島市に生る同三十三年東京高等商業學校卒業後富多山商會鑛業部及商品部主任となり三十五年衛生洗布株式會社取締役兼支配人に就職三十六年東京市京橋區南紺屋町に輸出入商開始三十七年三月日露役第一軍に從軍翌年七月歸還三十九年一月アライアンス、トレーヂング、コンパニー大連主任四十一年大連に於て德泰號貿易部を經營す四十三年三月三日南滿洲鐵道株式會社運輸課囑託大正四年四月現職を命ぜられ今日に及ぶ

夫人　滿壽子　三十三歲　長男　純一　十三歲
三男　平八郎　七　歲

◉谷　直諒　滿鐵會社技術局保線課長　從五位勳四等　士族

原籍　東京市麴町區下二番町六九番地
現住　大連市兒玉町七ノ一（電話一五三二番）

明治八年六月十六日生る同三十二年七月東京帝國大學工科大學土木科卒業三十五年七月任鐵道技師、三十七年五月野戰鐵道建築班軌道長として渡滿、四十年三月南滿洲鐵道株式會社技師、同年六年會社大連建設事務所長、四十四年三月より四十五年九月迄歐米各國視察、大正三年五月現職に任せらる

母堂　銀子　六十二歲　夫人　篤子　三十歲
長男　直敬　五　歲

◉佃　一豫　滿鐵會社理事計理部長　兼中央試驗所長事務取扱　大連重要物產取引所商議員　正五位勳六等　士族

原籍　愛媛縣松山市南堀端町三五番戸
現住　大連市兒玉町五ノ三（電話三一一番）

元治元年七月十二日生る、本姓は山路氏明治四年八月出て佃家を相續す二十三年東京帝國大學法科大學理財科卒業後內務省試補、地方參事官、秘書官、書記官、主計官、內閣總理大臣秘書官、神戶大阪稅關長、大藏書記官、陸軍省參事官、清國北洋大臣理財顧問官等に歷任して三十九年七月日本興業銀行副總裁仰付けられ大正二年七月辭職、同年十二月滿鐵理事仰付けらる

夫人　なみ　五十歲　長男　十哲　二十九歲
長女　晶子（他に嫁す）
次男　十吉　二十一歲

◉土谷久米藏　領事在遼陽領事館　六等官六等　正七位勳六等　士族

原籍　福井縣武生町北府三八番地
現住　遼陽日本領事館內

明治元年四月十二日生る同二十四年四月慶應義塾卒業同年十二月農商務屬に任じ二十九年七月外務省屬に轉じ仁川鎭南浦群山上海ホノルル等に在勤同四十二年十一月副領事に任じ芝罘、福州に在勤大正三年十二日領事に昇任遼陽在勤を命ぜられ今日に及ぶ

父君　友次郎　八十二歲　母堂　さわ子　六十九歲
夫人　せい子　三十九歲　長男　友彥　十八歲
長女　久子　二十歲　次女　文子　十六歲
三女　錦子　十四歲　四女　春江子　十一歲

◉土倉四郎　橫濱正金銀行大連支店支配人代理

原籍　奈良縣吉野郡川上村字大瀧
現住　大連市神明町レ區八號（電話五四八番）

明治十年四月二十四日生る三十六年東京帝國大學法科大學政治科卒業三十九年正金銀行に入り桑港及紐育の支店に在る事六年にして歸朝し横濱本店及び東京支店に勤務し大正三年六月現職に轉ず

父君　庄三郎　七十六歳　夫人　楢千代　二十二歳

◉上田寛一　上田寫眞館主（寫眞業）　士族

原籍　山口縣阿武郡萩町河添
現住　大連市大山通二丁目五一九號地（電話二四六番）

明治十七年一月二十三日生る十三歳より十九歳まで寫眞術修業後山口縣に於て獨立寫眞業を開始す三十八年日露戰役に兵站部附として從軍す三十九年三月渡連伊勢町に於て寫眞業開店四十三年十一月展覽會に於て出品人物一等金牌を受く大正元年現住地に移轉翌二年寫眞展覽會に於て東京寫眞研究會審査の結果出品人物最高點金牌を受領す引續き營業中

夫人　あさ子　二十二歳　長男　正　三歳
長女　忠美子　一歳

◉塚本貞次郎　大連汽船株式會社總支配人　士族

原籍　宮崎縣東臼杵郡延岡町
現住　大連市霧島町五六號地（電話一二〇八番）

明治五年九月十日生る同三十年慶應義塾大學部理財科卒業同年三井物産會社に入社本店、門司、香港、馬尼刺、長崎、倫敦等の各支店に勤務し大連支店勤務となる大正三年五月三井物産を辭し大連汽船會社に入りて現職に就く

夫人　綾子

◉塚本貞禎　滿鐵會社安東醫院醫長外科部長　士族

原籍　神奈川縣足柄下郡小田原町幸一丁目一七八番地
現住　安東縣山下町滿鐵社宅（電話五五番）

明治十八年十一月十一日生る同四十四年京都帝國大學醫科大學卒業翌年一月京都帝國大學副手に任用大正元年八月南滿洲鐵道株式會社外科部長に登用され同時に安東醫院勤務を命ぜらる

夫人　靜子　二十三歳　長女　春江子　一歳

◉塚澤正雄　旅順塚澤齒科醫院主（齒科醫）

原籍　三重縣安濃郡安濃村大字曾根一番屋敷
現住　旅順市二實町二〇七番地（電話三四二番）

明治十年二月十七日生る同三十七年四月東京齒科醫

學院(今の東京齒科醫學專門學校)卒業同年十一月醫術開業免狀下附さる後ドクトル大原氏の門に入り實地研學すること二年三十九年五月陸軍省高等雇員拜命同時に關東都督府陸軍々醫部附勤務三十九年十月關東赤十字病院創立と同時に同院齒科部主任治療主幹を囑託せらる四十年十二月陸軍部を辭して專ら赤十字病院齒科部を擔任す四十二年五月同院を辭して同年六月現在所に獨立開業して今日に至る

母堂　六十四歳
夫人　淺江　二十八歳　長女　滿喜　七歳
次女　三好　六歳　三女　壽　三歳
四女　光　一歳

●津久居兵右衛門　日清燐寸會社代表社員取締役 長春居留民會議員

原籍　栃木縣安蘇郡佐野町三二八番地
現住　長春城内二頭街　(長電話六六番)

慶應三年九月十日生る東京專修學校理財科出身にして明治二十五年頃より實業界に投じ横濱輸出絹物商同業組合組長となること前後四回全國輸出絹同業組合聯合會議長、横濱電燈株式會社監査役及び取締役、横濱取引所監査役及理事等を歴任し四十二年二月倫敦ダブリー、エヌ、ストロング商會代理店を東京銀座一丁目に開始す日本公債株式會社監査役、木更津電燈株式會社監査役、嚴原電力株式會社社長等を經てサクション瓦斯發生機の專賣を特許され之が製造に從事す此より前き明治三十八年十月利源調査員として來滿し通江口に燐寸工場の設立を計畫せしが其後工場地を長春に變置して日支合辦資本二萬圓の廣仁津火柴公司を組織し四十一年十一月其資本を三十萬圓に增加し日清燐寸株式會社と改稱して現に其主腦者たり

夫人　逸子　四十五歳　長男　平治　二十八歳
二男　平造　二十四歳　三男　三郎　七歳
長女　いさ子　二十六歳　二女　とみ子　十四歳

●津田元吉　滿鐵會社築港事務所職員 勳七等 士族

原籍　山形縣米澤市本五十騎町四八九一番地
現住　大連市北大山通六番地六號ノ二

明治二年二月十二日生る三十一年文官普通試驗に合格して遞信屬通信書記、鐵道書記等に任ず三十七年五月野戰鐵道附として來滿翌年四月三十七、八年の功に依り勳七等青色桐葉章及金四百圓を賜ふ、四十

年三月在官の儘南滿洲鐵道株式會社に入社大正二年十二月廢官となり引續き在職

夫人　とみ　三十四歳

●辻　慶太郎　弘濟醫院主（醫師）大連銀行監査役　從七位勳六等　士族

原籍　佐賀縣小城郡三日月村大字織島二二三番地
現住　大連市信濃町（電話一五五番）

明治八年一月四日生る二十六年十二月東京藥學校卒業と同時に藥劑師試驗に合格二十九年四月長崎市醫術開業前期試驗に合格三十一年四月同地に於て醫術開業後期試驗に合格し佐賀縣唐津病院醫員となり三十七年十一月同院を辭す三十六年九月より十二月迄濱田博士の產科婦人科講習を受く三十八年二月陸軍三等軍醫に任じ日露戰役に參加翌年三月渡連弘濟醫院を開設す大正二年三月東京醫科大學皮膚科專攻の爲め上京翌三年五月歸院大正三年應召青島攻城戰參加同年十二月任陸軍二等軍醫大正四年一月召集解除歸院す

母堂　かつ子　六十二歳　夫人　たき子　三十四歳
長男　讓　十三歳　次男　慶二　三歳
養女　登美代　九歳

●辻　準太郎　大連西廣場郵便所長　正八位勳八等　士族

原籍　石川縣金澤市九枚町二番地
現住　大連市越後町ナ區二七號地

明治四年三月十八日生る同三十九年五月關東總督府付を命ぜられ同時に渡連四十年三月旅順郵便局長代理兼旅順鐵島郷出張所長被命四十一年鐵嶺郵便局に轉じ四十二年又長春局に轉す四十三年五月現職を命ぜられ今日に到る

夫人　まさ　四十歳　長男　鈔吉　十九歳

●都留　昭　朝鮮銀行開原派出所主任

原籍　大分縣宇佐郡驛舘村四一七番地
現住　開原附屬地第三區三號（電話一〇〇番）

明治十五年八月十八日生る同三十九年慶應義塾大學理財科卒業四十一年第一銀行安東縣出張所に入り四十二年同行を繼承したる朝鮮銀行に引續き任用せらる四十三年朝鮮銀行新義州出張所次席となり四十四年群山出張所次席に轉じ大正元年九月本店國庫局に轉勤す大正二年檢查室勤務となり尋で審查課に轉じ四年九月又現任に轉ず

夫人　須賀　二十八歳　三男　巖　三歳

父君　勘七　七十一歳　母堂　鶴子　六十四歳
夫人　梅子　三十三歳　長男　人　八歳

◉柘植忠夫　福昌公司員 滿洲水產會社監査役　士族

原籍　大分縣大野郡小富士村
現住　大連市山縣通一六三號地　（電話一二四〇番）

明治十二年一月二十六日生る同三十年大分中學校卒業後鄉里の小學校に敎鞭を執ること一年三十二年大阪郵便貯金管理所通信書記補となる三十四年大阪にて商業に從事したるも蹉跌し三十七年大阪商船會社に入る四十年四月渡連大阪商船會社專屬荷扱所磯部組に入る同年十月南滿鐵道會社埠頭事務所に奉職四十四年二月福昌公司に轉職し今日に至る

夫人　[illegible]　二十六歳

◉福田孝玄　日蓮宗滿洲敎會所主任

原籍　熊本縣飽託郡海路口村
現住　大連市春日町

明治十二年五月生る同三十八年東京池上日蓮宗大壇林卒業後熊本縣宇土町北華寺に住職たりしが四十二年十月渡滿奉天に蓮化寺を創設布敎に著手後旅順に轉じ日清寺主任たり四十五年大連布敎所主任に轉じて今日に及ぶ

◉角田鶴吉　角田吳服店主（吳服業）勳八等

原籍　山口縣都濃郡下松町八〇八番地
現住　大連市浪速町三丁目七三號地　（電話二三一番）

慶應元年十月十五日生る明治卅七、八年戰役に軍屬として從軍三十八年十月渡滿現地に於て吳服商開店今日に至る

母堂　つぎ子　七十一歳　夫人　まつ子　四十一歳
長女　ひな子　十六歳

◉根橋禎一　滿鐵會社保線課員　士族

原籍　青森縣三戸郡田子村
現住　大連市霧島町ヌ區一六

明治十六年一月三日生る同三十八年七月東京帝國大學土木工學科卒業三十八年八月日本鐵道株式會社工務課勤務、三十九年十一月鐵道院工務部勤務、四十年五月南滿洲鐵道株式會社技師、四十四年四月獨逸留學を兼ね歐米視察、大正二年一月歸社引續き在勤す

父君　傳吾　七十一歳　母堂　ふさ　六十五歳

長女　恒子　二十歳　長男　雄太郎　一歳

中村覺

關東都督　陸軍大將
正三位勳一等功二級　男爵

原籍　東京府豐多摩郡淀橋町字柏木四四〇官地（電話八番）
現住　旅順舊市街朝日町二ノ一官舍（電話三三〇番）

安政元年二月二十日生る滋賀縣士族中村千太夫氏の二男なり明治八年一月陸軍少尉に任す爾來累進して三十八年七月陸軍中將に進み四十一年侍從武官長に補す其間步兵第十聯隊第三大隊長、第一師團參謀、東宮武官、侍從武官、步兵第四十六聯隊長、東部都督部參謀長、臺灣總督府陸軍幕僚參謀長、東京衛戍總督等の要職に歷補し大正三年九月關東都督仰附けられ四年一月大將に榮進す曾て西南の役に從ひ勳六等に叙し日清役の功に依り功四級金鵄章を賜はり日露の役に步兵第二旅團長として出征　旅順攻圍軍に參加し白襷隊長として驍名を轟かし功を以て功二級金鵄章を賜はり四十年九月勳功に依り華族に列し男爵を授けらる又大正四年秋中華民國政府より特使を派して一等文虎勳章を贈授せらる常に詩賦文章を好み和歌に長じ風流都督の名高し

夫人　外千代　五十歳

長男　謙一　三十三歳（從五位工學士）
同上　夫人　玉枝　二十六歳
二男　謙二　三十歳（滋賀縣士族中村家相續）
三男　謙三　二十七歳（東京府森村家相續）
四男　謙四郎　二十五歳（慶應義塾大學部在學）
五男　謙五　二十二歳（大阪府士族小森家相續）
六男　謙六　十四歳（滋賀縣吉原家相續）
七男　謙七　九歳
長女　節子　十七歳（學習院女子部在學）
二女　淑尾　五歳
孫　徹雄　四歳　同　豐子　六歳

中村雄次郎

滿鐵會社總裁　後備陸軍中將
貴族院議員
從三位勳一等功四級男爵

原籍　東京市四谷區傳馬町三ノ二八番地
現住　大連市兒玉町二ノ七社宅（電話七〇番）

嘉永五年二月晦日を以て生る三重縣士族中村一貫氏の二男、明治十六年三月分家して一家を創立す夙に身を軍籍に列し明治七年陸軍中尉に任し爾來累進して三十五年陸軍中將に陞り陸軍次官兼軍務局長より轉じて製鐵所長官となり多年在職中特に選拔せられて大正三年七月南滿洲鐵道株式會社總裁仰附けらる曾て日清役の功に依り功四級に日露役の功に依り勳

一等に叙せられ明治四十年九月勳功に依り特旨を以て華族に列し男爵を授けらる又同三十七年貴族院議員に勅選せられる

夫人 久仁 五十四歳
長男 貫之 二十七歳（從五位法學士、横濱正金銀行員）
三男 芳樹 二十歳　四男 深造 十七歳
五男 基一 十四歳　六男 健兒 十二歳
二女 稔 二十九歳（他に嫁す）
三女 みつ 二十三歳（兒玉伯爵弟友雄氏に嫁す）
四女 まり 十八歳（學習院女學部在學）
五女 すみ 十五歳

◉中村光吉

朝鮮銀行大連出張所長
大連商業會議所理財部長

原籍 東京府下豐多摩郡大久保町字西大久保
現住 大連市近江町四十四號地（電話一四〇五番）

明治九年九月二十二日生る同三十五年東京帝國大學法科大學英法科卒業同年株式會社第一銀行に入り馬山出張所長、元山支店長、平壤支店長を歷任し四十一年韓國銀行設立せらるゝや同行平壤支店長となり後本店營業課長に轉じ大正二年滿洲に出張所の設置せらるゝや轉任して今日に至る

父君 喜一郎 六十五歳　夫人 かめ代 三十歳
長男 喜重 八歳　長女 喜代 六歳

◉中村治

都督府通信事務官補 長春郵便局長、滿鐵諮問委員 高等官四等從六位 士族

原籍 福岡縣山門郡瀨高町一二七八番地
現住 長春郵便局官舍（電話三〇番）

明治五年一月九日生る同三十四年東京帝國大學法科大學政治科卒業三十八年遞信省に出仕後東京、大阪、新潟の各郵便局課長となり更に清國天津郵便局、宇都宮郵便局、金澤郵便局の局長に歷任し四十四年八月長春郵便局長拜命今日に至る

夫人 倭子 二十七歳　長男 康治 五歳
長女 春子 二歳

◉中村敏雄

宅合名會社大連支店長（酒類食料品業）
大連市會議員 大連商業會議所商業部副部長

原籍 山口縣周防國福川町
現住 大連市大山通二丁目四〇號地（電話一八六番 電話二四〇番）

明治元年四月二十六日生る德山中學校を卒へて內務省陸軍省に仕官し二十八年大阪實業家松本重太郎氏の盡力に依り東華紡績會社並に南海鐵道株式會社庶務課長等に歷任し三十七年宅合名會社に入り直に大連支店經營を託されて來任し今日及ぶ

夫人 いし 三十九歳 長男 敏郎 九 歳
次男 雄吉 七 歳

◉**中村勉藏** 中村醫院主（醫師） 士族

原籍 三重縣阿山郡上野町小玉町
現住 大連市近江町ラ區一一號地 （電話三六〇番）

明治七年七月二十三日生る同三十五年帝國大學醫科大學卒業、宮城縣氣仙沼病院長、熊本縣人吉病院長等を經て北海道北見稚内に病院を創設す四十四年郷里上野町に歸り病院を開設す大正二年五月渡滿大連弘濟病院長となる三年二月獨立して盤城町に中村病院を創設し同四年十月現地に新築移轉す

父君 玄瑞 六十四歳 （大連小滿子中村病院長）
母堂 つぎ子 六十九歳 夫人 愛子 三十二歳
長女 英子 九 歳 長男 正 六 歳
次女 安子 三 歳

◉**中村楢次郎** 嘉納合名會社支店主任（酒商）

原籍 奈良縣奈良市内侍原町九番地
現住 大連市監部通二丁目五二號地 （電話一四四番）

慶應三年十二月四日生る明治三十八年四月大連支店設置と同時に主任として來任今日に迨ぶ

夫人 ふい 四十六歳 長男 純一 十三歳
次男 成二 六 歳 長女 ちか子 十六歳

◉**中村宗一郎** 伏田鐵工所大連出張所主任 勳七等

原籍 愛知縣中島郡一宮町
現住 大連市西通一ノ一八號地 （電話一一二六番）

明治十一年十一月四日島根縣松江市に生る三重縣四日市三學舍及び東京工手學校等に學ぶこと數年後大阪砲兵工廠東京海軍工廠其他の工場にて技術を練磨す二十九年愛知縣中島郡一ノ宮紡績會社鐵工部主任となり三十二年十一月海軍機關兵として吳海兵團に入團三十七、八年戰役に參加し功に依り勳七等下賜三十九年大阪伏田鐵工所技術部勤務四十二年二月大連出張所主任として來任今日に到る

父君 重平 五十八歳 母堂 國子 五十八歳
夫人 綾子 二十七歳 長女 千代子 九 歳
二女 喜代子 七 歳 三女 幸子 一 歳
長男 義夫 五 歳 二男 毅 三 歳

◉**中島眞雄** 盛京時報社長 士族

原籍 山口縣山口町
現住 奉天大西關 （電話二二番）

萬延二年二月二十六日山口縣萩に生る二十四年春福州に赴くの目的を以て故荒尾精氏と與に上海に赴きし處會ま日清戰役に際し商品陳列所の跡始末を爲す爲め同地に留り二十七年九月内地に還り長周日報記者として從軍し威海衛陷落と與に歸國す二十八年八月臺灣に赴きし處叔父三浦將軍が閔妃事件の爲め拘留されしを以て急に歸りて廣島に留る三十年八重山島に於ける荒尾氏の事業を整理すること一年にして福州に赴き東亞同文會福建支部長となり學校及閩報の管理を爲す三十四年三月北京に赴き同十二月順天時報を創立す日露戰役に際して從軍與倉軍政官の切望により三十八年七月順天時報を上野岩太郎氏に讓與して新に營口に滿洲日報を起し三十九年十月更に奉天に盛京時報を起して兩社の社長たりしが滿洲日報は四十年十月奉天に移轉し翌年春廢刊せり爾來專ら盛京時報を經營して今日に到る

母堂　ふ　ぢ　七十五歳　（在京）
女　品　子　八　歳

◉中島種吉　滿鐵會社技術局土木課職員　兼南滿洲工業學校講師

原籍　福岡縣八女郡三河村大字柳瀨二四五番地
現住　大連市近江町ら區四號

明治十二年二月二十一日生る、同三十五年七月第五高等學校工學部土木科卒業同年八月新潟縣廳土木課に奉職、三十九年七月九州鐵道株式會社工務課に就職四十一年四月南滿洲鐵道株式會社に入る

父君　喜太郎　七十七歳　母堂　ま　つ　六十六歳
夫人　ち　か　二十八歳　長女　みち子　十　三　歳
長男　日出雄　十　歳　二男　富士雄　八　歳
三男　嶽　雄　五　歳　四男　信　雄　三　歳

◉中島盛彥　東亞煙草株式會社哈爾賓販賣所主任　士族

原籍　佐賀縣佐賀市岸川町七番地
現住　哈爾賓プリスタニモストーヤ街

明治十三年八月九日生る同二十五年大阪に出で中學を卒業し三十五年東京に於て英文及簿記學を修む三十七年當時煙草界に覇を稱へし江副商會に入り三十八年日露役に際し同商會が政府の特許を得滿洲に發展するに及び牛莊支店詰となる其後東亞煙草會社創立するや同社に入り吉林、大連、鐵嶺、奉天等の主任を歴て現任に就く

父君　盛　一　六十九歳　母堂　はる子　六十二歳

夫人　香明子　二十五歲　長男　盛久　五歲
長女　はま子　二　歲

◉中島銀次郎（號喬木）　中島寫眞館主（寫眞業）士族

原籍　大阪市東區高麗橋二ノ八六番屋敷
現住　大連市大山通一ノ一（電話三二七番）

安政五年十二月八日名古屋市に生る本姓は三浦氏十三歲の時中島家の養子となる幼より藩學校に入り英漢、數學を修む明治九年東京に出で寫眞師鈴木眞一氏の門に入り寫眞術を研究すること六年獨立して大阪高麗橋に開業し第四師團造幣局其他諸官衙の寫眞御用を命ぜらる二十九年渡臺臺北府前街に開業すること六年其間臺灣總督府より臨時巴里大博覽會事務を囑託せられ出品の撮影に從事して褒賞を受く三十五年大阪に歸り心齋橋通北濱四丁目に開業す三十八年五月大連に來りて開業し今日に及ぶ雅號喬木を以て世に知らる

夫人　うめ　四十五歲　次男　亨三　二十七歲
三男　大三　二十歲　長女　綾子　二十三歲

◉中堂（ナカドウ）謙吉　旅順公學堂長　勳六等　士族

原籍　東京市本鄕區新花町九七番地
現住　旅順舊市街柳町三一番地

明治二年十二月九日福井縣小濱町に生る滋賀縣師範學校卒業後二十九年伊澤學務局長に伴はれて臺灣に赴き淡水、埔里社、臺中の國語傳習所教官に歷任し總督府編輯書記を以て日臺大字典の編纂に從事す三十六年支那人教育の目的を以て罷職となり尋て日露戰役起りし爲め第一軍に從軍して滿洲各地の大戰に參加し凱旋後三十九年八月旅順に來りて現職に就けり其著書に臺語類編、新式東語課本(一、二、三編)又催眠術に關しては精神靈動奧義、催眠術に於ける暗示法等あり

母堂　こと　七十三歲　夫人　さめ　三十七歲

◉中川直一　大連海關檢查官

原籍　兵庫縣神戸市多聞通五ノ八九番地
現住　大連市若狹町海關官舍

明治六年一月三日石川縣金澤市にて生る明治二十四年第四高等學校を中途退學して三十二年六月橫濱稅關に入り歷遷して同關鑑定官補に任じ四十年大連海關開始と與に大藏省の推薦に依りて現任に就けり

夫人　梅　四十一歲　男　一　女　三

●中井國太郎　滿洲製粉會社專務取締役　滿鐵諮問委員　士族
原籍　東京市赤坂區青山高樹町一二番地
現住　鐵嶺附屬地同會社內

明治九年六月二十七日生る同三十四年八月農商務省海外實業練習生として渡淸營口に在任する事四年三十九年滿洲製粉會社を創立し專務取締役に就任して今日に至る

夫人　重代　二十九歲

●中野初太郎　三省洋行主（船舶、貿易、代理業）安東居留民團行政委員、安東商業會議所會頭　士族
原籍　北海道小樽區色內町
現住　安東縣市場通七ノ四　（電話五二番　四四〇番）

萬延元年二月九日福島縣會津に生る明治八年中村敬宇先生の門に遊び十三年卒業するや北海道に赴き、十五年福島縣元宮町に生絲輸出業を經營し二十年東京に於て帝國水產會社を創立して其支配人となり斯業の卒先者として企劃する處多し二十三年再び北海道に入り函館に北海物產會社を起こして取締役に擧げらる其後三年間大阪神戶九州地方を視察遊歷し二十九年三たび北海道に入り小樽に於て日露貿易並に浦鹽ニコライスク等の航運業に從事す三十八年四月安東縣に來たり三省洋行を起こして航運及貿易等に從事し翌年より大阪商船會社の代理店となる本業の傍ら油房煉瓦製造其他の會社に關與して其重役を兼務し安東に於ける元老として推さる

夫人　貞子　四十七歲　長男　醇一　十七歲
二男　太郎　八　歲

●中西有之助　滿鐵會社埠頭事務所職員　勳七等　士族
原籍　佐賀縣佐賀市水ノ江町二七三番地
現住　大連市山縣通九四號

明治十四年九月三日生る本姓は牟田、三十五年五月商船學校入學三十九年二月海軍砲術練習所入所、同年五月卒業、同年四月三十七、八年戰役の功に依り勳七等瑞寶章下賜、四十年八月商船學校卒業、同年九月海軍豫備少尉候補生、同年同月大阪商船會社入社、大正二年七月退社し翌八月滿鐵會社に入る

母堂　きく子　五十三歲　夫人　千代子　二十六歲

●仲野嘉代作　遼東齒科醫院主（齒科醫）
原籍　靜岡縣志太郡葉梨村中ノ合
現住　旅順市敦賀町二の二二番地　（電話一二九番）

明治十七年四月四日生る同三十四年上京ドクトル菅

沼友三郎氏の門に入り歯科醫學研究の傍ら東京齒科醫學校通學四十二年同校卒業同年文部省齒科醫術開業試驗に合格之より前き三十七年靜岡歩兵第三十四聯隊へ入營三ヶ年服役す四十二年齒科醫と爲り北海道旭川住野齒科醫院に副院長として奉職す四十四年十二月出京東京齒科醫學專門學校其他に於て齒科醫學研究四十五年五月旅順に來り遼東齒科醫院を開設して今日に及ぶ

夫人　つる子　二十三歳　長女　順子　一歳

◉中江十五郎　長壽堂藥房主（藥種賣藥業）奉天商業會議所議員　奉天藥種業組合長　士族

原籍　東京市芝區白金三光町五四七番地
現住　奉天城内鐘樓南大街（電話三四番）

慶應二年六月十二日鹿兒島に生る本姓は小野木後稻垣に改め本家相續に依り復た中江と改姓す長じて大學に入れるも疾病の爲め中途退校明治十八年大阪砂糖會社副支配人に就職二十一年日本銀行に入り營業局勤務同二十七年辭職して東京神田區通新石町に兩替及金銀賣買並に公債株式の仲買を爲す三十七年滿韓起業會社總支配人として大連、營口に出張し滿韓公司を經營し東京尾澤製劑滿洲販賣所を營口に設け長壽堂藥房を創立す三十八年十二月長壽堂を奉天に移つし四十年哈爾賓及吉林に支店を設置す

實母　小野木親子（在鄕）
夫人　爲子　三十九歳　長男　彰文　次男　道夫
三男　忠久　長女　蘭香（小野家相續）
次女　紀子　三女　榮子

◉中辻喜次郎　營口盛進商行代表者（雜貨業）

原籍　富山縣氷見郡布勢村
現住　營口新市街盛進商行内（電話二〇番）

慶應三年八月十日生る私立專修學校（現中央大學）出身にして日清役後藤川類藏氏と共同して臺灣臺北に盛進商行を開設し卅七年十月又營口に同商行を設立し拮据勉勵して能く同行今日の基礎を作りたり

夫人　菊子

◉中尾萬三　滿鐵會社中央試驗所職員衞生科　從七位

原籍　京都市上京區二條通東洞院西入仁王門町二九番
現住　大連市加茂川町シ區一九號地

明治十五年十一月三十日生る同四十一年七月東京帝國大學醫科大學藥學科卒業同年八月關東都督府技術員囑託四十三年五月都督府技師同月現職に轉ず大正

元年十一月二ヶ年間獨逸ズイッツル兩國に留學被命大正三年歸任今日に至る

夫人　ゆき　二十四歳

◉長濱敞介（シヤウスケ）　永順洋行總支配人（綿絲布貿易業）大連銀行專務取締役　大連取引所信託會社監査役　大連實業俱樂部理事　大連商業會議所商業部長　大連市會議員　從七位勳六等

原籍　東京市芝區西久保八幡町二四番地
現住　大連市大山通三五號地永順洋行內（電話三三九番）

慶應二年四月二十六日を以て生る舊姓名は鈴木淺太郎後長濱と改姓し近頃又敞介と改名す明治二十二年一月初めて横濱稅關に奉職し次で神戸稅關に轉任三十二年大藏省の選出を以て白耳義國に留學し三十四年歸朝途次歐州各國を巡遊す歸朝と同時に大藏省に奉職三十八年二月大藏省の命に依り滿洲に出張遼東守備軍司令部附となり次に關東都督府に轉じ技師に昇進大藏省鑑定官を兼任す四十年一月辭官同時に永順洋行の聘に應じて現職に任ず多年大連實業會長として貢獻する處多し

夫人　すぎ　四十歳　女　綏子（ヤス）　一歳

◉長岡覺雄　本派本願寺開教師　撫順出張所主任　親授

原籍　靜岡縣賀茂郡下河津村大字谷津三九四番
現住　撫順敷島町（電話一〇三番）

明治元年六月二十二日山梨縣南都留郡禾生村に生る同二十五年大學林入學二十八年卒業後大阪、宇都宮和歌山、松山、靜岡等の各監獄教誨師を勤め四十一年九月旅順都督府監獄教誨師に轉じ大正二年一月歸國同年十一月再來して現任に就く

養父君　法城七十歳　養母堂　りき六十五歳（以上在鄕）
夫人　ひで　四十二歳　女　ふさ　二十六歳

◉長野祐一　滿鐵會社運輸部職員　物品掛　勳七等　士族

原籍　鹿兒島縣鹿兒島市西田町一六二番地
現住　大連市近江町七區六ノ一

明治元年十一月十一日生る同三十五年七月七日鐵道書記に任ぜられ四十年四月一日南滿洲鐵道株式會社に入社現在に到る

母堂　くに　六十九歳　夫人　いさ
長男　清秋　十八歳　次男　清一　十五歳
三男　清武　十二歳　四男　清春　七歳
長女　美津子　五歳　二女　久子　三歳
三女　芳子　當歳

◉永野武一郎　旅順工科學堂教授　正六位　士族

原籍　島根縣松江市松江
現住　旅順新市街鴻の臺一一七官舎

明治七年八月十四日生る同三十年福島縣會津中學校教諭となり三十三年札幌中學校に轉任す三十七年文部省留學生として、英國に留學、三十九年八月歸朝と同時に廣島高等師範學校教授に任ぜらる四十四年四月現職に轉任し今日に及べり

夫人　理代子　男　三名　女　二名

永野朝一　都督府通信書記・大連郵便局電信課長　從七位勳七等

原籍　佐賀縣伊萬里町
現住　大連市兒玉町一一番地

明治六年一月十日生る同二十四年より三十七年七月迄長崎郵便局に勤務す同年八月臨時電信隊附として渡滿、三十九年十月關東都督府郵便電信局に轉じ今日に及ぶ

夫人　とよ子　三十二歳　長女　菊枝子　十三歳
長男　長（ヒサシ）　五　歳　二男　萬壽男　二　歳

永原正雄　三井物産會社安東出張所主任・安東商業會議所副會頭

原籍　靜岡縣駿東郡北郷村
現住　安東縣三井物産會社々宅（電話三五三番）

明治十九年一月五日生る同四十年東京外國語學校支那語科を卒業し四十年四月三井に入る以來牛莊奉天の各店に勤務し大正三年七月現任に昇轉す

永清文次郎　永清寫眞館主（寫眞業）

原籍　長崎市樺島町三五番地
現住　奉天城内鐘樓南（電話一八番）

明治二年一月一日生る幼少より米國渡航の志を懷き十六歳の時横濱商館に傭はれ後寫眞業を學び西貢に赴かんと期せしが會ま露國の旅順を經營するに當り同地に渡航して某寫眞屋に身を寄せ明治三十三年奉天に移居し某露人と寫眞屋を協同經營せしも三十六年よりは獨立營業せり日露戰爭破裂するや天津に引上げ此間我總司令部に滿洲地形其他軍事に關する有益の寫眞を獻上して大に嘉奬せられ奉天陷落後率先して軍政署の特許を得て再び奉天に返へりて舊業を開始し以て今日に到る

夫人　たね　三十六歳　嗣子　實夫　十六歳

南部重遠（號露庵又鐵叟）安東新報社長兼主筆

原籍　佐賀縣佐賀市水ヶ江町

現住　安東縣大和橋通三ノ一番地

元治元年四月二十五日肥前平戸に生る二十四歳の時福岡に私塾を開設す其後門司に於て新聞社の主幹となる十年前安東縣に來りて新聞事業に關係し目下現職に在り若き頃より江湖に浪遊し一時は政黨にも關係したることもあり東京に於ける戲作の筑前琵琶歌川中島及湖水渡りの二曲は今猶世人に傳唱さる

夫人　マサ子　四十八歳　長男　重彦
養女　冬子　十八歳　同　鷹子　七歳

◉南洞　孝　奉天商業會議所書記長

原籍　岩手縣西磐井郡平泉村平泉一〇二番戸
現住　奉天大西門內

明治十七年六月二十三日生る同三十八年三月東亞同文書院商務科卒業三十九年一月奉天兩級師範學堂教習に聘せられ四十年三月奉天法政學堂教習を兼務す四十二年六月法政學堂を辭し翌二月師範學堂を辭す四十三年四月奉天商業會議所書記長に就職四十四年一月辭職大正二年二月再び奉天商業會議所書記長に就任し以て今日に及ぶ

夫人　とみ子　二十七歳　長男　成穗　八歳
長女　愛子　六歳　次女　貞子　四歳

◉楢崎猪太郎　關東都督府技師海務局長　滿鐵會社埠頭事務所長　大連海務協會々長　高等官四等正六位勳五等

原籍　福岡縣糸島郡北崎村
現住　大連市寺兒溝新宿舍一號　（**電話七三五番**）

慶應元年二月二十日生る明治十九年七月府立大阪商船學校航海科卒業廿四年十月甲種船長に又二十六年十二月英國甲種船長に及第す以來海上勤務をなすこと十八ヶ年三十九年五月三井物産會社神戶船舶監督を命ぜらる四十二年十一月關東都督府技師同時に關東都督府海務局長被命大正元年十一月九日關東州船舶職員懲戒委員長を命ぜられ何れも今猶現職に在り

夫人　たけ子　三十九歳　甥　幹一　二十九歳

◉夏秋龜一　日滿商會主（運送及日露貿易業）北滿製粉株式會社取締役　松花銀行監査役　哈爾賓居留民會副會長

原籍　佐賀縣佐賀市赤松町五九番地
現住　哈爾賓新市街　（**電話一六九番**）

明治七年一月十一日生る同三十二年東京帝國大學政治科卒業直に支那及米國に遊び翌三十三年九月露國に到り生絲及日露貿易に從事す其間歐洲各國を遊歷

し三十九年歸朝半歳ならずして露國に到り轉じて四十二年哈爾賓に來り引續き現業を經營して今日に至る

母堂　さき　七十歳（在郷）
夫人　律子　二十九歳

◉中井（ナカライ）熊太郎　都督府通信書記　撫順郵便局長　勳七等　士族

原籍　福岡縣久留米市莊島町二四一番地
現住　撫順郵便局官舍（電話七〇番）

明治八年四月二十九日生る同二十九年尋常中學校を卒業し同年郵便電信書記補に任じ久留米郵便電信局勤務三十四年三月東京郵便電信學校通信科卒業同年五月通信書記に任じ久留米本局勤務三十八年五月臨時電信所に配屬從軍同年六月大連に上陸東大連通信所長となり三十九年九月關東都督府郵便電信局熊岳城支局長に任ず後柳樹屯、大連、海城、鐵嶺、長春、安東縣各地郵便局に勤務して大正三年三月現職に任ぜらる

母堂　りき子　六十六歳（在郷）
夫人　しまゑ子　二十九歳
長男　二郎　十二歳（在郷）
二男　四郎　四歳
三男　五郎　二歳

◉名川輔二郎　滿鐵會社運輸部職員　從六位勳六等

原籍　新潟縣中頸城郡板倉村字長嶺無番戸
現住　大連市乃木町四番地

嘉永五年十月二十三日生る明治九年頃より十三年八月迄地方學校に於て又同年九月より二十六年九月迄東京に於て學校教職を勤め同年十二月より官設鐵道の驛務に從事三十八年十一月滿洲安東縣上陸軍臨時鐵道監部に奉職四十年四月滿鐵會社に入り現職に就く明治四十二年五月一日清國皇帝陛下より第三等第一双龍星章を贈授さる

夫人　みふ　男子　二名　女子　四名

◉直村盛之助　滿鐵會社工場鐵工課長　從六位　士族

原籍　福岡縣早良郡鳥飼村字谷四六一番地
現住　大連市外沙河口二丁目三番地社宅

明治八年七月五日生る同三十三年七月京都帝國大學理工科大學機械科卒業直に山陽鐵道會社に入り同鐵道の官有となると同時に鐵道廳に引繼がれて勤續す四十年十二月轉じて滿鐵會社に入り技師に任ぜられ撫順炭坑機械課長となる大正元年十一月現職に轉

す

夫人　富子　二十九歳　長男　啓次　八歳
長女　貞子　四歳　次女　信子　二歳

●直井巳之次　滿鐵會社衛生課職員　從六位勳四等　士族

原籍　千葉縣市原郡姉崎町推津
現住　大連

明治二年九月八日生る二十六年第一高等中學校醫學部卒業二十七年八月陸軍三等軍醫歩兵第四聯隊附正八位二十八年一月出征三十九年五月功に依り勳六等瑞寶章を賜はる三十年十月陸軍二等軍醫同年十二月從七位三十一年九月軍醫學校入學十二月同校全科修了同年十一月一等軍醫職務心得三十三年十一月一等軍醫三十四年三月正七位三十五年五月臺灣守備騎兵第一中隊附三十六年十一月叙勳五等三十八年一月出征六月旅順要塞病院附十二月關東陸軍病院旅順分院長三十九年四月戰功に依り勳四等十一月叙從六位四十年三月滿鐵會社醫員に登用さる四十年十一月三等軍醫正四十一年十月鐵嶺分院長大正元年八月鐵嶺醫院長兼醫長大正四年秋本社衛生課に轉す

●難波勝治　米國領事館員

原籍　岡山縣英田郡大原村古町
現住　大連市西公園町四七號地

明治十年十月生る二十三年小學校を出で播摩舊三日月藩備岸南岳翁に就て漢籍を專攻す二十八年京都同志社英語專修科に入り三十二年卒業翌三十三年より三十五年十二月迄備中高梁順正女學校教頭となる三十六年一月より三十八年二月迄紐育に留學四十年十月現職に就きて今日に及ぶ

夫人　英子　長女　絢子

●生川（ナルカワ）玉樹　滿鐵會社醫院大石橋分院長兼關東都督府囑託醫　從七位勳五等

原籍　三重縣四日市市濱田
現住　大石橋滿鐵社宅

明治四年正月生る二十四年第三高等學校醫學部卒業二十七、八年戰役に從軍勳六等旭日章を賜はる二十九年原籍地に開業三十七、八年戰役に應召從軍第三師團に勤續中南滿鐵道株式會社に轉し奉天公主嶺醫院長を歴て現任に就く

夫人　雪江子　長女　繁子
次女　雪子

◉成田昌俊　成田醫院長（醫師）　士族

原籍　青森縣南津輕郡藏舘村
現住　安東縣二番通五の一番地（電話一九番）

明治十七年二月十日生る同四十一年京都醫科大學醫學科卒業直に醫員として同校附屬醫院に勤務す四十三年三月渡滿安東縣佐々木病院に入る同年十月獨立開業して今日に至る内科及小兒料を專門とす

父君　武一　五十五歲　母堂　よし　四十歲
夫人　たか　二十九歲　長男　俊一　三　歲
長女　あや　一　歲

◉鍋島吾造　豐前屋主（質業）大連質屋組合取締

原籍　大分縣下毛郡櫻洲村四四五番地
現住　大連市東鄕町二の一七號地（電話一一一七番）

萬延元年九月七日生る明治二十一年市町村制發布後村會及郡會議員の職にありて村治に盡すこと數年二十五年辭職して商界に身を投じ傍ら蠶業に從事す三十九年五月渡連現地に於て豐前屋を開設して今日に迨ぶ

夫人　安　子　四十四歲　長女　絹　子　二十一歲
次女　八重子　十一歲

◎長濱丹治　滿鐵會社公主嶺醫院長　正八位勳六等

原籍　山口縣阿武郡萩町二六八七番地
現住　公主嶺附屬地滿鐵社宅

明治十年十二月十三日生る同三十三年第三高等學校醫學部卒業後、臺灣總督府醫院醫務囑託、臺北縣警察醫務囑託等に奉職し三十七年陸軍三等軍醫に任ず日露戰役の功に依り勳六等を賜はり四十年二等軍醫に昇進す同年三月退官同時に滿鐵會社醫員となり沙河口分院長被命、大正四年秋現任に轉ず

◉村田誠治　滿洲日日新聞社副社長　士族

原籍　栃木縣下野國安蘇郡佐野町
現住　大連市山縣通二八番地（電話一二三六番）

文久三年四月十三日生る鄕里の小學を卒りて後東京に出で英語學を修め明治十八年英語教師となり二十年東京に於て公論新報の主筆となる二十二年國會新聞編輯長に任す二十五年後は佛語修業の傍ら文を賣りて生活す二十九年神戶關西實業新報主筆に聘せられ三十一年臺灣臺北に航し臺灣日日新報主筆兼經營者となる三十九年東京に歸り四十一年再び招聘に應じて臺灣日日新報主筆兼副社長となり四十三年八月迄

臺灣に在住す四十四年七月渡滿滿洲日日新聞社主筆兼經營者となる大正元年八月以後は專ら同社經營に任じて今日に至る

夫人　梅子四十三歳　長男　眞策二十歳（以上在國）

◉村田昇清（ノリキヨ）　關東都督府技師民政部警務課勤務　高等官三等從五位勳四等　士族

原籍　高知縣香美郡吉川村古川四〇番屋敷

現住　旅順新市街特權地二四號（電話四二〇番）

明治五年一月一日生る同二十二年醫術開業試驗及第後高知縣立病院醫員傳染病研究所助手を歷勤し三十二年九月牛莊衛生局醫長三十三年六月兵庫縣技師高等官七等同年十一月從七位三十四年六月兵庫縣警察部衛生課長三十五年四月兵庫縣立福原病院長兼務同年六月高等官六等同年十月正七位三十七年七月高等官五等同年九月從六位に歷進す三十九年四月三十七八年事件の功に依り勳五等双光旭日章及び金四百圓を賜はる三十九年十月高等官四等同年十二月正六位四十年九月關東都督府技師高等官四等四十三年九月高等官三等同年十二月從五位に進む四十五年四月歐米各國へ出張被仰付同年九月米國華聖頓に於て開會の萬國衛生及民勢學會へ列席す同年六月勳四等瑞寶章を賜はる大正二年十二月地方病及傳染病調查會委員及幹事兼務となり大正二年九月產婆試驗主事を兼任す

母堂　衣　六十六歳　夫人　さめ　三十四歳
長男　洋一　二歳　長女　芳子　七歳
次女　伊那子　五歳　三女　華子　四歳

◉村田慤麿（コシマ）　滿鐵會社運輸部職員　士族

原籍　東京市小石川區高田老松町六〇番地

現住　大連市霧島町ヌ區五三號

明治十四年十月二十五日山口縣に生る、同四十年七月東京帝國大學法科大學政治科卒業、四十年九月滿鐵會社に入社、四十二年九月米國留學を命ぜられ鐵道業務を見學し四十四年五月紐育發英佛獨各國を巡遊して四十四年八月歸社現在に到る

母堂　輝子　五十七歳（在鄉）
夫人　絹子　二十五歳　長女　綾子　三歳
長男　英麿　二歳

◉村田重治　鴨綠江採木公司理事長　正四位勳三等　林學博士

原籍　東京市芝區高輪南町三〇番地

現住　安東縣鴨綠江採木公司社宅

文久元年九月二十三日生る明治二十年七月東京農林學校卒業、農商務省に出仕し二十四年林務官に任す爾來愛媛熊本宮城各大林區署長、農商務省山林局、林政課長、林業試驗場長に歷任し大正元年十月現職に擧げらる曩に農商務省在官中明治三十三年歐洲各國の林政調査を命ぜられ墺匈國、獨逸、佛蘭西及英國等を視察す同四十二年林政に關する論文を提出して林學博士を授けらる

夫人　あい子　四十九歲　男　重夫　二十四歲
次女　繼子　十九歲　三女　操子　十六歲
四女　靜江子　十二歲

● 村上欽藏　滿鐵會社地質研究所職員

原籍　京都府何鹿郡志賀鄕村
現住　大連市神明町レ區一七號

明治十四年十月十二日生る同四十二年七月東京帝國大學理科大學地質學科專攻科卒業、四十三年六月滿鐵會社に入り現任に就けり

夫人　清子　二十四歲　長男　一德　三歲

● 村上眞（マコト）　村上農場主（農業兼用達商）

原籍　福岡縣福岡市濱入町二番地
現住　大石橋石橋大街

明治二年五月十九日熊本に生る夙に身を軍籍に置きしが同三十二年實業界に投じ北京天津等に活動す天津日租界瑞穗洋行の牛乳搾取業及用達は當時の經營にして今尙繼續しつゝあり三十八年一月滿洲に來り各地視察の結果同年五月大石橋に於て遼陽軍政署に土地拂下を出願す會ゝ同地に日本人會設立され其會長に就任するや自己名義の下に借受けたる土地の全部を會員に貸與す三十九年民會の組織成りて亦其會長に選ばる同四十一年更に滿鐵會社より荒廢の地を借入れて開墾し果樹を栽培す民會長在職中學校を設立し又在鄕軍人會を組織す現下農場經營及陸軍用達を爲しつゝあり

夫人　艶子　三十八歲
長男　輝文　二十二歲（入營中）
次男　輝武　十八歲（旅順中學在學）
長女　十五子　十六歲（旅順女學校在學）

● 村上鶴藏　村上組主（漁業、銃砲火藥、食料雜貨商）士族

原籍　東京市神田區三崎町三ノ一番地
現住　旅順舊市街東鄕町三番地（電話一一九番）

安政五年五月十日岡山に生る早年より岡山及上海に於て實業に從事し明治二十四年九月より東京陸軍被服工長學舍に奉職す二十六年東京製皮會社副支配人に就職中日清戰役に際し同社代表者として第一陸軍司令部用達となり從軍す凱旋後東京に於て陸軍所屬各官衙の被食糧食軍靴の御用商を營むこと數年其間九段牛ヶ淵にパノラマ國光館を建設したり三十七八年戰役に際して漁業團を組織し滿洲軍全部の生魚供給を大本營より命ぜられ滿洲守備軍附となる旅順の陷落するや更に捕虜一萬有餘人の副食物一切の用達を命ぜられ同三月旅順港に於ける漁業の許可を得たり翌三十九年大連に水產組合を組織し同年又關東洲水產會社を組織し後其專務取締に擧げらる爾來旅順衛生組合副組長、旅順蔬菜市場理事長等に就職せしが大正二年旅順聯合町內會の組織せらるゝや其會長に擧げられ大正四年十月旅順市制施行に到る迄在任したり最近陸軍の發明なる高粱を原料とする大正味噌の製造に着手しつゝあり

夫人　まさ　三十九歳　長男　政明　十七歳
二男　鋼太郎　十三歳　長女　勝（他嫁）
二女　京子　二十一歳

◉村井啓太郎　滿鐵會社地方課長　大連市會議員　勳六等　士族

原籍　福岡縣久留米市京町一三六番地
現住　大連市山城町八番地（電話一四八八番）

明治八年十二月生る三十一年六月東京帝國大學法科大學政治科卒業翌年一月東京朝日新聞社に入り三十五年四月より三十五年一月迄歐洲諸國を巡遊視察す北京時變の功に依り勳六等瑞寶章を下賜せらる四十年三月滿鐵會社囑託となり同年十二月調查役に轉じ大正三年八月現任に昇轉す

夫人　純子

◉村井啓次郎　滿鐵會社埠頭事務所上海支所長　勳六等　士族

原籍　東京府豐多摩郡千駄ヶ谷村字穩田一一八
現住　上海佛租界寶昌路三一七（電話西二四八番）

明治八年八月十八日生る、二十九年七月東京商船學校卒業、同年八月三井物產會社に入り四十一年四月迄海上に勤務し同年同月上海支店勤務となる四十四年十月滿鐵會社に入り現職に就く

父君　重二郎　六十六歳　母堂　ろく　五十九歳
夫人　たつゑ　四十歳　長男　武夫　四歳

◉村井隆治　村井材木店主（材木業）

原籍　愛媛縣西宇和郡千丈村字川の内
現住　大連市信濃町七二號地　（電話長四六四番）

明治十三年七月十日生る同三十年門司市に於て材木業に從事す三十八年十月渡連現地に開店し今日に到る

父君　利左衞門　五十七歲　母堂　とり子　四十七歲
夫人　稻　實　二十七歲　女　利　子　六　歲

◉村木助治　村木洋行主（貿易並土木受負業）安東銀行取締役

原籍　兵庫縣揖保郡神部村の内那波野村一七番地
現住　安東縣大和橋通七丁目二番地　（電話六七番）

明治十年八月二十四日生る同三十七年五月朝鮮鎮南浦に航し居ること數日安東縣の我有に歸すると同時に卒先同地に入りて舊市街大街に開店し軍政署軍隊鐵道班等の御用商となり其後本溪湖、草河口、朝鮮宣川等に出張所を開設し商務の益々旺盛なると與に現所に轉居し現在に至る

夫人　ひ　さ　三十三歲　長男　輝　雄　十　四　歲
次男　隆　雄　二　歲　長女　靜　枝　七　歲
舍弟　光　治　三　十　歲　同夫人　一　枝　二　十　歲

◉村林孫四郎　關東都督府中學校教諭　國語漢文科主任　高等官七等從七位　士族

原籍　長崎縣東彼杵郡鈴田村二〇四番地
現住　新旅順特權地三三號地

明治九年九月十六日生る同三十一年三月長崎尋常師範學校卒業、卅三年東京高等師範學校卒業、師範中學の國語及漢文科、高等女學校國語科教員免許狀を受く三十一年以來長崎縣大村高等小學校訓導及島根縣師範學校、鹿兒島縣師範學校、門司市立門司高等女學校教諭を歷任し大正四年六月現任に就く

母堂　貞　七十四歲　夫人　すが子　三十四歲
長女　須磨子　十　歲　長男　隆　平　七　歲
次男　修　平　四　歲

◉村津　寛　大連重要物產取引所長　大連商業會議所特別常議員　從六位勳六等　士族

原籍　福島縣双葉郡請戶村
現住　大連市兒玉町　（電話一三一二番）

慶應三年十月十二日生る夙に官界に入り北海道廳、拓殖務省、內務省屬官及北海道廳支廳長高等官五等に歷任し後官を辭して石狩石炭會社支配人及東洋拓殖會社員等に轉じ目下大連重要物產取引所長たり

夫人　德　子　三十七歲　男　要　十　四　歲

●村松武一郎　滿鮮旅行案内社主

原籍　靜岡縣周智郡宇刈村春岡
現住　大連西公園町ブ區二號（電話七六一番）

元治元年八月二十八日生る明治二十二年神戸に於て書店を開業し旬刊の廣告新聞及神戸港なる新聞を創立經營す後歸國して或は掛川銀行の横濱支店長及禮具會社長を兼務し或は神奈川二ッ谷にマッチ工場を設立してピンヘット燐寸を專賣すること三年又印度孟買向き黄燐マッチを發賣すること五年或は東京商業銀行常務取締となり同行臺灣支店長として同島に在勤すること二年後歸京して相互福德會社を創立し其社長たること三年又第六師團經理部に勤務すること一年明治卅八年二月滿洲倉庫の勤務を以て始めて大連に來たり翌年二月辭職して遼東用達組を設立し四十年旬刊新聞南滿洲を創刊し後之れを日刊の夕刊紙となせしも保證金問題の爲めに解散の厄に遭へり四十一年滿鮮旅行案内社を創立して今猶經營中なり近く又新案の日本ツラスト組合を企畫し本部を東京に支部を各地に設けて活動の準備中なり

夫人　福子　四十二歳（女子高等師範出身）

●向野堅一　茂林洋行主（貸家及代理業）　奉天共融組合理事　滿鐵諮問委員

原籍　福岡縣鞍手郡新入村大字上新入一九五〇番地の二
現住　奉天鐵道附屬地西塔大街一丁目第三（電話一一〇番）

明治元年九月四日生る同廿六年上海日清貿易研究所卒業後日清戰役に際し通譯官として特別任務に服す二十九年北京日本公使館用達商を營み筑紫辨舘を開設せしも三十三年義和團に破壊せられて廢店す三十九年奉天に於て石炭販賣並に軍用品拂下販賣業に從事す四十年貸家建築瀋陽建物組合主任となる

夫人　修子　二十九歳　長男　普　十七歳
二男　有二　十五歳　三男　元生　十三歳
四男　啓助　十一歳　長女　信子　六歳
二女　克子　二歳

●宗像計太郎　滿鐵會社技術局職員

原籍　長崎縣壹岐郡武生水村三七五番戸
現住　大連市伏見臺滿鐵社宅四七號

明治七年二月二十五日生る同三十年三月臺灣總督府土木局勤務となり三十四年十二月同局營繕事務主任に昇轉す四十年四月滿鐵會社に入り總務部土木課事務主任に任せられ翌年十二月工務課管理係主任に

轉す大正三年五月總務部技術局管理係主任となりて現在に至る

父君 新八 六十四歳 母堂 つた 六十一歳
夫人 久美 四十歳 長女 富士子 十四歳
二女 須惠子 十二歳 長男 敎親 六歳
二男 寅三 二歳

◉武藤宇一郎 大阪朝日新聞通信員

原籍 栃木縣足利郡筑波村大字縣二三番地
現住 旅順市青葉町二九番地

明治九年八月六日群馬縣新田郡九合村に生る縣立中學校卒業後、前橋集成學館、東京專修學校、東京簿記學館、東京法學院に學び新田郡書記、北海道商業銀行等に就職し後東京千代田鐵工所、東京共通運輸株式會社等の支配人となりしが戰爭後旅順に來り大阪朝日新聞通信員となる其後旅順衞生組合長に推選せられ辭任後は通信員專務となれり

夫人 てる 三十五歳

◉上田恭輔 滿鐵會社總務部庶務課職員 秘書役 正六位勳五等

原籍 東京市赤阪區中之町三番地
現住 大連市濱町一〇ノ三（電話四三番）

明治三年十二月十四日生る壯年米國に遊學し業成りて學位を受く歸朝後臺灣總督府通譯官に出仕す日露戰役の際從軍して總司令部附被命、平和後都督府翻譯官となり滿鐵會社の創立するや入りて調査役となり後現職に轉す

夫人 つぎ 三十四歳 長男 喜一 五歳
次男 健二 三歳 長女 美部子 七歳

◉上田統 都督府事務官 鐵嶺警務署長兼鐵嶺領事館警察署長 從七位 士族

原籍 東京市赤阪區傳馬町三丁目一七番地
現住 鐵嶺警務署官舍（電話七〇番）

明治元年十月二十七日生る同二十六年東京法學院卒業、三十一年四月神奈川縣警部、三十八年三月大藏省煙草專賣局屬に任じ四十一年一月關東都督府警部に轉す大正三年四月同府警視に昇任し現職に在り

夫人 喜代子 四十一歳 長男 日出雄 二十三歳
次男 明雄 二十一歳 長女 千代子 十九歳
四男 進 十二歳 五男 毅 四歳
（以上皆在東京）

◉上田久衛 上田〇商會主（雜貨文具商） 奉天金融倉庫株式會社取締役 奉天信託會社取締役 奉天共融組合專務理事 奉天居留民會評議員 勳八等

原籍　愛媛縣喜多郡粟津村大字多喜村甲一〇三番地
現住　奉天小北門裡第一區警第四四號地（局電話二二二番）

明治三年十一月二十四日生る同二十七八年日清戰役に參加し三十年より三ヶ年間鄕里白瀧生絲株式會社專務取締役たりしか三十六年粟津村名譽村長となる三十七八年日露戰役に參加、三十九年渡滿、現所に上田〇商會を開設して今日に到る

夫人　璋（タマ）子　三十二歲

◉上田安次郎　滿洲製粉會社長春出張所主任

原籍　奈良縣磯城郡耳成村大字內膳
現住　長春東一八區五四號地　（電話五七二番）

明治三年六月六日生る同二十六年慶應義塾理財科卒業同時に橫濱貿易商增田屋（阿部幸兵衞氏經營）に商業見習の爲め入店す二十八年同店員として砂糖事業視察の爲め渡臺し三十一年歸國す同店が越後インターナショナルオイルコンパニーの石油一手販賣を引受けて以來七ヶ年間其支配人たり三十八年麥粉事業視察の爲め米獨二國に渡航四十年皈國す同年帝國製粉會社の日本製粉會社と合併すると同時に其支配人となりて四十三年一月渡滿、鐵嶺製粉會社に入り大正三年八月長春製粉會社に轉じ今日に及ぶ

◉上畠（ウエハタ）五一郎　滿鐵會社中央試驗所職員 應用化學科

原籍　大阪市東區伏見町三丁目一四番地
現住　大連市加茂川町シ區一號　（電話五四〇番）

明治十五年十二月一日生る同四十年京都帝國大學理科大學化學科卒業、四十三年四月滿鐵會社中央試驗所に入り翌年末研究の爲め歐洲に渡航し大正元年冬歸社、寺兒溝製油所に勤務せしが其後現任に就けり

夫人　はつ　三十歲　男　貞　八　歲

◉上野道故　滿鐵會社大連醫院醫長

原籍　新潟縣中頸城郡吉川村原野町
現住　大連市山城町六ノ三

明治十二年生る同三十九年十一月京都帝國大學醫科大學卒業後同校助手となり札幌逸見病院產婦科長を經て大正二年二月滿鐵會社大連醫院產　婦人科醫長に任ぜらる四年七月京都帝國大學醫科大學に留學を命ぜられ目下在學中なり

夫人　のぶ　二十四歲　長女　芳　枝　六　歲
長男　道　隆　當　歲

◉上中(ウエナカ)治　扶桑號主（酒及雜貨商）
原籍　兵庫縣有馬郡鹽瀬村內石鹽二二四八番地
現住　大連市羽前町一七號地（電話八三一番）

慶應元年十月二十九日生る九歲の時大阪市に出で親戚の家に寓し小學校に入る後中學程度の進級學校に入り一年にして退學し漢學私塾の河野春颿藤澤南岳兩翁に就きて漢學を學ぶ後鄕に在りしが二十五歲の時再び大阪に出て牙籌を把ること十五年、明治三十八年二月渡連、現地に開店して今日に到る

母堂　や　の　七十五歲　夫人　保　三十七歲
男　龍　雄　十　二　歲

◉上木仁三郎　上木組主（請負業）
原籍　石川縣江沼郡鹽屋村九九番地
現住　奉天新市街西一條九號地（電話一五七番）

元治元年十月十日生る同三十八年六月大倉組員として渡滿し安奉線臨時鐵道の布設工事に從事す同年十一月奉天に至る四十一年八月大倉組を辭し其後單獨に請負業を營み今日に至る

夫人　さ　だ　三十歲　男　政　一　二十一歲

◉上松良隆　滿鐵會社埠頭事務所職員（大吉丸機關長）勳六等　士族
原籍　神戸市平野矢部町九九番地
現住　大連市越後町ユ區四號

明治十二年五月五日大阪に生る三十六年六月一等機關士に任ぜられ三十八年十二月機關長の免狀を受く大正三年七月滿鐵會社に入り現職に就く

母堂　春　枝　六十一歲　夫人　千代枝　三十一歲
長女　靜　枝　十　歲　次男　利　隆　七　歲
次女　直　枝　三　歲

◉臼井熊吉　臼井洋行主（特產物貿易業）重要物產取引所商議員　重要特產同業組合評議員
原籍　兵庫縣神戸市魚棚町二九番地
現住　大連市東綿町一一號地（電話一六五番・二三六二番）

明治五年五月一日生る本田久右衛門氏の二男にして明治二十七年臼井源藏氏の長女照子の婿養子となり同家の店務一切を繼承す明治三十九年渡連、現住地に臼井洋行を設立し滿洲に於ける特產物輸出の率先者として名を斯界に稱へたるが大正四年歐洲戰爭の結果より業務の一蹶を來し爾來整理に着手して業務を繼續せり

夫人　照　子　四十四歲　長男　弘　二十二歲

次男　侃治　十九歳　長女　萬年青　十七歳
次女　靜子　十三歳　三女　綾子　十　歳
三男　孟　六　歳　四男　亨

◉臼井幸治　山口運輸公司大連支店長代理

原籍　兵庫縣神戸市山本通五丁目二九番地
現住　大連市監部通一丁目二四番地（電話三六九番）

明治六年一月六日播州に生る二十八年山口運送店に入りて神戸支店及び大阪支店に勤務し四十一年一月大連支店長代理として渡連し今日に到る

父君　伊三郎　八十一歳　母堂　りえ　七十九歳
夫人　いさ　三十五歳　長男　虎夫　二十六歳
次男　忠雄　五　歳　三男　正治　三　歳
長女　千代子　二十　歳　次女　律子　十七歳

◉内海靜太郎　滿鐵會社中央試驗所職員庶務科

原籍　大阪市南區鰻町二丁目六六番屋敷
現住　大連市若狹町ロ區一號

明治十三年十二月二十日生る同二十七年大阪第三十四銀行に入り三十八年十二月辭して翌年一月東京株式會社東亞公司上海支店會計主任となり四十一年三月辭す同年四月香港上海銀行長崎支店に就職す大正元年十二月滿鐵會社に轉じ中央試驗場勤務を命ぜられ今日に至る

夫人　さだ　三十九歳　長女　靜子　五　歳

◉内田鎮一　支那衞生顧問　滿洲電氣株式會社取締役　營口在鄕軍人會支部長　營口民團議員　後備陸軍三等軍醫正從六位勳五等　士族

原籍　福岡縣山門郡瀨高町七一九番地
現住　營口新市街（電話二五三番）

明治六年六月二十八日生る二十八年二月陸軍三等軍醫に任ぜらる三十五年十一月一等軍醫に昇進す三十七年二月第十二師團第三野戰隊附を命ぜられ九連城楡樹子、大寒坡嶺、遼陽等の戰鬪に參加し同年十月一等症を以て轉送され小倉豫備病院に入院す同年十一月全治退院後小倉豫備病院附となり翌三十八年一月大里俘虜收容所開設委員を命ぜらる翌年三月小倉豫備病院附被免、關東都督府附安東縣軍政署勤務及び營口軍政署附を命ぜらる同年四月三十七、八年戰役の功に依り勳五等双光旭日章及金五百圓を賜はる同年十二月營口軍政署撤廢、同月淸國營口海關道梁如浩氏の招聘に應して衞生顧問となる四十三年八月陸軍三等軍醫正に昇任し同年十二月依願豫備役被仰付、引續き支那衞生顧問として今日に及べり

父君　逸藏　七十六歳　母堂　けい　七十一歳

夫人　光枝　三十二歳　長男　逵　五歳

梅田嘉四郎　滿鐵會社長春醫院長事務取扱兼醫長

原籍　京都府竹野郡溝谷村字溝谷三六六番地
現住　長春大和ホテル內

明治二十年一月十六日生る同三十五年四月東京府立第一中學校三年級入學、三十八年三月卒業、同年七月第三高等學校入學、四十一年七月卒業、同年九月京都帝國大學醫科大學醫學科入學、大正元年十一月右卒業、同二年一月より四年六月迄京都醫科大學附屬醫院に勤務し四年六月南滿洲鐵道株式會社に入り同時に現職を命せらる

父君　養安　七十六歳

海南（ウナミ）右門　有馬當主（實業）　勳八等

原籍　新潟縣刈羽郡柏崎町
現住　遼陽城內

慶應二年八月十五日生る日清戰役に從軍し凱旋後東京建物株式會社に入り横濱支店長たること四年日露の役に有馬組に轉じ近衞師團に從屬し鎮南浦、九連城を經て遼陽に來り有馬組の店舗を開設し傍ら日本人會を組織して其會長に推され居留民會の創設せらるゝや亦た其會長に推さる其他實業會長をも兼たり四十二年四月獨立して有馬當を經營して今日に及べり明治四十四年來石綿鑛採掘に就き幾多の調査研究を重ねつゝあり

夫人　姬子　四十五歳　長男　增雄　十五歳

浦　謹爾　滿鐵會社南滿洲工業學校教諭　正七位勳六等　士族

原籍　山口縣豐浦郡小月村
現住　大連市播磨町七區三號

明治四年七月十七日生る同二十六年東京高等工業學校を卒業し二十九年より大正二年迄鐵道院に奉職せしが同二年南滿洲工業學校に聘用され現在に到る

夫人　とし子　三十二歳　長男　敬三郎　六歳
長女　智惠子　二歳

浦　保壽（ヤストシ）　三井物産株式會社長春出張所主任　長春居留民會常議員　滿鐵諮問委員　勳六等　士族

原籍　高知縣長岡郡三里村
現住　長春三井物産社宅　（電話六三番）

明治十四年二月二十五日生る同三十八年東京外國語學校清語科を卒業し三十九年三井物産會社に入社して天津在勤となる四十五年大連支店に轉勤す大正二年三月現任に擢用されて今日に至る

母堂　茂　子　六十二歳　（在東京）
夫人　喜美子　二　十　歳

◉**牛島　蒸**　滿鐵會社安東縣保線係主任
原籍　福井縣大野郡大野町
現住　安東縣九番通一號ノ一　（電話四三六番）

明治十五年三月二十三日生る同四十一年七月東京帝國大學工科大學土木科を卒業し翌月滿鐵會社に入りて工務課勤務となる爾來四十三年一月安奉線橋頭工務課第三派出所勤務に翌年十一月同保線係勤務に大正三年四月連山關保線係勤務等に轉じて同四年一月現職に昇任せり

母堂　ゆ　き　四十八歳　夫人　玉　枝　二十五歳
長女　和　子　六　歳　長男　榮　四　歳

◉**野村孝太郎**　滿鐵會社長春醫院醫長心得 婦人科部長　正八位勳六等　士族
原籍　東京府荏原郡大井町五一六番地
現住　長春滿鐵醫院社宅

明治十四年八月十四日生る同三十二年三月前橋市集成學校卒業、同年四月東京醫學專門學校入學、同三十六年四月卒業と同時に内務省醫術開業試驗に及第し栃木縣産婆學校講師を拜命す同年十二月一年志願兵として入隊す三十七年三等軍醫として日露戰爭に從軍出征し三十九年二等軍醫に昇進す四十年滿鐵會社に入社し大正元年十二月獨逸留學を命せられ三年八月迄ミュンヘン大學にて研究しドクトル試驗に及第す大正三年十二月歸朝して現職に就任す

夫人　よ　し　二十六歳　男　寛　五　歳

◉**野村聿郎**　滿鐵會社工場職員設計課第四分科　士族
原籍　茨城縣東茨城郡綠岡村見川二三番地
現住　大連市若狹町フ區四八號地

明治十四年三月十日生る同四十二年七月東京帝國大學工科大學機械工學科卒業、同年八月滿鐵會社に入り現任に就けり

夫人　す　ず　二十六歳　長男　鼎　四　歳

◉**野村龍次郎**　日升洋行主（木材、銃砲火藥商）
原籍　鹿兒島縣揖宿郡山川村福元一三〇番地
現住　鐵嶺敷島町一丁目三號　（電話四四二番）

明治九年九月二十五日生る日露戰爭前より滿洲の開拓に志し明治三十六年鐵嶺に來り雜貨業を營みしが戰爭破裂するや捕虜として旅順に護送せられ後芝罘に追放さる由って大阪毎日新聞の通信員として同地

に活動せしが三十八年十月平和後再び鐵嶺に向へり雑貨業の外土木受負業及銃砲火藥販賣支那側官憲及學堂の用達等を營み一時損失を受けしことあるも支那革命の際巨利を博して店業を恢張し其後木材業をも兼營し在鐵嶺邦人中の最古參を以て稱せらる

母堂　梅　六十四歳　夫人　もい　四十歳

◉**野津孝次郎**　大連取引所信託株式會社常務取締役

原籍　島根縣松江市
現住　大連市神明町ナ區九番地（電話二六〇番）

明治七年十一月三十日生る幼少より第三銀行松江支店に勤務し明治三十三年八月同銀行大阪支店に轉じて爲替課主任となる三十七年七月第百三十銀行の整理を安田家にて引受くるや選れて同行に轉勤し爲替課長たるの傍ら整理事務に鞅掌したりしが事務の緒に就くや三十八年六月東京に轉勤し第三銀行本店爲替課長及安田銀行内の保善社勤務等に歴任し四十四年五月正隆銀行支配人となりて來連したり大正三年十一月内地轉勤となるや間もなく辭任し大正四年二月現職に選任せらる

父君　彌助　七十七歳　夫人　奈賀子　三十八歳
女　壽子　九歳

◉**野間雅人**　旅順第一尋常高等小學校長　士族

原籍　福岡縣山門郡東山村
現住　旅順舊市街白銀町一九號地

慶應元年四月二十三日生る明治十九年福岡師範學校高等師範科を卒業して同縣柳原、前田、添田等の各學校に訓導又は校長として歷任し育英に從事すること二十有三年、明治四十二年大連尋常高等小學校訓導兼校長に任し四十三年轉じて現職に就けり多年育英の功績に依り文部省、大日本農會、各教育會、其他官民の表彰に浴すること太だ多し

夫人　結子　四十四歳　長男　守人　二十六歳
二男　滿次郎　七歳　長女　薫　二十一歳
二女　秀子　十八歳

◉**黑崎眞也**　關東都督府事務官　庶務課長　高等官四等　正六位　士族

原籍　山形縣南置賜郡南原村
現住　旅順新市街大迫町九番地官舍（電話二三一番）

明治十一年五月五日生る同三十八年七月東京帝國大學法科大學政治科卒業、翌年十一月文官高等試驗に及第し四十年八月香川縣事務官補を拜命す四十一年

四月奈良縣事務官に任ぜられ四十三年七月大分縣事務官警察部長に轉じ大正二年七月關東都督府事務官民政部庶務課長に任ぜられて今日に至る

◉黑岩重人　滿鐵會社大連車輛係主任

原籍　長野縣南安曇郡烏川村
現住　大連市兒玉町三番地五號ノ三

明治十五年一月十日生る同三十九年七月東京帝國大學工科大學機械科卒業、同年八月野戰鐵道提理部雇員となりて來滿し四十年四月滿鐵會社に轉屬して今日に及べり

夫人　ともゑ子　二十一歲

◉黑澤輝彌　黑澤醫院主（醫師）

原籍　京都府宇治郡山科村椥辻一九戶ノ一
現住　大連市信濃町三二（電話五八九番）

明治十四年一月十六日生る同四十二年京都醫學專門學校を卒業す四十四年防疫醫として大連に來たり翌年三月辭任して開業せり小兒科は其專門とする處なり

夫人　光子　二十六歲　長男　昌彌　四　歲
次男　哲彌　二　歲

◉百濟文輔　關東都督府參事官　庶務課學務課兼務　警察官練習所敎務囑託　旅順市會議員　高等官五等　正七位　士族

原籍　山口縣厚狹郡高千帆村
現住　旅順新市街特權地二〇番地官舍（電話一四八番）

明治十六年四月二十一日生る同四十年京都帝國大學法科大學政治科卒業、四十一年山梨縣廳に奉職し屬又は警部として官房、學事、兵事、警察、衞生等の事務を分掌す四十三年文官高等試驗に及第し警視兼事務官補に昇任す四十四年同縣東山梨郡長に轉任し大正二年七月關東都督府參事官に轉補せられて今日に及ぶ同四年三月庶務課兼務を命ぜられ主として敎育に關する事務を視る最近大連及旅順に特別市制施行せらるゝや選ばれて旅順市會議員となれり今秋京都に於て擧行せられたる御即位大禮には都督部内奏任官總代として一代の盛典に參列したり

父君　忠敬　六十三歲　母堂　さま　六十二歲
夫人　光子　二十四歲　長男　十一郎　四　歲
長女　安子　一　歲

◉倉塚良夫　關東都督府技師　民政部土木課出張所長　高等官三等　正六位勳五等　士族

原籍　福岡縣早良郡西新町四六番地
現住　大連市兒玉町三番地官舍（電話三〇番）

明治十二年十月二十一日生る同三十四年六月第五高等學校大學豫科第二部卒業、三十七年七月東京帝國大學工科大學土木工學科卒業と同時に留守第一師團經理部雇員となり同年十一月關東州民政署技師に任じ高等官七等に叙せらる爾來關東都督府技師土木課勤務民政部大連土木課出張所勤務に歴任して四十二年九月高等官五等同十二月從六位に昇叙し同年十二月勳六等瑞寶章を賜はる大正元年九月高等官四等に同年十一月正六位に叙せらる同二年七月民政部土木課長心得より同年九月本任に就けり三年十二月勳五等瑞寶章を賜はる四年秋高等官三等に昇叙し英米へ出張を命ぜらる

母堂　やゑ子　六十三歳　　夫人　むら子　三十一歳
長女　千代子　八歳　　長男　憲一　七歳
二女　綾子　五歳　　三女　富美子　三歳
四女　芳子　一歳

◉倉岡　岩

㊎和湧、㊎和當農園主（高粱酒釀造及農業）滿洲電氣株式會社監査役　滿鐵諮問委員
士族

原籍　鹿兒島縣薩摩郡平佐村平佐三六〇〇番地
現住　開原鐵道附屬地第三區二號地
（電話長一〇五番　一〇三番）

明治十五年九月十二日生る同三十六年七月東京外國語學校清語本科に入學す三十七年四月陸軍通譯を拜命して日露役に從軍す三十八年十二月解傭三十九年十二年東京外國語學校第三年級に入學、四十年三月病氣の爲め退校す同年五月渡滿し、鐵嶺及開原等に開店せしが同年秋に至り營業の根據を現所に轉じて今日に及べり

夫人　千久子　二十五歳　　長男　勝行　七歳
次男　利行　六歳　　三男　信行　二歳
長女　由利子　三歳　　次女　美智子　當歳

◉國澤新兵衞

滿鐵會社副總裁　總務部長
總務部事務局長　運輸部長
正五位勳二等　工學博士　士族

原籍　東京府豊多摩郡大久保町字百人町二七〇番
現住　大連市兒玉町八（電話一一五番）

元治元年十一月二十三日高知に生る高知藩士四郎右衛門氏の三男にして明治二十四年分家す、二十二年帝國大學工科大學土木科卒業、同年八月九州鐵道株式會社に入社す、二十五年八月鐵道廳に採用せられ爾來鐵道技師として漸次榮進す、三十九年十一月滿鐵會社理事仰附けられ四十一年十二月同社副總裁に昇任す、大正二年十二月任期滿了にて退職、大正三

年七月再び同社副總裁仰附けらる大正四年工學博士を授けらる

母堂 辰 八十四歳　夫人 喜代 四十四歳
長女 （他に嫁す）　次女 貴美 十九歳
長男 新太郎 十四歳　次男 滿次郎 九歳
三男 陸三郎 七歳

◉國本小太郎 大連第一尋常小學校訓導兼校長

原籍 熊本縣飽託郡四里村貫
現住 大連市播磨町ス區第一號地

明治九年十月二十日生る三十一年三月熊本縣師範學校卒業後三十四年十二月迄同縣菊池郡原水尋常小學校長となる爾來同縣師範學校訓導、熊本市白川尋常小學校長等に歴任し大正四年四月關東州小學校訓導拜命同年九月一日現職を命ぜられて今日に及ぶ

夫人 はつみ 三十四歳　長男 彊郎 五歳
長女 睦子 十二歳　次女 和子 十歳
三女 惇子 七歳

◉國政與三郎 株式會社三星洋行常務取締役

原籍 東京市京橋區銀座一丁目六番地
現住 大連市淡路町四一號地

明治七年十一月三日生る同三十年十二月横濱市本町洋酒食料品輸入商合名會社明治屋本店に入り神戸支店副支配人及横濱本店副支配人を經て四十年一月神戸支店支配人に轉す同年十二月大連三星洋行取締役に就任さ同時に渡連し今日に到る

母堂 鶴子
夫人 兼子 三十五歳　長女 千鶴 九歳
二女 萬龜 六歳　長男 芳郎 三歳

◉久保要藏 滿鐵會社總務部事務局庶務課長 總務部交渉局第一課長 同第二課長 大連汽船會社取締役 従五位勳四等 士族

原籍 群馬縣佐波郡三郷村大字波志江村
現住 大連市兒玉町五番地（電話一三三四番）

明治八年九月二十八日生る二十七年十二月家督を相續す二十九年十二月文官高等試驗に合格して三十年二月大藏省に出仕す爾來累進して秋田稅務監督局長に任ぜられ四十年三月在官の儘滿鐵會社に入る四十五年歐米各國を視察し大正二年一月歸朝現職に就けり

母堂 かね 六十四歳　弟 義雄 二十五歳
妹 いさ 三十八歳 （瀬野馬熊氏に嫁す）
妹 つれ 三十五歳 （平田銈太郎氏に嫁す）

夫人　秀　子　三十歳　長男　威　夫　九　歳
二男　達　雄　六　歳　三男　正　雄　四　歳
四男　忠　雄　一　歳

久保章一　久保洋行主（金物商）

原籍　廣島縣廣島市鍛冶屋町
現住　大連市伊勢町四五號地　（電話②三五三番）

安政四年二月十四日生る明治三十八年一月故岡澤侍従武官長の渡滿に隨行を許されて各地を視察し同年七月大連監部通二丁目に久保洋行を創設す祖先以來數代廣島に於て船具金物商なるを以て亦た同業を營む爾來商勢好運に向ひ店舗を現地に移せり

夫人　龜　子　四十七歳　長男　善次郎　二十四歳
次男　正　夫　十　五　歳

久保田晴光　滿鐵會社南滿醫學堂敎授

原籍　岩手縣稗貫郡湯口村字湯口一番地
現住　奉天新市街西六條一四番地

明治十七年七月四日生る同四十三年京都帝國大學醫科大學生理科を卒業す同年十二月醫術開業免狀下附同時に同大學副手となり四十四年七月同大學生理學敎室助手に任ぜらる大正元年九月南滿醫學堂敎授任命と共に社命を以て京都醫科大學に於て一箇年間藥物學を研究し滿期歸社後現職に在り

夫人　柳枝子　二十六歳　長男　盡　二　歳
長女　榮　子　一　歳

久保田　巖　久保田齒科醫院主（齒科醫）　關東洲齒科醫師會長　南滿洲齒科醫學會々長

原籍　愛媛縣北宇和郡宇和島町
現住　大連市大山通二丁目三一番地　（電話一〇五五番）

明治二年九月一日大分縣日杵舊藩士の家に生る同九年上京東京醫學校に入り卒業後齒科專門醫學校に學ぶ二十四年醫術開業試驗に及第以來東京に於て開業すること六年更に米人ブラック氏に就き三年間修業後愛媛縣宇和島の有志の請ひに因り同地に開業す三十八年七月渡滿し現地に開業して今日に及ぶ

父君　喜　平　八十三歳　母堂　い　さ　七十六歳
夫人　た　け　四十五歳　長女　靜　子　十　九　歳
次女　瑜璘子　十　三　歳

久保田金平　滿鐵會社旅順驛長　旅順市會議員　戰蹟保存會幹事

原籍　東京府下荏原郡品川町一九〇番
現住　旅順市朝日町二ノ一四番地

慶應三年十一月十四日山口縣萩町に生る家貧にして

且つ幼年慈母を喪ひ郷里太田塾に苦學を重ぬ十四歳より獨立生活を營み具に艱苦を嘗む明治三十八年七月野戰鐵道提理部附驛長を拜命し四十年四月滿鐵會社に入り翌四十一年三月現職に任命さる爾來曠古の戰蹟を印せる旅順の地に驛長たるを格外の名譽とし故乃木將軍其他實戰に臨みたる諸將軍の實話を職務餘閑の許す限り母國より群到する戰蹟の憑吊者に傳へ以て白玉山上に眠れる二萬四千の護國の忠魂を慰するを第二の職務としつゝあり

夫人　けさゑ　四十歳　養女　なみ子　五　歳

◉久間善助　日東洋行主（貿易並精米販賣商）安東居留民會豫備行政委員　安東商業會議所常議員兼會計委員

原籍　長崎縣壹岐郡武生水村
現住　安東縣市場通九丁目（電話二七番　二〇四番　五二番）

文久二年十一月生る幼少より貿易業に從事し明治十八年朝鮮釜山にて貿易商を營む三十八年十月渡滿現住地に同業を開始し今日に至る目下株式會社安東油房取締役、安東窯業株式會社監査役たり

夫人　すぎ子　四十五歳　長女　ふじ子　十九歳
次女　春　子　十五歳

◉紅松（クレマツ）雄一　大連海關幫辦　士族

原籍　東京府北豐島郡高田村三三六番地
現住　大連市播磨町メ區三五號地

明治十六年一月十一日生る同三十七年東京高等商業學校卒業、翌年五月杭州海關に幫辦として赴任し四十一年十二月寧波海關に轉じ大正三年二月現任に就けり

父君　恒　徹　母堂　い　く
夫人　ぶん子
男　一　雄　六　歳　長女　總　子　八　歳
次女　冬　子　五　歳　三女　止　子　三　歳

◉九鬼榮助　滙泉涌燒鍋主（高粱酒釀造業）

原籍　大阪市西區幸町通四丁目四五番地
現住　大連小崗子南部（電話九九九番）

明治五年五月二日生る同二十九年桐材買出の目的を以て北清を視察し三十年二月芝罘に店舗を設け山東桐の輸出並に日本麥酒平野水の販賣及び日本軍艦の用達業を營む三十七年十一月營口に轉じ酒保用品の販賣を營みたりしが三十九年大連に移り東清公司の名を以て運送業を營む四十二年奉天に高粱酒釀造を

開始したるも蹉跌す四十四年再び大連に來り現地に於て復た高粱酒釀造業を營み今日に到る

夫人　さめ　二十九歳　長男　俊一　六　歳
次男　健二　四　歳　長女　妙子　一　歳

◉山內四郞

領事在長春領事館　兼關東都督府事務官　高等官五等　從六位勳六等

原籍　東京市
現住　長春領事館官舍

明治十三年二月生る同三十七年七月東京帝國大學法科大學佛法科を卒業して任官す三十九年四月三十七八年戰役の功に依り金六十圓を賜ふ同年九月外交官及領事官試驗に合格し同年十一月領事官補に任じ高等官七等に叙せらる四十二年二月從七位に叙せられ同年八月天津在勤となる四十一年四月露國皇帝陛下より贈與されたる神聖アンナ三等勳章を受領し佩用するを允許せらる四十一年七月外交官補に任ぜられ佛國在勤となる同年十二月大使館三等書記官に昇任し瑞典在勤を命ぜらる四十五年五月勳六等旭日章を賜はり大正元年八月韓國併合記念章を授與さる三年六月領事に昇任し長春在勤を命ぜらる同七月關東都督府事務官を兼任す

◉山田　基

滿鐵會社南滿醫學堂長兼教授兼奉天醫院長兼醫長　從六位勳五等功五級

原籍　兵庫縣城崎郡國府村內竹貫村四四一番地
現住　奉天新市街

明治八年十一月十四日生る同三十一年九月東京帝國大學醫科大學に入學し翌年二月陸軍衞生部依託學生となる卅五年十二月醫科大學卒業翌年一月見習醫官となり同年三月醫術開業免狀を得、同五月陸軍二等軍醫に任じ七月從七位に叙す三十七年十二月陸軍一等軍醫に進み三十八年一月正八位に叙せられ二月第三師團に附隨して出征す三十九年戰役の功に依り功五級金鵄勳章勳五等雙光旭日章を賜はる四十三年從六位に叙し陸軍三等軍醫正に昇任す同年六月在官の儘南滿鐵道株式會社醫長に任ぜられ同時に安東縣分院長被命、大正元年八月安東醫院長兼內科部長被命、大正三年十月南滿醫學堂長兼教授を命ぜらる

夫人　（死亡）

◉山田武吉　（號芙峯）

滿洲日日新聞記者　大陸雜誌記者　京城日報通信員　士族

原籍　靜岡縣靜岡市西草深町九番地
現住　大連市淡路町一八號地

明治八年五月五日生る二十三年獨逸語學校修業、二

十五年獨逸協會學校修業、二十六年第一高等學校修業、二十八年茨城日報記者となり二十八年同社の主筆となる以來二十九年臺灣總督府囑托三十年臺灣日日新報編輯主任、三十五年臺灣民報編輯長、三十六年臺灣民報主筆、四十一年大阪新報記者、四十二年平壤日報主筆。四十四年鎭南浦新報主筆等を歷任して大正元年滿洲日日新聞記者となり今日に及ぶ

母堂　しげ子　五十八歳　夫人　ちよ子　三十九歳

◉山田豊吉　滿鐵會社運輸部運轉課職員　勳八等　士族

原籍　東京市芝區愛宕下町
現住　大連市天神町

明治四年九月生る同二十四年三月日本鐵道會社汽車課に入る三十九年十月同鐵道の國有となりし際辭職す四十一年三月滿鐵會社に入り運轉課に勤務す

父君　善八　六十四歳　夫人　文子　三十六歳
長女　高子　二十歳　（他に嫁す）
長男　要太郎　十七歳

◉山田三平　遼東ホテル主（旅館兼麻袋銃砲業）大連貯金株式會社監査役、大連旅館業組合長

原籍　靜岡縣引佐郡東濱名村字佐久米五三番地
現住　大連市信濃町自八十七號地　至九十五號地
（電話一三一　五〇二　一、五〇一　一、五〇二　一、五〇三番）

明治八年三月十日生る幼少にして父に從ひ横濱に出で貿易商を營む同三十七年日露戰役に際し軍隊に隨ひ各地を經て平和前歸國し三十八年渡連し現業に從事して今日に至る

父君　三吉　六十三歳　夫人　すゑ子　三十四歳
長男　兼義　七歳

◉山崎誠一郎　外務書記生、在牛莊領事館

原籍　高知縣香美郡槇山村
現住　牛莊領事館構内

明治十三年二月生る同四十年二月統監府間島派出所通譯生を命ぜられ間島在勤となる四十二年十月外務省に轉任し猶間島に在勤す四十四年外務省書記生に任す大正三年八月牛莊領事館に來任す

夫人　晴意　三十歳

◉山口弘夫　關東都督府醫院長兼醫長　陸軍一等軍醫正高等官二等正五位　勳三等功四級　士族

原籍　東京市小石川區音羽町一丁目五番地
現住　旅順特權地區　（電話二二一番）

慶應二年十二月二十六日生る明治二十七年十二月帝國大學卒業同時に陸軍三等軍醫となる二十九年五月

免本職大學院入學被仰付、三十三年二月軍醫學校教官となる以來臺北醫院醫務囑託、臺灣總督府醫學校講師、醫術開業試驗委員を歷任し三十六年三月醫學研究の爲め獨逸駐在被仰付、三十七年四月歸朝す三十九年二月再び獨逸駐在被仰付、四十年十二月十二日歸朝同時に東京第一衞戍病院附被仰付、爾來陸軍省醫務局勤務、東京第一衞戍病院長、陸軍醫學校教官、三十七八年役衞生局編纂委員、臨時脚氣病調査會委員醫術開業試驗委員陸軍衞生材料調査委員等に歷任し四十四年十一月關東都督府醫院醫長を尋で院長を命ぜられ陸軍一等軍醫正に任ず大正三年十二月高等官二等に叙せらる

夫人　ゆう　三十三歲

◉山口義夫　滿鐵會社運輸部職員運轉課　士族

原籍　東京市麻布區狸穴三二番地
現住　大連市近江町七區五ノ四

明治十四年六月五日生る同四十一年京都帝國大學機械工學科を卒業し同年六月滿鐵會社に入社今日に至る

夫人　夫子　三十歲　長男　英夫　六歲
二男・剛　同　一　歲

◉山口重太郎　奉天日本基督教會牧師　士族

原籍　青森縣青森市長島八三番地
現住　奉天新市街西二條街

明治十七年九月五日生る同四十一年三月青山學院高等科卒業翌年九月明治學院神學部本科入學四十五年六月卒業同年七月青森日本基督教會傳道師として赴任す大正三年十月同教會辭任と同時に第二十八回大會に於て教師試驗に合格す同年十一月奉天日本基督教會に招聘せられ同十二月牧師に任職す

夫人　初子　二十三歲　長男　虔　一　歲
長女　光子　二　歲

◉山下重次郎　都督府通信書記　奉天郵便局郵便課長　從七位勳七等

原籍　新潟縣高田市新四ノ辻三五番戶
現住　奉天新市街西四條街一六號地　（電話一五五番）

明治五年三月八日生る同三十九年九月神戶郵便局より關東都督府郵便局に轉任す四十年十一月より同四十五年三月迄大連郵便局郵便課長勤務四十五年四月奉天郵便局郵便課長に轉じて今日に及ぶ

夫人　とよ子　男兒　四　名

●山下興家　滿鐵會社工場職員　士族

原籍　愛媛縣北宇和郡吉田町西小路六三番地
現住　大連市外沙河口三丁目三番戸

明治十四年四月三十日伊豫松山に生る三十九年東京帝國大學工科大學機械科卒業後渡滿、野戰鐵道提理部大連工場に奉職す四十年滿鐵會社創立に際し入社引續き勤務す四十二年社命を以て英國に四十四年米國に渡航して機關車製作を研究し四十五年歸朝現職に就けり

父君　與作　七十四歲　母堂　ひさ　六十九歲
夫人　あい　二十二歲　長女　もと　一歲

●山下勝次郎　山下商店主（醬油製造諸官衙用達商）大石橋實業會監事

原籍　廣島縣廣島市愛宕町一〇五番地
現住　大石橋大街六六番地

文久二年六月十五日生る明治十六年北海道に赴き札幌縣札幌郡に百萬坪の拂下を受けたるも大政官第一號達移民保護規則廢止と與に失敗す二十二年布哇に渡航し雜貨食料品販賣を營み二十四年英領ビクトリヤアパーメント街に轉じて同業を營む三十四年米國加州フレシノ市に同店を開き三十七年十二月同店を親戚に依託して去り翌年八月營口に上陸し食料雜貨商を營む四十二年四月大石橋に移轉し現業を營む

夫人　みか　二十九歲　養嗣子　次郎　七歲

●山路魁太郎　滿鐵會社築港事務所長　從四位勳六等　士族

原籍　福岡縣糟屋郡箱崎町
現住　大連市濱町一三番地（電話八五番）

明治五年十月十七日福岡市に生る三十二年三月東京帝國大學工科大學土木科卒業、同年七月兵庫縣技師に任ぜらる爾來三十四年七月臺中縣土木課長、同年十一月臺灣總督府技師、三十八年九月關東州民政署技師、卅九年九月關東都督府土木課長等を歷任し四十四年三月歐米に差遣せらる大正二年七月依願本官を免ぜられ翌八月滿鐵會社築港事務所長に就任今日に及ぶ

母堂　富貴子　六十八歲（在鄉）
夫人　あさ　三十四歲　長女　はま子　十三歲
長男　重省　十一歲　次男　圓次　八歲
次女　きみ子　七歲　三女　ふじ子　六歲
三男　正三　三歲

◉山路德松　滿鐵會社安東驛長

原籍　廣島縣沼隈郡千年村

現住　安東縣山手町五號地（電話一六番）

明治四年六月四日生る同二十七年七月遞信省鐵道書記拜命三十六年三月依願免本官と同時に北越鐵道株式會社運輸長に任ぜらる三十七年五月依願解職同時に鐵道作業局雇に任ぜられ野戰鐵道提理部附として渡滿四十年四月南滿洲鐵道株式會社に轉職す四十年八月營口驛長に轉じ四十三年十月運輸課勤務となる四十四年十月安東縣驛長に轉じ今日に至る

母堂　こら　六十九歳　夫人　たつ　三十六歳
長男　商（ショウ）　十三歳　二男　道（タカシ）　四歳
三男　汎（ヒロシ）　二歳　長女　遼（リョウ）　八歳
二女　素（モト）　六歳

◉山路好雄　天理敎遼東宣敎所權中講義

原籍　廣島縣沼隈郡藤江村

現住　大連市近江町四〇番ノ六七

明治十八年七月二十五日生る東京私立中央商業學校卒業後天理敎會講習會を卒業す明治四十年廣島天理敎中國支敎會承事に任ぜられ布敎に著手す四十二年權少講義となり大正二年九月權中講義となる

父君　藤十郎　母堂　つた
夫人　けい子

◉山井三七　滿鐵會社南滿醫學堂敎授兼奉天醫院醫長外科部長

原籍　福井縣坂井郡高椋村字山崎三ヶ甲一番地

現住　奉天新市街社宅

明治十二年十月九日生る同三十八年帝國大學醫科大學を卒業し翌年一月同大學副手となり四十年同大學助手を命ぜらる四十五年醫術開業試驗委員被命大正元年九月南滿洲鐵道株式會社長春醫院兼同院外科部長任命大正二年九月南滿醫學堂敎授兼奉天醫院外科部長に轉ず

夫人　いそ子　二十三歳　長男　澂　三　歳

◉山近保太郎　關東都督府技手　民政部土木課員

原籍　福岡縣鞍手郡吉川村大字下

現住　大連伏見臺民政部土木課官舍

明治元年十二月晦日生る同二十二年福岡縣鞍手郡々選に依り郡費を以て東京工手學校に入學し二十三年七月卒業爾來福岡縣八木山縣道開鑿工事臨時監督同縣鞍手郡土工技手同縣土木技手長崎縣港灣改良工手

等に歴任す三十一年九月福岡縣鑛山主中野徳次郎本店詰技手を囑託され三十三年十一月より更に獨立鑛山事業を經營す三十六年六月復た山口縣工手に任せられ三十八年十一月關東州民政署技手に轉す翌年九月關東都督府技手となり四十四年十二月旅順工科學堂排水設備に關する取調事務を囑託され大正四年五月現任に移る

夫人 ひさ子 三十九歳 長男 憲之 二十二歳
次男 三五 十三歳 長女 陸子 十二歳

◎山本文介 滿鐵會社大連醫院藥局長心得 士族

原籍 大分縣南海部郡佐伯町六九番地
現住 滿鐵會社大連醫院

明治二年十月二十五日生る同二十五年東京私立藥學校卒業後醫科大學調劑員助手東京藥品試驗場技師等を歷て四十年八月滿鐵大連醫院藥局長心得兼地方衛生課員に轉任今日に及ぶ

夫人 はま 三十九歳 長男 宏 十二歳
次女 高 十四歳

◎山根正治 滿鐵會社營口醫院長兼醫長 士族

原籍 東京市赤坂區田町三丁目九番地
現住 營口新市街社宅

明治十四年四月十四日生る同四十四年十一月九州帝國大學醫科大學卒業、四十五年一月同大學第二內科教室副手に任せらる大正二年十二月滿鐵會社に入り大連醫院內科第三部長兼南滿醫學堂教授に任せらる大正三年十一月現任に就き今日に及ぶ

母堂 かめ子 六十三歳 夫人 蘭 二十二歳

◎山西又一 日本郵船株式會社營口代理店事務主任

原籍 廣島縣高田郡吉田町一三〇三番地
現住 營口元神廟街三七號ノイ

明治十年生る廣島中學校卒業後神戶に於て英語を研究する事三年にして日本郵船會社神戶支店員となり在勤三年終に獨立して實業に從事すること四箇年再び郵船會社に入り吳出張所より宇品出張所に轉じ三十七年大連出張所詰となる在職中棋昌洋行の懇請に依り辭して同店に入り營口に在りて專ら郵船會社代理店の事務を管掌す

夫人 清子 二十九歳

◎山中峰雄 大陸社々員 士族

原籍　福岡縣福岡市須崎土手町七四番地
現住　大連市但馬町ラ區二五號地

慶應元年七月十九日生る幼少にして正木昌陽の門に學び後東京に出で獨逸學協會學校に學びそれより東邦協會に入り副島種臣伯會頭の下に幹事兼會計主任となり傍ら耕讀社を開設して圖書の出版販賣業を爲す四十一年一月渡滿、遼東新報旅順分局主任となり間も無く大連本社に轉ず大正二年五月大陸社の創設に際し入りて今日に及ぶ

夫人　佐和子　四十二歳

◉矢野靜哉　都督府技師　海務局檢疫課長　高等官四等從六位　士族

原籍　京都府下久世郡淀町字新町一〇四番
現住　大連市兒玉町五番地官舍

明治三年七月四日生る多年官海に在り明治四十一年一月愛媛縣廳より關東都督府に轉じ終に現職に任せらる

夫人　ふさ子　三十九歳　　長男　盛哉　二十歳
二男　二郎　十七歳　　三男　三郎　十五歳
四男　四郎　九　歳　　長女　あい　十　歳

◉矢野太郎　關東都督府通譯官　高等官五等　從六位勳五等　士族

原籍　福岡縣福岡市東小性町一八番地
現住　旅順市特權地五番地官舍

明治十年十月三日生る同三十一年外國語學校卒業同年より三十六年迄露都に留學し三十七年三月奏任官待遇の陸軍通譯となりて從軍す三十九年九月陸軍通譯被免と同時に關東都督府通譯官に任せられ勤續今日に至る

父君　豫吉郎　六十二歳　　母堂　やす　五十七歳
（以上在郷）
夫人　ちよの　二十六歳

◉矢野萬吉　一二三牧場主（牛乳販賣及農業）　勳七等　士族

原籍　東京市小石川區小日向町五九番地
現住　大連市外老虎灘轉山屯

明治元年八月二十二日生る同十八年東京攻玉社卒業後杉浦氏に就き二十三年迄英語及數學を專修す二十四年東京に於て牛乳販賣業に從事す三十一年牧畜業研究の爲め渡米、三十六年歸朝、直に北海道に航し旭川に於て第七師團英語學教官となる三十七年日露戰役に際し第七師團に附隨し英語通譯として出征功に依り勳七等を下賜せらる四十二年辭して現業を營み今日に迨ぶ

母堂　たま　六十五歲　夫人　とよ　四十二歲
男　三名　女　四名

◉矢野善二　矢野藥房主（藥種商）　正八位勳六等
原籍　京都市上京區室町通丸太町上ル大門町
現住　遼陽東洋街六番地（電話一六〇番）

明治七年十二月生る同二十八年京都藥學校卒業同年十二月徵兵として第四師團步兵第九聯隊に入營三十一年疾病の爲め退營す三十七年日露戰役に應召從軍し三十七年十一月陸軍三等藥劑官に任ぜられ三十九年退營後大連、旅順の陸軍倉庫に勤め四十一年遼陽に來り現業を開始す

長男　貫一

◉矢田七太郎　領事　在奉天總領事館總領事代理　高等官五等　從六位
原籍　東京市本鄕區根津西須賀町一六番
現住　奉天總領事館內

明治十二年靜岡縣田方郡田中村に生る卅九年七月帝國大學法科大學政治科を卒業す四十年十月外交官及領事官試驗に合格、同年十二月領事官補に任じ高等官七等に敍し廣東在勤となる四十一年三月從七位に敍し同年四月漢口に轉勤四十二年五月更に天津に轉じ同年十二月高等官六等に敍し翌年三月正七位に敍せらる同年十一月外交官補清國在勤となり大正元年十二月大使館三等書記官に任じ高等官五等に敍し伊國在勤を命ぜらる大正二年二月從六位に敍し二年六月伊國在勤を免じ政務局第一課臨時勤務を命ぜらる大正四年奉天總領事代理として來任す

夫人　鈴江　二十歲　長女　榛江　二歲
次女　伊豆江　一歲

◉八木正禮　關東都督府警部警務課員　勳七等
原籍　高知縣土佐郡潮江村三六八番屋敷
現住　旅順市中村町一番地官舍

明治二年十一月二十二日生る二十九年四月臺灣臺北廳巡查拜命、三十年十二月依願免職、三十年十二月澎湖廳雇に三十一年三月同廳屬に任ず同年八月臺灣總督府屬に轉ず四十年八月關東都督府警部に拜命し今日に至る

母堂　久　五十六歲（在原籍地）
夫人　かれい　三十六歲
長男　正甲　二十一歲（在北海道）

◉八木條次郎　鴨綠江採木公司技師　十三道溝分局長

原籍　愛媛縣溫泉郡雄群村大字竹原二一番地
現住　十三道溝分局社宅

明治三十七年七月東京帝國大學農科大學林學實科卒業後森林官拜命東京大林區署に勤務す四十一年十月鴨綠江採木公司に入り以來同公司技師となり現任に至る

夫人　みさ子　三十歲　　長女　織江　二歲

◉安田錐藏　滿鐵會社計理部會計課長　大連市會議員

原籍　東京府荏原郡馬込村一〇一一番地
現住　大連市兒玉町五號地（電話二四番）

慶應元年十一月一日生る明治十一年先帝陛下北陸御巡幸に際し方に鄕黌に在りしか平素學術優等の故を以て目錄一封を下賜せられ同十三年出京して三井物產會社に入りて手代となる二十五年上海支店計算主任に昇轉し二十九年本社計算課主任となる三井に精勤すること二十七年餘にして四十年十月轉じて滿鐵會社に入り現任に就けり

夫人　もと　三十六歲　　長男　正道　十一歲

◉安田　弘　朝鮮銀行大連出張所副支配人

原籍　福岡縣京都郡椿市村
現住　大連市能登町ォ區一三號地（電話一四九五番）

明治十七年四月生る同四十二年東京高等商業學校及同校專攻部卒業後韓國銀行設立と同時に入行京城に在勤すること三年轉して仁川支店詰となる大正四年九月一日來連現任に就けり

夫人　松枝　二十五歲　　長女　美子　五歲
二女　敦子　二歲

◉安井確郎　滿鐵會社埠頭事務所職員　機關長　勳五等

原籍　靜岡縣伊豆國田方郡韮山村一八三番地
現住　東京市麴町區飯田町六丁目一二番地

慶應二年十月九日生る明治十八年二月より二十一年三月迄橫須賀海軍造船所に於て機關術實修二十一年三月汽船通濟丸乘組員となり二十七、八年戰役に有磯浦丸機關長として從軍功に依り勳六等瑞寶章及一時金壹百圓を賜はる三十七、八年戰役に際しては日進丸機關長として從軍功に依り勳五等旭日章及一時金四百圓を賜はる大正二年七月滿鐵會社に入り埠頭事務所勤務となり機關長として今日に及ぶ

夫人　富　三十八歲　　長男　忠　十七歲
長女　靜　十五歲　　次女　芳　十四歲
三女　光　九歲

◉柳原又熊　泰昌利油房支配人　勳八等

原籍　熊本市寺原町
現住　大連市神明町七號地（電話九三二番）

明治二年三月二十七日生る二十六年上海に於て上海周報を發刊したるも日清役の爲め廢刊し陸軍通譯官となり第二軍に屬して出征二十九年五月凱旋す同年十月湖廣總督張之洞氏の自強學堂に招聘さる三十八年五月亦た南京高等師範學堂敎習に聘用せられ三十九年五月辭す四十年一月大連日本鹽業會社庶務課長となり翌年川崎造船所囑託となる四十四年十一月泰昌利油房を創立し其代表社員となり造船所囑託を兼ねしが大正四年九月油房組織の變更と與に其支配人となれり

母堂　ひろ　七十二歳（在國）
夫人　英　四十歳

◉柳瀬才藏　滿鐵會社南滿醫學堂幹事兼奉天醫院醫長　從六位勳四等

原籍　熊本縣球磨郡小原村原田七七三ノ一
現住　奉天新市街社宅

明治七年七月五日生る同二十八年十月第五高等學校醫學部卒業、同年十二月一年志願兵として入隊、三十年一月任陸軍三等軍醫、同年三月叙正八位、以來累進して三十六年十一月任陸軍一等軍醫、四十年三月關東都督府陸軍々醫部附として同時に在職の儘南滿鐵道株式會社醫員となり同年十一月大連醫院長春出張所長を命ぜらる四十二年叙從六位、四十三年一月公主嶺分院長被命、四十四年叙勳四等授瑞寶章、四十四年六月任陸軍三等軍醫正、大正元年八月遼陽醫院長に轉じ大正三年十一月更に南滿醫學堂敎授を命ぜらる

夫人　幾久　三十一歳　長男　直　十三歳
二男　次郎　十一歳　三男　謌　十　歳
四男　五郎　五　歳　長女　靜　子
次女　子　三　歳

◉大和良作　滿鐵會社遼陽醫院長兼醫長心得　關東都督府醫務囑託　從七位勳六等功五級

原籍　福岡縣宗像郡神興村大字山田村一〇九五番地
現住　遼陽白塔大街一番地

明治十二年二月七日生る同三十三年長崎醫學專門學校卒業、三十六年三月任陸軍三等軍醫、三十八年四月任陸軍二等軍醫、三十八年五月叙從七位、日露戰

役前東京帝國大學皮膚科に於て同科を専攻す四十年三月南滿洲鐵道株式會社に入り同年十月より現職に就き以て今日に至る明治四十五年社命を以て二箇年間獨逸に留學し大正二年六月ドクトルの學位を受く爾後ブレスラウナイサー氏ゴットスタイン氏に就き泌尿科皮膚科及外科學を研究す

夫人　春　子　二十六歳

◉町野武馬

奉天鎭安上將軍顧問　歩兵少佐
正六位勳四等功五級　士族

原籍　福島縣若松市北小路町
現住　奉天小西關外　（電話三二九番）

明治八年十一月三十日生る同三十一年六月二十七日任歩兵少尉、三十四年十一月三日歩兵中尉に進み三十七年八月二十日歩兵大尉に任じ大正二年八月二十二日歩兵少佐に昇進し今日に至る

父君　主　水　七十七歳　母堂　松　子　六十九歳
夫人　こき子　三十歳　長男　龍　雄　二　歳

◉町田　稔

哈爾賓共立日本醫院長　士族

原籍　兵庫縣姫路市十二所前二四番屋敷
現住　哈爾賓プリスタンモストワ街共立日本醫院内

明治十五年十月十三日生る同四十三年東京帝國大學醫科大學卒業、同年十二月姫路輜重兵第十大隊に入營す四十四年三月東京醫科大學附屬醫院勤務同産婦人科教室副手囑託となり翌年四月辭任す同年五月黑龍江省に入り滿洲里日本病院長となり大正三年三月辭職同年四月歸國し大阪緒方産婦人科病院に勤務同三年八月哈爾賓共立日本醫院長に就職し今日に及ぶ

大母　いく子　八十三歳　父君　盤　五十九歳
母堂　貞　子　四十六歳（以上在鄕）
夫人　豊　子　二十三歳　長男　一　太　二　歳

◉前田德水

本派本願寺支那開教監督　大連關東
別院輪番、親授　大連幼稚園長

原籍　三重縣桑名郡城南村大字和泉
現住　大連市信濃町本願寺關東別院　（電話四六七番）

明治十年一月九日生る同三十二年本願寺大學林卒業三十五年三月同考究院を卒業し補敎となる同年法主大谷光瑞師印度の佛蹟巡拜に隨行し緬甸及雲南、四川、湖北各省を巡歷し三十六年八月歸朝し佛蹟拜記編纂に從事す三十七年從軍布敎師として後備歩兵第四旅團司令部に從屬し旅順攻圍軍に參加して旅順陷落後奉天戰迄從屬す三十八年五月歸朝し更に樺太南

部占領軍に從屬して樺太に赴き同年十月歸朝し從軍解屬となる三十九年九月大谷法主に隨行して南清各地を旅行し四十年五月歸朝す同年七月現職を命ぜられ大連に來任今日に至る

夫人　登志惠　二十六歳

前田　忠　横濱正金銀行大連支店支配人代理 士族

原籍　鹿兒島縣揖宿郡今和泉村字岩本九九番地
現住　大連市霧島町

明治十六年二月一日生る同三十八年東京高等商業學校卒業後横濱正金銀行に入ると同時に牛莊支店詰となり四十一年倫敦支店に轉じ大正四年歸朝す同年七月大連支店勤務を命ぜらる

大母　みつ　八十歳　父君　正孝　六十歳
母堂　いさ　五十三歳

前澤三郎　前澤洋行主（金物商）

原籍　大阪市東區博勞町一丁目六五番地
現住　大連市伊勢町四七號地（電話二四四番）

慶應元年十月十二日生る舊姓嶋田後大阪市南區鹽町前澤彌助氏に入籍す大阪英學校出身にして明治三十一年より三十八年迄佐賀市材木町にて金物商を營む三十八年渡連現地に前澤洋行を設立して現今に至る

夫人　ます　四十四歳　長女　君子　十八歳
二女　秀子　十五歳　長男　芳　十四歳

曲尾辰次郎　吉長鐵道技師長　長春居留民會常議員 従五位勳五等 士族

原籍　東京市本郷區湯島天神町一六番地
現住　長春東門外吉長鐵路局技師長官舍（電話二七〇番）

明治元年二月生る十九年工學研究の爲め米國桑港に渡航し同地オークランド小學校に入學後アラメダ小學校に轉ず卒業後ハークレー中學校に入學、卒業後カリニフオニヤ洲立大學に入學し同二十八年卒業バチユラーオフサイアンスの學位を受く同大學には練兵操銃の敎科ありて卒業と同時に陸軍中尉の資格を受く二十九年歸朝して鐵道局雇員を勤む同年五月鐵道技師に任じ同時に名古屋出張詰となり七箇年間勤務す三十六年清國政府に招聘せられ同國鐵道技師となる四十一年湖北省粤漢鐵道高等技師と爲り四十二年七月迄勤務す同年十一月吉長線技師長に轉じて今日に及ぶ

夫人　みち子　三十八歳　長男　光明　十二歳

次男　忍　十　歳　三男　豪　九　歳

◉增井茂松　遼陽縣警察事務所顧問　遼陽居留民會長　勳六等

原籍　三重縣宇治山田市河崎町一〇〇番地
現住　遼陽城内東二道街

明治十三年七月二十三日生る三十五年七月東京外國語學校を卒業す三十七、八年役に從軍す三十九年七月遼陽縣警察事務所に應聘し今日に至る

父君　文之助　五十八歳　母堂　のぶ子　五十三歳
夫人　けい子　二十八歳　長男　清　七　歳
次男　正　四　歳

◉萬玉惣太郎　萬玉洋行主（石鹼製造業）

原籍　大阪市西區北堀江四丁目九番地
現住　大連市松林町九番地（電話二六二番）

文久三年八月生る明治二十五年渡韓、仁川に於て貿易商を營み爾來三十九年迄經續す同年渡連、大山通に米穀商を營み四十二年の夏より現業に轉じ四十五年三月現處に工場を建設して今日に及ぶ

夫人　こま　三十九歳　長女　郁子　十　歳

◉松本喜一　大連商業學校敎頭　士族

原籍　石川縣金澤市山田屋小路二ノ四
現住　大連市播磨町東洋協會甲號宿舍（電話四九八番）

明治九年二月二日生る同三十四年東京高等商業學校敎員養成科卒業同年七月市立仙臺商業學校敎諭拜命三十五年十月石川縣七尾町立商業學校長に三十九年四月神戸市立商業補習學校長に任せらる四十三年七月東洋協會滿洲支部に應聘し同協會の設立に係る大連商業學校の敎頭となる大正四年三月同校の在外指定學校となるや同年四月奏任待遇敎諭に任せらる

夫人　さめ子
長女　さき子　十二歳　次男　洋　九　歳

◉松本貞會　松本醫院主（醫師）

原籍　大阪府南河内郡長野村大字西代五九一番
現住　大連市常盤公園町三一號地（電話三二五番）

明治四年十二月二十三日生る同二十七年十月大阪醫學校を卒業し多年内地に於て開業せしが三十九年四月大連に來りて開業幾もなく公主嶺に轉居し四十一年再び大連に返へりて開業し現在に到る其長所は内科なり

夫人　ふさ　二十七歳

◉**松田昌德**　滿鐵中央試驗所製糸染織科長　從六位　士族

原籍　福岡縣京都郡犀川村
現住　大連市山城町八番地四號ノ二

明治四年二月一日生る同二十三年蠶業講習所卒業後實業に從事す二十八年山形縣立蠶業講習所講師となる二十九年以後は農商務技手、生糸檢査所技手、蠶業講習所技手、農商務技師生糸檢査所技師に歷任し大正元年退官同年滿鐵に入社して現職に到る

母堂　峰子　七十五歲　夫人　卓　三十七歲
長男　昌壽　十五歲　二男　榮　九　歲
長女　高子　十二歲　二女　華子　四　歲

◉**松田貞次郎**　滿鐵會社大連保線主任　正七位

原籍　山形市鍛冶町七七番地
現住　大連市乃木町九番地

明治十一年十二月二十日生る、同三十五年七月東京帝國大學工科大學土木科卒業、同年九月九州鐵道株式會社技師に就職す同鐵道の國有となるに際して引續き九州鐵道管理局技師として勤務す、四十四年三月大阪市技師に任ぜられ大正三年二月辭職、同年四月滿鐵會社に入る

母堂　きよ　五十七歲　夫人　せき　三十歲

◉**松山珵三**　大連神社社司　權大教正

原籍　新潟縣高田市中殿通町六番地
現住　大連市神明町　（電話一一四番）

明治十一年十二月六日生る終始苦學を以て身を立て波瀾重疊の境遇は自然宗教界に身を投ぜしむ宗教は佛教より基督教を經て遂に神道に入れり明治三十七年大社教春日教教師檢定試驗に合格して訓導を拜命す日露戰役に際し野戰鐵道提理部に從軍し機關手見習として勤務す平和克復後大連に來り大社教の布教を爲し滿洲分院及大連神社を創立し亦旅順教會所を創立す多年神道を精研し新學說の發見に苦心し大正四年四月千家管長の特選に依りて權大教正に補命さる其新發明に係る產靈（ムスビ）教は同年七月愈々立教したり

夫人　宇良子　三十九歲　長男　俊親　十六歲
四男　俊康　五　歲　五女　たか子　二　歲

◉**松山成三**　金光教布教師　士族

原籍　京都市新椹木町通御靈圖子下ル一六二番
現住　大連市愛宕町二九號地

明治十一年四月十九日生る京都師範學校卒業後京都府内の小學校敎員たりしが明治三十三年頃より金光敎信者となり三十五年五月金光敎敎師養成所（現今岡山縣淺口郡三和村大谷所在の修德殿の前身）を卒業し三十九年四月京都にて布敎に從事して四十年來連現今に至る

夫人 まち子 二十六歲 長女 きわ子 六 歲
次女 しな子 三 歲

◉松尾通一 關東都督府通信書記 瓦房店郵便局長 從七位勳八等

原籍 福岡縣柳河郡城内村大字新外町二六番地
現住 瓦房店局長官舍（電話二一番）

明治二年十二月二十七日生る舊姓は河野後松尾家を相續す明治二十二年五月二十三日東京電信學校卒業同年六月遞信技手東京郵便電信局在勤となる爾來郵便電信書記に昇進して電信課員兼電氣試驗所員那覇宮崎、大阪各局に歷任し三十九年十月關東都督府通信書記に轉じ遼陽、奉天局の主事を經て四十二年十月蓋平郵便局長に任じ大正二年瓦房店郵便局長に昇轉す明治四十三年勳八等に敘し大正二年從七位に敘せらる

夫人 たか 三十八歲 男 通文 十八歲

◉松尾勘六 滿鐵會社遼陽車輛係主任 正七位勳六等

原籍 長崎縣南高來郡南有馬村
現住 遼陽イ區第一六號（電話一四番）

明治七年十二月三日生る同三十六年京都帝國大學機械工學科卒業、三十八年九月野戰鐵道提理部に就職す四十年四月同部より滿鐵會社に引續がれ同年より遼陽詰として今日に及ぶ

父君 寬市 七十五歲 母堂 いな子 七十五歲
夫人 ふぢ子 三十歲 長男 正康 七 歲
次男 康躬 五 歲 三男 躬好 一 歲
長女 みさ子 三 歲

◉松原純一 朝鮮銀行長春出張所主任 滿鐵諮問委員

原籍 島根縣邇摩郡大森町
現住 長春朝鮮銀行社宅

明治十七年三月二十三日生る同四十一年神戶高等商業學校卒業。同年第一銀行に入る大正二年六月安東縣出張所勤務となり同三年十月現職に就任今日に迨ぶ

父君 俊三 五十六歲 女 保子 三 歲

◉松村久兵衛　正隆銀行副支配人　從七位勳六等
原籍　丹後國中郡峯山町
現住　大連市武藏町四號地（電話二八五番）

明治八年四月七日生る一年志願兵出身の陸軍二等主計にして明治四十三年正隆銀行の增資改革に當り私財を抛ちて東奔西走以て當局者を動かし爾來專ら行務に盡瘁して今日に至る

夫人　貞　三十三歲

◉松室重光　關東都督府技師　民政部土木課長心得　高等官三等從五位勳六等　士族
原籍　京都府下鴨郡愛宕町三〇番戶
現住　旅順新市街特權地三番地官舍（電話四三五番）

明治六年四月二十六日生る同三十年七月東京帝國大學工科大學建築科卒業後京都市技師、京都府技師、九州鐵道株式會社技師に歷任し四十一年三月現任に就く

父君　重明　七十二歲　夫人　小壽賀　三十九歲
長男　重博　十二歲　長女　三子　十五歲
次女　壽子　十　歲　三女　武子　八　歲

◉松岡勝彦　鐵嶺電燈局主任　鐵嶺居留民會副會長　勳六等
原籍　熊本縣菊池郡花房村一二四番地
現住　鐵嶺北町三號地（電話二五番）

明治八年九月十二日生る二十九年東京法學院卒業三十四年北京振華中學堂長と爲る三十七年日露戰役に際し特別任務に服し陸軍通譯を命せられ大本營附となる三十九年日露戰役の功に依り勳六等瑞寶章及手當金八十四圓下賜、同年總司令官大山侯爵より感狀を授與せらる四十三年五月現職に就任今日に及ぶ

夫人　芳子　二十五歲　長男　鐵也　四　歲
長女　雪子　三　歲

◉松濤菊五郎　都督府通信事務官補　通信管理局庶務係長　高等官七等從七位
原籍　東京市麻布區廣尾町一番地
現住　大連市兒玉町一一番地（電話八九番）

明治十八年八月三日茨城縣に生る本姓は高橋氏四十三年七月東京帝國大學法科大學政治科卒業同年八月關東都督府通信書記に任せらる四十四年十二月一年志願兵として步兵第一聯隊に入營、大正三年七月關東都督府通信事務官補に昇任して現職に在り同年九月從七位に敍す大正四年三月陸軍三等主計に任せらる

養父君　誠心　養母堂　とめ
夫人　孝子　一女　一男

●松平鉄石 都督府通信技手 通信管理局工務課員 正七位勲七等 士族

原籍 山形縣南村山郡上山町鶴脛町四二四番地
現住 大連市兒玉町一四號地

明治三年八月二十五日生る同二十年二月東京電信修技學校卒業、同年六月遞信十等技手東京電信局駐在被命、爾來名古屋、廣島、四日市等の各郵便電信局に歴任し三十四年六月通信技手通信局工務課勤務となり熊本、長崎の各郵便局を歴て三十七年七月臨時電信部建築技手として日露戰役に從軍し三十九年九月關東都督府通信技手となりて大連、營口、熊岳城各局に歴任せしが大正二年六月通信管理局工務課第一建築部主任に轉じ今日に至る

夫人 やす子 四十歳　長男 維石 十四歳
二男 巖 七歳　女 秀子 十一歳

●慶松勝左衛門 滿鐵會社中央試驗所衛生科長 地方部衛生課兼務 滿洲藥學會々長 從五位、藥學博士

原籍 京都市上京區二條通烏丸東入仁王門町六番戸
現住 大連市山城町一〇ノ一號社宅（電話一〇〇七番）

明治九年九月二十一日生る三十四年七月十日東京帝國大學醫科大學藥學科卒業優等卒業生として御賜を拜授す同年八月同大學助手となり三十七年六月衛生試驗場技師を經て四十年七月關東都督府技師を拜命同年十月同府中央試驗所長となる四十二年三月藥學博士を授けらる同試驗所が滿鐵會社に轉屬するや引續き在任して現在に到る

夫人 ゑん 三十四歳　長男 一郎 十二歳
二男 光雄 八歳　三男 洋三 六歳
四男 陸郎 三歳　五男 政男 一歳
長女 富子 十歳　二女 英子 五歳

●藤田虎力 南滿洲鐵道株式會社理事 兼山東鐵道管理部長（陸軍囑託） 正四位勲三等 士族

原籍 東京市外千駄ヶ谷
現住 青島山東鐵道管理部長官舍

慶應二年五月四日生る明治二十三年東京帝國大學法科大學英語科卒業同年文部省試補に出仕し尋て文部省書記官に昇任す後遞信省鐵道事務官に轉じ遞信書記官を經て四十年帝國鐵道廳理事となり四十三年八月植村俊平氏の後を襲ふて九州鐵道管理局長に任せらる大正三年三月滿鐵會社理事仰附けられ運輸部部長たり同四年三月理事在職の儘山東鐵道管理部長を囑託せられて目下山東に在勤中なり

夫人 こう子 三十六歳　長女 賀子 十五歳

次女　信子　十一歳　　三女　梅子　八歳
二男　呂二郎　十二歳　　三男　誠三郎　六歳
四男　七郎　四歳

◉藤田操　都督府警部　大石橋警務支署長　士族
原籍　東京市淺草區馬道町六丁目一五番地
現住　大石橋警務署官舍

明治六年五月二十七日福岡縣久留米市に生る同二十三年五月東京英語學校に入校、三十四年二月東京警察監獄學校に入校、三十五年二月卒業同年四月任警視廳警部、三十六年四月日本大學第三年級に入學、三十七年八月任消防士兼警視廳警部、同年十二月兼任消防士機關士、同三十九年七月任關東州民政署警部、四十二年六月奉天警務署撫順支署長に昇任、四十五年七月現職に轉じ今日に至る

夫人　むめ子　三十四歳　　長男　一郎　十三歳
次男　守　四歳　　三男　正三　歳
四男　博　一歳　　長女　英子　九歳

◉藤田榮介　領事　在吉林領事館　高等官六等正七位
原籍　鹿兒島縣鹿兒島市
現住　吉林領事館内

明治十四年生る四十一年東京帝國大學法科大學法律科卒業、四十二年高等文官試驗に及第、四十三年二月任領事官補叙高等官七等、三月牛莊在勤、大正三年六月西班牙公使館三等書記官に任命し歸國準備中日獨戰爭の爲め出京を命せらる青島陷落するや船越參事官と與に出張を命せらる大正四年十月歸京直に吉林領事に任せらる

◉藤田九一郎　藤田洋行主（金屬品雜貨商）　南滿銀行專務取締役　奉天商業會議所議員　奉天居留民會議員
原籍　兵庫縣神戸市兵庫大開通三丁目三三番地
現住　奉天城内鐘樓南路　西（電話二一四番）

明治九年八月八日生る幼より相當の敎育を受け年長して新聞記者となり其後實業に志して芝罘に渡航し日露戰役後奉天に轉住して四十年現業を開始す大正元年十二月奉天商業會議所會頭に推薦され四年八月辭任し本業の傍ら南滿銀行專務取締役として專ら同行務の整理刷新に任せり

父君　松藏　六十五歳　　母堂　さく　五十九歳
夫人　しま子　三十九歳　　長女　壽子　九歳
次女　愛　一歳

◉藤田禮造　藤田洋行主（船舶、雜貨、石炭業）

原籍　佐賀縣藤津郡鹽田村二五五番
現住　大連市山縣通一〇二號地（電話長二五五番）

明治十四年十一月十五日生る同三十四年三月鹿兒島造士館出身三十七年三月三井物產會社支店に入社四十三年十一月辭して現住所に居をトし獨立雜貨並に貿易商を開始し今日に迨ぶ

父君　辰次　六十七歲　夫人　露　二十四歲
長男　傳一郎　四　歲　長女　みさ　一　歲

◉**藤田與市郎**　誠昌堂藥房主（藥種商）長春共立株式會社專務取締役　公主嶺銀行監査役

原籍　富山縣高岡市鴨島町二番地
現住　長春東七區三四號地（電話一六八番）

明治九年十月十二日生る同二十三年北海道に航し小樽にて米穀商を營み三十四年東京に移轉し株式の賣買に從事す四十一年渡滿現地に開店して今日に迨ぶ

父君　與左衛門　夫人　米子
男　寛治　女　豊子

◉**藤本知良**　關東都督府土地調査部測量課長囑託　豫備陸軍工兵中佐　從五位勳四等

原籍　熊本縣熊本市新屋敷町四三二番地
現住　旅順新市街特權地二番戶

明治四年三月二十七日生る同二十四年十二月士官候補生となり二十七年九月工兵少尉に任じ日清戰役に參加す三十二年七月陸地測量部班員となり同部修技所にて三角測量學を修む爾來三角測量掛りとして各地に出張し三十五年十二月陸地測量部班長に昇任す三十七八年戰役に從軍し平和克復後再び班長に復歸す四十二年一月陸地測量部事務官に任せられ四十三年一月工兵中佐に進み大正二年八月豫備役被仰付大正三年四月關東都督府土地測量部事務を囑託せられ臨時土地調査部勤務となり今日に至る

母堂　よね　八十二歲　夫人　やゑ　三十七歲
長男　邦夫　八　歲　長女　貞　十八歲
二女　高　十四歲　三女　芳子　十　歲
四女　こよ　六　歲　五女　順　二　歲

◉**藤井長藏**　大連高等女學校長　高等官六等　從六位勳六等

原籍　三重縣桑名郡桑名村大字矢田磧
現住　大連市播磨町ア區二三號地

慶應元年正月十一日生る明治十七年文部省東京師範學校卒業、同年七月埼玉縣師範學校教諭に任ず二十一年九月より三十四年四月迄學習院助教授たり三十四年四月三重縣立高等女學校長に轉じ三十八年十月

亦た三重縣立第四中學校長に轉ず四十一年五月正七位に叙し同年十二月勳六等瑞寶章を賜はる四十二年二月多年教育上の勤勞に依り文部省より金二百圓を賞賜せらる大正三年六月從六位に叙し同年七月關東都督府高等女學校長に轉じ高等官六等に叙し大連高等女學校長を命ぜらる

母堂　かね子　八十二歳　　夫人　芳子　三十六歳
長男　夏雄　十七歳　　次男　秋雄　十四歳
三男　春雄　十歳　　四男　冬雄　六歳
五男　四季雄　四歳　　長女　瑞子　十六歳

◎藤根壽吉　滿鐵會社總務部技術局職員保線課　從五位勳五等

原籍　大阪市南區惠美須町二丁目四三一番地
現住　大連市山城町

明治九年八月二十四日生る同三十三年京都帝國大學理工科大學土木工學科卒業後第五高等學校教授に任ず三十五年三月北海道廳鐵道部に入り釧路、十勝兩線建設工事に從事す三十八年五月鐵道技師に任じ野戰鐵道第四班建築班軌道長として渡滿、撫順線の諸施設に從事す三十九年四月三十七、八年戰役の功に依り勳六等單光旭日章及賜金を拜受す三十九年四月露國より受領すべき鐵道の受領委員に隨行を命ぜられ同四十年四月在官の儘滿鐵會社に轉じ本線復舊工事安奉線改築工事に當り瓦房店、鷄冠山、安東縣各地に勤務す大正二年一月歐米各國に出張を命ぜられ倫敦開催の第三回萬國鐵道會議に參列し同年十二月歸朝す爾來引續本社に勤務す

夫人　八重　二十九歳　　長男　太郎　六歳
長女　安子　四歳　　三女　和子　三歳

◎藤平泰一　安東貯金銀行專務取締役　安東商業會議所常議員　安東居留民會行政委員

原籍　富山縣高岡市細工町六番地
現住　安東縣五番通八丁目二番地（電話一七一番）

明治十六年二月六日生る同三十九年十月戰後視察の爲め安東縣に來り藤平兄弟商會を起し貿易及質業を營む四十四年安東貯金銀行を創立し專務取締役として今日に至る同時に藤平兄弟商會代表社員として同商會をも兼營す

◎藤川類藏　盛進商行重役（雜貨商）

原籍　德島縣美馬郡重清村

父君　利兵衛　　母堂　いつ
夫人　さつき　二十八歳　　長女　かをる　一歳

現住　大阪市高麗橋三丁目

明治二年四月二十七日生る幼時より商家に人となり長じて海外に雄志を伸さんとし日清役の二十八年六月滿洲より轉じて臺灣に入り中辻喜次郎氏と提携して盛進商行を臺北に創設し三十七年十月更に同商會を營口に創設し努力奮鬪して同行今日の基礎を造れり

夫人　磯子（イソ）　一男　二女

◉福田顯四郎　福田煉瓦工場主　滿洲水產株式會社專務取締役　大連市會議員　大連商業會議所常議員

原籍　佐賀縣東松浦郡唐津町四七七番地
現住　大連市霧島町五二號地（電話五五七番）

慶應元年四月二十四日生る明治十四年東京に遊び築地商法講習所に入り後ち舊藩主小笠原長生子爵の從僕となり芝攻玉社商船科を學ぶ卒業後米國に遊び同國メイアランドの海軍鎭守府に入り二ヶ年間滯在後桑港に於て商業に從事す歸朝後若松の富豪安川敬一郎氏の招聘に依り石炭輸出の主任となる明治二十九年肥前相知炭坑株式會社支配人となり三十四年辭して石炭販賣業に從事す三十九年佐賀縣知人より利源調査委員として滿鮮派遣を委任せらる後三井物產會社の後援を以て滿洲煉瓦製造所を創設其後同製造所解散と同時に福田煉瓦工場を市外李家屯に開設し四十一年滿洲水產會社整理委員に擧げられ同社改革の後同社の第一次監査役となる現時同社の專務取締役たり

夫人　久滿子　長男　穰次　二男滿　壽治
三男　松男　長女　睦子

◉福田稔（ミノル）　滿鐵會社本溪湖保線係主任　本溪湖實業補習學校講師

原籍　京都市上京區一條通新町
現住　本溪湖大和町一二號地

明治十二年八月二十九日山梨縣甲府市に生る三十八年京都帝國大學理工科大學土木科卒業同年八月米國に留學四十二年八月歸朝同年十月滿鐵會社に入り大正四年三月現任に就く

母堂　總子　六十四歳　夫人　梅子　二十七歳
女　すみ子　四　歳

◉福池才次郎　滿鐵會社中央試驗所應用化學科員

原籍　靜岡縣安倍郡長田村下川原二二番地
現住　大連市西公園町ェ區四七號

明治六年八月二十四日生る同二十六年東京私立藥學

校全科卒業二十七年八月藥劑師免狀下附二十九年十月醫科大學に入學して藥學科選科生となり藥局方使用法及衞生化學を研究修了後東京に於て公私の藥劑手又は藥局長となり三十四年四月三井物產會社香港支店に入り後上海に轉じ同地の居留民會議員に擧げらる四十一年滿鐵會社の現職に就任今日に到る

夫人　しげ　三十二歳　二男　龍郞　六歳
三男　省三　五歳　長女　澄江　十四歳
二女　陽一　歳

古郡良介

三井物產株式會社大連支店長　遼東汽船株式會社取締役社長　大連市會議員　大連商業會議所副會頭　大滿洲重要物產組合長　大連重要物產取引所商議員　三泰油房株式會社取締役社長　關東州船主置籍聯合同盟會長　士族

原籍　東京市本鄕區元町二丁目六六番地
現住　大連市兒玉町三の一（電話一一〇番）

明治十年七月二十九日明石家に生れ後古郡家を再興相續す明治三十一年東京高等商業學校卒業直に三井物產會社に入り東京本店及上海支店勤務の後孟買支店に轉じ在職十有六年大正三年九月現任に轉ず

父君　明石泰藏　母堂　明石こと
夫人　初子

古澤丈作

日淸豆粕製造株式會社取締役　大連商業會議所工業部副部長　滿洲重要物產組合評議員

原籍　栃木縣上都賀郡西方村大字崎五五番地
現住　大連市軍用地區二區三（電話一〇六四番）

明治十四年四月八日生る同三十八年東京高等商業學校卒業後株式會社大倉組に入り吳、大連、倫敦等の支店に勤務し大正三年三月倫敦より歸朝大連支店詰となり目下日淸豆粕製造株式會社取締役に專任す

父君　貞次郞　五十七歳　母堂　せい子　五十七歳
夫人　滿江子　二十二歳　長女　貞子

古川米吉

古川醫院主（醫師）　關東都督府醫務囑託　陸軍三等軍醫　正八位勳五等

原籍　岐阜縣本巢郡生津村高屋
現住　營口永世街（電話一一八番）

明治七年八月一日生る村立小學校を卒へて以來獨學を重ね明治三十三年東京に於て醫術開業試驗に及第す三十七年八月陸軍三等軍醫に任ぜらる第九師團に從ひ出征各所の兵站病院勤務を經て三十九年五月凱旋歸鄕す三十九年六月營口軍政署雇醫となる同十二月奉錦海關兵備道梁浩氏に聘用され四十一年一月滿期以來現地に開業す營口に於て白斯篤防疫に從事す

ること前後五回明治四十五年十月清國皇帝より雙龍三等第二星寶章を授與さる現下關東都督府醫務囑託及牛莊郵便局東亞煙草會社等の囑託醫たり

母堂　なみ　六十八歳　夫人　こと　三十二歳
長男　陽　三　歳　次男　而平　一　歳
長女　瑞枝　八　歳　次女　理子　六　歳
三女　淑子　四　歳

◉吹野勘　奉天日日新聞主幹

原籍　千葉縣山武郡士氣町
現住　奉天小西邊門外

明治十五年十月生る同卅九年一月渡滿軍政署龍岩浦出張所に勤務すること一年にして安東タイムス社に入り四箇月にして退社し平安日報社に轉ず四十三年十二月更に滿韓日報に轉じ大正元年九月現任に就く

長男　一　十　歳

◉小口忠太　滿鐵會社南滿醫學堂教授兼醫長奉天醫院眼科部長　正六位勳四等

原籍　長野縣小縣郡上田町一八七六番地
現住　奉天新市街

明治八年一月六日生る同二十一年四月醫學專門學校濟生學舍入學二十四年六月醫術開業試驗及第二十六年東京顯微鏡院卒業、其後私立大成學舘、私立獨逸語學校、壬申義塾等にて獨逸語修習、二十七年十二月一年志願兵として步兵第一聯隊入營、二十八年四月任陸軍三等軍醫、同年十二月日清戰役の功に依り勳六等瑞寶章下賜、三十二年任陸軍二等軍醫、敍從七位、三十四年免本職後神奈川縣橫須賀私立湘南病院眼科部長、臺灣總督府臺南醫院醫務囑託等を經て三十七年四月補充召集、同年九月任陸軍一等軍醫、敍正七位勳五等、三十九年四月日露戰役の功に依り勳四等旭日小綬章下賜、四十三年任陸軍三等軍醫正、四十四年陸軍醫學校教官に任じ同年十一月南滿醫學堂教授に轉ず同年十二月獨逸留學、四十五年三月敍正六位、大正三年七月歸朝、現任に就く

◉小池寬治　關東都督府事務官　民政部土木課大連出張所勤務　高等官六等正七位　士族

原籍　東京府
現住　大連市兒玉町一二番地官舍

明治十六年八月三日生る同四十年七日京都帝國大學法科大學政治科卒業、四十二年文官試驗に及第す四十三年二月關東都督府屬拜命、四十四年五月同府事務官に昇任す

夫人　絹代　二十二歳　長男　辰彦　一歳

◉小西春雄

朝鮮銀行奉天出張所長　奉天商業會議所議員　奉天居留民會議員　士族

原籍　福岡市天神町
現住　奉天十間房（電話三一三番）

明治十二年一月十七日生る同三十五年七月東京專門學校政治科卒業、三十七年法政大學高等研究科卒業、同年十一月第一銀行に入り本店に勤務す、卅八年十二月朝鮮咸興出張所主任として渡鮮、四十二年十一月朝鮮銀行創立と共に同銀行に入り咸興出張所長となる、四十三年七月本店國庫局勤務を命ぜられ、大正三年十月奉天出張所長を命ぜられ今日に及ぶ

養父　君　恭助　六十五歳　夫人　順子　三十二歳
長女　直子　十二歳　長男　健一　八歳
次女　雪子　五歳

◉小松彌市

奉天省城內警察廳顧問獸醫官　正七位勲五等

原籍　大分縣速見郡中山香村
現住　奉天小西邊門外四五番地

明治十六年十二月九日生る同三十八年三等獸醫として野砲十二聯隊補充隊附被命、同年七月步兵第三十一旅團司令部附として出征、卅九年功に依り勳六等下賜、同年第十六師團司令部附となる、四十年亦た騎兵第三聯隊附となる、同年十二月二等獸醫に進み、四十一年從七位に叙せらる、同年野砲第三聯隊附、四十二年野砲第十一隊附となり、四十三年一等獸醫に進み輜重兵第八大隊附被命四十四年勳五等下賜、大正二年退役、大正三年六月奉天城內警察廳顧問獸醫官に聘任され今日に至る

夫人　梅尾　二十三歳　女　貴美惠　二　歳

◉小敷賀政市

滿鐵會社地方課員兼大連經理係主任　勳八等

原籍　島根縣八東郡法吉村大字比津一五番屋敷
現住　大連市北大山通二二番地（電話一五四六番）

明治九年一月二十五日生る同三十四年七月私立東京法學院を卒業す卅一年二月より四十年四月に到る間は內務省屬たり、四十年四月滿鐵會社に入りて地方部に勤務す三十九年四月三十七、八年戰役の功に依り勳八等白色桐葉章及賜金を拜受せり

母堂　けん　七十一歳　夫人　はる　三十三歳
長男　浩　十七歳　次男　淳　十三歳
次女　恒子　七　歳　三女　淑子　五　歳

◉小林才治

梅酒屋旅館主　大石橋實業會々長　大石橋金融會長　勳八等

原籍　長野縣上水内郡三水村五五一番地
現住　大石橋大街五四番地（電話五四番）

明治元年六月十日生る同二十七年より三十年迄總武鐵道に入り三十年より三十三年九月迄房總鐵道に勤務す三十四年より三十六年迄日本鐵道に勤務し卅七年野戰鐵道に轉じて從軍、一旦凱旋して三十九年五月大石橋に來任し居留民會行政委員となり後滿鐵に引繼ぐや復た行政委員となる四十年三月實業會を組織し其會長として今日に至る

夫人　しげ　四十七歲　長男　春雄　十五歲
次男　龍男　十二歲

◉小寺莊吉

營口小寺洋行及大連小寺油房主（豆粕製造及特產物貿易商）營口實業會長　滿洲重要物產同業組合評議員　勳七等

原籍　兵庫縣神戶市中山手通五丁目
現住　營口牛家屯（電話四二八番）

明治十四年三月九日生る神戶商業學校に學ぶこと三年にして亦た東京開成中學大成中學校等に學び轉じて第一高等中學英語科に入り中途更に米國留學の志望なりしが兵役の爲め果さず一年志願兵となりて入營三十七年四月日露の役に砲兵として出征し功に依り勳七等を賜はる凱旋後渡滿營口及大連に油房を創設し近年更に特產物貿易業を開始せり

母堂　いせ　六十歲　夫人　せい　二十四歲
長女　ふみ　五歲　二女　ますテ　三歲
長男　祐吉　一歲

◉小島鉦太郎

小島倉庫主（倉庫地に牧畜業）大連銀行取締役　大連商業會議所常議員　士族

原籍　東京市芝區二本榎一丁目五九番地
現住　大連市山縣通五二番地（電話一〇八四番）

明治二年四月二十七日岡山縣久米郡三保村に生る同二十一年より二十五年迄横濱に於て商業に從事す二十五年函館に航し海產物の賣買船舶業倉庫業を營む三十六年天津に於て商業に從事す三十九年大連に來り現業を開設して今日に至る

父君　利政　母堂　ちい
夫人　さだ　四十歲　男　二名　女　五名

◉近藤錦太郎

鴨綠江採木公司參事　度支課長　鴨綠江製材無限公司監査役　安東居留民會行政委員會議長代理　從七位勳八等

原籍　東京市下谷區
現住　安東縣鴨綠江採木公司社宅（電話二一五番）

元治元年十一月六日生る明治廿五年より外務省に出仕す卅六年清國日本公使館在勤となる四十四年五月副領事に任じ安東縣に在勤す、退職後鴨綠江採木公

司に入り現職に就くと同時に前記の外安東官有財產管理會委員安東商業會議所特別議員を兼務す

夫人　靜子　三十九歲

◉**近藤寛次郎**　近藤病院主（醫師）　士族

原籍　岡山縣和氣郡鹽田村

現住　大連市東鄕町一丁目一番地

明治十年十一月三日生る同三十一年十一月第三高等學校醫學部卒業、同年十二月より岡山市東田町島村眼科醫院助手勤務、卅三年島村醫院長獨逸留學に付き留學中同病院を擔當す三十五年備中國笠岡町にて眼科專門醫を開業、三十六年帝國生命保險會社社醫として大阪支店に勤務す三十八年四月渡連開業す大正二年一月大連を引揚げ京都醫科大學に於て同年七月迄醫化學研究同八月獨逸に留學同三年八月ミユーヘンにてドクトル試驗に合格してドクトルメヂチーネの學位を受く三年十月歐洲戰亂の爲め歸朝同年十二月渡連再び開業す

夫人　圭子　二十九歲　長男　久　七　歲

次男　弘　四　歲　長女　滿子　九　歲

◉**後藤長七**　松茂洋行船舶主任　東和公司代表社員

原籍　愛媛縣伊豫郡中山泉町

現住　大連市敷島町四七の二號（電話二一七番）

明治九年二月十八日生る二十七、八年日清戰役の際大阪商船會社に奉職し三十四年尼崎汽船會社に入り海運業に熟達す三十八年大連にて志岐信太郎河邊勝兩氏合同の松茂洋行成立するや入りて其機務に參し爾來同洋行に勤務し傍ら大正三年四月より合名會社東和公司を組織せり

夫人　京子　三十六歲　長男　連一　十　歲

次男　連平　七　歲　三男　長三　二　歲

◉**後藤鶴叟**　滿洲製粉株式會社員

原籍　岩手縣膽澤郡水澤町六五九番地

現住　鐵嶺滿洲製粉株式會社

明治九年十月二十五日生る同二十九年七月東京中央大學卒業後滿洲製粉株式會社に入り今日に及ぶ

夫人　きよの　三十五歲

◉**古藤誠藏**　關東都督府警視　安東警務署長高等官五等正七位　支那勳五等　士族

原籍　鹿兒島縣囎唹郡末吉村二の方

現住　安東縣警務署官舍

明治八年九月五日生る同三十四年一月臺灣總督府臺

南縣警部拜命、同年五月臺灣總督府臺南縣施行文官普通試驗に合格、同年十一月臺灣總督府警部に任じ、四十二年關東都督府警部に轉ず四十三年十月鐵嶺警務署長に、同年十一月安東警務署長を命ぜられ同年十二月關東都督府警視に昇任す

父君　誠　吉　六十八歳　　母堂　ちよ子　六十六歳
夫人　あい子　三十五歳

◉權田親吉

原籍　山梨縣甲府市和田平町
現住　鐵嶺西門外大街五四番地
權田商店主（土木受負、貿易商）滿洲電氣株式會社長　鐵嶺銀行頭取　鐵嶺商品陳列館監査役　鐵嶺實業協會長　鐵嶺居留民會長

慶應二年一月二十四日舊旗本の家に生る本來生糸を業とし幾多の失敗を重ね明治卄九年英人ゴメス氏と共同し上海にて日本輸入諸雜貨を扱ふ三十三年北京に赴き權太商店を開設す三十七年營口陷落と與に同地に赴きて商店を營み三十九年鐵嶺に來住せり本溪湖牛心臺間の輕鐵線百哩は四十三年春頃より權田商店に於て起工し大正三年二月一日開通して同年七月滿鐵會社に引渡せり滿洲に於ける全然たる個人の鐵道建設は氏を以て嚆矢とす可し

夫人　よし　四十一歳

◉權田虎城

原籍　栃木縣那須郡大田原村
現住　長春東一二區五號（電話三二番）
加藤洋行長春支店主任（和洋雜貨商）

慶應三年十二月三日生る明治二十四年慶應義塾を卒業す同四十年加藤洋行が長春に支店を設くるに及び同店に入り今日に至る

◉今（コン）景彥

原籍　東京市麻布區山元町三三番地
現住　大連市兒玉町三の四（電話一五五三番）
滿鐵會社地方部地方課員兼南滿洲工業學校長　正七位　士族

明治三年一月十五日生る明治二十三年秋田縣尋常師範學校卒業、廿八年東京高等工業學校卒業、同年東京高等工業學校助敎授に任ず三十二年岩手縣立工業學校長、卅四年東京府立職工學校長三十九東京府立工業學校長に歷任し四十四年現任に就かる

母堂　さな　六十五歳（在鄕）
夫人　みつ　四十歳　　長男　景英　二十歳（在鄕）
二男　治彥　六　歳　　長女　郁　十七歳（在鄕）
三女　絹子　十三歳　　四女　元子　十一歳
五女　周子　八　歳

●金萬計吾（コンマ）　滿鐵會社工場設計科主任　勳七等

原籍　岡山縣御野郡御野村七九番地
現住　大連市外沙河口三丁目北一〇〇號社宅

明治八年六月一日生る同二十八年六月鐵道局に入りて爾來勤續す三十七年五月野戰鐵道附として渡滿し滿鐵會社成立と與に入社し今日に到る

夫人　うめ　三十二歳　長男　廉　十三歳
二男　行　七歳　長女　まつ子　四歳
三女　沙都子　七歳　四女　那都子　五歳

●合田愿　內外通信社長（通信兼印刷業）

原籍　愛媛縣宇摩郡寒川村一二一八番地
現住　奉天十間房第四區（電話四二番）

安政五年十月十四日生る多年東京に於て通信業に從事す明治卅七年渡滿、同三十八年奉天に居を卜して內外通信社を開設し小形の謄寫版新聞を發行して滿洲に於ける謄版新聞の魁首たり大正四年十一月印刷部を新設して傍ら一般印刷業を經營せり

夫人　うめ　三十七歳　長女　正子　二十歳

●五泉賢二　關東都督府事務官　土地調査部長　財務課兼務　高等官四等從六位

原籍　新潟市古町八番町七一番地
現住　旅順新市街中村町六七番官舍

明治十五年十二月三日生る生家は牧野氏後五泉家を相續す明治三十八年七月早稻田大學大學部法科卒業同三十九年十一月高等文官試驗及辯護士試驗に及第し翌年一月山林屬農商務省山林局勤務を命ぜらる四十年九月山林事務官補青森大林區署經理課長に昇任す翌四十一年八月關東都督府事務官拜命大正三年五月土地調査部の創置と與に現職に就任し今日に至る

母堂　きち　五十一歳　夫人　きみ　二十九歳
長男　忍　四歳　長女　順　七歳
次女　清　六歳

●香宗我部（コウソガベ）操（ミサホ）　大連小崗子郵便所長　從七位勳八等　士族

原籍　滋賀縣滋賀郡膳所町
現住　大連市小崗子西崗橫街五番地

明治四年十一月二十八日生る夙に遞信省に奉職して技手に任用せられ明治二十九年臺灣總督府に轉任す三十八年五月遞信省に再任す三十九年九月關東都督府附を命ぜられ後小崗子郵便所長となる

母堂　幾勢　七十五歳　夫人　さん子　三十八歳
長女　末子　十二歳

◉兒島幸吉　兒島製氷所及兒島支店主（製氷及製壜業）大連商業會議所常議員

原籍　鳥取縣鳥取市瓦町五五番地
現住　大連市濱連町一の二〇號地（電話八四四九番）

安政四年十一月生る同縣下屈指の資産家にして維新後引續き酒造業に從事し數次市會議員及縣會議員に當選す明治二十九年臺灣臺北に支店を設け三十八年渡清各地を視察す三十九年大連磐城町に支店を開設し更に旅順乃木町に原田商會を置き盛んに米穀、酒類及諸官衙の用達を營みしが其後更に製氷、冷藏、清涼飲料水、製壜業を開始し四十四年工場を大連西公園西端に新築し近く又出張所を青島に開きて益々業務を擴張しつゝあり

夫人　ゆき　五十六歳　長女　まき子　二十三歳

◉遠藤盛邦　關東都督府警視　金州民政署支署長　從六位勳六等　士族

原籍　山形縣米澤市關東町
現住　金州城内

明治八年十二月生る同三十八年十二月渡航、大連、旅順、公主嶺、長春、安東縣の各警察署に職を奉じ四十四年一月金州署に赴任し今日に至る

夫人　喜久子　二十五歳　長男　金一　十四歳
長女　澤子　九歳　二女　照子　八歳
三女　弘子　六歳　四女　妙子　一歳

◉遠藤藤次郎　滿鐵會社營口驛長　勳七等

原籍　東京市麹町區有樂町
現住　營口新市街（電話六四番）

明治八年七月四日生る東京早稻田專門學校を出で同二十八年鐵道作業局に入り三十九年野戰鐵道に編入され四十年滿鐵會社に轉属し終に現任に至る

夫人　きぬ子　三十二歳

◉遠藤裕太　光明洋行主（和洋紙帳簿商）大連取引所信託株式會社取締役　ソウライト製造株式會社取締役　滿鐵調辨所代表者　大連市會議員　大連商業會議所常議員

原籍　東京市京橋區新港町四丁目一番地
現住　大連市若狹町六號地　電話（六〇一番　一五九番　六六四番）

明治元年八月二日生る同十四年九月横濱三井物産會社に入社し四十二年七月退社す四十三年四月より滿鐵調辨所に入り同十二月同所主任となる四十五年四月光明洋行に入社大正四年七月同社解散するや之を

繼承して經營せり

母堂　壽美　七十三歳　（在大阪）
夫人　すゞ　三十八歳　長男　藤吉　十六歳
次男　光一　二　歳　長女　のぶ　十五歳
次女　よれ　七　歳　三女　きよ　五　歳

◉江原　忠　中華民國署理税務司　大連海關長　支那双龍三等第二寶星

原籍　神奈川縣小田原町
現住　大連市越後町海關官舍　（電話一〇五八番）

明治九年七月七日三重縣鳥羽町に生る同三十二年九月始めて支那海關幇辦として福州海關に就任す三十九年五月營口海關に轉任し同年十月より四十一年九月まで賜暇し同年十月安東縣海關に轉任し四十四年十二月又大連海關に轉じ大正四年秋立花海關長の青島に轉任すると同時に其後任に昇補さる

父君　信彦　六十九歳　母堂　たね　六十二歳
夫人　春子　三十一歳　長女　きよ子　七　歳
二女　みつ子　五　歳

◉江口營太郎　鐵嶺行政署顧問　獸醫　正七位勳六等

原籍　大分縣宇佐郡高並村五一番地
現住　鐵嶺日之出町一番地

明治十年十二月二十二日生る大分縣農學校卒業後三十二年一年志願兵として入營す三十四年より三十七年まで臺北廳に奉職、三十七年日露役に從軍す三十九年九月鐵嶺縣行政署に顧問として應聘今日に及ぶ

父君　勘藏　七十七歳　母堂　ゑみ子七十二歳（在鄉）
夫人　千代子　三十六歳　子女　三　名

◉江藤豐二　三井物産株式會社奉天出張所主任　奉天商業會議所會頭　奉天居留民會評議員

原籍　鹿兒島縣日置郡串木野村下名一六〇一番戸
現住　奉天新市街西四條街一六號　（電話五三〇番）

明治十五年一月二十六日生る同三十三年東京立敎學院卒業三十三年三月三井物産株式會社支那修學生に採用され三ヶ年間上海、天津に留學す爾後同社員として勤務四十三年十月奉天出張所主任に擢任さる四十五年四月奉天居留民會會長代理を勤め大正四年八月同商業會議所會頭に推選せらる

父君　治兵衛　六十六歳　母堂　たの　六十二歳
夫人　豐子　二十六歳　長男　豐秋　五　歳

◉衛藤祐盛　滿鐵會社職員　運輸部運轉課　正八位

原籍　大分縣宇佐郡安心院村
現住　大連市近江町E區二號ノ二

明治十六年十二月生る同四十一年京都帝國大學工科大學機械科卒業同年八月南滿洲鐵道株式會社に入り今日に及ぶ

夫人　ゆき子　女　二名

榎本謙七郎　榎本商店主（海運、特産物貿易、土木受負業）士族

原籍　兵庫縣神戸市山本通四丁目八一番地
現住　大連市霧島町ス區三四號地

慶應二年生る明治二十一年六月東京高等商業學校卒業同時に獨立貿易商並に海運業に從事す歐米に遊ぶこと數年大正二年九月渡連、山縣通りに店舗を設け物品販賣業を營む大正三年四月業務擴張と同時に武藏町に移轉す重要物産取引所取引人たり

手塚　雄　滿鐵會社職員　南滿洲工業學校教諭兼本社勤務

原籍　長野縣小縣郡中鹽田村
現住　大連市北大山通六番地五號ノ

明治十二年十月生る同三十七年一月より長野縣立松本中學校教諭に奉職す四十三年四月南滿洲鐵道株式會社に入り今日に到る

夫人　英子　三十一歳　長男　秀人　七歳
次男　孝夫　五歳　三男　習夫　・歳
長女　雪子　三　歳

手塚彌太郎　都督府通信技師通信管理局工務課長心得　高等官六等正七位勳六等

原籍　長野縣小縣郡上田町一三六番地
現住　大連市乃木町一・號地

慶應三年七月十五日生る明治二十年より四十四年四月迄遞信省通信部内に勤務す同月關東都督府通信管理局に轉任し今日に及ぶ

母堂　修　六十八歳　夫人　春子　四十八歳

手塚安彥　小寺洋行奉天出張所主任　居留民會評議員　赤十字社病院商議員　士族

原籍　鹿兒島縣薩摩郡宮之城村屋敷
現住　奉天小北門外小寺洋行出張所（電話一六九番）

明治十三年七月十五日生る同三十九年七月早稲田大學政治經濟科卒業後直に營口小寺洋行本店に入る四十一年奉天出張所開設と同時に主任として今日に至る

父君　彥次　五十八歳　母堂　たか　四十五歳
夫人　縫子　二十六歳　長男　安一　四　歳

次男　年雄　二　歲

●寺島正信　埠頭郵便所長正八位勳七等

原籍　愛媛縣溫泉郡石井村大字朝生田四二番地
現住　大連市埠頭郵便所内（電話一九九番）

元治元年三月二十日生る明治二十八年三月郵便電信書記任命、三十二年五月大分郵便局勤務、三十八年五月第四軍兵站監部附として日露戰役に出征して同年六月鐵嶺第一野戰局に勤務す爾來第一野戰局長心得、遼東兵站部附第十五聯隊野戰郵便局長、瓦房店野戰郵便局長心得等に歷任し三十九年四月功に依り勳七等を賜はる更に安東郵便局、長春郵便局、蘇家屯郵便局長を經て四十三年大連郵便局に轉任、同年關東都督府郵便所長に任じ現職に就けり大正四年五月正八位に敘せらる

夫人　りよう　四十二歲　男　邁（ツトム）　六　歲

●寺本泰巖　本派本願寺派遣開教使　旅順出張所主任　親授二等　陸軍部法官部囑託衛戍監獄教誨師

原籍　和歌山縣海草郡鹽津村八三番地
現住　旅順市朝日町二丁目旅順本願寺出張所（電話一〇五番）

明治六年十月二十一日生る同九年四月得度、二十五年二月教師となり同年六月和歌山縣海草郡鹽津村敎德寺住職に任ぜらる同年九月より二十九年迄各地佛敎中學敎授に從事し三十二年七月開敎使となる爾來米國に三年臺灣に三年間開敎に從事す三十七八年戰役に從軍布敎の爲め渡滿、本山より其殊功を表彰せらる又准助敎に進む平和克復後營口に留錫布敎す四十一年十一月以來監正部賛事として北陸道北海道樺太の宗政司法監督に任し又金澤札幌江差の各別院輪番を勤め或は採訪使として北海道及樺太の宗務一切を監督す四十四年六月宗務に對する功勞に依り第二種表章三等一級を尋て同年十一月内陳上座二等特別衣體着用を特許さる四十五年五月親授二等に敘せらる大正二年十二月再び來滿現任に在り

母堂　八重　七十二歲　夫人　若野　三十四歲
長男　巖　十四歲
二男　清　九　歲

●秋山清　滿鐵會社計理部用度課長　大連汽船會社取締役　正五位勳五等　士族

原籍　新潟縣高田市五分一町二丁目五番地
現住　大連市乃木町八番地（電話一八九番）

明治三年三月九日生る同二十五年東京法學院卒業、

三十年十一月文官高等試驗に合格す三十一年十一月判檢事登用試驗に合格す同年十二月司法官試補、會計檢查官補に任じ三十五年九月衆議院書記官を兼務す三十八年五月特許局事務官に、同年十二月臺灣總督府鐵道事務官兼參事官に、四十一年十二月鐵道院參事に任ぜられ四十四年二月高等官三等に敍す同年三月朝鮮總督府鐵道局參事より四十五年四月鐵道院參事に轉し大正三年二月依願本官を免して滿鐵に入り現職にあり

母堂　すみ　　夫人　なほ　三十八歳
長女　みさほ　十六歳　　三女　勝野　十一歳
次男　東歸夫　七歳　　三男　朝男　五歳

◉秋洲三郎　外務書記生　在長春領事館　勳七等

原籍　愛媛縣今治町大字今治二四三番地
現住　長春領事館官舍

明治六年五月生る同二十六年七月第四高等學校卒業三十二年四月會計檢查院屬に任す三十五年三月文官分限令第三條第一項第三號により本官を免ず、三十六年四月外務屬に任ず三十九年四月三十七八年戰役の功により勳八等瑞寶章金八十圓下賜、三十九年五月外務省書記生奉天在勤となる四十一年八月清國皇帝陛下より贈與されたる三等第二双龍寶星を受領し及び佩用するを允許せらる同年十一月ポートランド在勤、四十三年六月桑港在勤、大正元年九月シアトル在勤、大正二年六月勳七等瑞寶章を賜ふ同年九月安東縣に轉じ四年十月長春に轉ず

◉秋富久太郎　合資會社秋田商會滿洲總支配人

原籍　山口縣厚狹郡藤山村
現住　大連市美濃町七一號地（電話長四三七番）

慶應三年三月十八日生る明治二十七年より故郷厚狹郡に於ける炭坑の組合員となり鑛山業に從事す三十八年六月秋田商會に入り同時に同商會擴張の爲め渡滿營口其他各地を視察して歸朝す同年九月再び大連に來りて同商會支店を開設す爾來業務を擴張して滿洲總支配人たり

母堂　まさ　六十三歳　　夫人　歌子　四十歳
長男　傳次　十六歳

◉阿部　讓　朝鮮銀行安東出張所長　安東居留民會行政委員

原籍　大分縣速見郡中山香村

現住　安東縣市場通七丁目（電話六五番）

明治十三年九月六日生る同三十九年七月京都帝國大學法科を卒業して第一銀行本店に入る四十年十月渡韓第一銀行京城支店詰となり四十一年五月城津出張所主任に轉ず四十二年十一月第一銀行より朝鮮銀行に引繼がれて城津出張所長となり四十三年五月平壤支店詰を經て大正元年安東縣出張所長となり今日に及ぶ

父君　歳太郎　六十歳　母堂　はつ　五十二歳
夫人　越路　二十六歳　長女　はま子　二　歳

◎阿部繁德　關東都督府屬　民政部警務課員　勳七等

原籍　岩手縣膽澤郡水澤町
現住　旅順市旭川町二番地官舍

明治三年六月二十四日生る同二十六年十一月內務省雇衞生局勤務三十年三月文官普通試驗合格、同年七月內務屬衞生局勤務となる此間中央衞生會書記、日本藥局方調査會書記、臨時檢疫局書記、醫術開業試驗書記、藥劑師試驗書記を兼任し又永樂病院事務長を命せらる三十八年五月關東州民政署屬に任じ六月渡滿警務部衞生係主任を命せらる翌三十九年九月關東都督府屬民政部衞生係勤務に轉じて今日に及ぶ

父君　彝彥　六十九歳　母堂　いち　六十九歳
（以上在鄉）　夫人　喜能子　四十一歳
長男　明正　二十三歳（金澤在學中）
長女　勝子　二十一歳　次女　登記子　十九歳
三女　東洋子　十六歳

◎阿部熊一　滿鐵會社職員　運輸部運轉課

原籍　愛媛縣今治町
現住　大連市北大山通二一號ノ一二

明治十四年二月生る同三十九年東京帝國大學工科大學機械科卒業、四十年四月現任に就き今日に及ぶ

父君　隣次郎　母堂　せい子
夫人　保子　女　二　名

◎阿武金槌　滿鐵會社安東醫院醫長　小兒科部長　士族

原籍　山口縣美禰郡共和村五〇七番屋敷
現住　安東縣滿鐵社宅

明治十年九月二十八日生る本姓は田中、同三十九年十一月京都帝國大學醫科大學小兒科卒業、四十年傳染病研究所技手に任ず四十一年三月南滿洲鐵道株式會社撫順醫院內科及小兒科を擔當す四十二年一月醫

長に進み翌年一月大連醫院内科部長となる同四十五年五月獨逸に留學しバイデルベルヒ大學コッセル教授教室にて醫化學を研究し大正二年三月歸朝、同二年四月大連醫院内科第三部長となり同年八月安東醫院に轉じ今日に迨ぶ

夫人　たき　三十六歳　三女　ふみ子　四　歳

◉淺井政治郎

關東都督府囑託　大連公學堂長心得
正八位勳六等

原籍　福井縣敦賀町旭町四九番地
現住　大連市伏見臺公學堂官舍

明治三年七月郷里富豪の家に生る年長じて家道衰落し明治二十四年師範學校卒業後郷里の小學校にて教鞭を執るの餘暇法律及經濟學を研究す二十九年家道興復の志を抱きて臺灣總督府第一回教員募集に應じて渡臺、同府國語科特別科を卒業し國語傳習所教諭、公學校長を經て師範學校教授に任ぜられ視學官文官普通試驗委員を兼務す後官制改革の際休職となりて歸郷し銀行會社等に奉職せしが日露戰役に際し特別任務を帶びて渡滿、三十八年三月大連軍政署附となりて都督府の教務囑託を受け現職に就任し今日に至る

母堂　つね　六十九歳（在國）　夫人　てり　三十一歳
長男　一彦　八　歳　二男　九彦　二　歳
長女　惠美　十二歳　二女　英香　六　歳

◉淺野貞一

古河合名會社大連出張所主任
後備役陸軍步兵少尉正八位

原籍　岐阜縣羽島郡江吉良村四一六番地
現住　大連市神明町ナ區一九號地（電話一六一三番）

明治十八年十一月二十六日生る同三十七年名古屋商業學校本科並に專攻科卒業、同年十二月一年志願兵として留守第三師團步兵第六聯隊補充大隊に入隊し四十年步兵少尉に任じ正八位に叙す同年一月古河合名會社に入り四月上海支店詰となり大正二年二月本社に歸任す大正四年五月大連出張所主任として來任す上海在勤中四十年九月上海義勇團步兵少尉に任じ日本隊小隊長となる四十二年中尉、四十五年大尉に昇進し日本隊長となれり

母堂　重　六十四歳　夫人　壽美　二十一歳

◉朝倉傳次郎

滿鐵會社鑛業部販賣課長　士族

原籍　大阪市
現住　大連市山城町四　（電話六二一六番）

明治五年八月晦日石川縣金澤に生る同三十二年帝國大學法科大學英法科卒業後鴻池銀行に入りて神戸支店支配人より累進して本店副支配人たりしが滿鐵會社創立と同時に入社して終に現職に到る

夫人　みや　三十六歳　長男　襄治　十二歳
長女　きよ　十七歳　二女　ふみ　十六歳
三女　節子　十四歳　五女　敏子　八歳
三男　博　六歳　四男　外喜男　五歳
五男　武　三歳

◎朝岡健

領事官補　在奉天總領事館　從七位

原籍　東京市麴町區五番町四番地
現住　奉天總領事館內官舍

明治二十年八月十五日生る同四十四年七月東京高等商業學校專攻部領事科卒業、大正二年十月外交官及領事官試驗合格、三年一月任領事官補叙高等官七等從七位、三年十月奉天在勤を命ぜらる

◎有田彥信

關東都督府技師兼旅順工科學堂教授　高等官三等從五位勳四等　士族

原籍　山口縣阿武郡萩町字松本六〇三番地
現住　旅順新市街特權地一五番地官舍

明治六年六月六日生る同三十一年七月東京帝國大學工科大學機械科卒業、同年八月陸軍技師に任ず四十年四月關東都督府技師に轉任し四十二年十一月旅順工科學堂教授兼任となり今日に至る

父君　一誠　七十三歳　母堂　久米　五十九歳
夫人　茂　二十九歳　長男　益夫　十一歳
二男　幸夫　九歳　三男　隆夫　七歳
長女　正　二歳

◎有賀定吉

菅原工務所主（土木請負業）　大連市會議員　滿洲土木建築業組合長　大連商業會議所工業部長

原籍　東京府豊多摩郡淀橋町大字柏木八五八番地
現住　大連市吉野町二丁目四番地　（電話二六九番）

明治二年十二月長野縣諏訪に生る同二十二年東京工手學校土木科卒業、同時に佐賀振業社甲武鐵道株式會社及び九州鐵道株式會社等に奉職し三十二年六月菅原恒覺氏を援けて東京に菅原工務所を設立す三十五年三月より三十七年九月まで博多灣鐵道株式會社工務課長兼主任技術者として勤務す三十八年二月大連に菅原工務所支店を設置し支店長として土木建築請負に從事す四十一年二月菅原恒覺氏より菅原工務所を承繼して營業主となる四十五年四月請負業視察の爲め歐米各國を漫遊し大正元年十二月歸朝す爾來

引續き菅原工務所を經營す

夫人　すゑ子　三十六歳　長男　清　連　十一歳
次男　清　次　九　歳　長女　博　香　十　四　歳
次女　安　江　五　歳　三女　吉　野　一　歳

◉東　登一郎

關東都督府警部兼外務省警部　營口警務署勤務　營口警察廳警務顧問　士族

原籍　鹿兒島縣姶良郡加治木町一八三番地
現住　營口新市街警務署官舍

明治十五年七月五日生る同三十年臺灣總督府警察官及司獄官練習所に甲科練習生として入所、三十一年卒業臺東廳警部に任せらる三十二年臺北縣警部に轉ず後基隆廳屬及臺灣臨時土地調査局に轉じ同三十六年渡淸、三十七年日露戰役に從軍す四十年外務省警部に任じ牛莊領事館警察署詰を命ぜられ同年四月關東都督府警部に轉じて大連小崗子及皮子窩の勤務を經て現任に轉ず

夫人　ひで子　三十九歳　長男　京之助　八　歳
長女　淑　子　六　歳

◉吾妻耕一

關東都督府通信事務官補　通信管理局計理課長　高等官七等從七位

原籍　東京市本所區三笠町一四番地
現住　大連市兒玉町一三番地　（電話八二一番）

明治十八年十一月二十二日生る同四十三年七月東京帝國大學法科大學獨逸法科卒業後關東都督府に就任す同年十一月文官高等試驗に合格、大正二年三月都督府通信事務官補に任じ高等官七等に同年五月從七位に叙せらる

母堂　春　子　五十二歳　夫人　孝　子　二十二歳

◉相生由太郎

福昌公司主（苦力供給、土木建築業）　大連取引所信託會社取締役　大連土地家屋株式會社取締役　滿洲水產會社取締役　北滿製粉株式會社監査役　株式會社北滿銀行取締役　大連市會議員　大連商業會議所庶務部長　重要物產取引所商議員

原籍　福岡縣福岡市荒戸村町二八番地
現住　大連市霧島町メ區一號　（電話九五番）

明治六年七月二十八日生る幼少にして黑田舊藩公の給費生に採用せられ明治二十九年七月東京高等商業學校を卒業す後日本郵船會社に入り轉して丹波の柏原中學校敎諭に奉職す三十一年九月三井鑛山會社に轉職し三十七年五月更に三井物產會社に轉じて門司支店に勤務せしが四十年八月滿鐵會社大連埠頭事務所長に擢用せらる四十二年十一月退社と同時に自ら福昌公司を設立經營して今日に到る其富力は俠名と與に年に益々高まりつゝあり

夫人　てり　三十二歳　長男　久夫　十七歳
二男　四郎　十歳　四男　武夫　二歳
長女　和子　十二歳　二女　睦子　三歳

◉綾　末廣

關東都督府海務局技手　港務課長　關東州水先人懲戒委員　大連海務協會常務委員　勳六等

原籍　香川縣三豐郡下高瀬村四四五番地
現住　大連市石見町二號地

明治十四年五月十五日生る同三十六年五月香川縣立粟島航海學校全科卒業以來船舶業に從事すること十年、四十一年十月關東都督府海務局技手港務課勤務に任ぜらる三十七八年戰役の功に依り勳六等並に從軍記章を賜はる

母堂　きく　八十歳　夫人　かく　二十五歳
長女　絹子　四歳　長男　光弘　一歳

◉雨宮春雄

滿鐵會社電氣作業所長　工場兼務　遼陽電燈公司監事　士族

原籍　茨城縣水戸市大字下市三ノ町四三三番四三四番合併地
現住　大連市西公園町ヶ區八號地（電話四九七番）

明治十年三月十日生る本姓は服部、同二十六年雨宮家を相續す、三十四年京都帝國大學理工科大學電氣科卒業後滿鐵會社に入りて現任に至る

養母堂　さめ　五十二歳　夫人　さと　二十五歳
妹　千代　二十五歳　長男　清太　二歳
長女　しげ　一歳

◉新（アラタ）　孝之助

滿鐵會社埠頭事務所職員　築港事務所兼務

原籍　東京市京橋區木挽町二丁目一三番地
現住　大連市寺兒溝社宅

明治十三年十一月二十二日生る商船學校卒業後日本郵船會社に就職すること多年其後轉じて三井物産會社に入る四十三年十月南滿洲鐵道株式會社に聘用され同時に營口埠頭所長に任じ翌年大連埠頭事務所に轉じ同年九月上海に赴き同十一月大連に歸へり同十二月再び營口埠頭に勤務し大正三年五月現任に轉ず

夫人　さわ　二十七歳　妹　育子　二十七歳

◉足立祐一

滿鐵會社工場職員

原籍　德島縣德島市寺島町字藍場町
現住　大連市外沙河口三丁目北五番戸

明治十七年三月一日生る同四十一年七月京都帝國大學理工科大學機械科卒業、同年八月滿鐵會社に入り

て工場勤務となり今日に至る

母堂　勢子　　夫人　輝子
長男　正秋　　長女　龍子
次女　泰子

◉**荒尾龍太郎**　滿鐵會社奉天驛長　士族

原籍　鳥取縣鳥取市西町二六五番地
現住　奉天新市街滿鐵社宅

明治三年九月二十七日生る同二十三年東海道線鐵道局に奉職し同四十年迄勤續す其の間運輸本部運轉計畫の業務に從事せり同年五月南滿洲鐵道株式會社に入り運輸課勤務となり四十四年十月現職に任じ今日に及ぶ

大母　こと　九十歳　　父君　成美　六十九歳
母堂　ゆきの　六十七歳　　夫人　らく子　四十四歳
長男　寅雄　九歳　　長女　菊枝子　二十一歳
次女　みな子　十五歳

◉**荒井　綠**　滿鐵會社南滿洲工業學校教諭兼總務部技術局土木課職員　勳五等　士族

原籍　新潟縣高田市
現住　大連市乃木町四番地三號ノ二

明治九年四月十八日生る、同三十四年京都帝國大學工科大學土木科卒業後兵庫縣技師、鐵道技師に任官し四十年滿鐵會社に入りて現在に到る

三男　一女

◉**荒木英雄**（ヒデヲ）　大連市寺内通郵便所長　正八位勳八等

原籍　新潟縣新潟市寄居町三三四番地
現住　大連市寺内通一號地

明治八年三月二十八日生る同二十八年三月遞信省判任官に採用さ同時に京都在勤被命、以來橫濱外國郵便課、新潟一等局監理課及長野一等局監理課に歴任し三十八年五月關東都督府附被命、官制改正と共に大連局在勤となる三十九年奉天局に轉し四十一年再び大連局在勤被命、四十三年五月郵便所新設と同時に現郵便所長となり今日に迨ぶ

夫人　とみ子　四十歳　　長男　森雄　四歳
長女　繁子　十二歳　　次女　林子　六歳

◉**荒木伊平**　桃林舍牧場主

原籍　石川縣江沼郡大聖寺町
現住　大連市外老虎灘會李家屯

慶應元年十月二十七日生る長じて石川縣に生糸及び

羽二重の販賣業を開く明治三十八年六月渡連、故末永純一郎氏と今の遼東新報を創設す四十一年罷めて閑地に就き牧場を開設して今日に及ぶ

夫人　ゆふ子　五十歲
長男　巖　二十一歲（目下早稻田大學在學中）

●赤松彌七　松隆洋行主（硝子及諸雜貨卸賣商）

原籍　大阪市北區南同心町二丁目四七番地
現住　營口永世街（電話一六五番）

元治元年十二月一日生る本店は大阪北久寶寺町二丁目に在り幼時より家業に從事し明治三十九年渡滿現他に居をトし硝子及諸雜貨卸商を開設し哈爾賓吉林及滿洲各地に卸商を爲す

母堂　（存　在）　夫人　さと子

●佐藤友熊　關東都督府警視總長　警務課長　高等官二等從四位勳三等

原籍　鹿兒島縣揖宿郡喜入村
現住　旅順新市街鎭遠町一（電話二一三番）

慶應元年十一月二十四日生る明治二十七年東京帝國大學法科大學英法科卒業後各地裁判所檢事を奉職し三十三年二月臺灣臺南警部長に轉じ桃園宜蘭臺北廳長を經て四十年九月關東都督府事務官に轉じ四十一年一月現職拜命今日に至る

夫人　多津　三十五歲　長男　實良　十七歲
次男　實忠　十五歲　三男　實信　十三歲
長女　禮子　十　歲　二女　智子　五　歲
四女　敏子　當　歲

●佐藤尙武　領事、在哈爾賓總領事館總領事代理　高等官五等從六位勳五等　士族

原籍　青森縣弘前市笹森町二番戶
現住　哈爾賓日本總領事館內（電話三〇七番）

明治十五年十月三十日大阪に生る本姓は田中、明治三十七年七月東京高等商業學校卒業、翌年十月外交官及領事官試驗に合格して同十一月高等官七等に敍し墨西哥在勤を被命、三十九年一月露國在勤となる四十年九月勳六等瑞寶章を賜はる四十一年六月露國皇帝より贈與せられし神聖アンナ三等勳章を受領し及佩用する事を允許せらる四十二年六月大使館三等書記官に任じ露國に在勤す四十四年六月高等官五等に敍し瑞寶章を賜ふ大正三年十二月領事に任じ哈爾賓在勤を命せらる

父君　愛麿　五十八歲　母堂　行子　五十三歲

（以上在國）

夫人　文子　二十九歳　長女　房子　二　歳

◉佐藤善雄　盛京時報主筆

原籍　宮城縣名取郡生出村

現住　奉天大西關盛京時報社內（電話二二番）

明治十八年二月二日生る同三十六年三月宮城縣第一中學校卒業、三十九年六月上海東亞同文書院卒業、三十九年十二月盛京時報社へ入り今日に至る

夫人　せん　二十一歳

◉佐藤安之助　關東都督府陸軍部附　滿鐵會社奉天公所長囑託　陸軍步兵大佐　正六位勳四等功四級

原籍　東京市牛込區若松町一四番地

現住　奉天城內大南門裡滿鐵公所內（電話六七番）

明治四年一月二十一日生る本姓は高橋、明治二十四年三月佐藤家を相續す同二十八年五月陸軍士官學校を卒業して步兵少尉に任じ爾來累進して四十四年九月中佐に進み關東都督府陸軍部附に補し南滿洲鐵道株式會社奉天公所長を囑託せらる曩に日露戰役に際して功四級金鵄勳章を賜はり又日獨戰爭の際山東に派遣を命ぜられ大正四年夏歸任し陸軍步兵大佐に昇進せり

夫人　さ　さ　二十三歳　長男　俊一郎　十五歳
長女　百合子　二　歳　次女　千代子　一　歳

◉佐藤恕一　滿鐵會社沙河口工場職員　七旗

原籍　兵庫縣川邊郡尼崎町廣小路

現住　大連市西公園町ヶ區四號

明治十六年四月九日生る同四十二年東京帝國大學工科大學機械科卒業後直ちに滿鐵會社に入社現職に就く

父君　秀　廣　六十一歳　母堂　しな子　五十一歳
夫人　長尾　二十三歳

◉佐藤至誠　佐藤組主　石炭煙草業　大連銀行取締役　大連市會議員　大連商業會議所理財部副部長

原籍　大阪市北區南安治川三丁目二三番地

現住　大連市佐渡町五番地（電話三四一番）

明治三年二月十四日日向國高千穗に生る東京法政大學を卒業後九州大阪神戶地方に於て鑛業及石炭販賣に從事す三十八年四月渡連、佐藤組を創設して守備軍糧餉部の用達をなし率先して野戰鐵道提理部に稟請して撫順炭の拂下を受く爾來其販賣に從事して今

日に至る
夫人　さく子　三十歳　養女　きぬ子　十七歳

●佐藤敬三　滿鐵會社埠頭事務所職員　榊丸船長　勳六等　士族

原籍　宮城縣宮城郡鹽釜町四六〇番地
現住　大連市山縣通二六號地（電話一四二四番）

明治五年五月十九日生る、同二十三年より海上に勤務す、卅年十月郵船會社に入社し卅九年船長に昇進す、大正二年七月滿鐵會社に入り榊丸船長となる、日清、日露、日獨戰爭に從軍して勳六等を賜はる

母堂　さだ　六十三歳　夫人　はな　四十一歳
長女　さだよ　十五歳

●佐藤新太郎　大連海關幇辦

原籍　米澤市居代町上ノ丁三〇三番地
現住　大連市播磨町ヌ區四〇號地

明治七年九月二十九日生る東京外國語學校出身にして明治三十五年八月より同四十三年迄天津鈔關に勤務し四十四年一月同地海關に轉じ四十五年四月又大連海關に轉じて今日に及ぶ

夫人　せつ子　三十一歳　長男　新一　十一歳
次男　飾雄　十　歳　三男　健一　七　歳
長女　淑子　八　歳　二女　操子　五　歳

●佐藤俊久　滿鐵會社大石橋保線係主任　士族

原籍　岡山縣岡山市二番町五番地
現住　大石橋滿鐵社宅（電社內九番）

明治十一年七月二十五日生る同三十九年三月東京帝國大學工科大學土木工學科を卒業し同年二月湖廣總督張之洞氏の招聘に應じ粤漢川漢鐵路總局技師に任ず四十一年六月依願解聘す同年七月以後は支那各地鐵道を視察研究す四十三年一月南滿洲鐵道株式會社職員を命せられて現任に至る

母堂　千嘉子　六十九歳　夫人　まつ子　二十五歳
長女　さし子　五　歳　長男　智久　三　歳
次男　晴久　二　歳　（何れも原籍地在住）

●佐藤吉郎　關東都督府通信事務官補　旅順郵便局長　高等官七等從七位

原籍　群馬縣北甘樂郡富岡町一〇八番地
現住　旅順市朝日町八番地（電話七〇番）

明治十五年十二月十五日生る同四十三年東京帝國大學法科大學英法科卒業四十三年八月關東都督府通信

書記拜命通信管理局在勤となる大正元年十一月通信事務官補に任じ目下旅順郵便局長たり

父君 源太郎　母堂 ふで
夫人 ひさ 二十四歲

◉佐々木靜吾 外務書記生 在哈爾賓總領事館 勳六等

原籍 沖繩縣那覇區泉崎一九七五番地
現住 哈爾賓總領事館內

明治十年六月二十八日生る同二十六年稅關監吏補となり三十一年三月依願免官、三十二年四月稅關事務官補より外務屬に轉じ三十四年十月外務書記生として浦鹽在勤被命、三十五年十二月拳匪事件の功に依り勳八等白色桐葉章及金二百圓を下賜せらる三十七年九月休職同時に陸軍通譯拜命(奏任待遇)卅八年八月陸軍通譯を免じ復職臨時外務省の事務に從事す翌年二月統監府屬に任ず同年四月三十七八年戰役の功に依り勳六等單光旭日章及金二百圓下賜せらる三十九年十二月外務書記生となりオデッサ在勤被命、四十二年二月莫斯科に轉任、大正元年十二月外務屬通商局第二課勤務を命ぜらる其後現任に就けり

◉佐々木雄治郎 滿鐵會社工場職員 秘書科主任 士族

原籍 山形縣最上郡新庄町一四九番地
現住 大連市沙河口三丁目北六番戶

明治八年十一月十七日生る同三十四年七月東京帝國大學法科大學政治科卒業同時に大藏省に奉職す四十年三月十八日辭して滿鐵會社に入り今日に至る

夫人 貞子 二十八歲　長女 春枝 十二歲
長男 一雄 三 歲

◉佐々木定治郎 日本蓄音器商會大連支店主任

原籍 愛媛縣宇摩郡別子山村五五五番地
現住 大連市大山通二丁目二八號地 (電三九五番)

明治十三年一月一日生る家世住友家に仕ふるを以て夙に同家に勤務せしが明治四十三年辭して翌年九月東京日本蓄音機商會本店支配人補佐として入社す大正元年十一月現任に轉じ今日に至る

夫人 環 三十一歲　長男 大 十一歲
次男 次男 六 歲

◉佐伯才藏 大連海關檢査官

原籍 兵庫縣加西郡下里村內西笠原

現住　大連市若狹町海關官舍

明治七年二月十七日生る同三十一年大阪市立高等商業學校を卒業す三十二年十二月神戸稅關に入りて鑑定官補に歷遷し四十年大連海關開關と與に大藏省の推薦に依りて來任し現職にあり

夫人　てる子　三十一歲　長男　英男　十　歲
二男　義夫　五　歲　三男　正　三　歲
四男　武彥　一　歲

佐伯直平

佐伯洋行主（輸入貿易、蠟燭製造業）奉天信託會社專務取締役　奉天居留民會評議員　奉天商業會議所議員　奉天金融倉庫會社監查役

現住　奉天小西關第三區警第六一號（電話長二七番）
原籍　愛媛縣周桑郡中川村大字石經

明治十一年十一月二日生る同三十七年九月御用商人として營口に上陸し三十八年一旦歸國し三十九年六月奉天に來り同十一月佐伯洋行を開設して今日に至る

父君　晋平　六十四歲　母堂　いさ　六十　歲
夫人　（死　亡）　長男　義雄　二　歲

佐々川豊吉

滿鐵會社南滿工業學校敎諭

原籍　東京市麴町區下六番町三二番地
現住　大連市近江町A區一〇號の一

明治九年八月二日生る同二十八年東京物理學校卒業後第一高等學校及第三高等學校に敎鞭を執る、三十年より三十九年迄京都帝國大學理工科大學に奉職す三十九年九月大日本鹽業會社技師長、四十年十月尼ケ崎製鋼所顧問技師を經て四十一年十二月支那四川省勸業道工業顧問兼同省工業學校敎習に招聘さる四十五年二月第一革命亂の際政府の命に依り歸國す、四十五年五月南滿洲工業學校敎諭に就任して今日に至る

母堂　のぶ　六十四歲（在鄕）　夫人　清　三十二歲

佐々江嘉吉

三井物產株式會社鐵嶺出張所長　鐵嶺居留民會議員

原籍　山口縣玖珂郡通津村二八四〇番地
現住　鐵嶺西門外元町一丁目（電話長三八番）

明治十五年十月二十六日生る上海東亞同文書院を卒業し明治三十七年七月三井物產株式會社上海支店に入り三十八年三月牛莊支店へ轉任、三十九年十月長春出張所へ轉任、四十四年七月鐵嶺出張所へ轉任今日に及ぶ

父君　淺次郎　七十三歲　母堂　しな子　六十五歲

夫人　しげ子　二十歳　長女　幸子　一歳

●**佐治大助**　滿鐵會社埠頭事務所次席　寺兒溝實業補習學校主事

原籍　愛媛縣松山市松前町一二番地

現住　大連市寺兒溝社宅一四號（電話九六番）

明治十年五月十日生る東京郵便電信學校を卒業す同四十年滿鐵會社大連埠頭事務所勤務となり後營口埠頭主任に轉じ間もなく四十三年十月營口埠頭事務所長として赴任し四十四年十一月大連埠頭事務所に返へり異數の擢用を以て現職に至る

夫人　きみ　二十六歳　長男　龍助　四歳

長女　はま子　六歳　二女　照子　三歳

●**佐竹令信**　友信洋行主（特産物貿易及木材業）　開原市民會長　勳六等

原籍　滋賀縣蒲生郡八幡町字新町三八三番地

現住　開原附屬地第二區（電話圖三八番）

明治六年十二月十六日生る同二十七年日清戰役に陸軍通譯官として從軍、三十三年北清事件に復た通譯官として從軍す三十四年より三十七年迄清國直隷總督衙門に聘用せらる三十七年日露戰役に又復た通譯官として從軍す三十九年外務省調査事務囑託として奉天に出張を命ぜられ四十年辭して商業に從事し輸出入業を營む四十五年七月十六日現地に移轉今日に及ぶ

母堂　せつ　六十歳　夫人　ひで　二十九歳

●**齋藤秀雄**　關東都督府醫院醫務囑託

原籍　島根縣美濃郡二條村大字桂一〇〇四番地ノ一

現住　旅順新市街鮫島町

明治十七年十一月二日生る同四十一年十二月東京帝國大學醫科大學小兒科卒業後姑く同大學敎室にて細菌學を實習す四十二年三月より同大學副手及助手として勤務し小兒科を研究す四十五年五月關東都督府醫院醫務を囑託せられ今日に及ぶ

夫人　梅子　二十二歳　長男　勇太郎　一歳

●**齋藤尊雄**　川崎造船所技師

原籍　鹿兒島縣薩摩郡東水引村

現住　大連市濱町川崎造船所大連出張所内（電話七一〇番）

明治十二年三月十二日生る同四十一年七月東京帝國大學工科大學造船科卒業、四十一年株式會社川崎造船所技師となる四十四年六月現任に轉ず

父君　尊寛　六十二歳　夫人　くに　二十六歳
長女　妙子　六　歳　次女　節子　四　歳

◉齋藤茂一郎　南昌洋行大連支店主任

原籍　茨城縣結城郡絹川村大字小森
現住　大連市敷島町四九號地（電話一二〇一番）

明治十五年二月十日生る東京慶應義塾大學出身にして大正元年八月南昌洋行大連支店主任として來任今日に至る

母堂　ひさ　七十二歳　夫人　たま　二十五歳
長男　義男　五　歳　次男　次郎　四　歳
長女　はる子　二　歳

◉齋藤久治郎　共同組主（石炭販賣並運送業）

原籍　石川縣金澤市本町二番地
現住　大連市監部通二丁目四二號地（電話長一一八番 電話　三〇九番）

明治十年十二月十一日生る同三十年より三十八年迄郷里石川縣に於て生糸羽二重の輸出業に従事す三十八年十月渡滿し遼東新報前社長末永純一郎氏を佐けて同社を經營し別に個人事業として運送業並に石炭販賣業を營み今日に至る

夫人　ます　二十七歳　長女　泰子　二　歳

◉齋藤賢道　滿鐵會社中央試驗所釀造科長　理學博士

原籍　石川縣金澤市長町四番町五六番地
現住　大連市山城町四ノ五號地

明治十一年六月二十八日生る同三十三年七月東京帝國大學理科大學植物科を卒業して大學院に入り三十八年滿期退院、在院中農商務省より釀造試驗所の設立事務及臨時調査並に東京税務監督局より酒類分析事務取扱を囑託さる三十九年一月千葉縣山サ印醤油釀造所技術顧問となり四十年一月私立圓城製薬所技師に任じ四十二年三月理學博士を授けらる同年十月農商務省より實業練習生（但し釀造業）として獨逸在學被命、四十四年九月依願留學免除、同年十一月滿鐵會社に招聘され入社現在に至る

◉阪倉淳吉　滿鐵會社地質研究所職員

原籍　兵庫縣武庫郡西宮町字一號地八八三番地
現住　大連市若狹町ァ區四二號地

明治十一年十一月三十日奈良縣吉野郡に生る四十四年六月東京帝國大學理科大學地質學科を卒業して四

十五年二月滿鐵會社に入る
母堂　百　六十五歳　夫人　たへ子　三十歳
長男　一郎　四歳　次男　二郎　二歳

●坂田長平　瀋陽馬車鐵道公司董事

原籍　熊本縣八代郡千丁村字古閑出村二六九番地
現住　奉天新市街瀋陽馬車鐵道公司宿舍

明治十五年六月一日生る同三十三年熊本縣立中學濟々黌卒業後選まれて熊本縣第一期支那留學生として同年五月同文書院に入學商務科を修む三十七年四月同院卒業、同年七月農商務省海外實業練習生として天津に在りて支那實業に關する研究調査練習に從事す四十年六月滿期となる四十一年三月日支合辦瀋陽馬車鐵道公司に入り主として會計及庶務の事務を執る大正四年三月日支株主より董事に推擧せらる
父君　喜十郎　七十二歳

●坂井慶治　成三洋行主（西洋家具裝飾品商）滿洲殖產會社監查役　青島魚市場專務取締役　大連商業會議所常議員

原籍　新潟縣新發田町
現住　大連市大山通四四號地（電話二七五番）

慶應二年三月三日生る明治十九年陸軍士官學校を中途退學す二十三年米國に遊學、二十八年歸朝し榎本農商務大臣の囑託を受け人造綿糸原料「ラミー」調査の爲め臺灣に赴き二十九年歸國す三十八年二月來連現業を開始して今日に到る
夫人　咲子　四十歳　長男　吉郎　九歳
二男　慶太　五歳　長女　花子　十五歳
二女　園子　二歳

●阪口新圃（ニヒトシ）　滿鐵會社鑛業部鑛務課長兼山東鐵道管理部鑛山課長囑託　從五位勳四等

原籍　東京市下谷區下根岸町五七番地
現住　大連市山城町八ノ二

慶應元年十一月二十日和歌山縣那賀郡池田村に生る明治十七年より廿五年迄和歌山師範學校東京熟習英語學校、東京專修學校等を卒業し二十七年尋常師範學校教員免許文部省檢定試驗に合格す三十年文官高等試驗合格、三十一年司稅官高等官七等新潟在勤となり三十三年稅關監視官兼事務官函館在勤に轉じ三十五年千住製絨所事務官に任ぜられ高等官四等從五位勳四等に敍す三十九年在官の儘滿鐵會社に就職調查役となる四十四年撫順炭坑次長となり大正元年鑛務課長となる四年陸軍より山東鐵道管理部鑛山課長

を囑託せらる

夫人　性子　　長女　美代子
長男　巖　　次男　新
二女　克子

●坂本格　撫順日東洋行主　撫順居留民會長

原籍　福岡縣八女郡豐岡村大字本分
現住　撫順舊市街

慶應元年三月生る明治十九年久留米中學校卒業、二十四年東京法學院卒業、翌年福岡縣會議員に當選、二十九年辭して臺灣に渡り樟腦製造業に從事する事數年再び東京に出で日本農業株式會社取締役となり辭職後福岡縣興業銀行取締役に推擧せらる三十八年七月大連に來り居る事一年、奉天より千金寨に移り日東洋行を開設して今日に到る

●酒勾秀一　領事官補　在鐵嶺領事館　領事代理　從七位勳七等

原籍　鹿兒島縣鹿兒島市金生町一〇六番地
現住　鐵嶺領事館官舍（電話一番）

明治二十年二月二日生る四十四年七月東京高等商業學校專攻部を卒業、同年十月外交官領事官試驗に合格して同年十一月領事官補に任じ長春領事館に在勤し大正三年十月現任に轉じて今日に至る

母堂　榮子　五十一歲

●酒井榮次（號野梅）　酒井醫院主（醫師）

原籍　新潟縣中蒲原郡川内村字天津
現住　營口元神廟街（電話一一九番）

明治二年五月十五日生る東京田代病院醫員、市立富山病院醫員、富山監獄醫、東京醫科大學助手法醫學教室勤務、東京醫科大學附屬病院勤務、東京巣鴨病院醫務囑託、東京地方裁判所醫務囑託等を經て明治三十五年五月牛莊衛生會に傭聘せられ營口に來りて開業し今日に至る、俳句を能くし野梅宗匠の名は滿洲俳林に傳はる

父君　榮太郎　七十歲　　母堂　さき子　六十七歲
夫人　つる子　四十二歲　　長男　棟夫　十四歲
次男　椿吉　六歲　　長女　和子　三歲

●笹部杉一　大昌棧局主（石炭商）　南滿銀行取締役　士族

原籍　大分縣下毛郡中津町一七八五番地
現住　奉天小西邊門外警第五號地（電話三〇番）

文久二年六月二十九日生る明治二十二年醫學生より轉じて大倉組に入り前後十有餘年間同組に在り其間小倉及東京本社に勤務し千葉縣一圓の各聯隊の納品主任となり北清事件に際して天津及北京の主任となり又日露の戰役に際しては朝鮮京城にて納品主任を勤む明治三十八年同組土木部に轉じ安奉線輕鐵布設の際石橋子及び渾河間の工事事務主任となる三十八年十二月奉天大倉組次席に昇任し四十一年本社に轉任して辭職し同年再び渡滿、現所に開店して今日に至る

父君　平四郎　八十五歲　夫人　常子　四十九歲
長男　久彥　二十七歲　同上夫人　靜子　二十三歲
孫　武　二　歲

◉笹本桂助　笹本齒科醫院主（齒科醫）

原籍　茨城縣新治郡中家村大字飯田
現住　營口元神廟街

明治十一年十二月十二日生る同三十六年四月東京齒科醫學校卒業三十七年十一月文部省齒科醫術開業試驗に合格、三十八年三月京都齒科醫學校講師に聘せられ同時に附屬醫院の主任となる四十年三月營口森病院の聘に應じて齒科部を擔當す同年十月森病院の閉院と同時に獨立開業し今日に至る

父君　要七　七十三歲　母堂　くら　七十歲
夫人　たか子　二十七歲　長男　嘉明　六　歲
次男　晴明　四　歲　三男　照明　三　歲

◉櫻井香織　大連高等女學校教諭　士族

原籍　京都府與謝郡宮津町字島崎
現住　大連市播磨町ア區二三號地ノ二

明治十八年十二月十八日生る同四十二年東京高等師範學校本科卒業同時に三重縣立第四中學校教諭拜命大正三年大連高等女學校教諭として來任す

父君　盛　五十七歲　母堂　里　五十歲
夫人　光江　二十四歲

◉櫻井勇次郎　セメント、白米石材販賣業

原籍　山口縣厚狹郡須惠村一一番屋敷
現住　大連市浪速町四ノ一〇五號地（電話五七七番）

明治十年二月十五日生る小野田セメント會社に十六ケ年勤續し明治四十年渡連現地に開店して今日に至る

母堂　さき　五十八歲　夫人　かめ子　三十二歲

● 榊原　健　朝鮮銀行大連出張所員　士族

原籍　京都府天田郡福知山町

現住　大連市大山通四一號地ノ二

明治十八年七月十四日生る京都市商業學校卒業後株式會社第一銀行に入り後朝鮮銀行に轉ず大正二年滿洲に開店と共に大連出張所に轉任今尚在職中

父君　鍍　吉　五十七歳　母堂　けい子　五十一歳

夫人　りう子　二　十　歳

● 猿川直治　安東縣鴨綠江採木公司技師　長白分局長　士族

原籍　鹿兒島縣始良郡重富村脇元二六〇番地

現住　長白縣採木公司長白分局内

明治十四年七月十五日生る、三十八年東京帝國大學農科大學林學實科卒業後森林官に拜命し長野縣大林區署及東京大林區署に歷任し四十年十二月鴨綠江採木公司に入り四十二年技師となり現任に至る

夫人　つ　ね　三　十　歳　長女　き　よ　五　歳

二女　た　み　三　歳

● 澤田千熊　關東都督府通信書記　開原郵便局長　從七位勳七等

原籍　福井縣福井市毛矢町一一五番地

現住　開原郵便局官舍（電話一二三番）

明治九年十一月二十七日生る同二十九年二月郵便電信書記高岡電信局在勤、以來福井、名古屋郵便電信局に歷任し三十七年七月日露戰役に從軍し第三軍司令部通信所長を拜命、三十八年一月旅順要塞整理委員を命せらる三十九年九月關東都督府通信書記に任ず同年四月勳七等靑色桐葉章及從軍記章下賜さる四十五年二月淸國皇帝陛下より贈與せられたる四等雙龍寶星の受領佩用を允許せらる大正二年二月開原郵便局長に任命す大正三年五月從七位に敍せらる

養母堂　し　げ　六十四歳　夫人　いすゑ　三十五歳

長女　庚子生　十　五　歳　次女　千代子　二　歳

● 木戸忠太郎　滿鐵會社地質研究所長　參考品陳列所長　撫順炭坑兼務　從五位勳五等

原籍　東京府北豐島郡巢鴨町上駒込二八番地

現住　大連市兒玉町五番地（電話一五三四番）

明治五年四月十四日京都に生る、同三十一年東京帝國大學理科大學地質學科卒業後東京鑛山監督署、鑛山局、製鐵所等に奉職し四十年三月滿鐵會社に入る

夫人　千　子　三　十　歳

◉木付玄聖　浄土宗滿洲開敎區長 大連布敎所(明照寺)主任

原籍 大分縣速見郡杵築町
現住 大連市對馬町明照寺內

明治八年生る父を知らず母を知らず天涯の孤兒生れて流浪十有五年、國會開設の年より帝都の風水に育ち狷介人と容れず漸くにして佛門に投じ自省百千返諦得する處多からむ大正三年五月より大連に駐錫して現職に在り

◉木下　龍　滿鐵會社總務局技術局職員 正七位勳六等

原籍 福岡縣八女郡北川内村
現住 大連市兒玉町一一（電話一五三六番）

明治三年五月十二日生る同二十六年七月獨逸協會學校卒業、二十八年三月より三十年十二月迄外務省屬たり、三十二年二月より同年七月迄司法省屬たり、爾來臺灣總督府警察官及司獄官練習所敎授囑託、國語學校敎授囑託、臺灣總督府警察官司獄官練習所敎官、文官普通試驗委員囑託を歷て三十八年八月警察事務囑託を以て歐洲に留學、四十年三月歸朝す四十一年四月關東都督府警察事務囑託となり、四十二年十月南滿洲鐵道株式會社に入り調査課に勤務し大正三年八月總務部技術局事務主任に轉ず

夫人 わか子 三十三歲　男 貞明 十八歲

◉木下鋭吉　營口水道電氣株式會社專務取締役 營口居留民團行政委員 會議長

原籍 長野縣下伊那郡三穗村大字伊豆木三九四九番地
現住 營口南本街二三番戶

明治四年一月二十七日生る同二十五年より四十年迄東京芝汐留町鐵道局計理部に勤務す四十年七月滿鐵會社に入り用度課購買主任となる四十二年九月同社にて慶和氏の繰糸改良法に依り柞蠶製絲工場を設立するや同工場創業事務に從事す四十四年十二月營口水道電氣株式會社支配人となり大正四年五月同社取締役に當選す之より先き四十五年三月營口居留民團行政委員に擧げられ會計主任となり大正二年議長代理となり更に大正三年以來營口居留民團行政委員會議長たり

夫人 こう 三十五歲　長女 かつ 十六歲

◉菊池武夫　鎭安上將軍顧問 陸軍步兵中佐 正五位勳四等功四級 男爵

原籍 宮崎縣兒湯郡西米良村字小川

現住　奉天小西門外

明治八年七月二十三日鹿兒島市に生る同三十年一月歩兵少尉に任ず爾來各階級を經て大正三年歩兵中佐に昇任す同年九月鎮安上將軍軍事顧問として來任せり

父君　武臣　六十五歳　母堂　鶴子　六十四歳

◉菊池愛太郎　小野田セメント會社大連支社支配人

原籍　愛媛縣喜多郡內子町
現住　臭水子同セメント會社內

明治十四年四月十一日生る同三十九年七月京都帝國大學理工科大學製化學科卒業、以來小野田セメント會社に入りて現職に任ず

父君　石藏

◉菊池吉藏　東和公司重役（海運、輸出入貿易、保險代理業）滿洲電氣株式會社取締役　營口民團行政委員

原籍　山形縣西村山郡大名村
現住　營口永世街三六號（電話長三〇四番）

明治七年九月十九日生る日清戰役の頃大阪河邊家の營業部に在り北淸事變後芝罘に來り高橋廻送店に入り渤海灣航行の小汽船の事務長となる其後下船して芝罘同漕店に入り三十五年營口松茂洋行河邊氏の下に復歸し船舶主任として四十年迄勤續し松茂洋行の失却と與に退店して三宅氏の東和公司に出資し共同經營して同公司今日の隆運を開きたり

父君　榮次郎　六十五歳　母堂　さよ　六十五歳
夫人　きく　三十一歳　嗣子　勢一　十四歳

◉菊地音之助　東信醫院主（醫師）大連市民協會幹事

原籍　長野縣南佐久郡北相木村一七八番地
現住　大連市佐渡町一五號（電話二三三四番）

慶應元年十月一日生る明治二十四年內務省醫術開業試驗に及第し三十年信州輕井澤に病院を設立し尋で岩村田町に產婆講習所を設け其講師となり郡內各學校醫をも兼ねたり三十八年大連に來り軍政署の囑託醫たりしが之れを辭して東信醫院を開設せり產科婦人科は其專門とする處なり

夫人　うた　四十七歳　男　麟平　十八歳
二男　一三　十六歳　長女　ちゑ　十九歳
二女　あい子　十四歳　四女　瑾　九歳

◉北畠保吉　關東都督府通信書記　公主嶺郵便局長　滿鐵諮問委員　士族

原籍　愛媛縣越智郡今治町

現住　公主嶺堀町　（電話一二番）

明治六年八月十七日生る多年遞信事務に從事し多度津及遞信省等に奉職し明治三十九年五月渡滿、大連郵便局に入り以來旅順大石橋遼陽奉天の各局に歷任して四十四年三月現職に就き今日に至る

母堂　さだ　六十歲（在國）　夫人　みち　四十歲
長男　宏　一十四歲（在國）　二男　東三　五歲
長女　かつ　十一歲（在國）　二女　みね　四歲
三女　ふみ　二歲

◉北村五十彥　大倉組大連出張所主任　士族

原籍　名古屋市中區葛町一三八番地
現住　大連市但馬町チ區二三號地　（電話一四六八番）

明治十四年十一月十九日生る京都帝國大學工科の出身にして三十九年大倉組に入る四十年倫敦支店に轉じ四十三年獨逸漢堡支店に轉任、大正二年十月歸朝して本店在勤となる大正三年六月大連出張所主任として來任今日に至る

父君　鶴造　六十五歲　夫人　はな　二十五歲
長男　滿　一歲

◉喜田村朔治　滿鐵會社大連醫院副院長兼醫長　眼科部長南滿醫學堂教授　地方部衞生課兼務醫學博士　士族

原籍　福岡縣京都郡豐津村字豐津五三〇番地
現住　大連市乃木町九番地一號　（電話一、五四八番）

明治九年四月二十六日生る、同三十四年東京帝國大學醫科大學を卒業し三十五年東京醫科大學病院副手囑託となり、京都醫科大學助手より兵庫縣立病院等に轉職し三十八年十月獨逸ブレスラウ醫科大學に於て眼科學を研究し四十年同大學助手代理を命ぜられ四十一年歸朝す同年五月滿鐵會社に入りて大連醫院醫長に任じ以て今日に到る

夫人　直子　二十四歲　長男　善　五歲
長女　房子　三　歲

◉城戸崎萬壽彥　滿鐵會社鑛業部販賣課職員　奉天鑛業課出張所主任

原籍　福岡縣築上郡宇島町八四〇番地
現住　奉天新市街西一條

明治八年十二月二十八日生る學業修了後約二年間高等教育に從事す其後肥前唐津芳谷炭坑に勤務し明治四十四年三月渡滿直に滿鐵會社に入りて現職に至る

夫人　さみ　二十七歲

◉君塚淺治郎　滿鐵會社鑛業部販賣課次席

原籍　千葉縣千葉郡字千葉寺村三四三番地
現住　大連市霧島町レ區二五號地（電話一三二八番）

明治三年四月十五日東京に生る同二十四年一ッ橋高等商業學校を卒業し肥前芳谷炭坑に入り一ヶ年間副事務長を勤務し後農商務省實業練習生として新嘉坡に一年、英國カヂーフに於て二年間石炭を調査し且つカヂーフ大學採礦科を二箇年修養して歐洲各地を視察し更に米國に渡りて銅及石炭を研究し三十七年歸朝後は芳谷炭坑に勤務し四十二年八月滿鐵會社に入りて今日に至る

夫人　たつ　三十五歲　長男　茂太郎　十七歲
二男　清兵衛　十五歲　三男　滿雄　六歲
四男　秀夫　五歲　長女　しげ　十九歲
二女　辰枝　三歲

◉桐原善治　桐原醫院主（醫師）

原籍　山梨縣東山梨郡七里村五五八番地
現住　大連市磐城町三五號地（電話二九一番）

明治十年一月十六日生る同三十一年內務省試驗に及第し東京に於て開業すること一年其後多年檢疫醫として勤務し三十九年檢疫醫を以て大連に來り一年間慈惠醫院に勤務して後辭任開業して今日に迨ぶ其專門は內科及小兒科なり

夫人　うめ　二十九歲　長男　東一　七歲
二男　正元　三歲　長女　春子　八歲
次女　咲子　一歲

◉喜多村茂雄　關東都督府民政部屬　大連民政署經務掛稅務主任　士族

原籍　島根縣鹿足郡津和野町大字鷲原一五七番屋敷
現住　大連市兒玉町一二號地

明治七年三月生る同三十一年三月文官普通試驗に合格す三十二年五月京都府屬拜命以來三十五年九月茨城屬三十八年十二月會計檢査院屬等に歷任して三十九年九月關東都督府屬に轉し終に現任に至る

母堂　ます子　七十三歲　夫人　しず　三十歲
長男　明　十一歲　二男　知　八歲
三男　忠　四歲　五男　勇　一歲

◉結城玄通　滿鐵會社大連醫院醫長兼南滿醫學堂教授

原籍　德島縣美馬郡半田村字半田二四一番地
現住　大連市天神町ヨ區五七號地

明治十八年三月九日生る、同四十三年京都帝國大學

醫科大學卒業後同大學助手に勤務す四十五年四月南滿洲鐵道株式會社醫長を命せられ大正三年十一月南滿醫學堂教授兼務となる

夫人　かつ　三十四歲　長男　玄　活　三歲
長女　正　子　一歲

◉弓削鹿次郎　滿鐵會社技術局建築課職員　士族

原籍　三重縣阿藝郡神戶町
現住　大連市兒玉町三號地

明治三年十月二十四日生る夙に工學博士辰野金吾氏に就きて研鑽を重ね三十二年山口博士の切望に由りて住友本店に入り居ること三年辭して日本銀行に入り文部省及警視廳技師を囑託せらる又多年建築に從事し斯道に名あるの故を以て建築學會正員に推薦さる四十一年二月滿鐵會社に入り撫順炭坑營繕課長に任じ第一計畫完了と與に四十五年十二月現任に就けり

夫人　釭　三十七歲　長男　隆　一　十四歲
二男　寬　治　三　歲　三男　逵　男　一　歲
長女　政　子　十八歲　二女　眞　子　十　歲
三女　順　子　六　歲

◉三宅駿一　東和公司重役　勳八等

原籍　兵庫縣城崎郡城崎町
現住　營口舊市街永世街三二號　（電話四三〇四番）

明治十一年四月二十九日生る同二十八年同志社法政經濟科卒業後直に横濱太刀川商會に入り支配人次席となり三十年秋太沽に派遣せらる、北淸事件後同商會の破產するや日本天津の間に放遊す日露戰爭起るや天津に在りて日に東亞の風雲を觀望し三十八年八月營口に來り軍政署の高等通譯となり奉職すること一年與倉大佐の援護により軍政撤退後輸送業を開始し東盛和に寄寓すること一年東盛和破產と與に四十年春三月東和公司の設立を計畫し菊地吉藏氏之に加盟し努力協力して今の東和公司の基礎を作れり靑島陷落と同時に往いて靑島に同支店を設け同店を監督せり

父君　豐　彥　六十三歲　母堂　まつ子　六十二歲

◉三宅哲一郎　領事官補　在牛莊領事館代理　高等官七等　從七位

原籍　和歌山縣那賀郡粉河村大字粉河一、九〇八番地
現住　牛莊日本領事館內　（電話六〇番）

明治二十一年九月十一日生る同四十三年四月神戸高等商業學校卒業、四十四年十一月文官高等試驗に合格、四十五年七月東京高等商業學校專攻部卒業、大正二年十二月任鐵道院書記、三年十一月依願免官、同年十一月外交官及領事官試驗に合格し領事官補に任ぜられ廣東に在勤、同年十二月敍從七位、四年三月現任に轉ず、

父君　進一郎　母堂　せい子（在郷）

◉三宅　圓（まどか）　正隆銀行長春支店長　士族

原籍　島根縣松江市南田町
現住　長春東科街　電話六一〇番

明治十三年十二月六日生る同二十八年第三銀行に入る四十四年辭して正隆銀行に入り同年七月旅順詰となり大正元年十月現職に就任し今日に至る

父君　壺之助　七十六歳　母堂　きゑ　七十六歳
夫人　信子　二十八歳

◉三好寛美　滿鐵會社運輸部職員　勳七等

原籍　靜岡縣駿東郡小泉村
現住　大連近江町E區五ノ三號

明治九年四月九日生る、同二十四年八月鐵道廳に入りて勤續す四十一年滿鐵會社に轉勤し今日に至る

夫人　たま　三十七歳　長男　元雄　十八歳
二男　武雄　十五歳　四男　滿壽夫　十一歳
長女　文子　八歳

◉三好　務　大連日本基督教會布教師

原籍　高知縣長岡郡新改村
現住　大連市西廣場同教會宿舍

明治十一年七月三十日生る東京明治學院を卒業し同三十八年傳道師として福井に赴任す四十年一月大連に來りて現教會に牧師たりしが同年八月より米國オマハ神學校に留學し居ること一個年にしてプリストン神學校に入り修學三個年後更に桑港附近に在留し大正二年七月歸朝するや再び現教會に招聘せられて救靈に努めつゝあり

夫人　待子　三十歳

◉三好三郎　三好醫院主（醫師）　士族

原籍　佐賀縣佐賀市水ヶ江町六二番地
現住　大連市信濃町一二一號地（電話七九六番）

明治十年三月一日生る同三十五年岡山醫學專門學校卒業、同年福岡醫科大學に入り三十六年助手となりて内科敎室に熊谷、四谷、兩博士の下に研究すること滿三年三十八年十二月關東州民政署大連施療院長として來連す、三十九年都督府大連醫院内科小兒科醫長を兼ね四十年十一月同院合併と共に滿鐵醫院に入り内科小兒科を兼ねしが小兒科分離と同時に内科專勤となる四十四年三月同院を辭し現住所に開業して今日に及ぶ

夫人　あさ子　三十歳　長男　清　八歳
長女　あい子　十一歳　次女　ふみ子　九歳
三女　光榮子　七歳　四女　博子　四歳
五女　惠美子　一歳

●三田村源次　奉天商業學校敎習

原籍　福井縣今立郡岡本村大瀧一三番地
現住　奉天商業學校内

明治十三年十二月二十三日生る同三十八年日露戰役中東亞同文書院を卒業するや營口軍政署の命に依り同地に商業學校を開設し支那人子弟を敎育す後營口還附に際し同校の淸國に引渡さるゝや引續き應聘在勤す四十五年十月同校の奉天に移轉後より今日に至る迄前後十年間同校に敎習たり

母堂　たき子　六十八歳（原籍に家兄と共に在り）
夫人　哲子　三十一歳　長男　愿　九歳
長女　たつ子　四歳　次女　享子　二歳
（以上神戸在住）

●三島廣太郎　遞信省通信書記　牛莊郵便局庶務會計掛主任　勳七等

原籍　岡山縣都窪郡中州村大字中島一六〇番地
現住　牛莊郵便局官舍

明治七年六月六日生る三十年三月東京郵便電信學校を卒業し郵便電信書記京都郵便局在勤を命ぜらる三十六年十二月通信屬に任じ東舞鶴郵便局在勤に轉ず三十七年八月牛莊郵便局在勤となる三十九年四月卅七八年戰役の功に依り勳八等白色桐葉章及金百八十圓下賜、大正二年六月勳七等に叙し瑞寶章を賜はる

夫人　小徑　三十二歳　長男　芳德　八歳
次男　剛　五歳　三男　徹　一歳
次女　壽枝　二歳

●三枝岩次郎　玉屋號主（羅紗類販賣兼洋服業）

原籍　大阪市西區九條町三丁目五九番地

現住　大連市大山通五四號地　電話六〇七番

慶應二年十二月十五日生る同三十九年渡連、市內磐城町に於て現業を開始し四十三年三月現地こ移轉し今日に迨ぶ

夫人　よし　四十四歳　長男　久一　十四歳

●三木春策　田中商會船舶係主任

原籍　德島縣海部郡三岐田村大字西由岐浦村字東四三番地
現住　大連市丹波町一九號地ノ三

明治十七年九月四日生る中學半途にして腦病の爲め鄕里にて靜養中卅七年日露の戰役に際會し船舶業の有望なるを認め大阪の船主原田商行に入り海運業實習の傍ら泰西學館に通學し英語を研究す居るこ三年明治四十年秋渡淸、芝罘に到り同地海運業原田洋行會計兼營業主任となる業務の餘暇英語及支那語を研究す四十四年同店の失敗するや百方其再興を策せしも終に効なくして同四十五年六月同地を引上げ大連に來り田中商會に入りて現任に就けり

父君　朝藏　五十五歳　母堂　その　四十五歳
夫人　里子　二十五歳　弟三名、妹三名

●三浦俊造　鹽久吳服店支配人

原籍　京都市上京區新烏丸頭町一六番地
現住　大連市浪速町三丁目二八號地（電話二三三番）

明治十三年一月二十日生る同三十九年七月渡連以來鹽久吳服店を開設し吳服の販賣業を營む近く合資會社に組織變更こ同時に其支配人となれり

夫人　津多　三十一歳　長女　文子
次女　幸子

●宮越正良　關東都督府警視　奉天警務署長兼領事館警察署長　高等官五等正六位勳四等

原籍　宮崎縣北諸方郡庄內村二九三番地
現住　奉天附屬地警務署官舍（電話一一一番）

文久三年六月十日生る明治三十二年二月千葉縣警務課長より同縣匝瑳郡長に任じ三十三年三月又愛知縣北設樂郡長に轉ず三十五年十二月警視に任じ新宿署長に補せらる其後京橋、神田、芝、愛宕の各警察署長を歷て大正三年七月關東都督府警視に轉任し奉天警務署長に補せらる

夫人　さし　三十三歳　一男　三女

●宮城正昕　正金銀行大連支店計算係　後備陸軍步兵中尉從七位勳六等功五級

原籍　兵庫縣神戸市湊町二七八番地

現住　大連市神明町ォ區一〇號地

明治十六年九月十六日生る夙に正金銀行に入り北京安東縣、神戸等に多年在勤し大正三年現任に就けり

夫人　勝子　二十六歲　長女　さし子　六　歲
二女　晴子　三　歲　三女　孝子　二　歲

◉宮地　宏　遞信省通信書記　牛莊郵便局爲替貯金掛主任　從七位勳七等

原籍　高知縣香美郡山田町八七番地
現住　牛莊郵便局官舍

明治四年三月十一日生る同二十六年十二月高知局に在勤す爾來名古屋、臺灣基隆局、東京局に歷勤して同三十四年七月北京局へ轉任し同年八月又天津局へ轉じ大正二年三月牛莊局に來任す

◉宮川巳作　大連基督敎會牧師

原籍　長野縣上水內郡野尻村
現住　大連市敷島町二五番地

明治八年五月一日生る同二十六年東京明治學院普通科卒業後同神學部に入りて三十年卒業す翌年更に研究部を卒業し直に陸中一の關、群馬桐生、札幌等に傳道を試み轉じて東京赤阪敎會を牧するの傍ら明治學院及東京神學社に神學を敎授す四十三年九月大連に來りて現職に就けり

母堂　みさな　七十七歲　夫人　せい　三十八歲
長男　以作　十一歲　次男　蹟作　八　歲
三男　暘作　五　歲　四男　猷作　三　歲
長女　宣子　十四歲

◉宮崎重一　宮崎製瓦工場主（屋瓦及土管製造業）

原籍　熊本縣天草郡本戸村
現住　大連市山城町無號地（電話四四八番）

明治七年九月一日生る同二十九年三井建築掛に入り其間工手學校に建築科を修め三十年卒業す四十年二月三井を辭し大連土地運送會社の前身たる長谷川銈五郎氏經營の事業に關係して煉瓦製造業を開始し以て今日に至る

夫人　かね　三十八歲　長女　清子　八　歲
長男　一郎　五　歲　二男　二郎　二　歲

◉宮田仁吉　華信洋行主（海軍用達、沈沒船引上業）旅順市會議員

原籍　長崎縣下縣郡嚴原村字今屋敷町二〇番地
現住　旅順三笠町二番地（電話一〇四番）

明治三年二月二十日生る同二十五年上海に航し二十

八年日清戰役に際し召集せられて入營す二十八年劉公島守備特別歩兵中隊附通譯官拜命、同年末解隊、二十九年威海衞占領軍の用達となる三十一年芝罘に店舗を開設し三十三年北清事件に際し天津北京塘沽に支店を設け三十五年青島に移轉し三十七八年の戰役起るや大連、營口、撫順に店舗を設けて用達業を營みしが平和後は旅順に本店を構へ現業を經營して今日に到る

母堂 ふじ 六十八歳　夫人 きく 三十六歳
子女 五名

◉皆川秀孝 (號子俊) 滿洲日日新聞記者奉天支局長 奉天居留民會副會長

原籍 茨城縣那珂郡野口村
現住 奉天十間房第三區營第五〇號地 (電話(奉)一〇四番)

明治十年八月十一日生る同三十年八月陸軍教導團卒業、三十四年六月東京外國語學校清語別科卒業、三十五年九月より清國四川省成都武備學堂教習に被聘三十八年十一月早稻田大學講師となる三十九年四月曹洞宗大學講師となる四十一年七月早稻田大學專門部政治經濟科卒業、同年十月讀賣新聞記者となり、四十四年九月滿洲日日新聞奉天支局長となる大正四年一月奉天居留民會副會長に選ばる

父君 淡路 六十五歳　夫人 ひさ 三十三歳
長男 五郎 十八歳　二男 剛六 九歳
三男 毅 四歳　長女 みさ 五歳

◉水川富平 都督府通信事務官補 安東縣郵便局長 高等官六等正七位

原籍 岡山縣吉備郡眞金村
現住 安東縣大和橋郵便局官舍 (電話一〇〇番)

明治十年四月五日生る同二十八年四月より通信部内に奉職し廣島大阪局の勤務を經て三十六年十二月東京遞信管理局詰となり翌年再び大阪に轉じ三十九年二月鹿兒島郵便局監理課監督係長を命ぜらる四十年二月關東都督府に轉じ大連通信管理局規畫課局所係長、線路係長、業務主任、監理主任等を經て四十三年二月都督府通信事務官補に任じ鐵嶺郵便局長を拜命す大正元年十一月現任に轉じて現日に及べり

母堂 伊登子 八十歳　夫人 梅子 三十四歳
長男 將太 十三歳　次男 純二 十歳
長女 宣惠 七歳　次女 富美惠 五歳
三女 滿壽惠 二歳

◎水內清治　關東都督府技師　大連觀測所長　高等官五等從六位勳六等　士族

原籍　岡山縣岡山市門田町四〇番地
現住　大連市北大山通二一番地（電話四七三番）

明治五年一月二十六日生る同三十七年七月中央氣象臺技手に任ぜらる三十九年九月一日都督府技師に任じ終に現任に至る

母堂　しな　六十七歲　夫人　琴　三十五歲
長男　松一　十八歲　次男　竹二　七歲
三男　大一　四歲

◎水谷淑　關東都督府通信書記　通信管理局計理課調度主任　從七位勳八等　士族

原籍　島根縣松江市外中原
現住　大連市霧島町ス區六三號地

元治元年十月十日生る明治十五年三月松江中學校卒業、同年十二月島根縣秋鹿、意宇郡役所に奉職し後島根監獄本署書記、松江驛遞出張局勤務を歷て松江遞信管理局に轉じ二十八年十二月郵便電信書記赤間關郵便電信局在勤となる爾來熊本郵便局、郵便爲替貯金管理所に在勤して三十八年三月遞信局に任じ經理局勤務を命ぜらる翌年九月關東都督府通信書記に任じ計理事務取扱に關する規程起草委員長、都督府郵便電信局計理課長心得、調度主任、營繕主任兼務等を命ぜらる四十四年從七位に叙し勳八等を賜はる

夫人　美保子　四十五歲　男三名　女三名

◎水野應佐（號茗老泉）　遼東新報記者奉天分局長

原籍　愛媛縣宇摩郡川之江町中洲町一四二五番地
現住　奉天驛前滿鐵貸事務所（電話四一二五番）

明治十三年一月十三日生る金澤市英和學校に普通學を修め明治學院東京專門學校に神學及び哲學を研究す三十三年九月東京專修義塾に甫めて教鞭を執り三十五年長野縣師範學校教師となり三十七年四月上京日露戰爭記者に轉じ同年十二月又東京日日新聞記者に轉ず四十年十月滿洲日日新聞社編輯長に聘せられ一時臺灣日日新報社に入りて南清各地を漫遊す四十四年十月又滿洲日日新聞社に復歸し大正三年八月辭任、同四年二月滿洲通信社主筆となり同年十一月現任に就く

夫人　ゆきの　二十三歲

◎峰八十一　伊豫組主（諸雜貨、醬油製造、貸家業）

原籍　愛媛縣喜多郡長濱町四九番ノ一

現住　奉天西二條街（電話二〇二番）

慶應元年一月十八日生る明治二十三年より南洋に赴き各種業務に服して勤苦を極む二十八年臺灣の占領せらるゝと同時に同島に赴き各地に於て御用商其他を營むこと九年去りて朝鮮に赴き三十八年十月より奉天に於て伊豫組を開設して今日に到り奉天の成功者を以て目せらる

夫人　きん　五十歳　長女　さと　二十七歳

◉都澤（ミヤコザワ）正章　滿鐵會社中央試驗所職員　染織科主任　勳七等

原籍　岩手縣西磐井郡一ノ關町一一七番地
現住　大連市近江町e區二號地ノ一

明治五年九月八日生る同二十六年東京工業學校染織工科卒業後三十八年迄京都市染織學校教諭、京都市染物同業組合技師に歴任す此間三十四年七月より三十七年十二月迄伊國に留學す三十九年より京都日本製布株式會社工師に任ぜられ四十五年四月滿鐵會社に入り現任に就けり

母堂　たか　六十五歳（在郷）　夫人　春江　三十歳
長女　久　當　歳

◉箕輪正英　福博洋行主　滿鐵諮問委員　公主嶺銀行監査役　特産物組合長　從七位勳五等

原籍　福岡縣福岡市天神町二〇番地
現住　公主嶺東雲町一丁目二號地

慶應元年十月二日生る明治三十一年九月陸軍現役を退き同十一月豊前國田川郡赤池炭坑に入り二十五年十月福岡縣日の丸炭坑を經營す日露戰役に應召從軍解除後渡滿し三十九年八月公主嶺に福博洋行を開設す四十年三月公主嶺民會長に擧げられ同十一月又公主嶺協會長に擧げられて大正四年五月迄在職す四十四年滿鐵試問委員、四十二年赤十字社地方委員、大正三年十月特産物組合長となり今日に及ぶ

夫人　いさ　五十一歳　長女　のぶ　二十三歳

◉南　虎太郎　滿鐵會社工場職員　計算科長　從七位勳七等　士族

原籍　東京市麹町區隼町一二番地
現住　大連市外沙河口三丁目北一〇號社宅

文久元年一月十二日生る明治十四年三井物産會社に入り二十年鐵道局に轉じ三十七年五月野戰鐵道附として渡滿し滿鐵會社成立の際引繼がれて入社今日に到る

夫人　たま　三十八歳

◉白仁　武

關東都督府民政長官、土地審査委員會委員長、旅順工科學堂學長、東洋協會滿洲支部長、日本赤十字社滿洲委任部監督、正四位勳二等　士族

原籍　福岡縣山門郡城內村字奧州小路

現住　旅順新市街特權地一七號地ノ一八　（電話二〇六番）（電話二三五番）

文久三年十月十八日生る明治十六年十二月家督を相續す二十三年東京帝國大學法科大學政治科卒業、直に內務省に出仕す二十五年司法省參事官となり爾後北海道廳參事官、文部省書記官、拓殖務省書記官、內務省書記官等を歷任して三十五年內務省神社局長兼造神宮副使等に任ぜられ更に栃木縣知事及び文部省普通學務局長を歷て四十一年五月關東都督府民政長官に任ぜらる大正四年秋召されて御卽位の大典に參列す每年帝國議會開會中政府委員として臨席する爲め上京し議會の閉會と與に歸任するを常例とす、謹厚明敏にして循吏の名あり

父君　成功　七十五歲　　母堂　とよ　六十六歲
夫人　まさ　三十五歲　　長男　泰　十八歲
二男　進　十五歲　　三男　止　七歲
四男　滿　二歲　　長女　興代　十六歲
二女　多嘉　十三歲　　三女　宇都代　十歲
四女　滿洲代　五歲

◉白須　直

關東都督府事務官兼秘書官　秘書課長　高等官三等從五位勳五等　士族

原籍　大分縣北海部郡臼杵町

現住　旅順舊市街朝日町二ノ二官舍　（電話七番）

元始元年一月五日生る東京外國語學校に於て支那語を專攻し在學中外務省留學生として芝罘、上海、京城等に轉駐し明治二十四年外務書記生を以て芝罘、香港、桑港の各領事館、龍動公使館、上海、天津の總領事館に歷任し三十六年六月蘇州領事に昇任し四十年三月重慶領事に轉ぜしが翌年春眼病の爲め歸朝靜養し四十二年九月關東都督府に轉官となる大正四年九月大禮使事務官兼務を命ぜられ卽位の大典に參列したり多年外務に奉職して暹羅國皇帝より勳四等を露國皇帝より勳二等を贈授せらる

夫人　滿壽子　三十八歲　　二女　儀子　十歲
長女　典子　十一歲　　長男　寅　二歲
三女　穆　七歲
二男　謨　一歲

◉鹽川隆太郎

滿鐵會社鐵嶺保線係主任　士族

原籍　德島縣德島市下助任町馬場筋

現住　鐵嶺滿鐵社宅　（電話二〇番）

明治三年十月十日生る同二十二年三月九州鐵道會社に奉職して小倉黑崎間鐵道建設工事及門司赤間間並に赤間二日市間線路修繕工事に從事す又同二十六年十一月よりは小倉行橋間線路測量及工事監督、早岐佐世保間線路工事監督に從事し三十年四月本社工務課勤務となる三十三年六月北越鐵道會社に轉職し線路改良工事及保線工事に從事す三十八年七月臨時軍用鐵道監部附として下馬塘奉天間輕便鐵道布設工事に從事す四十年四月南滿鐵道株式會社に轉じ大連建設事務所に勤務す四十一年十一月瓦房店保線係勤務となる四十五年五月現職に轉じ今日に至る

父君　英五郎　七十九歲　母堂　ふじ子　七十六歲
夫人　かね子　四十歲　長女　元子　十三歲

◎重信直道　大連海關檢査官　士族

原籍　鹿兒島縣揖宿郡今和泉村岩本
現住　大連市若狹町四一號地稅關官舍

明治五年八月十五日生る同三十二年一月横濱稅關に入り歷遷して長崎稅關鑑定官補に任す四十年大連海關開關と與に大藏省の推薦に依り入關し現職に至る

夫人　安佐子　二十七歲　長女　はつ子　八歲
次女　年子　七歲　三女　好子　四歲
長男　邑弘　六歲

◎神宮敏男　大星ホテル主（旅館業）南滿銀行監査役　奉天調辦株式會社取締

原籍　佐賀縣杵島郡武雄町七七一九番地
現住　奉天新市街西一條七號地（電話一三九番）

明治十八年八月一日生る同三十五年四月私立長崎語學校入學し三十七年三月卒業す三十八年五月渡滿、營口にて大星公司を開設し稅關代辨並に荷物運搬業を營む三十九年九月奉天に來轉し雜貨商を營む四十一年三月より宿屋業並に奉天驛搬荷夫及び構內の兩替及雜貨店を開設す大正三年九月奉天信託會社及滿鐵調辨所監査役となる

父君　平一郎　五十八歲　母堂　つな　五十歲
夫人　千代子　二十八歲

◎島　芳藏　横濱正金銀行大連支店副支配人

原籍　大阪府三島郡淸溪村大字泉原一一四六番地
現住　大連市兒玉町二番地（電話八一九番）

明治九年八月六日生る同三十七年京都帝國大學法科大學法律科卒業三十八年四月横濱正金銀行に入り現

下大連支店副支配人たり

夫人 いく子 三十二歳　長女 信子 十二歳
二女 清子 七歳　三女 澄子 三歳

◉島崎好直　滿鐵會社遼陽經理係主任 遼陽電燈公司支配人 退役陸軍步兵中尉 從七位 勳六等 功五級

原籍 東京府下豐多摩郡大久保村百人町二五九番地
現住 遼陽白塔北街イ區第一九號

明治六年一月二日生る三十九年七月東京帝國大學法科大學法律科卒業、四十年九月南滿洲鐵道株式會社に入り今日に及ぶ

夫人 靜子 二十八歳　長男 直正 三歳
長女 綾子 八歳　次女 智子 二歳

◉島根用二　滿鐵會社地方部衞生課事務長 勳七等

原籍 埼玉縣南埼玉郡大澤町一一四番地
現住 大連市山城町八番地ノ一（電話一五五四番）

明治二年十月二十日を以て生る同二十二年徵兵として入營、二十八年一等看護長に累進す二十九年陸軍屬に任ぜらる、三十七八年戰役の功に依り勳七等を賜ふ、四十四年五月南滿洲鐵道株式會社に入りて現任に到る

夫人 さと 四十三歳　長女 靜子 十八歳
二女 金 十二歳　三女 綾 五歳

◉島田定持　島田法律事務所主（辯護士） 從五位 勳五等 士族

原籍 埼玉縣北葛飾郡栗橋町三四一番地
現住 旅順市敷島町三丁目一一番地（電話三〇三番）

明治八年三月十七日生る同二十九年七月東京法學院（今の中央大學）卒業、三十三年五月任判事、同三十四年任步兵少尉、同年四月任檢事、三十七年十一月充員召集、三十八年二月旅順要塞守備附、同年三月任陸軍步兵中尉、同年六月より十月迄旅順要塞司令部出張所長として旅順に於ける兵站業務を司る、同年七月より十月迄旅順要塞軍事法廷判士を兼ぬ、同年十一月凱旋す、三十九年七月關東州審理所檢察官として大連に來任す、同年九月任關東都督府法院判官、大正元年十二月休職となり二年三月現地に辯護士を開業し今日に至る

父君 定勝 七十四歳（在東京）
夫人 つれ子 三十七歳　長女 ふみゑ 十四歳
次女 春野 十二歳　三女 あき子 四歳

島名福十郎　長春隆泰公司主　滿鐵諮問委員

原籍　鹿兒島縣鹿兒島市下龍金町一七九番戸
現住　長春新市街東二區

明治九年八月八日生る鹿兒島高等中學造士館出身にして三十二年米穀仲買人となり三十五年廢業し久米田商會に入りて支配人となる三十六年六月店用を帶び天津に航し南滿洲、膠州灣を視察して歸朝す同年再び渡淸旅順に滯留中日露開戰となり露軍の捕虜となりて軍法會議に附せらる後赦されて歸朝す同年四月肥料及汽船購入の爲め上海に赴き歸途楊子江沿岸及香港を視察す同年九月第十師團酒保用達として從軍す三十八年一月營口に入り淸國人と共同して福茂東洋公司を設立し貿易業を開設す此年四月軍政署の許可を得て遼河の輸送業を兼營す四十年一月長春に隆泰公司を開設し現業を開始して今日に至る

莊司鐘五郎　滿鐵會社交涉局職員第二課主任　運輸部營業課兼務　日露協會幹事

原籍　北海道北見國宗谷郡稚內村字ウエンナイ番外地
現住　大連市兒玉町（電話一五六二番）

明治三年四月二日島根縣松江市に生る、夙に歐露に留學し歸朝後東京に露語學校を起し其主宰者たり、二十八年臺灣總督府通譯官となり辭して外務省に入り露領浦鹽斯德に在ること四年、去つて大倉組顧問となる、三十三年大連に來り日本製美術品販賣に從事す後東淸鐵道汽船會社支配人となり同社長崎上海間定期船の代理店として切符發賣貨物取扱事務に從事す後寬城子に小麥の輸出を開始したるが會ま日露戰役の開始となり參謀本部通譯として出征す功に依り勳六等を賜はる凱旋後滿鐵會社に入り現在に至る

夫人　品子　三十歲

莊伴治　德海屋主（洋服商）大連商業會議所常議員　市民協會幹事

原籍　東京市麴町區飯田町二丁目五四番地
現住　大連市大山通四八（電話三四一一番）

文久二年五月生る多年東京に於て德海屋の名を以て洋服裁縫及地質販賣業を營みしが明治三十年其營業を家兄に託して株式仲買商となり一時巨富を造くりたるも三十七年に到りて失敗を重ね株式界と絕緣して再び前業に就きしが三十八年二月大連に來り德海屋支店を開設し本業の外に石灰の製造販賣業を營めり近年其營業名義を長子晋一氏に讓りたるも猶多く

大連に在りて店務を監督し傍ら公共事に盡しつゝあり

長子　晋　一　（倫敦遊學）

◉篠田利英　旅順高等女學校長　高等官三等 正四位勳四等

原籍　東京市牛込區早稻田南町一一番地
現住　旅順市特權地一六番地

安政五年正月十五日長野縣舊松本藩に生る幼にして藩學に漢英數學を學び自辨流の劍道を修む長じて東京に出で同人社、慶應義塾に英語を學びて高等師範學校に入り卒業の後群馬縣師範學校に教鞭を執り更に高等師範學校教授に任ぜらる三年間米國に留學して女子高等師範學校教授となる大正二年病の故を以て辭職す大正三年六月現職に就く

夫人　貞　子　四十七歲　長男　英　一　二十五歲
二男　次　郎　十八歲
長女　利　子　二十一歲　（増井氏に嫁す）
二女　照　子　十九歲　三女　節　子　十二歲

◉椎野鉾太郎　滿鐵會社南滿醫學堂教授

原籍　愛知縣名古屋市西區伏見町二丁目
現住　奉天新市街

明治十二年十二月十二日生る同四十年十二月東京帝國大學醫科大學卒業、四十一年一月同大學助手となり四十四年六月南滿醫學堂教授被命と同時に獨逸に留學大正二年十一月歸朝す爾來南滿醫學堂教授の職に在り

夫人　はる子　三十歲　長女　萬壽子　五　歲
長男　太　郎　五　歲

◉周　鶴　林　裕和盛主（雜貨、食料、運送、貸家業）

原籍　長崎市梅ヶ崎町一一番地
現住　營口永世街　（電話四八番）

明治三年八月十五日長崎に生る九歲にして廣東に赴き十六歲迄學堂に入り長崎に再歸して鎭西學校に學ぶこと二年、爾來父業を佐けて長崎裕和盛號に在り商業に從事すること十七年、三十七年日露の戰役に際し芝罘に赴き三十八、九年は營口及鐵嶺に赴き四十年長崎に歸り後仁川に渡り居ること六年にして營口に來れり大正三年八月七日日本に歸化し引續き現業を經營せり

夫人　か　ね　三十五歲　長女　（程道元に嫁す）
二女　玉　球　十二歲

◉新開　貢　士族

原籍　德島縣勝浦郡小松島町大字芝生村
現住　大連市岩代町二〇號地

安政六年七月廿九日生る家は匠郷の富豪たり夙に藩主に知られ特に小高取の稱を與へ士族に列せらる幼にして武を淺野小倉多田の諸家に修め文を岡久桂堂氏に學ぶ十四歳の時藩立學校長の選拔に依り西の丸學校に入學し同時に洋學校に通學す明治十二年六月田野、芝生聯合村會議員に當選し議長となる十五年一月憲政黨に入り始めて政治に奔走せり十七年八月大隈伯邸に寄宿し東京專門學校に入り政治學を修む二十年縣會議員に當選す以來改選毎に當選して縣參事會員及び副議長に推さる三十一年八月衆議院議員に當選す三十六年中蜂須賀侯の推薦に依り北海道札幌興産株式會社に入り幹部を改造し農業の改善に努力したる結果は二十年來損失を繼續したる同會社に始めて利益を擧げたり日露戰役の際其主宰する德島新聞の記者として渡滿し四十年大連衛生組合の成立するに及んで擧げられて副組合長となり四十二年組合長に當選す以後改選毎に再選し大正四年十月同組合解散迄在職して其の經營に任じたり

母堂　なか子　八十一歳　長男　五郎　二十六歳
三女　ゆき子　十八歳

◉禰見淳太郎　滿鐵會社安東醫院長兼醫長　從六位　勳四等

原籍　愛知縣西加茂郡猿投村大字加納九五番地
現住　安東縣新市街滿鐵社宅

明七年六月二十二日生る同三十五年帝國大學醫科大學卒業、三十六年任海軍中軍醫舞鶴海軍病院附、同年四月叙從七位、同年七月任海軍大軍醫、三十八年八月叙正七位、三十九年四月日露戰役の功に依り勳五等双光旭日章及金五百圓を賜はる四十二年七月旅順海軍病院附兼旅順鎮守府附として渡滿、同年九月日本赤十字社關東州病院醫員囑託となる同年十月叙從六位、四十三年十二月任海軍軍醫少監、四十四年十一月叙勳四等瑞寶章、四十五年四月海軍工機學校軍醫長、大正元年十二月兼補海軍機關學校軍醫長教官、二年二月南滿洲鐵道株式會社に應聘、同三月營口醫院長に任じ同三月內科部長兼務被命、三年十一月安東醫院長に轉じ今日に至る

夫人　いか子　三十歳　長女　みや子　十二歳

次女 きよ子 七 歳

● 志方虎之助

哈爾賓同仁醫院長 哈爾賓居留民會副會長 松花銀行監査役

原籍 長崎縣北松浦郡吉井村
現住 哈爾賓モストワヤ街

元治元年八月六日生る明治二十二年內務省醫術開業試驗合格後、北海道根室に開業し三十年原籍地に開業す三十九年十月哈爾賓に開業す日露戰役後日本人會長となり後居留民會設立と同時に同會副會長となり今日に及べり

母堂 なつ子 八十三歳(在郷) 夫人 ひろ子 四十五歳
養子 玄太郎 三十二歳(在郷) 長女 茶々子 二十歳
孫二名

● 柴田博陽

大連慈惠病院理事長

原籍 栃木縣上都賀郡落合村大字小代
現住 大連市伏見臺 (電話二〇七番)

明治七年十月十五日生る同三十年下野日日新聞記者となり五箇年間勤續後金澤市北國新聞記者を勤むる事三箇年にして辭し大阪新報、遼東新報記者となり三十九年九月一日現病院を創立し以來經營の衝に當り今日に及ぶ

母堂 なみ子 八十一歳 夫人 秀子 二十七歳
長男 亨 六 歳 長女 那美子 一 歳

● 柴田虎太郎

大連取引所信託株式會社專務取締役 大連商業會議所常議員 大連市會議員

原籍 東京市芝區高輪南町五三番地 (電話芝二六八七番)
現住 大連市第一一三區一〇番 (電話八九〇番)

明治元年七月三日岡山縣勝山町に生る多年大倉組に在り擧げられて橫濱支店長たりしが後臺灣、朝鮮、漢口、上海、厦門、香港、天津、營口の各支店に歷任し三十七八年戰役の終局と同時に營口に赴き戰後經營の調査に從事し四十年四月大連に來り日清豆粕製造株式會社を設立して同會社の取締役たりしが大正三年三月大連取引所信託株式會社を創設し現在其專務取締役たり

夫人 みき子 四十一歳 男一名女三名

● 下川龍爾

滿鐵會社埠頭事務所職員 船長 勳六等 士族

原籍 北海道函館區春日町一五番地
現住 大連市越後町十區二號地

明治八年四月六日生る、同二十九年五月商船學校航

海科卒業後同校助敎授に任じ翌三十一年六月山口縣立大島商船學校の創立と共に同校敎諭となり後三井物產、大阪商船、川崎船舶部等に運轉士及船長を勤め又滿鐵會社に船長として入社し今日に到る

母堂　さめ　六十五歲　夫人　さと　三十五歲
長女　千代子　十　歲

◉潮崎喜八郎　日本綿花株式會社大連出張所主任

原籍　兵庫縣津名郡郡家村三一九
現住　大連市山縣通四一號（電話長一三四八番）

明治十七年一月生れ同三十七年大阪府立高等商業學校卒業、以後引續日本綿花會社に勤務し大正二年五月渡滿して同出張所主任として今日に至る

養父君　淺　藏　六十二歲　養母堂　さよ　五十五歲
夫人　譽　志　二十九歲　長男　俊　一　六　歲
長女　さし子　七　歲　次女　みゑ子　二　歲

◉城島類造　城島商店主（米穀商）

原籍　佐賀縣西松浦郡東山代村字里七三番地
現住　大連市若狹町井區一九號地（電話八六三番）

明治十五年三月十日生る同三十九年四月渡連西通りに於て米穀商を開始し四十三年七月現所に移轉す三井物產會社精米特約販賣店なり

父君　宇　市　五十七歲　母堂　さよ　五十六歲
夫人　さよ　三十三歲　長男　鎭　雄　十　歲

◉平岡與平治　遼東新報社理事

原籍　岡山縣津山西今町七八番地
現住　大連市西公園內

慶應元年一月一日生る前原氏より出でゝ平岡家を相續し明治十七年より家業に從事す同二十七年五月株式會社美作銀行（當時資本金三十萬圓）支配人に又二十九年三月美作物產合名會社（營業所大阪）業務擔當人に就任す二十九年七月美作銀行辭任同時に同行大阪支店顧問役被囑、三十一年辭任す三十二年六月美作物產會社辭任　三十年一月匿名組合丁酉商會を大阪に設立し業務擔當人として諸機械、金物、西亞米利加木材直輸入業に從事す三十三年任意解散す三十八年六月軍隊用達の用務を帶びて渡滿、同年八月遼東新報設立に從事し引續き入社して今日に至る原籍地に於ては家業の銃砲火藥類印刷等を營業しつゝあり

父君　松原隆四郎　母堂　小浪

◎平石氏人　關東都督府判官　高等法院長　從四位勲三等

原籍　高知縣
現住　旅順舊市街出雲町法院第一號官舍（電話二二一番）

元治元年三月十日生る夙に法律學を大學に修め卒業後仕官して職を判官に奉し多年累進して大審院判事に補せらる後關東都督府判官に任じ現に高等法院長たり

夫人　鶴　四十八歳　長男　多聞　二十四歳

◎平岩道知　關東都督府囑託譯官　文書課勤務　高等官五等　從六位勲四等　士族

原籍　東京市麹町區平河町六の一二番地
現住　旅順市特權地四三號地官舍

萬延元年十月二十八日京都市に生る明治九年九月東京外國語學校入學、十二年北京に留學、十四年陸軍參謀本部に出仕、二十七八年役從軍、二十九年南清地方に出張、三十三年役に從軍、三十七八年役に從軍、三十八年六月關東都督府民政署通譯官を拜命し以て今日に及ぶ

母堂　米子　七十六歳　夫人　瑞子　二十六歳
長男　道直　十二歳　次男　順二　九　歳
三男　眞男　五　歳　長女　延惠子　十四歳

◎平澤儀平　滿鐵會社職員　滿鐵諮問委員　長春保線係主任

原籍　新潟縣北魚沼郡川井村
現住　長春西五區一四七號社宅（電話公一六〇番）

明治七年十一月十五日生る同三十三年東京私立工手學校土木建築兩科卒業、同年三月遞信省通信局工務課に奉職し翌年三月辭して工學博士大澤三之助氏の許に寄食し居ること六年、專ら建築學を修む其間有栖川宮邸改築、宇治火藥製造所改築、京都五條教會新築等の諸工事に從事し四十年一月南滿洲鐵道株式會社に入り今日に至る

父君　吉多郎　七十歳　母堂　[illegible]　六十五歳（在郷）
夫人　萩子　二十九歳

◎平田包定　平田洋行主（時計、貴金屬[illegible]製造業）大連市會議員　大連商業會議所常議員

原籍　東京市本所區太平町二丁目六十五番地
現住　大連市濱町二丁目四〇番地（電話四三四番）

慶應三年二月十六日濃州關刀鍛冶和泉守兼定家の次男に生る明治八年父と共に岐阜市に移り打物鍛冶となる同十三年父病氣の爲め之を廢す二十四年五月東

京に出で京橋にて運送業を開始す二十六年二月服部時計店工場精工舍に入り十三年間勤續す三十七年九月渡韓、龍岸浦に於て酒保を開く、同年十一月閉店三十八年三月渡連、監部通りに開店し四十三年現地に移轉し今日に至る

母　てい子　八十六歳　夫人　まさ子　三十五歳
男子　三名　女子　三名

●平塚平治郎　横濱正金銀行安東縣出張所主任

原籍　大分縣東國東郡中武藏村
現住　安東縣正金銀行社宅內

明治五年一月四日生る東京法政大學出身にして其後多年臺灣に在留し三十九年六月正金銀行に入り大連支店及旅順出張所長代理の勤務を經て大正四年七月安東縣出張所詰となり同十月同出張所主任に昇任す

夫人　秋子　長男　弘　十七歳
二男　進　十三歳　長女　文子　十歳
二女　正子　六歳　三女　順子　三歳

●平井大次郎　山葉洋行大連支店長　ソウライト製造株式會社監査役　大連市會議員　大連商業會議所常議員　大連材木商同業組合副組合長　士族

原籍　靜岡縣濱名郡新居町
現住　大連市信濃町四八號地（電話三〇六番）

明治四年八月十六日生る同二十四年東京電信學校を卒業し横濱横須賀等にて官職に就くこと數年、後郷里に歸りて商業に從事す此間新居町長と爲ること二年、山葉洋行に入り三十八年十月同洋行大連支店長として渡連し今日に至る

夫人　さう　三十五歳
女　三名　男　一名

●樋口滿　順華公司主（請負業）勳六等　士族

原籍　福岡縣相良郡西新町六三二番地
現住　大連市山縣通一〇二號地（電話一三一番）

明治十三年四月八日生る同三十七年二月福岡縣赤池鑛山學校卒業、同年三月福岡縣田川郡赤池炭坑事業係となり同年六月辭職す七月滿洲軍總司令部附通譯となり同時特別任務隊附を命ぜらる三十八年十一月解任、四十年十月滿鐵會社に入り埠頭事務所に勤務す四十二年二月辭して福昌公司に入り四十三年九月支配人となる四十四年十一月辭職、十二月十日現地に順華公司を設立して今日に至る

母堂　すゑき　六十五歳　夫人　きよ　三十歳

長男 喜走 六歳　次男 堅次 四歳

◎檜山憲太郎　滿鐵會社總務部技術局職員 建築課

原籍 廣島市金屋町三〇番地
現住 大連市山城町四ノ三ノ二號地

明治六年二月八日生る東京工手學校卒業後東京府及司法省建築部に奉職し四十年春滿鐵會社に入りて今日に至る

夫人 みの 三十四歳　長男 勝巳 十歳
二男 憲美 六歳　三男 三郎 四歳
四男 大三郎 一歳　長女 定代 十四歳
二女 君代 十二歳　三女 滿壽枝 八歳

◎廣澤兼次郎　滿鐵會社總務部技術局職員 建築課

原籍 東京市本郷區林町二六番地
現住 大連越後町〆區四號

明治十八年十二月六日生る同四十二年京都帝國大學工科大學土木科卒業特に鐵筋コンクリートを專攻す爾後同大學日比博士の下に在りて研究を重ね滿鐵會社に入りて今日に至る

夫人 潔子 二十六歳　長男 正夫 二歳
長女 富美子 當歳

◎日野恒次郎　都督府通信書記 四平街郵便局長 勳七等

原籍 岡山縣久米郡福渡村大字川口
現住 四平街郵便局官舍（電話五〇番）

明治六年十月二十三日生る三十二年通信書記に任じ神戸郵便局在勤、電話交換局兼務を經て三十六年通信屬に任せらる三十七年末第二軍郵便部附、後遼東守備軍第十野戰局長を拜命して渡滿し翌年第五野戰局長となる三十九年四月三十七八年戰役の功に依り勳七等青色桐葉章を賜はる爾來遼陽局關東都督府通信書記、柳樹屯局長、奉天大北門出張所長を經て四十三年四平街郵便局長に昇任す大正二年十一月より實業補習學校講師並に滿鐵會社諮問委員等の囑託を受け猶現地に在任せり

夫人 せい 三十三歳　長男 勉
二男 昌熙

◎守屋善兵衛　株式會社滿洲日日新聞社長

原籍 岡山縣小田郡大井村二〇八七番地
現住 東京市外大崎町上大崎二七〇番地（電話芝四一四番）

慶應二年一月二十五日生る年少出京して獨英語を修

む十八年の時家道衰落、學資不給の爲め姑く歐亞學館經營の任に當り尋で太政官御用掛兼制度取調局御用掛となり又文部屬を拜命す明治二十七年日本衛生新報を發行し翌年陸軍省檢疫事務に從事す後退官して大日本私立衛生會常務委員兼編輯委員に擧げられ又臺灣總督府衛生顧問附書記となる二十九年五月伊藤公に隨ふて臺灣を視察す三十一年三月再び後藤男に伴はれて渡臺し同年五月臺灣日日新聞を發刊す三十七年出洋、歐米各國の新聞事業及工場を視察し歸臺以來着々其新智識を活用して同社の發達改良に資せり四十三年五月病の爲めに同社を辭するや多年の貢獻勤勞に對して佐久間臺灣總督より感謝狀を贈らる四十四年八月更に渡滿して滿洲日日新聞の經營に任じ從來滿鐵會社の掌裡にありし同社組織の改造を企て大正二年十一月終に之れを株式に改めたり爾來大連に在りて專心同社の經營に任じ以て社運隆盛の今日あるを致たしたるが近く病弱の故を以て多く東京に住し時に來たりて社務を視つゝあり

夫人　きよ　三十六歲　長弟　員次郎　四十五歲
二弟　秀也　三十九歲　三弟　義雄　三十歲
妹　柳　四十一歲

◉守瀬與三吉　大連基督敎青年會主事

原籍　神奈川縣横濱市吉濱町一五番地
現住　大連市出雲町ヲ區三三號地

明治七年五月二日石川縣加賀に生る同三十九年七月十二日渡米、北米合衆國マサチユセッツ州スプリングフヰルド萬國基督敎青年會大學に學ぶ同四十二年六月同大學卒業ーバチエラーオフヒユマニックスの學位を授けらる四十三年四月二十一日歸朝、同年五月大連に來り現職に就任し今日に至る

夫人　淺茅子　四十一歲　長男　尭　十一歲
二男　正　四歲　二女　道　六歲

◉守田省一　遼陽縣知縣衙門應聘員　關東都督府獸醫事務囑託　正八位勳六等

原籍　大分縣下毛郡小楠村五二一番地
現住　遼陽終家大街一三番地

明治十年五月一日生る同三十八年九月大分縣農學校卒業、三十一年十月大分縣檢疫獸醫拜命、三十五年三月警察獸醫拜命、三十六年十一月大分縣畜牛結核病檢查員拜命、三十七年一月大分縣種牡馬檢查員拜命、三十八年六月任陸軍三等獸醫、同年七月十八日敍正八位、三十九年八月任大分縣廚畜檢查技手、三

十九年四月明治三十七八年戰役の功に依り勳六等單光旭日章及金三百五十圓下賜せらる、四十二年七月遼陽縣に應聘、今日に至る

母堂　こう子　五十八歳　　夫人　喜代子　二十八歳
長男　正人　八歳　　次男　省吾　二歳
長女　明子　五歳

◉守田福松　滿鐵會社奉天醫院城内分院長　正八位勳六等

原籍　熊本縣飽託郡内田村大字中内田一七二四番
現住　奉天城内小西門裡城内分院診療所内（電話三五八番）

明治九年七月二日生る三十三年私立熊本醫學校卒業三十四年長崎に於て醫術開業試驗に及第す同年縣立熊本病院醫員、東京醫科大學醫科醫院、佐藤外科醫局醫員、東京醫科大學耳鼻咽喉科醫局醫員を歴て三十七年陸軍見習醫官となり三十七年九月陸軍三等軍醫に任ず三十八年九月叙正八位、三十九年四月戰役の功に依り勳六等に叙す、三十九年五月清國盛京省法庫門施療所に應聘す四十五年二月清國皇帝陛下より贈與の三等寶星第二寶章を受領し佩用するを許さる大正元年九月滿鐵會社奉天醫院醫員となり大正四年一月奉天醫院城内分院長に任せらる

夫人　幸穗　二十九歳　　長男　朗　二歳

◉森　彥三　滿鐵會社工場長　工學博士　士族　從四位勳四等

原籍　岡山縣御津郡御野村
現住　大連市外沙河口二丁目

慶應三年三月三日生る、明治二十四年東京帝國大學工科大學機械科卒業後鐵道廳備となり二十六年遞信省鐵道技師に任じ二十九年神戶工場長を命せらる、在任中京都帝國大學理工科大學講師を囑託さる、三十六年歐米諸國へ差遣され翌年歸朝す、四十年帝國鐵道廳技師、鐵道院技師、中部鐵道管理局工作課長兼新橋工場長に補せられ竝に東京帝國大學工科大學に機械工學科講師を囑託さる大正元年勅任技師に昇任し在官の儘南滿洲鐵道株式會社に入り工場長の職に就く、日露役の功に依り勳四等旭日小綬章を賜はり、大正三年從四位に叙せられ同四年工學博士の學位を授けらる

母堂　奴代　八十五歳
兄　岩太郎　五十五歳（東京女子高等師範學校教授）
夫人　金　四十四歳
長男　正門　二十五歳（第七高等學校造士館在學）

次男　敏視　二十三歳（同　上）
長女　喬枝　二十歳（學習院女學部出身 工學士大口達三氏に嫁す）
三男　博視　六歳　四男　公視　一歳

◉森　御蔭　滿鐵會社總務部調査課職員 日露協會幹事　勳六等　士族

原籍　福岡縣山門郡水上村阪田
現住　大連市伏見臺

明治七年生る長じて東京師範學校を卒業し後東京外國語學校に入學、二ヶ年にして退校す同三十一年の秋露都に赴きて露語を研究し傍ら日露貿易及露國一般事情の調査を了へ三十二年獨逸伯林に留學し高等工業學校に聽講生たる事二ヶ年、三十四年再び露都に入り露國事情を研究し歐露各地を旅行す日露開戰となるや歸朝し露語通譯として第三軍兵站監部附を命せられ高等官六等の待遇を受く後鴨綠江軍司令部及習志野俘虜收容所に轉勤す平和克復後日露貿易に從事せしが四十一年南滿洲鐵道株式會社に入り今日に及ぶ同社に於て露國通の名あり

母堂　長子　五十九歳　夫人　光子　二十六歳
長男　常滿　二歳

◉森　恒治　滿鐵會社遼陽驛長

原籍　栃木縣那須郡黑磯町三八番地
現住　遼陽東站街八區ノ三

明治元年四月二十日生る同二十三年以來各所の鐵道に就職す四十四年南滿洲鐵道株式會社に入り現驛長に就任今日に至る

夫人　よし子　四十二歳　長男　宣雄　五歳
長女　竹　十六歳　次女　もと　十四歳
三女　朝子　十二歳　美代子　七歳

◉森　隆三　滿鐵會社埠頭事務所職員 榊丸一等機關士　勳六等

原籍　東京市麻布區本村町八八番地
現住　大連市播磨町ア區二二號

明治十五年五月二十八日生る同三十七年二月官立商船學校機關科全科を卒業す同年同月日本郵船會社に入社す三十七八年戰役の功に依り勳六等を下賜さる大正二年六月辭職すると同時に現職に轉じて現今に至る

母堂　美津代　七十六歳　夫人　元子　二十五歳
長男　隆郎　五歳　次男　滿郎　二歳

◉森　茂（號滄浪）滿鐵會社總務部庶務課職員　士族

原籍　高知縣土佐郡江の口町三四〇番地
現住　大連市西公園町ヶ區一號地

明治九年七月九日熊本市に生る同三十二年六月早稲田大學英語政治科を卒業す三十四年四月上海同文書院敎授兼舍監となり四十年九月滿鐵會社に入り今日に至る滄浪と號し詩を能くす滿鐵會社に於て支那通の名あり

母堂　美須　五十八歲（在東京）
夫人　かつ　三十三歲　長男　明　八歲
次男　力　六歲　長女　邦子　三歲

◉森本啓太郎　橫濱正金銀行長春出張所主任　士族

原籍　東京市芝區新錢座町一五番地
現住　長春城内正金銀行内

明治九年一月十日生る同三十二年東京高等商業學校卒業後直に橫濱正金銀行に入り東京支店、紐育出張所、天津支店、大連支店、鐵嶺出張所に歷任し大正三年三月安東縣出張所主任に昇任し四年十月現任に轉す

夫人　あさ子　三十四歲　長男　英一　十七歲
次男　賢二　六歲　三男　三郎　四歲
長女　君代　九歲　二女　正代　一歲

◉森本文吉　森本商會主（特産物貿易並に土木請負業）鐵嶺實業銀行取締役社長　鐵嶺滿鐵諮問委員　鐵嶺居留民會議員

原籍　山梨縣東八代郡永井村
現住　鐵嶺敷島町（電話二三八番）

明治九年鄕里山梨縣より橫濱に轉住し同十三年製茶並に海産物の賣込を開始す茶業組合委員、海産物乾物商組合委員、海産物商副組長及び貿易商總代議員等に擧げられ二十九年輸出重要品組合規則發布と同時に海産乾物商組合を組織し其組長に推選せらる或は橫濱市會議員となり或は又商業會議所の組織せらるゝに當り其發起者となりて議員に選ばる其他橫濱電燈會社理事及び監査役、橫濱魚油株式會社社長、取引所理事、又は監査役、商業銀行監査役、貿易倉庫會社重役等に歷任し大日本水産會社第四回水産品評會出品委員、同會審査委員、同會特別通信委員を仰附けらる明治三十八年營口に來住せしが四十年鐵嶺に轉じ現業を開始して今日に至る此間行政委員行政區長等となり大正二年民會議員に推選せられ今尚在職中なり

森本甚次郎

都督府通信書記　金州郵便局長　従七位　勲七等

原籍　岐阜縣大野郡久々野村三七四番戸
現住　金州城内第一區　電話七番

明治六年二月十六日生る同三十八年渡滿遼陽新民府の各野戰郵便局及關東都督府通信管理局に勤務し大正元年十月金州郵便局長として來任し今日に及ぶ

夫人　すゑ子　四十歳　次男　佐一　十五歳
三男　哲次　七歳　四男　淸範　三歳
二女　美佐子　十二歳

森川秀雄

滿鐵會社工場職員　計算科　勳七等　士族

原籍　滋賀縣犬上郡彦根町字芹橋十二丁目二八番屋敷
現住　大連市外沙河口三丁目一四番戸

明治六年十月二十四日生る同三十二年十二月遞信省鐵道書記に任ず三十七年二月休職となりて京釜鐵道會社の業務に從事し釜山、京城、永登浦に在勤す三十八年一月復職して野戰鐵道汽車課に勤務す四十年四月南滿洲鐵道株式會社に入り爾來今日に至る

森川莊吉

滿鐵會社工場職員　設計科第四分科主任　勳七等

原籍　東京市小石川區指ヶ谷町九四番地
現住　大連市外沙河口三丁目北一五番戸

明治十年九月二十九日生る、同二十八年第五高等學校大學豫科二部工科に入學、三十年四月日本鐵道株式會社に入社す三十八年六月鐵道作業局雇となり野戰鐵道附として同年七月大連に上陸し第一工場班員となる四十年二月鐵道技手に任ぜられ在官の儘滿鐵會社に入る大正二年廢官となり引續き在職せり三十九年四月日露戰役の功に依り勳八等白色桐葉章及一時金下賜さる、大正三年勳七等に叙し瑞寶章を授けらる

母堂　みき　七十一歳（在埼玉浦和）
夫人　たか　三十三歳　長男　義金　十三歳
次女　千賀江　九歳

森川千丈

奉天日本赤十字醫院副院長　外科部長　士族

原籍　群馬縣前橋市田中町五番地
現住　奉天大西門外赤十字病院宅

明治十三年五月十二日生る同四十二年十二月東京帝國大學醫科大學醫學科卒業後大學助手として慈善病院に勤務す四十四年奉天に來りて現任に就く

母堂　こま子　六十七歳　夫人　房子　二十四歳

長女　恭子　二　歳

◎**森山林治**　佐々木病院主（醫師）勳六等

原籍　大分縣宇佐郡八幡村字森山
現住　安東縣五番通七丁目

明治四年四月生る同三十五年東京帝國大學醫科大學卒業後和歌山縣立病院副院長兼外科婦人科部長となる三十七年日露開戰と同時に辭して赤十字病院船附として從軍す三十九年五月大阪に於て私立病院を開設す四十二年閉院と同時に富山縣三日市に私立病院を開設す大正三年三月渡滿、現住地に佐々木病院の後を繼承して今日に及ぶ

夫人　春子　二十九歳　　長男　茂夫　八　歳
長女　貴美子　六　歳　　二女　民子　三　歳

◎**森谷重八**　一ノ瀬商會主（和洋雜貨商）

原籍　長崎縣南高來郡南串山村五七二番地
現住　大連市浪速町三丁目九六號地（電話四〇五番）

明治十三年九月生る同三十七年日露戰役に際し御用達として渡滿、三十八年休戰と同時に御用達解散となる三十八年大連市東郷町に一ノ瀬商會支店を開設し四十四年現住地に移轉す大正二年より大連貯金株式會社取締役及び大連浪速町三丁目町會副會長に就任し今日に及ぶ

夫人　ふぢの　二十九歳　　長男　重雄　五　歳
長女　秀子　三　歳

◎**森崎茂樹**　長春商務會書辦

原籍　靜岡縣
現住　長春頭道溝商務會內（電話四二六番）

明治十五年十一月一日生る中學及農商務省水産講習所を卒業し爾來十二年間關東州水産組合、關東都督府水産試驗場、東海罐詰製造合資會社等に歷勤し四十二年現職に就任す

父君　坑四郎　五十四歳　　母堂　千代　五十二歳
夫人　まさ　二十三歳　　長女　春代　二　歳

◎**森口惠徹**　曹洞宗常安寺住職

原籍　三重縣鳥羽町常安寺
現住　大連天神町一號地

安政四年七月十日石見國那賀郡波志村に生る曹洞宗大學卒業後同國安濃郡川合村常光寺住職、同國邇摩

郡大森町龍昌寺住職、三重縣鳥羽町常安寺住職等に歷任して明治四十一年布教師として大連に駐錫し翌四十二年工費一萬餘圓を以て現在の本堂を建築せり頗る創業經營の才幹に富み其常光寺に住職たるや本堂建築の大業を成し又龍昌寺住職時代には庫裡を建設したり目下人材の養成に努め前途布教の擴張を劃策しつゝあり

◉毛利正義　關東都督府中學校教諭 數學科主任

原籍　福岡縣遠賀郡淺木村字髙津五一一番地
現住　新旅順月見町六三號の三

慶應元年九月九日生る明治十八年七月福岡縣立芦屋中學卒業、二十五年七月東京物理學校數學專門科卒業、三十一年六月檢定試驗に依り數學科算術幾何代數科に就き中學校師範學校教員免許狀を受く三十七年數學科三角法に就き同上の免許狀を受く二十七年九月以來高知縣尋常中學校、靜岡尋常中學校、東京府立第一中學校教諭に歷任し四十二年四月現任に就きて今日に至る

夫人　きさ　四十八歲

◉本村三郎　滿鐵會社工場職員 木工科第三分科主任

原籍　福岡縣三潴郡大川町大字向島二一六五番地
現住　大連市西公園町コ區四七號

明治十七年三月十三日生る同三十九年七月京都帝國大學理工科大學機械科を卒業す四十二年八月滿鐵會社に入り現在に至る

夫人　壽滿子　二十四歲　長男　弘　一二歲

◉望月實太郎　廣福洋行主（藥種業）勳八等

原籍　廣島縣豐田郡東野村
現住　奉天城內鐘路（電話一六五番）

明治六年十一月十日生る同三十二年哈爾賓を經由して奉天に來任す三十七年日露役の爲め避難し翌三十八年二月陸軍通譯として第一軍附を命せらる三十九年二月解職、同年三月再び奉天に來り現業を經營して今日に迨ぶ

夫人　花子　四十歲　長男　治郎　四歲
長女　正子　二歲

◉關甲子郎　三和公司主（石炭及貿易業）滿洲電氣株式會社常務取締役 營口居留民團行政委員 勳八等

原籍　東京芝區三田四國町二番地
現住　營口新市街南本街　電話四二番

明治五年八月十二日生る幼より漢學を修む同二十九年五月商業の爲め臺灣に赴きしが幾もなく總督府に奉職して陸軍通譯として臺南旅團司令部に勤務す三十七年戰役に通譯として從軍し凱旋前に辭職歸鄕す三十九年五月渡滿、復州方面に於て食鹽事業に關係せしが同年十月營口水道電氣會社に入り四十年十二月辭して三和公司を開設し一時松茂洋行營口支店を兼營したるが四十二年五月兼營を解き三和公司を專心經營して今日に至る

夫人　勤子　二十八歲　長女　泰子　二歲

◉關根四男吉　滿鐵會社埠頭事務所職員　隆昌丸運轉士　士族

原籍　愛知縣豊橋市大字旭字旭三一七、三一八合筆地
現住　大連市出雲町ノ區一七號地

明治十六年七月十四日生る、同四十年八月商船學校を卒業して日本郵船會社に入る大正二年六月滿鐵會社に轉じて爾來現職に至る

夫人　梅子　二十歲

◉攝待初郎　滿鐵會社地方課職員　從六位　士族

原籍　岩手縣盛岡市鷹匠小路一番戸
現住　大連市西公園町三河館內

明治六年二月生る、同三十二年六月札幌農學校農學科を卒業す同年八月北海道拓殖に關する交通經濟の調査を囑託さる三十五年十二月岩手縣技師に任じ農事試驗場長となる三十六年三月從七位に敍す同年十一月大分縣技師に轉じ同縣農事敎師を勤む三十八年五月正七位に敍す三十九年十月岐阜縣技師農事試驗場長に任じ翌年四月高等官五等從六位に敍す四十三年六月明治製糖株式會社農務部長となる大正三年四月滿鐵會社臨時農事調査囑託に轉じ翌四年四月地方部地方課勤務を命ぜらる

夫人　志[illegible]　三十四歲　博　十二歲（在京）

◉千田次郎　滿鐵調辦所支配人　奉天商埠株式會社取締役

原籍　滋賀縣犬上郡彦根町大字京町四二番地
現住　大連市若狹町六號地（電話一一三四番）

明治九年七月十日生る同三十九年九月大連吉野町大塚大連支店長として渡連、四十三年十月辭して滿鐵

調辨所支配人となる

夫人 文子 二十八歳　長男 英一 八歳
二男 英二 五歳　長女 千代子 十歳
二女 智惠子 七歳　三女 千鶴子 三歳
四女 春子 一歳

◉鈴木庸生　滿鐵會社瓦斯作業所長兼中央試驗所應用化學科長撫順炭坑兼務　ソウライト製造株式會社顧問　士族

原籍　東京市京橋區東仲通九丁目三番地
現住　大連市濱町八ノ二號地（電話一五三三番）

明治十一年九月二十六日金澤市に生る、同三十六年七月東京帝國大學理科大學化學科卒業後理科大學講師を囑託さる四十二年九月解囑と同時に滿鐵會社に入る滿洲大豆を原料とする塗料ソウライト及防水塗料のタンタルスは其發明する處に掛れり

母堂 さき 五十六歳　夫人 文 二十七歳
長男 逢 三 歳　二男 由幾 二 歳

◉鈴木二郎　滿鐵株式會社職員　大石橋車輛係主任　士族

原籍　茨城縣水戸市上市常磐一四番地
現住　大石橋盤龍街九番地

明治十七年十一月十二日千葉縣佐倉宮小路町に生る同四十一年七月東京帝國大學工科大學機械工學科を卒業し同年八月滿鐵株式會社に入社して今日に及ぶ

父君 眞時 六十七歳　母堂 やな子 五十四歳
夫人 千代子 二十三歳

◉鈴木卯之吉　田中商會々計主任　勳八等

原籍　三重縣河藝郡箕田村
現住　大連市寺内通一五號地

明治十二年三月十一日生る郵便局事務員、村役場書記に奉職すること數年、三十八年四月日露戰役に參加し功に依り勳八等を賜はる三十九年箕田村役場書記に拜命す四十一年五月田中商會に入り今日に到る

父君 伊之助 六十五歳　母堂 しな子 三十二歳
長女 貞子 十一歳　次女 婧美子 九 歳
長男 庸一 四 歳　三女 知惠子 一 歳

◉鈴木健吉　鈴木病院主（醫師）

原籍　山形縣西村上郡西村上澤町大字左澤二番地
現住　大連市監部通二ノ六八號地（電話七五二番）

明治十五年十月十日生る生家は實父迄に七代連續せる漢法醫なり十四歳より叔父の醫學博士石川貞吉氏の家に寓して其薫陶を受く明治三十五年三月靜岡中

學校卒業後第一高等中學校を經て東京帝國大學醫科大學に入り四十二年卒業して同大學副手となり產婦人科に勤務す翌年三月同助手となる同年八月會ま大連在住の親戚の產後重患者を見舞ひに來り大連の情況を觀て此地開業の志を起こし歸京後小兒科皮膚科に轉じて更に研究を重ね四十四年六月終に大連に來りて開業せり

夫人　はな子　二十六歳　養女　ふさ　二十歳
妹　うめ　二十三歳　妹　てい　二十一歳
妹　ふみ　十三歳

◉杉下純平

關東都督府醫院醫員　高等官七等
陸軍一等軍醫　從六位勳五等功五級

原籍　岐阜縣郡上郡八幡町大字殿町二六番地
現住　旅順舊市街綾島町官舍

明治十六年八月三日生る同三十七年京都府立醫學專門學校卒業、同年八月陸軍三等軍醫に任ぜられ第七師團衛生隊附として日露戰役に參加し凱旋後樺太及大阪衛戍病院に勤務す四十三年二月陸軍軍醫學校に普通學生として入學同年八月より內科專攻學生として研究し四十四年七月陸軍軍醫學を終了大正元年十二月關東都督府醫院醫員に任ぜられ今日に迨ぶ

夫人　なに　二十五歳　長男　鉄平　五歳
次男　次郎　一歳　長女　鉎　四歳

◉杉野鉾太郎

哈爾賓總領事館書記生　勳七等　士族

原籍　東京市淺草區東三筋町五七番地
現住　哈爾賓日本總領事館內

明治元年四月生る同三十五年六月外務通譯生牛莊在勤を命ぜらる三十七八年戰役の功に依り勳八等白色桐葉章金二百二十圓及從軍記章を賜はる三十九年十一月外務書記生に任じ長春に在勤す四十年五月哈爾賓在勤に轉ず大正二年六月勳七等に叙す三年四月露國皇帝より贈與せられし神聖スタラスタス第三等勳章を受領し及佩用する事を允許せらる

夫人　仲子　三十九歳　長女　愛子　十四歳
次女　花子　十一歳　三女　美子　九歳
四女　精子　六歳　（皆在京）

◉杉原佐一郎

杉原法律事務所主（辯護士）
安東貯蓄銀行取締役　從七位

原籍　岡山縣都窪郡萬壽村大字富久
現住　安東縣大和橋通六丁目四番地　（電話二三〇番）

文久三年七月一日生る明治十六年十月六日司法省法學生徒となる十九年十二月卒業、同年十二月判事登

用試驗に及第し判事試補を拜命す二十年十二月始審裁判所判事和歌山始審裁判所詰となる同年十月奏任官五等從七位に叙す二十四年十月依願免本官同年十一月代言人免許を得、二十六年四月辯護士に登錄せらる三十九年四月渡滿して現地に辯護士開業す四十二年十二月統監府辯護士名簿に登錄さる大正二年二月安東縣商業會議所特別議員となり大正四年三月安東貯金銀行取締役となりて現今に至る

父君　彥一　七十一歲　母堂　壽　七十三歲
夫人　つま　四十五歲　長男　紀一　三十四歲
長女　ひさ　二十五歲

◉角田宏顯（スミタ）（號淸洲）遼東新報記者兼理事　旅順分局長

原籍　佐賀縣佐賀郡久保泉村下和泉一三一五九番地
現住　大連市敷島町一六號地

明治十四年十月十八日生る同三十六年早稻田大學を卒業し同年九月雜誌新聲社に入る三十九年三月遼東新報社に入り多年同社旅順分局長たりしが近ろ多く大連本社に在りて同分局長を兼ぬ

母堂　つや　五十八歲　夫人　さり　三十一歲
長男　文臣　九　歲　次男　春子　七　歲

◉末光平十郎　在大連米國領事館員

原籍　愛媛縣東宇和郡卯之町
現住　大連市攝津町ユ區八番地

明治六年二月二十七日生る同二十年より二十三年迄京都同志社に學ぶ三十年九月より三十七年五月迄神戶稅關に奉職す三十九年米國領事館員となり今日に至る

夫人　たつ子　三十五歲　長男　秀雄　三　歲
長女　倭文子　十一歲　次女　富子　十　歲
三女　愛子　八　歲　四女　幸子　五　歲

◉諏訪光瓊（ミツエ）　外務書記生在牛莊領事館　勳七等　士族

原籍　山形縣最上郡新庄町
現住　營口新市街牛莊領事館官舍

明治八年十一月三日生る同卅二年七月大藏省文官普通試驗に合格して同年八月外務屬となる三十五年十月外務書記生として京城在勤を命ぜらる同年十二月三十三年事變の功により勳八等白色桐葉章及金二百圓を賜はる三十九年一月京城理事廳屬となり同年四月三十七八年戰役の功により勳七等白色桐葉章及金八十圓を賜はる四十二年五月外務屬に復し同年十一

月外務書記生としてバタビヤに在勤す大正三年八月牛莊在勤を命ぜらる

母堂　仙　（五十四歲）　夫人　岑　三十一歲
長女　輝子　十一歲　長男　光一　九歲
次女　正　五歲　三男　圭三　三歲
四男　宏　一歲

◉菅野貫一

滿鐵會社公主嶺醫院長　豫備陸軍一等軍醫正七位　勳六等　士族

原籍　東京市小石川區諏訪町一五番地
現住　公主嶺滿鐵社宅內二九號

明治十一年三月二十四日生る同三十五年十一月十日千葉醫學專門學校を卒業す三十七年三月陸軍三等軍醫に任ず三十八年八月二等軍醫に四十年十二月一等軍醫に昇任す四十四年休職豫備に編入せらる同年八月二十一日滿鐵會社瓦房店分院長となり大正元年八月一日現任に拜命す

夫人　晴子　二十九歲　長女　篤子　七歲
次女　君子　六歲　長男　健太郞　三歲

◉住友兼吉

滿鐵會社地方部地方課職員　教育研究所講師　從七位

原籍　德島縣美馬郡三島村大字舞中島村一〇〇番地
現住　大連市若狹町上區六四號地

慶應三年八月十七日生る、明治二十二年七月德島縣尋常師範學校卒業、二十九年七月東京高等工業學校教員養成所應用化學科卒業、爾來德島縣脇町中學校教諭、神奈川縣橫濱商業學校教諭、香川縣工藝學校教諭に歷任して三十八年五月從七位に敍す、四十一年四月私立三井工業學校教諭たり、大正二年三月滿鐵會社に入り實業補習學校總主事を命ぜられ爾後現任に任り

夫人　光惠　次男　久吉
三男　恒雄　長女　靜子
次女　二三子



遼陽衛戍病院附 （遼陽）
三十九年十月十一日三等軍醫、四十二年十二月十五日二等軍醫、大正元年十二月六日一等軍醫に歴進す （愛知縣 三十一歳）

◎岩尾知之 陸軍歩兵大尉 從六位 旭六 瑞五
獨立守備隊第一中隊長 （撫順）
三十五年六月二十三日歩兵少尉、三十七年十月二十五日同中尉、四十一年十二月二日同大尉に歴進す （石川縣士族 三十歳）

◎一志茂敬 陸軍歩兵大尉 從五位 旭五 瑞四 功五級
獨立守備隊第四大隊第二中隊長 （連山關）
三十四年六月二十五日少尉、三十六年十一月十八日中尉、三十八年六月二十七日大尉に歴進す （長野縣 三十八歳）

◎稲用貢 陸軍憲兵大尉 正六位 旭六 瑞五
公主嶺憲兵分隊長 （公主嶺）
明治三十七年十二月二十三日歩兵少尉、同四十年十二月二十二日歩兵中尉、同四十一年十一月五日憲兵

◎附 在滿洲陸軍武官同相等官并ニ關東憲兵隊員

▲本欄には大尉及同相等官以上を掲ぐ ▲本欄には海軍及び滿洲駐紮軍を缺如す ▲中村大將は關東都督として、大佐佐藤安之助氏は滿鐵會社囑託として、陸軍一等軍醫正山口弘夫、同二等軍醫正大沼良三、陸軍一等藥劑官高杉要二郎、同一等軍醫川口泉、同上杉下純平、同二等軍醫龜倉電鐙、同上小野六藏の諸氏は關東都督醫院長又は醫員として又陸軍一等軍醫小川勇氏は奉天赤十字社醫院長として前出せるを以て茲に掲げず

◎岩田収 陸軍歩兵大尉 從六位 旭六 瑞五
獨立守備隊第六大隊第三中隊長 （熊岳城）
明治三十五年六月二十三日歩兵少尉、同三十七年八月二日歩兵中尉、同四十一年十二月二十一日、歩兵大尉に歴進す （東京府 三十四歳）

◎岩田治 陸軍一等軍醫 正七位 瑞五

中尉、大正三年十二月八日同大尉に歴進す
（宮崎縣士族　三十九歳）

◉服部富樋　陸軍三等軍醫正　正六位　瑞四

歩兵二十一聯隊附兼衛戍病院柳樹屯分院長（柳樹屯）

三十一年十二月十三日三等軍醫、三十四年十一月三十日二等軍醫、三十七年七月二十五日一等軍醫、四十二年十一月三十日三等軍醫正に歴進す
（山口縣　士族　三十九歳）

◉林　新平　陸軍歩兵大尉　正六位　旭五　瑞四

獨立守備隊第二大隊第四中隊長（四平街）

明治三十三年六月二十二日歩兵少尉、三十五年十一月十五日中尉、三十八年三月六日大尉に歴進す
（山形縣　三十八歳）

◉早坂徳四郎　陸軍歩兵大尉　正六位　旭五　瑞四　功五級

獨立守備隊第二大隊第五中隊長（鄭家屯）

三十二年六月二十七日少尉、三十四年十一月三日中尉三十七年十二月十五日大尉に歴進す
（宮城縣　四十二歳）

◉西川虎次郎　陸軍少將　正五位　瑞四　旭三　功三級

關東都督府陸軍部參謀長（旅順）

明治二十二年七月二十六日歩兵少尉、同二十六年六月十三日歩兵中尉、二十八年八月十八日歩兵大尉、三十四年二月二十二日、歩兵少佐同三十七年十一月十六日中佐、四十年十一月十三日大佐、大正二年三月四日少將に歴進す（福岡縣士族　四十七歳）

◉西村多一郎　陸軍二等主計正　正六位　旭五　瑞四　功五級

關東都督府陸軍經理部員（旅順）

三十年六月二十八日歩兵少尉、卅二年十一月十七日中尉、三十七年二月十七日二等主計、三十七年五月二十四日一等主計、四十二年十一月三十日三等主計正、大正二年十二月二十五日二等主計正に歴進す
（滋賀縣士族　三十九歳）

◉堀田信直　陸軍歩兵中佐　正六位　旭四　瑞三　功五級

歩兵第二聯隊附（鐵開原）

二十八年五月二十八日歩兵少尉、三十年十月二十五日中尉、三十四年九月十六日大尉、三十八年九月九

日少佐、大正二年八月二十二日中佐に陞進す（宮城縣士族　四十四歳）

●穗刈十一郎　陸軍歩兵大尉　從六位　勲六　瑞五　功五級
獨立守備隊第六大隊第二中隊長（瓦房店）
明治三十五年六月二十三日歩兵少尉、同三十七年十月二十五日歩兵中尉、同四十二年五月八日歩兵大尉に陞進す（新潟縣　三十七歳）

●細川良久　陸軍砲兵大尉　從六位　勲五　功四
旅順重砲兵大隊中隊長（旅順）
明治三十三年六月二十二日少尉、三十五年十一月一日中尉、三十八年五月十七日大尉に陞進す（福井縣士族　三十九歳）

●豊島保昭　陸軍一等軍醫　從六位　勲六　瑞五
獨立守備隊第三大隊附（奉天）
明治三十四年三月二十八日三等軍醫、三十六年十一月十八日二等軍醫、三十八年六月二十七日一等軍醫に陞進す（岐阜縣　三十六歳）

●大岩鉄雄　陸軍工兵中佐　正六位　勲四　功三
關東要塞司令部員（旅順）
明治二十七年九月二十五日工兵少尉、三十年十月二十五日中尉、三十三年十一月十五日大尉、三十八年十月二日少佐、大正四年三月二十九日中佐に陞進す（愛知縣　四十四歳）

●大村豐輔　陸軍歩兵大尉　正七位　勲六　功五級
獨立守備隊副官（公主嶺）
明治三十六年六月二十六日歩兵少尉、三十八年二月一日中尉、四十三年四月十三日大尉に陞進す（山口縣　三十四歳）

●太田勤市　陸軍一等軍醫　正七位
鐵嶺衛戍病院附（鐵嶺）
明治四十一年六月二十九日三等軍醫、四十三年十一月三十日二等軍醫、大正三年九月九日一等軍醫に陞進す（長野縣　三十五歳）

●小田定藏　陸軍一等軍醫　正七位

（[illegible]）
明治四十二年六月三十日二等軍醫、四十四年十二月十二日陸軍一等軍醫に陞進す（[illegible]　三十六歳）

●岡田銘太郎　陸軍歩兵大尉　從六位　勳六　功五級
（[illegible]）
明治三十六年六月二十六日少尉、三十八年二月一日中尉、四十二年十二月十五日大尉に陞進す（東京府　三十八歳）

●岡田彌三郎　陸軍一等主計　從六位　勳六　功五
（[illegible]）
明治三十六年十二月一日三等主計、三十八年六月三十日二等主計、四十年十二月二十一日一等主計に陞進す（三重縣　四十歳）

●渡邊　齊　陸軍歩兵中佐　正六位　勳三　功五
獨立守備隊第一大隊長（公主嶺）
明治二十八年五月二十二日歩兵少尉、三十年十月二十五日中尉、三十四年五月一日大尉、四十年十一月十三日少佐、大正三年八月十日中佐に陞進す（山形縣士族　四十二歳）

●渡邊　逵　陸軍砲兵大尉　從六位　勳五　功五
（[illegible]）
明治三十四年六月二十五日砲兵少尉、同三十七年一月二十七日同中尉、同三十八年八月二十日同大尉に陞進す（[illegible]　三十五歳）

●渡邊重光　陸軍一等軍醫　正七位
（[illegible]大隊附（旅順））
明治四十年六月二十日三等軍醫、四十三年六月二十八日二等軍醫、大正二年八月七日一等軍醫に陞進す（[illegible]　三十[illegible]歳）

●鷲見榮治　陸軍歩兵中佐　正六位　勳四　功五
（[illegible]（大石橋））
明治二十八年五月二十二日歩尉、三十年十月二十五日中尉、三十五年十一月十五日大尉、四十年十一月十三日少佐、大正三年八月十日中佐に陞進す（[illegible]　四十五歳）

●**梶塚鎖太郎**　陸軍主計監　正五位　瑞四　旭三　功四

關東都督府經理部長（旅順）

明治二十二年十月十三日三等軍吏、二十六年十一月十二日二等軍吏、二十八年五月十五日一等軍吏、同三十四年二月一日監督補、三十五年二月一日一等副監督、三十五年十一月十五日三等監督、三十六年十二月十三日三等主計正、同三十八年四月二十二日二等主計正、同四十一年十二月二十一日一等主計正、大正三年五月十一日主計監に歷進す（東京府士族　五十一歳）

●**川幡正紀**　陸軍步兵大尉　正六位　旭五　瑞四

獨立守備隊第四大隊第四中隊長（安東縣）

明治三十年六月二十八日少尉、三十二年十一月十七日中尉、三十七年十二月二十日大尉に歷進す（鹿兒島縣士族　三十九歳）

●**加藤　美**　陸軍一等軍醫　正七位

獨立守備隊第五大隊附（大石橋）

明治四十一年六月二十九日三等軍醫、四十三年十一月三十日二等軍醫、大正三年九月九日一等軍醫に歷進す（愛知縣　三十三歳）

●**勝浦　輝**　陸軍一等獸醫　正七位　旭六　瑞五

關東都督府陸軍部附（旅順）

明治三十七年十月十一日三等獸醫、同四十年十二月二十一日二等獸醫、同四十三年一月三十日一等獸醫に歷進す（宮崎縣士族　三十五歳）

●**吉村綱英**　陸軍砲兵少佐　正六位　旭五　瑞四　功四

關東都督府陸軍部附（旅順）

明治三十二年六月二日砲兵少尉、三十四年十一月三日中尉、三十七年八月二日大尉、四十三年十一月三十日少佐に歷進す（兵庫縣　士族）

●**吉村豊利**　陸軍步兵大尉　正七位　旭六　瑞五

獨立守備隊第四大隊第三中隊長（連山關）

三十七年十一月一日少尉、四十年十二月二十一日中尉、大正二年八月三十一日大尉に歷進す（山口縣　士族　三十二歳）

●田村守衛　陸軍騎兵大佐　從五位　旭四　瑞三　功四
關東都督府陸軍部參謀　（旅順）
明治二十七年九月二十五日騎兵少尉、同三十年十月二十五日中尉、同三十三年十一月十二日大尉、三十八年三月一日少佐、四十二年十月一日中佐、大正三年一月二十日大佐に歷進す　（山梨縣　士族　四十四歲）

●竹俣一二　陸軍一等軍醫　正七位
鐵嶺衛戍病院　（鐵嶺）
四十三年六月二十八日二等軍醫、大正二年六月二十八日一等軍醫に歷進す　（三十一歲）

●鶴見駿太郎　陸軍步兵大尉　從六位　旭六　瑞五　功五
獨立守備隊第二大隊第二中隊長　（鐵嶺）
三十六年六月二日少尉、三十八年二月一日中尉、四十三年九月九日大尉に歷進す　（千葉縣　士族　三十四歲）

●中村正一　陸軍工兵少佐　正六位　旭五　瑞四　功五　滿鐵會社運輸部囑託
都督府陸軍部附　（旅順）
三十六年六月二十八日少尉、三十二年十一月十七日中尉、三十五年十一月十五日大尉、四十一年十二月二十一日少佐に歷進す　（熊本縣　士族　三十九歲）

●中村家壽　陸軍砲兵少佐　正六位　旭五　瑞四
關東陸軍兵器支廠
明治三十一年六月二十七日砲兵少尉、同三十三年十一月三十一日同中尉、三十七年五月四日同大尉、大正二年八月二十二日同少佐に歷進す　（北海道　士族　四十一歲）

●中村悌二　正七位　瑞五　陸軍一等軍醫
獨立守備隊第六大隊附　（瓦房店）
三十九年十二月八日三等軍醫、四十二年十二月十五日二等軍醫、大正元年十二月六日一等軍醫に歷進す　（福岡縣　三十歲）

●中山友藏　陸軍步兵大尉　正六位　旭六　瑞五　功五
獨立守備隊第四大隊第一中隊長　（本溪湖）
三十七年三月十八日少尉、三十八年六月三十日中尉、大正二年八月三十一日大尉に歷進す　（千葉縣　三十五歲）

◉長尾穗次　陸軍工兵少佐　正六位　旭五　瑞四　功五
工兵第八大隊（旅順）
明治三十二年六月二十七日少尉、同三十四年十一月三日中尉、三十七年八月二日大尉、四十四年十一月二十二日少佐に歷進す（德島縣　士族　三十九歲）

◉永山武敏　陸軍步兵中佐　從四位　旭四　瑞三　功五
獨立守備隊第六大隊長（瓦房店）
明治二十八年五月二十二日步兵少尉、同三十年十月二十五日步兵中尉、同三十四年二月一日步兵大尉、同四十年十一月十三日步兵少佐、大正三年八月十日步兵中佐に歷進す（北海道　男爵　四十三歲）

◉永野耕夫　陸軍二等軍醫正　正六位　瑞六　旭四　功五
鐵嶺衞戍病院長（鐵嶺）
二十八年二月八日三等軍醫、三十二年六月九日二等軍醫、三十四年十二月二十八日一等軍醫、四十年十一月十三日三等軍醫正、大正四年六月八日二等軍醫正に歷進す（高知縣　士族　四十八歲）

◉難波光造　陸軍憲兵大尉　正七位　旭六　瑞四
大連憲兵分隊長（大連）
明治三十七年十一月一日步兵少尉、同四十年十二月二十二日步兵中尉、同四十五年二月十四日憲兵中尉大正三年十二月八日憲兵大尉に歷進す（廣島縣　三十二歲）

◉中島時治　陸軍步兵大尉　從六位　旭六　瑞五　功五
獨立守備隊第二大隊第一中隊長（鐵開原）
明治三十六年六月二十六日少尉、三十八年二月一日中尉、四十四年一月二十日大尉に歷進す（福岡縣　士族　三十五歲）

◉涙岡治七郎　陸軍一等主計　從六位　旭五　瑞四
關東都督府陸軍倉庫附（旅順）
明治三十四年六月一日三等軍吏、同三十六年一月二日三等副監督、同三十六年十二月一日三等主計、同三十七年七月二十五日二等主計、同四十年十二月二十一日一等主計に歷進す（秋田縣　四十四歲）

◉室　兼次　陸軍砲兵中佐　正六位　旭五　瑞四　功五

旅順要塞司令部參謀（旅順）

明治三十一年六月二日砲兵少尉、三十三年十一月二日中尉、三十六年十一月一日大尉、四十一年十二月二日少佐、大正四年二月十五日中佐に歴進す　（東京府　三十八歲）

◉武藤隣次　陸軍一等藥劑官　正七位　旭六　瑞五

鐵嶺衞戍病院附（鐵嶺）

明治三十七年七月一日三等藥劑官、三十八年十月二日二等藥劑官、大正三年六月二十六日一等藥劑官に歴進す　（岡山縣　士族　三十七歲）

◉宇木碩太郎　陸軍軍醫監　正五位　旭三　瑞二　功四

關東都督府軍醫部長（旅順）

明治十九年八月十一日三等軍醫、同二十二年十二月三十日二等軍醫、同二十五年十二月十四日一等軍醫、同三十一年十月一日三等軍醫正、同三十七年四月一日二等軍醫正、同四十一年六月一日一等軍醫正、大正元年九月二十八日軍醫監に歴進す　（佐賀縣　士族　五十二歲）

◉薄井宗次　陸軍憲兵大尉　正七位　旭六　瑞五　功五

奉天憲兵分隊長（奉天）

明治三十六年六月二十六日歩兵少尉、同三十八年二月一日歩兵中尉、同四十三年七月二十日憲兵中尉、同四十三年十一月三十日同大尉に歴進す　（石川縣　三十五歲）

◉梅澤英彥　陸軍騎兵大尉　正七位　瑞五

獨立守備隊司令部附（公主嶺）

明治三十七年十一月一日少尉、四十年十二月二十一日中尉、大正三年八月十三日大尉に歴進す　（福岡縣　士族　三十一歲）

◉梅村清造　陸軍一等主計　從六位　旭五　瑞四

獨立守備隊第一大隊（公主嶺）

明治三十六年十二月十日三等主計、卅八年六月三十日二等主計、四十年十二月二十一日一等主計に歴進す　（三重縣　四十四歲）

◉野田三郎　陸軍憲兵少佐　正六位　旭五　瑞四
遼陽憲兵分隊長（遼陽）
明治三十二年六月二十七日歩兵少尉、同三十四年十一月三日歩兵中尉、同三十六年三月三日憲兵中尉、三十八年二月二十日同大尉、大正三年十二月二十四日憲兵少佐に歴進す（宮城縣　四十一歳）

◉黒澤主一郎　陸軍歩兵大佐　從五位　旭四　瑞三　功五
關東都督府陸軍部附（奉天）
明治二十七年九月二十五日歩兵少尉、三十年十月二十五日中尉、三十四年六月十五日大尉、三十八年七月十八日少佐、四十三年十一月三十日中佐、大正四年二月十五日大佐に歴進す（宮城縣　士族）

◉黒田周一　陸軍歩兵大尉　從六位　旭六　瑞五　功五
關東都督府陸軍部參謀（旅順）
明治三十六年六月二十六日少尉、三十八年二月一日中尉、四十三年四月十三日大尉に歴進す（徳島縣　士族　三十六歳）

◉黒川哲一　陸軍一等軍醫　正七位
旅順衛戍病院附（旅順）
明治四十一年五月二十九日三等軍醫、四十三年十一月三十日二等軍醫、大正三年六月二十六日一等軍醫に歴進す（愛媛縣　三十三歳）

◉久保木狷三　陸軍歩兵大尉　正六位　旭五　瑞四
獨立守備隊第三大隊第三中隊長（奉天）
明治三十二年六月二十七日少尉、三十四年十一月三日中尉、三十八年一月二十五日大尉に歴進す（兵庫縣　士族　三十九歳）

◉山下定一　陸軍砲兵少佐　正六位　旭五　瑞四　功五
第四聯隊附
明治三十一年六月二十七日少尉、三十三年十一月二十一日中尉、三十六年十一月十八日大尉、四十一年十二月二十一日少佐に歴進す（鹿兒島縣　士族　三十九歳）

◉山之城民平　陸軍二等主計正　正六位　旭五　瑞四

關東都督府陸軍經理部員（旅順）

明治三十年六月二十八日歩兵少尉、同三十二年十一月一日中尉、同三十七年二月一日二等主計、同三十七年五月二十四日一等主計、同四十二年十一月三十日三等主計正、大正三年五月十一日二等主計正に歴進す（宮城縣　士族　四十一歳）

◉山上寅之助　陸軍歩兵大尉　正六位　旭五　瑞四　功五

獨立守備隊第六大隊第一中隊長（瓦房店）

明治三十二年六月二十二日歩兵少尉、同三十五年十一月十五日歩兵中尉、同三十七年十二月十二日歩兵大尉に歴進す（京都府　三十六歳）

◉山田久五郎　陸軍一等主計　正七位　旭六　瑞五　功七

關東都督府陸軍經理部附（旅順）

明治三十八年五月十三日三等主計、四十一年十二月二十一日二等主計、大正二年十二月二十五日一等主計に歴進す（富山縣　四十一歳）

◉矢野榮　陸軍歩兵大尉　正六位　旭五　瑞四　功五

獨立守備隊第三大隊第四中隊長（虎石溝）

明治三十二年六月二十七日少尉、三十四年一月十三日中尉、三十八年一月二十日大尉に歴進す（山形縣　士族　三十七歳）

◉安岡速水　陸軍歩兵大尉　從六位　旭六　瑞五　功五

獨立守備隊第六大隊第二中隊長（得利寺）

明治三十六年六月二日歩兵少尉、同三十八年二月一日歩兵中尉、同四十四年十二月十二日歩兵大尉に歴進す（高知縣　士族　三十四歳）

◉柳橋元利　陸軍一等軍醫　正七位　瑞六

關東都督府陸軍部軍醫部員（旅順）

明治四十年三月三十日三等軍醫、四十二年十二月十五日二等軍醫、大正二年二月二十一日一等軍醫に歴進す（秋田縣　士族　三十一歳）

◉牧瀬太郎　陸軍歩兵大尉　正六位　旭五　功五

獨立守備隊第五大隊第三中隊長（煙臺）

明治三十三年六月二十二日歩兵少尉、同三十五年十一月十五日歩兵中尉、同三十八年二月二十五日歩兵

大尉に歷進す（福岡縣　三十九歲）

●藤井幸槌　陸軍少將　正五位　瑞四　旭三　功三
獨立守備隊司令官（公主嶺）

明治十九年六月二十五日步兵少尉、明治二十五年三月二十五日步兵中尉、二十八年一月二十三日步兵大尉、三十三年十月三十一日步兵少佐、三十七年十一月十六日中佐、四十年十一月十三日大佐、四十五年四月十二日少將に歷進す（東京）

●藤田耕一　陸軍憲兵中佐　正六位　旭四　瑞三　功五
關東憲兵隊長（旅順）

明治二十八年三月十三日步兵少尉、同三十年十月二十五日步兵中尉、同三十四年六月七日步兵大尉、同四十年二月二十八日憲兵大尉、同四十年十一月十三日憲兵少佐、同四十四年十一月二十二日憲兵中佐に歷進す（石川縣　士族）

●小林鉦一郎　陸軍砲兵大尉　正六位　旭五　瑞四　功五
第三聯隊附（旅順）

明治三十二年六月二十七日砲兵少尉、明治三十四年十一月三日中尉、明治三十八年一月四日大尉に歷進す（群馬縣　士族　三十八歲）

●小林信一　陸軍步兵大尉　正七位　旭六　瑞五　功五
獨立守備隊第一大隊第四中隊長（長春）

明治三十六年六月二十六日少尉、三十八年二月中尉四十四年六月二十八日大尉に歷進す（東京府　士族）

●小池精四郎　陸軍二等主計正　正六位　旭五　瑞四
關東都督府陸軍倉庫長、（旅順）

明治三十年六月二日步兵少尉、同三十二年一月十一日中尉、三十七年四月十八日二等主計、同三十七年五月二十四日一等主計、同四十二年十一月三十日三等主計正、大正二年十一月十五日二等主計正に歷進す（福島縣　四十一歲）

●小島佐太郎　陸軍一等軍醫　正七位　瑞五
旅順衛戍病院附（旅順）

明治三十八年三月七日三等軍醫、四十年十二月二十一日二等軍醫、四十三年十一月三十日一等軍醫に歷

進す（埼玉縣　三十四歳）

●近藤銀次郎　陸軍一等主計　正六位　瑞五　旭四

關東都督府陸軍經理部附（旅順）

明治二十九年十二月二十八日三等軍吏、三十四年十一月三十日二等軍吏、三十六年六月二十六日二等副監督、三十六年十二月一日二等主計、三十七年七月二十五日一等主計に歷進す（愛知縣　四十九歳）

●小山安吉　陸軍砲兵大尉、從六位　旭六　瑞五　功五

旅順重砲兵大隊附（旅順）

明治三十三年六月二十二日砲兵少尉、三十五年十一月十五日中尉、三十八年七月二十日大尉に歷進す（福岡縣　士族　四十二歳）

●江藤源九郎　陸軍歩兵少佐　正六位　旭五　瑞四　功四

關東都督府副官（旅順）

明治三十三年二月二十二日少尉、同三十五年十一月十五日中尉、三十七年十二月五日大尉、大正二年八月二十二日少佐に歷進す（佐賀縣　士族　三十六歳）

●遠藤道孝　陸軍二等軍醫正　正六位　瑞五　旭四　功四

遼陽衛戍病院長（遼陽）

明治三十年一月八日三等軍醫、三十二年十一月十七日二等軍醫、三十五年十一月十五日一等軍醫、四十一年十二月二十一日三等軍醫正、大正四年六月二十九日二等軍醫正に歷進す（宮城縣　士族　四十四歳）

●遠藤新三　陸軍工兵大尉　從六位　旭五　瑞四　功四

旅順要塞司令部員（旅順）

明治三十四年六月二日工兵少尉、三十六年十一月一日中尉、三十八年六月二日大尉に歷進す（東京府、士族）

●寺田武　陸軍輜重兵少佐　正六位　旭五　瑞四　功五

陸軍運輸部大連支部長（大連）

明治三十年六月二十八日歩兵少尉、三十一年二月七日輜重兵少尉、三十二年十一月一日同中尉、三十五年十一月五日同大尉、四十一年十二月二十一日同少佐に歷進す（新潟縣　士族　四十歳）

●青木宣純　陸軍中將　從四位　旭三　瑞二　功二
旅順要塞司令官　（旅順）
明治十二年十二月二日砲兵少尉、同十七年五月三十日中尉、同二十二年四月五日大尉、同二十七年九月二日少佐、同三十二年十月二日中佐、同三十五年十二月一日大佐、同四十年十一月一日少將、大正二年八月二日中將に歷進す　（宮崎縣　士族　五十六歲）

●青木清一　陸軍一等藥劑官　從六位　旭六　瑞五
遼陽衞戍病院附　（遼陽）
明治三十二年十二月十六日三等藥劑官、三十七年七月二十五日二等藥劑官、四十二年四月二十二日一等藥劑官に歷進す　（佐賀縣　三十七歲）

●秋田四郎　陸軍砲兵大尉　從六位　旭六　瑞五
旅順砲兵大隊附　（旅順）
明治三十四年六月二十五日砲兵少尉、三十七年八月二日中尉、三十八年十一月四日大尉に歷進す　（福島縣　三十六歲）

●秋野資身　陸軍一等主計　正七位　旭六　瑞五
獨立守備隊第四大隊附　（連山關）
明治三十七年十月七日三等主計、同四十年十二月二十一日二等主計、同四十三年十一月三十日一等主計に歷進す　（高知縣　士族　四十四歲）

●安部猿藏　陸軍獸醫正　正六位　旭五　瑞四
關東都督陸軍獸醫部長　（旅順）
明治三十年十二月二十八日三等獸醫、三十三年十一月二十一日二等獸醫、三十六年十一月十八日一等獸醫、四十二年八月十七日三等獸醫正、大正二年十一月十五日二等獸醫正に歷進す　（山口縣　四十二歲）

●阿部彥作　陸軍一等軍醫　正七位
野砲兵第二十三聯隊附海城分院長　（海城）
明治四十一年六月二十九日三等軍醫、四十三年十一月三十日二等軍醫、大正四年三月四日一等軍醫に歷進す　（新潟縣　三十一歲）

●旭藤一郎　陸軍三等主計正　從六位　旭五　瑞四　功五

關東都督府陸軍倉庫附（旅順）
明治三十六年十二月一日三等主計、三十八年六月三十日二等主計、四十年十二月二十一日一等主計、大正三年四月二十八日三等主計正に歴進す（島根縣　四十歳）

◉ **廰與伊勢松**　陸軍一等主計　從六位　旭五　瑞四
旅順要塞築城部員（旅順）
明治三十二年十一月四日三等軍吏、三十六年十一月二十八日二等軍吏、三十六年十二月一日主計、三十八年八月十一日一等主計に歴進す（大分縣士族　四十四歳）

◉ **佐藤良雄**　陸軍一等軍醫　正七位
獨立守備隊第四大隊附（連山關）
明治四十年三月三十日三等軍醫、四十三年六月二十八日二等軍醫、大正二年四月二十五日一等軍醫に歴進す（宮城縣　三十二歳）

◉ **佐藤總之助**　陸軍一等主計　從六位　旭五　瑞四　功五
都督府陸軍經理附（旅順）
明治三十四年六月一日三等軍吏、三十六年七月一日三等主計、三十七年七月二十五日二等主計、四十年十二月二十一日一等主計に歴進す（東京府　四十三歳）

◉ **坂　初枝**　陸軍歩兵中佐　正六位　旭四　瑞三　功四
獨立守備隊第三大隊長（奉天）
明治二十八年五月二十二日少尉、三十年十一月十九日中尉、三十三年十一月十二日大尉、三十八年七月十八日少佐、大正二年八月二十二日中佐に歴進す（山口縣士族　四十二歳）

◉ **坂田光太郎**　陸軍歩兵大尉　正六位　旭五　瑞四
獨立守備隊第一大隊第三隊長（郭家店）
明治三十三年六月二十二日少尉、三十五年十一月十五日中尉、三十八年二月十日大尉に歴進す（福岡縣　三十七歳）

◉ **坂部祐四郎**　陸軍砲兵大尉　從六位　旭五　瑞四　功五
旅順要塞司令部副官（旅順）
明治三十三年六月二十二日砲兵少尉、三十五年十一月一日中尉、三十八年四月十六日大尉に歴進す

（東京市　三十六歲）

◉澤野基德　陸軍一等藥劑官　從六位　旭五　瑞四　功五

旅順衛戍病院附（旅順）

明治三十一年三月三十一日三等藥劑官、三十七年七月二十五日二等藥劑官、四十二年二月九日一等藥劑官に歷進す（大阪府士族　四十一歲）

◉櫻井芳彰　陸軍一等主計　正七位　旭六　瑞五

旅順重砲兵大隊附（旅順）

明治三十七年九月二十九日三等主計、四十年十二月二十一日二等主計、四十三年十一月三十日一等主計に歷進す（東京府士族　三十九歲）

◉木造巳之藏　陸軍砲兵大尉　正七位　旭六　瑞五

陸軍兵器支廠員（旅順）

明治三十七年十一月一日砲兵少尉、同四十年十二月二十一日砲兵中尉、大正三年八月十三日同大尉に歷進す（東京府士族　三十一歲）

◉水野蘊二　陸軍砲兵少佐　正六位　旭五　瑞四

旅順重砲兵大隊長（旅順）

明治三十一年六月二十七日砲兵少尉、三十三年十一月二十一日中尉、三十七年四月二十二日大尉、四十三年十一月三十日少佐に歷進す（東京府士族　三十八歲）

◉三好重太郎　陸軍一等主計正　正六位　瑞五　旭四

關東都督府陸軍經理部附（旅順）

明治三十年十一月三日三等軍吏、三十四年十一月三日二等軍吏、三十六年一月二十九日二等副監督、同三十六年十二月二日二等主計、同三十七年七月二十五日一等主計、大正四年八月十一日一等主計正に歷進す（岡山縣　四十八歲）

◉三宅態一　陸軍砲兵大尉　從六位　瑞五

陸軍運輸部大連支部員（大連）

明治三十六年六月二十六日砲兵少尉、同三十八年二月一日砲兵中尉、同四十四年十二月十二日砲兵大尉に歷進す（香川縣士族　三十五歲）

◉峰直次郎　陸軍二等軍醫正　正六位　旭四　瑞三

旅順衛戍病院附（旅順）
明治二十七年九月三十日三等軍醫、三十年十月二十五日二等軍醫、三十三年十一月十二日一等軍醫、三十年四月二十二日三等軍醫正、四十四年六月十五日二等軍醫正に歴進す（佐賀縣　四十六歲）

● 彌勒地久藏（ミロクチ）　陸軍一等主計　正七位　旭六　瑞五
關東都督府陸軍經理部員（旅順）
三十八年三月二十日三等主計、四十年十二月二十一日二等主計、大正四年五月十八日一等主計に歴進す（岩手縣　四十一歲）

● 柴田信一郎　陸軍輜重兵大尉　正七位　旭六　瑞五
關東陸軍兵器支廠附（旅順）
明治三十七年三月十八日輜重兵少尉、三十八年六月三十日中尉、四十四年十二月十二日同大尉に歴進す（愛知縣　三十五歲）

● 平山繁　陸軍砲兵大尉　正七位　旭六　瑞五　功五
都督府陸軍部參謀（旅順）
明治三十七年三月十八日少尉、三十八年六月三十日中尉、大正二年八月三十一日大尉に歴進す（福岡縣士族　三十二歲）

● 平田爲次　陸軍一等主計　正七位　旭六　瑞五
獨立守備第四大隊附（連山關）
三十七年九月二十九日三等主計、四十年十二月二十一日二等主計、四十三年十一月三十日一等主計に歴進す（兵庫縣　四十一歲）

● 廣橋正三郎　陸軍三等藥劑正　正六位　瑞五　旭四
旅順衛戍病院附（旅順）
明治二十八年十一月五日三等藥劑官、三十一年十月十日二等藥劑官、三十七年七月二十五日一等藥劑官大正二年八月二十二日三等藥劑正に歴進す（大阪市　四十一歲）

● 廣川愛親　陸軍砲兵大尉　正七位　旭六　瑞五
旅順重砲兵大隊附（旅順）
明治三十七年三月十八日砲兵少尉、三十八年六月三十日中尉、大正三年八月十三日大尉に歴進す（石川縣　三十六歲）

◉肥田木三郎　陸軍砲兵大尉　從六位　旭六　瑞五　功五
旅順要塞司令部員（旅順）
明治三十三年六月二十二日少尉、三十五年十一月一日中尉、三十八年五月三十日大尉に歷進す
（宮崎縣　三十七歲）

◉茂渡金治郎　陸軍一等主計　正七位　旭五　瑞四
關東都督府陸軍經理部附
明治三十七年十月七日三等主計、四十年十二月二十一日二等主計、四十三年十一月三十日一等主計に歷進す（岡山縣　四十二歲）

◉千田嘉平　陸軍歩兵中佐　正五位　旭四　瑞三　功五　男爵
關東都督府陸軍部副官（旅順）
明治二十七年九月二十五日少尉、三十年十月二十五日中尉、三十四年十一月三日大尉、三十八年七月十八日少佐、四十五年五月三十日中佐に歷進す
（鹿兒島縣士族　四十三歲）

◉關辰熊　陸軍歩兵大尉　從六位　旭六　瑞五
獨立守備隊第一大隊中隊長（公主嶺）
明治三十六年六月二十六日歩兵少尉、三十八年二月一日中尉、四十三年十二月二十二日大尉に歷進す
（熊本縣士族　三十五歲）

◉角田安次郎　陸軍一等軍醫　正七位
獨立守備隊第一大隊附（公主嶺）
四十一年一月十五日三等軍醫、四十三年十一月三十日二等軍醫、大正三年六月二十六日一等軍醫に歷進す（長野縣　三十一歲）

◉鈴木協平　陸軍一等軍醫　從六位　瑞五　旭五
獨立守備隊第二大隊附（鐵開原）
明治三十三年三月二十日三等軍醫、三十六年十一月十八日二等軍醫、三十八年六月二十七日一等軍醫に歷進す（愛知縣　三十九歲）



事業之部

旅順

概説

▲關東州は遼東半島の南端に位し黄海其南面を帶擁して渤海灣の咽喉に臨み本州及附屬島嶼を合はせて面積二百十八方里餘、其北界は遼東の西岸普蘭店より起りて貔子窩の東碧流河口に至る而して水面及陸地周圍の各島嶼は皆帝國の租借區域内に包含せり、旅順は東經一二一度一六分、北緯三八度四七分に在りて市街の面積百五十四萬二千坪を以て算す、氣温は最高攝氏三十二度九(七月)、最低十五度九(一月)にして滿洲中最温暖の地たり、

▲旅順港は東西二港に分かれ、兩水相合して外海に通ずる一條の水道は所謂旅順口にして、其幅員僅かに二百七十三米に過ぎざるも水深くして大艦巨船の來往に適す、西港は自由港として開放され、東西二哩、南北一哩の面積を有し滿鐵會社の石炭棧橋は此の北岸に在り、東港は港口より右方黄金山背に在りて軍港に使用さる、

▲旅順は古來よりの寄港地にして、約一千年前の渤海國時代に既に旅順の名稱ありしが如し、黄金山下古碑は歷史上最も有名なるものなり、旅順城は明の遺蹟にして、水師營は清の大宗山東を剿滑するの時軍船を出帆せしめたる處なり、康熙帝の朝此の地に水師營を設けて海寇に備ふ、今の水師營は其遺影なり又た旅順を軍港となせしは今を距る三十年前、當時の直隷總督北洋大臣李鴻章氏が渤海防備の爲め旅順威海衞を經營せしを起因とす、軍港の營造物は當時建築せるなり、停車場は港内に注ぐ龍河の邊りに在り、東清鐵道時代の遺物にて、露人は現在驛より更に一哩西北方に一大驛を新設するの豫定なりしが如し、之れを中心として以東を舊市街とし、以西を新市街とす、新市街は西港に臨み官衙學校官舎あり建築皆宏壯にして多く露人の建築に係る、舊市街は商業區にして東港に面し會社商店皆茲處に在り、

▲旅順には露領時代より既に邦人の來住する者ありしが、日露戰爭後急激に增加して、明治四十年末は五千七百人に上り、爾來逐年增加して大正元年末の九千六百三十七人の最大數に達す、同年以後は鎮守

府の撤去、其他軍隊の減退の爲め、加之、大正三年の日獨戰爭後は青島への轉住者を生じたる爲め、同年末には八千八百三十七人となれり、

▲旅順は元と商工業地に非らず、故に邦人事業として何等觀る可き者なし、僅に工業としては旅順醬油釀造會社及青村商店の醬油及び味噌の製造、大日本再製鹽工場の製鹽あるに過ぎず、其他石鹼、煉瓦、石灰等の製品あるも言ふに足らず、貿易は（大正三年度）輸出百十萬四千圓、輸入二十三萬三千九百圓（再輸出、移出入額をも含む）、輸出の重もなるは石炭の八十九萬二千圓にて其外穀類の九千圓を最とす又輸入は穀類二萬九千圓、生牛一萬八百圓、果物九千圓、雞卵八千圓、木材八千一百圓を主とす又大正三年中の出入船舶は汽船入港二百五十三隻、（二十六萬一千噸）此積荷噸數七千二百噸、出港同隻數にして此積荷噸數十三萬六千五百噸、又帆船は入港五百六十四隻（總噸數五千二百噸）積荷噸數一千六百噸にして、出港積荷噸數二千一百噸なり、農業は四五の邦人が農園を經營して蔬菜及果樹を栽培せるあるも未だ大に發達せず、外に水產業者に專業三十二戶兼業一戶あり、又鹽業者三戶、此從事員二百四十四人にして、大正三年中に於ける產鹽高は五萬四千一百石、價格貳萬五千九百圓なり、

▲旅順の商工及び農業は現在に於て斯の如く微弱にして近き將來に於ても亦た俄に發達す可き期望なく在留邦人は漸く俱喰ひに依りて生活せる者の如し、當局官憲及民間有志者は旅順の發展策に肝膽を碎き或は港灣の一部を開放し、或は大連旅順間の電鐵敷設を計畫しつゝあるも、未だ實果を擧ぐること能はずして人心は市況と與に日に沈衰しつゝあるが如し

▲然れども旅順は關東州の中央諸機關の駐在地として、又工科學堂以下中學校及び女學校の設立地として、或は又日露戰蹟を有する無比の靈地として、加之、土地淸秀、氣候亦た比較的溫和にして士民の遊賞休養に適すれば將來滿洲の發達に伴ひ日滿間の往復益々頻繁を加へて、大連旅順間に電鐵の築造を見るに到らば、旅順は商工農地として以外に特絶崇貴の立場を有するに到る可し、關東都督府は旅順の趨勢に鑑み、大正四年十月一日より同地に市制を施行したり、今旅順に現在せる重要なる官衙、學校及團

體を左に示す

名稱	所在地	長官	氏名
關東都督府	新市街海岸通	都督	男爵 中村覺
同民政部	同上	民政長官	白仁武
同陸軍部	同初音町	參謀長	西川虎次郎
旅順要塞司令部	舊市街司令臺	司令官	青木宣純
旅順要港部	同八雲町	同	川島令次郎
關東都督府高等法院	同一戸町	院長	平石氏人
關東都督府地方法院	同上	同	土屋信民
旅順民政署	同學臺	署長	吉田豐次郎
關東都督府醫院	同鮫島町	院長	山口弘夫
旅順婦人醫院	同敦賀町	同	大沼良三
旅順療病院	新市街桃園町	同	中山源次郎
旅順郵便局	舊市街三笠町	局長	佐藤吉次郎
關東都督府監獄署	同大島町	典獄	渡邊友次郎
旅順防備隊	同富士町	司令	堀江豐雄
關東憲兵隊本部	新市街霧島町	憲兵隊長	藤田耕一
關東陸軍倉庫	舊市街伊知町	倉庫長	小池精四郎
旅順駐屯歩兵第六十三聯隊	同高知町	聯隊長	森部非夫

旅順重砲兵大隊	同　松山町	大隊長	山下定二
關東陸軍兵器支廠	同　大島町	支廠長	小倉行之
旅順衛戍病院	同　乃木町	院長	峰直次郎
旅順憲兵分隊	同　鮫島町	分隊長	小林康
關東衛戍監獄	同　土屋町	監獄長	鈴木直太郎
關東都督府海務局旅順支局	同　鮫島町	支局長	櫻井一輔
關東都督府民政部旅順支所	新市街特權地	支所長	有森逸
旅順海關分關	舊市街嚴島町	分關長	（目下缺員）
旅順工科學堂	同　札幌町	堂長	白仁武
關東都督府中學校	同　中村町	校長	勝浦鞆雄
旅順高等女學校	同　中村町	校長	藤田利英
旅順第一尋常高等小學校	同　黑金町	校長	野間雅人
旅順第二尋常高等小學校	同　月見町	校長	吉賀竹次郎
旅順公學堂	同　柳町	堂長	中堂謙吉
三澗堡公學堂	三澗堡土城子	堂長	多尾佐太郎
日本赤十字社滿洲委員部	民政部内	總督	男爵 中村覺
東洋協會滿洲支部	同上	支部長	白仁武
南滿洲教育會	同上	會長	大内丑之助
關東州水産組合旅順支部	舊市街朝日町	支部長	十市九三二
旅順農會	同　東郷町	會長	村上鶴藏

◉關東都督府

旅順新市街海岸地

沿革

▲關東都督府は關東州の中央行政機關にして、獨り完全に關東州を管理するのみならず、南滿洲に於ける鐵道沿線の保護及び取締の事を司り又た南滿洲鐵道株式會社の業務を監督し、實に南滿洲に於ける我が行政機關の中樞なり、今其沿革を記せんに、明治三十七年五月、日露戰役に於て皇師の未だ南山を陷れざるに先ち金州に軍政署を開き、戰局の開展するに從ひ同三十八年五月勅令第百五十八號を以て占領地民政署職員に關する規定公布せられ六月九日關東州民政署の編制完結を告げて民政署を大連に置き旅順及金州に其支署を設け民政長官は滿洲軍總司令官の隸下に在りて州內の安寧秩序を保持し當發の軍務を補助することを其職司とせり同年十月十六日平和克復し同月三十一日關東總督府の編制せらるゝや關東州民政署は其令下に轉屬して其行政は依然軍政の下に在りしが同三十九年八月關東都督府官制公布せられ玆に租借地は始めて完全なる民政の下に立つに到れり

▲同官制に據れば關東都督府に關東都督を置き以て關東州を管轄し並に南滿洲に於ける鐵道線路の保護及び取締の事を掌り南滿洲鐵道株式會社の業務を監督せしめ其民政部には軍事行政を除くの外一般行政竝に司法行政に關する一切の事務を處理することゝせり乃ち民政部に庶務、警務、財務、及土木の四課、竝に監獄署を置き各々其の事務を分掌し更に州內を三區に分ち大連、旅順及び金州に各民政署を置き金州民政署管下の貔子窩及普蘭店に其の支署を設け以て地方行政に關する事務を分掌せしむることゝして同年九月一日より之れを施行せられ別に同年十二月關東州外南滿洲鐵道附屬地に警務署を置き以て該鐵道線路の保護及取締を掌らしむ明治四十一年一月勅令

第二號を以て都督府官制中の一部改正せらる即ち都督官房に秘書、文書、外事の三課を置き新に外事總長、警事總長の官を設け南滿洲に駐在する領事館をして關東都督府事務官を兼ぬることを得せしむ同年十月勅令第二百七十號を以て官制中一部改正せられ從來三區たりし行政區劃を二區に改め一署並に監獄署及監獄支署を削られ民政署の位置を大連、旅順とし金州に大連民政署支署を設け貔子窩及び普蘭店に金州支署出張所を置きたり同月勅令第二百七十四號を以て關東都督府監獄署官制公布せられ關東都督の管理に屬せらる明治四十三年六月勅令第二百八十號を以て都督府官制中一部改正せられ都督は外交に關する事項の外は內閣總理大臣の監督を承くることゝせらる其他二三の改正を經て現行官制となれり

現行官制

▲現行官制に據れば都督は陸軍大將又は中將の親任官にして部下軍隊を統率し外務大臣の監督を受け諸般の政務を統理し又特別委任に因りて支那地方官憲との交涉事務を處理す都督は軍政及陸軍軍人軍屬の人事に關しては陸軍大臣、作戰及動員計畫に關しては參謀總長、軍隊敎育に關して同敎育總監の區處を受く都督は其の職權又は特別の委任に依り都督府令を發し之れに禁錮一年以下又は罰金二百圓以內の罰則を附加し或は安寧秩序を保する臨時緊急の場合には上記の制限を超ゆる罰則を附したる命令を發し或は其管轄區域內の安寧秩序を保持し又は鐵道線路の保護及取締を行ふ必要の場合には兵力を使用し得るの權能を有せり而して關東都督府は官房、民政部及び陸軍部より成り官房に秘書、文書、外事の三課を置き別に陸軍佐尉官の副官一人を置けり

▲民政部は關東都督府に於て軍事行政を除くの外一切の行政事務を掌り庶務、警務、財務、土木の四課、州外六警務署、警察官練習所、水產試驗場を置きて其事務を分掌せしめ民政長官は之れが主腦となり都督を佐けて事務を總理す此他關東都督管理の下に特別事務を處理せしむる爲め民政署、法院、通信管理局、醫院、海務局、觀測所、監獄署及旅順工科學堂、中學校、高等女學校を置けり而して地方行政機關としては民政署長及其補助機關たる支署長、出張

所長、會長及村長を以て之れに充てり

▲陸軍部は關東都督の所管內に於ける陸軍一般に關する事務を掌り民政部と駢立して都督府に於ける重要の機關なり明治三十九年八月勅令第二百四號を以て發布せられたる同部官制に據れば陸軍部は參謀部、副官部（兩部を合せて幕僚と稱す）、法官部、經理部、軍醫部、獸醫部より成り其主腦者を參謀長とす參謀長は關東都督を補佐して陸軍の機務に參與し命令の普及並に實施を監督して關東都督府陸軍部內の一般の業務監督に任す法官部長は軍事司法に關する業務を司り經理部長は駐劄諸部隊の會計經理の監督並に陸軍、土地、建造物に係る事項を司り軍醫部長は駐劄諸部隊の衛生業務を司り獸醫部長は駐劄諸部隊の軍馬衛生の業務を司り皆關東都督に隷屬す但し各部長より關東都督に具申すべき事項は豫め參謀長に關陳して其承認を受く可き者とせり

◉橫濱正金銀行旅順出張所

旅順市青葉町番外一一〇號地　電話二三番

營業　一般銀行業

明治三十八年四月の開設にして一般銀行業の外に中央金庫の事務を執れり出張所主任は大連支店支配人の兼務を例とせり

主任代理　絲井佃之助　（人事參照）

◉正隆銀行旅順支店

旅順市鯖江町二號地　電話四一五番

營業　一般銀行業

明治四十四年七月開設にして一般銀行の外都督府の地方現金を取扱ふ

支配人　河島義人　（人事參照）

◉旅順醬油釀造合名會社

旅順市朝日町一丁目　電話三五五番

營業　醬油釀造販賣

當會社は明治四十二年十月二十八日の開設にて資本金貳萬五千圓を有し吉澤代五郎、小山八五郎兩氏の合資經營なり一箇年の製造高、醬油一千四百五十六石、味噌三千一百八十五貫なり

代表社員　吉澤代五郎　旅順市會議員、原籍長野縣北佐久郡小諸町三〇〇番地、明治六年八月十五日生、夫人るい四十歳、長女さだ十一歳、二女みさを六歳

出資者　小山八五郎　原籍長野縣北佐久郡小諸町四三三番地、明治八年九月三十日生、夫人よし三十八歳、長女きさ十一歳、二女いく九歳、長男謙一郎七歳、二男寛次郎四歳、三男剛三郎二歳

◉合資會社孤山農園社　旅順市乃木町三丁目　電話四一三五番

營業　農業

當社は大正三年一月より事業に著手し大正四年一月其組織を三萬圓の合資會社に改めたり現在耕作面積一萬六千坪、全部水田より成り昨大正三年は一反歩の收穫二石二斗を得たり

理事無限責任　永田吉次郎　長野縣東筑摩郡芳川村八三一番地、四十三歳、夫人貞子四十歳、女一人

理事有限責任　永田茂佐藏

同　堀內　高一

◉宅島回漕店　旅順市嚴島町五番地　電話一〇三番　振替大連一六七番

營業　日本郵船株式會社荷客取扱、明治生命保險會社代理店、滿鐵撫順炭取扱、精米、砂糖、麥粉、セメント販賣、船舶給水

當店は個人經營にして明治三十八年十月開設さる

營業主　宅島猛雄（人事參照）

◉村上組　旅順市八島町一五號地　電話一一九番

營業　漁業、銃砲火藥並に食料雜貨、天然氷販賣

明治三十八年一月二十日の開設にて個人經營なり營業主村上氏は三十七年十月より天然氷の貯藏販賣を開始し旅順包圍軍に氷詰生魚を供給せり此れ實に我國に於ける生魚氷詰の嚆矢なり氏は爾來引續き天然氷の貯藏販賣を爲しつゝあり

營業主　村上鶴藏（人事參照）

◉吉村商會　旅順市乃木町三丁目二二番地　電話三三二番

營業　醬油製造販賣

當營業主は明治三十八年二月海軍用達商として海軍軍屬と共に近江丸にて旅順に來り糧食品一切を納む其後海軍縮少の爲め廢業し同四十一年四月現業を開始し今日に及ぶ製造高一個年一千石、南は青島より北は鐵嶺に到る各方面に販賣す大連但馬町に出張所、青島膠州町に支店あり

店主　吉村信貞　旅順市會議員、佐賀縣杵島郡橋村、士族、五十九歲、夫人しな子四十二歲

◉西野商行　旅順市乃木町三丁目三番地　電略（ニヌニシ）電話六八番　振替大連五一番

營業　木材、建築諸材料、天然氷貯藏販賣

當商行は個人經營にて明治三十九年一月開設さる五百餘坪の製材工場を有す木材は北海、北滿、鴨綠江諸材を取扱ひ諸官衙に供給す本業の外に三里橋に果樹園二萬坪を經營す

營業主　西野菊次郎（人事參照）

支配人　西野　孝一

◉大島商店　旅順市乃木町三丁目　電話一三八番

營業　食料、雜貨販賣

當商店は明治三十九年一月の開設にして個人經營なり一箇年の賣揚高、卸賣三萬三千圓、小賣三千圓内外なり、四十四年一月一日より市內新市場に支店を開設し今尙繼續せり

營業主　大島竹槌

◉仙波組　旅順市乃木町二丁目二一號地　電話三三三番

營業　土木建築請負

當組は明治四十一年三月の開設にして個人經營なり

營業主　仙波虎五郎　廣島縣吳市二川町一〇一番地、三十八歳、夫人さら子三十五歳、男五人、女二人

◉山口商會　旅順市青葉町四三　電話二四九番

營業　雜貨、牛肉、石炭、木材

當商會は明治三十九年八月一日の開設にして個人經營なり一箇年の賣揚、卸賣一萬五千圓、小賣三千圓內外とす

營業主　山口世基　旅順市會議員、原籍佐賀縣杵島郡武雄町二四一番地、明治元年七月六日生、夫人たみ四十六歳、長男基一、二十三歳、三男基直十六歳、五男文夫九歳、長女しず二十五歳、次女のり子十四歳

◉村上新二商店　旅順市乃木町三丁目　電話一〇二番　電略（ムヌムラ）

營業　金物、建築材料、水道電氣用器、機械類、並に諸官衙用達兼請負

當店は個人經營にして明治四十二年八月開設さる大阪に仕入部を有す

營業主　村上新二　大阪市西區阿波座三番町（鳥取縣生）三十四歳、夫人まさ子三十四歳

●華信洋行　旅順市三笠町二番地　電話一〇四番

營業　海軍食料御用達、此役艦引揚工事

當洋行は個人經營にして、明治三十八年十月の開設なり、旅順新市街大迫町に支店を有し日用雜貨を販賣す

營業主　宮田仁作　（[illegible]）

●茂利達洋行　旅順市[illegible]町二丁目　電略（[illegible]）　電話一一七三番　振替一一七五番

營業　土木建築請負、並に諸官衙用達

當洋行は明治三十八年九月の開設にして諸官衙、汽罐及附屬品類、鐵道礦山及土木用品類、船具、塗料及建築諸材料、洋酒、罐詰類、諸官諸材料、種子、白紋及諸機械油類、古銅鐵並に家具類、肥料、牛骨、骨粉、石油類、農具及園藝用具類を販賣す青島高密町に支店を有す

營業主　森田榮吉　長崎縣[illegible]町七番地、[illegible]四十九歳、男一名、女四名

青島主任　深川眞太郎

●田中濟生堂　旅順市乃木町三丁目　電略（タ）ス（[illegible]）　電話三三六番　振替九〇六番

營業　藥品、寫眞器械、醫療器械、[illegible]件、[illegible]

當店は個人經營にして、明治四十一年十月開業し[illegible]に至る

營業主　田中勝三郎　[illegible]　夫人つね子二十四歳、男一人

●外山洋品店　旅順市[illegible]番地　電話二四一番

營業　和洋雜貨、毛皮類、並に[illegible]販賣

當店は個人經營にて明治四十一年開設す

營業主　外山宗一　[illegible]

●原田時計店　旅順市[illegible]　電話一三三番

營業　時計、貴金屬、蓄音機販賣

當店は個人經營にて明治三十八年九月開設さる

店主　原田西一　山口縣[illegible]、十歳、三十[illegible]

●岩城商會　旅順市八島町二番地　電話三四四番

營業　石炭、木炭、薪商

當商會は明治四十二年九月三日の開設にして、個人經

營なり一箇年の賣揚高卸賣六千圓、小賣一萬二千圓內外とす本店は芝罘に在り

營業主　岩城　卯吉　原籍愛媛縣北宇和郡下灘村五八五番地、明治六年四月十日生

◉吉武質店　旅順市鮫島町三ノ四

營業　質屋

當店は個人經營なり店主は明治三十八年十月渡來して五師團八師團の用達及び酒保を經營し三十九年十月に到り現業を現地に開始したり

營業主　吉武　忠吉　廣島縣深安郡福山町字吉津、安政五年生、夫人富江子五十歲

◉伊勢屋支店　旅順市乃木町三丁目　電話七三番　振替大阪五一九五番

營業　米穀、薪炭及陶器、雜貨、並和洋食料品
太平生命保險會社代理店

當店は個人經營にて明治三十八年三月開設さる市內南支那町海軍酒保に支店を有す外に明治四十二年四月より陸軍用地に一萬五千坪の辻農園を開始し果樹野菜類を栽培す

營業主　辻　藤次郎　旅順市會議員、三重縣津市部田八五番地、安政五年七月生、夫人しやう子五十二歲、養子藤吉三十九歲、同夫人久子三十四歲、孫男一人

支店主任　山本房太郎

◉藤田吳服店　旅順市青葉町四十八號地　電話一七〇番

營業　吳服商

當店は個人經營にて明治三十九年十一月開設す

營業主　藤田　力藏　大阪市東區仁右衛門町五一八、六十三歲、夫人ぬい子五十歲

◉蓬來館　旅順市乃木町三丁目　電話五六番

營業　旅館

當館は個人經營にて明治三十九年一月開設さる初め小野せい子の經營なりしが大正四年九月十六日現經營者繼承せり旅順に於ては第一流の旅館にて客室十四を有す

營業主　小鹽市次郎

◉遼東病院　旅順市八島町二三四番　電話一四二番

營業　醫業

當院は個人經營にて明治三十九年二月開設す入院患者收容力二十五名、一年を通じて一日平均五名、外來患者一日平均三十名、看護婦三名調劑看護婦一名

院主　今村　春逸（人事參照）

◉遼東齒科醫院　旅順市敦賀町　電話一二九番

營業　齒科治療

當院は個人經營にて明治四十五年の開設なり新市街明治町に出張所を有す

院主　中野嘉與作（人事參照）

◉塚澤齒科治療所　旅順市敦賀町二丁目七番地

營業　齒科治療

當所は個人經營にして明治四十二年六月青葉町に開業し同年十一月敦賀町に新築成りて移轉し今日に及ぶ大正四年七月新市街に出診所を設置す

營業主　塚澤　正雄（人事參照）

◉米岡法律事務所　旅順市鯖江町八番地　電話二六〇番

營業　一般法律事務

當事務所は個人經營にて明治四十年十一月旅順青葉町に開設せしが四十三年十一月現地に移轉す訴訟非訟事件其他一切の法律事務に從事す開業以來四十三年及本年に訴訟事件最も多し日本人に關する事件は大連に多く支那人に關する事件は金州に多し大連吉野町二丁目に支所、金州城内東街に出張所を有す

事務所主　米岡　規雄（人事參照）

大連支所主任　稻富　矢太

◉島田法律事務所　旅順市敷島町三丁目　電話三〇五番

營業　一般法律事務

大正二年三月の開設にして大連に出張事務所を有す當所主は多年旅順法院に奉職して信望厚かりし

事務所主　島田　定持（人事參照）

大連事務所　但馬町一一號地　電話七九〇番

◉遼東新報旅順分局　旅順市鯖江町番外一　電話三〇番

分局長　角田　宏顯（人事參照）

◉滿洲日日新聞旅順支局　旅順市八島町　電話三九番

當支局は明治四十年十一月滿洲日日新聞の創刊と同時に開設され數代の主任を經て鬼頭玉汝氏に至り大

正二年同氏退任して現主任となれり

支局長　西村巳之助（人事參照）

●滿洲新報支局　旅順舊市街朝日町

當支局は明治四十一年二月滿洲新報の創刊と共に開設され矢野守生氏之れが主任たりしが大正二年同氏の死去するや現主任之れに代はれり

主任　原田伊之助

●旅順民政署　旅順市學堂六　電話九一〇番 三四〇

▲明治三十八年五月の勅令により占領地民政署規定公布せられ民政署は之を大連に置き旅順及金州に其支署を設けられたり同年十月關東總督府編制せられて關東州民政署は轉じて其令下に歸し更に三十九年九月一日より關東都督府官制實施せらるゝに及び關東州民政署の廢廳となり旅順民政署は關東都督の下に始めて完全なる地方行政機關となれり

▲民政署は總務警務の二係に別ち總務係には庶務、稅務、法務、水道、官有財產、警務係は高等警察、保安、司法、衛生、執行、地方の各部に分てり民政署長が地方行政機關の長官として內地と異なる點は唯だ其略ぼ內地區裁判所の權限に屬する裁判事務を取扱ふの權能あるに在り

▲旅順民政署の管內面積は約四十二方里にして旅順市及方家屯會（八十八村）水師營會（四十九村）營城子會（三十三村）王家店會（百十五村）山頭會（二十九村）三澗堡會（四十一村）の六會を管轄す會村は舊治時代の舊慣制度を踏襲せしものにして（數個の屯村を合せて一會とす會と村屯との關係は我村と大字のものに類似せり）各會の下に會長を置き會長の下に村長又は屯長を置き以て下級行政機關を組織せり會村の費用は總て住民の負擔に係り其收支豫算は民政署長之を認可す大正元年度に於ける旅順管內の會村費は一萬二千六圓三十錢なり稍支那舊來の制度として市街地に於ける下級行政の補助機關の作用を爲すものに公議會あり公議會は商民團體にして共同の利害を攻究し業務の振興を圖る半公半私の團體なりとす

▲關東都督府に於ける租稅及諸收入は明治四十一年三月迄は地方經濟の一途なりしも同年四月特別會計

法施行以來國庫費地方費の二途に區分さる而して民政署に於ける收入の主なるものは國庫所屬の租稅にありては地租、鑛稅、土地貸下料等にして地方稅にありては營業稅、雜種稅、水道及電燈等なりとす租稅及公課徵收の方法は國稅徵收法を準用するを以て內地現行の方法と異なる所なし

民政署長　事務官　吉田豐次郎
警務掛長　警　視　東畑　英夫

◉旅順市役所　旅順市鯖江町一八番地　電話五二番

▲旅順市役所は大正四年十月一日の設立にして元の旅順衞生組合を繼承せしものなり同組合は明治三十九年六月當時の四圍の情況と同年二月關東州民政署令第四號塵芥掃除規則とに鑑み一般公衆衞生の必要上有志者凝議の結果終に其組織の制定を見るに到れり時の民政支署長小島源三郎、警務課長大熊廣筠氏等大に奔勞に勉め又有志者には高瀨四郎、村上鶴藏、奧田操、日野文平、宅島猛雄、辻藤次郎、氏家嘉作、堀入高一、阿部利泰、川久保鉄三、山口文一の諸氏外支那人六名之が準備委員となり高瀨四郎氏を組合長に村上鶴藏を副組長に選任し衞生組合規則及內規を制定して認可を受け玆に始めて同組合の端緒を開けり翌四十年二月衞生組合に關する都督府令發布せられ村上鶴藏氏組合長事務取扱を命せられ民政署衞生主任警部田中剛輔氏等之が援助を爲し其成績年と共に擧がり爾來年を重ぬること九箇年自治的團體として公衆衞生に貢獻尠なからざりしが大正四年十月特別市制實施と共に廢止せられ組合事業の全般は新市役所に繼承さるゝに至れり

▲由來旅順には衞生組合の外旅順協會、旅順聯合町內會の二團體あり前者は四十年九月日野文平氏首領となり實業家の機關とし同志を糾合して組織されたるか爾後幾多の變遷と困難に遭遇せしも其間實業界に多大の功勞ありたり然るに市制實施と共に大正四年九月下旬解散せり又後者は明治四十五年各町內の有志會合し一般公共的事業に盡力するの目的を以て組織し村上鶴藏氏會長となり武藤宇一郎西野菊次郎川久保鉄藏の諸氏之れが領袖として多年市民の爲めに盡くす處ありしも是亦市役所新設と共に解散の止むなきに至れり

▲上記の如く衞生組合を始め旅順協會旅順聯合町内會の三者を一團とせる新市役所の設立に就ては吉田旅順民政署長の盡力尠なからず十月一日民政署長は市會議員半數を任命し引繼き被選議員の選擧を行ひ同月二日第一回市會を開催して市長選擧を行ひしに大越文平氏大多數を以て市長に當選し越へて十一月八日助役大浦德次郎氏著任せり第一回市會開催以來諸規程の議案審議の上決定したるもの市會議事規則外十五件なり而して本年度の豫算額は經常部歲入一六、八七四圓、歲出一九、一九九圓、臨時部歲入四、六四五圓、歲出二一、三二〇圓なり（大連市役所參照）

市長　大越　文平（人事參照）　助役　大浦德次郎

市會議員

百濟　文輔（官選）　吉村　信貞（公選）
北島　七三（同）　糸井德之助（同）
宮田　仁吉（同）　米岡　規雄（同）
山口　世基（同）　辻　藤次郎（同）
久保田金平（同）　西野粂次郎（同）
宅島　猛雄（同）　吉武　忠吉（同）
陶　雲山（同）　吉澤代五郎（同）
郭　任德（同）

◉日本赤十字社滿洲總委員本部

關東都督府民政部内　電話三〇二番

▲滿洲に於ける日本赤十字事業は日露戰役の際同社の戰時救護の行動に感じて轉た同情を表する者あるに當り會々同社副社長小澤男爵が救護業視察として滿韓を巡視するや翕然として社業を翼贊して加盟する者簇至するに至れるに起因せり平和克復後關東都督府の設置に伴ひ三十九年一月大連に委員部を置き滿洲一般の社務を總括し本部より石川監督員を派して社業の發展を企圖せり爾來一般の趨勢が同社業務の擴張を認むるに及び委員部規則を改正し滿洲總委員部を旅順に委員支部を沿線各地に置き更に樞要の地に出張所を設けて社旨の普及を圖りたるに毎年三千有餘名の加盟者を出すの盛況を呈するに至れり玆に於て平時事業の一部として四十年二月旅順の元露國赤十字病院を襲用して關東州病院を開設せしが同年十一月都督府醫院と併立の制となり爾後同社病院としては專ら施療患者を救療することゝせり又四十二年十一月奉天病院を設けたるに内外人の信頼厚く纔に奉天に於ける衞生機關として重きを措かるゝに

至れり又關東州內に於ては巡回施療を施行し一方鐵道沿線にありては滿鐵醫院及地方醫に委託救療の法を講じ大正三年度よりは結核豫防撲滅事業を計畫し多數患者を收容救療しつゝあり此の他災害救護準備として人員材料を備へ災害時の急に應ずるの準備をなし彼の大正元年鳳凰城の動亂に際して多數支那兵を救護したるが如きは其一例なり

▲滿洲に於ける各支部は目下旅順、大連、金州、營口、奉天、鐵嶺、長春、安東、吉林、齊々哈爾の十一箇所にして又出張所は普蘭店、皮子窩、瓦房店、大石橋、撫順、本溪湖、新民府、開原、哈爾賓、公主嶺、双城堡、鳳凰城、雞冠山、通遠堡の十四箇所に開設せられ外に滿鐵會社及都督府通信管理局內に地方委員部を置けり

▲社員の現在數は特別社員三百二十九名、正社員三萬四千七百七十名にして此內外國人一萬六千七百五十一名を含めり外國人は支那人其大部を占む社員總會は創立以來開催數三十四回にして參會人員實に四萬五千有餘人に上り其半數は支那人なり大正四年四月秋に於ける總會には副社長小澤男爵來りて參列し其奉天及大連に於ける者は最も盛會を極めたり

總監督男爵　中村　覺　總長　白仁　武　副總長　佐藤友熊　宇木碩太郎　龍山貞治郎　商議員　青木宣純　西川虎次郎　中村是公　鈴木源三郎　幹　事　白須　直　村田昇　清　黒崎眞也　玉泉賢三　百濟文輔　協賛員　中所利周　志　寧　石川千尋

◉滿洲戰蹟保存會　關東都督府民政部內

▲曠古の大戰たる明治三十七八年役の戰蹟を保存し內は永遠に忠烈を國民に表彰し外は以て世界の史乘に貢獻するは洵に急務なるのみならず今にして之が保護の道を講ぜざれば千古の偉蹟をして徒らに風雨の荒殘に委ね復た當年の蹟を尋ぬるに處なからしめんとするを遺憾とし大正二年十一月十日當時の關東都督男爵福島安正、旅順鎭守府司令長官坂本一、滿鐵總裁中村是公の三氏發起となり事務所を關東都督府民政部內に設け支部を東京に置き天下の同情者に訴へて大正四年十二月末日迄に經營豫算額五十萬圓の寄附金を募り大正七年十二月末日迄に滿洲各地に散在する戰跡保存に必要なる事業を完成し財團法人に組織して之が維持經營を圖らん事を計畫し嚮きに

議會に於は國庫金十五萬圓下附の建議案を可決し又大正三年冬畏くも御內帑金一千圓の御下賜ありたり
▲保存事業は戰蹟に關する紀念標の建設、家屋の建設、道路の開修、紀念館の建設、白玉神社殿宇の建設、戰鬪地圖及戰蹟案內記の發行等にて之を二期に分ち紀念碑建設を第一期とし目下關東州の內戰蹟二十三箇所及州外戰蹟二十二箇所に對し建碑工事の一部を完了し若くは準備を施しつゝありて現在寄附金の收受高約九萬四千圓を算し豫約に係るもの約十五萬圓あり現在時局の推移に應み當初の計畫を緊縮し總額二十五萬圓を以て遲くも大正六年中には第一期事業の全部を竣成すべき豫定に在り

會　長　關東都督男爵　中村　覺
副會長　旅順要港司令官　川島令次郎　滿鐵總裁男爵　中村雄次郎
同　民政長官　白仁　武　同參謀長　西川虎次郎
庶務監督　都督府事務官　玉泉賢三　都督府參事官　百濟文輔
都督副官　江藤源九郎
工事監督　都督府技師　松室重光　滿鐵技師　小野木孝次郎
要港部司令副官　阪部祐四郎

◉本派本願寺旅順出張所

旅順市朝日町二ノ三五號地　電話一〇五番

當出張所は明治三十八年一月旅順開城と共に從軍布教師花田凌雲師旅順要塞司令部附として布教に從事したるに起因す平和克復後陸軍官舍に於て出張所を開設し四十三年本堂を現在所に新築して同年六月入佛慶讚會を執行せり大正四年十一月寺本泰嚴師本堂表正面に於て日清日露兩戰役に於ける彼我陣歿者弔慰の爲めに梵鐘及鐘樓を建立して四月莊嚴なる撞初め儀式を執行せり主任開教師は初代花田凌雲師より藤部宗應、笠雲溪、龍島祐天、八尋慈薫の諸師を經て現任寺本泰嚴師に至れり
▲現在の門徒は六百戶、信徒は百四十七人を以て算し布教は所內布教に土曜及日曜說教、知恩婦人會講話、宗祖大師逮夜說教、易行會說教あり出張布教としては學生布教、海軍布教、工友倶樂部、陸軍衞戍病院、陸軍衞戍監獄等に每月定日出張し外に日曜學校（現在生徒數二百名）都督府監獄免囚保護業に力を盡くせり

主任　寺本　泰嚴　（人事參照）

◉淨土宗明照寺

旅順市鯖江町

當寺は明治三十九年以來市內に布教を開始し其の後教會所を設置して布教及教育事業に歩を進めたりしが日を經るに及び堂宇の狹少を感じ大正三年現在の家屋を增築せり

主任權少僧都輔教擬講　竹内道學　長野縣埴科郡寺尾村、三十歲

◉天理教旅順宣教所　旅順市敦賀町番外ノ八號地

當宣教所は大正二年八月の開教にして專ら信徒の喜捨を以て維持す

主任　山路蔵十郎　廣島縣沼隈郡藤江村字藤濱、文久三年生、夫人つた子四十四歲、男七名、女一名

◉金光教教會所　旅順市鯖江町

當教會所は明治四十三年十一月の開設にして大正二年四月信徒の喜捨に依り二百坪の堂宇を建設せり

主任　谷村益三郎　名古屋市中區永樂町、三十五歲、夫人慶子二十八歲

◉旅順には外に慈雲山龍心寺、新高野山影顯寺、出雲大社教旅順教會所あり

◉旅順日本基督教會　旅順市忠海町七三番地

當教會は日本基督教會法に基きて組織す明治四十年九月日本基督教會傳道局幹事貴山幸次郎氏始めて巡廻傳道を開始し伏見町基督教青年會館內に集會したりしが四十一年十二月傳道者より定住教師島村穗吉氏を派遣する事とせり四十四年十月より獨立自給の教會となり傳道局との關係斷絕す同年十二月新築會堂落成す米國長老教會宣教師ブライアン氏は明治四十年より大正三年十一月迄新旅順に定住して傳道事業を協力補助せられたり現在會員は男二十名、女十名、客員男十名、女七名、日曜學校生徒平均出席者五十二名、教師男五名、女二名なり市內鎭遠町に講義所を有す

牧師　島村穗吉　夫人きよ子、男一名、女二名

長老　尾形經造　同　水谷彬

同　可兒鶴二

日曜學校長　堀　慥爾

◉東洋協會旅順語學校　旅順市乃木町三丁目　電話一三番

本校は東洋協會滿洲支部の經營にて實際に適切なる日本語、支那語、英語を教授するを目的とす明治四

十二年十月東洋協會幹部は滿洲支部の幹部なる中村滿鐵總裁、白仁民政長官等と小松原副會頭邸に會して本校創設の事を協議し越えて四十三年六月相賀旅順民政署長を校長に仰ぎ支部幹事齋藤親廣氏と共に開校準備に着手し校舍を八嶋町に選定し生徒募集の結果二百五十名を得て授業を開始し爾來次第に盛況となる旅順協會よりは二回の寄附金を得て學科を增置し四十五年三月第二回の卒業五十三名又大正二年三月には三十七名の卒業生を出せり目下現在生徒は英語科九十八名、支那語科七十九名、漢文科五十二名、數學科七十五名、簿記科二十六名、法律科三十名日本語科十四名あり

校長　吉田豐次郎　　支語日語教授　谷　信近
英語教授　蜂屋可秀　　漢文教授　寺尾恭一



旅順の戰蹟と名勝

◉白玉山納骨祠（自旅順驛約十三町）日露戰役に於ける我軍士の忠骨を納む

◉表忠塔（同上約十三町）塔高二百十八尺工費約三十萬圓

◉旅順要塞戰紀念品陳列場（同上約二十六町）場の内外に戰利火砲及び各種戰利品、砲臺模型を陳列す

◉東鷄冠山北堡壘（同上一里十五町）我軍數回の大爆破及び突擊の後三十七年十二月十八日之を占領す

◉望臺（同上一里七町）三十八年一月一日我軍小銃爆藥戰を以て之を占領す

◉二龍山堡壘（同上約三十五町）我軍爆破突擊戰を以て三十七年十二月二十九日之を占領す我死傷一千百七名

◉松樹山堡壘（同上約三十町）我軍坑道を掘開し三十七年十二月三十一日爆發を以て之を占領す有名なる白襷隊決死突入せし處なり

◉二〇三高地（同上約一里二十五町）我軍慘憺なる苦役十日間の激戰を經て三十七年十二月五日漸く之を占領す我死傷實に七千を算す

◉港口（同上約二十五町）我軍が三度閉塞を行ひし結果敵の巡洋艦以上の通航を不可能ならしめたり

◉露國忠魂碑（同上約二十五町）市外小案子山東麓にありて我政府の建立に係る

◉後樂園（同上十二町）露治時代の公園にて園内に音樂堂及び溫室あり

◉水師營（同上約一里二十町）旅順開城に際し乃木「ステッセル」兩將軍の會見地なり

大連

一、沿革及地勢

▲歐亞貿易の關門として東洋稀有の良港灣を有し南滿鐵道の起點として海陸の接續に優勝の位置を占め般賑織るが如くにて其前途の大發展を祝福せらるゝ多幸なる大連市も往時は俗に東西靑泥窪と呼び人煙稀薄にして其存在すら知らざりし、一小漁村に過ぎざりしが西暦一八九八年(明治三十一年)露國は淸國と旅大租借條約を締結し極東に於ける一大不凍港を建設す可く東淸鐵道會社をして大藏省令の下に淸國人民より土地を買收せしめ地名をダリニー(遠方)と命名し全速力を擧げて東洋屈指の良港を築きたり今日の大連市實に是なり然ども市街の設計、埠頭の築造等皆半成に及ばずして日露の役起り南山の將に陷落せんとするや露人悉く旅順に退去し大連は爲に戰はずして三十七年五月二十九日我軍の手に占領せり翌三十八年二月十一日紀元節の佳節をトして始めて大連と命名せり同年六月關東州民政署を置くや州內行政の中心となり鋭意秩序の恢復と之れが整頓に著手し市街も亦露國の設計を踏襲して諸般の計劃を立て玆に行政の曙光を見るに至れり次で同年九月邦人の自由渡航を許るしてより來住する者踵を接し三十九年九月關東都督府官制實施と共に面目更に一新し今や人口約七萬の一都市を現出し本年十月一日より市制を施行され大連は自治市として今後一層の發展を見る可きを疑はす

▲大連市は內地の秋田及朝鮮平壤、支那の天津地方と略ぼ緯度を同じくし北緯三八度五六分、東經一二一度三六分、東西二里、南北二十七町、面積約一方里なり南滿洲の西南關東半島の咽喉に當り南は黃海を隔てゝ山東省と相對し西は旅順港と隣接して渤海に臨み一連の丘陵東西南の三方に連亘して自然の障壁をなし大連灣北方に開けて好箇の門戶をなせり

▲市の壯觀たる大連埠頭は之を三つに分つ第一埠頭は市街中央より東方に突出し第二埠頭は同じく東部より東北に向つて海中に延び長さ千九百尺、水深實に二十八呎に達して優に一萬噸の巨船を繋留するに足る第三埠頭は猶築造中に屬し遠く海に突出して外

港との境界を劃し其尖端には千二百二十一尺の防波堤を築き更に此より千二百尺を隔てゝ第二第三兩埠頭を保護する二千八百五十尺の防波堤を築造せり第二埠頭には鐵道を導きて人畜貨物の積卸に便し又構内には十數萬噸の貨物を收容するに足る倉庫の設備あり

二、住民及土地家屋

▲大正四年六月末日に於ける戸數は日本人九、六四八、支那人六、五五七、外國人三八、計一六、二四三戸、人口日本人三六、七〇八、支那人三七、一一七、外國人一〇二、計七三、九二七人にして日本人にありては滿鐵會社に屬する者大部分を占む官衙公署にある者及び市内の商工業者多く上中流の生活を營み比較的下級の生計者を見ず

▲大連の總面積は二百十九萬五千九百八坪にして外に小崗子十三萬五千六十六坪あり此等の地積は租借地たるの關係上、土地の私有權を承認せざるも露國時代に於て競賣に附せし地區は今猶個人所有に屬するものあり

▲家屋の建築は軍政時代に於ける家屋建築取締規則の制裁を現在にても適用しつゝあり市民は一般に經費の節約、金融の關係並に半永住的觀念より其新築は概して永久的建造に限るの狀態となり市街公衆の衛生及保安に關し殖民地の都市としては中外に誇るに足る可しヤマトホテル、滿鐵會社及分館、總裁社宅、正金銀行、海關等は實に堂々たる偉觀を呈す

三、氣象及衛生

▲氣候は常に海陸兩方の支配を受け就中冬季大陸の影響を蒙むること甚だしくして強大なる高氣壓の北支那蒙古方面に現出するに及びては氣温頓に降下し強烈なる寒風連日に亘り寒威凜烈にして堪ね難し然れ共一度び高氣壓の南方に變せんか忽ち平穩快晴の小春天を現出す大連觀測所開始以來の累年結果に據れば年平均濕度攝氏一〇、二、最高三三、一、最低零下一七、六、濕度平均六七、最乾九なり

▲明治四十年十二月衛生組合設置以來、市街の撒水塵芥、糞尿、汚水の排除並に道路溝渠の掃除及清潔消毒等は同組合の事業として施行され市民亦た一般

に衛生に注意するを以て當市に於ける衛生狀態は比較的良好なり而して病院の重なるものに滿鐵大連醫院、大連療病院、大連婦人醫院、大連慈惠病院あり又日本人開業醫二十三人、外に英人一名、齒科、（日本人）六人あり

四、敎育及宗敎

▲敎育機關は稍々完備し小學校四、高等女學校一、（以上官立）商業學校一、（東洋協會立）工業學校一、（滿鐵會社立）、及幼稚園一、（本派本願寺立）あり其他語學敎授の目的なる青年夜學校、大連こども館あり又鐵道從事員養成所、工業學校附設補習夜學部、寺兒溝實業補習學校、電氣遊園及北公園の圖書閱覽場、（以上滿鐵會社立）あり支那人敎育には一、公學堂あり小學兒童數は三千五百餘名に達し年々の增加五六百名に上り當局者は其收容の設備に追はれつゝあり而して此等學童は其父兄が內地各校よりの移住者なる爲め各習俗を異にし殊に入退學頻繁にて學務當事者は敎育訓練の方法に就き常に細心の注意を拂ひつゝあり

▲宗敎としては佛敎、基督敎、儒敎、神道、回々敎等を數ふべきも支那人は由來宗敎心に乏しくして儒敎回々敎を除けば他は悉く內地人の信敎に屬す然れども植民地の風習として一般に永住的信徒少なく布敎及維持に關し經營の困難なると共に一方新開地なるが故に宏大壯麗なる伽藍殿堂の創設比較的容易なるが如し大連神社は全市民の崇拜する唯一の神社なり本派本願寺派關東別院は本年秋宏壯雄麗なる本堂及對面所を竣工せり大谷派本願寺大連別院も亦近く本建築に着手する筈、其他曹洞宗常安寺、淨土宗明照寺、高野山大師敎會支部、日蓮宗大連敎會所あり、基督敎には大連日本基督敎會、大連基督敎會、聖公會、救世軍福音「ルーテル」敎の各派あり、基督敎青年會亦た大に風敎に裨補するものゝ如し

五、通信及交通

▲三十九年十月關東都督府官制施行と同時に郵便局を設置し通信業務一切の取扱を開始す四十年一月通信管理局は旅順より大連に移り爾來駸々たる市勢の發展と與に局勢益膨脹せり大正三年度通常郵便物引

受數は四、八八二、五八六、配達數六、二八四、〇〇〇、小包引受數一三三、二八六、配達七六、三七四、郵便爲替振出額一、二五五、〇〇〇圓、拂渡高六五三、六二三圓其他郵便取立、郵便貯金、振替貯金も年々好況に向ひつゝあり電信業務に關しては電信法萬國電信條約及國際無線電信條約等を準用し一般電報、無線電報、新聞電報等の取扱をなすの外日支電信協約に依る通聯電報をも取扱ふ大正二年度の發信電報數三九八、九〇八、著信數三六〇、〇三七、電話加入者數は一四九三、内支那人二一八、邦人は七戸に一戸、又其一日平均使用回數は一戸十九回（東京は架設數百戸に付一戸、又其使用は一戸十七回）に上れり

▲道路は人道及車道に分ち人道はコンクリート瓦を敷き車道はマカダム式舗礫道とし兩側に排水側溝を設け側溝と人道の間には白楊、胡藤、ポプラの類を植ゑ快爽清雅を極む鐵道は滿鐵會社の經營にして其延長大連、長春線、旅順支線、營口支線、煙臺支線、撫順支線、安奉線等あり電車も亦滿鐵會社の獨專する處にして市内線延長十三哩餘の外に市外線三線あり

▲大連を起點とする定期航路は滿鐵會社の上海航路、大連汽船會社及阿波共同汽船會社の半島沿岸、芝罘仁川、安東航路あり大連に寄港するものは大阪商船、日本郵船、朝鮮郵船會社の定期航路あり大正三年度に於ける大連入港船舶數は汽船一、七二五隻、帆船二五隻、外國汽船三八六隻、外國帆船二、七〇五隻にして出港は帆汽船とも殆ど同數なり、大連と各港との距離を示せば旅順三〇浬、芝罘八七浬、安東一七五浬、威海衛九二浬、秦皇島一四〇浬、太沽二五〇浬、青島二八五浬、天津二四九浬、上海五三〇浬、門司六一五浬、長崎五八〇浬、營口一八六浬、神戸八五二浬、鎭南浦一八五浬、仁川二八五浬、釜山五四〇浬、なり

六、産業及貿易

▲大連附近の地味一帶に薄瘠にして耕作に適せず近時水利を起し不毛を拓きて農事經營を試みる者あり殊に果樹蔬菜の栽培は官憲奬勵の下に漸次發達の域に進みつゝあり林業も亦造林奬勵規則に基き一般に植樹趣味を喚起し市の郊端に造林植樹を企圖するも

の少なからず

▲黄海渤海の二大漁場を控へ殊に小平島、老虎灘、臭水屯の如き管内有數の漁村を有するを以て、水産業の前途は有望なり漁獲高一箇年約三十三萬圓に達す水産業機關としては關東都督府水産試驗場の外、關東州水産組合及滿洲水産株式會社あり、製鹽業は支那農夫の營む所にて大連附近にては微々たるものなり

▲工業としては先づ油房を主とす其他煉瓦及瓦、石鹸、製氷、醸造業等の各種あるも其規模及生産力に至りては油房に於ける豆粕豆油の製造に比すべくもあらず當局者は滿洲産の原料を用ふる各種の工業が我利權の培養に貢献する處ある可きを以て特に油房、セメント製造、高粱酒及醤油醸造、石鹸及硝子製造の特種工業に對し營業課税率を低減し或は補助奬勵を與へつゝあれば爾今各種工業の發展を見るべし大正三年に於ける油房工場數四八、製造高豆油一二四、〇一六、〇五〇斤、豆粕五、三六六、九〇〇枚なり

▲日露戰役前にありては滿洲の輸出入貿易は營口の獨占に歸せしも大連が我國に歸して以來暴に發達するや大連は遂に營口を凌駕するに至れり是れ營口は舊來よりの貿易港として滿洲の奥地と深き商業關係を有し且つ過爐銀取引の助けあるが爲め其勢力容易に拔くべからざるものあるも大連はより以上の迅速なる發達を爲し殊に近年日本品の需要増加及油坊業の勃興あるに基因したるものにして最近三線聯絡運賃低減の爲め輸入貿易に於て打撃を受けたりと雖も大勢に於ては頗る順潮にして今や支那海關中上海、漢口、天津、廣東の次に位するに至れり而して輸出にありては大豆九百二十三萬餘兩、豆粕千四百十九萬兩、豆油四百七十萬兩、計二千八百十二萬兩に及びて輸出總額の六割七分強を占む大豆に次ぐものは粟黍其他穀類の四百二十三萬兩、撫順石炭の二百六萬兩、柞蠶及柞蠶糸の百七十五萬兩、織物類の百四十三萬兩を以て重要品とす、又輸入にありては綿糸、綿布を第一位とし一箇年約六百五十萬兩に達す日本より滿洲に輸入する綿糸綿布は近年破竹の勢を以て激増し優に外國品を驅逐するに至り而して其經路は多く大連營口を經由したりしが大正二年夏以來露支國境陸路通過減税規則に均霑せる安東關税三分の一

減稅實行せられしに亞で院鐵、鮮鐵及滿鐵の三線聯絡特定運賃實施せられたる結果安東を經由するもの頗る多く爲に大連輸入貿易に打擊を與へたり綿糸布に次ぐものは建築材料の三百六十八萬兩、機械類の二百二十六萬兩、米の百九十八萬兩、金屬製品及材料の百九十萬兩、麻袋の百六十八萬兩、衣服類の百四十四萬兩、紙及紙製品の百三十萬兩、煙草の百十萬兩、麥粉の百七萬兩、藥品及賣藥の百二萬兩等を以て主なるものとす而して大豆豆粕の重なる仕向先は横濱、神戶、武豐、四日市、上海、廣東とす

七、財政經濟

▲金融は市勢の進步、貿易額の增進及企業の勃興に促進せられ近年益々活潑となれり市內の金融機關としては横濱正金銀行大連支店を始めとし株式會社正隆銀行、株式會社朝鮮銀行支店、株式會社大連銀行、株式會社龍口銀行支店あり此外大連貯金株式會社、滿洲貯金合資會社、共立貯金合資會社大連支店滿洲殖產株式會社信託部等は所謂無盡營業者なり而して外國人經營に係るものは露亞銀行支店及香港上海銀行代理店あり支那人經營のものは中國銀行大連支店外に錢莊の重もなるもの十七八戶あり質屋は下層の機關として五十四戶の多きを算す

▲通貨の種類は日本貨幣に在りては日本銀行兌換券及補助貨、横濱正金銀行券、朝鮮銀行券、軍用手票横濱正金銀行銀券の各種あり軍用手票は日露戰役當時政府の發行せし殘物にして現在引揚未濟高は三十數萬圓に過ぎず金本位貨は主として日本人間に使用せられ銀本位貨は日支人間の取引殊に特產物取引に專ら使用せられつゝあるも漸時其流通區域局限せらるゝの趨勢に在り支那貨幣にありては小銀貨（大洋錢、小洋錢の二種）銅元及洋錢票の三種あり小銀貨中市中に流通を見るは專ら小洋錢にして支那商民間日常の取引は多く之を標準として殊に苦力賃錢の支拂は總て之を用ふ銅元は小銀貨の補助貨として使用せらる洋錢票は稀に中國銀行鈔票を散見するあるのみ斯く市內に於ける通貨は金銀の兩種ありて市場の取引價格の如きも銀塊相場の高低其他の原因に依りて變動極りなく且つ各銀行錢莊等の建相場に多少の差違ありて一律なるを得ず建相場は正金、市場、滿

鐵、公定、海關の五種あり

▲保險業は生命保險にありては帝國生命其出張所を設置するのみにて他は皆代理店を置けり火災保險、海上保險會社は代理店に其事務を委託せり倉庫業は滿鐵及大連起業倉庫、田中倉庫、其他一二商店の兼營するあるに過ぎず

▲取引所としては大連重要物産取引所あるのみ大連商業會議所の目的及義務は內地商業會議所と同一なるも其組織に於て異る所尠からず同會議所は日を逐ふて活動の域に達すべし外に滿洲重要物産同業組合ありて重要物産に關する月報及年報を發行し且つ同業者の利害に關して常に之が調査硏究を怠らず又支那商工業者の團體として大連華商公議會及小崗子公議會あり日常食料品を輕便に販賣せしむるの目的を以て信濃町山縣通小崗子の三箇所に市場を設け民政署の管理に屬す

八、官衙及公共團體

▲關東州の主要なる軍政及民政機關は總べて旅順に設けられたるを以て大連に駐在せる官廳は其數多からず僅に大連民政署、土木課出張所、通信管理局、大連郵便局、海務局、大連灣無線電信局、水産試驗場、農事試驗場、觀測所、重要物産取引所、陸軍運輸部大連支部、關東倉庫大連支庫、大連憲兵分隊衛戍病院大連分院、要塞司令部大連支部あり此他支那總稅務司の管下に在る大連海關、大正四年十月一日より開始したる大連市役所、赤十字社大連委員部、在鄉軍人會大連支會、大連實業俱樂部、海務協會並に英米露三國領事館あり又慈善團體としては救世軍婦人並に育兒ホーム、勞働保護會、宏濟善堂、宏濟病院等あり

◉南滿洲鐵道株式會社

大連市東公園町
電略マンテツ

▲我が滿洲經營の樞軸は滿鐵會社に在り故に滿鐵會社の經營は則ち我が滿洲經營なりと謂ふを得べし又同會社は歐亞聯絡の公道たる鐵道及び東洋の門戸たる港灣を把握するよりして同會社は一面我が國家的

機關たると與に他の一面には世界的交通貿易の機關たるなり故に滿鐵會社の業務の消長は我が滿洲に扶植伸暢しつゝある勢力及利權の消長の上に直に影響するのみならず亦世界の貿易交通の上にも影響を來たす可し同會社は現總裁中村男爵に至り恰も歐洲戰亂の爲め外資輸入の困難なるに會し業務整理の理由の下に經營事業に緊縮を加へつゝあるが得て過大に失し易き創業時代の諸般施設に守成的の整理を加ふるは一張一弛の臨機明敏の措置たる可きも今や滿鐵會社は其一般組織の整備せるより觀れは轉や守成時代に入れるも其無限重大の職責に伴ふ國家的世界的の業務としては猶創業時代に屬せり況むや日支新約締結後の我帝國の滿洲に於ける地位及び歐洲戰後の我が帝國の東洋的立場に顧みる時は同會社の肩頭には更に一層の重荷を加へたる者にて從ふて同會社は一面に社務の整理を圖ると與に一面には益々社業を擴張して創業に踵ぐに創業を以てするの覺悟あるを要すべし同會社の業務は創始以來順潮に發達し其財政は次第に伸展せるが今左に此の重大なる職責及我國に於て他に比類なき厖大複雜なる機關を有し併せて多事多望の前途を有する滿鐵會社なる者の概略を示さむ

一、沿革

▲帝國政府は明治三十八年九月五日の日露講和條約第六條に依り東淸鐵道會社に屬したる長春旅順間の鐵道及其一切の支線竝に之に屬する一切の權利特權財產及炭坑を讓受け越ゑて三十九年六月七日勅令第百四十二號を以て當會社設立に關する規定を發布し同年七月十三日陸軍大將子爵兒玉源太郎氏に當會社設立委員長仰付け同時に委員八十名を任命せり然るに同月二十四日兒玉委員長薨去せられしを以て翌二十五日陸軍大臣寺內正毅氏後任仰付けられ同年八月一日政府は更に寺內委員長外委員八十名に對し會社設立事務の管理に關する命令書を交付せられたり設立委員は前記の勅令及命令書に遵據して事務を進め同月十八日定款の認可を受け同年九月十日より十月五日迄に第一回の株式募集を終了し同年十一月一日遞信大臣より會社設立の認可を得同十二月七日設立の登記を了し野戰鐵道提理部其他より財產の引繼を受け本社を大連に支社を東京に置き四十年四月一日

より營業を開始したり三十九年十一月十三日男爵後藤新平總裁仰付けられ同月二十六日中村是公氏副總裁仰付けられ國澤新兵衛氏外五名理事を命ぜられ同日創立總會に於て中橋德五郎氏外四名監事に選任せられたり而して總裁後藤男爵は四十一年七月十四日遞信大臣に親任せられたるを以て同年十二月十九日政府は中村副總裁を總裁に國澤理事を副總裁に昇任せり次で大正二年十二月十八日中村國澤正副總裁滿期退任し同月十九日工學博士野村龍太郎氏總裁、伊藤大八氏副總裁仰付けられしが翌三年五月本社分掌規定の改正と與に伊藤副總裁犬塚理事との間に確執を生じ種々の風潮を惹起したるを以て同年七月十五日政府は終に正副總裁を罷免して男爵中村雄次郎氏を總裁に同月二十日國澤新兵衛氏を副總裁に任命して今日に至れり

二、會社の組織

▲當會社の資本金は二億萬圓にして之れを株式百萬株（一株二百圓）に分ち内一億萬圓は政府の出資に係り滿洲に於ける既成鐵道及び之に附屬せる一切の財產（車輛竝に安奉線の軌條及附屬品を附く）竝に撫順及煙臺炭坑を以て之れに充て殘額一億萬圓は之れを日清兩國人より募集す可き者とし（淸國政府は株式引受の交涉に應ぜざりしを以て同國の持株なし）政府は之れに對し年六分の利益配當を保證せり而して會社の重役は總裁副總裁各一人、理事四人以上、監事三人乃至五人にして總裁副總裁は勅裁を經て政府之れを任命し理事は株主中より政府之れを命じ監事は株主中より株主總會に於て選任す可きことを勅令を以て規定せり

▲會社の本社內組織は其設立當時に於ては社務を各部に分ち部の下に課を置き理事は各自其部に屬する課務を處理する所謂各部制度なりしが明治四十一年十二月之れを改正し各課長をして其課務を主宰せしめ理事は之れを指揮監督すると共に社務全體に責成する所謂合議制に改め大正三年五月十五日復た現在の如く五部三局に分ち部局の下に課を置き副總裁及び理事は各部局の事務を分擔し且つ重要事項に付き合議するの各部制度とせり

▲現行制度に據れば本社の業務分掌は左の如し

總務部
- 事務局
  - 庶務課
  - 調査課
- 交渉局
  - 第一課
  - 第二課
- 技術局
  - 保線課
  - 土木課
  - 建築課

沙河口工場、電氣作業所、瓦斯作業所、埠頭事務所、中央試驗所、地質研究所、東亞經濟調査局、奉天公所、築港事務所、從事員養成所、見習夜學校は皆當部に隷屬す

運輸部
- 營業課
- 運轉課

各驛、各車輛掛、各ヤマトホテルは皆當部に屬す

計理部
- 會計課
- 用度課

大阪出張所は當部に屬す

鑛業部
- 鑛務課
- 販賣課

撫順炭坑及び各出張所は當部に屬す

地方部
- 地方課
- 衛生課

產業試驗所、參考品陳列所、各醫院、南滿醫學堂、各地方事務所、南滿洲工業學校及同補習夜學校、各小學校、公學堂、日語學堂、幼兒運動所及寄宿舍、教育研究所、實業補習學校、實科女學校、圖書閲覽所は皆當部に隷屬す

▲總務部の所管は最も廣汎且つ重要にして副總裁之れが部長たり

△事務局庶務課は機密、人事及社内風紀、社印及重役の印章保管、登記訴訟及諸般の廣告、株式及總會、契約、文書往復の整理及保管、社報發行、事務所及傭人取締、工場、作業所、埠頭事務所、中央試驗所、地質研究所、東亞經濟調査局等に關する事項竝に他の主管に屬せざる事項

△調査課は、業務の檢査、規定の檢査、諸般の調査竝統計、從事員の養成及訓練、營業報告竝年報の編纂、圖書新聞雜誌の註文竝保管に關する事項

△交渉局第一課は對外交渉、奉天公所に關する事

項
△交渉局第二課は國際聯絡運輸協約に關する事項
△技術局保線課は鐵道及附屬建造物の新設改良竝保存、社內電話に關する事項
△技術局土木課は土木、築港事務所に關する事項
△技術局建築課は家屋の建築及修理に關する事項
▲運輸部は鐵道の營業及運轉に關する事項を掌り理事之れが部長たり
△營業課は鐵道の營業、倉庫營業及旅館に關する事項
△運轉課は機關車及列車の運轉、車輛の保管及監査、鐵道の信號及通信に關する事項
▲計理部は會計及び用度に關する事務を司り理事之れが部長たり
△會計課は豫算決算、計算記帳、金錢の出納保管に關する事項
△用度課は物件の購買、保管配給又處分、船舶の製造賣買及貸借に關する事項
▲鑛業部は鑛務及販賣に關する事項を掌り理事之れが部長たり
△鑛務課は撫順炭坑に關する事項
△販賣課は石炭其他鑛産物の賣買營業、諸鑛産の保管受渡及處分に關する事項
▲地方部は地方竝に衞生に課する事項を司り理事之れが部長たり
△地方課は附屬地の支配及取締、土地建物の貸付教育、勸業、地區計畫、産業試驗所、消防、參考品陳列所に關する事項
△衞生課は衞生、醫院、及南滿醫學堂に關する事項
▲外に東京支社あり庶務及び會計二課に分かれ總裁に隷屬す又た地方事務所は元と經理掛りと稱し從來總務部に屬したるか大正四年十一月改稱と與に地方部地方課に屬することゝなれり

（三）會社の營業

▲會社は明治四十年政府より財産の引繼を受くると同時に主として鐵道及び炭坑の二營業を開始し爾來同三十九年の政府命令に從ひ着々事業の擴張進捗を圖りたる結果、現に會社の經營する事業は頗る廣汎

多様なるも其營業的として觀る可き性質を帶ぶるものは鐵道、海運、埠頭、鑛業、電氣及瓦斯、旅館の七者に過ぎず今此等に就き左に略說す

(イ) 鐵　道

▲會社が明治四十年四月一日政府より引繼を受けたる鐵道は

一、大連長春間本線　四三七、五哩
二、旅順支線　二八、八　　三、柳樹屯支線　三、六
四、營口支線　一三、四　　五、煙臺支線　九、七
六、撫順支線　三八、九　　七、安奉線　一八八、九

の七線にして安奉線は軌間二呎六吋の輕軌道にして其他は總て三呎六吋の狹軌式なりしなり會社は上記鐵道の引繼を受くると共に安奉線を除くの外全線を四呎八吋半の廣軌式に改造し且つ大連蘇家屯間二百三十八哩三分は之を複線と爲すの計畫を立て所謂三線式に依りて著々之を實行し旅順支線の廣軌先つ成り明治四十年十一月初めて廣軌車の運轉を行ひ翌四十一年六月一日より本線及撫順營口兩支線とも總て廣軌列車を運轉することゝなれり複線工事も亦改築工事と同時に著手し竣工するに從ひ區間運轉を開始し四十二年十月二十七日全部の開通を見るに至れり此改築及複線工事の爲に要したる費用は約壹千五百萬圓なり

▲營口支線は從來牛家屯を以て其終點と爲したれども明治四十二年九月の滿洲協約に依り大石橋基點より十三哩九分の地點(營口新市街)に停車場を新設することゝなり同年十一月より旅客手荷物及旅客列車便に依る貨物の取扱を開始し從來の營口停車場(牛家屯)は新設停車場の一部として貨物取扱所と爲せしが大正三年三月貨物の取扱をも新停車場に移し舊停車場は單に石炭の積出にのみ使用することゝせり煙臺支線は當初廣軌の必要なかりしが煙臺炭坑出炭額漸次增加するに至りたるを以て廣軌に改築し四十三年三月十一日より遼陽煙臺炭坑間に臨時貨物列車の運轉を開始せり柳樹屯支線は目下運轉の必要を認めざるを以て休業し居れども政府命令の趣旨に基き四十二年十二月是亦既に廣軌に改築したり

▲安奉線は前記各線とは全く其成立を異にし日露戰役中我第一軍の急設したる二呎六吋の輕便軍用鐵道にして帝國政府が明治三十八年十二月の滿洲善後協

約第六條に依り我國に於て各國商工業の貨物運搬用鐵道に改築し引續き經營すべきことを清國政府と協約したるものなり而して該鐵道は前記鐵道本線と共に四十年四月一日野戰鐵道提理部より會社に引繼かれ會社は三十九年の政府命令に依り會社經營の日より三箇年以内に四呎八吋半の廣軌鐵道に改築すべき任務を授けられたり然るに安奉線は山嶺重疊せる谷間の地に在りて線路の選擇容易ならさりしのみならす施工に關しても清國政府との協議纏まらさりし爲め起工遷延し漸く四十二年八月七日に至り初めて福金嶺隧道工事に著手するを得たり爾來奉天及安東の兩端より工を起し輕便線の兩側に廣軌條を敷設し以て工事中輕便線の運轉を妨けさるの策を取り又同時に清國官憲と交渉し購地局なるものを設け用地買收に從事し工成るに從ひ漸次兩端より廣軌列車の運轉を開始し以て工事の進捗を努めたり而して福金嶺（四、八八四呎）鷄冠山（三、二五四呎）の二大隧道を始め太子河の橋梁（一、七七一呎）其他多數の隧道橋梁及大土工を要し工事甚だ困難を極めたるも時を閲すること二年二箇月にして竣成し四十四年十一月一日全線百七十哩の開通式を擧行せり此改築工事に要したる費用は約貳千參百萬圓なりとす

▲廣軌開通以來旅客貨物の増加に伴ひ逐年車輛を增加し大正三年度末には左の廣軌車輛數を算するに至れり而して客車中には特別車二輛、プルマン式寢臺車、食堂車及一等車等の優等車輛三十八輛を包含す内一等食堂合造車三輛寢臺車六輛及食堂車二輛は當會社工場の製作に係るものとす

機關車			二六七輛
客車			一九六輛
貨車	三、一八六輛	三十噸積	二、八二九輛
		五十噸積	二〇五輛（石炭車）
		車掌車	一一九輛
		タンク車	二八輛
		冷藏車	五輛

鐵道引繼當時に在りては運輸運轉の設備極めて不完全なりしを以て會社は之が改良に勉め交通の增加發達を圖ると共に運轉の安全敏活を期し明治四十二年十月詳密なる運送規程及附屬諸規則を制定して運送に關する會社の責任を明にすると共に旅客貨主に安心を與へ作業の圓滑簡捷を計り以て我鐵道が歐亞交

通の國際的機關たるの性質に耻ちさらんことを期せり而して此運送規定は四十三年十一月改築全通と同時に之を安奉線にも施行することゝせり

▲停車場は當初極めて不備なりしを以て漸次其新築改築增築又は修繕を行ひ就中奉天には約參拾萬圓（旅館設備を含む）長春には約貳拾萬圓を以て大停車場を新築し又倉庫は從來停車場設備として殆と全く之を缺如せしか故に全線に亘り之を建設し其他各所に乘降場、貨物積卸場、起重機等の新設を行ひ安奉線に在りては停車場及其設備は廣軌改築に伴ひ全部新築したり其他會社が交通の便益及增加を圖らんが爲め施設せる重なるものを擧くれば西比利亞急行列車に接續すべき東淸鐵道列車に會社の列車長を乘込ましめて聯絡旅客の便宜を圖り又貨物輸送に付ては託送の便宜積卸の敏活及費用の節減を計らんが爲め或は專用線を敷設して貨主の便宜に供し又或は各地に貨物分局を設けて貨物の出廻り及び託送の便宜を圖り同時に石炭の販路を擴張し傍ら一般經濟狀態の調査報告に任せしむ

▲運轉設備の改良及完成に就きては會社は各種の通信機關、信號裝置、聯絡裝置等の改良完備を圖り轉車臺、給水、給炭其他の運轉設備を新設改良し又機關庫は既存のものには增築改築を行ひ奉天、鐵嶺、長春、撫順及大石橋等には之を新築し漸次其完備を努め安奉線に在りては安東に之を新築し今や運轉設備も稍完成の域に向はんとす又運轉規則は假に明治三十三年遞信省令鐵道運轉規定に依るものとし來たる會社固有の統一的規定なく既に四十二年に於て運轉規程の制定を終りたるも其附屬規則の未成なるが爲め今猶之を實施するの運に至らず

▲廣軌既に成就するや會社は明治四十一年十月より專ら歐亞交通旅客の便に供する爲め大連長春間に優良なる寢臺車及食堂車を備へたる急行列車の運轉を開始し（時間は約十四時間半）一週三回運轉を爲せり而して此列車は長春に於て哈爾賓を經由して露國の國有列車又は萬國寢臺會社列車（ソゴンリー）に接續し又大連に於ては本社の上海航路に連絡するの便を有す此急行列車の外普通旅客列車にも大正三年九月より每日上下各一回一等寢臺車を連結することとせり

▲安奉線に在りては輕軌時代には運轉頗る困難にし

て奉天安東間に二日を費し設備亦極めて不完全なりしが廣軌改築以來は全然本線と同樣なる鐵道系統に入らしめたり次て會社は朝鮮鐵道と協定して急行旅客直通列車の運轉を開始し初は長春京城間なりしが次て之を釜山に及ほし現今に於ては長春釜山間九百四十二哩に直通急行列車一週三回を運轉し其時間三十五時間なり（長春奉天間七時間、奉天安東間七時間、安東釜山間二十一時間、但し長春奉天間は前記大連長春間急行列車と合併して運轉す故に其南行には奉天に於て分割し一は釜山に一は大連に向ふものとす）而して本列車は長春に於て露國列車に釜山に於て關釜聯絡船に依り遠く日本鐵道に接續するの便を有し長春大連線の外に歐亞聯絡ノ一大線路を生するに至れるものなり

▲旅客交通上の便益を增進する他線との聯絡輸送の現在既に協定の成れる主要なるものは（一）旅客及手小荷物に就ては(1)日鮮滿方面の聯絡は殆ど完備し明治四十二年以來本社線と大阪商船會社大連航路及同航路經由鐵道院線との聯絡成り又四十四年以來本社線と大阪商船會社仁川航路及同航路經由朝鮮鐵道との聯絡並に本社線と朝鮮鐵道及同鐵道經由鐵道院線との聯絡成りて二線又は三線聯帶輸送を開始し(2)日支聯絡も亦大正二年十月成立し(3)日滿露の聯絡は四十年六月日露兩國間に締結せられたる鐵道接續假條約に基き四十三年より本社線と東清鐵道及烏蘇里鐵道との間に南滿東清聯絡成立し又日本國有鐵道、朝鮮鐵道、大阪商船會社並に露國義勇艦隊汽船、本社鐵道、東清鐵道及烏蘇里鐵道間の日滿聯絡成立し次て四十四年之に露國鐵道を加へたる日滿露聯絡成り又大正三年一月南滿經由東清京奉聯絡成立し其他四十三年以來西比利亞經由の旅客交通西比利亞及加奈陀經由の世界一週、西比利亞及蘇士經由の週遊に關する旅客國際運輸等協約實施せられたり（二）又貨物に付ては(1)四十四年以來本社線と大阪商船會社大連航路及同航路經由鐵道院線との聯絡成立し之に依り内地滿洲間のみならず郵船會社の孟買、米國、濠洲及歐洲の四外國航路の諸港と滿洲間にも亦聯絡輸送の便を見るに至り次て安奉線の開通と共に四十四年末朝鮮鐵道との聯絡成り更に進んで本社鐵道朝鮮鐵道及鐵道院鐵道間に三線聯絡貨物輸送を開始するに

至れり(2)又日滿露聯絡に至りては前記條約に基き數回協議を重ね大正元年五月以來先つ南滿東清間の貨物聯絡成り次て大正三年一月日滿貨物聯絡を開始せり尚日滿露間の聯絡は猶協議中に屬す

▲鐵道主要驛に貨物の貯藏に必要なる倉庫の設備を爲すべきことは政府命令書の指定する所にして會社は四十一年十月埠頭保管なる名目の下に小規模の倉庫營業を開始し主として船舶又は鐵道に由り埠頭に送致せられたる貨物の保管を爲すを目的とし之に對し倉庫證劵を發行せり而して鐵道沿線に在ては廣軌改築に伴ひ停車場其他の設備と共に主要驛に於ける倉庫上家及野積場の修築成るを俟ち四十二年十一月以來主として輸送貨物の輻輳を緩和するの目的を以て發送貨物保管なる名目の下に滿洲特產物の野積保管(無料金)を爲すの制を開き之に對し一種の證劵を發行し金融を得るの途を設けたり然れども以上二種の倉庫業は共に規模狹小にして組織制度亦頗る不完全なるを免れざるが故に爾來該營業の計畫に著手し四十四年九月以來大連埠頭と共に沿線廿五驛に漸次正則の倉庫營業を開始し荷主をして金融を得るの途を容易ならしむると共に一方に於ては奥地各驛に於て發送の目的を以て貨物を寄託したる場合には發送と同時に倉入料倉出料を免除し且倉敷料を半減するが如き方法を設け以て冬期各驛に於ける貨物の輻輳を緩和するの策を立てたり會社は又倉庫營業の開始と同時に保管貨物を火災保險に付するの必要を感し明治火災保險會社外十一社と特約し寄託物は貨主の委任を受けずして之に火災保險を附し保險料は當分の內會社に於て之を負擔することゝし先づ大連埠頭に保管する貨物に對し實施せり

▲鐵道に關する工場は引繼當時に於ては大連驛構內にバラック建の極めて粗造なるものありしに過ぎざりしを以て先づ差當り前述の廣軌機關車及車輛組立の爲之に應急の修繕を加へ又新に機械其他の設備を爲すと共に大連に隣接せる北沙河口に一大新工場を設立するの計畫を立て四十一年後半期より同事業に著手し四十四年八月九日全部の作業を開始するに至れり此工場は規模頗る廣大にして獨立の水道を敷設し敷地約三十萬坪、煉瓦二階建事務所、外建物二十三棟、一萬二千八百坪に達し最新式の設備を具へ機

關車二十六輛、客車三十六輛、貨車百三十輛を同時に收容し得る諸機械及用品の製作修理を爲すの能力を有し東洋有數の工場たり

ロ）海　運

▲會社は廣軌列車の開通に伴ひ歐亞交通上の便宜を圖らんが爲め日本郵船會社汽船神戸丸を傭入れ明治四十一年八月十日大連上海間の定期航路を開始せり爾來旅客及貨物の輸送漸く增加するを以て更に日本郵船會社汽船西京丸を傭入れ四十二年五月より神戸丸と共に毎週各一回の往復を爲すことゝせり而して右二船には四十四年十一月以來無線電信局開設せられ該航路の安全と便利とを著しく增進したるも元來兩船共船齡既に多きに過ぎ不充分なる點なきに非ざるを以て海事協會より第三義勇艦神丸を借入れ大正二年八月より西京丸に代へて同船を使用することゝし次て本航路に青島を加へ大正三年十二月より毎週一回旅客及貨物の輸送取扱を開始せり

▲會社は電車設備及大連中繼貨物吸集の必要上曩に南清の香港及廣東行の船便と相俟て香港航路を開始し大正二年十月以後隆昌丸（總噸數二、八一二噸）泰陽丸（總噸數二、六二一噸）大義丸（總噸數四、五五五噸）即ち乾坤丸（總噸數三、四八二噸）の四隻を以て之に充て途中芝罘青島に寄港せしめしが近時海運界の狀況に鑑み泰陽丸、泰平丸（總噸數三、四二四噸）の二隻に減せり會社は又大連と南滿諸港各地との間に於ける海運の發展に資する爲め小汽船を建造するの必要を認め既に四隻を新造せり即ち天潮丸（總噸數一、二〇〇噸）濟通丸（總噸數一、一三八噸）の二隻は明治四十四年度竣工期に竣功し一進丸（總噸數一、四八六噸）得進丸（總噸數一、五三五噸）の二隻は大正三年五月に竣功し孰れも大連汽船株式會社に貸付して近海航路に使用せしめ營口、龍口、登州、煙台、石島、天津及安東と大連との間に定期航海を營み内外の盛況を呈し旅客貨物の輸送頗る著しきを見る

ハ）港　灣

▲會社創立當時に於ける大連の築港は露國時代の計劃尚未だ其半に達せず因て第二埠頭及東突堤の築造着々竣工せるの外第一埠頭工事は南側の岸壁竣工せるも北部は半成にして防波堤中東防波堤は僅に捨石工事に着手し北防波堤は其東半部は半成なれども西

宇部は全く未着手なり又浚渫工事は第二埠頭及第一埠頭間に於て一度浚渫を行へる跡あるも其他は殆ど未着手と云ふべく其他第二埠頭西側に一棧橋工事を施し所々に埋築護岸に著手せる跡を存せしのみ會社は大體に於て露國の計畫を踏襲することゝし營作事務所を設けて着々其工程を進めつゝあり主要工事の内既に成功せるは東防波堤築造工事、第二埠頭西端岸壁築造工事、工場用地埋築工事、第一埠頭其他各所に於ける既成岸壁基礎改良工事、北大山通代充埠頭修築及護岸工事等にして目下工事中の主なるもの及其工程を示せば左の如し

○第一埠頭岸壁修築 は露國時代の既成岸壁に接續する北端の突堤岸壁を取除き新に南北九百尺東西五百四十尺の間干潮面以下三十尺より直立岸壁を築造する計畫にして四十一年起工し既に其工程九分九厘二に達せり

○西北防波堤築造工事 は四十一年七月起工し既に略ぼ竣工せしも四十三年に至り更に之を西方に延長し目下の工程は全行程の九分九厘なり

○港內浚渫 港內を干潮面以下二十五尺乃至三十尺に港外航路を同三十尺に浚渫するものにして其面積は港內約八十萬坪港外四十五萬坪合計百二十五萬坪なり四十一年三月著手、現在の工程八分一厘四を了れり

○寺兒溝海面埋築工事 埠頭設備、石炭貯藏其他の目的の爲第一埠頭の東部に於ける港內浚渫土砂を利用し約十萬坪の埋立を爲すの計畫にして四十三年著手目下其工程八分六厘八を了れり

○第三埠頭築造工事 現在の埠頭は完成の曉に於ても岸壁の總延長七千九百六十五尺にして僅に目下の需要を充たし得るに過ぎざるに入港船舶は年々倍大の速力を以て增加しつゝあるが故に新に第三埠頭を築造することゝせり此新埠頭は第二埠頭の西方に九百尺を距てゝ殆ど之と平行して長さ二千尺幅四百尺に築造するものにして大正二年度より基礎工事に著手し目下其工程一分五厘六にして大正八年度に完成の豫定なり

▲此外大連以外に於ては[illegible]、[illegible]及安東縣等に於て埋築及棧橋築造工事等を施行せり

▲會社は築港の進捗と共に埠頭設備の整頓を圖れり即ち倉庫の新築（三十四棟三萬一千百五十坪）、豆油貯藏タンク（百噸入五基）、小蒸汽船十五隻、艀船大小二十六隻、給水船二隻、殺鼠船二隻、浚渫船一隻を設備し且つ浮標信號裝置等を改良し今や船舶の出入著離貨物の積卸保管に多大の不便なきに至れり殊に四十年十月より從前多數の運送業者に委したる埠頭荷役を斷然會社の直營に移せり會社は大連の發達に伴ひ埠頭荷役噸數の年を追ふて增加し殊に冬期の激增は到底人力のみにては積卸上遺憾なきを期し能はざるを以て「クレーン」裝置、及石炭積出設備の設計中なり會社は埠頭營業は運送業便益の爲にするものにして收利を目的とするものに非ざるが故に收入の增加に從ひ漸次料金を低下する事とせり

（ニ）　埠　頭

▲會社は又石炭の積出に便する爲め明治四十三年一月四日旅順港內の海面使用、石炭積出假棧橋の新設及海底一部の浚渫を爲すことを許可せられたるを以て必要なる浚渫を了し既に石炭の積出を爲し得るに至れり營口にも亦四十三年十一月以來埠頭事務所支所を設け護岸棧橋其他の工事を施行し倉庫上家六棟（四千百六十坪）を建造し鐵道と聯絡して石炭其他輸出入貨物の取扱をなせしが昨年組織改正の爲め營口驛に引繼を爲せり安東にも四十五年四月より支所を開設せしが是亦組織改正の爲め安東驛に引繼を爲せり上海にも同航路の發展及貯炭等の目的の爲め埠頭を設くるの必要を認め用地二萬餘坪、倉庫上家九棟（三千餘坪）其他の建物及附屬設備を購入し四十四年十月より埠頭事務所上海支所を開設したり

▲船渠は大連に露國時代の築造に係るもの一あり長三百八十一呎、底幅三十二呎餘、深さ二十五呎、渠口は兩開戶扉式にして工場其他の建物二十八棟を附屬せり會社は明治四十年他の財產と共に當時之を管理せる海軍より引繼を受けて經營せしが四十一年七月川崎造船所に貸付し其經營を爲さしむることゝし同造船所は契約に從ひ必要なる設備を爲し船舶諸機械の製造に從事し旣に一二小形汽船の新造を爲せり該船渠は僅に二三千噸級の船舶を入渠せしめ得るに過ぎざりしを以て會社は時代の要求に應じ大正二年

三月六千噸級迄の船舶を入渠せしむるの擴張工事に著手し大正三年三月竣工せり

（ホ）鑛　業

▲會社が當初政府より引繼を受けたる炭坑は撫順、煙臺及瓦房店附近に於ける炸子窯の三坑なりしも明治四十年七月日露鐵道接續協約の結果として露國政府より長春附近の石碑嶺及陶家屯炭田の引渡を受けたり而して現に會社の採掘する炭坑は撫順煙臺の二坑のみにして炸子窯坑は邦人某に賃貸し石碑嶺陶家屯の二炭田は未だ全く其經營に著手せず

▲撫順炭坑は奉天府の東約九哩に在り其炭田は渾河に沿ひ延長殆ど五哩に亘り渾河に向ひて平均約三十度の傾斜を爲し炭層の厚は百七十五尺より八十尺に至り平均約百三十尺にして炭層中の夾雜物は厚二十尺を超えず含有炭量少くも八億噸に上る測算なり而して政府より炭坑の引繼を受けたる當時の設備は總て軍事の必要に出でたる急造的のものにして一も永久の使用に堪ふるものなく一日僅に三百六十噸の出炭を爲すに過ぎざりしを以て會社は斯道に精通せる故松田博士を炭坑長に任用し愼重之が計畫實施に當らしめし結果千金寨、楊柏堡、老虎臺の三坑を合せて一日約四千噸の出炭力を有するに至れり

▲右の外千金寨及楊柏堡に各一箇所の大竪坑二組（各上風坑下風坑の二坑を具ふ上風坑の内徑十八尺下風坑の内徑二十一尺）を開鑿するの計畫を立て千金寨のものを大山坑と云ひ楊柏堡のものを東郷坑と名づく大山坑は四十年十一月より掘進を始め四十二年十二月一日を以て千百六十尺の深さに於て著炭し東郷坑は四十一年十一月十九日より開掘を始め四十三年四月五日を以て八百六十二尺にして著炭し諸般の設備も略竣成せしを以て大山坑は四十四年四月一日、東郷坑は同年六月一日より之を營業坑となせり而して此兩坑完成の曉には各坑一日二千五百噸の出炭を爲すの豫定にして未だ其域に達せざるも前記の諸坑及古城子露天掘、竝萬達屋斜坑を合すれば一日七千噸の出炭力を有す

▲會社は石炭の採掘を最も經濟的ならしむる目的を以て之を外國の實例に鑑み愼重研究の末楊柏堡坑に填砂法を試驗したるに其結果頗る良好なるを以て漸次各坑に及ぼすことゝし目下施行中なり又會社は石

炭の供給力を增大せしめん爲め昨年來萬達屋に斜坑一箇所を開鑿し同時に炭田の西端古城子淺處に於て露天掘を開始し目下合せて一日三百噸内外の出炭あり今每年度に於ける撫順炭の出炭高を顧るに明治四十四年度の二十三萬三千三百噸より逐年增加して四十四年度には一百三十四萬三千噸となり更に大正三年度には二百十四萬七千噸に上りたり(以上英噸)

△煙臺炭坑は遼陽停車場の東北約十哩の地點に在りて煙臺驛との間に鐵道の便あり其炭田は東西約十三町、南北約五十町に亘り炭量約二千萬噸に上る見込なり同坑は當初探鑛其他の豫備工事を爲すに過ぎざりしが四十三年度後半期初より營業坑と爲し現今一日の出炭力は三百噸内外、其質半無煙炭にして特殊の需要あり

△撫順炭は日本炭と同じく第三紀層に屬し其色漆黑にして光澤强く揮發分に富み燃燒熾盛にして七千五百「カロリー」の火力を有する有煙炭なり其特色としては灰分極めて少量にして「クリンカー」を生ずること少なく又硫黃分を含有すること僅少なるが故に汽罐を損傷することなし即ち撫順炭は揮發分に富むが故に瓦斯製造用としては日本產一等炭に比肩すべく又機關車及船舶用にも大に適當せり會社は普く海外に撫順炭の性質を廣告するに力を盡すと同時に滿洲內部の需要を喚起するに努めたる結果其需要は漸次好況を呈し大正三年度に於る滿洲各地の販賣高は百十四萬八千餘噸に及び各地への輸出炭は百萬五千餘噸、船舶焚料炭は三十二萬二千餘噸に上るに至れり其海外輸出は四十年度後半期に於て始て上海に千二百噸の試賣を爲したるに過ぎざりしが聲價日を逐ふて加はり其販路も日本各地朝鮮、浦鹽、哈爾賓、芝罘其他山東諸港、天津、上海、漢口、廣東、臺灣、香港、新嘉坡、西貢、爪哇、マニラ等に擴布するに至れり依て會社は滿洲內部に在りては各地に貯炭場を置き本社鑛業部販賣課の外各重要地に出張員を配置し輸出炭に關しては京城及龍口に出張員を置き其他は代理店をして販賣を爲さしめ天津其他の重要地には適應の貯炭場を設備せり而して運炭は他の運送業者に委託するの外二隻の運炭船を所有し且つ特に長期傭船せるもの現在六隻あり今同炭の販賣高を觀るに明治四十年度の二十一萬二千噸より四十三年度

には一百萬噸に上り大正三年度には終に二百四十七萬噸に達したり

▲撫順炭坑は發生竈十基を裝置し從來廢棄したる硬炭に石炭を加へたるもの一日二百四十噸を用ゐて硫酸アンモニア約十噸を製造し而して其發生したる瓦斯を以て汽罐を熱し三千「キロワット」ノターボ發電機に必要なる蒸汽を供給して電力を造り之を塡砂用動力、其他各坑間の交通及運搬用電氣鐵道、及電氣機關車の原動力に利用する計畫にて大正二年六月其工事に著手し大正三年十一月二十六日其試運轉をなし爾來引續き運轉し大正三年度末には電氣機關車九輛、特等並等合客車二輛を有す此電氣機關車は專ら撫順驛以東に於ける石炭運搬に使用せり

(ヘ) 電氣及瓦斯

▲會社の目下經營する電氣營業は撫順が炭坑勘定にて自ら經營するを除くの外大連、奉天、長春及安東の四箇所にして瓦斯は只た大連に於てのみ之を經營せり

▲會社が政府より其出資財產の引續を受けたる際に於ける大連の電氣設備は一通りの通信設備と不完全なる發電所とありたるのみなりしが爾來鋭意其改良發達に力め四十年十月より大連に於て電燈及電力供給の營業を開始せり而して其需要は漸次盛況を呈し發電量不足を告ぐるに至れるを以て擴張設計を立て四十一年度後半期より工事を進め既に全く竣成せしが大正元年度更に千五百「キロワット」發電機一基を増設せり而して大連に於ける大正三年度末の電燈供給口數は七千五百二十九、燈數六萬七千八百十三(十六燭光換算)を算し又同年度中に供給したる電力は百八十五萬餘馬力時なり

▲會社は大連市内の交通機關として延長十三哩餘の電氣鐵道を敷設するの計畫を立て四十二年九月廿五日より營業を開始し尙ほ大連と北沙河口工場及星ヶ浦海岸ホテル地とを聯絡せんが爲に市外線四哩餘を增設して四十四年一月一日より營業を始め次で老虎灘にも市内線の終端より三哩餘の電鐵を敷設し同年八月一日より之が運轉を開始し其大正三年度末の營業哩は十七哩餘を算せり又小崗子及埠頭間には電車に依る貨物の運搬を開始し目下電車運轉車輛は客車五十輛、貨車十輛、撒水車一輛なり

▲奉天に於ては四十一年六月より電燈營業を開始し翌年發電所の新築に着手して二百キロワット發電機二基を据付けたり而して大正三年度末に於ける電燈供給口數は一千二百七十五、燈數一萬一千六百三十(十六燭光換算)にして供給電力は七萬七千七百餘馬力時なり

▲安東に於ては安東電氣株式會社の營業を讓受け四十四年一月一日以來發電所其他に改修を加へて營業せしが極めて不完全なるを以て新に發電所を建設し大正二年四月其一部を竣成し目下舊發電所に百キロワット發電機一基新發電所に百キロワット發電機二基を据付く而して大正三年度末に於ける電燈供給口數は一千八百一、燈數一萬六百九十一(十六燭光換算)にして供給電力は三十二萬六千六百餘馬力時なり

▲長春に於ては先きに大連に於て使用せし二百五十キロワット發電機三基及附屬汽機全部を移設し四十三年二月より營業を開始せしが爾後電力供給の爲め發電所擴張の必要を生じ昨年四百キロワット發電機一基を增設せり而して大正三年度末に於ける電燈供給口數は一千三百三、燈數一萬二千二百三十四(十六燭光換算)にして供給電力百四十九萬一千八百餘馬力時に達せり

▲會社は大連に於て燈火煖房工業其他各種の需要に供する爲め一晝夜三十萬立方呎の石炭瓦斯を製造する計畫を立て十五萬立方呎の瓦斯溜を設備し四十三年三月より營業を開始せり而して瓦斯の需要は意外に多く旣に供給不足を感ずるの勢となれるを以て大正元年中製造能力五萬立方呎を臨時增加し且つ三十五萬立方呎の瓦斯溜を增設し次で大正三年三月二十萬立方呎の製造力を增加し同時に豫備として一日十萬立方呎の製造能力を有する水性瓦斯發生器を增設せり而して大正三年度に於ける瓦斯製造高は八千三百四十八萬二千百立方呎にして骸炭四千九百五十四噸、タール十萬二千九百十九瓩の副生物を得たり

(ト)旅館

▲旅館の經營は亦政府命令書の記載する所にして會社は鐵道交通の便益に資するが爲め明治四十年四月より其設計に着手し同年八月一日より大連ヤマトホテルを開業し洗濯場、理髮所及馬車部を附設し次で

四十一年三月廿一日より旅順ヤマトホテルを開業し長春に於ては四十年度より旅館の新築に著手し其の建築成るを待ちて四十三年二月一日より之に移轉せり又奉天に於ては新停車場の一部に之を施設して四十三年十月一日より營業を開始せり其他内外の避暑客を招致せんが爲め大連に接近し風景最も佳なる星ケ浦に海岸ホテル、貸別莊及海濱の娛樂に須要なる施設を爲し四十三年八月より營業を開始したるに外人の來遊漸く盛なるに至れり

▲大連に於ては上海航路の發展並に一般交通の增加に伴ひ在來の旅館にては到底其需要を充たすに足らず殊に屢內外貴賓の來遊せらるゝあり依て新に一大旅館を建築するの計畫を立て明治四十二年六月其工事に著手し大正三年六月滿五箇年を以て竣工す近世レネサンス式を樣式とし建坪六百六十坪客室百十五蒸汽、溫水及溫氣暖房、昇降機、電話、自働寫字機電氣時計、電燈、電扇、瓦斯燈、非常消火栓、安全庫、郵便收集裝置、浴槽等を完備し大正三年八月一日より營業を開始せり

(四) 地方經營

(1) 組織

▲會社は政府命令に依り沿線附屬地に對し土木、衛生、教育其他の設備を爲すの責任を有するを以て業務開始と與に地方部を置きたり當時瓦房店、大石橋、遼陽、奉天、公主嶺、撫順等樞要の地には關東都督府令に基き組織せられたる居留民會ありしを以て會社は一時の便法として暫く居留民會を會社の機關として地方公共事務を處理せしめたるも居留民會の成績良好ならず事業擧らざるを以て會社自ら經理の任に當るの方針を決し同十月終に居留民會を廢し瓦房店、大石橋、遼陽、奉天、鐵嶺、公主嶺及長春の七箇所に會社出張所を置き地方經理の任に當らしめ且必要に應じ居住者中より委員を指定し諮問機關を組織するの制を設け之と同時に公費及手數料規則を制定し以て公費の種別、等級其の他公費手數料に關する根本規定を定め而して出張所所在地及大連、撫順等に公費賦課の制度を開始せり次で明治四十一年十二月會社組織改革の際地方部を地方課と爲すと同時

に出張所を廢し經理係となしたるが大正四年十一月更に地方事務所と改稱し從來其所屬の判明を缺きしを以て之れを地方課に隸屬せしむると同時に其權限を擴張したり現在此の事務所を置けるは經理係を置くもの大連、瓦房店、大石橋、遼陽、奉天、鐵嶺、開原、公主嶺、長春、本溪湖及安東の十一箇所にして此の外沙河口に在りては工場、撫順に在りては炭坑庶務課に於て從前より地方經營の任に當れり而して公費賦課地は全線を通じて二十三區の多きに達せり

（２）　經費及戸口

▲地方經營に要する費用に付きては會社は其の當初より公共設備に要する費用中新營費は會社自ら之を負擔し其の維持修繕並に地方の衞生、教育及警備等に關する經常費は地方に於ける收入を以て支辨せしめ其の不足なる所は會社の經費より補助するの主義を立てたり公費の賦課に付きては明治四十年九月公費及手數料規則に依り其の根本を定めたる以來其時宜に從ひ改正したるが大正二年度より課率を甲乙二樣に定め更に大正三年度より之を甲乙丙三樣とし等級及課率に依り納入者の資力、收入等を參酌して之を賦課す地方經營の收支は人口の增加及經營の進捗に伴ひ收入漸次增加を示すも支出の增加一層著しきを以て會社の補助金亦從て增加するを免れず明治四十年度に於ては收入二萬七千三百五十六圓の內補助金八百八十五圓、支出二萬一千〇七十二圓なりしものが大正四年度には收入六十六萬八千六百七十四圓、內補助金四十五萬三千〇十三圓、支出六十六萬八千六百七十四圓に上れり

▲附屬地に於ける戸口は經營の進捗に伴ひ逐年增加するを見る明治四十一年三月末に於て戸數八千六百人口二萬七千に足らざりしも大正四年度三月末に於ては戸數二萬、人口八萬九千に達し七年間に戸數一萬二千、人口六萬三千人の增加を來せるより觀れば地方經營は健全なる發達を遂げつゝあるが如し

（３）　土地及建物

▲會社が明治四十年四月一日政府より引繼を受けたる土地は鐵道用地を合せ關東州內外に亘り合計約四千五百萬坪なり而して此の中には安奉線路及撫順線路の一部の如き未だ買收を終らさる占領地其の他未

確定又は係爭中の土地を包含せり爾來支那及露國官民より財產還付の交涉續出せしかば鋭意之か整理に努め或は還付し或は買收して漸く大體に於て土地の狀態を確定するを得同時に附屬地に境界標を立て地目の變換を行へり從來係爭地として外國官民に還付したるものは遼陽に於て十一萬坪及奉天に於て二十二萬坪を主なるものとす又會社は其の間必要に應じ各方面に土地の買收を行ひ長春附屬地約百五十萬坪撫順鑛業及市街用地約二百萬坪、安奉線用地約五百四十萬坪、本溪湖並南坟附屬地約十萬坪、上海埠頭用地約二萬坪等を主なるものとし其の他星ケ浦、營口、奉天、東京、哈爾賓、天津等に於て所要の土地を購入せり又賣却に在りては蘇家屯新城子間の廢線敷地約二百萬坪を支那に賣戻したることあり要之附屬地及所有地の面積は常に增減あるを免れざるが現在會社所屬の土地は合計約六千百九十五萬坪（約十三方里）なり以上の外會社が必要上都督府又は支那人等より借入れ使用する土地少からず其の現在合計約百三十八萬坪に達す大連及星ケ浦に於ける五十萬餘坪、沙河口工場用地四十五萬坪、安東水道用地二十萬坪等を主要なるものとす

▲會社が明治四十年四月政府より引繼を受けたる建物は大約五千棟二十一萬四千坪なるが此れ亦た土地と同じく何等實際の狀況を詳にするを得ざりしを以て愈々實際の引渡を受るや社員を全線に派して土地と同樣の處理を爲し爾來業務の進捗と共に建物の增加著しく會社所屬の一切の建物を合算すれば約九千八百棟にして此の建坪三十八萬餘坪に上る社宅は社員の資格階級に依り配給し獨身者及家族持社宅に區別し且つ之を數等に分ち建物の構造、設備を滿洲の風土に應せしめ以て社員心身の休養に適せしめんことを期せり猶大正四年三月末迄に全線に亘り七百七十八棟、三千二百十六戸、四萬七千三百四十四坪の社宅を新築し此の工費實に七百五十一萬八千圓に上れり然れども社運の發展に伴ひ益社宅の需要を增し社員にして社宅の配給を受け得ざる者多きを以て明治四十三年九月以降社員の階級に應じて住宅料を支給し借家居住せしむるの緩和制を開きたり大正四年三月末現在社員數は一萬三百四十八名にして社宅不足の爲め社宅外又は代用社宅に居住を命じたる者實

に四千百五十六名、其の住宅料及借家貸月額三萬七千九百四十餘圓の多きに達せり而して貸付家屋は大正元年に於て約三十萬圓を以て奉天に建築したる大貸付家屋あり以上の外會社が關東都督府より借入れ使用する建物は事務所社宅等を合せ約百棟（附屬建物を合せ約六千坪）あり

▲會社は其の始より所屬の土地及建物は社用及諸官衙用の外は悉く之を有料にて貸付くるの方針を採り次で社員を全線に派し調査に從事せしめ爾後貸付事務著々進捗するに至れり明治四十一年に至り從來の調査を基礎として貸付契約書式を作り以て貸付條件を一定し且貸付料の標準を定め宅地は一坪に付月額十錢乃至五厘、畑地は年額三錢乃至一厘の範圍に於て土地の狀況に應じ等差を付することゝし茲に貸付事務の基礎成るに至れり大正二年二月土地建物貸付內規を制定し大正二年四月一日より實施せり而して耕地貸付に付ては會社は轉貸の防止耕地區劃の整理貸付面積の制限に重を置き果樹栽培と水田經營の獎勵に付きては特別の要意を拂へり而して果樹栽培に付ては種苗取寄せに關する便宜は勿論栽植後七箇年を超えざる期間地代三分の二以內を低減することゝし水田經營に付ては其の狀況に應じ會社自ら井戶を開掘して無償使用せしむる等の便宜を與へ居れり而して果樹栽培は熊岳城及其の以南に多くして水田の經營は奉天、撫順、鐵嶺、四平街、海城、熊岳城、得利寺等に行はれ現に其の面積は約五十六萬坪を算す會社は更に鐵道守備の滿期兵に對する特別扱の貸付法を設け大正三年守備隊司令官と協商を遂げ同司令官の推薦ある滿期兵に對しては約六萬坪の優先的貸付及資本金の缺乏せる者に對しては金三百圓を限り之を貸付することゝし尙本人及家族の渡滿に付ては船車半額割引券を交附することゝせり現に同年度に於ては蛇牛哨、得勝臺、開原に於て七名の該農業經營者を得たり

▲會社の貸付は漸次增加を示し明治四十年度前半期に於て土地貸付坪數約七百四十萬坪（內宅地五萬坪）貸付料約二萬四千圓なりしも大正三年度に於ては坪數一千四百十一萬坪（內宅地九十萬坪）料金二十一萬四千圓（一箇年度分）に達し殊に宅地の貸付著しく增加の趨勢を來し七箇年半にして十八倍に上れるもの

全く市街の發達經營の順調を示すものなりとす尙建物に在りては大正三年度の貸付三百八十二棟、此坪數九千五百坪、貸付料三萬圓なり

（4）市街經營

▲市街經營は地方事業中の最重要なるものたり南滿鐵道の南滿洲を貫通して蜿蜒七百哩に亘るの間の停車場所在地は概ね地積廣く市街を經營するに足れり會社開業當時に於ける是等附屬地の狀況たるや大連を除き他は沿線に在りては遼陽、公主嶺の如き其の局部稍市街の體裁を具へたるものなきにあらざりしも皆多く蕭條たる一小聚に過ぎず會社は十五の樞要地を選み之が實測を遂げ明治四十年度後半期に入るに迨び大體の確定を見るに至れり而して所謂市街經營とは市區の區劃を始とし道路、堤防、護岸、橋梁、溝渠等の築造、水道、下水、公園、市場、墓地、火葬場、便所、屠畜場等の設備其他街衢の施設、宅地の修築等市街に屬する一切の工事を包含し緩急を計り前後を數へ其の施設を進行するものとして又其の計畫の方式に至りては露國は到る所の市區區劃に圓形式を採りたるも研究の結果方形式を採用し又道路の構造は「マカダム」式を用ひ道幅は本道二十間乃至六間とし六種に區別し土地の狀況に應じて之を定め且八間以上の通路に限り人車道の別を設け雨水溝は道路の兩側に掘鑿し土地の狀況に從ひ板柵又は煉瓦若は石を以て土留を爲すものとし又給水は水道に依るを本則とするも之に依る能はざるものは井戸を掘鑿して其用に供することゝし市街經營及醫院、學校等の營造物に對し明治四十年より明治四十四年に至る五年間約三百八十九萬圓を投ずるの豫算を立て先大連に於ける道路、下水の修築を施行し又遼陽、鐵嶺に於て道路工事に着手せるを發端として漸次市街經營の步武を進めたり現に市區の設計を晝立したるもの本線の沿線十九箇所及安奉線主要驛所在地にして目下既に必要なる部分の道路溝渠等を竣工し大正三年度末迄に地方營造物を除き市街經營に費す所約六百二十萬圓なり（撫順市街は此の以外に在り）而して市街經營の進展と共に學校、病院其の他の地方營造物及事務所、社宅貸付家屋等の建設も亦從て進捗したるを以て今や沿線各地市街の外觀を具ふるもの漸く多く戸口の增加亦著しきものあり滿洲の曠原忽

にして都邑となる滿鐵會社の努力亦空からざるなり

(リ)　衞生施設

▲會社は政府命令書に依り醫院其の他の衞生施設を爲すべき義務を負擔するが上に蓋衞生施設の完備は居留民の安心を買ひ內外人の移住を奬め延て會社の業務を發展せしむる所以にして應に地方經營の第一步たるべきこと明なるを以て業務開始以來汲々として事に從ひ漸く完備の域に達せんとし殊に醫院に至りては其の設備尤も整頓し濟生賑民の實を擧げつゝあり

▲會社業務開始以前に在りては大連に都督府所管に係る大連醫院あり二三の附屬地に居留民會設立の病院ありて一般居住者の治療を爲し大連、遼陽、奉天鐵嶺其の他六箇所に野戰鐵道提理部所屬の診療機關ありて專ら提理部員の治療に從事しつゝありしが會社の業務を開始するや先づ提理部所屬の診療機關を引受け本院を大連に分院出張所を地方八箇所に置けり同年十月都督府所管の大連醫院及居留民會の醫院も之を會社に引受け四十三年八月更に安東同仁醫院を引受けたり又大正二年一月營口同仁醫院を大正三年十月吉林東洋醫院を引受け之を經營せり

▲現在醫院の所在地は大連、營口、遼陽、奉天、鐵嶺、公主嶺、長春、本溪湖、安東及吉林の十箇所にして沙河口、瓦房店、大石橋、西營口、奉天城內、開原、四平街、長春城內、安東道署前街の九箇所には分院の設けあり就中西營口、奉天城內、長春城內及安東道署前街の四箇分院は特に支那人患者の爲に設けたるものにして支那語に堪能なる醫員技術員を配屬し看護人には支那人朝鮮人を養成して之に充つ又撫順炭坑の管轄せるものに撫順炭坑醫院及煙臺出張所あり其の他熊岳城、海城、昌圖、橋頭、鷄冠山及大連市內寺兒溝に公醫を配置せり

▲大連醫院に在りては內科、外科、眼科、產婦人科、小兒科、皮膚科、耳鼻咽喉科、齒科、口腔科、精神神經科、研究部(細菌)及一般治療部等を設け奉天醫院に於ては南滿醫學堂の發展と共に各科を增設し大正三年度に於て各分科悉く備はり又支那人患者の爲診察所及病棟を特設し主として之を學用に供す其の他安東、長春、營口の各醫院に於ても五六の分科を設く炭坑醫院に於ては近時事業の膨脹と共に醫院も

亦擴張せられ内科、外科、小兒科、産婦人科、眼科齒科、口腔科、研究部の設あり而して大正四年三月末に於ける入院患者病床數は大連醫院三百其の他各地方醫院分院を合せて約千三百を以て算す

▲看護婦養成の爲大連醫院に於て看護婦講習生を募集し既に第六回卒業生を出せり又醫院進學内規を定め毎年若干名の留學生を選拔し内地及歐米に派遣す醫務比較的閑散なる冬期を利用し各地方より醫員を大連に招集して醫學講習會を開き且之を公開して廣く在滿陸海軍軍醫及地方醫師研學の便を計れり又大正三年三月藥劑員を招集して藥學講習會を開催せり而して大正四年三月末に於ける醫院從事員は醫長及醫員を合せ八十一名、藥局長藥劑員及技術員四十八名、事務長及事務員二十九名、看護婦及助産婦二百五十二名なり

▲大連醫院は露治時代の建物を應用し年々應急の增築を施すと雖も日に增加する患者の收容に堪へざるを以て本社裏手高燥の地約二萬七千坪を新築敷地とし既に地均を了し大正三年度より起工することゝなりしも時局の爲め一時中止せり又地方醫院は明治四十二年以降其建築に著手して大正二年に至り略一段落を告げたり即ち大正三年度末に於ける興業費の總額は二百萬圓に上れり而して醫院の收支は明治四十三年度に於ては差引不足額（炭坑醫院を除き）約二十五萬六千圓に上りたるもの爾來患者の增加、料金の改正並に各部の整頓と共に經營漸く順調となり大正三年度に於ては不足額十八萬七千七百餘圓に減じたり

▲會社は附屬地及其の附近に對する衞生の保持に細心注意し藝妓酌婦の健康診斷其の他衞生警察事務に關しては會社各地の醫院分院の醫員は皆都督府及領事館より囑託を受けて之に從事し殊に特種婦女の健康診斷は醫院に於て之を行ひ且つ婦人病棟を設けて此等患者を收容す種痘も亦警察と協力執行し從來は春秋二季及必要の場合臨時之を施行し來りしも大正二年より定期の種痘は春季一回に止め必要の場合臨時施行することゝせり而して之に要する費用は公費を以て支辨す又虎列拉病及猩紅熱等の流行に際しては會社は常に機宜の處置を取れり特に明治四十三年末のペスト流行に對しては會社は都督府と協同して

其全力を撲滅策に投じ之れが爲め會社の費やせし處は合計八十六萬圓に及びたり

（6）教育施設

附屬地内に於ける教育上の施設は政府命令書に規定する處にして會社の重責なれば會社は業務開始以來專ら力を普通教育に用ひ今や殆んど整備普及の域に達したり而して會社が各種學校の建設及器具等の爲に大正三年度末迄に支出せしもの約百五十三萬圓にして内南滿醫學堂三十九萬餘圓、南滿洲工業學校卅一萬餘圓、小學校其の他初等教育に屬する分八十二萬六千餘圓とす而して大正四年三月末に於て其の施設に屬するもの在滿邦人子弟の爲に設置せる小學校十七、實業補習學校二十七、女子教育に屬する實科女學校八、幼兒保育に屬する幼兒運動場十二、社會教育に屬する圖書閲覽場十二、巡回書庫貸付所十五支那人教育に屬する公學堂七、日語學堂二あり之に甲種實業學校に屬する南滿洲工業學校、專門學校に屬する南滿醫學堂を加へ通計一〇二箇所を算せり

▲小學校の設置は目下本線に在りては約三十哩毎に安奉線に在りては約四十哩毎に一小學校を有する割合なり之れに委託教育、兒童寄宿舍、無賃乘車通學、貨物列車の便乘停車驛以外一分停車等の方法を以てし約七百哩の鐵道沿線を通じて就學の方法大略備はり義務教育の制度は之を設けざるも不就學兒童は殆んど皆無の状態にあり目下尋常高等小學校を設置せるは瓦房店、大石橋、遼陽、奉天、鐵嶺、開原、昌圖、公主嶺、長春、本溪湖、撫順の十一箇所、尋常小學校を設置せるは熊岳城、海城、四平街、橋頭、連山關、鷄冠山の六箇所にして營口、安東兩附屬地の兒童教育は同地居留民團設立の小學校に之を委託せり小學校兒童數三千八十三名、學級數八十八、正教員數百一名、委託兒童數百八十八名なり又兒童寄宿舍を設置せるは瓦房店、奉天、長春、安東、撫順の五箇所にして收容兒童數百二十名舍監四名媬姆二名あり尚私人の經營に係る兒童寄宿舍の事業を補助するもの三箇所公主嶺、橋頭、連山關に於けるもの則之なり

▲附屬小學校の職員は政府より在外指定學校職員の任用解職に關する規定を適用せられて判任文官と同一の待遇を受け又其の兒童及卒業者の他の學校へ入

學轉學等に關しては市町村立小學校と同等と認めらる明治四十一年五月各小學校に始めて教育に關する勅語謄本を下賜せられたり其教育法は特に忠君愛國の志氣を鼓勵し自彊進取の性能を涵養し以て大國民の基礎を確立せんことを期し各小學校に一定の校旗を交付すると共に總裁之れを告辭するを例とせり又會社は平素小學兒童の體育に留意し冬季に在りては「スケーチング」の練習を奬勵し夏季は大連に附屬地小學校聯合水泳會を開催して水泳を練習せしめ以て身體の鍛練に資しつゝあり

▲明治四十二年七月小學教育の施設の緒に就けるを期とし附屬地內支那人兒童の教育に著手し先づ蓋平公學堂を開設せり爾來漸次擴張の方針を執り目下校數九、學生九百二十八名を算するに到れり其他明治四十三年五月附屬地各小學校公學堂に實業補習學校を附設し實業補習學校總主事の職を置き專ら同教育の刷新整理に當らしめ又附屬地小學校高等科卒業女兒の數漸く增加せるに當り土地の狀況に鑑み大正二年度以後土地の必要に應じ各地小學校に實科女學校を附設することゝし又會社は氣候風土の關係より幼兒の健康に最も留意し明治四十二年度以降小學校舍の餘裕ある場合は必要に應じ幼兒運動場を開設し專ら運動遊戲の方法に依り學齡前の幼兒を保育することゝせり

▲會社は又附屬地社會教育の一端として明治四十三年十一月以降沿線主要地に圖書閱覽場を設置し主として小學校に附設し常備圖書の外巡回書庫を編成して閱覽場に回送し又閱覽場を有せざる主なる中間驛地方に在りては小學校及驛等に於て巡回書庫貸付所を設け便宜貸出の途を開けり又大正三年十月一日を以て從來大連ヤマトホテルに使用せし社有家屋に參考品陳列所を開設せり本所は先づ當會社各課所の保管物品中公衆の參考となるべきものを陳列し漸次必要なる物品を蒐集し以て內外公衆の縱覽に供し其の參考に資するを以て目的とし他日開設すべき博物館の基礎たるべきものなり

▲附屬地に於ける小學校の施設漸く完備を告げたると共に其の卒業生にして進んで高等教育を受け能はざる者のために滿洲に於て生計を立つるに須要なる教育を授くるの途を開き會社並に滿洲工業界將た支

那内地の需用に適すべき實用的技術者養成の目的を以て明治四十四年五月南滿洲工業學校を大連に設置したり其の程度は甲種實業學校とし生徒は高等小學卒業者を收容し定員を三百二十人とし土木、建築、電氣、機械及採鑛の五科を設け修業年限を四箇年とす大正三年度末に於て生徒總數は二百四十八名に達し大正四年三月末を以て第一回卒業生を出せり又同校は大正二年十一月より補習夜學部を附設し主として晝間勞働に從事しつゝある職工竝に現業從事者に對し職業上に必要なる智識技能を修習せしむるの目的を以て工業に關する數種の學科目竝に數學、語學の授業を開始し既に修了者を出せること二回目にして在籍生徒數は其の實員に於て三百四十三名、延人員に於て六百九十七名の多數に達せり

▲滿洲に醫術を普及するは文明的使命の一端たると共に支那人綏撫の要訣にして且つ醫術の普及は醫師の養成より急なるはなきを以て會社は早く滿洲に醫學校を設くるの意あり其の調査準備を爲すこと數年屢々奉天總督其の他の支那官憲と交渉して其贊同を求め計畫の全く熟するを待ち明治四十四年六月奉天附屬地に南滿醫學堂を設立す其の學課程度は高等專門學校とし豫科、本科、研究科に分ち修業年限は豫科二年本科四年研究科一年以上とし本科學生は中學卒業生を採用するものとし支那人は此の程度の學生を得ること困難なるが故に特に豫科を置きて相當の素養ある者を採用し二箇年間日本語及普通學を授け本科に進入せしむるものとす斯くして支那醫師を養成すると同時に將來此の方面に活動すべき日本醫師を養成するは實に本醫學堂の主たる目的にして其の他一般醫學的研究殊に滿洲特有の疾病竝人種的關係を研究するも亦其の任務に屬す而して本醫學堂は日支協同の實を現はすが爲め鎭安上將軍を名譽總裁とし三、四の支那大官を評議員とし又支那側より幹事一名を出さしむ

▲本醫學堂は明治四十四年八月勅令に依り專門學校令に據ることに定められ又明治四十五年二月在學者徵兵猶豫の特典を得更に大正三年六月醫師法第一條第一項第一號の指定を受けたり學生生徒の定員は本科學生二百名、豫科生徒六十名とす、建築設備整はざる間は授業上の關係を顧慮して適宜入學人員を制

限せり大正四年三月に於ける在學中の學生生徒數は本科學生九十一名、豫科生徒五十七名とす教員は各科專門家悉く備はり大正四年三月末現在は教授專任十九名(内歐洲留學中の者二名)兼任八名(内歐洲留學中の者二名)助教授專任四名、講師專任二名、兼任四名にして其の他補助員を合し職員の總數四十五名を算す

▲南滿醫學堂南滿洲工業學校の設立維持は會社の直營にして小學校、公學堂、日語學堂、實業補習學校實科女學校、幼兒運動場、圖書閲覽場の設立は會社之に當り校舍の營造及重なる器具の設備は社費支辨とし其の維持費は地方公費區の負擔たらしめ小學校公學堂、日語學堂の授業料は之を徴收せしめず維持費の大部分は會社之を補給せり今大正三年度に於ける經常費豫算を概言すれば南滿醫學堂約十萬四千圓南滿洲工業學校約九萬圓、小學校其他約二十三萬五千圓、教育事業補助約二萬五千圓、通計四十五萬四千餘圓とす

(7) 產業施設

▲從來熊岳城苗圃及遼陽、鐵嶺、長春に於ける經理係苗圃に於て樹苗育成の傍ら多少農事の試驗に著手せるものありしが大正二年度漸く公主嶺に產業試驗場を設置し熊岳城に於ける在來の苗圃を同試驗場分場に改め以て滿洲農事改良上必要なる各種試驗に着手せり

▲公主嶺產業試驗場は專ら種藝及畜產の試驗を行ひ種藝に屬するものは在來主要作物品種改良を主眼とし肥料及新作物の適否等各種の試驗並在來農法に關する試驗を施行し畜產部にては蒙古羊の改良試驗を繼續施行せり其の他滿洲及蒙古地方の土壤、肥料、重要農作物並家畜物產等に關する調査を行ひ又附帶事業として農事氣象の觀測、農事見習生の養成等を實施せり而して其用地は十三萬四千七百七十九坪餘を有せり

▲熊岳城分場は園藝、種藝並養蠶に關する試驗、樹苗の育成等にして園藝に屬するものは主要なる果樹の品種、栽培法に關する試驗並蔬菜の品種、肥料、貯藏試驗を行ひ種藝に關して水稻の品種及栽培法、肥料等の試驗を行ひ其の他重要作物の品種及肥料試驗、工藝作物の適否試驗等を行へり養蠶に關しては蠶

種、貯藏、蠶兒の飼育試驗等にして外に桑樹品種並社立法試驗を開始したり樹苗に關する試驗にては唐松外三種類に付適否試驗を施行し樹苗育成に關しては鐵道沿線各地の植付用及各地方事務所苗圃假植用として滿洲產樹種を育成せり又滿洲及北支那地方に於ける果樹の品種、栽培方法等を調査し其の他附帶事業として果樹經濟園、蔬菜花卉樹木の見本園設置氣象觀測、見習生養成等を施行せり而して其用地總面積は十萬三千九百餘にして設備完全に近し

▲附屬地道路公園等に植樹するの目的を以て熊岳城附屬地內に苗圃を設けて明治四十二年以降此の地方に適すべき各樹種の苗木養成に着手せり次て大連常盤橋、沙河口及各地方事務所所在地に相當面積の苗圃を設けて其地方に於ける植樹に便せり是等各地苗圃の總面積は現在約五十町步にして苗木數は百二十六萬本を算せり而して沿線各地に於て苗圃にて育成したる苗木を植付けたる總數は大正三年迄に約八十三萬本此の外沿線經理係に於て他より購入の上植付けたるもの約三十七萬本にして合計約百廿萬本なり

▲其他會社は附屬地居住の農家に對し農業經營に關し諸般の獎勵をなす爲め水田經營者をして實地試驗せしむるの目的にて灌漑用井戶を掘鑿して無償貸付し或は農家に園藝上研究の機會を得せしむるの目的を以て園藝講習會及蔬菜品評會を開催し或は大連附近牛乳業者の希望に鑑み乳用種牡牛を購入して之を貸付け或は附屬地農業者の使用する農具、種苗、種畜、肥料類等の輸入又は移送をなす場合には鐵道運賃の割引を實施し又大正三年以降南滿洲鐵道守備隊滿期兵にして滿洲に永住歸農の志確實なる者には一戶六萬坪以內の農耕地を限り可成優先貸付をなし更に農業經營資本として金三百圓以內を貸付くるの途を開き尙本人又は家族の最初の渡滿に限り內地各所よりの乘船車賃割引並携帶荷物の無賃輸送を開始したり

（五）國家的施設

▲滿鐵會社は其半面に於て國家的機關の性質を備ふるを以て其經營せる業務中には堂々たる國家的施設の實質を備有する者あり即ち前記の地方經營の如き又學術を根據とする中央試驗所の如きは其最なる者

にて其他南滿醫學堂產業試驗場の如き乃至地質研究所の如き皆滿洲開發に對する遠大の意旨を含める者なり醫學堂及產業試驗所に就きては前項地方經營中に累說せしを以て玆に之れを言はず

▲中央試驗所は滿洲に於ける殖產工業及衞生上の試驗研究を爲さしむる爲め四十一年七月關東都督府に於て設立し四十三年五月滿鐵會社之を繼承せるものなり爾來會社は漸次之を擴張し其組織を改革して庶務科、分析科、應用化學科、製絲染織科、窯業科釀造科、衞生科、電氣化學科及豆油製造場を置き益々研究の步武を進め從來中央試驗所に於て爲したる調査研究に滿洲に於ける石炭及鐵鑛の分析試驗、窯業原料たる粘土及硅石の調査研究、製鹽法の調査、大豆工業の研究、高粱稈を原料とする「パルプ」製造の研究、高粱酒釀造方法竝に柞蠶製絲方法の改良及柞蠶絲染織に關する研究、水質試驗法衞生製藥化學に關する研究、其他滿洲產植物の成分研究等を主なるものとす而して研究の結果工業として成立の見込あるものは更に試驗工場を設けて工場的試驗を爲すの計畫にして則ち同四十三年四月製絲工場を新設し目下試驗中に屬し之と關聯して染織工場を設け大正四年五月新設工場を開き其第一期計畫に依り目下力織機手織機を以て試製中なり

▲陶磁器工場及煉瓦工場は共に大正三年一月設備完了し現今作業中なり就中耐火煉瓦工場は頗る良好なる製品を出し價格も亦比較的低廉にして成立の見込確實なり釀造工場は大正三年三月建築及設備成り直に高粱酒釀造の作業に從事し引續き試驗中なり又抽出法に依る豆油工場に付ては技師を歐米に派遣し研究の結果大正三年二月工場の設備完了し翌三月より作業に著手せしが豫期以上に優良なる成績を得其製品は既に市場に上り好評を得つゝあり尙大豆油より脂肪酸及グリスリンを製出するの試驗に著手し該工場を目下豆油製造場附屬工場として作業中なり

▲地質研究所は專ら滿蒙に於ける地質鑛物及應用地質諸原料の調査を主たる目的とするものにして開所以來有益なる研究を遂け爾來猶調査研究中なり

（六）社會的施設

▲滿鐵會社は實に尨大なる機關にして其使用人は大

正三年度末に於て職員四千七百二十四人、傭人一萬八千百十九人（内日本人八千四百四十、支那人九千六百七十）を以て算せり斯る多數の社員の職務の勤惰、智識の深淺、品性の高卑の如何は直接に同社事業の盛衰に關するのみならず亦た實に我民族の發展に大關係を有する者なれば會社は夙に意を茲に注げる者の如し

▲社員の待遇に就ては職員（東京支社在勤の者を除く）には一定俸給の外手當及社宅を給し又一年二期に賞與を給す社宅は職工傭人の末に至る迄（職名を有せざる支那傭人を除く）皆其身分に應じて之れを配給せり會社は社員の精神上及身體上の修養に就ても亦焦慮する所にして素養ある社員には外國の巡察留學を命じ又見習夜學校及從事員養成所を設けて下級社員養成の道を圖れり即ち見習夜學校は現に見習生として會社に使役せられ居る者の爲に職員たるの智識及品性を與ふることを目的として敎育し從事員養成所は運輸科、車輛科、電信科の三科に分ち運輸及電信科の練習生は新に社員外より之を募集し車輛科練習生は現在の從事員中より拔擢して之を敎育し以て有識にして勤勉忠實なる鐵道從事員を養成するを目的とす又同所に於ては別科として鐵道從事員たるべき支那人をも養成せり其他心身の鍛錬に就ては劍道柔道に熟練なる敎師を招聘し特に道場を設けて之を奬勵し又運動會を組織して尙武の氣風養成及び體育を努めしむ又研學の奬勵に資せんが爲め巡回書庫を置き讀書會を設け時々社員の各自をして其研究を發表せしめ或は來遊の學者名士に講演を請ひ又讀書會雜誌を每月一回發刊し各自研鑽修養の資たらしめ且つ時々會社の業務に關係ある各種の學科に付き簡易なる講義錄を刊行し社員に頒ち以て啓蒙修學の便に供す

▲又社員の生活狀態に注意し其の幸福を圖らんが爲め明治四十二年特に慰藉係なるものを設け其の本部を本社に置き全線を拾區に分ち各區に駐在員を置きて沿線各地殊に荒凉たる中間驛に在勤する者及び其の家族の寂寞を慰安し圖書を貸與し倶樂部を設備し園藝手藝其他家政上必要なる事項を傳習し映畫、講演、娛樂等の諸集會を催し以て智德、趣味の向上を圖り隨時傭人中より勤務品性共に他の模範たる可き

者を詮衡して之を表彰し一般をして歸向する所を知らしめ又慰藉事務所と連絡して青年獨身者の爲に特別なる獨身宿舍を建設し共同生活を營ましめ其の風紀を監督す既に獨身宿舍の建設成れるもの奉天、鐵嶺、長春及安東縣にして其他各地にも漸次之れを建設せんとしつゝあり

（七） 會社の財政

（イ） 資本と社債

▲會社の資本總額は二億萬圓にして之れを一株二百圓の百萬株に分ち內半額は政府の持株とし他の半額を一般より募集する事とせしが設立委員は我國當時の經濟事情の株式全部を一時に募集するの不可なるを察して明治三十九年九月より十月に亘りて十萬株（二千萬圓）のみを募集したるに申込數は一千六十六倍に達せり而して會社は其第一回拂込として募集金額の十分の一即ち一株二十圓、總額二百萬圓を拂込ましめ爾餘の所要資本は外國債に依るの方針を取りたるも事業の進歩に從ひ社債以外に資本の必要を生ずるに至りたるを以て大正三年五月一日迄に全額の拂込を終はらしめたり

▲會社は又大正二年九月一日第二回募集株式二十萬株を發行し一株に付金二十圓を拂込ましめたり即ち現在の發行株は合計八十萬株にして內五十萬株（一億圓）は政府の財産出資に係り殘額三十萬株の內第一回募集株十萬株（二千萬圓）は全額拂込濟にして第二回募集二十萬株（四千萬圓）は一株二十圓總額四百萬圓を拂込ましめたるを以て現在の未募集株は二十萬株（四千萬圓）にして未拂込金は三千六百萬圓なりしが第二回募集株の第二回拂込として大正四年十月一日一株二十圓總額四百萬圓を拂込ましめ又同年十二月一日を以て一株の金額二百圓を一百圓に分割したり

▲社債會社は前述の如く其創立當初に於て我國の經濟狀態に鑑み鐵道の改築其他諸般の施設に要する資金は主として之を社債即ち外國債に仰ぐの方針を採り其元利支拂に付ては政府の保證を受けて五分利付社債八百萬磅を前後三回に分ち英國倫敦に於て左の通り募集したり

第一回英貨四百萬磅、明治四十年七月十九日發行、發行地倫敦、

發行價格九十七、償還期限二十五箇年、年利率五朱
第二回英貨貳百萬磅、明治四十一年六月一日發行、發行地同上、
發行價格九十八、償還期限三箇年、年利率同上
第三回英貨貳百萬磅、明治四十一年十二月十六日發行、發行地同上、發行價格九十七半、償還期限大正二十一年七月二十三日、
年利率同上

右の社債額面總額八百萬磅に對し發行差額、手數料、印紙稅等を差引き會社の實收したる金額は七百四十九萬磅にして我換算金七千三百十二萬四千八百七十圓なり

▲然るに事業の進捗に伴ひ資金の增加を要し且つ第二回社債借換の爲め更に社債增募の必要を認めたるも當時の法規に依れば社債の總額は政府の引受に屬せざる株金中より其拂込金額を控除したる殘額を超ゆること能はざりしを以て政府は右の制限を擴張して資本總額と同額即ち二億圓迄募債し得べきものと改正せられたり依て會社は四十四年一月三日政府の保證と下記條件即ち發行價格九十八、利率四分五厘償還期限大正二十五年一月一日を以て第四回社債六百萬磅を倫敦に於て募集し第二回社債二百萬磅は悉皆之を償還せり第四回社債額面六百萬磅に對し發行差額、手數料、印紙稅等を差引き會社の實收したる金額は五百六十四萬磅にして我換算金五千五百六十萬三千三百二十圓なり即ち現在の社債は五分利付六百萬磅、四分五厘利付六百萬磅、合計一千二百萬磅、此換算金一億一千七百十五萬六千圓にして其實收額一億八百六十四萬二百四十二圓に對する社債差額は八百五十一萬五千七百五十八圓なり會社は猶社債二千萬圓を募集することを大正三年六月政府より認可されたるも未だ之れを發行せず

（ロ）興業費

▲會社が創立以來、本線の複線工事及安奉線の改築を主として港灣、炭坑其他諸造營物、旅館、船舶等の施設に投下したる興業費は大正三年度末迄に於て一億四千七百五十八萬八千圓に達せり今之れを類別すれば

鐵道	本線	四八、九八一、〇〇〇円
	安奉線	二四、五一七、〇〇〇
船舶		四、九七〇、〇〇〇
電氣		四、九一六、二六〇
瓦斯		一、三八三、八四七
港灣		一二、五九五、八九五

工場	六、二六一、二二四
旅館	二、〇一六、八八〇
諸建物	一一、五四一、一五九
地方營造物	四、七四〇、八〇二
土地	一〇、六二一、九八八
炭坑	一五、〇四二、一九七

(八) 各種營業の情勢

▲會社は有利なる鐵道及炭坑を經營する他の一方に於ては國家的機關として營業上には不利の甚だしき地方經營の重任に當り又海運、旅館の如き營業上に於ては決して歡迎す可き者に非らざるも會社は政府の命令と自己の職責とに顧みて其責務を盡すに努力しつゝあり今左に同社の經營する各種營業の收支を示さん

◎鐵道　は貨客共に逐年增加する好況に在り旅客は本線に於ては明治四十一年度の二百七十八萬四千圓より大正三年度の三百八十九萬四千圓に增加し又安奉線は改築以來激增殊に甚だしくして同上各年度に於て十八萬圓より四十七萬二千圓に增加せり又貨物に於ては本線は同上各年度に於て九百三十一萬圓より一千六百四十二萬圓に、安奉線は同しく二十三萬圓より一千一百二十萬圓に激增するの盛況を呈したり而して大正三年度に於ては總收入二千三百二十一萬圓、總支出八百三十四萬五千圓、利益一千四百八十七萬一千圓にして收入額百に對する支出は三十六なり

◎海運　上海航路は歐亞連絡の爲め又南支那沿岸航路も亦營利を主とするものにあらずして會社は之が爲め年々損失を受けつゝあるが大正三年度末に於ける其收入は一百五萬一千圓、支出一百二十二萬圓、損失十六萬九千圓にして收入百に對する支出は百十六なり

◎港灣　の施設は會社の最も力を盡せる處にして其營業は漸く好順に向ひ會社は利益の增加すると與に埠頭諸掛り費を減じて一般の利益を計りつゝあり而して大正三年度に於ては收入二百二十九萬圓支出百九十六萬三千圓、利益三十二萬六千圓にして收入額百に對する支出は八十六なり

◎鑛業　炭坑經營は會社の生命とする處にして出炭の增加に伴ふ販路の擴張に隨ひ其利益は激增し

つゝあり即ち明治四十一年度の收入一百四十八萬四千圓、支出九十三萬一千圓より大正三年度には收入一千四百七萬五千圓、支出一千一百八十五萬八千圓に激增し其利益は二百二十一萬六千圓の巨額に達せり即ち收入百に對する支出は八十四なり

◎電氣　は創設の四十一年度に於ては三萬六千圓の損失を招けるも四十三年度よりは營業佳良に向へり大正三年度に於ける收入は一百十萬一千圓、支出六十九萬四千圓、利益四十萬六千圓にして收入百に對する支出は六十三なり

◎瓦斯　は四十三年三月開始の翌年より營業佳良にして年々利益を擧げたり大正三年度に於ける收入二十萬三千圓、支出十一萬四千圓、利益八萬八千圓にして收入百に對する支出は五十七なり

◎旅館　は會社が最初より利益を度外にしたる施設にして毎年損失を招けり大正三年度に於ける收入二十五萬三千圓、支出三十萬九千圓、損失五萬六千圓にして收入百に對する支出は百二十二なり

◎地方經營　は會社が政府の命令に依りて負擔せる重大なる責任にして會社は之に要する諸般施設の爲めに毎年巨資を抛てり即ち明治四十年度に於ける支出二十五萬一千圓より遞增して四十四年度には一百八萬三千圓に上り大正三年度には更に二百八十六萬四千圓に增加せり而して同三年度に於ける收入一百七十七萬八千圓、支出二百八十六萬二千圓、損失百八萬五千圓即ち收入百に對する支出は百六十二なり

（九）　利益分配

▲前記各種營業收入の外會社は總體費として明治四十年度の一百三十九萬七千圓より增加して大正三年度には三百八萬八千圓を支出し又同三年度に於て社債利息に五百五十六萬四千圓、社債發行差額塡補金に六十八萬圓を支出し一方收入に於て利息收入に六十二萬四千圓あり外に雜損益勘定に於て三十九萬九千圓を損失したり今會社の總決算を觀るに明治四十年度に於ける純利益は二百一萬六千圓に過ぎざりしが爾來逐年增加して大正三年度には七百五十四萬一千圓に上れり

▲會社の大正三年度に於ける總收入は四千四百六十

七萬圓、總支出三千七百十二萬九千圓、利益金七百五十四萬一千圓にして其分配左の如し

法定積立金	三十七萬七千五十五圓
政府配當金	二百五十萬圓
政府以外株主配當金	百八十九萬三千三百三十三圓
特別積立金	二百五十萬圓
役員賞與及交際費	三十三萬五千圓
翌年度繰越金	二百五十六萬九百九十九圓

而して從來政府に配當したる金額は明治四十二年度二百五十萬圓、四十三年度百五十萬圓、四十四年度百八十萬圓、大正元年度二百萬圓、同二年度二百五十萬圓、三年度二百五十萬圓にして政府以外の株主に對する配當率は大正元年度迄は總て六分なりしが大正二年度には一分の第二配當を加へて年七分とし大正三年度に於ては二分の第二配當を加へて年八分とせり

▲會社の會計は從來一箇年を二期に分ち毎年四月より九月迄を半期とし十月より翌年三月迄を後半期とし六月及び十二月に於て株主に對する利益の配當を爲せしが會社の營業收入は運輸其他の關係上前半期と後半期とは非常の相違あるを以て一箇年の決算を二期に區分するは實際妥當ならざるを認め大正元年度より全一箇年を一會計年度（年度は四月一日に始まり翌年三月三十一日に終る）とし六月一日現在の株主に利益の配當を爲すことに改正し之れと同時に一般株主の便利の爲め明治四十五年五月三十日の勅令第百三十二號に依り十二月一日現在政府以外の持株に對し中間配當を爲すことゝし次て大正三年六月政府持株に對する利益配當が年二分の割合に達したる時は株主の拂込金に對し年二分の割合を超えざる範圍内に於て更に第二の配當を爲すことを得と定款を改正せり

（十）役員と幹部員

▲現在滿鐵會社の役員及幹部員は左の如し

總　裁　男爵　中村雄次郎（人事參照）

副總裁　工學博士　國澤新兵衞（同　上）

理事　川上　俊彥（同上）　理事　佃　一豫（同上）
理事　藤田　虎力（同上）　理事　改野　耕三（同上）
理事　樺山　資英（同上）　監事　中橋德五郎
監事　河上　謹一　監事　馬越　恭平
監事　大橋新太郎
總務部長兼事務局長　工學博士　國澤新兵衞（同上）
事務局庶務課長　久保　要藏（同上）
事務局調査課長　川村鉚次郎（同上）
總務部交渉局長　川上　俊彥（同上）
交渉局第一課長（兼）　久保　要藏
交渉局第二課長（兼）　久保　要藏
總務部技術局長心得　堀　三之助（同上）
技術局保線課長　谷　直諒（同上）
技術局土木課長　加藤與之吉（同上）
技術局建築課長　小野木孝治（同上）
運輸部長（兼）　國澤新兵衞
運輸部營業課長　西村　信敦（同上）
運輸部運轉課長　貝瀨　謹吾（同上）
計理部長　佃　一豫
計理部會計課長　安田　錐藏（同上）

計理部用度課長　秋山　清（同上）
鑛業部長　樺山　資英
鑛業部販賣課長　朝倉傳四郎（同上）
鑛業部鑛務課長　坂口　新圃（同上）
地方部長　改野　耕三
地方部地方課長　村井啓太郎（同上）
地方部衞生課長　河西　健次（同上）
工場長　工學博士　森　彥三（同上）
電氣作業所長　雨宮　春雄（同上）
瓦斯作業所長　鈴木　庸生（同上）
埠頭事務所長　楢崎猪太郎（同上）
築港事務所長　山路魁太郎（同上）
中央試驗所長事務取扱（兼）　佃　一豫
地質研究所長　木戶忠太郎（同上）
産業試驗所長　栃内壬五郎（同上）
奉天公所長（囑託）　佐藤安之助（同上）
大連醫院長（兼）　醫學博士　河西　健次
撫順炭坑長　工學博士　米倉　清族（同上）
南滿醫學堂長　山田　恭（同上）
南滿工業學校長　今　景彥（同上）
東京支社主事　龍居　頼三
秘書役　上田　恭輔（同上）

◉三井物産株式會社大連支店　大連市山縣通

（電話長一七五番　長四六〇番　長
八一四番　一一一番　一〇二七番
振替大連一、三〇三番
電略（歐文宛名 MITSUI, DAIREN.)）

營業　物品販賣、問屋、運送、代理、製造

本會社は資本金二千萬圓、積立金一千四百九十萬圓を有する株式會社にして本店は東京市日本橋區駿河町一番地に在り我國に於ける斯界の覇王として外國貿易に偉大なる貢献を爲しつゝあることは世人皆知る處の如し

本會社の沿革は明瞭の調査を缺ぐが明治九年三井組の内に國産方及銀行方あり國産方と故井上侯爵が創立せしめたる先收會社と合同して物産會社となりし如し當時の幹部は社長益田孝、副社長木村正幹の二氏にして資本金僅に二十萬圓、主なる營業は最初より陸軍御用達にて十年變亂の頃大に活動せり其他伊豆七島の産物なる乾魚、椿油類の肥料材料を取扱ひ我國肥料業の元祖を爲せり當時社内の分課に島方、米方等ありて島方は主として此の肥料を取扱へり會社が海外貿易に著手したるは明治十七年大藏省鑛山局の管下にありし三池炭坑の石炭を輸出したるに始まり續いて巴里大博覽會に絹物を出品販賣してより世界的商圏に入り爾來逐年海外に發展して今日の隆運に到れり

大連支店の開設は明治三十九年に始まるも同社が滿洲貿易に著手せし歷史は頗る遼遠なり即ち明治十八年の頃より營口に出張員を派し其後營口を支店として滿洲商務を總轄せしめしが大連には日露戰爭後の三十九年出張所を開設して寶輪焉三郎氏之れが主任となり爾來大連商界に活躍し安川雄之助氏が天津より來りて寶輪氏に代はるに及びて其勢力益々隆起し大正元年十月支店に昇格して滿洲全部を總轄する事となり終に現在處に宏壯なる事務所を新築移轉せり安川支店長は大正三年九月本店に榮轉して現支店長之れに代はり商務日に發展しつゝあるが其主なる者は輸入に於ては綿絲布、砂糖、麥粉、マッチ、木材機械類、建築材料、金物等にて又輸出に於ては滿洲特産物にして一個年の取引高は驚く可く巨額に達す

支店内に船舶部及び保険部ありて船舶部は日本郵船會社及達東汽船會社の代理店たり又保険部に於て明治、日本、東京、横濱、共同、千代田、東京海上、神戸海上、の各火災及び東京海上保険會社の代理店たり其他滿洲製粉會社製品及ソーライトを始め滿洲に於て同店の一手販賣に歸する者太だ多し而して現在本店役員及び大連支店幹部員並に滿洲各出張所長は左の如し

本店	代表取締役社長	三井源右衛門	代表取締役	三井養之助
	常務取締役	渡邊專治郎	同	福井菊三郎
	同	藤瀨政次郎	同	小田柿捨次郎
	取締役	團琢磨	同	早川千吉郎
	監査役	三井得右衛門	同	小室三吉
	同	間島與喜		
大連支店	支店長	古郡良介	支店長代理穀物肥料係主任	神成季吉
	支店長代理船舶受渡係石炭係主任	岡田省胤	支店長代理支店長附秘書	足立鐵之助
	庶務係主任	小平修二	調査係主任	國枝祐次郎
	棉類係主任	玉置菜次郎	機械係主任	堀部次郎
	雜貨係主任	石田禮助	保險係主任	山室辰之助
	勘定係主任	田中嘉三郎	出納係主任	岩島三郎
各出張所	牛莊同所長	伊藤寛	奉天同所長	江藤豐二
	鐵嶺同所長	佐々江嘉吉	長春同所長	浦保壽
	安東縣同所長	永原正雄	哈爾賓同所長	長谷川作次

又商務の世界的なる三井物産會社の中外に於ける支店及出張所は左の如し

横濱支店	支店長	北村七郎	小樽支店	支店長	平田篤次郎
名古屋支店	支店長	二神駿吉	大阪支店	支店長	武村貞一郎
神戸支店	支店長	加地利夫	門司支店	支店長	小林正直
若松出張所	所長	片岡武吉	唐津出張所	所長	小林正直
長崎支店	支店長	森田經治郎	三池支店	支店長	大熊篤太郎
口ノ津出張所	所長	大熊篤太郎	臺北支店	支店長	飯沼剛一
臺南支店	支店長	堀内明三郎	京城支店	支店長	高野省三
仁川出張所	所長	高野省三	天津支店	支店長	大村得太郎
上海支店	支店長	藤村義朗	青島出張所	所長	飯塚重直郎
芝罘出張所	所長	百瀨信好	漢口支店	支店長	野平道男
香港支店	支店長	林德太郎	福州出張所	所長	津田秀雄
廈門出張所	所長	西岡英吉	廣東出張所	所長	岡崎省藏
馬尼剌出張所	所長	三神敬長	斯土浩出張所	所長	西村重次郎
新嘉坡支店	支店長	中山晉	孟買支店	支店長	守岡多仲
倫敦支店	支店長	南條金雄	漢堡出張所	所長	石川源三郎
紐育支店	支店長	瀨古孝之助	桑港出張所	所長	永島雄治

當洋行は營口小寺洋行の分行なり營口本店は明治三十九年より貿易部を開始し四十一年に油坊の建設成れり大連油坊は四十二年の創設なり大連及び營口の油坊に於ける製造價額は一年四百萬圓、其取扱ひに屬する輸出入貿易は一年二千萬圓の巨額に達す大連の發達と與に小寺洋行の營業主腦は大連に移りたるを以て行主は多く大連に在りて此の巨大なる一切の商務を指麾し居れり（別項小寺製油所及び營口小寺洋行參照）

行主　小寺壯吉（人事參照）

主任　高橋强平

◎合名會社鈴木商店大連出張所

大連市紀伊町九番地　（電話六六七番　振替大連七四〇番）

營業　滿洲特產物輸出、綿絲布、麥粉、砂糖輸入、麥酒販賣、保險代理

本社は明治三十五年十月創立せる有名なる神戶の鈴木商店なり而して大連出張所は大正元年に開設され前記の輸出入を主とし帝國麥酒株式會社製品櫻ビール滿洲總代理店、サン火災保險會社、神戶海上保險會社代理店を兼營し又南滿汽船會社の海運業務を取扱へり

神戶本店　神戶市榮町三丁目七番地

同　支配人　西川文藏

大連出張所　主任　西川芳太郎（人事參照）

◎日本棉花株式會社大連出張所（日信洋行）

大連市山縣通四一　（電話一三四八番　電略（メンカ））

營業　綿絲布輸入

本會社は明治二十五年佐野常民、田中市兵衛氏等の創立に係る日本最舊の綿花會社にして資本金二百萬圓（拂込濟）、積立金百十萬圓を有し日本紡績原料棉花の輸入、綿絲布の輸出を主業、紡績及製油業を副業とし上海に紡績工場又漢口に大豆及棉實の製油工場あり大連出張所は大正二年五月開設し綿絲布の滿洲輸入を以て主業とす營口、鐵嶺、長春に出張員を特置せり

本社　大阪市北區中之島二丁目

社長　志方勢七

常務取締役　喜多又藏

大連出張所 主任 潮崎喜八郎（人事參照）

同 山田 穆

● 永順洋行 大連市大山通三五號地（電話 長三三九番 八六八番）振替大連一四五番 電略（エ）又（エイ）

營業 綿糸、麥粉、砂糖、雜貨、孔雀印太腿子、燐寸、紙類、特產物、保險代理

當洋行は個人經營にて明治三十八年六月開設當初營口、遼陽、奉天に支店を名古屋、大阪に出張所を有せしが後之れを廢して奉天にのみ支店を置き其の他は出張販賣及代理店となし販路擴張に努めつゝあり

營業主 長井九郎左衛門 原籍 三重縣松阪町

總支配人 長濱 歡助（人事參照）

● 合名會社増田大連出張所 大連市寺內通一號地（電話一五一番）

營業 雜穀並に肥料販賣

本社は横濱市本町四丁目に在り資本金五十萬圓を有する有名なる合名會社なり

大連支店は大正二年二月の創設にして當時支配人として倉澤榮氏來任せしも大正四年八月辭任し友野正一氏代りて支配人となる

大連出張所

支配人 友野 正一 岡山市上西川町一四九番地、二十九歲、夫人よし子二十三歲、男一名

● 株式會社大倉組大連出張所 大連市紀伊町三五號地 電話 長二二八番 四三五番 振替大連九〇〇番 電略（タル）

營業 輸出入貿易

當出張所は在東京の有名なる大倉組の出張所にて明治四十一年開設す別に大倉組土木部あるも當出張所と關係なし同部は專ら土木業界に活躍しつゝあり

主任 北村五十彥（人事參照）

● 湯淺洋行 大連市山縣通二五號地 電話（長三三四番 長三三五番 長五二七番）

營業 麥粉、砂糖、麻袋、綿糸布、大豆、豆粕、豆油、雜穀、肥料、其他諸雜品販賣

本店は神戶市榮町三丁目にあり湯淺竹之助氏の經營せる有名なる貿易商店なり

大連支店は明治三十九年四月に開設さる

大連支店主任 河合 藤七（人事參照）

◉光明洋行　大連市大山通三六號地（電話長六〇一番 一五九番 六六四番 電略（メ））

營業　綿絲布、雜品、絨類、並に寫眞機械販賣及寫眞撮影

當洋行は明治四十一年七月の創業にて初め株式組織なりしが大正四年解散と同時に現營業主繼承して經營せり

營業主　遠藤　浩太　（人事參照）

◉臼井洋行　大連市東郷町一一號地（電話長一六五番、二六二番 電略（ウス）又（ウ））

營業　特產物輸出

當行主臼井熊吉氏は明治三十九年四月より大連に於ける商務の諸調査を遂げ同年八月開店、陸軍の米、大麥、乾燥品類約二百萬圓の拂下を受けたるを手始めとして傳來特產物輸出に著手し四十三年某外國人に五萬噸の大豆を特約輸出し其後每年日本及外國に約一千萬圓の特產物を輸出し斯業の卒先者又斯界の大王として名聲隆々たりし處大正四年に入り歐洲戰爭に因する船繰不如意の結果契約先の契約不履行の爲め暴かに大損失を招き業務一蹶せしが其後漸次整理を了へて復た舊の如く業務を繼續しつゝあり

營業主　臼井　熊吉　（人事參照）

長春出張所　新市街　主任　桝井仙太郎

各地代理店　遼陽、奉天、開原、公主嶺

◉角田支店　大連市大山通二丁目六四號地（電話三八六番　振替大連八一番）

營業　支那人向綿布類及足袋紐の卸販賣

本店は愛知縣中島郡六輪驛前に在り角田市郎兵衛氏の個人經營にして大連に支店、又南滿洲及山東各地に大取引店あり

大連支店は明治三十八年七月の開設にして良賈深藏の手堅き營業振りなり

大連支店主任　上杉　藤夫

外店員八名

◉原田洋行　大連市山縣通五三號（電話六四三番）

營業　滿洲特產物輸出、一般輸入業。滿鐵會社用達

當洋行は個人經營にして明治四十一年六月設立されたる

行主　原田光次郎　（人事參照）

◉油谷出張所　大連市山縣通四五號地　（電長一一六四番 電略（ユ））

營業　滿洲特產物取引

本店は神戶に在り油谷重三氏の經營にして明治二十五六年頃開始せる貿易業の老舖なり

大連出張所は明治三十九年の開設にて特產物取引を專業とす

大連出張所　主任　平田榮吉

◉藤田洋行　大連市山縣通一一二號　（電話長一六九番 振替大連一四七三番）

營業　雜貨貿易、銃砲火藥販賣、月星印サイダー製造販賣

當行は藤田禮造氏の個人經營なり明治四十四年三月始めて芝罘海關街に開設され同年五月大連丹波町七號地に出張所を開きしが同十月に到り大連を本店に芝罘を出張所に改め大正元年冬安東縣に出張所を、又同二年十月奉天に支店を創設せし處大正三年七月船舶、銃器等の賣掛金不回收の爲め業務一蹶し終に安東縣及芝罘の出張所を閉鎖するに到れり爾來店務の整理に着手し大正四年二月より再び開店し青島に支店を、又長春に出張所を開設し漸次從來の信用を恢復しつゝあり

當行は前記營業の外、東京秋葉商店護謨製品及人力車附屬品滿洲山東の一手販賣、新手炭北支那特約販賣を爲し又大祥源なる商號の下に高粱酒製造を爲しつゝあり

營業主　藤田禮造　（人事參照）

庶務主任　武藤彌六　販賣主任　山中勝吉

青島支店　小港通一號地　主任　吉富豐作

奉天支店　新市街西二條十號地　主任　森環

長春出張所　北門外　主任　池田權七

◉泰東公司　大連市山縣通四五號地　（電話四五九番）

營業　輸出入貿易

當公司は個人經營にて營業主は明治二十五年より四十四年迄軍隊に服務し四十四年六月渡連當公司を開設し滿洲主要物產の輸出並に精米販賣業に從事し大正三年十二月青島北京町一四號地に支店を設け軍隊及諸官衙の御用達並に家具及び裝飾類の製造販賣、其他機械油、鐵道用品、船具用品販賣、土木建築請負、運送通關代辨業を開始せり

營業主　伊藤榮證　福井縣坂井郡網出木村澤二六番地 明治五年九月二十三日生、夫人賴子二十七歲、男二名

金融、信託、倉庫業

◉橫濱正金銀行大連支店　大連市大山通一號地

（電話 長一三〇番 支四七番 八二〇番 七六二番（大連埠頭內出張所）電略和文ショウキン、歐文[illegible]）

營業　一般銀行業、中央金庫事務取扱、特種貸附

本店は橫濱に在り資本金四千八百萬圓、拂込金三千萬圓、積立金二千萬圓、神戸、東京、長崎、大阪、倫敦、里昂、紐育、桑港、ロスアンゼルス、布哇、孟買、カルカッタ、シドニー、香港、上海、漢口、青島、天津、北京、及滿洲各地等に支店出張所を有し我國に於ける爲替銀行の覇王たることは世人知る處の如し

正金銀行の滿洲金融界に現出せしは明治三十三年一月營口に其支店を開設したるを嚆矢とす然れども當時猶行務の發展を見るを得ざりしが日露戰役の開始せらるゝや三十七年七月青泥窪出張所を設け金庫事務を取扱ふ唯一の金融機關として一般銀行業務を營み三十八年七月大連支店に昇格せり爾來同行の行務一時に擴張し四十二年現在の壯麗雄偉なる事務所を新築するに到れり

同行本來の業務は外國爲換の取扱にあり然れども滿洲にありては特に普通銀行業務を營み兼て國庫金事務を取扱ひつゝあり日露戰役中我軍に於て發行したる同銀本位の軍用手票は一時其流通高巨額に上りしが戰後政府は正金銀行をして之が回收に當らしめ同行の營口支店は一覽拂手形を發行して著々其效を收め今や軍用手票は殆んど市場に其影を止めざるに到れり蓋し戰爭後滿洲大豆の販路海外に開け輸出貿易逐年增加すると共に輸入貿易も亦著しき發達を見るに至り殊に滿鐵會社の經營施設の伸張、邦人の經濟的勢力の發展較著なるものあるに際し同行が殆んど唯一の爲替銀行として輸出入業者の活動を幇助するの外一般銀行業務に於て滿洲經濟界の發展に資したるの功や多大なるへし

新植民地の常態として興產事業に對する適當なる金融機關を缺如し金利高きが上に貸借期間短少なるがため確實なる企業家は到底斯る資本に倚賴すること能はざるを以て政府は特種銀行設置に代ふる臨機の便法として明治四十三年七月より同行をして特種貸

付の業務を開始せしめ之に要する資金三百萬圓は之を政府より同行に貸出したるより滿洲各地の金融は爾來大に緩和せられ金利の如きも大連市場に於ては年一年低下するに至れり而して今や之が資金に充當せられし三百萬圓は殆んど其貸出を終り各方面より增資に關する意見又は請願の出づるもの少からず以て如何に特種貸付の滿洲金融界を融和せしかを推するに足る可し

三十九年四月當業者より大藏、遞信兩大臣に對し我對滿輸出品の販路を開拓せんには委託販賣又は長期掛賣の方法に依るの外なきを以て之に對し特別の便宜を附與せられん事を出願し其結果同年五月以降我主要輸入品の荷爲替に對しては正金銀行に於て四ヶ月拂四分五厘の特典を與へ若し輸入品を一手に年額五百萬圓以上輸入するものには更に五厘を低減することゝせり而して此特典に浴すべき品種は當初綿絲綿布に限られたるも後、砂糖、燐寸、セメント、麥酒、海產物、木材並に重要輸出品は皆之に均霑することとしたり爾來此荷爲替の特例は我對滿貿易に貢獻すること頗る多大なり

本店	頭取	井上準之助	副頭取	山川勇木
	取締役	相馬永胤	取締役	園田孝吉
	同	木村利右衛門	同	原六郎
	同	小田切萬壽之助	同	川島忠之助
	同	岩崎小彌太	同	巽孝之丞
	監査役	淺田德則	監査役	若尾民造
大連支店	支配人	井上一男	副支配人	島芳藏
	支配人代理	土倉四郎	支配人代理	前田忠
	出納主任	戸塚金三郎	計算主任	神田重一
	貸付主任	奥田保藏	金庫主任	櫛橋貞通
滿洲各地	牛莊支店		支配人	本郷榮
	奉天支店		支配人	伊東小三郎
	鐵嶺出張所		主任	武內和吉
	長春出張所		主任	森本啓太郎
	安東縣出張所		主任	平塚半次郎
	哈爾賓出張所		主任	津山英二

株式會社 正隆銀行

大連市大山通一四號地

（電話長三九八番　六八一番　一二四五番　電略（セ））

營業　一般銀行業、関東都督府地方費取扱

本行は滿洲に於ける日支合辦金融機關の嚆矢にして三十九年七月二日深水十八氏發起の下に其本店を營口に開設せり、當時の資本金は日人（四名）十萬圓、清人（二名）六萬圓、計十六萬圓、其半額を拂込ましめ對外の責任を明にする爲め滿國人設立の名義を以てし日本人は匿名とし營口軍政署の認可を受け出資者は其拂込金額に對する有限責任とし別に無限責任社員として深水十八氏をして專ら其業務を擔當せしむる旨を明示せり幾干もなく資金の缺乏を促し更に清人より十萬圓、日人より六萬圓を拂込ましめ同年十一月十一日總會を開きて增資を議定したり爾來四十二年二月支店を大連に、又四十三年一月出張所を奉天に設立し銳意其經營に任せしも成績豫期の如くならず四十四年六月二日資本銀二十四萬圓の內九萬圓を減額して內部缺損の補充を爲すと同時に銀十五萬圓を安田家より借入れて資本を銀三十萬圓に增加し同月五日本店を大連に移つし同八月二十八日更に金七十萬圓を安田家より增加して資本を金銀合はせて一百萬圓として登記を受け同行は全く安田家の經營する處となれり

正隆銀行は上記の如く日露戰後日支合辦の新事業として專ら滿洲の金融を調和し併せて日支實業家の融洽聯接を圖るの機關として深水十八氏發起の下に當時の與倉營口軍政官、黑澤副稅務司等の多大なる應援の下に成立したる者なるも深水氏は中途にして躓き同行の經營權が安田家に移つるや同家は豐富なる資本及經驗を以て特に老練なる原田現主任を特派して專ら局に當らしめ從來の本店營口を支店に改め更に奉天、開原、長春、旅順に漸次支店を設け商業銀行として一般業務を營み日支商人の金融機關たるの外貯蓄預金部を開設して零細なる貯蓄に便し一方關東都督府は四十四年より五箇年間資本金に對し年六分の補助金を交付し地方費に屬する現金の取扱を開始せしめたれば同行の財源は日に益々充實せり同行が有する小銀貨勘定は支那商人及之と取引する邦商の頗る便とする處にして今や正金鮮銀と相俟て滿洲

村の業務を開拓せしめ之に要する資金三百萬圓は之を政府より同行に貸出したるより滿洲各地の金融は經營大に疏通せられ金利の如きも大連市場に於ては年一分低下するに至れり而して今や之が資金に充當せられし三百萬圓は總べて貸出を終り各方面より資付に關する意見又は請願の出づるもの少なからず以て特別貸付の[illegible]

[illegible]當業者より大連、[illegible]に對し救品の販路を開拓せんには[illegible]法に依るの外なきを以て之に對し特別の便せられん事を出願し[illegible]品の資寡等に對しては之を[illegible]に於て四ヶ分五厘の特典を與へ若し輸入品を一手に年額[illegible]圓以上輸入するものには更に若干を低減すし[illegible]而して此特典に浴する品種は當初棉絲[illegible]後、砂糖、燐寸、セメント、麥[illegible]輸出品は皆之に均霑する[illegible]貿易に資

本店	頭取 井上準之助	副頭取 山川勇木	
	取締役 相馬永胤	取締役 園田孝吉	
	同 木村利右衛門	同 原六郎	
	同 小田切萬壽之助	同 川島忠之助	
	同 岩崎小彌太	同 [illegible]	
	監査役 津田 [illegible]	監査役 [illegible]	
大連支店	[illegible]	[illegible]	
滿洲各地	[illegible]	[illegible]	

[illegible]式正隆銀行　大連市大山通一[illegible]

（電話長三九八番　六八一番　一二四五番
電略セ）

[illegible]業　一般銀行業、關東州[illegible]方[illegible]取扱

[illegible]洲に於ける日支合辦金融機關の嚆矢にして
[illegible]十七月二日深水十八氏發起の下に本店を營
[illegible]せり、當時の資本金は日人（四名）十萬圓、
[illegible]六萬圓、計十六萬圓、其半額を拂込ましし
[illegible]

し同月五日本店を大連に移し同八月二十八日更に
金七十萬圓を安田家より増加して資本金[illegible]合は廿
て一百萬圓として登記を受け同行は全く安田家の經
營する處となれり
正隆銀行は上記の如く日露戰後日支合辦の新事業と
して專ら滿洲の金融を調和し併せて日支貿易の[illegible]
合辦銀行を圖るの機關として深水十八氏經營の下に當
時の[illegible]日軍政官、黑澤[illegible]務司等の多大なる[illegible]
援の下に設立したる者なるも深水氏は中途にして[illegible]
を同行の經營權が安田家に移るや同家は[illegible]富なる
[illegible]

本店
[illegible]
監事　伊[illegible]

大連支店
支店長　大[illegible]
代理爲替係主任　植原　[illegible]
庶務係主任　伊藤　[illegible]

金融界の重鎮となり其營業は常に順潮にして大正四年上半期の決算に於て金銀の株共に一割宛を配當せり

同行は日獨戰爭以來我國力の發展に伴ふ行務の擴張を企て大正四年夏より資本金二百萬圓を增加して從來の資本の銀三十萬圓金七十萬圓計一百萬圓に加へて三百萬圓となす可きを計畫し同年十二月初旬總會を開きて之れを實行する事とせり此擴張に伴ふ活動の第一歩として同年十二月一日より天津に支店を開設したり

本店	取締役頭取	安田善三郎	常務取締役	原田虎太郎
	取締役	李　序園	同	岡部　次郎
	同	安田善八郎	同	永瀧　久吉
	監査役	安田　善助	監査役	姜　立　堂
	同	伊　臣　眞		
	支配人	川澄　末吉	副支配人	松村久兵衛
	貸付課主任	松本　正平	爲替課主任	池田季之輔
	預金課主任	濱田邦太郎	計算課主任	藤崎　四郎
	出納課主任	神立彌太郎	庶務課主任	岩下貞太郎
地方	旅順支店長	河島　義人	營口支店長	石塚　英二
	奉天支店長	高木　成德	開原支店長	林　國　彦
	長春支店長	三　宅　圓	天津支店長	三雲　申一

株式會社 朝鮮銀行大連支店

大連市大山通四一號地　（電話長二一五番　長一四〇〇番）（電略（　）振替大連）

營業　一般銀行業

本店朝鮮銀行は京城に在り同行の創業は明治十一年東京第一銀行が釜山に支店を設けたるに始まり卅七年京城に總支店を開き普通銀行の營業と共に同銀行券の發行權を得韓國唯一の金融機關となり四十二年十一月韓國銀行設立と共に第一銀行より諸特權を引繼ぎ次で日韓併合と共に其名稱を朝鮮銀行と改稱せり現在資本金一千萬圓（全額拂込濟）、銀行券發行高二千二百三十六萬二百三十圓にして其の朝鮮に於ける位置は恰も内地に於ける日本銀行に等しく堂々たる親銀行の威望は同行京城本店の壯麗なる外觀と相匹似す

大連支店は大正二年八月出張所として開設されたり時の同行總裁故市原盛宏氏滿洲視察の上支店設置の必要を認め同行金券を滿洲に流通せしめ漸次滿洲に於ける通貨を金券に統一するの偉大なる目的を以て同二年七月奉天に、同九月長春に大連を合せて三出

張所相前後して開店し爾來營業の成績長足の進歩を爲し三年二月四平街に四年九月開原に派出所を設置せり大連出張所は中村光吉氏之れが所長として大正三年十月より滿洲各出張所の後見役として之れを監督せしが大正四年十二月六日より支店に昇格して滿洲各出張所並に從來滿洲の管轄外に在りし安東出張所をも總轄する事となり中村氏は本店に榮轉して現支店長は本店出納局長より來りて就任せり

當支店は開業の當初より一般銀行業務を取扱ひ特に特産物の貸出に重きを置き今や滿洲に於ける金融機關の一として重要なる位置を占むるに至れるのみならず貸出高の增加に伴ひ優麗なる同行金劵の流通極めて圓滿にして近來巨額に達し目下滿洲に散在せる者約二百五十萬圓を算するに至り同行の行是とする處の金劵流通の目的を達しつゝあり

本店	總裁事務取扱理事	水越理庸	理事	三島太郎
	理事	木村雄次		
	監事	伊藤長次郎	監事	服部金太郎
大連支店	支店長	大田三郎	次席	安田弘
	代理爲替係主任	榊原健	調査係主任	片桐篤太郎
	庶務係主任	伊藤榮	預金係主任	服部岱三
	貸付係主任	原田昇	支拂係	藤井陽一
	收納係主任	江田瀰七		
滿洲各出張所	奉天出張所	所長	小西春雄	
	長春出張所	所長	松原純一	
	安東縣出張所	所長	阿部讓	
	四平街派出所	主任	後藤丸	
	開原派出所	主任	都留昭	

◎滿洲殖産株式會社（大連市愛宕町 電話三七三番）

營業 貸金、信託、仲介併に製鹽及農事

本社は滿洲産業の開發を促進せしむる爲め民間企業家に對して資本の供給を容易ならしむるの外自ら殖産的事業を經營して之が振興を講ずるの目的を以て大正二年七月中村再造(京城)、村岡角輔(大連)、森勝次(京城)、山中庄次郎(廣島)諸氏を始め京城及大連に於ける資産家の有志相謀り資本總額五十萬圓(一萬株一株五十圓)四分一拂込の十二萬五千圓を以て其名稱を滿洲殖産株式會社とし諸貸付金、製鹽及農事經營信託金の取扱及其貸附、土地建物賣買仲介並管理、各種商品委託販賣其他之に附帶する一切の業務を營む爲め設立せられたるものにして本店を大連に置き

次で支店を旅順に開設したり
爾來年を經る二星霜、大正四年九月末日に於ける第四期營業報告によれば諸貸付金、十七萬八千五百四十四圓餘にして動産不動産を擔保として堅實なる貸出をなし相當の利益を擧げ居るも、金利の歩合低廉ならず又事業部に於ける製鹽、農事經營の見聞に價するもの尠きが如し

取締役社長　中村再造
專務取締役　村岡角輔
取締役　林田金次郎
監査役　森　勝次
取締役　石本鏆太郎
監査役　古城梅溪

▲又同社株主中滿洲に於ける重なる者は
村岡角輔（大連）　宇佐川利貞（大連）　和田篤明（旅順）
市田三郎（營口）　岩間芳松（大連）　小田切豐次（大連）
河合美雄（大連）

◎株式會社大連銀行

大連市伊勢町一八號地
電話八七〇番

營業　一般銀行業

當銀行は大正二年一月の創立にして資本金十五萬、全額拂込の株式會社なり初め大連貯蓄銀行と稱せしが大正四年七月一日大連銀行と改稱せり大正四年上半期決算に於ては年八分五厘を配當したり

專務取締役　長濱敏介（人事參照）
取締役　佐藤至誠（同上）
同　小島鉦太郎（同上）
同　山田實吏　支配人　鈴木新五郎
監査役　萬玉惣太郎（人事參照）
同　土橋義助（同上）
同　辻慶太郎（同上）

當銀行は大連に創設せられたる最始の銀行にして其株主は市中の有力者を網羅せるが其内百株以上は左の如し

長濱敏介（二〇〇株）　山田三平（一七〇株）
飯塚松太郎（一二六株）　鈴木新五郎（一二五株）
井上伊次郎（一〇〇株）　小島鉦太郎（一〇〇株）

營業部長　古財治八　熊本市南新坪井町　士族
明治十一年八月生夫人ゆく三十五歳

◉大連貯金株式會社

大連市吉野町二丁目二二號地　電話四八七〇番

營業　金融、幷に信託

當會社は資本金十萬圓（四分の一拂込）の株式組織にして大正二年十一月舊共信貯金合資會社を繼承し中流以下の金融機關として設立せられたるものなり目下積立既成額一百十萬圓、三千圓會三組、二千圓會一組、一千圓會七組、五百圓會五組、三百圓會一組を有し會員數は一千百名に上れり

社長　大神九八郎
取締役　增井梅造
同　土橋義助（人事參照）
同　森谷重八
同　箭田繁福
監査役　山田三平（人事參照）
同　鐵谷政造
社長代理　山本龍太郎

◉滿洲貯金合資會社

大連市越後町五一號地　電話二四八番　振替大連　番

營業　金融、幷に信託

當會社は先きに二年以來營業せる共立貯金合資會社大連支店の業務を繼承し大正四年四月成立せり共立貯金は大正二年六月資本金五萬圓を以て開始し（本店は福岡）積立會員より會金を募集して之れを貸附するを業務としたり元來本會社は業務擔當者たる川上賢三氏の發起に由り相知親交の人々商議成立したるものにて爾來社員間常に圓滿和協し益々組織の鞏固を致しつゝあり

業務擔當社員　川上賢三（人事參照）　會計主任　田村彦三郎

◉株式會社龍口銀行大連支店

大連市奥町二五號地（電話二二二八番）

營業　銀行業

當銀行は山東滿洲間の貿易の伸暢を圖るの機關とし大正二年三月田中末雄、堀内良弼、菊地吉藏、岩城卯吉、榎本鎌七郎、河邊勝の諸氏が山東出身の支那人と協同創立したる株式組織にして本店は龍口に在り當初資本金三萬圓（半額拂込）を以て開業せしが大正三年三月に到り十萬圓（五萬圓拂込）に增資したり而して大連支店は大正二年五月八日紀伊町に於て開始せしが同年七月現地に新築成りて移轉せり營業は

殆と全部對支那人の取引なり青島に支店あり

總　辦　李子如
董事兼事務董事　王惠堂
董　事　張欽
同　張松山
同　曲譬如
監　事　田中末雄（人事參照）

●大連取引所信託株式會社

大連市軍用地區二號
（電話六二〇番 七九一番 八八九番）

營業　特産物取引の信託

當會社は資本金一百萬圓、株數二萬株、一株金五十圓、第一回拂込額金二十五萬圓、の株式組織にして諸積立金二萬九千九百圓、營業保證金十五萬圓を有す

世界的商品として逐年發達の途にある滿洲重要物産取引の圓滑と確實を期し且つ其利便と將來の發展を圖る爲め官設大連重要物産取引所の設置せらるゝに當り其賣買取引の履行を擔保し且つ精算及び受渡業務を取扱ふ可き專屬機關設立の必要を認め滿洲重要物産同業組合先づ本會社の設立を發起し大正二年五月十五日を以て株式を募集し次いで同年六月十九日創立總會を招集し茲に本會社の成立を見らるゝに至れり爾來官設取引所と兩々相俟つて滿洲特産物取引の圓滿なる發達を助長しつゝあり

營業成績は設立以來累年好況を呈せり即ち第一期間（自大正二年六月十九日至同年八月三十一日）は營業未開始なりしを以て之れを措き第二期間（自大正二年九月一日至大正三年八月三十一日）に於ては純益金六萬四千餘圓を得て株主配當率年一割二分、積立金一萬六千五百圓に達し第三期間（自大正三年九月一日至同年十二月三十一日）に於て純益金三萬三千餘圓、株主配當率年一割二分、積立金二萬九千九百圓の好況を示し本期も亦た引續き營業良好なり

專務取締役　柴田虎太郎（人事參照）
常務取締役　野津孝次郎（同　上）
取締役　相生由太郎（同　上）
取締役　郭學純
同　遠藤裕太（人事參照）

監査役　長濱敵介（同上）
同　李升海
監査役
支配人　小澤新之輔（人事參照）

當會社大株主（二百株以上）の氏名住處を左に示す

株數	住所	氏名
一、六八五	大連	相生由太郎
一、六二〇	山口縣	武田隆夫
一、〇〇〇	營口	小寺壯吉
九一二	大連	長濱敵介
九一二	同	野津孝次郎
九〇〇	同	紫田虎太郎
八五〇	同	高橋強平
七〇〇	同	古澤丈作
五三〇	營口	菊地吉藏
五〇八	大連	迫田彦助
五〇〇	同	倉澤榮
五〇〇	東京	望月軍四郎
四五〇	大連	原田光次郎
四四〇	東京	川部孫四郎
三八〇	大連	郭學純
三八〇	長春	田原稔
三七〇	大連	山本爲吉
三二四	大連	松村久兵衛
三〇〇	同	山善逝
二四〇	熊本	河西琴
二〇〇	大連	山口壽
二〇〇	大連	牛作周
二〇〇	奉天	伊東小三郎

◉大連起業倉庫　大連市山縣通五二號地（電話一〇八四番）

營業　倉庫業

當起業倉庫は個人經營にて明治四十二年十一月三日の開設に係り煉瓦二階建築の三棟、建坪五百坪の設備ありて大連に於ける唯一の倉庫專業者なり

營業主　小島鉦太郎（人事參照）

◉田中倉庫　大連市加賀町一八號地（電話四二七八番　一五〇七番）

營業　倉庫業

當倉庫は明治四十二年の開設にして大連に於ける倉庫業の嚆矢なり煉瓦造り五棟、木造二棟、空地千六百坪を有し商品預入高一ヶ年平均六十萬圓乃至八十萬圓内外とす青島に支店を有す

營業主　田中末雄（人事參照）
主任　鈴木卯之吉（同上）

海運、運送、問屋業

◉大阪商船株式會社大連支店

大連市大山通二丁目六九號地　（電話長二二〇番 九四七番 四四〇番（埠頭） 電略（セウセン））

營業　海運

本社は大阪市川口に在り明治十七年五月十一日資本金百二十萬圓を以て組織せられたる株式會社なり創業當時は微々たる瀬戸内海の一汽船會社に過ぎずして其經營又至難なりしが二十一年政府の保護を受くるに至りしより漸次順境に向ひ日清戰役後著しく面目を改め更に日露戰役後大發展を見るに至り今や拂込資本金千六百五十萬圓、百十一隻、十八萬噸の汽船を有し東は亞米利加、西は印度に至る東洋の各港に亘りて四十餘線の定期航路を經營し其延長七萬二千餘浬に達せり而して航路の重もなるものは米國、印度、臺灣、南支那、北支那、大連、朝鮮、浦鹽、樺太及内地航路にして使用船總數（借入船を加へ）百三十八隻、二十二萬八千餘噸、支店二十二ヶ所、出張所八ヶ所、外に代理店及荷客扱店百八十六ヶ所の多きに達し大正二年度に於ては純益金三百二十三萬七千餘圓を擧げ我海運に於て日本郵船會社と共に覇を東西に稱せり

大連支店は明治三十八年開設せり會社は三十七年の日露開戰中開港の當初より日滿間の航海を始め三十八年四月政府の補助を得てよりは定期航海を開始し事務所は北大山通りに在りしも三十九年末現在處に移轉せり支店長は初代前原嚴太郎氏より金島文四郎、深尾隆太郎の二氏を經て現支店長は四十一年六月就任せり會社は開航以來、勉めて良船を船繰りして同航路に當て以て日滿交通の便を資けて滿洲の開發を圖りたるが近く更に此の航海の爲めに特製せし哈爾賓丸（五、一六九噸）の巨船を往復せしめ居れり同船は構造設備共に堅牢壯麗を極め頗る貨客の滿足を博せり

現在同會社の大連に關する航線は左の如し

◎大連航路（大阪、大連間）（毎週二回）ハルビン丸（五、一六九噸）　臺中丸（三、三一九噸）　臺南丸（三、三一一噸）　嘉義丸（二、五〇八噸）

◎横濱大連線　（横濱大連間）　（毎月二回）

潮州丸（一、六七〇噸）　福州丸（一、四七三噸）

（一）朝鮮航路（長崎、大連間、朝鮮經由）（毎月四回）

城津丸（一、二四四噸）　安東丸（一、二四四噸）

安東丸（八〇三噸）

（二）南支那航路（打狗、天津線、大連寄港）（毎月四回）

新高丸（二、六五七噸）　基隆丸（一、五六九噸）

安平丸（一、六九八噸）　湖北丸（二、六一〇噸）

現在の本社重役及大連支店員は左の如し

本店	取締役社長	堀　啓次郎	取締役副社長	山岡順太郎
	取締役	加福力太郎	取締役	豐田善右衛門
	同	寺西　成器	同	岡部彥太郎
	監査役	野元　驍	同	範多龍太郎
大連支店	支店長	石崎震二（人事參照）	次席	大津久之介
	輸入掛	岡部　千熊	輸出掛	磐長谷恒太郎
	會計掛	加藤　輝威	船客掛	藤井　敬三

◉南滿洲汽船株式會社

大連市紀伊町一九號地鈴木商店内（電話六六七番）

營業　海運

本會社は關東州船籍令に依り大正二年五月二十三日成立したる資本金一百萬圓全額拂込濟の株式會社なるが實は神戸鈴木商店の附屬船舶部にして株式は全部同家の所有する所に屬す

所有汽船は帝國丸、報國丸、靖國丸、富國丸、建國丸の五隻何れも五千噸級にて歐洲及濠洲方面の航路に就けり

取締役社長	鈴木岩次郎	取締役	井田　亦吉
同	森田　葆光	同	柳田　富松
同	松尾小三郎	監査役	西川　文藏

支店　神戸榮町三丁目鈴木商店内

出張所　シンガポール

◉遼東汽船株式會社

大連市山縣通　三井物產會社大連支店内

營業　海運

當會社は大正元年十二月八日資本金二十五萬圓（株數五千株）を以て船舶航運業經營の目的を以て設立さる所有船舶五艘は何れも遠洋航海に從事す當會社は關東州船籍令に基き三井船舶部所屬の汽船を以て組織せる者にて同船舶部は其經營管理方を三井大連支店に委任せり

取締役　古郡　良介（人事參照）同　川村眞次郎
同　藤村　義朗　同　田中　文藏
監査役　福井菊三郎　同　神成　秀吉（人事參照）

●大連汽船株式會社

大連市山縣通二丁目二六番地（電話九六四番　六六三番　二一七五番）

營業　海運、倉庫

當會社は資本金五十萬圓全額拂込の株式會社にて大正四年二月十日設立せり其前身は北清輪船公司と稱し明治四十三年川邊、田中二氏の組合組織なりしが四十五年一月大連汽船合名會社と改稱せり本年二月十日新に株式會社成立し滿鐵會社出資の下に合名會社の全部を繼承し同時に合名會社を解散したり

從來滿鐵會社は北清輪船公司時代より船舶其他を以て同事業を補助せしが海運伸展の時勢に鑑みて大に其發展を策せん爲め重要社員の名の下に這般出資したる也同會社は海運業と與に倉庫業を兼營し天津（獨逸租界）及安東縣（財神廟街）に出張所を開設せり

會社の重もなる航路は主として大連を中心とする沿岸航路に在り即ち都督府の命令線には大連安東大連天津線（開河中は毎月四回）大連秦皇島線（結氷中は毎月三回）及大連旅順登州龍口線、大連柳樹屯線、大連貔子窩線あり其他命令航路以外には大連青島線、大連青島上海青島天津大連線あり

取締役社長　田沼義三郎（人事參照）取締役　河邊　勝（同上）
同　上　田中　末雄（同上）　同　上　久保　要藏（同上）
同　上　秋山　清（同上）　監査役　川村鉚次郎（同上）
監査役　高木鉄太郎（同上）　支配人　塚本貞次郎（同上）

●松茂洋行

大連市東郷町二丁目一四番地（電話二五九番　長五一五番）

營業　海運

當洋行は明治三十五年始めて營口に開設し同三十九年大連に移轉したり行主は大連汽船會社及大洋汽船會社の重役にして大洋汽船の事務は本行内にて取扱へり本業は海運にして主として内外汽船の取扱を營むの外別に代理部に於て東洋海上保險及大同生命保險の代理を兼營せり

營業主　河邊　勝（人事參照）　支配人　後藤長七（同上）

◉大洋汽船株式會社　大連市東郷町松茂洋行内（電話長五一五番）

營業　海　運

當會社は大正四年五月十五日河邊勝氏其他在東京の株主により資本金十萬圓を以て創立せらる所有汽船は日連丸二千噸、日朗丸二千七百噸の二隻にして何れも南洋航路なるが大正五年五月迄の契約を以て神戸岡崎商會に貸與しあり

社長兼專務取締役　河邊　勝（人事參照）

◉田中商會　大連市加賀町一八號地（電話長二一七八番）

營業　海運及船舶代理、倉庫並石炭販賣、保險代理

當商會主は明治三十五年芝罘に於て店舗を設け船舶業を營みたりしか三十九年大連に轉來し同時に材木商を兼營せしも其後材木商を中止し現營業を營めり龍口並に靑島に出張所を有す而して保險は神戸海上及東洋生命二會社の代理店たり

營業主　田中　末雄（人事參照）（大連汽船會社及田中倉庫參照）

監　督　丘　襄二（同上）

會計主任　鈴木　卯之吉（同上）

船舶主任　三木　春策（同上）

◉合資會社辰馬商會　大連市山縣通一九號地（電話一三四三番 振替大連七八〇番）

營業　海運並に清酒、ビール、醤油、サイダー販賣

本店は大阪に在り資本金五萬圓を有し代表者辰馬勇次郎氏の經營に係る合資會社なり大連支店は大正元年十一月二十九日開設さる

大連支店支配人　豐浦宗太郎（人事參照）

◉合資會社八馬商會　大連市浪速町

營業　海　運

當商會は大正二年八馬家の系統にて設立したる資本金五萬圓の合資會社なり汽船第十五號多聞丸、臺灣丸の二隻を有し孰れも外國航路に從事せり

代表者　八馬　永藏　　支配人　宇野源五郎

◉山口合名會社大連支店（山口運輸公司）　大連市監部通一丁目二四番地（電話長三六九番 五 二四番 電略（ヤマ） 振替大連七八番）

營業　船車運送併に保險代理

本社は神戸榮町三丁目に在り山口嘉吉、山口武、山口壽、山口久吉氏四名の合名出資金貳拾萬圓を以て組織さる明治二十六年十二月山口嘉吉氏神戸に山口運送店を開始し同四十二年十二月其組織を合名に改めたり大連には明治三十九年五月山口運輸公司を開設せしが本店の組織變更と與に合名會社支店に改めたり營業は滿鐵會社並に商船會社荷客專屬扱ひを本業とし帝國海上保險代理店を兼營せり

本社々長　山口　嘉吉　理事　山口　武
同　山口　壽　大連支店主任　山口　壽
同代理　臼井　幸治（人事參照）

出張所
營口新市街　主任　秋山保太郎
奉天新市街　主任　桑本平一
鐵嶺驛前　主任　神吉碩定
長春新市街　主任　生駒菊次郎
開原驛前　主任　杉本末吉
四平街驛前　主任　日置伊作
公主嶺驛前　主任　田中精一

◉東和公司　大連市敷島町四七號地（電話二一一二番）電略（トウ）又（トウワ）

營業　海運

當公司は大正三年四月の開設にして三宅、後藤、北、三氏の共同經營に係る合名會社にして資本金三萬圓を有す所有汽船は東和丸三、〇〇〇噸、東慶丸二、三〇〇噸の二隻にして專ら北清航路に就けり

代表社員　後藤長七（人事參照）

◉榎本商店　大連市武藏町二號地（電話一四三七番）

營業　海運及土木受負、物品販賣

當商店は大正三年九月の開設にて個人經營なり初め山縣通りに於て物品販賣業を營みたりしが大正三年四月現在所に新築移轉と同時に業務を擴張し舊來の物品販賣業、海運業、並に土木請負業に兼ねて重要物產取引所取引人として今日に迨ぶ汽船和田丸（三、五〇〇噸）を有し青島に出張店あり

營業主　榎本謙七郎　神戸市山本通四丁目八番地、士族　慶應二年生
支配人　横瀨千里（人事參照）
外店員六名

◉山崎運送店　大連市浪速町一丁目六號地（電話四六四九番 七五四番 振替大連七五〇番）

營業　海陸運送業並に大阪朝日新聞元賣捌

本店は明治三十八年の創立にして個人經營なり青島に支店を有す

營業主　山崎　清吉

青島支店主　岩永　善市

◉日東洋行　大連市駿河町五一ノ一（電話二四九番）

營業　海上運送並に保險

當洋行は明治三十八年十月十二日の創業にて個人經營なり

營業主　山田　實史　兵庫縣神戸市堺町三ノ五、文久二年十二月二十五日生、夫人きぬ（慶應二年三月生、男一名、女二名

◉丸二商會　大連市監部通二丁目四一號地（電二六四番）

營業　運送業

當商會は大正二年八月の開業にして個人經營なり

營業主　佐志　雅雄　長崎縣北松浦郡御厨村一六九番地　四十一歳

◉角田庄藏商店　大連市紀伊町一七號地（電話四二一番）

營業　問屋業

當商店は明治四十四年一月十日の開設にして個人經營なり

營業主　角田　庄藏　大阪市南區木津川町一丁目一三番　文久三年八月五日生、夫人あさ三十二歳

◉宮崎商店　大連市山縣通一三七號地（電話一二一五番）

營業　汽船代理並に煉瓦製造販賣

當商店は明治四十三年の創業にして個人經營なり（宮崎商會煉瓦工場參照）

營業主　宮崎伊太郎　佐賀縣東松浦郡唐津町一三四九番　四十五歳、夫人すて子四十一歳、女二人



製造業

◉大日本鹽業株式會社

大連市監部通一丁目三十番地（電話一六番）

營業　鹽製造販賣

當會社は資本金四百九十五萬圓（拂込二百萬圓）の株式組織にして最初明治三十六年資本金二百萬圓を以て神戸に設立さる三十八年關東州鹽田の開拓に著手し四十五年に東洋鹽業會社を、大正三年滿韓鹽業會社を、四年四月更に東亞鹽業會社を合併して終に四百九十五萬圓の資本金となる內地專賣局納を主とし其の他朝鮮、南洋、沿海州方面に輸出す一箇年製產高一億五千萬斤に上り目下其全部を輸出する計畫中なり大連には明治三十八年出張所を開設せしが大正四年一月之れを本店に改めたり現在東京に支店を置き又大阪、九州、仁川、釜山に出張所あり滿洲双島灣、榮城子、普蘭店、五島、貔子窩には廣大なる鹽田を有し各分局あり

社長　島德藏（在大阪）

專務取締役　篠本鼎（在東京）

支配人　目下缺員

◉小野田セメント製造株式會社大連支社

大連市臭水屯會泡子崖（電話一八五番）

營業　セメント製造

本社は山口縣厚狹郡須惠村に在り資本金百八十萬圓（拂込濟百六十萬圓）の株式會社にして其創立は遠く明治十四年五月に在りて本邦民設セメント製造業の嚆矢たり創立以來土木建築の隆興に伴ひてセメントの需用逐年增加し屢工場の增築改造を施したる事五回、明治四十年原料の豐富無限なる關東州內に分工場を設立するに決し四十二年六月初めて製造を開始せり現在の工場建坪總數二十四棟、四千四百六十餘坪、原動力は蒸氣機關九百五十馬力發電機四臺、發動機七臺を有す此生產年額二十萬樽なり製品の優良なる到底他の企及し能はざる處にして外人間にも嘖々たる好評を博せり南滿及北滿の供給は勿論、浦鹽、天津、芝罘、青島、上海、香港、馬尼刺、新嘉坡等に於て外國製品と競爭して好成績を擧げつゝあり會ま歐洲戰亂突發以來南洋諸島印度方面にも輸出するに至り常に品不足の現況に在り同製品は皆三

井に委託販賣せり

支社主任　目下缺員

支配人　菊地愛太郎（人事参照）

◉株式會社川崎造船所大連出張所

大連市濱町　電話四七一〇番　一四七五番　電略（ドック）

營業　造船、船渠

本店は資本金一千萬圓の株式組織にして故川崎正藏氏の創立に係り明治二十九年十月之を株式組織に變更して其の營業を繼承し同時に松方幸次郎氏之が社長となり今日に迨ぶ

大連出張所は明治四十一年十一月開設さる元と露人經營のドックを海軍防備隊の管轄より滿鐵會社之れを引受け更に當社に於て引受け大正三年四月頃より工事に着手し同年十一月工事竣成し從來三千噸迄の入渠を六千噸迄入渠する事とせり工場は滿鐵會社の五百噸以下の土運船及小蒸汽船數隻を新造せしが一千噸以上のものは設備の都合上未だ建造せず入渠船及機關、豆粕製造器製造、其他器械の修繕は年々增加しつゝあり技師事務員約二十名、職工日支人共三百八十名を有す神戸は本店及分工場にて當出張所の外東京麹町區八重洲町に出張所あり

社長　松方幸次郎　副社長　川崎芳太郎

取締役　野元驍　取締役　廣瀬滿正

監査役　田中常德　造船監督長工學博士田中泰董

造機監督長工學博士坂湛

大連出張所主任兼技師長　岩藤與十郎（人事参照）

東京出張所主任　野津澡

◉鈴木油房

大連市寺兒溝（電話一四三〇番　一六三〇番　一六三五番）

營業　製油、

當油房は神戸鈴木商店の經營なり初め滿鐵會社は壓搾式に依る在來の滿洲特產豆粕の改良を企圖し中央試驗所をして研究せしめたる結果、一の模範的油房を起こす事となり大正元年八月起工、同二年三月竣功し之れを滿鐵會社中央試驗所製油所と稱せり其製油法はヘンジン浸出式に依り機械は獨逸式に改良を加へ一日製造額油十噸餘、粕六十餘噸を得、之れを舊來の壓搾式の製品に比するに粕に殘油少く功果太だ良好にして改良模範の實蹟を擧げ得たるを以て滿鐵會社は永く之れを占有するを不必用として大正四

年四月九日鈴木商店に讓渡したり
鈴木商店は在來の工場に猶餘地多きを以て更に機械を增設して製造を倍額となし豆油よりはグリセリンを取り其殘りの脂肪酸を石鹼製造の材料として廣く發賣する計畫なり

工場長代理　磯部房信　會計係　板垣茂末
倉庫係　宗像金吾　技師　小畑彌八郎
同　長鄕幸治

●日清豆粕製造株式會社大連製造所

大連市軍用地二區三號地（電話長二一三番 一〇六四番）

營業　製粕並に特產物輸出

本社は明治四十年四月の創立にして拂込資本金六十萬圓、製粕工場を大連に置けり而して大連製造所一箇年の製造高は七十五萬枚なり本社は近年製粕業より三品輸出業を主要とし頗る好成績を擧げつゝあり

本社　東京市京橋區五郎兵衞町十六番地
取締役社長　松下久次郎　取締役　古澤丈作
同　大倉粂馬　監査役　淺田德則
同　高島小金治

大連製造所主任　古澤丈作（人事參照）
會計主任　本多兵一
出張員　開原　柳田宗三郎　長春　榎森新
哈爾賓　本多忠孝　浦港　辻三司

●小寺製油所

大連市軍用區地（電話長一〇八六番 電話長二〇九番）

營業　豆粕豆油製造販賣

當製油所は小寺洋行に屬する油坊にして營口小寺油坊と一體のものなり明治四十二年の建設に係り敷地六千餘坪、建坪千餘坪、一日製粕力七千枚にて大抵每日五千枚宛の豆粕を製造す

營業主　小寺壯吉（人事參照）　主任　高橋强平

●株式會社三泰油房

大連市軍用地二區二號地（電話四一三番）

營業　豆粕豆油製造販賣

本店は營口重盛街に在り資本金三十萬圓の日支合辦の株式會社にして其工場は大連に在り大連支店は明治四十年五月の創設にして同四十一年五月工場を建築し六月より作業を開始せり初め舊式手絞式なりしも明治四十四年水壓式に改め壓搾臺二十一臺を裝置

す一晝夜の製造高豆粕五千枚、豆油二萬斤内外とす

取締役兼社長 古郡良介（人事參照）
同副社長 潘玉田
取締役 岩瀬治三郎（人事參照）
同 伊藤寛（同 上）
同 李序園
監査役 神成季吉（人事參照）
同 招雨田
同 王朗亭
大連支店主任 岩瀬治三郎（人事參照）

◉泰昌利油坊 大連市軍用地二區八號（電一一二四番）

營業 豆油豆粕製造販賣

當油坊は明治四十四年十一月日本人二名、支那人一名の合資にて川崎造船所の製油器械を汎く紹介する模範工場として設立せられたる合資會社にて大連に於ける製油器械の大部分は同社より賣込たるものなりしが大正四年秋其名義を石本鏆太郎氏に改めたり一箇年の製粕額は約五十萬枚なり上海、長春に出張所を有す

支配人 柳原又熊（人事參照）

◉兒島製氷場 大連市西公園西端（電話八七三番）

營業 製氷、冷藏並に清涼飲料水製造

本工場は兒島幸吉氏の個人經營に係り敷地一千一百七十八坪、建物四棟、總坪數五百七十四坪外に地下室四十坪、總費額十三萬圓、明治四十四年七月竣功せり業務を冷藏、製氷、清涼飲料水の三部に分かてり

冷藏庫は三室より成り收容量卅四萬封、法式は第二酸化炭素瓦斯鹹水式にして汎く保管物の依賴に應じ陸海軍、州内及沿線各地、青島天津等に冷藏魚菜を移出す

製氷は三十九年より天然氷の貯藏販賣を爲せしが地方風土の關係上雜物多く衞生上危險なるに鑑みて四十四年アンモニア瓦斯鹹水式に依る製氷工場を起こせり製造額一日十一噸、一個年三千噸以上、販路は船舶、各病院、魚菜冷用、飲料用等なり

清涼飲料水は四十一年より開始し逐年改善を加へ新機械を購入し香料は英國より砂糖は香港精糖を直輸

入し品味優良なり販路は旅連及全線各地其他上海等なり

製罐工場を大正三年十月老虎灘會西王家屯に創設せり

營業主　兒島幸吉（人事參照）

工場主任　前島秀藏

◉營口煉瓦製造所大連工場　大連市外三春柳（電話七九七番）

營業　煉瓦製造

當製造所は營口煉瓦製造所と一體のものなり同製造場は明治三十九年の春營口軍政署より設立せしを軍政署の引上げと同時に同年十月之れを引受けし者なり當大連工場は從來滿鐵煉瓦株式會社の經營なりしを四十三年六月之れを買受けし者なり又營口煉瓦製造所臭水子工場として大連市外臭水子に工場あり元と露國時代に同國より創設せしものにて長谷川銈五郎氏之れを拂下げ經營中なりしを大正三年五月現在の儘讓受けの契約にて讓受け經營することゝなれり營口工場は獨逸式蒸汽製煉機械を用ひ大連工場は米國式同機械、又臭水子工場は獨逸式注入ガスインチ六十馬力の原動力を用ひ外に括出機械一臺を備ふこれに投下せし資本は營口十一萬圓、大連十七萬圓、臭水子一萬圓、合計二十九萬圓にて三工場一箇年約八百萬個を製造す

主任　松浦與三郎　宮崎縣沃肥吾田村 元治元年十一月生

出張所

大連市乃木町　主任　湯池眞美

◉大連煉瓦合資會社　大連市外老虎灘會大嶺藤村 西王家屯（電話六六六番）

營業　煉瓦製造販賣

當社は元大連煉瓦製造所と稱し支那人の經營なりしを明治四十三年横山治兵衛、岩崎次三郎の兩氏三萬圓を投資買收して合資組織とし大連煉瓦合資會社と改名したり四十四年四月前岩崎勳、岩崎久、田中高壽、今井徳五郎の四氏更に之れを買收して現今に至る一箇年製造高支那式及日本式赤煉瓦四百三十萬乃至五百萬にして日人七名、支那人三百名を使用す

代表社員　岩崎勳（人事參照）

◉宮崎製瓦所　大連市山城町ム號地（電話四四八番　振替大連八五二番）

營業　屋瓦、化裝瓦及び土管製造

當所は宮崎重一氏の個人經營なり宮崎氏は明治四十年より計畫に著手して四十一年四月開業し四十二年八月青島に於ける獨逸式製瓦法を研究したる結果之れを模造して滿鐵沙河口工場及び星ヶ浦に於ける諸建築物所用の屋瓦全部を供給して日本に於ける獨逸形瓦製造の嚆矢を爲せり其後大連ヤマトホテルの大建築起るや其化裝瓦全部を供給したり赤瓦及化裝瓦の製造は當所の最も苦心せる處なるが赤瓦の製法は已に完成し化裝瓦も殆ど完全に達したるも猶研究を續づけて其大成を期しつゝあり土管は四十四年より製造を開始し其製法漸く完全となれり

瓦は主として滿鐵民政署及び民間各方面に供給し又土管は近頃支那人間の需要大に起りつゝあり

營業主　宮崎重一（人事參照）

分工場　奉天大塔街鐵道西三ノ一

同　青島濟南街二十四號地

●福田煉瓦工場　大連市外沙河口會李家屯十番地

營業　煉瓦及日本式瓦製造

當工場は明治四十五年五月設立す煉瓦並に日本式瓦の製造を主とし一年製造高は二百五十萬個内外、煉瓦は三井物産に委託して滿鐵會社に納む品質の堅牢寸法の精確を以て聞ゆ日本瓦亦聲價あり

營業主　福田顯四郎（人事參照）

●宮崎商會煉瓦工場　大連市外老虎灘會西王家屯

營業　煉瓦製造販賣

當商會は大正三年春元と小笠川氏の經營なりしを買收せるものにして個人經營なり目下内地人一名支那人夫二百名を使役し一箇年の煉瓦製造高約二百萬とす

營業主　宮崎伊太郎

●ソーライト製造株式會社　大連市淡路町一二號地（電一一八八番）

營業　ソーライト（水性塗料）タンタルス（土木建築用防水劑）製造販賣

當會社は大正元年八月の創設にて初め矢中龍次郎氏の個人經營なりしを大正三年六月一日資本金一萬

圓（拂込二千五百圓）の株式組織に改めたり

ソーライトは滿鐵會社中央試驗所應用化學科長理學士鈴木庸生氏が十餘年前發明せるものにて大豆の含有する植物性蛋白質を重もなる原料として製造せる水性塗料にして大正二年九月我政府の專賣特許を得、更に英獨佛米の四國にも出願中にて專門家の好評を博し外國輸入の塗料カセイン、ゼラチンを驅逐し更に其販路を外國に擴張しつゝあり一箇年の製造高百萬磅に達し三井物產會社に於て之れを一手に販賣す

タンタルスは大正三年十一月同鈴木氏發明し同年十二月より賣出しを開始したる豆油を原料とせる脂肪酸アルミニユームにして其用水時には乳劑を形成するを特徵とし（西洋同種の者は水に溶解せず）價格低廉、使用法の簡易、功果の顯著、不純物を含まざる事等は本品の特徵にして從來輸入の防水劑アキユウアバー、センシツト、パドロー等何れも高價にて一般の使用に適せす且つ雜物を含有するものに比し品質優良にして價格の低廉なる實に世界的商品として將來大に囑望されつゝあり

取締役　矢中龍次郎
　　　　原安三郎
　　　　遠藤裕太（人事參照）
監査役　山口俊次郎
　　　　平井大次郎（人事參照）
顧問　鈴木庸生（人事參照）

◉合資會社向井骨粉工場

大連市外老虎灘會西王家屯（電話長一三五一番　振替大連三九九番　電略ムカヒ）

營業　骨粉製造販賣

當工場は向井氏兄弟三人の合資組織なり現代表社員向井氏は明治三十八年向井洋行を遼陽に開設して滿洲に於ける牛骨輸出の開祖たり四十四年十月同洋行の火災に罹り全滅せし爲め大正元年六月大連に移轉し同二年五月組織を合資に改め工場を建設せり製造額は一箇年三千噸（能力は六千噸）主として東京を中心とし內地各所及臺灣に輸出し今後更に布哇にも輸出する計畫なり向井氏は骨粉業硏究の爲め大正四年四月渡米、八月末歸朝せり

代表社員　向井龍造

支配人　山路孝二

●大連製材所　大連市北大山通二一號地（電話二二五七番）

營業　製材販賣

當製材所は元滿鐵會社所屬の製材所なりしが高阪景顯氏滿鐵會社より年賦償還にて讓受け兒島幸吉氏出資して協同經營せしを大正三年十月秋富久太郎氏全部の權利を讓受け經營せり

製材所主任　品川一

●滙泉湧燒鍋　大連市小崗子南部（電話九九九番）

營業　高粱酒釀造販賣

當燒鍋は九鬼榮助、藤田九一郎二氏の匿名組合經營にて明治四十二年二月奉天に於て高粱酒釀造工場を設けたるも製品の香味に於て支那人の嗜好に適するものを得ることを得ず四十四年四月解散の已むなきに至りたるも一部同志と共に四十四年八月再び地を大連にトし純舊式の釀造法に依り開始したるに幸に好果を得たるを以て販路を山東に求め漸く順境に向ひたるに際し一時勃興せる混成酒の影響を受け一進一退今日に至りたるか其前途は太だ光明あるが如し大正二年二月芝罘に販賣店を設置せり

組合代表者　九鬼榮助（人事參照）

組合員　奉天　藤田九一郎（人事參照）

●藤田洋行サイダー工場　大連市西通四十五號地（電話五七二番）

營業　ラムネ、サイダー製造

當工場は最初村上喜太郎氏の獨力にて明治四十二年より創開せられしか大正三年三月より藤田洋行との協同經營となり大正四年六月に到り其全部を藤田洋行に讓受けたり一箇年製造高はラムネ一萬打、サイダー、シトロン二萬打内外にて其商標は月星印なり

營業主　藤田禮藏（人事參照）

●萬玉洋行　大連市松林町九號地（電話長二六二番　振替大連四一番）

營業　石鹼洋蠟燭製造販賣

當洋行は明治四十二年七月の開設にて個人經營なり各種石鹼を製造し拓殖、明治紀念、大正の各博覽會に出品して賞牌を得たり販路は南滿より北滿各地に

次第に擴張しつゝあり外に蠟燭を製造販賣す

營業主　萬玉惣次郎（人事參照）

外使傭人日本人十六名、支那人十六名

◉滿洲石鹼製造所　大連市加賀町二三番地（電一一四四番）

營業　石鹼製造並に販賣

明治四十四年春の開始にして個人經營なり大正四年の製造高は約三萬圓の豫定なるが最近更に工場の規模を擴張するの準備中なり

營業主　幡田義之助（人事參照）

◉戸田商會　大連市乃木町二五號地（電話四一七番）

營業　暖爐並諸機械製造販賣

當商會は明治四十一年の開設にして個人經營なり大山通二丁目五八號地に販賣部あり

營業主　戸田　兼造　東京市芝區四丁目、四十八歳、夫人ゑい四十三歳、男一名、女六名

◉大連鐵工場　大連市大山通一三號地（電話四二二四番）（電略〇）

營業　各種機械製造

當工場は明治四十年七月の創立にして個人經營なり

工場主　小田切　豊（人事參照）

◉伏田鐵工所大連出張所　大連市西通一丁目一八號地（電話一一二六番）

營業　鑄物類、油房諸機械、船舶修繕及鐵筋鐵骨鑄造

本店は大阪市北區上福島町北二丁目にあり伏田清三郎氏の個人經營なり

大連出張所は明治四十二年二月開店せり當時油坊の全盛時代にして石油發動機の需用夥しかりしが其後時代の進歩に伴ひ吸入瓦斯發動機の需用を見るに至り現に臭水子及營口煉瓦工場に使用しつゝあるものは何れも當出張所にて製作したるものにして工場には自製六馬力の吸入瓦斯發動機を原動力とし常傭人夫八十名を使用す

大連主任　中村宗二郎（人事參照）

技術兼會計　林　延四郎

船舶顧問機關長　鈴木安太郎

工長　山田政次

◉玉置硝子製造所　大連市出雲町サ區一四號地（電話一二〇四番）

營業　硝子製造販賣

當製造所は明治三十九年の創業にして個人經營なり

營業主　玉置竹次郎　岐阜縣可兒郡子雌村二〇番地、四十二歲、夫人じゅん三十三歲

◉植田龍商店　大連市若狹町〃號九號地（電話一〇六二番）

營業　味噌製造

本商店は個人經營にて營業主は多年大阪にて穀物商を營みしか明治三十八年六月渡連し肥塚支店に入り四十一年辭して獨立現業を開始せり

營業主　植田　龍藏　原籍奈良縣高市郡八木町三七九番地、明治十五年三月十四日生、夫人久惠二十七歲、男一、女一

◉小川洋行　大連市安藝町二七號地（電話八二二番　振替大連二一八番）

營業　醬油釀造並に貸家業

當洋行は個人經營にて明治四十三年三月の設立なり青島松根町四〇號地に支店を有す

營業主　小川慶治郎　三重縣員辨郡梅井戶村、元治元年生、男一名、女二名

青島支店主任　田邊政之助

◉池田商店大連支店　大連市西通一丁目（電話三四三番）

營業　醬油製造販賣業

當店は個人經營にて明治三十九年三月開設の當時は材木商を營みしが四十二年廢業以來現業を經營せり

營業主　池田伊三郎

◉中堂洋行　大連市能登町一五號地（電話一一〇番）

營業　味噌醋製造販賣

本商店は明治四十年の創立にして個人經營なり

營業主　中堂　林吉　原籍大阪府西成郡傳法寺町一丁目七二番地、明治五年十二月廿七日生、夫人ふさ三十三歲、長男光雄十一歲、篤子七歲

◉木村屋　大連市信濃町一七號ノ二（電話一八七番）

營業　食パン菓子製造販賣

當商店は明治四十一年十一月の開設にして個人經營なり

營業主　木村清一郎　茨城縣相馬郡川原代町二一三番地安政十三年十月十五日生、夫人あい四十八歲、男四名

外店員四名

◉成恒社　大連市攝津町ㇳ區四十四號地（電話一四一〇番）

營業　暖爐製造販賣、セメント防水劑滿洲總代理店並に請負

營業主　皆川　成司　福岡縣田川郡金川村大字夏吉、三十三歲、夫人米子二十九歲、女一名

諸機械、金物類、木材、建築材料商

◉淺野セメント株式會社大連出張所

大連市紀伊町四五號地（電話四三二二番）（電略（アセ））

營業　セメント販賣

本社は東京市深川に在り四十年前の創設にて資本金七百萬圓、一ヶ年製品二百萬樽以上に達する斯界の大會社なり大連出張所は旅順陸軍部、要塞部、民政部、滿鐵會社、本溪湖煤鐵公司に同社製品を納む其他滿洲各地に代理店ありて販路日に擴大しつゝあり

滿鮮出張所長　小林　李次

大連主任　須田　幸作　原籍宮城縣仙臺市、三十一歲、明法大學出身、夫人まさ二十二歲、一男あり

◉古河合名會社大連出張所

大連市山縣通一〇三號地（電話長一〇四三番）

營業　荒銅、電氣銅及加工品類、金、銀、丹礬及雜金物類、鑛石、石炭、電氣、銅線、並に各種被覆線、紙類販賣

本社は東京市麹町區八重洲町に在り男爵古河虎之助、木村長七、男爵中島久萬吉、近藤陸三郎諸氏の合名組織にして資本金五百萬圓（全額拂込）足尾銅山以下著名なる十四個所の各種鑛山を有する有名なる鑛山會社なり本社は明治九年故古河市兵衛氏が草倉銅山を讓受けたるに創まり明治三十六年古河氏沒するや古河潤吉氏之れを繼承し三十八年古河鑛業會社に改組織し潤吉氏之が社長たり三十九年潤吉氏沒するや古河虎之助氏亦た之を繼承し四十四年古河合名會社に改む大阪、門司、上海に支店を、北京、漢口、香港に出張所を有す

大連出張所は明治四十二年六月古谷節夫氏出張員として來任し大正四年五月從來上海の管轄なりしを改めて出張所とし淺野貞一氏主任として來任したり營業は上記諸商品を滿鐵會社其他各方面及び支那官憲側に納むるを主要とす大正四年十一月石炭一千噸の大連輸入を試みたり

本社代表社員　男爵　古河虎之助

大連出張所　主任　淺野　貞一（人事參照）

⦿日本電氣株式會社大連出張所

大連市監部通一丁目一九號地（電話一〇四八番 振替大連九七三番）

營業　電氣用器械器具販賣

本社は東京市芝區三田四國町二番地に在り資本金二百萬圓の株式會社にして大阪に支社を又京城及大連に出張所を有す

大連出張所は明治四十三年四月の開設にして主として通信管理局及び滿鐵會社等に其製品を納入し居れり

本社専務取締役　岩垂　邦彥

大連出張所主任　川村　忠一　千葉縣夷隅郡大多喜町[illegible]、四十歳、夫人[illegible]子三十歳、男二名、女二名

⦿合資會社高田商會大連出張所

大連市西公園町一區四〇號地（電話四二七一番 電略大レンタカタ）

營業　諸般器具機械類、船舶、浚渫船、電氣馬車其他鐵道用品類、雜貨類、銃砲彈藥、鐵軌類、電氣器械、洋書、海圖、諸煉瓦セメント、アスファルトの塗料塗具類、理化學工學藥用藥品類、石綿、木材、諸織物、諸染料類、護謨及同製品、皮革同製品、家具、建築、金屬製品、鑛物、石炭、コークス、樂器類、造船並船具類、電氣暖房製氷、其他各種機械の製品裝置並工事、運送業及土木建築請負業

本社は東京市麴町區永樂町に在り資本金一百萬圓の高田一家の合資組織にして大阪、上海、倫敦、紐育及獨逸等に支店あり大連出張所は三十九年の開設にして滿洲一圓及び北京、青島方面迄を其管區として販路廣大なり

本社長　高田　愼藏

大連出張所主任　勝本永次郎（人事參照）

⦿合名會社椎名商會大連出張所

大連市監部通五五號地（電話七三一番）

營業　各種機械類、土木建築用具及材料、金屬材料及地金、船底塗料及油類、米利堅チーク材の販賣

本店は神戸市播磨町二十九番地に在り大阪、東京、倫敦、紐育、吳に支店を有し小倉、舞鶴、臺北、京

城、大連に出張所を有す大連出張所は明治四十四年の開設にして上記營業の外大阪鐵工所の出張店を兼營して造船の注文に應す

大連出張所主任　舟橋喜一

外店員三名

◉合資會社進和商會　大連市佐渡町二七號地（電話一七三番）

營業　金物、船具及雜貨

明治三十八年十一月三日の創立にて資本金五萬圓積立金二萬一千圓を有す

代表社員　高田　友吉（人事參照）

支配人　小南　夫一

支店　大阪及朝鮮龍山

◉合資會社秋田商會大連支店　大連市美濃町七一號地（電話　局四三七番）（振替大連一一六番）

營業　材木類、建築附屬材料一切販賣竝製材業

本社は秋田寅之介氏外二名より成る資本金十萬圓（全部拂込）の合資組織なり從來秋田氏の個人經營として明治三十八年開店し大連にも其出張所を置きしが四十四年十二月本店組織を合資に變更すると同時に大連出張所を合資會社支店とせり大正四年は開店十週年に相當するを以て第二期業務擴張の爲め資本金を三十萬圓乃至五十萬圓に增加し從來の船舶部は秋田寅之介氏の個人業務なるを第二期に於ては之れを秋田商會の營業中に入れ益々業務を擴張する筈、大連支店は旅順及青島を管轄し又製材所を經營せり（大連製材所參照）

本店　關市東南部町（電話長一九番　三八五番　九五〇番（長橋用）　電話九五二番）

無限責任社員　業務擔當社長　秋田寅之介

大連支店　支配人　秋田久太郎

大連製材所（電話二二五七番）主任　品川　初一

旅順支店旅順乃木町（電話一七七番）主任　沼田彌一郎

青島出張所青島早霧町（電話三七番）主任　吳石　權一

◉濱恒支店　大連市淡路町九號地（電三五六番）

營業　材木及建築材料販賣

本店は大阪市南區木津川町一丁目に在り濱恒次郎氏の個人經營にして小樽及大連に支店を有す

大連支店は明治三十八年十一月開業す

大連支店　主任　濱　竹松（人事參照）

同青島出張所　主任　濱　哲次郎

◎宮下合名會社大連出張所　大連市加賀町三三號地（電話五二九番）

營業　各種木材販賣及製函業

本社は資本金十萬圓の合名組織にして明治三十八年に創立さる大連出張所は明治四十一年の開店なり

本社　業務執行社員　宮下治之介
大連出張所　主任　葛野官槌
安東縣出張所　主任　前田右衛門
營口出張所　主任　葛野官槌（兼）

◎中熊大連支店　大連市若狹町二八號地（電話四六三〇番）

營業　材木

本店は和歌山市西河岸町に在り中島熊楠氏の個人經營にて大阪及大連に支店を有す大連支店は明治三十八年の開業にて松丸太、檜丸太、杉、檜電柱の内地産及び北海道産各種、其他鴨綠江材、長春材を販賣す青島に出張所あり

本店　主任　中島熊楠
大連支店　主任　中島米太郎
大阪支店　主任　中島九一郎
青島出張所　主任　谷好次郎

◎村井材木店　大連市信濃町七二號地（電話四六四番　振替大連九八二番）

營業　内地産木材、北海道産木材、其他諸建築材料販賣

當材木店は明治三十八年十月の開設にして個人經營なり

營業主　村井隆次
青島支店　主任　村井八百吉

◎早野材木店　大連市美濃町七九號地（電話二〇七番）

營業　〔内地産各種木材、北海道松角板類、及化〕〔裝造作床廻品販賣〕

本店は下關市西細江町に在り早野重右衛門氏の個人經營にして大連支店は明治三十八年十月開業す

營業主　早野重右衛門　（人事參照）

◎谷崎支店　大連市美濃町九五號地（電話五〇三番　振替大連三〇四番）

營業　材木、左官材料及貸家

本店は廣島市に在り個人經營なり大連支店は明治三十八年五月に開設せり

營業主　谷崎　百藏　廣島縣廣島市小網町一九番地、文久二年四月二十日生、夫人はや三十七歳、男三名

◉今津支店　大連市近江町六號地　（電話六〇四番）

營業　材木商

當商店は明治四十年の開設にして個人經營なり

營業主　今津　十郎　大阪市西區幸町四丁目六〇番地、四十三歳、夫人きゑ三十三歳

◉久保洋行　大連市伊勢町四五號地　（電話三五三番）

營業　金物、船具、洋釘、洋鐵葉輸入

當洋行は明治三十八年七月十四日の開業にして個人經營なり鐵部倉庫を軍用地區四號地に有す上記營業の外に仁川カールウォルター商會、横濱アスファルト株式會社、東京イソタメタル工場の代理店を營む

營業主　久保　章一　（人事參照）

外店員十二名

◉原田組　大連市磐城町四二號地　（電話四一〇番）

營業　金物、船具、諸機械販賣

本店は明治三十九年八月の創立にして個人經營なり

營業主　原田猪八郎　（人事參照）

大阪出張所主任　足立　文一

◉千村商會　大連市伊勢町一三號地　（電話五三番　振替大連一一七番）

營業　建築材料並金物類販賣

本商會は明治三十九年の開業にして個人經營なり

營業主　千村　春次　（人事參照）

◉鳥羽洋行　大連市近江町一〇號地　（電話八〇五番）

營業　諸機械製造販賣並金物、建築材料販賣

當洋行は明治四十一年九月の開設にして個人經營なり

營業主　鳥羽　眞作　長野縣東筑摩郡東郷村、四十歳、夫人常磐三十一歳

◉藤原商店大連支店　大連市伊勢町七號九號地　（電話㊣六〇二番　振替大連六九番）

營業　歐米建築材料、雜貨輸入及米國パラフイ

ンペイント製アルソイド便利瓦斯、アスファルトの一手販賣、其他英國ニュージランド火災保險、明治生命保險代理業

本店は東京麹町區有樂町一丁目五番地に在り藤原俊雄氏の個人經營にして大阪、神戸、京城及び大連に支店を有す

大連支店は明治三十八年開設せり

大連支店支配人　荒井　健治　山口縣厚狹郡厚西村大字郡一三四六番地、明治二十四年十一月二十三日生、母堂たづ

◉成二洋行　大連市大山通二丁目（電話二七五番）

營業　西洋家具販賣

當洋行は明治三十八年の創設にして個人經營なり青島に支店を有す

營業主　阪井　慶治（人事參照）

外店員四名

◉藤澤商行　大連市伊勢町四七號地（電話二四四番）

營業　鐵工、木工、石土工、建築、日用裝飾用諸金物、諸針線、諸金物、板亞鉛、平板、浪板、度量衡器販賣

當商行は明治三十八年四月の開設にして個人經營なり青島に支店を有す

營業主　前澤　三郎（人事參照）

青島支店主任　大山　龍雄

◉岸洋行　大連市浪速町二丁目五〇號地（電話三七六番）

營業　金物並船具類販賣

當洋行は明治三十九年の開設にして個人經營なり

營業主　岸　胖　原籍山口縣玖珂郡岩國町三一九番、明治十一年十二月十二日生、夫人ひさゑ二十九歳、長男達男一歳

◉深尾硝子商店　大連市浪速町三丁目四十一號地（電話二八二番）

營業　諸機械用硝子器製造販賣及板硝子諸硝子器販賣

當商店は明治三十九年の開業にして個人經營なり青島保定町に支店を有す

店主　深尾　榮吉　滋賀縣蒲生郡日野村大字村井町二九一番屋敷、明治六年五月生、夫人むら三十七歳

◉石田洋行　大連市濱速町三丁目（電話八四五番）

營業　金物

當洋行は個人經營なり營業主は明治二十六年以來大阪にて金物製造販賣業に從事し四十年一月大連に來り現在所に現業を開始す大正四年一月青島山東町に支店を開設せり

營業主　石田嘉市　滋賀縣高島郡饗庭村一九九番地、父石市左衛門六十四歳、母堂さみ六十二歳、夫人ぬい三十二歳

◉峰商會　大連市若狹町サ區一號地（電話七八六番）

營業　瓦斯電氣機械類、建築材料、礦山、土木用器具並雜貨荒物類販賣

當商會は明治三十九年五月の開設にして個人經營なり

營業主　峰　五郎　佐賀縣西松浦郡二里村一九九番、三十九歳、夫人はつ子三十七歳、男一名

◉松島商店　大連市信濃町一一號地（電話六一六番 振替大連三七番）

營業　板硝子類並ペンキ販賣

當商店は明治三十八年十一月の開設にして個人經營なり

營業主　松島久次郎　大阪市南區炭屋町一一番地、慶應元年一月生、夫人みちゑ四十五歳、男一名

◉柳生洋行　大連市但馬町ユ區一二號地（電話四〇一番）

營業　電氣用品販賣

當洋行は明治四十年の開設にて個人經營なり

營業主　柳生　米藏　大阪市北區曾根崎新地二丁目、萬延二年四月四日生、夫人たま四十歳

◉能登洋行　大連市但馬町ユ區一三號地（電話五五〇番）

營業　度量衡器、金庫販賣

當洋行は明治三十八年七月市内岩代町に店舖を開設し四十一年現在所に新築移轉す本業の外貸家業を營む青島タ區町六號地に支店あり

營業主　能登庄三郎　富山縣氷見郡氷見町北新町、四十歳、夫人なほ三十六歳

青島支店　主任　久保　久松

◉大信洋行　大連市監部通七三號地（電話一〇四七番 振替大連二三七番）

營業　金物

當洋行は明治四十年四月の開設にして個人經營なり奉天南門外及遼陽大什字街に支店を有す

營業主　石田　榮造　大阪市西區境川町一七九番地，夫人千代子二十八歳

奉天支店　主任　松井清二作

遼陽支店　主任　緒村他八郎

◉濱本商會　大連市伊勢町一二號地（電話七五九番　振替大連四〇六番）

營業　疊表並に雜貨

當商會は個人經營にして明治三十八年の開設なり

營業主　濱本　忠吉　廣島縣御調郡菅野村一一番地、明治十一年十月十日生、夫人みき子二十八歳、男二名、女一名

呉服、洋服類商

◉株式會社三越呉服店大連出張所　大連市大山通二丁目五十五號地（電話一二八五番　四三六番　振替大連三番　電略（タミ））

營業　呉服、太物、唐物、雜貨、洋服の小賣

本店は東京日本橋に在り資本金二百萬圓、拂込金百五十萬圓積立金七十七萬七千五百圓を有する株式會社なり創業二百六十餘年を經過し越後屋呉服店又は三井呉服店と稱せしは世人の汎く知る處の如きが明治三十七年末現組織に變更すると與に三越呉服店と改稱せり大連出張所は明治四十年八月の創設にして當初羽前町に於て開店せしも業務の發展と與に現處に移轉せり當店は本館の總二階坪數二百四十坪の全部を商品の陳列場に充て所長以下店員三十五名、雇員二十五名を以て經營せる南滿唯一の百貨小賣店なり毎年一同沿線に出張販賣するを例とす

本社

社長	野崎　廣太	常務取締役	中村利器太郎
同上	朝吹　常吉	取締役	日比　翁助
同上	藤村　喜七	同上	益田　英作
同上	山岡才次郎	監査役	酒井　亘明
同上	鈴木梅四郎		

大連出張所長　北村千次郎

◉合資會社鹽久呉服店　大連市浪速町三丁目八八號地（電話二二三番）

營業　呉服類販賣

當社は大正四年三月二十七日の創立にて資本金一萬六千五百圓を有し業務健實なり

無限責任社員　清水久六

大連主任　三浦俊造（人事参照）

◎松本組洋服店大連出張所　大連市浪速町二丁目四〇號地（電話二一六七番）
營業　羅紗地並に洋服販賣
當洋服店は明治四十二年六月の開業にして個人經營なり
店主　今村末雄　東京市麻布區網代町二三番地　明治五年十月二十七日生　夫人すが子四十歳　養女一名　女一名
外店員　七名

◎角田呉服店　大連市浪速町三丁目五三號地（電話二三二番　振替大連一六番）
營業　呉服類商
當呉服店は明治三十八年十月開業にして個人經營なり
營業主　角田鶴吉（人事參照）

◎武内洋行　大連市大山通二丁目七二號地（電話二一一番）
營業　羅紗地販賣竝に洋服裁縫販賣
當洋行は明治三十九年の創業にして個人經營なり
營業主　武内宗一　山梨縣中巨摩郡三惠村一二五番地　夫人あき子二十七歳　女一名
外店員　五名

◎德海屋支店　大連市大山通四八號地（電話長三四二番）
營業　洋服調進及羅紗卸賣幷石灰製造販賣
本店は莊伴治氏が東京に於て明治十五年以來經營せる德海屋洋服店にして大連支店は明治三十八年設置せり外に臭水屯に石灰工場を有し石灰の製造販賣をなす
營業主　莊晉一（倫敦遊學中）

◎玉屋號　大連市大山通二丁目（電話六〇七番）
營業　羅紗類及洋服販賣
當號は明治三十九年盤城町に開店し四十三年三月現在所に移轉す個人經營なり
營業主　三枝岩次郎（人事參照）

◎今敷商店大連支店　大連市大山通二九號地（電話三三一番）
營業　羅紗地販賣竝洋服調進
本店は大阪市東區南新町二丁目に在り今敷楢藏氏の個人經營なり
大連支店は明治三十八年六月に開設さる
營業主　今敷楢藏

外店員　三名

村田商會
大連市伊勢町五五號地（電話五七八番振替大連一〇三番）

營業　綿布販賣業

當商會は明治三十九年十一月の創業にして個人經營なり

營業主　村田孫一　滋賀縣蒲生郡一ノ上村七六〇番地　二十八歲

土井商店
大連市伊勢町六五號地（電話六六八番振替大連三九七番）

營業　製綿販賣業竝に貸家業

當商店は明治三十八年六月の開設にして個人經營なり

營業主　土井勝藏　四十一歲　夫人鶴四十歲　男一名　女一名

外店員　二名

三浦商店
大連市伊勢町一四號地（電話一三〇九番）

營業　毛皮竝に皮革業

當商店は明治四十一年十二月の創業にして個人經營なり奉天に支店を有す

營業主　三浦新兵衛　東京市淺草區茅町二丁目十一番地　四十三歲　夫人やす三十六歲　男四　女二

飲食物類商

東亞煙草會社大連販賣所
大連市大山通二丁目六七號地（電話二七三番振替大連五八〇番）

營業　東亞烟草會社の各種製品販賣

當販賣所は明治三十九年十一月東亞烟草會社の成立と與に大連支店として監部通りに開設せられしが四十二年九月現在所に新築移轉せり四十三年一月に到り營口に會社の總販賣所設置せられ大連支店は出張所となり今日に到れり（奉天總販賣所の項參照）陳列所を浪速町に設け出張所を芝罘に有す

大連販賣所主任　貝原收三（人事參照）

合名會社大矢組大連支店
大連市朝日町一番地（電話八一〇番）

營業　滿洲駐屯陸軍諸部隊需要の糧秣供給竝に精米、精麥、醬油釀造及農園

本店は大阪市東區内淡路町一丁目十一番地に在り大矢奈良吉、大矢麻次郎二氏の出資にて明治二十九年六月二十五日を以て成立せる資本金十萬圓の合名會社なり
大連支店は明治四十年九月の開始にて翌四十一年五月旅順に移轉し四十二年再び大連に返れり營業は糧秣供給を主腦とするの外建坪九百餘坪の工場を以て精米精麥業を營み又沿線に於て農園を經營せるが其公主嶺に於ける者は規模稍や大なり（公主嶺同項參照）

本社長　大矢奈良吉
大連支店長　大矢麻次郎（人事參照）
支店主任　高岡謙吉（同上）
旅順出張所　大矢正語　海城出張所
遼陽同　杉浦豊司　鐵嶺同　山田桂藏
公主嶺同　長尾由次郎

●株式會社三星洋行

大連市吉野町三丁目六一號地（電話四一八番振替大連一四番）

營業　歐米各國品直輸入並に内地特産の各種飲料の滿洲特約販賣

當洋行は明治三十九年二月匿名組合にて組織され久保田勇三氏之れを經營せしが明治四十年十二月組織を資本金五萬圓の株式會社に變更せり大正三年五月國政氏來りて常務取締役に任じ引續き歐米各國品直輸入の外サクラビール、布引炭酸水、櫻正宗、山サ醬油、味の素、森永製菓會社の洋菓子類、鎌倉ハム等を特約販賣せり現在積立金六千圓を有せり神戸に出張所あり

常務取締役　國政與三郎（人事參照）
取締役　高井覺太郎
同　瀧本登一

●宅合名會社大連支店

大連市大山通四〇號地（電話長二四〇番 八六番 振替大連三二〇番 電略「タク」）

營業　清酒釀造販賣、洋酒、洋食料品、洋煙草、洋菓子の直輸入販賣

本店は堺市九間町に在り宅德平、宅太藏、宅萬次郎宅通貞四氏の出資五十萬圓全額拂込の合名會社にして明治二十九年十二月の創立なり
大連支店は三十七年十月中村敏雄氏來りて開店し以來業務次第に伸展して三十九年十二月現處に新築移

せり滿洲各地に特約店あり、販路擴大なり

本社長兼業務擔當社員　宅　徳　平

大連支店長　中　村　敏　雄

次席　齊　藤　鱗　太　郎

◉滿鐵調辨所　大連市北大山通六號地（電話四四五五番　振替大連三〇〇番）

營業　沿線滿鐵社員に對する物品供給
並列車内物品販賣

當所は匿名組合にて資本金六萬二千圓を有し滿鐵會社の保護監督を受く明治四十年九月柄綱宗一氏滿鐵會社の保護を受て當所を創立せしが四十三年十一月退所後現在の組織となれり沿線主要驛に出張所あり

代表者　遠　藤　裕　太（人事參照）

支配人　千　田　次　郎

計算主任　岸　田　石　雄

販賣主任　渡　邊　茂　次　平

仕入主任　槇　木　雅　之　助

倉庫主任　倉　橋　安　照

車內部主任　橋　本　良　次

瓦房店主任　河　村　彌　策

大石橋主任　武　久　勝　平

遼陽主任　福　田　哲　郎

奉天主任　木　下　金　次

公主嶺主任　菊　原　次　一

長春主任　小　田　要　一

◉南滿家畜株式會社　大連市外小崗子北秦公街（電話一五八五番）

營業　山東牛輸入販賣

當會社は資本金三萬圓（四分の一拂込）の株式組織にて大正四年六月一日開業せり從來大連及旅順に於ける山東牛の輸入販賣は支那商の獨占に歸せしが當社は大連旅順に於ける全部の肉商を株主として山東牛を直接輸入し之れを肉商等に供給し以て支那商の獨占せし利益を一般株主に分配するを目的として營業せり

社長　橋　口　太　次　郎（人事參照）

◉河又分店　大連市山縣通一丁目一六號地（電話九三〇番　振替大連四七番）

營業　醬油、味噌釀造販賣

本店は大阪府堺市新在家町に在り河盛又三郎氏の個人經營にして大連に分店を有し分店の下に二箇所の

出張店あり

大連分店は明治三十八年七月の開業にして市内信濃町及沙河口柵内一號地に出張所を有す

大連分店主　河盛恒治郎（人事參照）

同信濃町出張所

主任　原田政太郎

同沙河口柵内出張所

主任　古谷佐兵衞

◉嘉納合名會社大連支店　大連市監部通二丁目五二番地（電話一四四番振替大連三〇番）

營業　清酒白鶴印の販賣

本社は灘御影町に在り明治三十年十月の創立にして嘉納家一族を以て組織せる資本金三十萬圓の合名會社なり

大連支店は明治三十八年四月の設立に屬す白鶴印の販賣石數は大正三年に於て四萬石を算せり

本社長　嘉納治兵衞

大連支店主任　中村楢次郎（人事參照）

◉肥塚大連支店　大連市大山通（電話一三六番）

營業　酒類販賣業

本店は

當支店は明治三十七年監部通りに開設し大正四年八月現在所に新築移轉す現支配人は四十一年著任以來八方に其販路を擴張せり

支配人　西口幾太郎　大阪府堺町戎之町西二丁目　慶應三年八月二十日生

◉兒島支店　大連市浪速町一丁目二〇號地（電話長四四九〇番　振替大連五八〇番　電略「コ」）

營業　米穀、醬油、建築材料一式販賣

本店は鳥取市瓦町五十五番地に在りて兒島幸吉氏の經營に屬す

大連支店は明治三十九年兒島氏の渡連と與に開業し初め磐城町に在りしが四十一年十一月現處に新築移轉せり旅順舊市街乃木町及青島早霧町に出張所あり（兒島製氷所參照）

營業主　兒島幸吉（人事參照）

支店主任　島田豐太郎

◉合名會社大塚大連支店　大連市吉野町二丁目三四號地（電話四〇四番 二九〇番）

營業　清酒金露の滿洲發賣元並に
日本麥酒特約販賣

本店は大阪府堺市熊野町に在り大塚和三郎氏の個人經營なりしが大正四年十一月一日合名組織に變更し大塚和三郎氏社長たり大阪、京城、小樽及大連に支店を有し各支店の下に夥多の出張所あり
大連支店は初め明治三十八年八月出張所として奥町に開設せしが四十一年四月支店に昇格して現在所に移轉せり

大連支店主任　河村良吉　山口縣大島郡蒲野村二六一番地　三十二歳　夫人さく子　二十六歳
外店員　七名

◉城島商店　大連市若狹町キ區十九號地（電話八六三番）

營業　米穀類販賣

本商店は明治三十九年四月の開設にして個人經營なり

營業主　城島類造（人事參照）

◉村上商店　大連市吉野町二丁目二九號地（電話九三七番）

營業　米穀及薪炭、石炭販賣並に貸家業

當商店は個人經營にして營業主村上氏は明治三十七年四月日露戰役に際し司令部附軍屬として渡淸各地に轉戰し明治三十八年辭して現所に現業を開始せり

營業主　村上寅藏　香川縣三豐郡大野原村八二二番地　三十六歳　夫人かね　三十四歳

◉鐵谷商店　大連市監部通四六號地（電話一四二番）

營業　清酒、和洋酒、洋食料品販賣

本商店は明治三十八年六月の開業にして個人經營なり

營業主　鐵谷政造　長崎縣長崎市大村町　三十八歳　夫人りん子　二十七歳
外店員　四名

◉扶桑號　大連市羽前町一七號地（電話八三一番）

營業　陸運用達並に酒、醬油、味噌、
酢、其他日用雜貨の販賣

當號は上中治氏の個人經營にて氏は明治三十八年二月匿名組合を以て盛和洋行の名の下に大連に營業を開始せしか四十年組合解散と同時に盛和洋行は今の

嘉納合名會社大連支店に讓渡し別に扶桑號を開設して今日に至れり

營業主　上中　治（人事参照）

◉村山商店　大連市東郷町二七號地（電話九四九番　振替大連四五一番）

營業　砂糖、麥粉、精米販賣並に貸家業

當店は明治三十八年の創業にして個人經營なり店舗は初め大山通にありしか四十年現在所に新築移轉せり

營業主　村山瀧三郎　東京市芝區梅田東郷町二番地　四十八歳　夫人なほ　四十八歳　男五名

◉京和洋行　大連市磐城町五號地（電話七一六番　振替三三一番）

營業　食料品並副食物品販賣及貸家業

本店は明治三十八年の開設にして個人經營なり市內敷島町及信濃町に支店を有す

營業主　和田正吉　京都府魚棚室町八番地　明治十三年八月三日生　父君與八　六十四歳　夫人たね子　三十四歳　男三名

◉伊勢作洋行　大連市若狭町〃區四號地（電話一二三三番）

營業　醬油、味噌、酢、漬物販賣

當洋行は個人經營にて明治三十九年九月の開設なり

營業主　田中安之助　静岡縣濱名郡新居町一一九九番地　安政元年十一月十一日生　夫人たま　四十九歳　男四名　女四名

◉指谷商店　大連市信濃町市場一八號地（電話八七六番）

營業　生魚商

當商店は大正三年十二月の開設にして個人經營なり

營業主　指谷忠藏　奈良縣吉野郡大淀村字西増番外八番地　四十二歳　夫人みさを　三十六歳

◉鎮南浦馬場精米所大連出張所

營業　米穀卸商

本店は朝鮮鎮南浦に在り馬場嘉藏氏の個人經營なり大連支店は明治三十八年の開設にして現主任は明治三十七年十一月山縣商會大連支店員として海洋島に上陸し三十八年一月大連支店詰となり大正三年六月當出張所主任となれり

主任　金子八朔　北海道根室郡和田村七九番地　明治十四年八月十四日生　夫人美登　三十歳

◉**福本商店**　大連市磐城町一三號地（電話六八五番）

營業　果實並野菜問屋

當商店は明治四十三年七月創業にして個人經營なり

營業主　福本升平　德島縣德島市佐古町一二番地　三十八歲

◉**柴谷合名會社出張所**　大連市信濃町三五號地（電話六三四番）

營業　酒類販賣

本店は大阪府堺市に在り大連に出張所あり

大連出張所は明治三十八年八月の開設に屬す

大連出張所主任　松山治郎　大阪府堺市甲斐町東三ノ一八　三十七歲　夫人うめ　四十歲

外店員　九名

◉**中村商店**　大連市磐城町一五號地（電話五五八番）

營業　副食物並に米穀、味噌醬油販賣
並に陸軍用達業

當商店は個人經營にして市内市場に二箇所埠頭に一箇所及柳樹屯に支店を有す營業主は明治二十八年臺灣に航し臺南に於て食料雜貨商を營みたりしか三十八年日露の役に際し渡滿營口にて食料雜貨商を開始し三十九年現所に轉來して現業を開始す

營業主　中村榮吉　神奈川縣中郡秦野村五四〇番地　明治六年十月十八日生　妻さい　三十九歲

◉**福義洋行**　大連市監部通二丁目九七號地（電話一三九番）

營業　麥粉、砂糖、雜貨販賣

當洋行は個人經營にて大正二年の開設なり

營業主　友淸義一（人事參照）

◉**武山洋行**　大連市監部通四八番地（電話五三九番）

營業　酒及雜貨商並に貸家業

當洋行は明治四十年七月の開設にして個人經營なり

營業主　武山春二　愛知縣名古屋市西區和泉町一一番地　四十六歲

外店員　六名

◉**池田商會**　大連市伊勢町八號地（電話七〇二番）

營業　酒類卸商並貸家業

當商會は明治三十九年の開設にして個人經營なり

營業主　出本國夫（二十五歳）

◉松村兄弟商會　大連市西通一丁目六七號地（電話長九七一番　振替一三八番）

營業　菓子原料卸問屋、菓子類、洋菓子、米穀、雜穀、木炭販賣並貸家業

當商會は明治三十九年三月二十四日の創業にして松村兄弟の共同經營なり市場に小賣店を有し靑島に支店を有す

營業主　松村倉八　熊本縣飽託郡出水村字萬石九五〇番地　慶應二年八月生　夫人さわ　四十六歳　男四名　女一名

◉鈴鹿商店　大連市伊勢町三號地（電話八五八番）

營業　酒釀造及販賣

當商店は明治四十年六月の創業にして個人經營なり

營業主　鈴鹿五三郎　京都市上京區分銅町三番戸　三十四歳　夫人まつ　二十七歳　男一名

◉木村洋行　大連市岩代町二一號地（電話一〇一一番　振替大連六四八番）

營業　醬油、ビール、麻裏、鰹節、茶及酒類、蜜柑の販賣

當洋行は個人經營にて明治四十一年四月の開設なり

營業主　小坂安次郎　靜岡市横内町四十五番地　四十四歳　夫人うた子　三十歳　男一名　女二名

樂器、書籍、銃砲火藥商

◉山葉洋行　日本樂器製造株式會社大連支店

大連市信濃町五〇號地（電話長三〇六番　長一三七番　攝津町家具工場　長二〇七番　朝日町材木部　長二一〇番）（電略歐文（ヤマハ）振替大連八二番）

營業　西洋樂器、西洋家具、室內裝飾品、塗料材木、建築材料一切販賣

當社は資本金六十萬圓（全部拂込濟）の株式組織にして最初山葉寅楠氏西洋樂器の輸入防遏の目的を以てオルガン製造を開始せり是れ日本最始のオルガン製造者なり其後合資組織と成り明治二十八年株式組織に變更し資本を十二萬圓より二十四萬圓に增加し更に六十萬圓に增加せり大連支店は明治三十八年山葉氏個人事業として山葉洋行を開始し四十年事業の有望なるを觀て支店に變更し以て今日に迨ぶ家具製造工場を市內攝津町に又製材工場を朝日町に置く奉天

新市街及青島深山町に出張所あり

本社々長　山葉寅楠
副社長　天野千代丸
大連支店長　平井大次郎（人事參照）
支店主任　林慶吉
營業部主任　中村正司
奉天出張所主任　藤原昭淵
青島出張所主任　中矢安平

株式會社日本蓄音機商會大連出張所

大連市大山通二丁目三八號地（電話二一九五番）

營業　蓄音機並に附屬品一切の販賣

本社は東京市銀座一丁目に在り資本金一百萬圓（全額拂込）の株式會社（株主は外人及日本人）にて日本全國及滿洲等各地に三十餘箇所の出張所を置き更に無數の特約店を開設せり又製造工場は神奈川縣川崎町字久根崎に在りて其規模設備共に壯大なり

大連出張所は大正元年十月の設立にて商品及金錢出納は原簿を本店に置き損益には直接關係なく賣上金を送附して經費は別途支給を本店より受くる事させり月賦販賣法は頗る時好に投じつゝあり

本社社長　ゼー、エフ、ダブリユー、ホーン
總支配人　ゼー、エー、ラビツト
支配人　吉武作助
大連出張所主任　佐々木定治郎（人事參照）

特約店　大連市近江洋行、櫻村洋行、旅順 正美堂、奉天 藤田洋行、安東縣 渡邊支店、新民府庄司洋行、長春 加藤洋行支店、天津 副華洋行、營口 近江洋行、天津 松田洋行、青島 成三洋行

大阪屋號書店

大連市大山通一丁目二八號地（電話六〇八番 振替大連五五番）

營業　內外圖書雜誌並文房具販賣

本店は東京市日本橋區北鞘町十番地に在り濱井松之助氏の個人經營にして京城及大連に支店を有し支店の下に數ヶ所の出張店を有す

大連支店は明治三十七年十月營口に店舖を設け書籍及雜貨業を開始せしに始まり其後四十一年一月現在所に來轉せり

營業主　濱井松之助　東京市日本橋區北鞘町一〇番、明治八年十月十四日生、母堂よし六十五歲、夫人ゑん三十一歲、男弘七歲

大連支配人　濱井金次郎
旅順主任　石川九太郎
鐵嶺主任　大谷愛三郎

◉天野滿書堂

大連市大山通二丁目三二號地（電話九九四番）

營業　書籍並に文具類販賣

當書店は明治四十年四月の開設にて個人經營なり

營業主　天野節次郎　愛媛縣温泉郡三津濱町字心則町二七番地、四十八歳、夫人いわ四十七歳

◉田崎銃砲店

大連市吉野町二丁目四號地（電話長七四五番）（振替大連一七四番）

營業　銃砲火藥類販賣

本店は明治三十年大山通に創設す當時共同經營なりしも同四十年六月個人經營に變更さ同時に現在所に移轉す斯業の成功者にして取引最も手廣し

營業主　田崎綱二郎（人事參照）

◉日滿商會

大連市吉野町一丁目二三號地（電話二六六番）（振替大連一二八九番）

營業　火藥並に銃砲販賣

當商會は個人經營にて明治四十三年七月愛宕町に開店し四十四年大山通りに轉じ大正元年又羽前町に轉じ大正四年九月更に現在所に新築移轉す田崎銃砲店と與に信用あり

營業主　今村貫一（人事參照）

◉日本賣藥株式會社大連支店

大連市濱町三丁目一一號地（電話四五六番）

營業　株主及株主外の製造販賣する賣藥並に藥品其他醫療器械、衛生材料等の輸出販賣

本社は東京市神田區錦町一丁目に在り明治三十九年十一月十五日の創立にて東京、大阪の藥業者及び藥學者二百二十五名より成る資本金二十萬圓（拂込十四萬圓）の株式會社なり同四十年五月新嘉坡に支店を開き四十一年印度、シャム、瓜哇、ラングンに出張所を設く

大連支店は明治三十九年十二月二十三日の創設にして大正四年六月青島に出張所を開設せり

大連支店取締役兼支店長　花岡千波（人事參照）
藥劑師　稻垣宗太郎
販賣主任　鹽見勇
外十七名

◉井上誠昌堂

大連市濱町三丁目一〇〇號地（電話一一六六番 振替大連一二〇番）

營業　藥種販賣

本店は資本金十萬圓の合名會社にして富山縣高岡市に在り大連支店は初め大山通りに開舖したるが四十四年八月現在所に移轉せり（奉天井上誠昌堂參照）

主任　井上伊次郎　富山縣高岡市鴨島町二番地、四十四歲、夫人秀子二十九歲、男三名

◉島久商店大連出張所

大連市大山通二丁目一一號地（電話七四四番）

營業　藥種商

本店は東京日本橋區本町四丁目に在り其組織は合名會社なるも主として代表社員島田久兵衛氏の經營に屬せり

大連出張所は明治四十五年の創設にて醫療、理化學工業藥品機械の販賣を主とす醫療機械はいわしや岩本商店ラジュウム製品、器械は株式會社ラジュウム商會理化學器械、標本は三省堂株式會社、各種滋養劑は和光堂、醫療用陶器は八神商店、自働安全酸素發生吸入器は日光商會、酒精はトムソンハンナム商會の各特約販賣を爲せり

大連支店主任　松澤萬三人　長野縣下伊那郡上鄉村七五六番、二十七歲、夫人榮二十歲
外店員三名

◉河村大正堂

大連市伊勢町一六號地（電話九五二番 振替大連六〇六番）

營業　處方調劑並醫術物理及化學機械販賣

當堂は大正三年九月の創業にして個人經營なり

營業主　河村江　京都市岡崎町五番戶、四十八歲
外店員五名

◉洪盛堂溝上藥舖

大連市伊勢町五〇號地（電話一八〇番 振替大連四六番）

營業　藥種販賣

營藥舗は明治三十九年十月の創業にして個人經營なり

營業主　溝上松次郎　佐賀縣西松浦郡有田町六八四番地 夫人すゑ五十歲、孫一名

◉松内楠陽堂　大連市伊勢町九號地　（電話九八七番）

營業　藥種商

營業主　松内龜太郎　大阪府南河内郡藤井寺村、三十八歲、夫人まき二十七歲、男一、女一

當商店は明治四十二年の開設にして個人經營なり

◉小林回生堂　大連市吉野町二丁目四九號地　（電話四一四番 振替大連一二一番）

營業　藥種並に小間物化粧品販賣

當商店は明治三十八年二月の創業にして個人經營なり

營業主　小林　巻助　愛媛縣周桑郡小松町新屋敷一八一番、四十二歲、夫人けさ四十三歲

◉東瀛大藥房支店　大連市監部通二丁目　（電話一四三三番）

營業　藥種、賣藥

本店は營口に在り大連支店は大正二年十一月に開設さる（營口東瀛大藥房參照）

大連支店主任　山根哲次郎（藥劑師）

◉村井延壽堂藥房大連支店　大連市伊勢町六〇號地　（電話長七六八番 振替大連四六番）

營業　藥種商

本店は奉天鐘路南大街に在り村井松二郎氏の個人經營に屬す大連支所は明治四十五年三月開設さる（奉天村井延壽堂參照）

大連支店主任（營業主）　村井松二郎　大阪市東區安土町一丁目二番地、四十六歲、夫人すゑ二十八歲、男二名

貴金屬、諸雜貨商

◉樫村洋行　大連市伊勢町四九號地　（電話長七三八番 振替大連七九番）

營業　時計並寫眞材料販賣

當洋行は明治三十八年十二月の開設にして個人經營なり初め市内磐城町に開店したるが四十年十二月現在所に移轉す奉天小西門外に支店を有す

大連本店主　樫村　ふじ（人事參照）
奉天支店主　樫村　保

◉志岐組雜貨部　大連市濱速町二丁目四四號地（電話四一七四番 振替大連二八番）

營業　歐米雜貨

當雜貨部は明治三十八年の開店にて個人經營なり一箇年の賣揚高五萬圓内外に上る目下店主は東京在學中なるを以て若林亮助氏支配人として業務を管理しつゝあり青島に支店を有す

店　主　志岐信四郎（東京在學中）
支配人　若林　亮助
支店青島靜町二八番地　主任　若林　亮助
外店員三名

◉岩倉洋行　大連市濱速町八六號地（電話六〇五番）

營業　尾州產下水用土管並に荒物、世帶道具、雜貨卸小賣

當洋行は明治三十八年八月の開設にて個人經營なり店舖は初め信濃町にありしが後現地に新築移轉す

營業主　山内土佐治郎　愛知縣海部郡美和村字木田一三一番地、明治十年八月一日生、夫人千代二十六歳、女二名、男一名

◉松浦屋支店　大連市吉野町二丁目三一號地（電話一二八番）

營業　活版印刷業並に諸紙文具販賣

當商店は明治四十一年の開業にして個人經營なり

營業主　岡田敬五郎　德島縣阿波郡大股村上喜來七三番地、平民
外店員十二名

◉浪華洋行　大連市濱速町二丁目四十二號地（電話一三二番）

營業　和洋雜貨商

當店は個人經營にして明治三十八年五月開業す

營業主　赤松　常吉　大阪市東區今橋五丁目八番地、慶應二年五月三十日生
支配人　石垣　庄八

◉近江洋行　大連市濱速町二丁目三四號地（電話四四六番）

營業　時計、貴金屬裝身具、眼鏡、寶石、蓄音器類販賣

當洋行は明治三十八年六月の開設にして個人經營な

り米國ウォルサム時計會社、同エルジン時計會社、瑞西國ウイルカ時計會社製品の直輸入及び東京蓄音機會社の代理店なり青島に支店を有す

營業主 河合 美雄 滋賀縣犬上郡彦根東紫二四番地、明治十三年十月三日生、夫人八重 三十二歳、男三名、女三名

青島支店主任 小野與惣次郎

◉平田洋行 大連市浪速町二丁目四〇號地（電話四三四番 振替大連八〇番）

營業 時計、貴金屬、地金銀商

當洋行は個人經營にして明治三十八年六月市內監部通二丁目に開業し四十三年五月現在所に移轉せり一定の資金を三分し一は商業資金に一は土地建物有價證券に一は總ての有利事業に投下す現今前記營業の外柳行李製造販賣、沈沒船引揚並に漁業、農園、貸家業等有ゆる事業に著手經營しつゝあり

營業主 平田 包定 （人事參照）

商業部 森 政吉 清末淺次郎 中村喜三郎 外五名

柳行李製造工場 主任 住田與四郎 外十八名

全家村農園 主任 大竹幸助 外五名

大孤山及三山島沈沒船引揚及漁業 主任 西島彌吉 外六十五名

貸家業 主任 小笠原幸二郎

◉一ノ瀬商會 大連市浪速町三丁目九六號地（電話三八九番 振替大連四〇五番）

營業 和洋雜貨類販賣、英米トラスト煙草會社總代理店

當商會は明治三十八年市內東郷町に開設し同三十九年十一月浪速町に移轉す四十一年組織を合資會社に變更せしも大正三年四月都合により合資組織を解散して再び個人經營とせり

營業主 森谷 重八 （人事參照）

◉堀內驛三郎支店 大連市信濃町六九號地（電話五六番 振替大連八番）

營業 諸紙雜貨販賣

本店は大阪にあり個人經營なり

大連支店は明治三十九年八月一日の創業にして和洋紙、文具、表具襖用品、並に板紙特約販賣及び貸家業を營む

營業主　堀内驛三郎（人事參照）
外店員四名

◉吉田紙店　大連市濱速町三丁目四八號地（電話五七五番）

營業　和紙販賣
當店は個人經營にして明治三十九年十一月の開店にて初め伊勢町四十二號地に店舖を有したりしが四十二年七月現所に轉居せり
營業主　吉田竹三郎　明治四年七月七日生、夫人やす三十三歲、男三名、女一名

◉澁谷洋行　監部通一丁目一四號地（電話四〇七番）

營業　和洋雜貨類販賣
當店は個人經營にて明治三十八年七月一日開業す
營業主　澁谷正吉
支配人　關井清七　原籍東京日本橋區室町九番地、文久三年五月二十八日生、夫人さめ明治七年生

◉矢代洋行　大連市信濃町四五號地（電話八一五番　振替大連一七七番）

營業　蜜柑、履物卸販賣、雜貨、並に貸家業
當洋行は明治三十三年旅順に於て開設し明治三十九年市內伊勢町に來轉し大正三年九月亦た現在所に移轉せり
營業主　矢代善次郎　愛知縣名古屋市鹽町三一番地、四十六歲、夫人あさ三十二歲、男二名、女二名

◉白石洋行　大連市磐城町三八號地（電話五七一番　振替大連三一番）

營業　和洋雜貨、小間物、化粧品販賣並に貸家業
當洋行は個人經營なり明治三十九年十月同町二十號地に開店し四十二年同町四十號地に移轉し四十四年亦現在所に新築移轉せり青島靜岡町三十一號地に支店を有す
營業主　白石保喜　熊本縣八代郡和鹿島村字鹿島、三十七歲、夫人ゑい子三十六歲、女三名
青島支店主任　田中善三郎

土木建築請負業

◉福昌公司　大連市山縣通一六三號地（電話九四番　四七二〇番）

營業　苦力供給、土木建築請負、煉瓦製造販賣

石材積出、保險、東京製鋼會社、報國火災保險會社代理店、日英貿易商會、ロスフワルチルク鐵材塗料一手販賣

當公司は個人經營にして明治四十二年十一月設立さる業務は頗る廣汎にして多岐なるも主たる者は埠頭苦力の供給及土木受負に在り埠頭苦力の供給は毎日六七千人より多きは一萬人に及ぶ此の多數苦力收容の爲めに寺兒溝に二箇處の大收容所を建設せり別に煉瓦工場を有するも其製品は多く自家用に供するに止まれり此他農園及び土地、貸家業を經營し所有せる土地家屋は頗る優勢なり營口に埠頭支店あり

營業主	相生由太郎（人事參照）
會計主任	谷口吉次
庶務主任	池田麗太郎
土木主任	坂崎太彌七
埠頭主任	拓植忠夫（人事參照）
事務員	田中知平
同	是永熊雄
營口主任	宮本平一郎

◉菅原工務所　大連市伊勢町五九號地（電話二六九番）

營業　土木建築請負

當工務所は初め明治三十二年六月菅原恒覺氏により東京に創立せらる同三十八年二月大連に菅原工務所支店を設置し專ら土木建築請負業に從事せしが同四十一年二月に至り菅原恒覺氏は別に鐵道工業合資會社を設立して退所したるに依り有賀定吉氏は菅原工務所の權利義務一切を繼承して營業しつゝあり營業主は安奉線改築に當り百六十餘萬圓の大工事を二箇年間に見事に竣成せしめて斯界の信望を博せり

營業主	有賀定吉（人事參照）
相談役	菅原恒覺　馬場兼
大連建築部	山縣通六六號地（電話一三七〇番）
主任	長谷川辰二郎
安東出張所	四番通二番地（電話三三番）
主任	田崎十三郎
京城出張所	旭町二丁目二七一番地（電話一六八九番）
主任	佐藤眞一
青島出張所	大阪町六號地（電話一一九番）
主任	塚生二郎

◎合資會社加藤洋行

大連市山縣通四八號地（電話二八三番 八〇七番）

營業　雜貨、羅紗、板硝子、塗料、金物、建築材料販賣、土木請負、並生命火災保險代理業

本社は天津租界旭街四十九號地に在り初め加藤定吉氏の個人經營にて天津、北京及滿洲に於て加藤洋行の標榜の下に商品販賣並に請負業を營み來りしが大正四年六月十日組織を變更して資本金四十萬圓の合資會社とし從來の業務を繼承せり北京、營口、長春、大連及び京城、大阪に支店を有す

大連支店は明治三十三年の創設にして業務を雜貨、工事の兩部に分かてり

本店　天津租界旭街四九號地
代表社員（無限責任社員）　小池楠次郎
有限責任社員　加藤定吉
大連支店支配人　田邊三樋
營口支店支配人　根岸協
北京支店支配人　根岸貫
長春支店支配人　權田虎城
大阪支店支配人無限責任社員　小池楠次郎
京城支店支配人　末　定

◎飯塚工程局

大連市西公園町ノ區三八號地（電話一六二番）

營業　土木請負業

當工程局は明治三十三年十月の開設にして個人經營なり初め天津に於て開業し軍隊用達並に請負業を經營したりしが三十八年七月營口に轉し四十一年更に現在所に轉せり營口、奉天、大石橋に支店を有し斯界に信用厚く老虎灘、于家屯に農場を兼營す

營業主　飯塚松太郎（人事參照）

◎大倉組

大連市加茂川町ミ區二號地（電話三三二番）

營業　土木建築請負

當組は資本金壹千萬圓の株式會社大倉組の土木部出張所にして其開設は明治三十八年五月に在り滿洲に於ける同組の土木業務を掌理して大倉組商業部とは全く關係なし奉天、本溪湖、連山關、安東縣、青島等に出張所あり皆當部の管轄に屬す

大連土木部主任　橫山信毅（人事參照）
奉天出張所主任　中島安太郎
本溪湖出張所主任　加藤貞利
連山關出張所主任

安東縣出張所主任　山中彦三
青島出張所主任　寺島昇

◎久保田勇吉　大連市山縣通一四一番地（電話六七七番）

營業　土木建築請負

營業主は明治二十一年以來土木請負業に從事し同四十年渡連現所に現業を開始す目下小崗子南財神街及乃木町に出張事務所あり

營業主　久保勇吉　岐阜縣養老郡高畑村、慶應二年五月五日生、夫人いさ三十九歳、長男勇九歳

乃木町出張事務所　乃木町一四號地（電一四二八番）

小崗子出張事務所　小崗子南財神街三六號地（電一〇六一番）

◎大庭商會　大連市紀伊町一五號地（電話一三〇五番）

營業　土木建築請負

當商會は明治三十八年七月の開設にて山葉洋行建築部の名義の下に營業主之れを經營し來りしが大正四年十一月より大庭商會と改稱し名實共に現營業主の經營となれり

營業主　大庭仙三郎（人事參照）

◎白川洋行　大連市監部通七四號地（電話一五三番）

營業　土木建築請負、並に石材販賣

當洋行は明治三十九年一月の創業にして個人經營なり大石橋及び遼陽に支店を有す

營業主　白川友一　香川縣仲多度郡南村大字垢原村三七六番地、四十三歳、夫人よね子四十一歳、男一名

大石橋支店主任　山田恭信

遼陽支店主任　村橋信藏

◎須藤工務所　大連市天神町五十五號地（電話一〇八七番）

營業　土木建築請負

當工務所は明治四十一年八月の創業にして個人經營なり大石橋に出張所あり

營業主　須藤清吉　大阪市北區東梅田町二九一、元治元年七月生、夫人春子四十三歳

大石橋出張所主任　田中常輔

◎順華公司　大連市山縣通一〇二號地（電話一一二二番）

營業　土木請負、勞力供給、保險代理、石炭販賣

當公司は明治四十三年十二月の開業にして個人經營なり

營業主　樋口　滿　（人事參照）

◉伊藤工務所　大連市西公園町ヶ區八號地（電話二三八番）

營業　土木請負、倉庫、並に貸家

當工務所は個人經營にして營業主は三十七年朝鮮鐵道の請負工事に從事し三十八年渡連翌三十九年現工務所を開設せり

營業主　伊藤　卓馬　福岡縣小倉市田町一八八番地、士族、元治元年一月生、夫人さも四十歲

◉柳生組　大連市寺内通一丁目一番地（電話七四〇番）

營業　土木請負並に貸家業

當組は個人經營にて營業主は明治三十八年五月旅順に來り陸軍及海軍の工事請負をなし四十三年滿鐵會社の指定請負人となり大連に出張所を設置したるが四十五年本店を大連に移つし旅順、鐵嶺、長春、遼陽に支店を設置したり

營業主　柳生　龜吉　福岡縣京都郡豊津村一七二番地、慶應三年十一月生

遼陽支店主任　辻本　嘉祐

◉大順公司　大連市西公園町ヤ區三一號地（電話七二四番）

營業　土木請負、勞力供給、石材粘土販賣

當公司は個人經營にして營業主は明治三十九年中學卒業後直に渡滿四十三年四月一日當公司を開設せり目下貔子窩及復縣五湖咀に出張所を有す

營業主　櫻井　豪　宮城縣志田郡三本木町南谷地四〇番地、二十八歲、父君秀治五十四歲、母堂よし五十二歲

貔子窩出張所主任　佐藤　平壽

復縣五湖咀出張所主任　渡邊　哲次

◉荒井組　大連市西公園町ヤ區三四號（電話二三七番）

營業　土木請負

本店は京城の龍山漢口二丁目に在り荒井初太郎氏の個人經營なり

大連支店は明治四十二年の創設に屬す

大連主任　青木　正保　石川縣金澤市犀川下川除町四十九番地、文久二年一月生、夫人初子四十六歲、男一名

土地賣買、貸家、質業

◉土地建物株式會社
大連市山縣通福昌公司内（電話九四番 七二〇番）

營業　土地賣買貸付、並に家屋貸付及管理

當會社は明治四十二年四月の設立にして資本金五十萬圓（全部拂込濟株數一萬株）の株式組織にして株主の重なるは東京大阪の有力者及び當地三井物産に關係ある者にして總數二十名なり大連市中有數の土地家屋は多く當會社の所有に屬す

専務取締役　長谷川鉦五郎　取締役　相生由太郎
同　島德藏　同　山邊丈夫
監査役　馬越恭平

◉淺沼定之助
大連市山縣町〆區二六號地（電話九二九番）

營業　貸金並に貸家

明治四十年三月渡連以來專ら現業に從事し巨財を積めり

營業主　淺沼定之助　岐阜縣安八郡大垣町林本郷七八番地、四十一歳、夫人豐子三十四歳、男二名、女四名

◉岸田菊太郎
大連市濱速町四丁目一〇七號地

營業　貸家

明治四十年以來專ら貸家業に從事す

營業主　岸田菊太郎　廣島縣加茂郡西志和村字別府、四十二歳、夫人いその三十三歳、男一名、女一名

◉辰村洋行
大連市吉野町一丁目一號地（電話三〇一番）

營業　貸家、土木建築請負

本店は金澤市片町八七番地に在り辰村米吉氏の個人經營なり

大連支店は明治三十八年の創設に屬す

大連支店主　澤田保嘉次郎　石川縣金澤市鈴町二三番地、四十七歳、夫人すぐ三十八歳、女二名

◉奥村洋行大連支店
大連市磐城町二九號地（電話六一五番　長替一〇五番）

營業　古着類販賣、質、貸家

本店は大阪市天下茶屋丸山に在り奥山千吉氏の個人經營なり

大連支店は明治三十八年十一月開業す

大連支店主任　山崎治吉

◉川村洋行　大連市若狹町サ區一二號地

營業　貸家竝に陶器販賣

當洋行は明治三十八年の開設にて個人經營なり

營業主　川村義郎　靜岡縣濱名郡三方原村三五番地　四十二歲　夫人いわ子　三十二歲

青島支店　主任　伊藤太郎

◉大神支店　大連市岩代町二九號地（電話三五四番　振替大連一〇一番）

營業　質、古着商、竝に貸家

本店は長崎市新大工町五十九番地に在り大連支店は明治三十九年四月の開設にして沙河口に支店あり

營業主　林田與作　長崎縣長崎市新大工町五九番地　四十歲　男二名

◉吉野越次　大連市若狹町フ區四七號地

營業　貸家

明治四十二年より開業、個人經營なり

營業主　吉野越次（人事參照）

◉富士屋　大連市信濃町二六號地（電話一一〇一番）

營業　下駄卸販賣、竝に貸家

當商店は明治四十一年七月の開設にして個人經營なり貸家業頗る優勢なり

營業主　景山忠夫　大阪府北堀江二丁目二〇番地　四十歲　夫人るゑ　三十四歲　男一名

◉若田洋行　大連市越後町ナ區二三號地（電話八〇六番）

營業　貸家

當洋行は明治三十八年三月の創業にて個人經營なり營業主は初め營口に於て日用雜貨一切の販賣を營みしが三十九年末大連に轉來し信濃町にて材木、金物和洋雜貨、果物等の販賣業を營み四十一年よりは貸家を專業とせり

營業主　若田久幾　愛媛縣溫泉郡三津濱村三穗町四十七番地　四十八歲　夫人せん　四十三歲

管理人　田中種治郎　愛媛縣溫泉郡東中島村字宿浦二一一番地　三十二歲　夫人ひさの　二十二歲　女一名

◉三宅組　大連市信濃町一丁目八二號地（電話四一五番）

營業　貸家、竝に請負

當組は明治三十八年の創設にして個人經營なり

營業主　三宅　如平　岡山縣糸川上郡大賀村八五三番地 三十二歳、夫人ちか、三十三歳

◉和田質店　大連市吉野町三丁目五六號地（電話八二九番　振替大連八九八番）

營業　質

當店は明治四十三年十二月の開設にて個人經營なり

營業主　和田　鐵馬　長崎縣南高來郡南串山村七四〇番地、四十一歳、夫人きく二十五歳

◉寺田商會　大連市磐城町七二號地（電話六二一番）

營業　貸家

當商會は明治四十一年の設立にして個人經營なり

貸家五十戸を有す

營業主　寺田元之助　大阪府下泉南郡岸和田町三〇番地

支配人　奥野　福松　大阪府下泉南郡西葛城村大字木積 四十三歳、夫人みちよ二十三歳、女二名

◉豊前屋　大連市東鄕町二丁目一七號地（電話一一一七番）

營業　質、竝に古物販賣

當商店は明治三十九年一月の開業にして個人經營なり若狹町々區五六號地に支店あり

營業主　鍋島　吾造

◉小菅洋行　大連市岩代町一號地

營業　呉服、竝に貸家

當洋行は個人經營にて明治四十年八月の創業なり

營業主　小菅伊兵衛　滋賀縣犬上郡高宮町八二番地、文久三年十月生、夫人みれ四十七歳 男一名

◉土橋質店　大連市伊勢町二八號地（電六一〇番）

營業　質

當質店は明治四十一年の開設にして個人經營なり

營業主　土橋　儀助　和歌山縣和歌山市港北町一丁目一二番地、四十八歳、夫人くすゑ三十四歳、男一名、女五名（人事參照）

◉岡田商會　大連市信濃町六七號地（電話八九二番）

營業　質、貸家

明治三十九年一月の開始にして個人經營なり

營業主　岡田　庄松　廣島縣御調郡三原町、三十八歳、夫人うめ三十三歳、男三人女一人

當店はモルヒネ思惑を試みて失敗し營業主は大正四年十一月[illegible][illegible]せるを以て之れを削除す

◉須賀商店　大連市磐城町六四號地（電話八二三番）

營業　貸家、並に代理業

營業主　須賀文吾　愛知縣名古屋市東道東町一五番地四十八歲、夫人すゑ四十三歲、男三名、女二名

當商店は個人經營にて明治三十八年十月の創業なり

◉和田喜十郎　大連市駿河町二七號地（電話一一五〇番）

營業　土木請負、貸家

營業主　和田喜十郎　愛媛縣温泉郡北吉井村七三九番地三十四歲、夫人まつ二十歲

明治三十八年九月の創業にして個人經營なり初め土木請負業に從事し四十三年五月以來貸家を兼業せり

◉瀧口屋質店　大連市常盤公園町一四號地（電話七三四番）

營業　質屋

營業主　合田吉治　大阪市東區本町四ノ一六七番地、四十一歲、夫人たみ三十七歲、男一名

當質店は明治四十一年十一月の開設にて個人經營なり

◉山口質店　大連市磐城町三四號地（電話九五四番）

營業　質、並に貸家

營業主　山口豐太郎　廣島縣安佐郡龜山村四番地、四十八歲、夫人こよ四十一歲女二名

當質店は個人經營にて明治三十九年四月の開設なり

◉大塚質店（神戸屋）　大連市磐城町七五號地（電話三四八番）

營業　質、兼貸家

營業主　大塚兼吉　四十九歲、夫人しか子三十三歲、男二名、女二名

外店員一名

本店は明治三十九年四月の開業にして個人經營なり

◉石丸幸作　大連市西通二丁目三九號地（電話八八八番）

營業　貸家

營業主　石丸幸作　愛媛縣周桑郡中川村七九〇番地、四十五歲、夫人すみよ三十二歲、男二名、女二名

大正三年四月以來貸家業を開始す

◉久壽屋質店　大連市奥町一丁目一三號地（電話三六八番）

營業　質、並に貸家

當質店は明治四十三年四月の開設にして個人經營な

り一ヶ月貸出金高平均二千圓内外に上る

營業主　楠　正彦　香川縣大川郡丹生村九九二番地、三十八歲、夫人しげ三十七歲、男三名、女一名

外店員　一名

◉第二博多屋　大連市若狹町一區二七號地

營業　質業

當商店は大正二年四月の開設にして個人經營なり經營者楢崎氏は明治三十八年十月渡清以來與村質店主任として店務全部を擔任し來りたるが大正二年四月辭して現在所に現業を開始したり

營業主　楢崎　常吉

◉貸家兼業者　上記專業者の外大連民間有力者は本業の外多く貸家を經營せり其內優勢なるは

△篠崎　豊彦（貸金業）
△堀內驛三郎（堀內支店紙文具商）
△相生由太郎（福昌公司受負業）
△濱　竹松（濱恒支店材木商）
△高橋峯次郎（骨董商）
△松村久兵衛（正隆銀行員興隆號組合員）
△河盛恒次郎（河又分店醬油業）
△今津　十郎（今津支店材木業）
△白石　保吉（白石洋行）
△伊藤卓馬（伊藤工務所土木請負業）
△荘　晋一（德海屋洋服商）
△佐藤汲七郎（貸金業）
△鈴木新五郎（大連銀行支配人）
△中島　熊楠（中熊材木店）
△村井　隆治（村井材木店）
△加地兼治郎（湯屋業）
△小川慶治郎（小川洋行醬油製造）
△長濱　傚介（永順洋行貿易商）
△有賀　定吉（菅原工務所土木業）
△景山　忠太（富士屋履物商）
△中村　榮吉（中村商店食料品）
△河邊　勝（松茂洋行船舶業）
△村上　寅藏（村上商店薪炭商）
△天野節次郎（天野滿書堂書籍商）
△阪井　慶治（成三洋行西洋家具）
△近藤寛治郎（近藤醫院長）
△志岐　組（西洋雜貨商）
△村山瀧三郎（村山商店貿易商）
△角田市郎兵衛（角田支店貿易商）
△山田　三平（遼東ホテル）
△平井大治郎（山葉洋行樂器類商）
△浪華　洋行（西洋雜貨商）
△臼井　熊吉（臼井洋行貿易商）
△兒島　幸吉（兒島支店製氷業）
△山田　寶史（日東洋行船舶代理）
△福田顯四郎（水產會社專務）
△佐藤　至誠（佐藤組石炭商）

營業　石炭販賣業

本社は東京日本橋區呉服町十番地に在り荒井泰治、藤崎三郎助、安藤達三、高橋是賢、槇哲、神代辰三郎諸氏の出資に成る二十萬圓の合資會社なり新瀉、臺灣に出張所を、大連に支店を置く

大連支店は大正元年八月二十八日の設立にて撫順炭の海外輸出を專業とす

大連支店主任　齋藤茂一郎

●大東公司　大連市山縣通一四三番地　（電一一一六番）

營業　滿鐵石炭及練炭販賣

當公司は大正四年二月の設立にして匿名組合經營なり

代表者　筧　文造　（人事參照）

●佐藤組　大連市佐渡町五號地　（電話三四一番）

營業　官煙及石炭販賣

當組は個人經營にて明治三十八年四月の開設なり旅順鯖江町、青島天滿町並に市內美濃町に出張所あり

營業主　佐藤　至誠　（人事參照）

●共同組　大連市監部通二丁目四二號地　（電話長三〇九番 一一八四番）

營業　撫順炭特約販賣、大連取引所仲買業並に煉瓦、屋根瓦製造販賣

當組は明治四十一年の創立にして當初三名の共同經營なりしが漸次權利を買收して個人經營となれり

營業主　齋藤久次郎　（人事參照）

●杉田支店　大連市西通一丁目三〇號地　（電話長五七〇番）

營業　木炭、火山灰並にセメント販賣

本店は大阪西區北堀江通一丁目に在り個人經營なり

大連支店は明治三十九年七月の開設に屬す

營業主　杉田　與平　大阪市西區北堀江通一丁目、三七歲、夫人ふく三十二歲

魚市場、漁業

●滿洲水產株式會社　大連市信濃町　電話（一五七番 五三三番）

營業　魚市場、漁業、漁業資金の貸附、乾鹽業の製造販賣、特殊漁業、及び陸軍用達

當會社は資本金十八萬圓（三千六百株、一株五十圓、拂込額一株に付二十二圓）にして明治三十八年設立せし關東魚市場を繼承して同四十年之れを株式組織に改めたる者なり爾來七星霜、其間幾多の犧牲を拂ひ惡戰苦鬪して漸く今日の基礎を築き得たり一箇年賣上高本支店を通じて約六十五萬圓內外に上り漸次好景氣の現況に在り

專務取締役　福田顯四郎（人事參照）取締役　相生由太郎（同上）
取締役　高田　友吉　取締役　山口　世基
監査役　拓殖　忠夫（同上）監査役　村田峯太郎
支配人　松山孝太郎
旅順支店舊市街朝日町　主任　谷野重次郎
柳樹屯出張所　主任　磯野　萬丈

炭鑛業

◉和盛公司　大連市松山臺　電話（園二〇三番 一二二番）

營業　炭鑛、農園、土地家屋、銀行業等

當公司は石本鏆太郎氏の個人經營なり從來同氏は和盛公司の名の下に銃砲及賣藥業を營みしが大正四年十月より和盛公司本店を其自邸構內に創設し之れが事務所を新築して其經營管理せる牛心臺炭鑛、李家屯農園、東京教育貯蓄銀行、土地、家屋、雜誌社等に關する一切の事務を總轄する事とせり

總辨　石本鏆太郎（人事參照）顧問　加藤　尙志
庶務主任　小松　利宗　會計主任　北村　亨吉
奉天出張所主任　石本權四郎（人事參照）

葬儀業

◉大連禮裝株式會社　大連市西通二丁目（電話八八八番）

營業　裝飾請負、神佛葬儀、裝飾用具、神佛用具販賣

當社は從前大連に於て葬儀業務を營みし白蓮社及白仁田氏等を合同組織したる資本金五萬圓（拂込一萬二千五百圓）の株式會社にして大正二年七月創立せり前年期は一年を通じて平均一割二分五厘の配當を爲し本年前期は一割の配當を爲せり後期を通じて一割二分五厘の配當を爲し得べし

社長　吉野越治（人事參照）　取締役　黒田　伊平
取締役　石丸　幸作　同　岩間　芳松
同　深井　錦吉　監査役　早野重右衞門（人事參照）
監査役　山田　實史

自轉車、暖爐、骨董業

◉松岡自轉車商會　大連市監部通一丁目二〇號地（電話五〇五番　振替大連五番）

營業　自働車、自轉車並に玉突臺、人力車類販賣

當商會は明治三十八年八月の創立にして個人經營なり初め本店を營口に設け大連は支店なりしが四十二年本店を大連に移つせり青島及奉天に支店あり

營業主　松岡　庄助
奉天支店主任　松永主馬太郎
青島支店主任　内牧　光雄

◉宮崎組　大連市佐渡町二三號の一（電話一二四二番）

營業　暖爐、置ストーブ、新案自働便器販賣、並土木請負

當組は明治四十四年の創設にして個人經營なり奉天西二條街に出張所あり

營業主　宮崎吉太郎　東京市小石川區小日向水道町六十五番地、四十七歳、夫人はる四十八歳、男一名、女二名

◉高橋骨董店　大連市伊勢町四四號地（電話七〇七番）

營業　骨董專門

當店は明治三十八年の創業にして個人經營なり初め材木商專業なりしが四十一年十月より骨董を兼業し四十四年よりは材木業を廢して專ら骨董商を營めり營業主は信濃町八十八號に於て貸家業を經營し太だ優勢なり

營業主　高橋峰次郎　兵庫縣神戸市中山手通六丁目四八番地、六十三歳、夫人ふさ、五十六歳、男一名、孫二名
外店員二名

◉方外軒　大連市監部通一丁目一七號地（電話四一一四〇番）

營業　支那專門骨董、書畫及翡翠販賣

當軒は大正四年の紀元節の吉日をトして開設せる資本金二萬圓を有し個人經營なり當軒は他店と其趣きを異にし（一）正札現金（二）門出不出（賣價買戻の意）の店則あり骨董商にて正札現金など實に前代未

聞なり仕入には山東及直隷に信用ある支那人の數箇所の特約店あり

營業主　加茂貞二郎（人事參照）

旅館業

◉遼東ホテル

大連市信濃町自八七至九五號地（電話④一三一番　同五〇二番　一五〇一番　一五〇二番　一五〇三番　振替大連九番）

營業　旅館、麻袋販賣、及倉庫業

當ホテルは明治三十九年の設立にして個人經營なり客室四十、毎室電話の設備あり大連に於ける第一流の純日本式旅館なり青島に支店を有す

營業主　山田三平（人事參照）

◉盤城ホテル

大連市磐城町六九號地（電話一六七番）

營業　旅館

當ホテルは明治三十九年の開設にして個人經營なり本業の外陸軍納品竝に鐵器類の代理業を兼營す

營業主　立石豊造（人事參照）

◉花屋ホテル

大連市東連町信濃町角八五號地（電話④七〇三番　振替口座八三一番）

營業　旅館

當ホテルは明治三十九年四月志村佐太郎氏設立して四十二年之を合資組織に改め志村氏之か代表社員たりしか大正四年六月現營業主繼承し個人にて經營せり客室十五、階上に取繼電話の設備あり

營業主　片山宇三郎　山口縣下關市中野町、四十三歲、夫人さく子

◉春田旅館

大連市吉野町監部通角（電話六七六番）

營業　旅館

當旅館は明治三十九年十一月の開設にて個人經營なり館主は二十七年臺灣に渡航し臺中縣に於て旅館竝に雜貨商を營みたりしが三十九年五月渡連し同十一月現業を開始したり瓦房店驛構内食堂を兼營す

營業主　春田嘉太郎　鹿兒島縣鹿兒島市仲町一五七番地　明治二年十一月十五日生、母堂なほ八十歲、夫人たね三十二歲、長男臺造十八歲、長女元子十四歲

瓦房店食堂主任　瀨戶山萬次郎

◉合資會社吾妻旅館　大連市美濃町五號地（電話六四六番）

營業　旅館

當旅館は明治三十九年の開設にして資本金六千圓を有する合資會社なり

總支配人　高木和吉　山口縣玖珂郡柳井津村八番屋敷、四十八歳、夫人たけ四十歳、男一名、女一名

牧場、農園業

◉一二三牧場　大連市老虎灘會轉山屯

營業　牧畜及び農業

當牧場は明治四十一年九月の創立にして個人經營なり牧畜、乳牛、製乳、バタ、種牛販賣を專務とし副業として農業、植木盆栽、並に養魚を營む、大連市内の植木屋にて販賣する盆栽は大部分當牧場のものならざるはなし第一市場に二軒の蔬菜並に盆栽販賣店を有し又牛乳の販賣は西公園町共同販賣店、伊勢町堺組等に依賴せり

營業主　矢野萬吉　（人事參照）

外日本人二名、支那人二〇名

◉桃林舍牧場　大連市老虎灘會李家屯

營業　牛乳搾取販賣

當牧場は明治四十一年春創設さる哈爾賓より乳牛としてシメンタル及びセルシーシューの雜種四頭を購入して搾乳を開始したるに其後牛乳需要者の增加と共に乳量不足を感じたるを以て翌年又東京よりエーマシヤエホルタイン種の乳牛を購入し來れり目下乳牛五頭にて一日の搾乳量は九斗乃至一石內外なり場內には日本人夫二名支那人夫八名を使役す

營業主　荒木伊平　（人事參照）

◉柳元農園　臭水子驛附屬地

營業　農園

當園は明治三十八年三月の開設なり初め松方幸次郎氏の經營にて臭水地塘百四十町步に排水工事を施し苗圃を開拓せしが後資本の關係上現經營者之を讓受け追年整理しつゝあり目下耕作坪數十三町步、內五町步は果樹園にして葡萄六千五百本、梨子千二百本苹果五百五十本、桃三百五十本、櫻桃二百五十本を

植付け其他は大豆、高粱、雜穀等の栽培に充當せり
此外大正四年春より蔬業を開始し三石五斗の收穫ありたり

農園主　柳元尙次郎　鹿兒島縣鹿兒島市西田町字中の町　元治元年三月生、夫人いさ四十二歲、女一名

◉恒樂園　大連市外老虎灘會千家屯

營業　果樹、蔬菜の栽培並に水稻試作

當園は明治四十四年の開設にして個人經營なり資本金約一萬圓を投せり

營業主　飯塚松太郎（人事並に飯塚工程局參照）
農場主任　土屋統一

◉愛憐舍牧場　大連市外老虎灘會千家屯

營業　牛乳搾取販賣

當牧場は個人經營にて明治四十二年五月五日の開設なり

營業主　小島鉦太郎（人事並に小島倉庫參照）

◉外に遼東牧場（橋口太次郎）滿洲牧場（小寺壯吉）石本農園（石本鏆太郎）あり

醫院、法律事務業

◉三好醫院　大連市信濃町一二一號地（電話七九六番）

營業　醫師

當院は明治四十二年の開設にして個人經營なり一箇年の取扱患者五千名內外にして總入院患者十八名を收容し得る病室の設備あり

院主兼院長　三好三郎（人事參照）
副院長　金田正
外職員十一名、傭人七名

◉鈴木醫院　大連市監部通二丁目七〇號地（電話七五二番）

營業　醫師

當院は個人經營にて明治四十四年六月一日の開設なり入院患者二十六名を容收し得る病室の設備あり小兒科、產婦人科、內科、腦神經は當院の特に得意の技量を有する處なり

院主兼院長　鈴木健吉（人事參照）
助手一名、藥局生一名、看護婦六名、

會計事務員一名

◉近藤病院　大連市東郷町一丁目一一號地（電話一四九六番）

營業　醫師

當院は明治三十七年四月七日の開設にして個人經營なり初め露西亞町にて開業し其後伊勢町西廣場浪速町に轉せし處近藤院長獨逸留學の爲め一時中絶し大正三年歸朝するや同年十二月再び現在所に開院せり小崗子に出張所あり

院主兼院長　近藤寛次郎　（人事參照）

外助手一名、看護婦二名

◉中村病院　大連市近江町ラ區二一號地　（電話六六番）

營業　醫師

當院は大正三年二月の創立にして個人經營なり初め磐城町にて開院したるに患者の增加と共に狹隘となり大正四年十月二十九日現在所に新築落成と共に移轉せり病室には全部蒸氣暖房の設備ありて構造完全なり市内小崗子に分院を有す

院主兼院長　中村勉藏　（人事參照）

外助手一名、看護婦三名

◉井上醫院　大連市浪速町一丁目一〇號地（電話一二六〇番）

營業　醫師

當院は大正元年九月の開設にて個人經營なり皮膚病梅毒は當院の長所とする處なり

院主兼院長　井上瀧藏　（人事參照）

◉弘濟醫院　大連市磐城町　（電話一五五番）

營業　醫師

當院は個人經營なり現院長は明治三十九年四月渡滿の初め公主嶺に於て開業し四十一年大連に轉來し大山通に開業せしが大正四年十月現在處に新築移轉せり皮膚科に於て長技を有す

院主兼院長　辻　慶太郎　（人事參照）

◉東信醫院　大連市佐渡町一五號地　（電話二三四番）

營業　醫師

當院は明治三十八年八月の開設にして個人經營なり小兒科及内科を專門とす

院主兼院長　菊池音之助　（人事參照）

逢阪町分院　逢阪町二二の一（電話四一四番）

◉田邊醫院　大連市磐城町八五號地（電話四四三番）

營業　醫師

當院は明治三十八年十一月の開業にして個人經營なり內科婦人科を專門とす

院主兼院長　田邊猛雄（人事參照）

◉久保田齒科醫院　大連市大山通三一號（電話一〇五五番）

營業　齒科治療

當院は明治三十八年十月の開業にて滿洲に於ける齒科醫院の最始なり當時猶兵馬倥偬の餘にて專ら軍人治療に任せしが其後全力を支那人側に向けたるより支人間に信用厚く目下患者は滿洲奧地及山東方面より來る者多く或は遠く上海より來るもあり治療室にはコロンビア形ポンプ式治療椅子三臺を備ふ

院主兼院長　久保田巖（人事參照）

外助手五名

◉戸口茂里法律事務所　大連市山縣通三號地（電話七四三番）

營業　一般法律事務

當事務所は個人經營にて明治三十九年二月開設す

營業主　戸口茂里（人事參照）

事務員　三名（日人二名 支人一名）

◉値賀辨護士法律事務所　大連市越後町三號地（電話九一三番）

營業　一般法律事務

當事務所は明治三十九年八月の開設にして個人經營なり奉天十間房に出張所を有す

營業主　値賀連（人事參照）

外事務員二名

◉立川法律事務所　大連越後町十區二七號（電話一〇三七番）

營業　一般法律事務

當事務所は個人經營にして大正三年六月開設す

營業主　立川雲平（人事參照）

◉米岡大連法律事務所　大連市吉野町二丁目三〇番地（電話六八九一番）

營業　一般法律事務

當事務所は個人經營にて明治四十三年四月開設し訴訟非訟訴事件其他一切の法律事務を取扱ふ

營業主　米岡　規雄（人事參照）
事務員　稻富　矢太　福岡縣、法政大學卒業生

新聞、雜誌、通信、興信業

◉遼東新報社

大連市敷島町一六番地（電話 營業 三三〇番 編輯 三二一番 印刷 四三七番）

營業　新聞發行、竝に印刷

當社は明治三十八年の創刊にして滿洲に於ける斯業の元祖たり日露戰爭の三十八年五月五日故末永純一郎氏は當局より新聞發行の許可を受け同年十月二十五日始めて隔日發行の四頁紙を創刊し翌年四月三日之れを邦文四頁漢文二頁の日刊に改め關東都督府公布式を命ぜられ同日より府報を發行せしが四十年十月限りに公布式を解かれ府報を廢刊し又四十一年十月二十五日限り漢文を廢して邦文六頁に改めたり爾來社業漸く伸暢して大正元年十月終に新聞用活字をポイント振假名附、輪轉機印刷の八頁新聞として茲に滿洲新聞界に於ける一新記元を作れり而して家屋は創刊當初は市内紀伊町に在りしが三十九年五月若狹町に移轉し其後社運の隆昌と與に四十三年六月本社新築に着手し同年十月竣成して移轉せり此れ亦た滿洲斯界に於ける偉觀なり社内業務を總務部、印刷部に分ち印刷部工場は活版、寫眞製版等總べての設備完全にして本業の外一般の注文に應す

當社創立者たる社長末永純一郎氏は大正二年十二月三十一日病故し翌三年一月末永節氏社長に就任し四年十一月十日同氏退任後は社長を缺げるが當社は滿洲最始の新聞として各地に於ける地盤鞏固にして購讀者最も多數なる上に元老社員等皆戮力協同して斯界に於ける權威勢望を益々伸展せしめつゝあり

社主　末永　花子
社代表者　吉倉　汪聖（人事參照）
本社 理事　平岡與平治（同上）
副理事　角田　宏顯（同上）
主筆　吉倉　汪聖（同上）
社 編輯長　大來　修治（同上）

總務部長（編輯長兼任）
印刷部長（理事兼任）
會計主任 吉野直治（人事參照）

各地
旅順分局長 角田宏顯
奉天分局長 水野應佐（同上）
東京支局長 佐野易之助
大阪支局長 龜谷伴吉
營口支局通信主任 鈴木讓吉
遼陽支局主任 北川武八郎
撫順支局通信主任 土屋文藏
鐵嶺支局主任 末廣榮二
公主嶺支局通信主任 三村高次郎
長春支局主任 栢原孝久
吉林支局主任 伊東季藏
哈爾賓支局主任 鈴木完孝
安東縣支局通信主任 小倉松太郎

◉株式會社滿洲日日新聞社

大連市東公園町一七號地
電話 編修 長二番 編輯 七三番 營業 四八番 七六七番
電略「ニチ」振替大連六〇番

營業 新聞發行竝に印刷、和洋紙、活字鑄造、印刷、諸材料販賣

當社は資本金十三萬五千圓、株數二千七百株、全額拂込濟の株式會社にして明治四十年十一月三日を以て設立さる當時の滿鐵會社總裁男爵後藤新平氏は滿洲開發の機關として邦文の外英文及漢文兩欄をも兼備する一大勢力ある理想的新聞の發行を提唱し東京印刷會社社長星野錫及同社取締役藤山雷太氏等之れに應じて當社を設立したり社業を新聞、印刷の二部に分ち新聞部は滿洲日日新聞と稱して森山守次氏を之れが社長に聘し印刷部は東京印刷會社出張所として齊藤章達氏東京より來りて之れが所長となり而して星野氏は社主として此等の總べてを管理したり斯くて四十二年一月森山社長辭し去りて伊藤幸次郎氏之れに代はり同時に星野錫氏は印刷會社出張所と與に東京に引上げ其全部の經營を伊藤社長に讓渡したり

伊藤社長の就任と與に創刊以來紙面に挿入せし英文欄を分離して之れを小形四頁とし「マンチユリア、デイリニウス」の名の下に本紙附錄として發行することゝせり伊藤社長は在任一年にして四十三年一月退任し爾後暫く專任社長を置かざりしが四十四年八

月現社長の就任するに迨んで社務を一新し大正二年十一月終に株式組織に改めたり爾來社業日に伸展して大正四年六月より輪轉機を使用するに到れり今や滿洲日日新聞は言論の穩健、電報の豐富、報道の精確及印刷の優良なるを以て滿洲及北清地方に於ける斯界の重鎭さして推重せらる

當社工場は最初東京印刷會社之れを創設し其後漸次改善したるを以て設備最も完全にて獨逸式三十二面一二臺、輪轉機一臺、二十四面二臺、六面三臺、石版ミシン機械各二臺、其他フート及ハンド數臺、寫眞三色版等の施設皆備はり日に使用する工場員は二百十三名に上れり

當社の業務は經理、作業の二部に分かたる經理部に庶務會計、新聞、廣告、販賣等の諸課を置き作業部に印刷、活版、石版寫眞、製本の各課を置けり而して其營業成績は最近大正四年一月一日より同六月三十日に到る第四回決算に於ては同期は世界戰爭の結果印刷諸材料の騰貴の爲め印刷營業に於て不良なりしも猶九千一百三圓八十三錢の利益を擧げたり

取締役社長　守屋善兵衞（人事參照）
取締役副社長兼作業部長　村田誠治（同　上）
取締役經理部長　守屋秀也
監査役主筆　田原禎次郎（人事參照）
編輯長　伊藤武一郎（同　上）
政治部長　高橋昔郎（同　上）

旅順支局長　西村巳之助　旅順八島町（人事參照）
奉天支局長　昔川秀孝　奉天十間房（同　上）
安東支局長　平山梅藏　安東縣大和橋通り
長春支局長　伊原幸之助　長春新市街
東京支社主任　間室頼透　東京市芝區櫻田鍛冶町十番地
大阪支局主任　矢野松吉　大阪市東區北久寶寺町四丁目

●泰東日報社　大連市奧町二丁目五〇番地（電話四一五八番）

營業　新聞發行

當社は關東州に於ける唯一の漢字新聞にして金子氏の主裁する處に係れり明治四十一年關東州に於ける支那人の代表的人物一同は日支親善の爲め將た支那時情の耳目さして新聞の必要を感じ時の遼東新報漢文主筆たる金子雪齋氏を請ふて其主宰さし資本を集め同年十一月三日初めて四頁新聞を發行したり爾來幾多經濟上の困難を凌ぎ又排日運動起る毎に其打擊

を受くる事至大なりしも堅忍以て之に當り翌年改めて六頁とし四十四年更に八頁とし且つ資本主たる支那人は資本を義捐として其一切を社長に捧げ漸次改良を加へ今日に在りては支那全國に於ける新聞紙中の白眉として且特色を有する公論界の一大權威として世の信用を博しつゝあり

當社は前述の如く金子平吉氏の獨力經營にして氏は社長兼主筆として一切を總理す社内に編輯、庶務、會計、經理、印刷の五部を置き日支兩國人を混用して各部の主任及部員たらしむ新聞は五號活字八頁にして社説、公文、飜譯、外事、短評、電報、中央時事、地方時事、通信、東三省時事、雜事、文苑、小説、宗敎、廣告の各門に分ち日々寫眞版を挿入す南北滿、東蒙各要地に分局三十餘箇所を設け北京、上海に特派通信員を置き南北支那朝鮮各要地に義務通信員を配置す

社長兼主筆　金子平吉（人事参照）
經理主任　篠原萬次郎
庶務主任　金學尊
編輯主任　村田孜郎
會計主任　杜仲貴
印刷主任　齊魯齋

◉マンチユリア、デイリーニウス

大連市東公園町滿洲日日新聞社内

營業　新聞發行

當社は滿洲唯一の英字新聞なり最初滿洲日日新聞社と合體にて同紙創刊以來英字欄を挿入せしが明治四十三年一月より本紙と分離して小形四頁新聞とし猶滿洲日日新聞の附錄として發行せしが大正元年八月に到り全く獨立の新聞となれり現社長は最初より滿鐵社員たるの傍ら執筆せるが多年米國に留學して英文に堪能なるを以て聞ゆ

社長兼主筆　濱村善吉（人事参照）

◉大陸社

大連市監部通三八號地（電話七六六番 振替大連一一八八番）

營業　雜誌發行

當社は大正二年六月一日の創立にて大陸經營の言説機關として金子雪齋氏盟主となり榊原圖南、山田芙峰、山中峯雄、小松利宗の諸氏之れを佐け石本鏆太郎氏出資の下に發刊したる者なり雪齋氏の筆に成る大

陸春秋は立論の正大、文辭の瑰偉を以て本誌の重きを爲したり同年九月武内正戈氏入りて主幹に就任し翌春退社、榊原圖南氏は其以前に退社し近く雪齋氏多く執筆せず、山田芙峰、山中峯雄二氏主として其局に當りつゝあり滿洲に於ける唯一最大の硬派雜誌として士林間に愛讀せらる

社主兼社長　石本鐵太郎（人事參照）
主筆（囑託）　山田武吉（同　上）
編輯長　山中峰雄（同　上）
會計主任　小松利宗

◉滿洲新報大連支社　大連市監部通三八號地（電話[illegible]七三〇番）

營業　新聞通信幷販賣

本社は營口に在り明治四十一年二月十一日の創刊に屬す大連支社は創刊と同時に開設し都督府の許可を得て大連附錄（日刊二頁）を發行し本紙と與に發賣し故安齋源一郎氏之れが主任たりしが其後大連附錄は廢刊となり主任も幾度か交迭せり四十三年一月現主任就任以來社務を刷新し其不撓不息の精力を以て八方に應酬して報道の精探に勉め特に社會記事に於て出色なり遼東滿日二大紙の間に在りて確實なる多數の購讀者を有せり

（營口滿洲新報社參照）

主任　竹内坦道（人事參照）
營業主任　田中功男

◉大連大阪每日新聞通信所　大連市監部通一丁目一七號地（電話[illegible]一一四〇番）

營業　新聞通信幷販賣監督

當通信所は日露戰役後直に囑託通信員を置きたるに始まり現特派員の來任せし明治四十二年以來は公式に通信所を開設せり現特派員は通信事務の外大連旅順、瓦房店及山東省沿岸に於ける大阪每日新聞の販賣並に通信員の監督をなす

主任（特派員）　加茂貞次郎（人事參照）
外助手　一名

◉滿鮮旅行案内社　大連市西公園町フ區二號地（電話七六一番　振替大連一一番）

營業　旅行案内發行

當社は明治四十一年の創設にて個人經營なり每月一

回滿鮮旅行案内を發刊す東京市日本橋區本銀町一丁目一番地及安東縣市場通四丁目に支店あり

社長　村松武一郎（人事參照）

◉**滿洲通信社大連支社**　大連市北大山通十九號地

營業　通信

本社は奉天十間房に在り大正三年八月の創立なり大連支社は大正四年一月の開設にて本業の外滿洲興信錄の發行事務を執る（奉天滿洲通信社參照）

本社社長　武内正戈（人事參照）
大連支社主任（目下缺ぐ）
同營業主任　松丸孝三郎
同庶務兼記者　田中直重

◉**笑喃社**　大連市越後町

營業　雜誌發行

當社は明治四十二年の創立にて個人經營なり滿洲唯一の花柳雜誌「すゞめ」を毎月發行して斯界に熱心なる讀者の多くを有す

社主兼社長　枝廣熊八（號玉汀）

◉**滿洲興信公所**　大連市監部通三八番地（電話七六六番）

營業　興信並通信

當公所は會員組織にして明治四十一年二月十一日の設立なり當時滿洲重要物産組合主事にして令聞ありし中野寅次郎氏が大陸の策源地たる大連に於て信用調査機關の缺如せるを慨し官民諸名士の賛助を得て之れを設立し自ら代表人となり刻苦經營に任せしが會ま夫人大患の爲め上京中小石川區民の懇請によりて公職に就きしかば遂に四十三年を以て事業經營方を現任川北主事に一任せり川北氏は中野氏と交渉の上翌年八月石本氏を代表人に推し猶川北氏は依然實際の局に當れり

營業は會員組織にして會社銀行組合並に一般商工業家の營業狀態、資産信用の程度、取引先人物の素行閱歴等を會員の審問により又必要と認むる場合審問を俟たずして内報する外統計部の出版に係る輸出入貨物並に訴訟事項を配送して會員の參考に供し又通信部に於ては特別契約の下に滿洲に於ける特産物の建相場を暗號電信を以て通報するにありて其成績は逐年伸展し猶ほ大に進歩發達の氣運に向へり

當公所は旅順、金州、瓦房店、普蘭店、大石橋、營

口、遼陽、奉天、鐵嶺、開原、昌圖、四平街、公主嶺、長春、安東縣、哈爾賓、龍口、芝罘、青島、朝鮮京城、仁川、釜山、鎭海灣の外内地都市に於て信用ある興信所と連絡を有す

代表人　石本鏆太郎　（人事參照）
主　事　川北筑太郎　（同上）

印刷、寫眞業

◉滿洲日日新聞社　大連市東公園町滿洲日日新聞社内（電話四八番　七六七番）

營業　印刷業一式

滿洲日日新聞社工場は滿洲に於ける斯業の最大なるものにて獨逸式の三十二面二臺、輪轉器一臺、二十四面二臺、六面三臺の機械を備へ活版、石版、寫眞版、凸版、凹版、アートタイプ、三色版、電氣版、亞鉛版等の設備皆完全にて廣く一般の注文に應ず此の印刷業務は同社作業部に屬し同部長之れを管理す

（別項滿洲日日新聞社參照）

作業部長　村田誠治　（人事參照）

◉小林又七支店　大連市大山通二十七四號地（電話三四四二番　振替大連九八四番　電略（コ）又ハ（オ））

營業　活版、石版、寫眞版、活字鑄造販賣、洋式帳簿、圖案、文房具並に堀井式謄寫版滿洲一手販賣

本店は東京市麹町區華町四番地に在り明治五年創設の斯業の老舗にして小林又七氏の經營に屬す

大連支店は明治三十八年四月現支配人渡邊と與に開設されたるが當時貔軍事倥偬の際にて諸事皆不整備なる上に一般風紀の頽敗甚だしくして内地より引率し來れる職工百五十餘名の操縱太だ困難なる上に業務の性質として資本の固定を來たすも之れを緩和す可き金融機關の施設なき爲め當支店は非常の經營難に陷り有らゆる苦闘奮戰を經て漸く今日の基礎を築成し更に益々擴張しつゝあり

現在の工場設備は敷地三百餘坪、建坪二階建三百坪を有しロール九臺、ハンド五臺、石版七臺、鑄字機二臺、紙截ち機二臺、罫引き機二臺、肉練り機二臺を備へ之れに使用せる日支職工は百六十人に上る

當店は本業の外南山下に果樹園を經營し桃、梨其他松樹等を栽培せり

支配人　太田　信三　（人事參照）

外店員十五名

遼東新報印刷部　大連市敷島町遼東新報社内（電話四三七番）

營業　印刷業一式

當印刷部は遼東新報社の工場にして活版印刷、寫眞製版、活字鑄造等一切の設備完全にして一般の註文に應せり（別項遼東新報社參照）

印刷部長　平岡與平治　（人事參照）

中島寫眞館　大連市大山通一丁目一一號地（電話三二七番）

營業　寫眞

當館は明治三十八年五月二十八日の開設にして個人經營なり

營業主　中島銀次郎　（人事參照）

土田寫眞館　大連市大山通二丁目五九號地（電話二四六番）

營業　寫眞

當館は明治三十九年三月の創立にて個人經營なり初め市内伊勢町五十七號地に開設し大正元年十一月に至り現在所に移轉す土田寛一氏の個人經營なり

營業主　土田　寛一　（人事參照）

吉原寫眞館　大連市吉野町二丁目四號地（電話五一七番）

營業　寫眞

當館は有賀定吉氏の個人經營にて明治三十八年五月創業す

主任　藤田　安

洗布、湯屋業

大連洗布所　大連市東鄉町三號地（電話二七七番）

營業　洗濯業

當洗布所は明治三十九年四月の開設にして個人經營なり

營業主　井上八十郎

外店員日本人十九名、支那人九名

梅の湯　大連市吉野町二丁目五一號地

營業　湯屋並に貸家業

當湯は明治四十年五月の創業にて個人經營なり一日の入浴者平均百八十名に達す營業主は外にあづま湯（四十三年九月開始）及みやこ湯（大正二年十二月開始）を經營せり

營業主　井上德次郎　福岡縣福岡市東中洲町九十五番地 四十三歲、夫人さち四十一歲、女一名

寶湯　大連市岩代町二六號地

營業　湯屋、理髮、並に貸家業

當湯は個人經營なり營業主は明治三十八年九月渡連し貸家業を營みたるが三十九年四月より寶床と稱する床屋を兼營し四十年六月よりは更に寶湯を開設せり

營業主　久保　太吉　大阪市西區市岡町四二番地、慶應三年十一月生、夫人さら、男一名女一名

追加　食料品業

大連牛乳共同販賣所　大連市西公園町貳壹地區一一三區ノ五ノ一　（電話五三七番）

營業　牛乳販賣

當販賣所は市中に於ける牛乳の價格を一定して同業間相互の競爭を避くる爲め一二三、桃林、遼東、愛憐、大連、東北の七牧場が其所產の牛乳を販賣せしむるの目的を以て協同設立したるものなり上記各牧場の產出する牛乳は每日二石にして此內六七斗をバタに製しヤマトホテル其他に提給せるが混物なき純良品として聲價を博せり現主任は獸醫として遼東牧場主なり

主任　橋之口太次郎　（人事參照）



官衙、公共機關、慈善團體

●大連民政署　大連市大廣場

電話	一三三〇番	民政署長室	大廣場
同	七番	民政署長官舍	土佐町C區六
同	一六番	民政署警務係	大廣場
同	二五〇番	同　上	同
同	二〇番	民政署庶務係	同
同	一五番	民政署總務係宿直	同
同	二九八番	民政署總務係用度	同
同	五四一番	民政署水道係	同
同	五四〇番	民政署伏見臺配水池	伏見臺
同	四七七番	民政署沙河口水源地	沙河口

▲大連唯一の行政主腦官廳たる大連民政署は市內交通の總滙たる大廣場に其宏壯巍乎たる建築を構へ關東都督に隷屬し關東都督府事務官之に長となり大連市及附近六會を直轄し又其直屬として金州支署を置き更に普蘭店及貔子窩に支署出張所を設置す

▲明治三十八年五月勅令を以て占領地民政署規定公布せられ民政署は之を大連に置き旅順及金州に支署を設けたり是れ當地民政署の創始にして滿洲軍總司令官の隷下に關屋貞三郎第一次署長の任に就けり同年十月關東都督府編制せられ關東州民政署は轉じて其令下に歸し更に三十九年九月一日より關東都督府官制實施せらるゝに及びて關東州民政署は廢廳となり大連民政署は軍政を脫して始めて完全なる地方行政機關となれり爾來數次の改革を經て現行官制となりたり

▲現制に據れば民政署長は都督府事務官を以て之に充て都督の指揮監督を受けて法律命令を施行し部內の行政事務を管理し其行政事務には職權又は特別の委任に依り管內一般又は其一部に民政署令を發し之に五十圓以內の罰金若くは科料又は拘留の罰則を附する事を得次に管內の靜謐を維持するため兵力を要する時は之を都督に具狀するも非常急變の際には附近の守備隊長に出兵を要求する事を得る等の權能を有し又司法事務に關しては二百圓を超過せざる金額又は價格二百圓を超過せざる件に關する民事事件、支那人の外に關係者なき上記以外の民事事件、拘留又は科料の刑に該るべき罪、一年以下の懲役若くは禁錮又は二百圓以下の罰金の刑に該るべき行政諸規

▲育兒ホームは婦人ホーム設立以來多數の無辜薄命なる婦人を收容せる其間には子供携帶の婦人又は姙娠中の者あるより之れを引取り或は分娩せしめて母子共に保護するの必要上自然に形成せられたる者なり

救世軍遼東部長　中校　田口富藏（人事參照）

●關東州勞働保護會

大連市松林町八號地（電話一二九七番）

▲本會は南滿州内居住日本勞働者を保護し就業の便を得せしめ或は疾病其他不時の災危に罹りし窮民を救護するの目的を以て大井憲太郎氏會長の下に三十九年三月二十八日設立せられたり當時一面には關東都督より官有家屋の無料貸下を受け一面には官の經營事業に使用する職工人夫の供給を命せられ前途頗る好望なりしが四十年五月關東州民政署直營工事及鐵道運輸業を併合して滿鐵會社に引渡されたる結果東棧橋埋立工事中止となり更に又同年十月より大連驛及埠頭船舶貨物積卸等悉く皆滿鐵會社の經營事業となりしが爲め本會收容勞働者の就業の途を失ひ悲境に陷りたる際理事齋藤萬洲文氏死去し其後現主任永井淑氏之れに代はりて使用の途なき勞働者を收容保護の至難なる中に在りて來者不拒の方針を採り爾來其數に多少の増減ありしも少きは二十四五人多きは八十名餘の失職者を常に收容して諸方に勞働供給の途を求め或は埠頭構内掃除人夫を引受け或は廢物を集收し來りて加工販賣し或は行商をなさしめ或は市中の煙突掃除を始め尚又埠頭構内より塵埃を集めて肥料に造る等種々工夫を運らして今日に至り既に十星霜を經過せり

▲大正三年三月滿鐵會社より大房身柳樹屯間の鐵道線路の兩側六萬餘坪の貸下を得て製紙原料たる楮を植付け傍ら穀物野菜類を間作し收容者常食の一端となさんとて孜々經營しつゝあり本會が創立より大正四年六月末日迄に收容せし總人員は一千六百七十六人の多數に上り内約四分の一は内地に歸還し約四分の三は夫々就職せしめたり尚本會は免囚保護事業にも盡瘁しつゝあり

專任理事　永井淑

●本派本願寺關東別院

大連市南山麓若草山（電話一〇二四番）

▲本院の設立は日露戰役當時連枝大谷尊由師統率の下に多數の軍隊布教使を滿洲に派遣したるに起因し三十七年七月始めて關東別院設立を公布し四十年五月地を南山麓若草山に卜して新築起工式を擧げてより茲に八閱年全く本堂及對面所の工事を竣り大正四年九月壯嚴なる入佛慶讃會を執行するに至る其本堂及對面所は純日本式の建築にして輪奐宏壯實に滿洲第一の名刹たり.

關東別院には輪番の下に輪番助勤、參勤、承仕、堂掌及開敎使等の職員ありて其指揮の下に各任務に從事す猶關東別院内には支那開敎師監督事務所を置き現在十六箇所の出張所を指揮監督す

關東別院輪番　支那開敎監督　前田德水（人事參照）
輪番助勤　上川敎圓
錄事　白石壽覺　後藤了海　承仕、堂掌、及開敎使各數名
旅順出張所　開敎使　寺本泰巖（人事參照）
營口出張所　同　熊谷正俊
遼陽出張所　同　藤澤實善
撫順出張所　同　長岡覺性（人事參照）
奉天出張所　同　神田藏雄
鐵嶺出張所　同　石黑慶信
長春出張所　同　（近々更任せり）
本溪湖出張所　同　岡崎隆讓
安東縣出張所　同　田中行善（人事參照）
哈爾賓出張所　同　押野慶淨
青島出張所　同　中原宗定
上海出張所　同　井上慈曠
漢口出張所　同　田中哲巖
北京出張所　同　猪方顯心
香港出張所　同　口羽義敎
浦鹽出張所　同　太田覺眠

●大連神社　大連市神明町（電話一一四番）

▲大連神社は關東都督の認可に依り其神社規定及維持講規約に基きて組織せる外現行神社法令の下に大連市及其附近在住の日本臣民を以て氏子とし職員は社司、社掌及氏子總代十五名、氏子相談役三十餘名氏子世話人二百名内外を以て社務を執行す

▲大連神社の創立は元と大社敎の經營に成りて明治四十年に着手し同四十二年十月落成し同月十日鎭祭式を執行し天照大御神、大國主神、靖國神の三神を奉祀す、同四十三年五月千家管長より大連市民に現在の神殿拜殿社務所及附屬物の引繼きを爲して社

名を大連神社と稱す祭日は大連市紀念日の五月二十八日を以て春季大祭日と定め幾多の公祭、例祭、陸海軍紀念祭あり又毎月一日十五日の二回に例祭を執行す

▲大連神社は春秋の大祭費約二千圓の收支ある外に賽物收入及維持講金の收入一ヶ年六千圓以上六千五百圓を有す支出額は一ヶ年四千八九百圓内外なれば毎歳千二三百圓以上の餘金を生ずれども現在四千圓餘の負債あれば大正四年度より三ヶ年後に非ざれば之を完濟するに到らず完濟後の餘金は全部基本金として積立を爲す豫定なり

社司　松山理三（人事參照）　社掌　工藤勝義
同　兒玉卓郎
氏子總代　石本鏆太郎（同前）　相生由太郎（同前）
石埼震二（同前）　長濱敏介（同前）
井上一男（同前）

●大社教滿洲分院　大連市神明町

▲本大社教滿洲分院は本院の直屬にして内部組織は院長、理事、屬員を以て教務を執行し又外部にありては各信徒を總轄する爲に講長取締、世話掛等の各員を設置せり

▲明治四十年十月現在の事務所を開設し同四十二年大社教分祠落成し同年十月鎭祭式を執行す翌四十三年五月分祠全境内及建物を二分し一を大連市に引繼て大連神社と改稱し一を大社教滿洲分院と稱して現在に到れり

▲本院は信徒を以て謝恩講を結收し婚姻式及葬靈祭の執行をなす布教上の機關雜誌を發行し個人布教を專として順次教勢を擴張しつゝあり

分院長　松山理三　副院長　缺員
理事　飯塚佐呂久　理事補　瀧山登岐三

管下教會

大社教旅順教會所
旅順敷島町　明治四十四年創立　大正三年七月新築落成
理事　兒玉卓郎

●大連日本基督教會　大連市西廣場

▲當教會は明治三十七年八月の開教にして即ち日露戰役の際時の滿洲軍倉庫長日匹信亮氏（當時中佐相當官）熱心なる基督教信者なりしを以て業務の餘暇

挺身布教に努められたるが當教會の發端にして當時信徒僅かに三十名に過ぎず同三十九年に至り大山通の露人建設の家屋に商業夜學校を設立し日曜日には之を教會に充當して布教に從事したり其後商業夜學校は維持困難となりて實業協會に於て之を經營することゝなれり同四十年三好務氏布教師として渡連し同年夏現在所に教會を設置移轉して今日に迨ぶ大正四年沙河口に四千圓を投じて分教會を設立せり

布教師　三好　務（人事參照）

◉大連基督教會　大連市敷島町二五號地

▲當教會は純然たる獨立教會にして大正二年四月の創設なり最初は紀伊町の借家に在りしが同年秋現在所の新建築に着手し三年六月竣功移轉せり

▲會員約八十五名外に日曜學校の教童十餘名、又婦人會、母の會等あり近く教會裡面の地所を買入れて日曜學校々舍を建設し其内に圖書館を開設するの準備中なり

牧師　宮川巳作（人事參照）書記　石井甲二郎

會計　井關清久

外に常議員十名　（市中の重もなる男女）

◉救世軍大連小隊　大連市西廣場

▲當救世軍大連小隊は明治三十九年四月の開設にて大連に於ける兵士六十名準兵士三十名あり其他沙河口に小隊の信者十名及沿線各地にも兵士の在住するありて毎月曜日の外臨時集會し傳道に從事す一ヶ年間の集會延人員六千人に及ぶ猶當救世軍の事業として婦人ホーム及育兒ホームを經營せり（別項參照）

救世軍遼東部長　中校　田口富藏

救世軍大連小隊長　酒井龜一郎

◉東本願寺大連別院　大連市若狹町二區二七號地（電話二二四番）

▲東本願寺の滿洲布教に着手したるは遙に本派本願寺に後る明治四十三年四月現任新田輪番始めて渡連し同五月市內若狹町に假布教所を設け翌年六月都督府民政部より現在所の敷地三千四百餘坪の貸下を受け同年八月盛大なる起工式を擧げ建坪百十餘坪の建築落成し將來發展の餘地確實なるより大正二年一月を以て關東州大連別院と公稱し之れを本山教務部の

督に屬せしむ大正四年六月より更に青島に布教所を開設し坂本潤師を派遣し專ら宣教に努めしめつゝあり又大正五年度には十間四面の本堂を建築する豫定なり

別院輪番　新田神量（人事參照）
外四名

◉大連聖公會　大連市越後町民政署隣

▲當聖公會は初め英國長老ヘンリヒバード氏大正元年九月英國領事館附聖公會牧師として着任し大連青年會名譽主事英人シ、ビー、ヒバード氏より大連に日本人の聖公會員あるも教會なき爲め西廣場の基督教會所内に基督教徒と共に集合禮拜し居る旨を聽き此等聖公會員の爲め特に或る日時を限り英人聖公會教會所を貸與し此等會員の集合に便ならしめんとの主旨より起れりされど同氏日本語を解せざりし爲め之を東京日本聖公會南地方部監督セシルド氏に謀りたるに同氏も亦た大に之れに賛して朝鮮聖公會監督トロープ氏に照會したれはトロープ氏は京城よりエ、エル、シャプ氏を實地調査の爲め渡連せしめたり此れ大正元年十一月のことにしてシャプ氏は渡連直に千村春治、大澤治三、大賀亮氏等の聖公會員に面談の結果大正二年一月より日本人會員は英國聖公會教會所にて禮拜することゝなれり、後大正三年一月に至り日本人傳導師岡墻秀造氏京城より應援として着任し今日に迄ふ目下信徒八十七名なり

傳導師　岡墻秀造（三十九歳）
外委員　五名

◉曹洞宗常安寺　大連市天神町一號地

▲當寺は明治四十一年の開教にして三重縣鳥羽町常安寺住職森口惠徹師布教師として渡連越後町二十九號地に假布教所を設け布教に着手す同四十二年に至り信徒の增加と共に狹隘となり建設費約壹萬圓を投じて現堂宇を建設し移轉したり四十三年八月鐘堂を建設す是れ大連に於ける鐘樓の嚆矢なり目下信徒約千名を有す

主任　森口惠徹（人事參照）
外布教師　三名　從僧　四名

◉淨土宗明照寺　大連市對馬町

▲當寺は明治三十八年の開教にして阿部榮全師奥町に假教會所を設け布教に努めたりしが大正元年現在堂に掌字築成と共に移轉せり其後同師は樺太開教區長に轉じ大正三年五月木村玄聖師代りて主任となり滿洲開教區長を兼任して滿洲に於ける淨土宗一切の教務を監督指揮す

滿洲開教區長兼明照寺主任　木村玄聖（人事參照）

◉日蓮宗滿洲布教會　大連市春日町

▲當布教會は明治四十一年の開教にして當時小松日性師主任たりしも四十五年遷化せられ樋田孝玄師舊任地旅順より轉勤以來今日に至れり大正三年十月約六萬圓の豫算を以て本堂及庫裡の建築に着手し其内庫裡は同四年五月竣功したるも本堂は今尚建設中にして明五年十月頃落成の豫定なり而して目下の信從數四百戶、毎月十二、二十八の兩日說教の外毎月十三日に村雲婦人會を開き其外毎土曜に講話會を開催す

主任　樋田孝玄（人事參照）

外布教師補　四名

◉高野山大連開教所　大連市攝津町キ區一三號地

▲當開教所は明治四十年春矢上仁雅師渡連市内松林町に假開教所を設け布教に着手し四十二年各信徒の喜捨に依り現在所に新築移轉に決し同年三月借地契約を了し同三月十七日起工に着手同年五月二日落成入佛、四十四年春庵隆現師代りて開教所主任となり大正二年秋田和審乘師來りて之れに代はり滿洲高野山開教所監督を兼ね

開教所主任　田和審乘　和歌山縣伊都郡天野村大字天野一三六番地、明治六年九月八日生

外開教師　三名

◉天理教大連宣教所　大連市鏡賓地區一一三區ノ一一ノ三、四、五

▲當宣教所は明治四十四年二月二十三日天理教『よのもと會』と命名し假布教所を愛宕町に設け布教に着手す四十四年八月信徒の增加と共に駿河町に移轉大正二年四月四日都督の認可を得て天理教大連宣教所と改名し大正四年八月二十三日駿河町の布教所狹隘となり現地に新築移轉す現下内地人信徒三百十戶

支那人信徒十名あり市外沙河口に布教所を有す

宣教所長　柏谷好助（人事參照）

布教助手　三名

◉金光教大連教會所　大連市愛宕町二九號地

▲當教會所は明治四十年十月の開教にして初め磐城町二十七號地に假教會所を設置し布教に着手せり當時信徒僅かに十九名其後信徒漸次增加し同四十一年現在所に借地許可を得四十二年七月各信徒の喜捨に依り本堂を建築したり現在信徒一千名を有す

主任　松山成三（三十八歳）

外布教助手　一名

◉天理教遼東宣教所　大連市近江町一一一區四番地ノ六七

▲當宣教所は明治四十三年の開教にして山路好雄氏其父君山路藤十郎氏と共に若狹町に宣教所を設け布教に着手す當時一名の信徒もなく幾多の困難を嘗めたるが現在の信徒は邦人六百名其他支那人六十名あるに到り大正四年十月現在所に新築移轉せり沙河口及譚家屯に出張所あり

宣教所主任　權少講義山路好雄（三十一歳、夫人二十一歳）

布教助手　三名



金州

概說

▲金州は東經百二十一度五十分北緯三十八度四十三分、南大連驛を距る二十一哩九分の地點に位し西金州灣に臨み東大和尙山を控へ關東州の腹部に當り頗る要害の地たり土地乾燥にして風强きも大連奉天の都市に於けるが如き塵芥の蔽ふことなく寒暑共に激甚ならず最高氣溫三十四度、最低零下九度位にして衞生狀態は佳良なり

▲此地は淸朝の治政時代には副都統駐在して政治を行ひ別に金州廳海防同知民政官ありて旗人及人民を管轄し重要なる城鎭として威を半島に振ひしが光緒二十四年露國の租借地となり次に明治三十七年五月南山の陷落するや我軍の占領に歸して我軍政治下に入り三十八年六月關東州民政署の新設と與に軍政を離れて民政の下に支配を受け更に四十一年十一月大連民政署金州支署として全く我治政圏內の一市場となり了せり而して支署直轄管內の在留邦人戶數百七十二人、人口四百九十六人、支那人戶數一萬一千七百六十二、人口八萬一百七十一人にして邦人は官吏會社員多數を占め支那人は農夫其首位にあり邦人教育には小學校一、支那人教育には有名なる公學堂南金書院あり又邦人衞生機關としては衞生組合及私立金州蘇病院あり

▲金州管內の產業は農商の二種にして農は其第一位に居るも產額は消費に伴はず商業は其取引範圍城內及附近部落の或る地域に限られ商品亦綿糸布、石油、砂糖其他日常雜貨に止まり且顧客たる農民の購買力低き爲め大なる發展を見るを得ず只だ漁業及鹽業は頗る有名にて鹽業にありては舊來土民の經營に係るもの丶外、大日本鹽業の貔子窩、五島及普蘭店等に施設せるものは規模宏大にして將來有望なり

▲金州は其建城以來幾多の年月を經て古き歷史を有し且つ日淸日露兩役に於ける會戰の地なれば名所戰蹟多く遊覽客常に其跡を絕たず其重なるものに永慶寺、王皇廟、大和尙山、南山、三崎山等あり大和尙山山腹には數箇の巨刹あり晩秋には一山紅葉して寺廟此間に隱見し宛も畫圖の如し一遊に値す三崎山は日淸の役志士山崎、藤崎、鐘崎の三氏敵手に落ち悲

慘の最後を遂げし處にして其遺碑は城北の一小丘にあり山に登れば金州灣を一眸の裡に收め安東鄰躅及大和櫻は諸處に點綴して風致を添ひ太だ風光明媚の處なり南山は日露の戰與軍の苦戰せし處として名高く此役や我將士の死傷實に四千三百餘名、山上に鎭魂碑を建て戰死者の英靈を祭れり

諸營業

◉裘田洋行　金州驛前

營業　撫順炭一手販賣、滿洲木炭販賣並に運送

當洋行は個人經營にて明治三十九年五月金州城内に雜貨商並に石炭商を營む同年十二月現在所に移轉し構内販賣を開始し傍ら陸軍用達をなす大正元年十月構内販賣を廢止して現業を開始す

營業主　裘田　久助　廣島縣芦品郡戸手村二五六番地明治九年九月生、夫人たつ子、三十五歲

◉安永農園　金州南山

營業　農園業

當農園は個人經營にて明治四十三年十月の開設なり農園一萬八千坪、馬三頭、常傭日人一名を使役して一箇年支那人夫一千名を要す主として大根を栽培し一箇年の生產額一千樽（一樽十五貫）に及び軍隊及大連各地に販賣す

營業主　安永　乙吉　福岡縣福岡市藥院八二六番地、明治三年三月生、夫人むつ子、三十九歲、女一名あり

◉島田起春堂　金州城內東門街

營業　藥種

當起春堂は個人經營にて明治四十四年十一月開設す

營業主　島田友太郎　熊本市西坪井町三十二番地、明治十七年四月生、夫人よし子、三十三歲

◉大岸洋行　金州城內東門街

營業　食料品並に雜貨販賣

當洋行は個人經營にて大正元年六月の開設なり

營業主　岸本　四郎　山口縣吉敷郡山口町、明治八年六月生、夫人よね子、明治十四年生男四名、女一名

◉外にアスベスト出張所（益田孝三郎）あり

瓦房店

概説

▲瓦房店は復縣管内の略ぼ中央に位し四面山を負ひ土地高燥にして大連を距る北六十七哩、大石橋の南八十四哩の地點にあり南は金州附近、北は王家、得利寺、松樹等の地に通じ且つ復州、貔子窩街道の要區に當り古來此地方に於ける經濟上の一中心として名あり東淸鐵道が此地を相して南部線中の公主嶺、遼陽と共に最も經營に意を注ぎたるは所以ありと謂ふ可し氣温は最高三十四度、最低零下二十五度に下ることあるも風土は頗る人體の健康に適せり

▲此地に於ける滿鐵會社の附屬地は總面積七十四萬坪、内市街宅地として貸付けたるもの二萬五千餘坪あり會社は明治四十二年來其經營に著手し爾來年々工程を進めて今や道路の延長二千二百餘間に達し護岸、下水溝、公園、水道も大體其設備を了へ墓地、火葬場、葬祭場等皆具はるに至れり同會社が大正三年末迄に是等市街經營の爲めに費やせし處は約十六萬圓にして四年度に於ては更に約七千五百圓を支出し上下水道の增設備を實行したり此他尋高小學校、實科女學校、實業補習學校、公學堂、圖書閲覽場、醫院等同會社の經營に屬する者其設備完全なり滿鐵會社の瓦房店地方事務所は附屬地内の一切の事項を管理す大正四年六月末に於ける同附屬地内の戸口は日本人四百十三戸、人口一千二百八十三人、内男六百八十六人、女五百九十七人而して支那人口は二百四十二戸、一千一百十五人なり

▲瓦房店警務支署は營口警務署に直屬して附屬地内に於ける特種事務を除くの外一般行政及警務を管掌す大正四年六月末に於ける同支署全管内の戸口は日本人六百二十四戸、人口一千九百四十八人、内男一千〇五十一人、女八百九十七人又支那人は五百七戸二千七百十八人なり而して附屬地に接する支那街にありては復州縣知事の下に警務局長之を管轄す此外日支交渉事務を掌る復州行署及徵税事務を取扱ふ税捐分局あり

▲復州管内の地味は瓦房店以西良好にして以東は稍劣れり耕作物は包米を主とし綠豆、小米、大豆等之に次ぐ工業として煉瓦製造其他油房、製織業、石灰

製造所あるも隆盛ならず又當地の東方八支里炸子窩に二箇所の石炭鑛區あり一は滿鐵の免許を得て森田彥三郎氏之れを經營し他は奉天省の許可を得て華興公司の採掘せるものに係る孰れも舊式の狸掘にて出炭量少く且つ炭質粗惡なり

▲商業は復州管内の中心市場として好位置を占むるを以て取引活潑にして其額又大なれども邦人經營に係るものは石炭賣込、穀類、獸骨買込等の二三を除きては概ね在留邦人を顧客とする雜貨商にして廣く地方の生産者と消費者との間に處し物資の需給を調節するものなく遺利は多く支那商に依て占められつゝあり

▲金融は特設機關なきも郵便局に於ける貯金爲替及質商の貸出等により其狀態は割合に圓滿なり通貨は日本貨幣及小洋錢最も廣く行はれ復州票一部商人間に受授せらるゝも其額極めて小なり

▲大正三年度の當驛に於ける乘車客數四萬三百六十五人、同降車數三萬九千九百三十五人又發著貨物の重なるものは豆粕、包米、銀貨、豆油、大豆、繭、小豆、麥粉、薪炭、石炭、雜貨等とす

諸營業

◎瓦房店電燈株式會社　瓦房店東街

當會社は資本金五萬圓、半額拂込の株式組織にて大正三年十月創立す總株一千株の内滿鐵會社は半數を所有し其餘は地方日支人にて之れを分有せり現在點燈數は一千五百燈なり

社長　横田多喜助　　取締役　黑田茂八
同　三好虎藏　　監査役　藏山佐太郎
李金泉

◎山下商店　瓦房店東街一號地

營業　和洋酒、食料品並に雜貨類軍隊用達

本店は大阪に在り明治三十九年山下出張所を開設し大正三年五月森田彥三郎、長崎彌作兩氏の合名經營として山下商店と改稱せり蓋平及瓦房店驛前に出張所あり

主任　森田彥三郎

◉三好洋行　瓦房店新市街二〇號地（電話二四番 振替大連九六四番）

營業　質、貸家並に精白米販賣

當洋行は個人經營にて經營者は明治三十八年野戰鐵道附として渡滿し同四十一年迄滿鐵會社に奉職し同年八月より現業を開始す

營業主　三好　虎藏　德島縣三好郡昔間村八十二番地、明治七年二月生、夫人つた子三十一歲、男一名

當店は個人經營にて營業主は明治卅九年三月瓦房店に來り雜貨商を營みしが四十一年一月より現業を開始す一箇月の賣上高平均六百圓內外とす

營業主　萩　松三郎　大阪市東區廣小路三十五番地、勳七等、明治十五年一月十五日生、夫人るい子三十歲、男一名

◉藤山煉瓦製造所　瓦房店東街第三區二八號（電話二九番）

營業　煉瓦製造販賣並に撫順炭販賣

當所は個人經營にて明治四十二年十月開設す一箇年の煉瓦製造高五十萬內外にして支那人職工二十名を使役す製品は多く都督府及滿鐵會社に納む大正三年十月より撫順炭の販賣を兼營す

營業主　藤山佐太郎　三重縣一志郡高岡村大字田尻、三十五歲、養母いさ子七十五歲、夫人はま子四十歲、男滿男七歲、四郎三歲、五郎一歲

◉萩吳服店　瓦房店東街一二號地（振替一三二番）

營業　吳服

◉旭農園　瓦房店附屬地

營業　農園

當園は個人經營にて資本金二千圓、明治四十一年二月の開園當時は四萬坪なりしも逐年增加し目下九萬一千七百坪を有す內果樹園八千五百坪其他は普通作物の耕作に充當せり猶本年より御大典紀念として六萬坪を增加し果樹栽培に充當することゝせり常傭支那人夫八名、臨時人夫一箇年六十名を使役す而して來年よりは屠殺場を兼營する計畫なり

營業主　油井　倉吉　廣島縣佐伯郡草津村九〇〇番地、明治七年十一月一日生、夫人いち子三十二歲、男幸作十七歲

◉瓦房店炭鑛　瓦房店驛東方八支里

營業　炭鑛業

當炭鑛は炸子窯と稱し露治時代に露人之をれ經營せしが滿鐵會社は撫順、煙臺炭鑛と與に之れを我政府より引受け其後現營業主に賃貸せり炭質は本溪湖炭に類似するも粗惡にして僅に鍛冶用に適するが如し目下舊式の狸掘にて採掘中なるが出炭量は不一定なり滿鐵會社は時々技師を派遣して試驗中なり

營業主　森田彦三郎

◎瓦房店神社　瓦房店東街

△瓦房店には明治四十四年より神社設立の議ありしが先帝の御不例に際し益々神社設立の必要を感じて同四十五年六月設立に確定し前守備隊長山岡中佐を造營委員長に、滿鐵各係主任、警務署長、郵便局長等を委員に推選し當時の滿鐵經理主任橫田氏庶務を擔任し祭神は天照皇大神、大國主大神の二神を祭り滿鐵より一千圓、公費より三百圓、其他は地方有志の獻金によりて經費二千七百圓を投じ神殿、拜殿、華表、手洗鉢の造營に著手し大正元年十二月二十九日竣成、同三十日竣成式を執行せり翌年より樹木花圃等を作り松樹は三年繼續して植附け漸く今日の翠態を見るに到れり石燈籠は大正二年八月より建造に著手し一は滿鐵車輛係より他の一は瓦房店驛より奉獻することゝし材料には萬家嶺の石を用ひ奇特なる瓦房店驛夫河內富藏氏は自ら石工となりて其勞力を提供し服務の寸間を利用して晝夜力作し僅に百七十餘圓の費用を以て見事なる石燈籠一對を完成せり

△當社祭神は天照皇大神、大國主大神の二神にして春季大祭を六月十五、六、七日に、秋季大祭を十月十六、七、八日に執行し其維持經營費は年々公費中より三百圓を支出することゝせり

社司　飯塚佐呂久　島根縣杵築、大正二年二月就任



大石橋

概說

△大石橋は大連を距る百五十哩、營口の東方十三哩九分の地點にあり大石橋の名は昔時游泥川に石虹を架せしに起因すと云ふ此地は鐵道開通前にありては營口岫巖間の一宿驛に過ぎざりしも東清鐵道南部線の營口分岐點となるに及び漸く其大をなし日露戰役後滿鐵會社の經營に移りしより此處に來住する者續出して終に今日の名驛となれり此地は往古の大石橋灣底に當れるを以て土地濕潤にして雨期の降雨連日に亘れば出水直ちに一面の湖水と化し而かも乾燥緩漫にて氣候不良なるが如し

△滿鐵會社の附屬地は總面積九十五萬坪、內市街宅地として貸付けたるもの一萬三千餘坪なり四十一年より工事に著手し今や道路延長二千二百餘間に達し下水溝の設備成り井戸三箇所を掘鑿し墓地、火葬場葬祭場も亦備はり公園は設備未だ完からざるも二千餘坪の敷地を有し樹木繁茂す更に盤龍山上勝景の地を利用して順次設備を加へ大正三年秋在留市民と協同して大石橋神社を建設せり同會社か是等市街經營の爲に費せし處は大正三年度末迄に約七萬圓なり尋高小學校、實科女學校、實業補習學校、圖書閲覽場醫院及社宅の設備完全なり居住者約五百三十戶、人口千七百人而して其大部分は滿鐵社員なり

△日本側官憲には營口警務署大石橋支署、守備隊、郵便局、憲兵隊、陸軍衞戍病院等あり支那側にありては鹽務局出張所、郵政局、第一巡警分駐所ありて各關係事項を管掌す

△宗教は一般に佛敎信せられ基督、回敎又一部人士間に行はる此地を距る西北方二十五支里老邊と稱する地に觀音大寺なる寺廟ありて之れに歸依するもの多く其祭日には信徒凡て肉類及油類を廢し一般に謹愼の意を表す又驛の西南迷鎭山には海雲寺の古刹あり每年舊曆四月の會式には參廟數萬人に達す

△滿鐵會社は此地に公學堂を置かざるを以て支那人子弟の敎育機關としては英佛人の經營に成る二學堂及舊式の小學堂あるのみ

△農工業として燒鍋、油房あれども微々たり邦人經營の醬油釀造及二三の農園あり此地の東北里許の雙

臺子に石灰を產出す年額約二百萬斤内外、石材は李家屯に產し稍や花崗石に類似し建築材料として使用せらる年產出高約三百噸にて邦人の經營なり此外盤龍山より割栗石產出し鐵路及道路撒布に用ゐられ年額八萬二千噸に上る

▲商業は附近に著目なる大市場を控へ且つ特種の產業を有せざる爲め多く小賣にして其取引不活潑なり

▲金融は頗る緩和にして其機關として見るべきもの僅に邦人の組織せる金融會あるのみ支那人は多く營口に至り金融を受くるを常とす通貨は小洋錢最も喜ばれ其他各種の日支貨幣受授せらる

▲重要輸出品は鹽、石材、栗等にして又輸入は麥粉石炭、木材を主とす大正三年度に於ける大石橋驛發送貨物は五萬四千二百十三噸、到著貨物は六萬四千四百四十五噸なり又同年度に於ける當驛乘降客數は乘車七萬六千六百六十二人、降車七萬八千三十四人とす

諸　營　業

◉山下商店　大石橋大街六六番地（電話長一九番）

營業　醬油釀造、食鹽製造、銃砲火藥、諸官衙用達

當店は明治三十九年の開設にて軍隊用達を營み附近軍隊に食料品其他を供給せり四十二年十二月よりは新舊式折衷の醬油釀造を開始し現今一箇年の製造高七百二十石に達し瓦房店以北の各軍隊及地方に供給しつゝあり四十三年十月更に食鹽製造を開始し販路は醬油と同樣にして需要年々增加す尚四十五年四月より銃砲火藥の販賣をも兼營せり

營業主　山下勝次郎（人事參照）

四平街支店　二條路三號地

長春出張所　新市街第八區七號

◉梅廼家旅館　大石橋大街五四番地（電話長七番）

營業　旅館

當旅館は明治四十三年の開設にて個人經營なり大正三年七月六十四坪を增築し五十人を容るる大廣間の設備をなす大石橋唯一の高等旅館にして又滿鐵會社

都督府、陸軍部、警察官の指定旅館なり
營業主　小林　才治（人事參照）

◉村上洋行　大石橋大街

營業　用達仲介及農園業

當洋行は明治卅五年天津に瑞穗洋行を設立し陸軍用達、馬匹賣、牛乳搾取販賣業を開始し三十八年本店を大石橋に開設すると同時に天津を支店となし營口牛家屯にも支店を開設せり四十一年牛家屯支店を閉鎖して本店に合併せり現在天津支店は牛乳搾取販賣日支人取引の仲介通運業を營み本支店を合はせて一箇年約千五六百圓の純利益を舉げつゝあり對支那人の商品賣込及び仲介業は漸次好況にて特に金錢取立貸付、土地買入等の雜收益著しく增加しつゝあり

營業主　村上　眞（人事參照）
天津支店（瑞穗洋行）　主任　酒井　理平

◉大石橋實業會　大石橋大街五五

△當實業會は大石橋實業家の有資格者を以て組織し會員の親睦を圖り實業上に關する事項を研究し之が發達を期せんが爲め明治四十一年三月創立せり現在會員五十一名、毎月例會を開き又一年一回總會を開く基本財產五千三百圓を有す

會長　小林　才治（人事參照）
評議員　七名　幹事　三名

◉大石橋神社　大石橋蟠龍山西南山麓

△當神社は驛の東北四丁蟠龍山の西南麓海拔百尺の處にあり沿線第一の神社にして壯嚴雄大を極む數年前より驛內天壽園に奉祀せる潮江天滿宮あるも規模小にして在留民の希望に副はざるを以て大正二年十一月頃より御即位大典紀念として神社建設の議起り大正三年三月右期成會成立し在留民の寄附金二千圓及滿鐵會社より一千五百圓の寄附金を得佐藤工學士之を設計し山の切開きは白川友一氏之を寄附し其他御神體は都督より寄贈せられ手洗鉢、石鳥井等諸般の備品等皆寄附より成り此等寄附合計七千圓に上る神殿は神殿造りの一間社、又拜殿は三間二面の幣殿附きにて略ぼ國幣小社に相當する壯嚴なる一大神社

則違反の罪、裁判所構成法第十六條の一第一項第二號以下に掲げたる支那人の罪に關して始審の裁判をなす事、其他別に定むる勅令により裁判事務を取扱ふ等にして現任大連民政署長は都督府事務官中特に一人を勅任官となし得るの規定に依りて勅任事務官として都督府參事官を兼ねて署長の職に在り

▲當民政署歷代署長は關屋氏に次で吉田嘉一郎（事務取扱）佐藤友熊（事務取扱）、力石雄一郎、吉田豐次郎、吉村源太郎（事務取扱）相賀照鄉の諸氏を歷て大正二年八月に至り現任大内丑之助氏の就任を見て今日に及べり

署長		大内丑之助（人事參照）
事務官（兼）		小池寛次（同）
警視		田中剛輔（同）
技師（兼）		倉塚良夫（同）
技師（兼）		磯田信之助（同）
總務係庶務主任	屬	有倉善
總務係官有財產主任	屬	谷熊太郎
總務係稅務兼會計主任	屬	喜多村茂男
總務係用度主任	屬	友田彦太郎
總務係法務主任	屬	山下珍治
警務係警務主任	警部	山川吉雄
警務係保安主任	警部	深町定次郎
警務係衛生兼地方主任	警部	畑藤巳之七
警務係司法主任	警部	太智清三郎
警務係高等警察主任	警部	戸田寛次郎
小崗子派出所	警部	小野彦五郎
水上警察	警部	黒坂石太郎

●大連市役所（大連市西通一丁目三一ノ一 電話一二二番）

▲日露大戰役の兵馬倥偬の際に於て猶未蒸年成なりし小街は大連と命名せられたり爾來星霜十周年、一萬五千の大厦軒々連り七萬の人口は肩々摩し經濟的地盤漸く鞏固にして東洋大商埠の觀ある大連は本年十月一日特別市制を實施し茲に大連市役所の開廳を見るに至れり由來當市には自治機關として大連衛生組合及び大連聯合町内會なるものあり前者は四十年二月の創設に係り汚物掃除、清潔及消毒方法其他傳染病豫防救治に關する方法及施行方を其事業として新開貢氏多年之れが組合長として成績年と共に擧り兎に角市の衛生狀態をして頗る良好ならしめし功績は多大なるが市制實施と共に組合事務は新市役所に於て繼承し同組合は九月三十日を以て解散せり又後者は四十三年二月各町内會の聯合（全部には非らず）によりて成り聯合町内會長は各町内會長より

互選し石本鏆太郎氏は之れが會長として多年多くの場合に於て市民を代表し公共的事業に同會の斡旋せし事少なからざりしも此れ亦た市民多年の主張貫徹して同會の必要なきに至り市制施行の第一日を期して其解散式を擧行したり

▲市制の發布に先だち本年九月三日白仁民政長官は民間有力者約三十名を大連民政署會議室に招集して市制案内示會を開き超ゑて八日關東都督府令を以て大連及旅順市規則を發布したり其全文左の如し

大連及旅順市規則

第一條　大連及旅順に市を設置し教育衞生及び其の他に關し特に指定したる事務を掌らしむ

第二條　市內に住所を有するものは市の費用を分任する義務を有す

第三條　市は必要なる規定を設くることを得

第四條　市に市會を置く

第五條　市會議員の定數は大連は三十名旅順は十六名とす

第六條　市會議員は當分の內民政署長其の半數を選任し他の半數は選任せられたる議員之を選擧し民政署長の認可を受くべし

第七條　市會議員は名譽職とし其の任期は二年とす但し補缺に係る者は其前任者の殘任期間在任す

第八條　市會は市に關する事件を議決す其の概目左の如し

一、規程を設け又は改廢すること

二、歲入出豫算を定むること

三、決算報告を認定すること

四、財産及營造物の管理方法を定むること

五、市費其の他使用料、手數料の賦課徵收に關すること

六、歲入出豫算を以て定むるものを除くの外新に義務の負擔を爲し又は權利の拋棄を爲すこと

第九條　市會の權限に屬する事件の一部は其の議決に依り市長をしてこれを專決處分せしめ若くは議員の互選を以て常任委員を設け之に委任することを得

第十條　市會は市長を以て其の議長とす市長事故あるときは其の代理者議長の職務を行ふ

第十一條　市會の召集及開閉は市長之を掌る、市會は議員定數の半數以上出席するに非れば會議を開くことを得ず

第十二條　市に市長を置く、

市長の任期は四年とす

市長は市會の推薦せる候補者三名中に就き關東都督之を選任す

市長は市を代表し市の事務を擔任す

第十三條　市會の議決、其權限を越え、法令若は議事規則に違反し其の他公益を害し又は市の收入に關し不適當なりと認むるときは市長は民政署長の指揮に依り理由を示して之を再議に附し仍改めざるときは其の議決を取消すことを得

市會が成立せざるとき、會議を開くこと能はざるとき、議決すべき事件を議決せざるとき、又は前項の場合に於て市會の議決を取消したるときは市長は民政署長の指揮に依り其の議決すべき事

件を處理すべし

第十四條　市に助役及書記若干名を置き市長之を任免す但し助役の任免に付ては民政署長の認可を受くべし

助役は市長を補助し市長事故あるとき之を代理す

第十五條　市は處務便宜の爲區を劃し區委員を置くことを得

第十六條　市費其の他の徴收及び支拂に關しては別段の規程を設るもの、外關東州地方費の例に依る

市費其の他の徴收金に關する事項に付ては五圓以上の過料を科する規程を設くることを得

第十七條　監督官廳は市の監督上必要なる命令を發し又は處分を爲すことを得

前項に依り特に費用の支出を要するものあるときは總て市の負擔とす

第十八條　左に掲ぐる事件は民政署長の許可を受くべし

一、規程を設け又は改廢すること

二、數人又は市内の一部に對し特に市費の負擔を爲さしめ若くは不均一の賦課を爲すこと

三、財産及營造物の管理方法に關すること

四、歳入出豫算を以て定むるものを除く外新に義務の負擔を爲し又は權利の拋棄を爲すこと

民政署長の許可を要する事件に付ては民政署長は更正して許可を與ふることを得

第十九條　民政署長は市の歳入出豫算を不適當と認むるときは追加又は更正を命ずることを得

第二十條　市會議員の職務を怠り又は體面を汚損するの行爲ありと認むるときは民政署長は之を解任することを得

第二十一條　民政署長は市吏員に對し懲戒處分、譴責、二十五圓以下の過怠金及び解職をなす但し市長に對する懲戒は關東都督之を行ふ

附　則

第二十二條　本令は大正四年十月一日より之を施行す

第二十三條　衛生組合規則は大連及旅順に之を施行せず大連衛生組合、旅順衛生組合の事務及び權利義務は各其當該市に於て之を承繼す

第二十四條　本令施行の際市長就職に至るまでの間其職務は民政署長之を行ふ

▲上記の府令に依つて觀れば當局者は旅連兩地に全自治を認むることは市民自治の能力、市經濟、其他の實狀に鑑み時機尚早なりと斷じ漸次市の權限を擴張し得るの形式を採れり此の特別市制案の規則は僅かに二十餘箇條に過ぎざるが元來市制發布は勅令又は法律の形式に據るべきものにして母國の市制に比しては頗る物足らぬ感あるも市の權限擴張、規程の改廢等の爲め伸縮自在の要を認むるより府令の形式を採りたるは寧ろ至當の處置と云ふべしされど市の事務權限の著しく局限せられたるは遺憾の次第にし

て僅に衛生、教育事務（小學校月謝の徴收、消耗品の支拂等會計事務及雜務）救恤事業の三種に過ぎず又議員選擧の弊を慮り官選複選の法を取りしは是れ亦た自治施行の過渡時代に於ける適當の處置たるを失はず

▲十月一日大内民政署長は十五名の官選議員の選任を告知して直ちに民政署に召集し連記無記名を以て複選議員の選擧を行ひ茲に議員三十名の選任を終り午後三時市會を開催す石本鏆太郎氏市長第一候補に推され同日都督より任命茲に市會の成立を見たり爾來數次市會開會し市會議事規則案、市會傍聽人取締規程案等十八件を議決せり猶市役所設立前後より其創始事務に盡力尠なからざる大連民政署庶務主任高濱素氏を助役心得に任じ其他市吏員を任命して其一段落を告ぐると與に同年十一月二日ヤマトホテルに於て市役所開廳式を行ひしに參會者六百名空前の盛況を呈したり市當局者は近く經費約三十萬圓の宏壯なる市廳を大廣場に建築する筈にて目下其經費の籌畫に就き考案中なり

▲當市役所の大正四年度（自四年十月一日至五年三月三十一日）の歲入出豫算は歲入七萬二百四十九圓八十九錢歲出は經常部五萬一千四百四十四圓二十八錢、臨時部一萬八千八百五圓六十一錢なり而して當市の戶別割等級規程は一箇年所得額一百圓以上に課金し之れを三十等に區分して三萬圓以上を一等とせり各等の負擔步合を一等は千分の八〇〇、二等同六〇〇以下順次遞降して三十等一の割合とせり

市長　石本鏆太郎　助役心得　高濱素

庶務課長　主任　足立秀次郎

學務課長（助役兼任）　主任　鈴　員

衛生課長（助役兼任）　主任　宮崎注連

會計課長　江口正兵衛

市會議員

一、官選の者

井上一男　岡本芳二郎　川上賢三

石埼震二　郭學純　長濱敞介

古澤丈助　村井啓太郎　安田鎌藏

堀内驛三郎　古部直介　福田顯四郎

相生由太郎　有賀定吉　牛作周

二、民選の者

金子平吉　柴田虎太郎　飯谷丈夫

飯塚松太郎　原田虎太郎　値賀連

河邊騁　吉野越次　田中末雄
中村敏雄　遠藤裕太　九鬼榮助
佐藤至誠　平井大次郎　平田包定

三、常任委員

川上賢三　值賀連　板谷丈夫
石埼震二　吉野越次　村井啓太郎
長濱敬介　福田顯四郎　郭學純

◉大連商業會議所（大連市敷島町 電話五四六番）

▲大連商業會議所の創立は大正四年六月に係る元と當市には明治三十九年以來大連實業會なるものあり會員約百二十名を有し商業會議所と略同一の職務を行ひ來れるが本會議所の成立したるが故に同性質なる同會存立の必要なきを認め既往十年の歴史を有する同會は有終の美を濟して大正四年七月其解散式を擧行せり

▲大連實業會は明治三十九年一月丙午茶話會の前身より同年二月大連實業會と改稱して商工業者の一團體を形成し先づ滿洲に於ける新設日本赤十字社への寄附、朝日新聞主催巡航船ロセッタ號觀光團の歡迎に其公共的活動の指を染め次で南滿洲鐵道に依て輸送せらるゝ特產物大豆豆粕雜穀及戰役中一時輸送の杜絶したる奧地への輸入物資に對する鐵道輸送力の著しく減退し來たるや此れ獨り當業者の利害休戚に關するのみならず滿洲物資輸出入の關門たる大連に於て商品取引上永久の基礎習慣を作る可き好機の逸す可からざる時期なる事の理由を具申して貨車配給增加の請願を陸軍大臣及野戰鐵道提部に提出し又從來大連に在りし民政部の旅順に移轉せんとするや一方に僻在せる旅順よりは滿洲の關門たる大連の適當なるにより寧ろ都督府を大連に移轉せられん事を稟請せり爾來或は滿洲に於ける特種銀行設立問題、特種貸出增資問題、自由港撤廢反對運動、日鮮滿三線聯絡特定運賃對抗運動等數へ來れば同會の活動せし公共問題は枚擧に遑あらず而して同會は一面には同會の主張及調查事項を發表する機關として大連實業會雜誌を發行し產業界の諸問題に對し現實將た未然に其調查研究を遂げて之を誌上に公表し常に斯界の明星となれり市民の有力者たる會長長濱敬介、副會長有賀定吉、幹事石本鏆太郎、石埼震二、川上賢三、佐藤至誠、阪井慶治の七氏は同會幹部として最後迄同

會の爲めに努力したり

▲斯く大連實業界の滿洲實業界に貢献せし處多大なるも同會員は市内一部の商工業者に過ぎざりし爲め經費の潤澤を缺ぎ從て活動意の如くならず識者の常に遺憾とする處なりしが適ま大正四年日支交涉圓滿に解決せられ滿蒙に於ける我利權の伸長を來たしたると共に大連實業家の率先活動を要するの時運に際會したるを以て此の好機に於て豫ての希望を實現するは頗る時宜に投ずるものなりとの意見は同會幹部及市內有力者間に一致し終に實業會を解散して當會議所の創立を見るに至れり最初創立委員として井上一男、相生由太郎、佐藤至誠、古郡良介、石埼震二柴田虎太郎、飯塚松太郎の七氏を充て大正四年六月二十八日第一回總會を開き多年の懸案たる當會議所の成立を見たる一面に於ては大內民政署長の奔勞少なからず

▲當會議所の目的及其職務は內地商業會議所と同一なるも其組織に於て異る所尠なからず即ち內地の如く特別法の規定に依るにあらずして民法第三十四條に依りて設立せられたる社團法人組織なる事是れなり從て會員の資格及役員選舉方法に於て一樣ならざるのみならず會員は外國人も等しく加入し得る事とせり一ヶ年の經費約一萬五千圓を計上し關東都督府より本年度補助金として金五千圓を下附され滿鐵會社も亦三千圓を補助せり會員は目下二百名に充たさざるも着々加入者の募集中なれば日を逐ふて活動の域に達すべく新市役所と共に前途多大の期待を以て囑目せられつゝあり

會頭　井上一男

副會頭　古郡良介

特別常議員

改野耕三	楢崎猪太郎	立花政樹
加藤順次郎	村津寛	

常議員

石埼震二	飯塚松太郎	佐藤至誠
柴田虎太郎	相生由太郎	有賀定吉
迫田彦助	吉野越治	花岡千波
早野重兵衛	古澤丈作	小島鉦太郎
北村五十彦	平田包定	原田虎太郎
遠藤裕太	長濱敏介	原田光次郎
田中末雄	柄澤正三	大庭仙三郎

須田綱鑒　河合藤七　平井大次郎
堀内驛三郎　兒島幸吉　河盛恒次郎
中村光吉　高田友吉　中村敏雄
福田顯四郎　山田實史　河邊勝
阪井慶治　天野節次郎　青木榮之助
莊偉治　鈴木兼重

各部部長

庶務部長　相生由太郎　商業部長　長濱敞介
工業部長　有賀定吉　理財部長　中村光吉
交通部長　石埼震二

所員

書記長　芝間裕吉代理　調査部長　篠崎嘉一郎

◉大連海關　大連市山縣通ム區一六一番（電話一七〇　八八一）

▲大連海關は支那の税關なり日本の租借地たる關東州内に其設置あるは蓋し通商上日支相互の便宜に出たるものにして明治四十年五月三十日日本特命全權公使林權助氏と清國總税務司「サー、ロバード、ハート」氏との間に調印せられたる「大連海關設置竝に内水汽船航路に關する協定」（明治四十年六月十一日外務省告示第十三號）に基き同年七月一日開始せられたり是より先き一千八百九十八年（明治三十一年）獨逸が膠州灣九十九ヶ年の租借權を取得するや翌年四月十七日同國公使「ハイキング」氏と總税務司「サー、ロバード、ハート」氏との間に青島海關設置の協約を締結して一國の租借地内に他國の税關を設立するの特例を開き全租借地を無税地域とし貨物の租借地を離れて清國の純領土に進入する時始めて之れに輸入税を課し又青島は外國港たると同時に清國開港たるの便法を設けたり尋て一千九百五年（明治三十八年）十二月一日獨逸は協約を改訂して自由地域を港灣の一部に局限し市内に入る貨物には之に輸入税を課することゝし一方其代償として海關は輸入税の二割を獨逸政廳に交付するの約を訂せり明治四十年日本政府の締結したる大連税關協定は一千八百九十九年（明治三十二年）獨逸の舊協約に準據したるものにして膠州灣現行の改訂協約に非ざるなり

▲海關の職員は通則として日本の國籍を有するものとし海關長（税關長）新任の場合には支那政府の總税務司は在北京日本公使館と協商を遂ぐるを要す又海關は支那の條約港に於て所謂海關道に屬する一切の

職務權利又は資格を有するものとす

▲大連海關協定中に『本取極は一季間試に之を實施したる上明春に至り更に善く土地の狀況及必要に應ずる爲め再考を加へ玆に承認する文書に代ふるに修正取極及命令を以てすべき事を約す』とあるを以て明治四十一年に於て協定の訂正を爲すべきもの丶如くなるも爾後荏苒七年を經過して今日に迨べり

▲開關當時の大連海關長黑澤禮吉氏は明治四十一年四月疾の故を以て請暇歸朝せり在任九ヶ月半、立花政樹氏代はりて關長となり大正四年九月青島海關長に轉任するや現海關長其後を襲へり

署稅務司（海關長心得）　江原　忠（人事參照）
署副稅務司（副海關長心得）大瀧　八郎（同　上）
幇　辨（秘書課）アール、エメー　同（總務課）紅松　雄二（同上）
同（秘書、會計）石田　榮（同上）　同（總務課）佐藤新太郎（同上）
署總巡（檢査監視部長）甲斐九十九（同上）檢査官上村重傳（同上）
同　中川　直一（同上）　同　佐伯　才藏（同上）
同　重信　榮熊（同上）

◉大連重要物產取引所

大連東廣場（電話一三一番　所長室）（同　一三二番　事務室）（同　一三三番　取引人控室）

▲當取引所は大豆其他重要物產の賣買取引の確實を期し且其の便宜を圖る爲め關東都督府に於て之を設立し各吏員を置き其の管理經營の任に膺らしむ又外に商工業に關し學識經驗ある者七名を選任し商議員會を組織して重要事項を諮詢評決せしむるの機關とす

▲大連港の發達に伴ひ大豆其他重要物產の取引盛に行はれ其結果弊害も亦多くして圓滿の取引行はれ難く且つ商習慣の殊なる日支人の取引なるを以て紛擾常に絕えず貿易伸展の支障尠からざるを以て勅令及府令を以て大正二年九月當取引所を開始し日支人及歐米人中資產信用の確實なる者に取引の免許を附與し重要物產の賣買取引に從事せしめたるに爾後從來の弊害漸く除去せられ日を逐ふて取引の圓滿なるを得るに至れり

▲業務開始以來日猶淺きも取引所を利用する者多く從つて取引高增加し大正三年秋歐洲戰亂の餘響を蒙り歐洲向きの豆油及大豆等の取引は一時大に窮境に

陷りたるに拘らず取引人中に破產者を出さず大體に於て順調に進行し本年取引は之を前年度の取引高に比し約二倍を增加せり

所長　村津寬（人事參照）
商議員　相生由太郎（同上）
臼井熊吉（同上）　佃一豫（同上）
井上一男（同上）　郭學純
古郡良介（同上）　大内丑之助（同上）

●關東州水產組合　大連市兒玉町十五ノ七

▲當組合は明治三十八年十月水產業者の團結に依りて創立し、更に同三十九年三月二十七日關東州民政署令を以て發布されたる、關東州水產組合規則に基き、水產業の改良發達及水產動植物の蕃殖保護に任じ、且つ其營業上の弊害を矯正し、組合員共同の利益を計る目的にて、漁業者、水產物製造業者、水產物販賣業者を以て組織（日支人共に）せる、公設機關なり

▲組合の業務は定款に規定する處、種々あれども今日專ら實行中にあるものは、(一)組合員の保護監督、(二)出稼漁業及移住漁業の奬勵、(三)水產業に關する諸般の代辨、(四)傷病者の施療及遭難漁業者の救助、(五)水產業に關する通信報告、(六)紛議の仲裁、(七)風儀の矯正、(八)衛生の注意、(九)天氣豫報、(十)漁況の報告、(十一)漁村の經營、(十二)漁船漁具の保護、(十三)餌料の供給、(十四)遠海出漁者の特殊保護監督、(十五)海上巡邏、(十六)水產業に關する功績者及善行者の表彰、(十七)水產統計等なり、旅順及貔子窩に關東州水產組合支部あり

組長　關東都督府技師　緒方千代治
組長代理　關東都督府警視　田中剛輔
常議員　關東都督府事務官　吉田豐次郎
同　關東都督府警視　田中剛輔
同　滿洲水產株式會社專務取締役　福田顯四郎
理事　渡邊善五郎

●社團法人大連海務協會　大連市寺內通二丁目五九號地（電話八八六番）

▲當協會は明治四十二年四月十日の創立にして大連港に來往する船舶船員並に在住船員を慰籍救濟するの目的を以て時の海務局長松尾小三郎氏主唱者となり會を組織せり同年十二月現任海務局長滿鐵埠頭事務所長楢崎猪太郎氏會長となり鋭意業務の改善を圖

り大正二年二月五日本會の基礎を鞏固にし事業を擴張すると同時に社團法人となし大連海務協會と改稱せり

▲當協會は名譽會員、特別會員及び正會員に依りて組織せられ其事業としては海事に關する業務の發達及海員の扶掖を圖るを以て目的とし(一)檢查部、(二)海損精算事務所、(三)海事仲裁鑑定部、(四)海員慰籍部、(五)海員救濟部、(六)海員講習部、(七)雜誌部の七部を置き檢查部は船舶の檢查に關する事務、海損檢查部は海損の起りたる場合の精算事務、海事仲裁鑑定部は船舶に關して起れる紛爭事件の仲裁鑑定事務を取扱ふ又海員慰籍部は會員及海事關係者の娛樂和親の機關とし海員救濟部は海員の誘導扶掖並に媒介事務を取扱ひ講習部は海事研究の機關とし雜誌部は汎く海事思想の普及を圖るを目的とす市內寺內通に海員休養所の設備あり

會長 楢崎猪太郎　副會長 石埼震二
外常務委員 八名　主幹 一名
海務協會檢查委員假事務所 神戶榮町一ノ三六番地
主任 富山久米吉

海務協會海員休養所 大連市寺內通
主任 袴田可坪

◉日露協會 大連市乃木町保線係樓上

▲當協會は日露兩國の有志會員を以て組織せらる會員を別ちて名譽、贊助、普通の三種とす而て協會の目的としては(一)日露兩國語の普及を圖ること、(二)每月講話會若しくは懇話會を開催すること、(三)日露兩國人に對し相當便宜を與ふること、(四)本會と目的を同ふする各地團體と連絡を通じ彼我の研究に資すること、(五)研究材料を蒐集すること、(六)機關雜誌を發行すること等に在りて春秋二季に大會を開き併て會務の報告をなすを例とす而して贊助會員は年額十二圓若は一時金二十五圓を、普通會員は月額五十錢の會費を納付して協會の維持經營に當てつゝあり現在の會員數は百二十名なり

會長 川上俊彥　副會長 露國領事（大連）
監事 井上一男　原田光次郎
中澤房則　井田孝平
森御蔭　川上賢三

庄司鐘五郎

大連市民協會　大連市伊勢町六九番地

▲當市民協會は大正三年八月を以て生る當時大連には大連實業會あり大連聯合町内會あり然れども前者は商業會議所的の性能を有し後者は下級行政補助機關に屬す此に於て大連實業家及各町内會有志相謀り大連市民協會を組織し市內百般の問題を研究するの目的を以て川上賢三、高坂景顯、莊伴治、菊池音之助、山本清毅の諸氏之が急先鋒となり滿鐵會社の經營を難じ或は衞生組合の改善を稱へ或は電燈及瓦斯料金の不當を論じ一方には週刊新聞を發行して市の公益に向て正論する處ありしが近く之れを月刊に改めたり會員數凡そ三百名なり

幹事
川上賢三　莊伴治　吉野越次
菊池音之助

評議員
小島孝吉　久保章一　原田猪八郎
鳥羽眞作　坂本和吉　淺沼長定
島田棵藏　板谷丈夫　坂井正恭

葛井新助・等三十名

大連實業倶樂部　大連市敷島町四號地（電話八一六番）

▲當倶樂部は大連に適當の公共集會所なきを遺憾とし明治四十四年六月市内の實業家相謀りて創立したる者にして同年十一月之れを資本金二萬五千圓の株式組織に改めたり倶樂部内は貸事務室、食堂、遊戲室、並に大集會場の四つに區劃し會員の社交機關に充用する外一般公共的集合其他商工業組合事務所に賃貸して維持の方法を講ぜり會費は一箇月一圓現在の會員は普通百五十名、賛助員三十七名、理事長及び理事監事の外三十九名の評議員あり

理事長　長濱敏介（人事參照）
理事　有賀定吉（同前）
佐藤至誠（同前）
阪井慶治（同前）
監事　山田實史
飯塚松太郎（同前）
堀內驛三郎（同前）
國政與三郎（同前）

大連商業學校　大連市播磨町（電話四九八番）

▲當校は東洋協會の經營する處にして四十二年十月其創設を議決し四十三年七月松本喜一氏を聘して敎頭兼敎授に任じ開校準備に著手し同年九月大連第一尋常高等小學校の一部を借入れ文部省令第一號實業補習學校規定に基き商業に關する敎科並普通學科の補助を目的とし各六箇月を以て修了期と定め授業を開始せしが更に四十五年四月一日より甲種商業學科課程に準じて甲種商業科の創設を決定し從來の商業補習學校を補習夜學部と改稱し同年四月十日甲種科生徒七十六名を募集して授業を開始せり而して之と同時に校舍の新築を計り工費約三萬五千圓を投じて同年八月竣工し同年九月より新校舍に於て授業す大正元年十一月二日文部大臣より本校卒業者（甲種）に對し各種專門學校入學の資格を認定し並に徴兵令第十三條により徴兵猶豫を附與せらる、大正三年六月約一萬五千圓の工費を以て講堂を新築し同年八月大連公會堂を借受け寄宿舍に充つ

▲現在の生徒甲種科二百七十一名にして大正六年度に入り始めて卒業生を出すべく夜學部は英語、支那語、簿記、法制經濟、商事要項、數學、漢文の各科にて普通科を通じて七百十四名なるも一人にして各科兼修の者あるを以て通學生數は三百三四十名なり生徒授業料は甲種一、二學年一箇月一圓二十錢、三學年以上一箇月二圓夜學部毎月一圓なり

▲本校經費は大正三年度の收支豫算によれば授業料收入五千三百四十六圓、東洋協會滿洲支部より一萬四千百四十四圓計一萬九千四百九十圓を以て經常支出に充て居れり然して本校は內地の同種學校に比し支那語及支那地理、歷史、風俗、習慣等に特種敎育を施し將來支那大陸方面に活動すべき人材の育成を目的とし又補助夜學部にありては筆算生、飜譯生、ガイド等に種目を別ちて適材檢定試驗を行ひ市內の當業家に立會を求めて只管實用的なるを企圖しつゝあり校長には白仁民政長官を戴き職員としては東洋協會滿洲支部に於ける幹事及評議員を網羅せり重なる敎授氏名は左の如し

敎頭	松本喜一（人事參照）	敎授	南部豐治
敎授	小原彌作	同	野老山長角
同	大瀧善八	同	山本仙
同	吾妻耕一（囑托）	同	横山榮一
同	古山庸	同	井上喜與記

同　原　一雄

◎本願寺幼稚園　大連市播磨町七區一二號地

▲本園は本派本願寺の經營にして明治三十九年十一月故花田頓性師內地より職員を聘し來り四十年四月市內大山通一丁目に假校舍を設けて開園す當時兒童數五十一名なりしが後漸次增加し四十年十一月西通一丁目に移轉し四十二年十一月二十三日約二萬圓を投じて現在所に新築移轉せり設立當初より收容せし兒童延人員一千百三十五名にして目下現在數二百二十八名あり之を五組に分ち姆母六名を以て訓育に努めつゝあり而して經費は大正三年度に於て二千八百二十三圓五十錢を要したり

園長　前田德水（人事參照）　監督　小川美代治

◎大連子供館　大連市若狹町二七號地

▲當子供館は明治四十五年六月九日の設立にして滿三歲以上の就學前の兒童の保育を主として別に學齡兒童の爲め圖書室の設けありて隨時閲覽せしむ亦兒童御伽會を時々開催す大正二年三月二十九日第一回修了式を擧行し以來大正三年三月二十八日第二回大正四年三月二十九日第三回の修了式を擧行せり當初よりの修了兒童數三十五名、入館兒童約四百名にして現在兒童は六十餘名なり

館長　西村誠三郎（人事參照）
顧問　工學博士　岡澤新兵衞（同　上）
相生由太郎（同　上）
石本鏆太郎（同　上）
廣谷　秀雄
久留島武彥

◎大連慈惠病院　大連市伏見臺（電話二一七〇番）

▲日露戰役後に胚胎したる慈善的產物の一なる當院は三十九年九月一日の創立にして當時基督教慈惠病院と稱し市內浪速町にありしも翌四十年十月現在の伏見臺に移轉し四十三年一月大連慈惠病院と改稱せり專ら經營の衝に當りしは現任理事長柴田博陽氏にして年を經る事九星霜大連民政署の庇護と社會の同情とにより病院として其體裁を整へ既往九箇年間佳良の成績を擧げたるは誠に之基督の愛に勵まされて興りし靈的活動の表彰にして本年二月年來の希望貫徹

して組織を財團法人に變更したり

▲患者を普通、委託、特別の三種に區分し普通患者は當地に關係なき困窮者にして醫療を受くる資格なきもの委託患者は大連民政署及赤十字社より委託を受けて取扱ふものにして所謂行路病者の如きに屬し特別患者は醫療の實費を支出して診治を受くる者にして之れを入院及外來に區別し特別患者は其料金を受くるも其他は殆んど施療にして此等患者に對し各病室を設け治療の外時々基督教の講話をなし精神的慰安を與へ居れり

▲創立以來大正三年末日迄の計數によれば患者總數一萬三千九百三十五名、内普通入院六百二名、外來四千二十一名、特別入院一千百三名、外來七千百八十五名委託入院四百九十五名、入院死亡四百十九名外來死亡百十名なるが此等の財源は基本金の利子、副業部の純益、實費患者の取扱金、委託患者取扱金有志の寄附金等にして大正四年度に於ける收入豫算九千百三十五圓餘、支出一萬二千四百十六圓、差引三千二百八十餘圓の不足にして理事者は年々此不足額を補ふに足る財源を得んと苦心中なり

▲病院に於ける設備としては第一、二、三の各病棟病院本館の建築物あり醫務部主治醫一名、助手一名藥劑師二名、事務員二名、看護夫五名、看護手二名、其他傭人等あり外に顧問醫として河西博士を戴けり

役員

理事長　柴田博陽（人事參照）　理事　勝俣喜十郎
土井三郎

評議員

金子平吉（人事參照）　郭學純
大内丑之助（同前）　石埼震二（人事參照）
井上一男（同前）　尾見薫（同前）
工學博士　岡洋精兵衛（同前）　古部貢介（同前）
田中副輔（同上）

主治醫

小松徹

◉大連基督教青年會

大連市敷島町五番地
（電話一〇六〇番）

▲本會は基督教主義の下に會員組織を以て成る團體なり明治三十七八年日露戰役に際し我基督教青年會同盟本部は軍隊慰問部を設け滿洲の戰野に委員を特

派して兵馬倥偬の間に將卒慰問の爲めに盡瘁せしが軈て戰雲收まり關東州租借の訂約成るや當時の勳勞者北米基督教青年會主事シ、ヴイ、ヒツバード氏は殖民地に於ける風教裨補の爲めに基督教主義の青年會館の建設を圖り挺身米國に歸り有志に傳檄して寄附を募り其額五萬圓を得るや直ちに歸來し更に大連官民有力者の翼賛を得て建築委員に國澤新兵衛、箕輪焉三郎、成川官二郎の三氏を創立委員に伊藤幸次郎、大塚素、宮内季子、渡邊翻、三好三郎の五氏を擧け後更に此五氏を理事に推撰し地を敷島町の一角に相し四十三年六月起工し年を超へて竣成を告げ同三月一日を以て開館同月十八日盛大なる落成式を擧げたり

▲本會事業としては青年會夜學校を開設し學課は語學を主として英語、露語、支那語の三料に分ち低廉なる謝金の下に斯界の老練家をして敎授に任せしむ又會館内に社交室、寄宿舍、圖書室、食堂等を設け又音樂部及體育部を置き或は諸名士を請ふて宗教、文藝大講演會を開き又毎週英語の聖書研究會を開きて青年會員の敎養及一般の公益に供せり其他館内の設備は浴場理髪より寫眞室に至る迄殆ど遺憾なく整頓せり本會の維持は通常會員及賛助會員の會費並に寄附金を以て之れに充て役員は市内諸名士を評議員及理事に推せり

名譽主事　シー、ヴイ、ヒツバード
主　　事　守瀬與三吉（人事參照）
副主事　古閑亮

◉大陸青年團　大連市奥町二丁目五〇番地

▲明治四十三年同志の青年團結して大陸青年團を設け河合篤叙氏を團長に仰ぎ金子雪齋氏を顧問に聘して精神の修養を誓ふ之を本團の濫觴とす

▲大正元年河合氏去り金子翁を推戴して主宰者と爲す二年二月團規を改め組織を新たにし主義を宣明し同時に發會式を擧げ朝野の名士皆來會す本團の姿勢是より整ひ團員日々增加す毎月二回例會を團長宅に開き團長の講授を始め各方面の名士を請して修養的講話を爲す、四年に至り本團は智識普及の義務を盡すの目的を以て毎月一回或は二回通俗大講演會の公開を實行しつゝあり有志の來聽する者堂に溢れ功益

頗る大なり

▲本團の主義は忠君愛國を根底とし大陸發展を目的とし各其本分に應じ奮闘努力身を修め國家に貢獻せんことを誓ふ而して本團員の修養には智仁勇の三大綱を立つ

(一)智、　學問、經驗、皆智的修養に屬す

(二)仁、　忠、孝、信、義、博愛、禮讓、義務、公平、犧牲等の道德觀念皆之に屬す

(三)勇、　各種武術及體育法、膽氣長養法を始め心身鍛練に關する事項は道德精神の根本修養と相待ちて忍耐、決斷、不畏、持久、實踐等の力を養ふ是皆勇に屬す

▲從來本團には本團の目的を達する爲めに必要なる設備なかりしも來る五年一月より機關雜誌を發刊し一面會館を新築して道場、寄宿舍、講堂に分ち以て青年の收容と其心身修養とに供する筈なり

▲內務文部の奬勵に係る內地青年團の趣旨の如きは唯本團の一部たる少年軍が之に相當するのみ本團の趣旨は更に深く範圍は更に廣く青年壯年を網羅して更に之を區分し且地域に拘はらざる也

團長　金子平吉（人事參照）

●救世軍婦人育兒ホーム　大連市須磨町六六號地（電話一四四〇番）

▲日露戰爭漸く終んとする頃當時基督敎青年會の軍隊慰問部主事として滿洲駐在中の益田政助氏及び其他の有志は內地より多數婦人が誘拐せられて滿洲に來り幾多罪惡の生涯を送る有樣を見るに忍びず就中最も氣の毒なる數名の少女を救濟して之を東京の婦人ホームに送りしが此種婦人の數は非常に多くして一々之を東京に送るを得ざるを以て終に必要に迫られ明治三十九年四月滿洲婦人救濟會を市內浪速町に創設せり同年九月此の事業を救世軍にて繼承し翌四十年飛彈町に新築移轉し專ら救濟に努めたるが大正三年二月該ホームにて一白痴婦人の放火により建物全部の烏有に歸せし以來は借家にて事業を繼承し來りたる處經營上の不便甚だしきを以て大正四年八月都督府及滿鐵會社の補助其他有志の寄附に依り現地に新築移轉し面目內容共に大に一新せり而して當ホームが設立以來收容せし婦人の延人員は八百七十一名の多きに及べり

祠落成せるを以て大正三年十月二十九日天照大神大國主命の二神の鎮祭式を舉行し同三十日大祭を執行せり而して潮江天滿宮及招魂碑は末社として同社に奉祀せり大正四年七月社務所の建立に著手し同年九月落成す神社の維持費としては神社維持講ありて在留民より月五十圓を醵出し滿鐵公所より毎月二十五圓を寄附す例年五月十五日及び十月十五日に春秋大祭を行ひ營口領事は奉幣使として來拜するを例とす

社司　平井正延（國學院出身）





營口

概説

▲營口は遼東灣の奉天省に深く灣入せる最奥部に位し遼河々口を溯ること十四哩東經百二十二度十五分北緯四十度四十分の地點に在り此地は今より百餘年前には汪洋たる渤海に臨み潮の干滿に依り出沒せる洲にして當時外來の船舶は凡て牛莊又は蓋平の西方二十支里なる西河口に碇泊せしものなりしが渾河及巨流河より流下する泥土は遼河により漸次下流に押流され此泥土は時と共に層をなして遂に一大葦原を形成せり其後道光年間漁民此處に漂著して一漁村をなし玆に初めて地名を沒溝營と稱せり是れ今日の營口にして當時田庄臺は商業最も繁昌を極め出入の船舶凡て此處に碇泊したりしが西暦千八百三十年後は其下流に淺瀨を生じて船舶の出入不便となり漸次其繁榮が營口に移るの情勢を來たせり千八百五十八年英佛聯合軍の天津北京を陷れて天津條約を締結するや其文書に牛莊外四港を新に開放すとあり蓋し當時關係者は牛莊の現狀を知らず唯地圖上に於て遼河口に最も近き港として漫然之を指定したるものなるべく千八百六十一年英國領事 T. T. Meadows 氏の領事館設立の爲めに來るや其貿易が營口に移れるを見て徒に條約の文字に拘泥せず開港場設立の眞意に顧みて營口に領事館を開設し牛莊の名を以て之を條約上の通商地と爲し了れり是れ現在に於ても外交文書及海關に於て牛莊と記する所以にして營口が海外に其名を知れしは此時を以て始めとす然れとも當時は猶微々たる一小市街に過ぎずして營口が著しき發達を遂げたるは最近二十年の事に屬す

▲地勢は海陸兩者の支配を受くるも就中大陸の影響を蒙る事甚だ敷毎年十二月中旬より翌年三月上旬迄遼河の凍結するを例とす雨量甚だ少なく大氣常に乾燥して四、五月の交は強風吹き荒み天は黃塵を漲らして歩行困難なる事珍らしからず元來營口は水質惡敷毎年夏季に至れば傳染病發生し衞生狀態頗る不良なりしが明治四十二年營口水道電氣會社に依り水道の布設せられてより此の不良の狀態を改めたり

▲市街は新舊二街に分かる新市街は日露戰爭後時の

軍政官與倉中佐が巨費を投じて建設せしめたる處にして市區井然として洋風煉瓦建ての巨屋相連り警務署、民團役所、滿鐵醫院、滿鐵埠頭、東亞煙草工場等皆茲に在り舊市街は支那在來の市街にして蜿蜒二里餘に亘り家屋は皆支那式平屋にて亂雜を極む我領事館、正金銀行、三井洋行其他日支の巨商は皆此舊街に在り人口は支那人は遼河の開閉期に依りて著るしき增減あるも大抵四萬乃至六萬、日本人は約二千五百人にして其他洋人は二百人に滿たず

▲官衙及公共機關としては日本領事館、都督府警務署、民團役所、英米露獨領事館(獨は目下撤退)あり支那側には藩遼道尹衙門、知事衙門、巡警總局、稽核所、審判廳、海關、商務會等あり此地は沿線中唯一の例外として滿鐵會社の附屬地なく(新市街は營口領事これを管轄す)從ふて地方事務所の設けなく其經營する處は唯だ醫院及埠頭あるのみ新市街は營口領事管轄の下に居留民團其行政補助機關たり居留民團は軍政當時よりの官有財產を繼承せしを以て基本財產を有し以て衞生、教育、土木等の業務を經營す

▲交通は當地を起點又は終點とする鐵道に南滿及京奉の二鐵道あり南滿線は大石橋分岐點より營口驛に達す其間十三哩なり京奉線は溝帮子驛より田庄臺を經て當地西海關の對岸河北に終點を有し一般に之を河北驛と稱す河北驛より溝帮子迄五十六哩奉天迄百六十哩にして由來京奉鐵道は我滿鐵に對抗して貨物吸收に腐心し奉天營口間に運送せらるゝ貨物は時に滿鐵京奉二者奪合の狀態を呈することあり

▲航路は之を四種に區分するを得べく(一)、日本航路は日本郵船會社の命令航路として神戶北支那線及橫濱北支那線と其他社外船航路(二)、南支那航路は大古洋行、怡和洋行、招商局の三會社ありて多くは不定期なり(三)、龍口航路は苦力輸送を主なる目的となす(四)天津航路も亦た苦力輸送を主とし每年來往する者七八萬を算す此他の航路には東和公司の取扱に係る支那官鹽輸送の爲め航行するもの數隻あり芝罘へは南支那航路船及び日本定期船寄港し青島には日獨戰以來開航し又滿鐵は往年より香港への航路を開き石炭雜貨の輸送に從事せり

▲遼河の水運が滿洲の開發に與つて大に力あることは

滿洲に於ける都會の多くが遼河の沿岸に發達せしを以て證するに足れり殊に營口との關係は最も深厚にして營口今日の繁榮は全く之を遼河の賜と云ふも過言にあらざるのみならず又營口將來の運命も一に之に懸れり然るに遼河は春冬四箇月に亙りて結氷し交通杜絕せらるゝを以て鐵道の發達せる今日に於ては交通機關としての價値は到底鐵道に及ばざるのみならず其河道は多年自然の儘に委せられし結果處々に淺洲砂灘を生じ航行の不便多く從て遼河水運の勢力範圍は次第に狹少となれり然れども河流の性質として運賃上に於て能く鐵道と對抗し得るを以て滿鐵會社は特に埠頭を經營して撫順炭の輸出港となすなど營口は今日猶能く一年數十萬噸の貨物を上下せしめ滿洲交通上に於て頗る重要の地位を保てり

△商業は大連開港前は滿洲唯一の商業的中心點たりしを以て今猶巨商大賈を存す其最も多きは雜貨、布行にて糧坊、客棧、洋貨舖等之に次ぐ又大屋子なるものあり大屋子とは自己の名義を以て他人の爲めに貨物の賣買をなし一定の口錢を得るを營業の目的とするものにして大屋子は常に市中の商況に留意し委託者の利益を計り種々の便利を與へざるべからず其重なるものは居室、食事、倉庫設備、貨物運搬、稅金の立替等なり此種の營業は支那には古くより行はれ現今に於ても牙行、行棧、棧店等は皆同性質のものなり商家の機關たる營口商務總會は頗る勢力あるものにして行政補助機關たるの觀あり

△貿易は一九一四年に於て輸入價額は汽船二一、一七七、九八一兩、ジャンク六、三七二、七〇七兩、輸出一六、二一七、四五九兩、ジャンク三、四三七、六五六兩にして輸出品の重なるものは豆粕、大豆、豆油を主とし高粱、柞蠶類之に次ぐ輸入品は綿布類其半ばを占む

△農業としては記すに足る者なし僅に牛家屯附近に小寺農園其他日支人の耕耘に從事するあるに過ぎず然れども工業は滿洲唯一の工業とも稱すべき油坊ありて最も盛んなり當地今日の發達は此の油坊業に負ふ事甚だ多し近年大連に於て多數の油坊新設せられてより又舊時の地位を保たざるのみならず著名なる油房にして閉業せしもの少なからず現在營口の有する豆粕製造力は日に減少の傾きあり油房に次ぐ者に

は東亞煙草會社の煙草製造工場あり盛んに其製品を滿洲各地、山東及南清地方に輸送す外に東來醬園の醬油、硝子會社の硝子製造あり

▲金融機關は過爐銀と稱する貨幣制度ありて營口金融界を主宰し一切の機關及貨幣は皆之に聯屬附隨して存在せり要するに過爐銀制度は信用を以て貨幣に代用せんとするものにして一國の經濟的發達が充分高き程度に達し資金、法律等の關係に於て保證の安全なる時期に於て成立し得べきものなるに過爐銀の發行權を有する銀爐なる者は其資力微弱なるに拘はらず其發行には制限なく而も之を利用して自ら投機的賣買を營み又之が背後なる支那官立銀行は薄弱なる資本を擁しながら更に一層投機を營むを以て其危險測る可からずして夙に識者間に改革意見起るも急に實行し得ざるが如し又金融機關として山西票莊、中國銀行分行、交通銀行分行、其他兩替及小口貸附業たる錢莊及錢舖あり我正金銀行支店は三十二年の開店にして信用頗る厚し正隆銀行、露亞銀行又各支店を置けり

▲保險業は東京火災海上運送、共同火災、帝國海上運送及神戸海上運送火災保險會社の各代理店あるのみ倉庫の設備は稍完全し各船舶代理店は河岸に煉瓦造倉庫を有せり

營口の盛衰

▲滿洲政府は從來滿洲に他省人民の移住禁止の政策を採り來りしが大勢は遂に防ぐに由なく其後方針を改め却て其獎勵に力めたる結果山東、直隸二省の農民潮の如く渡來して開墾に從事したる爲め穀類の産額著しく增加し又東清關外兩鐵道の工事開始せられ其材料及多數の勞働者の需要勃興せると一方には大豆、豆粕の輸出の好況なる等により市況をして一變せしめたり日清、北清の兩役は一時市場の秩序を紊亂したるも亦た却て之によりて滿洲を世界に紹介するの道を啓きたると與に内外の商賈及船隻皆輻輳し來りて新に殷盛たる營口を現出せしめたり

▲日露戰役は更に營口の大膨脹を促進したると與に亦た邦人の營口に於ける地盤を擴大ならしめたり抑も我牛莊領事館の開設は遠く明治九年に在りて十八年には三井物産の出張員來りて駐在し明治二十三年

には日本郵船會社は定期航路を開き三十二年には農商務省は商品陳列館を創設し而して卅三年には正金銀行支店開始せられ日滿貿易は營口に於て聯絡を取り我商民の來住次第に多きを加へたり此間日清北清の兩役に逢ひ在留邦人皆引上げ其永年扶植せし根據を覆沒せられたるも役後再び來りて舊地盤の修補擴大に努むる内に日露戰役の開始に際し邦商は一旦山海關方面に避難せしも幾何もなく我軍の此地占領と同時に續々歸來せる上に當時邦人の入滿の途は唯營口のみなりしを以て邦人の新に入來する者日夜相踵げり而して彼等は奧地戰線より來れる酒保等に物資を供給し若くは之に附帶せる大小事業を起こせしかば營口在留邦人數は忽に一萬に上れり媾和後在留者奧地に進めば新來者亦た隨つて來たり進む者は諸般の物資を此の地に求め新來者は盛に店舖を開きて之が供給を圖れり斯くて營口は對奧地の完全なる問屋地と見做され大連既に開放せられたるも道遠くして運賃嵩み且急需に應ずるの遲きと又物資の不備なる等の爲め商人は彼れに趨かずして此れに來たり同時に新に貿易に從事する者に小寺洋行、和田保、光明洋行、永順洋行、棉花會社等の本店又は出張所の設けらるるありて營口は一時蔚然として滿洲呑吐港たるの盛觀を呈するに至りしなり然るに明治卅九年鼠疫流行の慘禍起り營口は其病源地と目され遂に交通遮斷の厄に逢ひしを一轉期とし奧地の取引は着々大連に奪はれ鼠疫終熄後も此傾向漸を以て勢をなし之を挽回するの既に容易ならざるに際して明治四十一年の滿鐵海港發着特定運賃率施行となり此の結果は貿易上營口に大不利に大連に大有利となり大には大豆、綿糸布より小には日常雜貨の輸出入に到る迄も其の大部分を大連に奪はれ營口は遂に大連との競爭に於て落伍するに到れり

營口と特定運賃

▲營口貿易は輸出は明治四十一年度の三千三百萬兩臺より四十四年の四千四百萬臺を最高として大正三年には二千六百萬臺に除落し又輸入に於ては四十一年の三千八百萬兩臺より四十四年の五千六百萬臺を最高として大正三年には三千七百萬臺に衰退せり之れを大連の輸入が四十一年の三千萬兩臺より大正三

年に六千八百萬臺に遞增し又輸入が四十一年の二千八百萬兩臺より大正三年の五千二百萬臺に激增せるに比すれば彼此盛衰の跡は明瞭なり斯る明著且つ急激なる盛衰の岐るゝ源因は全く滿鐵會社の鐵道運賃政策に在り即ち滿鐵會社は四十一年滿鐵海港發着特定運賃率を施行して大連には特に低率なる運賃を施行し營口に對しては特定せられざる運賃を施行する事とせり元より滿鐵會社は營口壓迫の爲めに特に營口に高率運賃を施行するに非ずして大連を保護せんが爲に特に大連に低率なる所謂特定運賃率を施行するにあれども其の結果は直に營口に對する壓迫となる尤も營口も海港發着特定運賃率に均霑せざるには非らず然れども營口か均霑する處は僅に范家屯以北に於てのみ然も其の均霑したる結果は長春大連間に於けるものと長春營口間に於けるものとが纔に同額に在りと云ふに止まり大連長春間四百三十七哩五分と營口長春間三百一哩との距離の差即ち後者か前者よりも百三十六哩五分の短距離に在る事實は無視せられつゝあり均霑したる場合に於て猶且つ然り況んや其の均霑せざる他の多くの各驛間に對する場合の不利なることは推知するに足る可し

▲營口は此の不公平なる滿鐵特定運賃の外に冬期箇月間遼河の氷結すること、河口塡塞して大船の出入困難なること、內地との連絡に直航船なき事、其他對支取引に於ける不利なる商習慣ある事等の貿易上の障害あるを以て到底滿洲の寵兒なる後進の大連に對抗すること能はず商務年に沈落して油房業の如き漸く其數を減じ往時滿洲の中心たりし金融市場も其中心たる資格を失ひ遼河輸送の大豆は鐵道に奪はれて河上往來の戎克船隻は年一年に減少せり營口在留民は此の頹勢を挽回す可く實業會之れが中堅となりて先づ大聲して不當なる滿鐵運賃の改定を當路及社會に呼號するも此運賃政策なる者は理論以外に或る高等政策より來る意味を含めるを以て今の處容易に貫徹せられざるが如し而して遼河々口の浚渫には營口領事團に於て遼河浚渫局を開設し出入船舶及貨物に附加稅を課し之れを其工費に充るの方案確立して既に課稅しつゝあるも內部に種々の行徑ある爲め工事には未だ着手せざるが如し

諸　營　業

◉營口水道電氣株式會社

營口新市街南本街（電話[illegible]一番）

營業　水道、電燈、電話、運輸

當會社は資本金二百萬圓拂込一百萬圓の日支合辦の株式會社にして明治三十九年十一月を以て創立す株主は日本人三十四名、二萬五千八百六十四株、支那人百九十九名一萬四千百三十六株、總株數四萬株の内滿鐵會社は二萬二千六百株を所有せり

當社の根本事業は水道にて水源地は遼河の上流水路十五哩の地點田庄臺の對岸なる立科に在り汽力に依りて遼河の水を採りジュウエル式濾過機に依りて澄清し蒸氣動力に依りて營口北本街所在の高さ七十呎の配水塔に送水し同所より市街各地に配水す一日五十萬加侖の給水力を有し送水管の延長五里一丁十五間配水管の延長四里十町一間に達す最近一ヶ年間に於ける一日平均の給水量十八萬加侖にして大正四年上半期の總收入金二萬六千九百三十八圓二十一錢、支出二萬八百八十三圓四十二錢七厘差引六千五十四圓七十八錢三厘の利益にて前期に比し收入に於て金八千三百八十一圓五十八錢六厘、支出に於て三千五百七十六圓十九錢七厘を減せり

電話は複式の交換方式にて線路延長鉛被ケーブル線四百六十二哩十五町三十間、ラバーケーブル線五里二十五町十間、計六百九十七里二十九町十九間三尺に亘り現在加入者日本人二百名(内長電四七名)支那人二百七十六名(内長電八六名)歐米人三十五名（内長電一二名）計五百十一名にて本年上半期に於ける總收入二萬三千九百四十圓四十四錢五厘、總支出金一萬三千三百六十八圓三十錢、差引一萬五百七十二圓十四錢五厘を利得せり之を前期に比し收入金二千八十三圓二十三錢九厘、支出金三百四十六圓九十一錢七厘を減少せり

電燈は營口北本街に水管式汽罐に依る汽力發電所あり三百キロワット二臺、二百キロワット一臺、計八百キロワットの發電機を装置し線路延長五十里十一間に達し需要家數八百五十八名、點燈數一萬五千六百四十一、之を十燭換算する時は一萬六千六百五十燈にして大正四年上半期に於ける收入四萬六千八十

一圓九錢七厘、支出金二萬三千七百四十五圓八十九錢九厘、差引金二萬二千三百三十五圓十九錢八厘を利得せり之を前期に比し收入に於て金五百八十七圓六厘、支出に於て金一千三百八十六圓六十三錢一厘を減せり

運輸事業は主として市街電車にあるも未だ敷設の運びに至らず

要するに當社は電話及電燈に於ては每期相應の利益を擧ぐるも莫大の資本を固定せしめたる水道は支那人の衛生思想の發達緩慢にして良水飮用者の增加率が豫期の如くならざるより未だ充分の利益を見ること能はず特に大正四年上半期に於ては主として歐洲戰亂の餘波たる商況不振と加之前年十一月未曾有の暴雨雪より來る電線被害の復舊工事に殆んど純益の全部を提供せし爲め營業不良にて總收入金九萬八千五十圓八十九錢八厘、總支出九萬四千一百四十圓八十六錢差引金三千九百十圓三錢八厘の純益に之れを全部次期に繰越したり

社長　川村鉚次郎（人事參照）

專務取締役　木下鋭吉（人事參照）

取締役　潘玉田

同　李序園

同　平岡佳吉

同　李翰三

監查役　岡部次郎（人事參照）

同　王朗亭

庶務主任　松木員男　水道部主任　市川作太郎

電話局主任　小川眞勇美　電燈部主任　黃野菊松

發電所主任　黑川宗藏

◉小寺洋行　營口舊市街老爺廟街

電話（營二五五番　二二七番（本行）　二五六番（倉庫汽舶部）　二八番（機器油房）　一〇六番（農場））

營業　油房、輸出入貿易、船舶運輸、保險代理、農園

當洋行は明治三十九年の開設にて神戸の小寺一家の合資事業に係り現營業主專ら之れが經營に任す日露戰爭終結するや小寺氏兄弟（壯吉、壯吉、文吉）三氏は亡父君泰次郎氏の遺志を承け其蓄積せる資財の一部を以て戰爭記念の爲め滿洲に一事業を與さむと議定

し三十九年先づ小寺洋行貿易部を創設し續いて滿洲工業の魁たる油房の建設に着手し時の軍政官與倉中佐は大に此の大業を翼賛して土地買入れ其他に就き斡旋太だ勉めたり機械は其大部分を大阪鐵工所より買入れ滿洲に未だ之れなき水壓式搾油法を試行し當初二三年間は其研究改良に苦勞し漸く之れを大成して模範を各油房に示したり此油房は四十一年に燒失したるが投下したる資本は前後百五十萬圓に上れり製造力は一日七千枚之れに大連の同工場製出高を加ふる時は小寺油房の製粕は一日一萬二千萬枚に達す貿易部は輸出に於て大豆、豆粕、豆油、雜穀、の輸出を主業として之れを營口、大連、浦鹽の三港より輸出し又副業として棉絲、棉布、砂糖、燐寸、麥粉、紙の輸入を取扱ひ此營業主は近頃多く大連に在りて其老實せる資本と各地に駐在せる行員俊才を運用指揮して勇敢なる商略を運らし一年の取引高二千萬圓に達し三井に次ぎたる滿洲斯界の巨物なり

船舶部は之れを營口及浦鹽斯德に設けて專ら運輸業を營み此他保險代理及農園を營み農園は營口牛家屯に在り外に朝鮮忠清南道に於て宏大なる農園を經營せり（大連小寺洋行參照）

營業主　小寺壯吉（大連在）
總支配人　小田宇平[illegible]
會計兼監務主任　中井守一郎
輸入部主任　旦　諺良
小寺營口油房　營口牛家屯　主任　川邊重治
小寺船舶營業部營口義宅門　主任　南村六太郎
小寺農場　營口牛家屯
大連出張所　大連市軍用地區　主任　栗村　榮
大連小寺油房　同　主任　高橋强平
神戸支店　神戸市兵庫小物屋町　支店長　森下時太郎
東京出張所
東京市深川佐賀町一ノ二七　主任　米谷彌一郎
奉天出張所　奉天小北門外　主任　手塚安彦
開原出張所　開原　主任　安田佳藏
長春出張所　長春　主任　多賀谷俊吉
哈爾賓出張所　哈爾賓　主任　笠井　保
浦鹽出張所　浦鹽　主任　池永省三
倫敦出張所　倫敦　主任　中西秀三郎

◉三井物產會社營口出張所

營口重盛街　電話（長五〇番 二四八番 六〇番 六六番）電略（ミツ井）

營業　滿洲特產物輸出、日本棉絲布、燐寸、砂糖、海產物其他國產諸品輸入、明治、協同、日本、東京火災保險及東京海上及火災保險會社代理店

明治十八年山本條太郎氏出張員とし來り始めて豆粕を日本に輸入す三十八年十二月牛莊支店として滿洲の總轄店となり四十三年總轄店を大連に移すと同時に大連の出張所となれり主任は井上泰藏、平田初熊、谷口武一郎の諸氏を經て現主任に至る

主任　伊藤　寛（人事參照）　次席　廣瀨　金藏

錦州出張員　芳賀　金六

◉正金銀行牛莊支店

營口四平街元神廟街　電話局一〇番 一〇八番 一三五番

營業　一般銀行業並に金庫事務取扱

當支店は明治三十三年一月四日開店し中村錠太郎氏支配人として來任す爾來井上一男、杉原泰雄、戒田秀澄の諸氏を經て大正元年十月現支配人來任せり

營業は一般銀行業の外中央金庫事務を取扱ひ又通貨は金銀共に扱へり現在の營業所は經費十六萬圓を以て明治四十二年に落成せる堂々たる大建築なり

支店支配人　本鄉　榮（人事參照）

次席　藤牧　直記

◉正隆銀行

營口元神廟街（電話局二一〇番 振替大連二一一番 電略（セ））

營業　一般銀行業

當支店は元と正隆銀行本店として明治三十九年七月開設せられ其後四十四年六月同行改組織と與に支店となれり高木成德氏支店長として來任し爾來只管行務を刷新して好成績を擧げ大正三年十二月現在の營業所を新築せり高木氏は大正四年九月奉天支店に轉じて現支店長之れに代はれり（大連正隆銀行參照）

支店長　石塚　英二　次席　上野　政則

貸附主任　野村　兼次　預金主任　田原　義三

◉東亞煙草株式會社滿洲支店營口製造所

營口新市街青柳町二十九番地（電話局一二七番）

營業　煙草製造

本社は東京市麴町區有樂町一丁目一番地に在り當製

當所は明治四十二年十月工場を創設し同年十一月より製品を販賣す爾來毎年設備を增加しつゝあり滿洲は主たる販賣區域なるも北支那方面より所要南島に及び更に又南方支那に販路を擴張しつゝあるを以て製品は逐日多忙を極む

所長　理事　林　中　夫（入來營中）
作業課主任　技師　矢內　宗良
機械課主任　技師　瀬戸　憲
庶務課兼倉庫課主任　助役　八木　保

● 合名會社 東和公司　營口永世街一六　電話｛一七〇番　二四〇番｝｛一七六番（倉庫）｝　電略トウワ

營業　船舶業、石炭販賣、輸出入貿易、神戶海上保險及東洋生命保險代理業

當公司は明治四十年三月十日三宅、菊地の兩氏の共同出資を以て船舶代理業を開始し大正二年三月十五日資本金十萬圓の合名會社とし、登記を受けたり爾來大正二年九月東和丸（四、五〇〇噸）一隻を買入れ翌三年十月東南丸（三、三〇〇噸）を買入れ翌四年六月東京丸（四、五〇〇噸）同十月東閩丸（六、八〇〇噸）を買入れ外に神戶土佐商店と共同所有に係る三角丸（四、三〇〇噸）を所有す右汽船は毎年五六種宛契約して之を沿岸を根據として北は浦鹽南は南洋爪哇各港間の貨物輸送に從事す

輸出入貿易には營口に於ける豆粕輸出者としては三井、小寺に亞ぎ又輸入に於て綿絲太物は營口三井及日本綿花出張所に亞ぐの取引高を有す

支那官鹽の輸送は開業以來現在も支那官憲との契約を以て海東復州より營口に、更に營口より浦港及漢口に輸送す

大正三年十二月資本金二萬圓を以て青島に支店を開設し本店同樣船舶代理業及輸出入貿易を開始せり

出資者　菊地　吉藏（大連當國）
同　三宅　俊二（同　上）
主任　太田喜三郎　船舶部　外支那人三名
貿易部　岡野熊太郎　外四名
買辦　劉　書三　外支那人店員七名
青島支店　北京街　（電話一三七番）
支店長　三宅　駿二（兼營）
主任　今枝田柳太郎　外日人店員三名　支那人店員二名

●臨進商行之支店　（臺南廳下西門外街土名舊街／電話番號三〇番　營業人／一五〇〇番　電略セ）

營業　清酒、麥酒、葡萄酒、煙草、雜貨、和洋雜貨の移出、材木、米糖製造

當商行は藤川騏藏、中辻喜次郎二氏の協同事業にして其後中辻氏の實弟同喜策氏之れに參加し本店を臺北に支店を臺南に又苗栗大湖に出張所を大阪に置けり其關係は一種特得の緣故關係にて協同者なる三氏は二三年の任期を以て輪次上記三店を經營する事とせり現在臺南支店は喜策氏散は官時代に就て當行を臺灣総督府の御用商人として臺南に於て...を得たるに當時は二十九年にして中辻氏は臺南支店に在りて...鹽務局の協議を經て...二氏は明治三十年...木なる日用雜貨を販賣する...來同行は日に益々發展して...貨、米穀其他一切を販賣する...に至り、一方材木...製材...

當る...に...盛衰...
臺南日に於ける支店は明治三十七年十月二十一日の開始にて當初卸小賣を兼營せしが四十四年七月より小賣等を廢止したり
臺北は當行の營業の根據地にして營業の大部分を此處に投下し居れり又大阪出張所は單に各地の仕入供給にあたるものなりしが近く或る種の營業に擴張する計畫中なり
○臺南商行出張所　臺南廳...に在り...
○臺南商行製材部　...

行　主　（中辻喜次郎／藤田騏藏）
總支配人　中辻喜策

造所は明治四十二年十月工場を創設し同年十一月より製造を開始す爾來毎年設備を增加しつゝあり滿洲は主たる販賣區域なるも北支那方面より近頃青島に及び更に又南方支那に販路を擴張しつゝあるを以て製造は逐日多忙を極む

所長　理事　林　平太（人事參照）
作業課主任　技師　矢內宗良
機械課主任　技師　瀨戶　憑
庶務課兼倉庫課主任　助役　八木　保

合名會社 東和公司　營口永世街三六（電話一七〇番 一七六番（倉庫） 二四〇番 電略（トウワ））

營業　船舶業、石炭販賣、輸出入貿易、神戶海上保險及東洋生命保險代理業

當公司は明治四十年三月十日三宅、菊地の兩氏の共同出資を以て船舶代理業を開始し大正二年三月十五日資本金十萬圓の合名會社として登記を受けたり爾來大正二年九月東和丸（四、五〇〇噸）一隻を買入れ翌三年十月東亞丸（三、三〇〇噸）を買入れ翌四年六月東京丸（四、五〇〇噸）同十月淺間丸（六、八〇〇噸）を買入れ外に神戶土佐商店と共同所有に係る三角丸（四、三〇〇噸）を所有す傭船は毎年五六艘宛契約し支那沿岸を根據として北は浦鹽南は南洋爪哇各港間の貨物輸送に從事す

輸出入貿易には營口に於ける豆粕輸出者としては三井、小寺に亞ぎ又輸入に於て綿絲太物は營口三井及日本綿花出張所に亞ぐの取引高を有す

支那官鹽の輸送は開業以來現在迄支那官憲との契約を以て產地復州より營口に、更に營口より浦港及漢口に轉送す

大正三年十二月資本金二萬圓を以て青島に支店を開設し本店同樣船舶代理業及輸出入貿易を開始せり

出資者　菊地吉藏（人事參照）
同　三宅俊二（同上）
主任　太田清三郎　船舶掛　玉井辰三郎
貿易掛　河原熊太郎　外四名
買辦　劉晋三　外支那人店員七名

青島支店　北京街（電一三七番）
支店長　三宅駿二（兼管）
主任　今枝田柳太郎　外日人店員三名　支那人店員二名

◉盛進商行營口支店

營口新市街南本街九番地（電話局二〇番 一五〇〇番 振替大連 電略（セ））

營業　清酒、麥酒、飲料品、砂糖、麥粉、和洋雜貨の卸賣、精米、味噌製造

當商行は藤川類藏、中辻喜次郎二氏の協同事業にして其後中辻氏の實弟同喜策氏之れに參加し本店を臺北に支店を營口に又其仕入店なる出張所を大阪に置けり其制度は一種特得の輪番制度にて協同者なる三氏は二三年の任期を以て輪次上記三店を監督する事とせり後藤男爵は其臺灣民政長官時代に於て當行を模範的の協同事業として嘆稱したりと聞く

當行の淵源を尋ぬるに日清役の二十八年六月中辻喜次郎氏は臺灣渡航の御用船に在り偶ま藤川類藏氏と柳樹屯に於て會談し意氣相傾け茲に事業協同生死不偷の確約成りて二氏は同年十月臺灣臺北府前街に疎末なる日用雜貨を販賣する盛進商行を開始したり爾來同行は日に益々發展して現在臺北に於ては和洋雜貨、貴金屬其他一切を販賣する百貨店を有し又同地に茶舖、度量衡及下駄販賣の支店あり此他臺東の里腦及成廣澳には疎製樟腦の製造所ありて盛進商行の名は全臺に洽ねし

營口に於ける店舖は明治三十七年十月二十二日の開始にて當初卸小賣を兼營せしが四十四年七月より小賣等を廢止したり

臺北は當行の創業發祥の根據地にて資産の大部分を此處に投下し居れり又大阪出張所は單に各地の仕入機關たるに止まらずして近く或る種の營業に雄飛する計畫中なり

◉盛進商行精米所　營口同商行内に在り電氣動力を用ひ一日三十石の精搗能力ありて滿洲産米を精搗販賣す

◉盛進商行釀造部　營口新市街青柳街に在り滿洲産の原料を以て味噌を製造す年額凡そ五萬貫にして其販路は滿洲に偏ねく品質の精美を以て名あり

行主　中辻喜次郎（人事參照）
　　　藤川類藏（同上）

總支配人　中辻喜策

營口支店輪番監督　中辻喜次郎　營業主任　酒井喜則
次席　奥　壽
大連支店　監部通　主任　三鍋健次郎　店員　和泉祐次郎
奉天支店　十間房　主任　藤川猪傳
大阪仕入店　東區高麗橋三丁目

●營口煉瓦製造所 營口牛家屯三家子（電話二四一番）

營業　煉瓦製造販賣

當製造所は明治三十九年春の開設に屬す營口軍政時代に時の軍政官興倉中佐が模範的煉瓦工場として軍政署より資本十萬圓を貸附設立せしめたる者にて同年十月軍政署の引上げに際し營業主に於て之れを引受け其後更に資本の幾分を追加して工場を改善せり獨逸式蒸汽製煉機械を用ひ設備頗る完全なり（營口煉瓦製造所大連工場參照）

營業主　土井　純橋　高知縣長岡郡大篠村字大楠二三七番地、士族、明治三年五月二十六日生、夫人とみ三十六歲

●東來醬園 營口舊市街二管街（電話一〇二番）

營業　醬油釀造販賣

當醬園は個人經營にて明治三十五年の開設なり營業主は明治三十二年農商務省海外實業練習生として營口に派遣せられ研究の結果滿洲重要物產たる大豆、小麥及び食鹽を利用して對支人向きの醬油釀造業を開始せり此れ實に滿洲に於ける斯業の元祖たり然るに其製品は痛く支那人の嗜好に適し支那固有のものを驅逐して名聲隆々たるものありしが三十七年二月日露の戰端起ると同時に贏ち得たる信用資產の全部を放棄し僅かに身を以て日本に避難せしが同年七月皇軍の營口を占領するに及び直に歸來舊業を再始せり而て戰後邦人の進來頓に增加するを以て單に支人本位を以て營業方針となすの不利なるを悟り日支人一般の需用に應ずべく新に下總野田より多年斯業に老熟なる杜氏を聘し規模を擴張して純然たる野田式釀造法に則りしが爾來製品は益々優良となりて日支人間の好評を博せり四十四年三月滿洲駐劄第五師團經理部に直接納入の契約成立し爾來引續き納めつゝあり

釀造高は一ヶ年凡そ二千石、販路は重に支那人にて其價額每月一千圓內外に上る營口の巨商西義順の關係者等は當醬園の隆盛なるを妬み同來德たる類似の商號を用ひて釀造を開始し當園に大競爭を試みる內大正四年七月支人の日貨排斥起り爲めに當園は尠なからざる損失を受けしも爾來徐々舊販路を恢復しつゝあり

營業主　田村　忠一　（人事參照）

大連支店　大連市美濃町　（電話一〇一四番）

●東瀛大藥房（營口舊市街永世街　電話國一四八番　振替東京七〇一番　電略（チユ））

營業　藥種、賣藥、醫療機械、其他繃帶材料、
繪具染料等

當藥房は個人經營にして明治三十八年三月の開店なり四十二年ペスト流行の頃より發展の機運を芽し又日獨戰爭以來大利を占め頗る優勢となれり大連、海城、哈爾賓、奉天に各支店を有し沿線各地には代理店あり

營業主　中馬　龍造（人事參照）
大連支店　大連市監部通二丁目（電話一四三三番）
主　任　山根哲次郎（藥劑師）

●平岡組（營口新市街南本街　電話國四八番　振替大連三一三番）

營業　倉庫、木材、建築材料販賣、土木建築
請負

當組は明治三十六年六月平岡組長之を開設せり近來同氏は營口、東京間を往來しつゝありて河田昂氏專ら之れが經營に任せり遼陽、濟南、青島に出張所あり

組　長　平岡　佳吉　支配人　河田　昂
會計主任　青木　茂助　技　師　丸目　豐吉
營業主任　渡邊　賴章

●近江洋行（營口舊市街西北街　電話國二〇七番　振替大連五〇番　大阪四四九一番　電略「ワミ」）

營業　時計、貴金屬、蓄音器、眼鏡類販賣

當洋行は個人經營にて明治三十八年三月の開設なり從來營口に於ける時計は亞米利加及獨逸品大勢力を占めたりしが當行開設以來之が驅逐に悪戰苦闘したる結果全く外國輸入品を杜絕せしめ滿洲支那人に對する供給は殆んど當行の一手に歸するに到れり四十三年十月現在の家屋を新築せり

營業主　市田　三郎（人事參照）
營業部　畑　眞吉　森　眞三郎
技術部　小川　仲次

●回天堂大藥房（營口舊市街永世街　電話國四番　振替大連二八一番　東京一六一一三番　電略「カ」）

營業　藥種、賣藥、醫療機械、製藥、繃帶材料
繪具染料、高等藥品、化學藥品、處方調劑

當藥房は個人經營にして明治三十八年七月開業し三十九年二月十一日紀元節に盛大なる開店披露を擧げ軍政署の御用商に指定され一手御納品せしが營口還附に際し支那政府に引繼がれ營口醫生局より尚續大滿洲國營口衞生局警察機關保甲病院の用命を受け防疫賣藥に一手御品をなせり。大正元年八月現處に新築移轉し業務益々擴張して現在海城、遼陽、奉天、吉林等に代理店を有し錦州、承德、朝陽、赤峰、峯達、賣買城、赤峰等に支店官憲を主として販賣する特約店ありて當藥房の販賣勢力は山海關より賣買城附近に達せり。胃黑龍江省軍を始め、奉天衞生局、營口普濟醫院等にも特約納品せり

營業主　牧野由太郎　（[illegible]）

總支配人　牧野俊三　（右同、三十三歳、[illegible]、二十四歳、[illegible]）

藥局主任　藥劑師　井寶　正司

支配人　園尾　敬治

外店員　日本人四名　支那人五名

●石光洋行　（營口新市街南本町（電話五番振替大連一八一番）

營業　建築材料、鐵材、土木受負業に附帶用達

當行は個人經營にて軍政當時より開設し主として倉物建築材料の卸賣を爲し其の販路廣大なるが其後土木受負業を兼營して斯界に活動せり遼陽及海城に支店あり

營業主　石光幸之助　（[illegible]）

●營口硝子製造株式會社　（營口、本町（電話一一二番））

營業　硝子製造販賣

當會社は資本金二萬圓拂込二分の一の株式會社なり大正元年八月岡部、石光、田村、南瀬、古川、山西江口七氏の發起にて同年九月登記を受け同年十一月より營業を開始せり一日の製造高七八十圓に上り製品は主としてほや、石室、押型硝子器等なり

社長　岡部次郎（人事參照）

專務取締役　石光幸之助

取締役　田村忠一（人事參照）

監査役　加島勝一郎

古川米吉（人事参照）

支配人　梅渕文十郎　（［illegible］明治十二年二月生、夫人ユキ三十六歳（子女なし））

●藤原洋行　（営口［illegible］第一三四番地（電話二五〇番））

営業　諸雑貨

当行は軍政時代よりの開設に係り支那取引専門なり

営業主　藤原傳次郎　（［illegible］明治七年三月十六日生、夫人ワキ三十［illegible］）

●松隆洋行　（［illegible］）（電話一六五番）

営業　洋傘帽子其他一切及雑貨類専賣

本店は大阪市北久寶寺町二丁目にありて個人経営なり當洋行は其支店として明治三十九年開設せる目下帽子類、洋傘、［illegible］各地に販賣りをなし支那洋傘の需要起るに従ひ益々販路を擴張しつゝあり

営業主　赤松繁七（人事参照）

大阪本店（赤松商店）　主任　赤松繁七

営口支店（松隆洋行）　支配人　赤松俊三郎

●平本洋行　（営口新市街浦本街四二一號（電話二九番）振替大連三七二番　大阪四三〇八番）

営業　和洋雑貨卸小賣

明治三十七年平本勇三郎氏陸軍用達として営口に来り新市街に開店せり三十八年十二月加島勝一郎氏之れを継承し陸軍用達は、其後廃止して雑貨販賣を専業とし四十四年三月現處に移轉せり

新市街郵便受取所は最初加藤洋行に於て兼務せしを大正元年二月より之れを継承せり

営業主　加島勝一郎　（徳島縣佐伯郡五日市町三九〇番地、明治十一年九月［illegible］日生、大正元年［illegible］夫人はつ、男二名女二名）

長春支店　新市街東斜街

仕入部　東京市牛込區神樂坂

●三和公司　（新市街［illegible］（電話四三二番））

営業　雑穀類、其他石炭販賣、市内貯蓄及運漕業、米穀、セメント、コールター、亜鉛板、ソーフィト其他建築材料販賣及骨石炭山等

當公司は個人経営にて明治四十一年一月開設す

營業主　關甲子郎（人事參照）
外日本人店員　五名

◉神崎洋行　營口舊市街永世街（電話五六番）

營業　諸雜貨卸小賣業

當洋行は明治三十七年十月の開設にて個人經營なり奧地に廣き取引を有す

營業主　神崎宇多太　熊本縣天草郡志企村大字上津深三五七番地、明治二年二月五日生、夫人たね三十三歳、長女悦子二歳

◉營口建物組合　營口新市街南本街

營業　家屋建設及賃貸並に地所賣買

當組合は一般の希望に應じて家屋の建設、賃貸及地所の賣買を目的として飯塚松太郎、平岡佳吉、中辻喜策、河田昴、岡部次郎、石光幸之助の六氏合同出資して大正二年五月設立せり營口及大石橋に滿鐵代用宿舍を建築し現に賃貸中にて漸次同種の計畫を擴張しつゝあり

組長　飯塚松太郎（人事參照）

◉長壽堂大藥房　營口舊市街永世街（電話長一一〇番　振替大連一三一三番）

營業　藥種賣藥、醫療機械、工業藥品、繃帶材料、化粧品、滋養品類販賣

當藥房は明治三十九年九月匿名組合組織として小澤豐太郎氏の名義を以て開始せり其後大野七五三氏來り同時に匿名組合を解散したるも資産は猶小澤氏に屬せしが四十三年落合氏來りて資産を小澤氏より讓受け營業せり蓋平、長春、牛莊に支店あり

營業主　落合丑彦（人事參照）

◉東華洋行　營口舊市街永世街六四號地（電話五六五番）

營業　雜貨貿易卸專業

當洋行は個人經營にて營業主は明治三十七年渡清同志と共に東華公司を開設し鴨綠江材の取扱ひを營みたりしが採木公司設立せらるゝと同時に解散し四十四年十一月農商務省實業練習生として營口に來り當行を開始せり大正三年一月天津に支店を哈爾賓に出張店を設け又大正四年三月大阪に支店を設立せり

營業主　庄村伊之助　佐賀縣西松浦郡有田町、二十九歳　夫人たち三十一歳、男一名女一名

◉羽村洋行　營口舊市街永世街六七號地（電話長七番）

營業　食料雜貨

當行は個人經營にて營業主は明治三十八年二月日露の戰役に第十二師團附酒保として從軍し同年十二月現在地に當洋行を開設せり三十九年十月新市街市場内に支店を設け營口守備隊、營口醫院、大石橋購買會等の御用商人として信用厚し

營業主　羽村　儀　山口縣玖珂郡川下村、慶應元年十一月生、夫人とミ三十六歲、男三名、女一名

支店　新市街市場内

●松山生盛藥館　營口新市街南本街（電話長四二番　振替大連一一八九番）

營業　藥種、化粧品、陶器、漆器、履物、其他諸雜貨、切卸小賣

當藥館は個人經營にして明治四十一年五月の開設なり初め北本街に開店せしが四十三年六月現所に新築移轉せり藥種は生盛藥館に於て又諸雜貨類は松山洋行の名に於て販賣せり奉天に支店あり

營業主　松山榮次郎　京都府南桑田郡神田野村、明治二年十月生、夫人ぬい三十二歲、男一名

●乃美洋行　營口新市街南本街三丁目（電話四五番　振替大連二八四番）

營業　吳服、太物、洋反物商

當洋行は個人經營にして明治三十八年四月の開設なり四十年九月大石橋に支店を設置す

營業主　乃美熊太郎　廣島縣安佐郡狩小川村大字上深川一〇八番地、明治十年十一月生、母堂ゆう六十五歲、夫人ちよ三十歲、男二名、女一名

●辻吳服店　營口新市街千代田街（電話三二番　振替福岡二一一九番）

營業　吳服太物類販賣

當店は個人經營なり大正三年青島に支店を開設す

營業主　辻　安兵衛　佐賀縣東松浦郡唐津村大字大島八番地、夫人しづ二十九歲

支店　青島山東街

●後藤美知治　營口新市街南本街（電話二三三番）

營業　土木建築請負

營業主は明治三十三年北清事變の際始めて天津に赴き同地駐屯軍及建物會社の土木建築業に從事す四十年五月現地に轉來して現業を開始せり主として關東都督府陸軍部經理部並に民團役所の御用を聽きつゝあり現在營口小學校の增築工事は氏の手に成れり

營業主　後藤美知治　岐阜縣揖斐郡[illegible]村、四十六歲、夫人米子三十歲、男一名、女一名

裕和盛　營口舊市街永世街（電話[illegible]八番）

營業　西洋雜貨、食料品洋酒、南滿鐵道輸送、英米ツラスト及廣東南洋煙草會社代理店並に貸家業

當裕和盛は從來周鶴雲、周鶴林兩氏の協同經營にして日清戰役前長崎に裕和盛を起し三十八年九月營口に三十九年春鐵嶺に各支店を設けたり其後營口及長崎は鶴林氏名義とし鐵嶺は鶴雲氏の名義とせり仁川及び芝罘に支店を有す猶鶴雲氏は明治四十五年五月を以て又鶴林氏は大正三年八月日本に歸化せり

營業主　周鶴林（人事參照）

鐵嶺　裕和盛　支那反物、西洋雜貨、洋酒食料品、貸家

田中精米所　營口南本街（電話四一七番）四番振替大連一一五二番）

營業　精米並に販賣

當精米所は田中虎次郎氏兄弟の合名事業にして明治四十四年清水式精米機五臺を新市街舊市場跡に裝置し營業を開始したる處成績佳良なるを以て次第に擴張し大正三年十月工場を松樹驛に設け更に米國エンゲルバルク精米機六臺を裝置し動力はサクション瓦斯エンヂンを用ひ一晝夜百石の精搗力を有す玄米は松樹驛附近の水稻を用ふ當所賣出しの山た印精白米は搗上に石粉を入れず品質、石選、斤目等一々嚴重なる監督の上に荷作りを施こしたる者なるを以て高評あり奉天以南に廣き販路を有す

營業主　田中寅次郎　京都市下京區西九條一一四番地　明治五年十一月生、夫人こゝ、四十九歲、長男藤次郎二十一歲、長女いさ十九歲、次女ふく十六歲

支配人　田中豐次郎　同上、明治十二年一月生、夫人きみ二十一歲、長男正一三歲、二男亮太郎一歲

旭龍公司　營口元神廟街五六號地の一（電話四三番）

營業　酒、醬油釀造並に蠟燭製造

營業主　高橋直次郎　東京市本鄉區金筋町二十九番地　明治四年十一月生、夫人こう三十二歲、長女敏子四歲

鈴木商店　營口舊市街永世街（電話二〇四番）

營業　食料、酒、罐詰、乾物類

當商店は個人經營にして明治三十八年六月の開設なり初め市場内にありしが三十九年十月現所に移轉せり

營業主　鈴木　定治　大分縣東國東郡大内村、慶應三年五月生、夫人たみ三十七歲、男一名、女二名

◉牧野呉服店　營口元神廟街一九號地（電話四番）

營業　呉服

營業主　牧野由太郎　兵庫縣揖保郡龍野町二七一番地、元治元年三月生、弟徳三三十四歲同上妻やゑ二十七歲、男二名

◉日高寫眞館　營口舊市街元神廟街（電話二一一番）

營業　寫眞撮影

當館は大正二年十一月の開店にて個人經營なり營業主は往年東京六櫻社に於て寫眞原料製造に從事せしが明治四十二年五月營口に來り三船寫眞館に入りて同館西營口支店を管掌すること二年にして千金寨に轉じ獨立寫眞業を營み大正二年十一月再び營口に返へりて現業を開始せり

營業主　日高長一郎　島根縣邑智郡高原村、明治十八年八月生、夫人むめの二十二歲、女一名

◉共益公司　營口新市街南本街

營業　金融

當公司は明治四十二年三月青年の貯蓄奬勵を目的として設立せらる會員三十二名は每月一口十圓を拂込み之れを低利に貸出し以て會員相互間及在留民の金融に資し半期每に利子を仕拂ひ二箇年目の決算時に元金を拂戻し復た拂込を繼續せしめ回を重ぬること旣に三回に及び市民の利便を享くること極めて多く漸次健實に發達しつゝあり

會長　平岡　佳吉　相談役　菊池　青藏

同　河田　昂　專任者　青木　茂助

◉旅館清林館　營口新市街一番戸（營口驛前）（電話四三三番）

營業　旅館

當旅館は旭ホテルの後身たる清林館を現營業主に於て繼承せる者にて個人經營なり軍政時代に六鵜ツサ子は軍政署の後援の下に旅館旭ホテルを開設したり又四十年四月に至り林屋仲太郎氏經營の淸林館なる旅館新市街に開設せられたり其後林屋氏はツサ子より旭ホテルを讓受け二者を合同し淸林館と改名して營業せしが四十四年八月林屋氏が湯崗子溫泉を經營

するに及び其營業を現營業主に委任せし處大正四年四月現營業主は其權利一切を林屋氏より買受け依然清林館の名に依りて營業せり
旭ホテル時代に於ける當館は沿線各地に未だ大旅館の建設なかりし當時の事とて其廣豁清雅なる日本式座敷は滿洲旅館の珍として呼はれ更に清林館時代に入るや營業主林屋氏の完備せる施設に併はせて鄭重なる接待振りは實に滿洲無比にて營口の譽れなりき現營業主は旭ホテル時代より當館に在りて業務に習熟し老練なる林屋氏經營の後を承けて一切の設備能く整頓せり

營業主　山本　彌平　門司市大字門司字西本町二丁目一〇番地、明治十七年九月生、夫人くに三十三歲

◉滿月旅館　營口新市街花園町（電話一六二番）

營業　旅　館

明治三十九年八月十五日の開業に係り清林館に次げる旅館として信用あり

營業主　青木　勝惠　京都市下京區三條通東四丁目二〇番戶、四十二歲、夫人よね三十二歲、男二名

◉酒井醫院　營口舊市街元神廟街（電話一一九番）

營業　醫　師

當醫院は個人經營に係り明治三十五年五月の開設にて滿洲最古の醫院なり支那上流間に其名を知らる

營業主　酒井　榮次（人事參照）

◉古川醫院　營口舊市街永世街（電話一一八番）

營業　醫　師

當醫院は個人經營にして明治四十一年一月の開設なり多年專ら支那人に接して起死回春の名彼等の間に傳はる

營業主　古川　米吉（人事參照）

◉滿洲新報社　營口新市街南本街三號地（電話長一六九番（編輯部）七五番（營業部））

營業　新聞發行

當社は明治四十一年二月十一日に創設さる營口には軍政時代より中島眞雄氏の經營せし日刊滿洲日報ありしが明治四十年十月十五日發行停止を命ぜられ尋いで同社は奉天に移轉したり是に於て岡部次郎、武

內止戈、近藤泥牛、の諸氏は時の窪田營口領事の賛助及び營口官有財產出資の下に滿洲新報社を設立し四十一年二月の紀元節に其第一號を發行すると同時に同社大連支社に於て故安齋源一郎氏を主任として都督府の認可を受けて本紙大の大連附錄二頁を發刊し又長春支局に於ては小形四頁の長春附錄を發行したるが大連及長春附錄は其後廢刊して爾來本紙四頁のみとなれり大正四年十一月十日の御即位日より新式ポイント活字を採用して紙面を九段とし其面目を一新せり滿洲に於ては遼東滿日二紙に亞げる大紙として名あり往年二百餘回に亘りて滿鐵會社攻擊の大論文を掲げて斯界を驚嘆せしめたるは今猶世人の記憶する處なり

▲當社は元來營口官有財產出資の下に營口共有の公共機關として成立したる者なるを以て社主なる者あるなし主幹は社長の名の下に編修經營一切の責任を負ふを例とす而して歷代主幹は星健之助、武內止戈を經て現任者に及ぶ

社長　岡部次郎（人事參照）
主幹　小川義和（同上）

編輯　淡路政太郎　編輯兼營業主任　飯島秀三郎
大連支社主任　竹內坦道（人事參照）　旅順支局主任　原田伊之助
奉天支局主任　由井濱權平　鐵嶺支局主任　迫田釆之助
公主嶺支局主任　渡邊寅次郎　長春支局主任　石井幸之吉

◉滿洲日日新聞營口支局　營口舊市街永世街（電話三五番）

營業　新聞販賣

本社は大連にありて當支局は明治四十一年十一月の開設なり主任は滿洲日日新聞の販賣及廣告事務を取扱ふ傍寫眞業を兼營せり

營業主任　鈴木友一　愛知縣加茂郡旭村字榊屋、五十一歲、夫人ゝま五十歲、女二名
通信員　田中作　東京市赤坂區新町五丁目三四番戶士族、明治十五年十一月生

◉遼東新報營口支局　營口永世街

營業　新聞販賣

營業主田邊源吉氏は近年大阪に在り遼東新報販賣の外大阪朝日及同每日、萬朝各新聞の販賣を爲し且つ質屋を營めり

營業主　田邊源吉　主任　渡邊文三
通信員　鈴木謙吉

官衙、公共機關、宗教團體

◎牛莊居留民團役所　營口新市街

▲明治三十七年七月我軍が營口を占領し軍政を布くと同時に邦人の在留者漸く多く三十九年十一月軍政を撤廢し此地を清國政府に還附し同年十二月より在留邦人の行政權は全然領事の手に屬することゝなりたるを以て領事館令を以て居留民會を起し行政委員二十九名を指名し行政に關する領事諮問の府とせり

▲然るに之と同時に曩きに軍政署が計畫したりし綏定門外より牛家屯に至る間の新設市街地は鐵道用地として軍政署より都督府に引繼がれたるを以て該府は新市街に警察分署（本署は大石橋）を設け一警部と十數の巡査を派遣し警察事務を開始し併せて行政委員二十名を指名したり玆に於てか營口在留民は新市街と舊市街との二個の異なりたる行政機關に分屬せらるゝことゝなりたるも當時有力者は概ね新市街方面に居住し曩に領事が指名したる委員の殆んど全數が都督府指名の委員と重複するに至り又當時新舊兩市の財力を比較するも舊市街のみにては自治機關を特設すること困難の狀態にあり一方外務省は明治四十年四月以降營口に居留民團法を施行すべき旨發令したるも領事は單に委員を指名したるのみにて自治機關の特設は外務省令に依るべく一時見合せ居たりしが四十年四月一日居留民團法施行せらるゝや都督府の行政區域なりし新市街及牛家屯の行政權をも民團に託さるゝことゝなり玆に領事監督の下に新舊兩市を併せて牛莊居留民團役所設立の運びに至れり

▲營口軍政時代に軍政署は或る財源を以て新市街の經營其他興產的事業に投資して土地家屋其他の資產を有したるが軍政撤廢と與に此等資產に就きては其管理方を關東都督より營口領事に委託し領事は之れが使用管理の方法に關する諮問機關として官有財產管理委員會を設け專任理事を置きて其事務を處理せしめたるが明治四十四年同會を解散すると同時に其保管所有する資產を居留民團に引繼ぎたるを以て營口民團は鞏固なる基本財產を有するに到り比較上低廉なる市民賦課金を以て土木、衞生、教育等の事業を完全に經營しつゝあり

▲民團行政委員會議長は設立以來平岡佳吉氏數期重任し次で官有財産管理委員會理事岡部次郎氏代はりて爾來重任せしが四十五年同氏代議士となるに及び退任して現任者に及べり而して現廳舍は明治四十年の新築にて設備宏壯なり

行政委員會議長　木下鋭吉（人事參照）
委員　伊藤寛（同上）　委員　林平太（同上）
委員　内田鎭一（同上）　委員　中馬龍造（同上）
委員　市田三郎（同上）　委員　菊池吉藏（同上）
委員　關甲子郎（同上）　委員　河田昂
委員　木鄕榮（同上）

◉牛莊領事館　營口舊市街（電話四六〇番）

管轄區域　營口、錦州、蓋平、海城、復州

▲當館は滿洲に於ける我最古の領事館にして其開設は遠く明治九年に在り池田寛治氏第一次領事として來任し同年三月同氏去りて後は米國領事フランシス、ナイト氏英國人フレデリック、バンデネル二氏領事代理を委託され十三年五月竹添進一郞氏領事として來任し十五年八月退任と同時に英人フレデリック、バンデネル氏に代理を託し二十七年四月更に同氏を名譽領事に推任せり二十七八年戰役中は領事館を撤去し三十年四月田邊熊三郞氏來任同年六月退任す三十五年五月に至り瀨川淺之進氏來任三十七年二月退任後は一時領事館を撤去したるも同七月天津總領事伊集院彦吉氏の兼任となれり三十八年一月伊集院領事退任するや同年五月瀨川淺之進氏再び來任し四十年三月退任せり此間三十九年八月より同十一月迄有吉明氏在任同十二月窪田文三氏來りて四十二年六月轉任と同時に領事官補大野守衛氏代理となり同年十一月太田喜平氏來任して其在職滿六箇年に及ぶ大正四年十月同氏の去ると與に現任者に及べり

領事代理　領事官補　三宅哲一郞
外務書記生　諏訪光瓊　山崎誠一郞
宮田眞吾

◉牛莊實業會　營口新市街居留民團役所内

▲營口に實業團の起れるは日清實業協會及振商會を以て嚆矢とす後者は明治四十年に創立せられたるも

翌四十一年に至り自然消滅し前者も累ほ後者と其起滅を同うせり四十二年一月新に營口實業會設立せられ爾來營口の狀況は軍政盛時の後を享けて漸次衰退に赴き居留民の移動も亦自然甚だしかりしかば從て該實業會も創立當時の盛に似ず追日萎靡の狀態に陷るの已むなきに至りたりしが實際問題の痛切に居留民を激勵するものありて大正三年二月會則を改め組織を一新せり爾來會員皆熱心に會勢の振作に努め成績極めて良好となりて營口の盛衰に關する實際問題に貢献することと尠からず且其組織の著實鞏固なることと從來其比を見ざるに至れり

▲革新以後の會長に小寺壯吉氏を推薦し會長の下に幹事三名を置き實際の會務を分掌し外に評議員會ありて會の行動を評決するの機とせり

會長　小寺壯吉（人事參照）
庶務　木下鋭吉（同　上）
調査　中島龍造（同　上）
會計　伊藤寛（同　上）
外評議員　三十名

◉營口實業學堂　營口元神廟街

▲當學堂は支那學生に中等實業教育を施すを目的とせり明治四十四年七月支那官憲設立の營口商業學堂は奉天に移轉せり大正二年六月滿鐵會社は其校舍を營口商務總會より借受け之れを無償にて實業學堂に貸與し商務總會より月額銀百圓を補助し其餘は滿鐵より援助することゝし日支合辦の下に當學堂を經營することゝせり同年六月高島大次郎氏堂長として來任し爾來校務次第に整頓せり學課は我普通商業學校程度にして現在生徒百六十名遠く吉林、保定、天津地方より來學する者あり

堂長　高島大次郎（人事參照）　教師　邦　人三名
　　　　　　　　　　　　　　　　　　支那人二名
名譽監督　營口領事　瀋　遼　道　尹
贊助員　日支人三十名

◉淨土宗營口教會所　營口新市街花園町四九號地

▲當教會所は日露戰爭當時福田闡正師が遼陽より來りて永世街に於て布教せしに始まる其後恒川現靈、

椿性圓二師を經て角田俊善師は四十二年九月來任し信徒總會を組織して本堂建築を計畫したるに本山宗務所より一千圓、營口及大石橋信徒より二千圓の喜捨を得て同年九月四日地鎮祭を行ひ同十一月二十一日入佛慶讃式を擧行したり其後更に六百圓の淨財を得て外柵及表門の建造を著手し四十四年八月三十一日全く竣功したり角田師の後に柴田玄鳳、竹内道學の二師來り大正四年十月現主任來任したり

▲現在信徒は百五十名にて淨信婦人會、土曜教會等組織さる大石橋に出張所あり大正元年八月の設立にて近く獨立布教所となすの議あり

主任　開教師　藤卷　麟祐　長野縣下水内郡常盤村光明寺、二十六歳

◉本派本願寺營口出張所　營口新市街永來町（電話五五番）

▲當本願寺出張所は日露戰爭中寺本泰巖師軍隊布教師として營口に來り平和後引續き留錫布教に着手したるに始まる四十一年四月土地信徒より二千圓を喜捨し更に本山より下附金一千圓を得て堂宇建築に着手し同年九月其落成と與に前田參事大連別院より參臨して盛大なる入佛式を行ひたり四十二年十月寺本師に次ぎて片山正道師來任し四十四年六月現熊谷開教使就任するに迨び庫裡全部を改築し寺院の體樣漸く完備せり此改築祝には宗祖六百五十回忌を兼ねて盛んなる法會及講演會を催し在滿洲の同派開教師悉く來參したり此地に大谷派の布教所なきを以て眞宗信徒は東西とも當出張所に歸向し其數三百六十三戸に上る營口婦人會救道會又大石橋婦人會等ありて太だ布教に努めり

主任　開教師　熊谷　正俊　廣島縣高田郡市川村　明治十年八月一日



熊岳城

●熊岳城温泉ホテル　熊岳城驛より半里

營業　温泉旅館

當温泉は滿洲三名泉の一にして熊岳城驛を去ること半里許りの處に在り其往來には輕鐵の便あり熊岳城驛は大連を距ること百十二哩三分、東淸鐵道時代以來の名驛にして諸般の設備完全せり此地は古るき歷史を有するが上に豪宕優雅なる山峰は重疊圍繞して唯だ西方のみ開けて平野となり遙に渤海に接す一綫の淸流白練の如き熊岳河は平野の中腹を貫流し附近には咸家の梨園、黃旗山、望海寺、望小山の名勝古蹟あるが上に諸病に特効ある靈泉あるを以て最も遊覽及靜養に適する滿洲樂園を以て稱せらる

熊岳城温泉は熊岳河畔に在り淸淺なる河流の床底には處々に温泉湧出して砂中自然の温浴に適す滿鐵會社は此處に一萬餘圓の浴場を建築して一般入浴者の便に供せり其一日浴料僅に金五錢なり温泉ホテルは此浴場より橋を渡れる對岸に在り洋風の建築にて内部は純日本式及西洋式に分かれ各々數室の客室を有し別に娛樂室及讀書室あり又内湯もありて設備は完全なり其宿料も貸間及下宿等の輕便法あり

本泉は無色透明にして微に硫化水素の氣を有する單純温泉なり責任ある當局者の分析に據れば筋及節僂痲質斯、慢性濕疹、歇私的里、神經衰弱症、貧血諸病婦人生殖器の慢性諸病、腺病、其他消化不良、膽石慢性氣管支加答兒、慢性腎臟炎、膀胱炎、糖尿病、痔疾等に特効ありと云ふ近く滿鐵會社の中央試驗所中尾技師は當温泉が多量のラヂユウムを含有せることを發見し爾來猶精査中なり

營業主　形田幾次郎　最近死亡す未亡人つね三十五歲、男寬二十二歲、同夫人なほ二十二歲

湯崗子

●湯崗子温泉淸林館　湯崗子驛（電話同湯崗子）（番號ナシ）

營業　温泉旅館

當温泉は湯崗子驛を去る四丁の處に在り滿洲三名泉中歷史と規模との最舊最大なる者にて現營業主の個人經營に屬す湯崗子驛は海城縣に屬し大連を距るこ

と一百八十三哩、此地素と山間僻邑に過ぎざるも温泉及千山あるを以て其名最も顯はる温泉は唐時代より既に世に知られ唐の大宗高麗を征せし時茲に駐軍して金瘡を癒やせしと傳へらる其後遼金の諸朝を經て清朝に入りては乾隆帝の臨幸湯治せられし事あり近く露治時代にはクロパトキン將軍は此地を特に陸軍轉地療養所に選定したり今日猶存する本館前に二號館と稱する宏壯の建物は當時の遺物なり日露戰爭中此地皇軍の占領に歸し我滿洲軍總司令官大山大將も一時滯陣して征塵を洗はれたることあり

温泉の初代經營者は藤井秀五郎氏なるが氏は日露戰役中特別任務に服して功あり戰後當局より當温泉全部及附屬地所十五萬坪の三十ヶ年間無償貸下を許可され爾來之が經營に拮据し來りたるが明治四十四年之を滿鐵會社に讓渡し同年八月現經營者は更に之れを滿鐵會社より讓受けたり元來現經營者は明治四十年四月以來營口清林館を經營（營口清林館參照）せる斯業の大通者なるが滿鐵會社の勸告に應じて温泉經營の大任に當るや消日の慰安法なき長き冬期を有する滿洲に於て各温泉が獨り夏季の設備に專にして冬期の設備を顧みざるを慨し且つ前經營者失敗の跡に鑑み滿洲に於ける避寒的浴客の吸集策として思切つて贅澤極まる內湯の築造を企畫せるが傾斜の勾配なき平地湧出の温泉を內湯に引くことの太だ難事なるに拘らず終に工夫を凝らして之れを成功せしめたり華麗優雅を極むる御殿作りの浴館には滾々玉の如き靈泉常に溢れて驪山温泉も尙及ばざるの感あり又客室にはペーチカ及スチームを備へ電燈は自家用發動機十二馬力を据付け其他庭池あり、遊園あり、養禽、釣魚、遊泳等娛樂機關は皆備はれり温泉總坪數十萬坪、建物九棟、此建坪一千坪、而して今日迄の投資額は既に十五萬圓に上る猶温泉附屬の土地は古來温泉噴出の一大池塘たりし爲め多量のアルカリ性を含み不毛地として捨てられしを大正二年春より温泉を利用して之れを水田に開拓し五年後には熟田十三町步を得る豫定なり夏季に到れば浴館客室與に一望決々たる水田に圍まれ温湯水は潺ぎりて寸碧の秧稻を涵たし閣々たる蛙鳴は急雨の如くに終夜客枕に伴ふて旅魂清冷を極む營業主は夙に茶代廢止主義を取り其宿料及席料は一日五圓より最低十錢に迄區分せら

れ何人も來浴し得るなり現在來客は平均每日四十餘名なり

當溫泉は無色透明にして一種の微臭を有する單純泉にして浴用として筋及筋僂麻質斯、慢性濕疹、ヒステリー、脊髓勞、半身不隨、婦人生殖器の慢性諸病、腺病に又內用として輕症胃加答兒、胃痛、下痢催進の腸加答兒に特効あり近く多量のラヂユウムを含有すること滿鐵技師に依りて發見せられ名聲更に籍甚となる

湯崗子には溫泉の外に有名なる千山あり千山は驛を去ること東北五里の處に在り長白山系の支脈に屬し千巒萬嶂、參差摩天、奇巖怪石、松翠滴るが如く我耶馬、妙義の溪山も遙かに相及ばず山中に五大寺刹あり滿洲隨一の靈山として其名は古代より現はれ淸の康熙乾隆二帝は親しく行幸せられ詩を賦して其勝を歌へり然ども道路嶮嶇にして探勝甚だ艱なり往年湯崗子驛より輕鐵架設の議ありしも未だ實行せられず若し此文明的交通の途開くに於ては湯崗子は千山の奇勝と溫泉の靈効と旅館の完備と相須ちて東亞有名の一大遊園たるを得べし

營業主　林屋仲太郎　石川縣金澤市片町七二番地、明治十年九月二十四日生、父君新造、弘化二年七月十五日生、夫人金子三十一歲、男二名、女二名

雇人　女中八名　日人二十名支人二十名



海城

概說

▲海城は海城縣の所在地にして營口を距る東百二十支里大連の北百七十哩に位し東方一帶は山嶽重疊して平野に乏しく其西南は廣開して一大耕地をなす大沙河は城側を西南流して渤海に注ぎ驛は其左岸縣城を距る約十町の地點にあり當地は沿線に於ける舊都の一にして早く周、秦時代に開かる當時は朝鮮に屬せしも漢興るに及び其治下に入り東漢、晋、隋、唐を經て遼の時代には海州を置かれ更に金、元、明の諸朝に多少の變遷ありて清の順治十年初めて今の海城縣置かれ遼陽府に隷し同十四年改めて奉天府に屬せり海城驛は東清鐵道時代日露戰役前に於て當驛を起點とし鴨綠江岸に出づる一支線企劃せられ頗る重要の地位を占めしが戰役の爲め頓挫を來せり四十年四月滿鐵會社の成立と共に其經營に移り爾來諸般の設備次第に改善せられて今日に及ぶ

▲氣候は寒暑共に甚だしく冬季十二月より三月に至る間は河水氷結して融解せざるを常とし夏季は炎熱燒くが如く黃塵天に漲りて住み宜からず城内の住民約戸數二千三百戸、人口一萬四千人凡て支那人なり附屬地は邦人多數を占めて五百人内外なり

▲官衙は我附屬地内には砲兵聯隊、憲兵分隊、警務署派出所、郵便局あり支那側には城内に知事公署、警察公署、巡捕馬隊、郵政分局、電報局、稅捐局等あり

▲教育は我邦人子弟に對しては滿鐵經營の小學校及實業補習學校あり支那人教育には師範、中學、商業の各學堂及小學堂あり

▲農產は大豆、粟を主とし高粱、小麥之に亞ぐ工業としては燒鍋(年釀造高六百萬斤內外)油房(年額粕二十八萬斤、油百萬斤內外)其他製紙及製糸業あり大正三年度に於ける當驛乘車客數七萬六千八百十九人降車客數七萬八千百九十三人にして主要輸出貨物は大豆、豆粕、粟、高粱、小麥、藥材、柞蠶絲、獸骨にして葉煙草、綿絲布、雜貨、麥粉、石炭、石油、砂糖等を重なる輸入品とす

▲金融機關としては只質屋あるのみにして市場活潑

ならず通貨は小洋錢最も多く流通し其他日支兩國貨幣均しく行はるゝ之を要するに當地は近く營口及蓋平の市場を控へ其勢力範圍とも認むべき東部方面は一帶に山脈にして人煙多からざれば商業地として將來暴かに發展する能はざるが如し

◉井上農場　海城

營業　農園

當農園は故海城守備隊附歩兵特務曹長井上正治氏の創設に應す氏は南滿洲に於ける農業の有望なるを慮り明治四十三年四月一日職を罷め海城驛西北の空地及び守備隊南方の空地並に海城大街通り西南の空地三箇所に二十二萬千六百六坪餘の土地を租借して現業を開始したり然るに大正元年十月正治氏死去せるを以て實兄正茂氏之を繼承經營し主として蔬菜及び雜穀を栽培しつゝあるが元來海城の地たるや土地肥沃にして成績最も良好なるを以て逐年擴張を加へ現に遼陽に十四萬餘坪の支場を有し高粱、大豆、粟を栽培せり又大正三年より澤庵漬製造を開始し軍隊及沿線各地に販賣しつゝあるが同年の製造高は三萬貫に上れり

營業主　井上　正茂　高知縣高知市北新町一二三番地 明治六年十一月一日生、夫人ふじ 當三十六歲、男一名女二名

遼陽支場　主任　井上　正晴



遼陽

概況

▲遼陽は遼陽縣の所在地にして太子河の右岸に位し奉天を距る南四十哩、大連の北二百八十哩の地點にあり東方一帶は山脈連亘し首山其南に獨峙す之に反し西方は一望平野にして太子河其間を西南流して渤海に入る此地は滿洲最古の城市にして春秋戰國以前の事蹟は遼焉探知するに由なきも古來政治上重要の地位を占めて歷史に富めり即ち漢の武帝燕を滅するの後遼陽郡を置き東漢に至り遼東太守を此地に派し襄平城を築く漢末公孫淵之れに據りて自立し魏の司馬懿に攻圍せらる爾後唐朝に至る迄は高勾麗の領地となる唐帝親征の後渤海國の中京顯德府となり遼金時代は之を東京遼陽府と呼び元は之を瀋陽路に併せ明は此地に都司城を置て遼陽一帶を管せしめ清は天命年間一時都を此地に奠めしも後奉天に遷り順治年間府城を置き後州治となし中華民國創立さるゝに至り更らに縣となり以て今日に及ぶ城壁は東漢の時初めて築造し後明の洪武年間に改築せられしものにて當時は南北の二城に分れしが清の太祖北城を毀ちて新城を太子河の右岸に築くに及び現今の城廓のみとなり新城は後崩壞して遺跡を今の所謂土城若くは北哨僕に止むるのみ

▲氣候は大陸性を帶び寒暑の差甚だしきも之を奉天以北の各地に比すれば稍や穩和なり此地は城內外共に古刹舊蹟に富み白塔公園、東京陵を始め日露戰役の戰病死者の英靈を合祀せる忠魂堂ありて有名なる遼陽大會戰の當年を偲ばしむ

▲行政は支那側には城內に遼陽知縣衙門、遼警總局、審判廳等ありて諸事比較的整頓し教育機關として師範學堂、教化學堂、小學堂等あり又衞生には官設醫院に我西川軍醫を招聘して其局に當らしむ其他警務に增井顧問を聘し又守田獸醫を聘するなど文明施設に汲々たり城內外に於ける支那人戶口は最近一萬一千四百八十二戶、六萬五千九百五十九人なり而して日本側に於ては領事館ありて遼陽、遼中二縣を管轄し遼陽居留民會は其監督の下に城內在留邦人を支配せり最近領事館管內に於ける日本人は八十九戶

三百二十八人（内男一五八、女一七〇）なり又附屬地は滿鐵會社に屬して地方事務所之れを管理す此地は我駐紮軍本部として師團司令部の外衛戍病院、兵器廠、守備隊一個中隊、步兵一個聯隊、（二個大隊駐屯す）工兵隊一個大隊、憲兵分隊一個分隊の駐在するの外警務署、郵便局等あり

△滿鐵附屬地は遼陽驛より西關に至る一帶の地域を含み總面積約百八十四萬坪（内市街宅地として貸付けたるもの二萬三千餘坪）にして此地は師團司令部所在地たるの關係上明治四十年に早くも其經營に著手し道路延長三千間下水溝は之を改築又は新築し水道も亦四十四年完成せり又從來居留民會に貸付せし當驛より城内に通ずる輕便鐵道は其還附を受けて一般運輸の便に供せり滿鐵會社が此等の市街經營に投せし處は大正三年度末迄に約四十五萬圓にして更に四年度に於て一萬圓を以て水道下水道の增設備を施行する計畫なり而して尋高小學校、實科女學校、實業補習學校、公學堂、圖書閲覽場、醫院、社宅等の諸施設皆完備せり

△產業は管内一帶に地味肥沃なるも東部は山嶽重疊して耕地に乏しく西部は之れに反し一望平野にして耕地遠く連りて際涯を見ず由來當地は陸稻の品質良好なるを以て顯著なり工業としては燒鍋、油房及線香製造あり永盛泉、鐘益泉、福生永の三家は燒酒製造所及油房を兼營し屈指の豪商たり而して此地は古來より燒酒の產地として名あり輸出品は燒酒及豆粕にして輸入品は陶磁器、麥粉、石油、煙草、綿絲布を重要品とす

△金融機關は支那側には奉天官銀號支店あるのみ橫濱正金銀行出張所及遼陽銀行は日本側に屬す下級機關として當舖（質屋）三店滙莊（爲替取扱業）三店あり

△遼陽驛は東淸鐵道に依り初めて開始せられ當時其南部線に於ける三大驛の一として公主嶺及瓦房店と共に規模壯大を極め貨物の集散亦多く頗る繁榮を呈したりしが日露の國交破れ三十七年九月遼陽城の陷落するに至り當驛亦我軍の手に歸し翌三十八年十月我野戰鐵道提理部に依り軍事輸送の傍ら一般旅客貨物の取扱を開始し一方我滿洲軍は其司令部を此地に置き駐屯久しきに亘り軍隊の集散軍需品の輸送共に頻繁を極めたり四十年四月滿鐵會社の成立と共に其

所管に移り爾來沿線主要驛として重きをなせり大正三年度に於ける當驛乘降客數は乘車十六萬五千九百二十六人、降車十六萬三千四百八十二人にして各驛中の第四位に在り又貨物は發送七萬七千三百三噸、到著十萬三千七百五十五噸にして各驛中の第十一位に居れり由來當地は太子河の水運に依り營口との關係甚だ密接にて其集散貨物は凡て該地に著發取引せらるゝを例とし鐵道開通、大連勃興の今日も猶此勢を持續し居るも營口の沈衰と與に市場沈衰の傾きあり且つ此地には何等視る可きの工業なきを以て我在留民は軍隊に對するの供喰を爲すのみにて遼陽は其地勢が古來政事上の重大地點なるに反し産業上には前途の光明なきが如し

諸營業

◎遼陽電燈公司　遼陽東洋街七番地の一（電話一五〇番）

營業　電燈及電力供給

當公司は遼陽城内外及遼陽滿鐵附屬地内に於て電燈及電力供給の營業をなすを目的とし資本金十二萬圓を以て創立せられたる日支合辦の株式會社にして資本金十二萬圓の内十萬圓は滿鐵會社より支出し他の二萬圓は支那遼陽自治會、工商會及其他の支那人より支出せり明治四十四年九月十日總辦は淸國自治會工商會より推選せる者を選擧し支配人は滿鐵會社より推選し此の外日支人監事各二名を置くことに付き日支兩官憲の間に協議纏り章程を作成して同月十四日株主總會を開き同十七日假事務所を遼陽滿鐵會社經理部内に設け發電所を舊市場に建設することゝし其工事に著手すると同時に内外線の敷設に著手せり蒸氣機械は英國アーレル會社製複式直立形二臺（百四十五馬力）を裝置し發電機及勵磁器は英國デッカー會社製の百キロワット二臺、蒸氣凝縮器は英國ブレーキノーロス會社製ゼット式を用ひ又汽罐は英國バブニックアントウヰルコックス會社製水管式三臺（過熱面積八七〇平方呎）煙筒は芝浦式にて滿鐵會社遼陽工場より組立て給水喞筒は米國ワシントン會社製二臺を裝置する等の諸準備は翌四十五年三月十日に至り略完成し同十五日より開業したるに成績良好なるを以て同十五日營業を開始せり爾來發達圓滿に

して遼年點燈需用者を增加し目下の總點燈數は五萬六百三十八燈に達せり

大正四年前半期に於ける結算に於て金九千四百十八圓十二錢の純益金を擧げ之れに前期繰越金一千一百四十七圓二厘を加へたる計一萬五百六十五圓十二錢二厘の内積立金三千圓、役員賞與金七百二十圓、株主配當金五千四百圓（年九分割）の餘は後期に繰越したり

總辦　于冲漢　支配人島崎好直（人事參照）
監事　李毓鐘　同　陳之贊
同　川村鉚次郎（人事參照）雨宮春雄（同上）

◉正金銀行遼陽出張所　遼陽附屬地車站街六番地（電話二九番）

營業　一般銀行業

當出張所は明治三十九年六月十八日開設さる奉天支店に屬し奉天支店支配人は之れが主任たり

主任代理　橋本龍八

◉西村吳服店　遼陽東洋街八番地ノ一（電話四一七三番　振替大連二二五七番）

營業　吳服並に質

當店は個人經營にて營業主は明治三十九年九月奉天に於て質並に吳服商を兼營したりしが四十年八月現地に移轉せり城內に支店を有す

營業主　西村多三郎　京都府紀伊郡上鳥羽村新田、三十七歲、夫人こま三十歲

◉岡本吳服店　遼陽東洋街一三番地の一（電話七二番　振替大連二二〇七番）

營業　吳服

▲當店は個人經營にして明治四十年七月設立す撫順に支店を有す

營業主　岡本爲次郎　京都市六角通新町西、四十三歲　夫人てる三十九歲
撫順　主任　一色市太郎

◉玉井洋行　遼陽白塔大街三番地（電話六一番　振替大連九二四番）

營業　米、酒、醬油及雜貨販賣並に用達

本店は大阪に在りて個人經營なり營業主は明治三十三年十二月天津に開店し三十七年八月營口に轉し三十九年五月千金寨に分店を設け四十三年三月營口を閉店して同年六月現在所に開店せり米、酒及醬油の

販賣を主として滿鐵會社並に聯隊の用達を爲す雜貨業亦た盛んなり

營業主　玉井信之輔　愛媛縣溫泉郡三津濱町九番地、士族、萬延元年一月十五日生、夫人てつ四十八歲、男一名、女一名

支配人　奧村雄三

本　店　大阪市土佐堀通二丁目三九番屋敷

天津支店　天津日本租界壽町

千金寨支店　千金寨仲町

◉榊原洋行　遼陽東洋街五番地の一（電話一〇六番）

營業　食料雜貨

當洋行は個人經營にして明治四十年七月設立す

營業主　榊原文次郎　愛知縣碧海部大濱町下の切三十七歲、夫人りん三十六歲、男一名、女二名

◉金外洋行　遼陽東洋街三番地の五（電話一〇二番）振替大連一九七番

營業　和洋雜貨、燐寸、砂糖、煙草專賣局特約販賣

當洋行は個人經營なり明治二十九年九鬼業助氏は芝罘に本店を設け三十七年營口、大連及遼陽に支店を設置し野岡寅吉氏は遼陽支店主任として來任したるが四十一年遼陽支店の分離と同時に之を引受け自ら經營せり

營業主　野岡寅吉　福井縣武生町橋區八二番地、四十歲、夫人くま子三十四歲、女一名

◉石川洋行　遼陽東洋街六番地（電話六五番）

營業　雜貨、ラムネ製造、食鹽再製業

當洋行は個人經營にして明治三十九年九月に開設す目下軍隊に納入するラムネは每年六千ダースに達し又地方に販賣するもの三千ダースに上る

營業主　石川周治郎　京都府船井部園部村二一番地、明治十年十月生、夫人たね三十八歲

◉松隆洋行　遼陽城內古廳街（電話五一番）

營業　特產物輸出及製皮販賣、大正生命保險會社代理店

當洋行は個人經營にして明治三十九年七月設立す

營業主　松尾惣七　佐賀縣杵島郡若木村三三〇番地三十八歲、夫人はま子三十歲、男一名、女一名

◉酒井質店　遼陽恰王寺街（電話一四六番）

營業　質

當店は個人經營にして明治四十一年九月の開設なり

營業主　酒井　元藏　兵庫縣津名郡須本町物部、四十九歳、夫人はる子四十二歳、女子三名

◉山木呉服店　遼陽東洋街八番地の五（電話一〇二番振替一三二番）

營業　呉服並に書籍販賣

當店は個人經營にして明治三十九年十一月開設す大正四年一月より大阪屋書店を讓受けて書籍業を兼營せり

營業主　木下梅之助　京都府上京區三條通釜座西入、四十八歳、夫人とき四十歳、女一名

◉丸木呉服店　遼陽東洋街五番通（電話一三三番振替大連四九四番）

營業　呉服

當店は個人經營にて明治三十九年十一月開設す

營業主　矢野　米吉　兵庫縣揖保郡龍野町一一一番地文久元年一月生、夫人すゑ四十六歳、女一名

◉泰平公司　遼陽城内大西街（電話二六二番）

營業　石炭販賣

當公司は合資組織にして明治四十五年七月公益公司、大松號、德隆行の合資に依りて成立したるが大松號は大正二年七月分離し同四年六月一日其他も分離し同時に奉天寳榮公司と共同經營する事とせり海城、鞍山站、煙臺、立山、沙河、張臺子、等に出張所あり

代表社員　星野重夫　千葉縣君津郡松丘村字平山、四十三歳、夫人ふき子三十歳、女子一名

海城主任　弘中種吉

其他の主任は支那人を以て之に充つ

◉大松號　遼陽城内爐灰山東（電話一六二番）

營業　石炭販賣

本店は千金寨にあり大江惟慶氏の個人經營に屬す當大松號は明治四十三年六月の開設にして滿洲産の各種石炭を販賣す（撫順大松號參照）

主任　西村　庸　富山縣西蠣波郡石動町、三十二歳、夫人豐二十六歳

◉笠井質店　遼陽東二道街

營業　質

當店は個人經營にして明治三十九年九月設立す其營業は全部對支那人取引なり

營業主　笠井晃太夫　長野縣植科郡森村、三十七歳、夫人はる子三十二歳、女子二名

◉蓬萊堂　遼陽城内西街

營業　輸入貿易、藥種、雜貨販賣並に代理業

當號は個人經營にして明治三十九年十月設立す日本石油、マッチ、麥粉等を輸入し又東海生命保險の代理業を營み商務隆盛なり

營業主　西牧豊之助　新潟縣狩葉郡柏崎町、三十八歳　夫人あい子、女子一名

◉生田農園　遼陽双樹街（電話六七番）

營業　農業、質

當農園は個人經營なり園主は明治十九年來東京英語學校及東京早稲田專門學校等に學び三十九年渡滿、四十年三月より現業を開始せり當初は約一萬坪に過ぎざりしも逐年坪數を増拓し大正三年より十三萬坪を耕作しつゝあり内八萬坪は野菜類、五萬坪は雜穀を作り軍隊及市場に供給す又質屋を兼業させり

營業主　生田友次郎　佐賀縣藤津郡西嬉野村四三二番地、四十六歳、夫人さわ子二十五歳、女子二名

◉北川金光堂　遼陽東洋街六番地の七（電話一一四番）

營業　書籍文具並に時計貴金屬類一切販賣

當堂は個人經營にて明治三十九年十二月開設す

營業主　北川武八郎　長崎縣南高來郡愛野村一二四番　四十三歳、夫人みよ子三十二歳　男二名、女一名

◉梶原洋行　遼陽東洋街五番地（電話二〇二番）

營業　食料雜貨

當洋行は個人經營にて明治四十一年十月開設す

營業主　梶原　岩吉　香川縣高松市鶴屋町七十五番地　四十三歳、夫人くら三十九歳、女一名

◉立井洋行　遼陽附屬地（電話一四九番）（振替大連五一〇番）

營業　和洋雜貨類販賣

本店は大阪市西區西道頓堀五丁目十七番地に在り個人經營なり當洋行は明治三十九年九月其支店として

開設さる

營業主　立井　三藏　大阪市西區道頓堀五丁目十七番地　四十三歲

◉泉泰號　遼陽城內西街

營業　製粉並に販賣

當號は個人經營にして大正三年十月開設す製粉機は動力に電力を用ひ一晝一日二十袋を製出す

營業主　小泉　偕介

◉矢野藥房　遼陽東洋街六番地（電話一六〇番）

營業　藥種賣藥

當藥房は個人經營にして明治四十年一月の開設なり

營業主　矢野　善三　京都市上京區室町通丸太町上ル大門丁、四十二歲、夫人無し、女一名

◉荒尾藥房　遼陽東洋街

營業　賣藥

當藥房は個人經營なり

營業主　荒尾　與吉

◉遼塔ホテル　遼陽白塔大街九番地（電話四六番）

營業　旅館

當ホテルは明治三十八年木村常吉氏に依りて開設され其料理部と與に一時遼陽隨一の盛を稱たるも遼陽市況の沈衰に伴ひ料理部を廢し專業旅館を營み來りしが大正四年十月滿鐵會社援助の下に同氏の實弟なる現營業主之れが名義人となることゝなり同時に內部に改修を加へ遼陽第一流旅館として設備完全なり

營業主　城水　守吉

◉油屋旅館　遼陽佟家大街七番地（電話一六四番）

營業　旅館

當旅館は個人經營にして最初奉天西尾洋行の經營なりしが大正三年十月一日現營業主之を買收繼承せり

營業主　田村竹次郎　愛知縣寶飯郡前芝村大字梅籔一七番地、明治四年十二月五日生、夫人やす子三十八歲、男三名

◉福屋旅館　附屬地滿鐵病院前（電七五番）

營業　旅館並に陸軍用達、パン製造

當旅館は個人經營にして旅館業の外陸軍用達並にパン製造を兼營せり

營業主　川上　房市

◉後藤病院　遼陽東洋街七番地（電話三八番）

當病院は個人經營にして明治四十年九月の開設なり

營業　醫術

院長　平松　良平　靜岡縣靜岡市寶匠町、明治十年一月一日生、父君喜三郎六十歳

◉遼陽新報　遼陽佟家大街（電話四六九番　振替大連一一二九番）

當新報は小形の隔日刊行新聞にして個人經營なり明治四十年三月安東貞元氏に依りて遼陽時報なる小形新聞創刊せられたるが四十一年四月廢刊となり同年三月十日渡邊氏は當新報を發刊して今日に到る

社主兼社長兼主筆　渡邊　德重（人事參照）

營業主任　渡邊源次郎

◉在遼陽日本領事館　遼陽城內（電話四一一番）

管轄區域　奉天省中遼陽及遼中縣

▲當領事館は明治四十一年の創立にて同年八月鈴木要太郎氏副領事として來任し大正三年七月土屋副領事來任し後領事に昇任せり

領事　土谷久米藏（人事參照）

書記生　今井　兼續

◉遼陽實業會　遼陽東洋街九號地（電話二二五番）

▲當實業會は商工業者の發展及親睦を計るの目的を以て明治四十年八月創立されしものなるが四十二年五月解散の止むなきに至り更に同年十月實業協會を組織せり然るに大正三年三月城內商工業者の發起に依り別に商議會を創立せるも本年二月に至りて實業協會と合併し同時に遼陽實業會と改稱せり爾來遼陽實業界の代表機關として努力しつゝあり

幹事　林　堯賀（人事參照）　松尾　惣七

外評議員　十八名

◉淨土宗出張所　遼陽東洋街一番地ノ一（電話二五六番）

▲當出張所は淨土宗本山の出張所に係り明治三十八年六月以來の開教なり

布教師　福岡　開正　愛知縣丹羽郡布袋町五明、三十九歳、夫人榮子四十歳、女一名

◎遼陽神社　遼陽白塔公園内

△當神社は明治四十一年の頃地方民間の有志奔走して寄附金を募りたるに始まり四十二年本殿を建立せり其後滿鐵會社に引渡たし遼陽地方事務所にて管理することゝなれり大正三年更に拜殿を建設したり

社司　一名（宍戸氏死亡の儀缺員）

◎本派本願寺出張所　遼陽停宗街

△當出張所は本山の直轄に係り支那開教監督事務所の指揮下に寺務を處理しつゝありて明治三十八年以來軍政署當時の慰問部を引繼き開設したるものにして一般信徒の喜捨金及幾分の扶助金を以て維持費に充當しつゝあり

布教師　藤澤　實善　三重縣三重郡三重村　三十一歳

同　和泉　實城　富山縣東礪波郡般若野村字瀧、三十五歳、夫人定美二十歳、男子一名、女子二名

◎遼陽基督教會　遼陽停宗大街十三番地

△當教會は明治三十九年の創立にして其以前は軍隊慰問部なりしが其後青年會と改稱し同四十二年現在の教會組織となれり

主任傳道者　相木熊吉　兵庫縣神戸市北長狭通二丁目　三十三歳

諸營業中追加

◎遼陽銀行　遼陽城内警第四十號　電話局六四番　振替大連八七三番

營業　一般銀行業

△當銀行は資本金五萬圓（内拂込金一萬五千萬圓）總株數五百株より成る株式會社にして大正二年四月の創設なり大正四年上半期の決算によれば純益金二千七十一圓三十六錢にして内法延積立金別段積立金、役員賞與金を差引き金一千五十圓（年一割）を株主に配當し猶金三百八十六圓三十六錢を後期に繰越たり當城外東洋街に支店を設け顧客の便を計りつゝあり

取締役頭取　石光幸之助　常務取締役　山本新吾
取締役　西巻豊之助　同　加島繕一郎
同　中馬龍造　同　松尾惣七
監査役　笠井晃太夫　同　酒井元藏
同　西村多三郎　同　野間寅吉

奉天

概說

▲奉天は北緯四十一度五十八分、東經百二十三度三十八分に位し、大連を距る二百四十六哩、北京を距る五百二十三哩、安東を距る百七十八哩の地點にて南滿洲の交通總滙たると與に亦た中央の大都會なり地勢平坦にして一望無涯西に遼河あり渾河其南を流る形勢の雄大、氣象の豪宕なる眞に帝王の古都たるに愧ぢずして亦た將來の大發展を豫察するに足る

▲此地は本名を瀋陽と稱す瀋水の北に當るを以てなり瀋陽の名は元朝に始まり明は此地に瀋陽中衛を置けり清の太宗帝業を創むるに及び天命中首都を遼陽より此處に遷し依て盛京と稱す順治初年北京に遷都するに及び將軍を駐めて留守せしむ、由りて留京又陪都の稱あり其後滿洲を奉天、吉林、黑龍江の三省に分つに至り瀋陽は奉天省の行政中心となり兼ねて三省軍政の輻輳となれり日露戰役後五部の衙門は撤廢せられ他の諸省と同じく總督巡撫の下に各司道を置き將軍政治は遂に其痕跡を留めざるに至り尋で共和民國となるや總督は都督と改稱せられ今や奉天鎭安上將軍は東省の副王として三省の軍務を統轄しつゝあり

▲氣候は地既に大陸にあるを以て云ふ迄もなく大陸的氣候にして寒暑の差甚だしく極寒零下二十三度以下に降り酷暑三十四度に昇る風は殊に著名なるものにして冬春二季に多く冬季西北の烈風起るや砂を捲き雪を飛ばし寒氣膚に徹し又春季にありては所謂黄塵萬丈の偉觀を呈し里餘に亘り咫尺を辨せざることあり住民一般に衛生思想乏しく且つ之れに關する公共的機關は附屬地を除きては其施設の太だ不備たるを免れず住民は支那人戶數約三萬五千、人口十九萬五千人、又邦人(大正四年十一月)は千九百四十二戶六千五百八十八人内城内に於て戶數五百七十二戶、人口二千〇八十三人、又鐵道附屬地に於ては戶數一千三百七十四戶、人口四千四百九十七人なり、此他鮮人約三百、外國人百七十の在住者あり支那人の多く

は山東方面の移住者にして凡べての慣習滿漢混合にして女子の如き天足あり纒足あり服裝亦之に準ず男子は革命亂以來辮髮を剪る者多く車夫勞働者に至る迄皆然り言語は北京官話の稍や訛りたるもの通用せり

▲市街は分ちて城內、開埠地、鐵道附屬地の三となす城內は高さ約三丈巾一丈の煉瓦城壁を以て繞らされ其周圍二里に延ぶ東西南北の四面に大小各一箇の門を有し市區略ぼ碁盤形にして各門を通ずる道路は主要大街をなし其十字街に鼓樓及鐘樓あり城內最も殷賑なるは此附近なり開埠地は支那官憲が各國居留地として自ら指定開放したる地區にして奉天開埠地は鐵道附屬地に連接せる十間房一帶並大小西關一帶の地面積二百餘萬坪を有せり此地域內に住する內外人は六萬を算し商業當に繁盛なり各國領事館、日本赤十字病院、日本居留民會、商業會議所、三井洋行滿鐵市內營業所等皆此內にあり小西邊門附近は近き將來に於て有望の地區となるべし大正二年五月支那官憲は開埠地一帶を舉げて鐵道附屬地と爲すべき條件を以て我が滿鐵より金六十萬圓を借款したるが將來此地域が鐵道附屬地となる日あらば奉天の發展上更に大に觀る可き者あるべし

▲敎育は此地が滿洲に於ける政治上の中心たると共に亦た敎育上の中心たるを以て各地の學生笈を負ふて來るもの太だ多し農林學堂、中學堂、商業學堂、電報學堂、陸軍講武學堂、陸軍測量學堂、巡警學堂法政學堂、兩級師範學堂、女子師範學堂、工業專門學堂等あり日本側に於ては滿鐵及居留民會の經營に係る小學校各一あり此外特殊學校として實業補習學校、實科女學校、外國語學校、及南滿醫學堂あり南滿醫學堂は滿鐵の經營に係り日支兩國學生を收容し滿洲に於ける最も完備せる醫學敎育を施こすの機關たり

▲宗敎は此地由來清朝の發祥地にして二百七十餘年前の帝都たりしかば往時は各種の宗敎行はれ隆盛を極めたりしも現在は徒らに古刹の存するのみにて住民一般に信仰心薄く敎勢萎靡振はず此內稍や勢力あるは喇嘛敎なり喇嘛敎の寺院には實勝寺あり一名黃寺と稱し蒙古喇嘛に屬し大喇嘛を座主とせる清朝歸

依の新建寺たり在留邦人は專ら佛教を信じ東西本願寺出張所、淨土宗、日蓮宗、曹洞宗、高野山大師等の各教會所あり此他天理教、黑住教、基督教々會堂もあり

▲交通は市內交通機關としては奉天驛より小西門外に達する馬車鐵道あり又奉天を起點又は終點とする鐵道に滿鐵本線、安奉線及京奉線の三あり滿鐵本線は北長春驛を通じて東淸鐵道と聯絡し哈爾賓を分岐點として遠く浦鹽、ペトログラードに到る歐亞聯絡の幹線たり安奉線は東安東を經て朝鮮鐵道に連り更に關釜聯絡船に依りて日本に到り京奉線は西溝帮子山海關を經て直に支那の主都北京に達す京奉鐵道は北京正陽門、奉天間に敷設せる支那鐵道にして幹線五百廿一哩、支線八十六哩を有す本鐵道は借款鐵道にして英國より二百三十萬磅を借入れ又奉天、新民府間は日露戰役に際し我政府に於て輕便鐵道を敷設したるが明治四十年新奉鐵道協定に由り支那政府は百六十萬圓を以て之を買收し更に軌道改築費として我國より三十二萬圓を借款せるを以て此新奉線の技師長技師を日本より傭聘することゝなり先頃不慮の災厄に横死せる老田太文氏は此の技師長として多年在勤せられたるなり斯く奉天は東西南北を聯絡する四通八達の要路に當れるを以て毎年此處に集散する旅客は非常の多數に上る大正三年度に於て上記三鐵道に由り奉天驛に乘降せる旅客數は九十八萬二千人（大正一二兩年度は百萬人以上に上れり三年度は歐洲及日獨戰爭の爲め旅客數を減ぜり）にして全線中第一位に居れり亦た以て交通界に於ける奉天の勢力を觀るに足る可し

▲農工業は當地方一帶は渾河の流域に當り地味概して肥沃なれば農業夙に開け大豆、高粱、粟其他麥、稗、米、玉蜀黍等收穫多き作物多し水田は頗る有望にて邦人の經營に勝弘、西宮の兩農場あり別に八百餘町歩を有せる榊原農園あり此農園は大正三年春榊原正雄氏が溥豐水田公司の權利者より其權利を買收したる者なり溥豐公司とは奉天農學堂理事翟某等發起の下に資本金一萬六千元を以て設立し北陵附近の未墾地約八百町歩の貸下を受け内三十町歩を水田とし明治四十五年五月より水稻耕作に從事せし者なる

が榊原氏の買受後該農園の地積が元來舊淸皇室の御料地たるの關係上種々の外交問題を惹起し且つ他にも事情ありて榊原氏は大正四年末支那官憲の提議に應じて相當條件の下に右農園を還附する事とせり又鮮人の水田を經營する者當地方に於て約一萬人あり彼等經營の水田は概ね遼河の本支流に沿へる濕地を利用して天然の水便を利用せるも其耕耘法は幼稚なり支那官憲は韓國併合前には彼等の來往を歡迎し事業漸次發達の趣ありしも併合の後は日本と國交上の葛藤に顧慮し之れを壓迫するの方針を取り來りたる爲め彼等間に大恐惶を來たし退散せし者多し現在彼等の多くは支那人土地を年期租借するか或は分益法に由りて耕作するに過ぎず

△工業としては（一）油房にて現在三十餘家あるも概ね糧棧の兼營にて一二者を除くの外は皆舊式搾油法に由る其製產は一箇年百萬枚に充たず（二）燒鍋（高粱酒釀造）にて支那人五戶、邦人には神谷釀造所あり（三）煙草製造にて其最大なるは英米煙草工場なり同工場は主として吉林產の原料に米國產及四川湖北地方の原料を加味して日々多量の製品を出して我官煙と大競爭を爲せり又同工場は吉林產煙草を壓搾して之を在上海同公司工場に送れり外に日支合辦の三林煙公司あり（四）硝子製造業にて邦人經營の穗積、三五の二工廠其他支那人經營の者あり此事業は其性質の有望なるに拘らず皆未だ成功せず（五）精米業にて此業は追々水田經營の勃興と與に起こり奉天精米西宮精米、瀋陽精米の各工場あり（六）織布業には支那人經營の廣業織布公司あり花旗布及粗布を製出するも產額多からず此他石鹼（鳥合八十二氏）、洋蠟燭（佐伯直平氏）、醬油（伊豫醬油釀造所峯八十一氏、外支那人經營の者三十軒）煉瓦の各製造所あり外に趙爾巽の將軍時代に開設せし官商合辦の惠工公司あり木工、印刷、皮工、縫紉、玻璃、鐵工、油漆の各科技術を徒弟に習得せしめて其製品を廣く販賣す

△商業は奉天は南滿中央の大聚散場なるを以て出入貨物は頗る多量に上る此內大豆、豆粕、粟、稗、麥陸稻、煙草、麻、藍靛、蜂蜜等の農產物及藥、皮革を其最多なる者とす特に毛皮は滿洲有名の聚散地として一箇年の取引高は各種を合はせ八十萬枚に及ぶ

又奉天は南滿中央の大消費地なるを以て輸出としては大豆、豆粕の外多く言ふに足る者なきも輸入に到りて年々增加し大正二年六月安東稅關輸出入稅三分一減免實施以來は從來大連輸入又は營口を經由して輸入せられし貨物の一部は安奉線によりて輸入せられ奉天は中繼貿易地として繁榮の氣運に向へり殊に三線聯絡運賃低下は將來當地をして輸入商品の滿蒙供給の中堅たらしむべく滿洲の經濟狀態に多大の變化を與ふるに至るべし而して重要輸入品は綿布、綿絲、綿織物、紙、砂糖、石油、藥品、麥粉、鹽魚、金屬原料、金屬製品、雜貨食料品等とす

△金融機關の大なる者に邦人側には正金、正隆の各支店、鮮銀出張所、南滿銀行、共融組合、信託、金融倉庫の二會社あり又支那側には東三省官銀號、中國銀行分號、交通銀行分行、黑龍江官銀號分號、興業銀行、其他票莊、錢舖、當舖等あり

△通貨は非常に複雜なるも要するに本位貨は銀元にして銅元及紙幣は本位貨の補助又は代表たるに過ぎず外國貨中多數を占むるは勿論日本貨幣にして現在流通高は優に一千萬圓を超ゆべしと云ふ

△行政は支那側は日露戰爭當時は奉天將軍を置きしが其後東省に新政施行と與に總督及巡撫を置き革命後は總督巡撫に代ふるに都督及巡按使を以てし都督は鎭安上將軍として東省最上の軍務統率權を把握せり巡按使は全省民政の上長官にして政務廳を統轄す外に財政廳、交涉署、審判廳、駐防八旗、東三省屯墾局、軍械廠、造幣廠、國稅籌備處等あり又陸軍は新舊二種あり舊軍は巡防隊と稱し各地方に分駐す新軍は第二十、第二十七、第二十八の三師團及騎兵一旅團にして内二十七師は奉天駐屯とす外に憲兵營あり而して日本側に於ては奉天總領事館あり奉天居留民會は其管轄の下に城内及十間房に於ける在留民の公共事務を處理す又鐵道附屬地には地方事務所ありて附屬地内に於ける民政事務を司る其他警務署、郵便局、觀測所あり又陸軍には駐奉守備隊、駐奉步兵大隊奉天憲兵分隊駐屯せり、而して外國領事館には英、米、獨、佛、露の五國ありて此内英、米、露三國は總領事を置けり

△鐵道附屬地は面積百八十二萬坪此内市街宅地として貸附けたるもの約六萬坪あり奉天は東三省の首府

として我勢力の發展上滿鐵會社が其經營に最も力を効せる處にして會社は先つ此地將來の發展を期し約七十萬坪に對する大規模の市區設計を立て明治四十一年其西邊中央部に新に一大停車場の建築を始め同時に市街工事を起こし現在道路延長約一萬六千間に及び下水溝の設備亦殆ど完成せり又明治四十三年以來地下下水道の敷設に著手し既に大部分を竣成せり一般水道は大正元年度に起工して其一部を竣功せしめ大正四年二月一日より給水を開始せり又墓地、火葬場、葬祭場、屠獸場等の設備皆成れり公園は敷地一萬四千坪にして著々之れが設備に從事中なり滿鐵會社が此等土木施設の爲めに費やせし處は大正三年度末迄に既に約百二十一萬圓に上り更に大正四年度に於ては約七萬圓を以て水道、下水道の增設備及道路の一部改修等を施行する計畫なり又建物に至りては新停車場、二階建大貸家、共同事務所、社宅、醫院、小學校、南滿醫學堂、電燈營業所等相次いで新築せられ今や宛然たる一大都市たるの觀を呈せり而して住民は日支人を合はせ戶數一千六百、人口六千二百なり

▲滿鐵會社の此地に於ける經營は附屬地內に於ける地方經營を除く其他諸施設も亦皆規模宏大なるが就中特設機關としては奉天公所あり此の公所は滿鐵會社の外交的機關として支那官民との意志の疏通を圖る爲め明治四十年六月開設されたり此他奉天驛の如きは結構規模與に壯大にして沿線中長春驛と比肩する設備の完全なる者なり其階上は即ちヤマトホテルにして交通の中心點たる奉天の洋式旅館として外觀內容與に備はれり

▲奉天は古き歷史を有し殊に清朝の帝都たりしを以て太た名所舊蹟に富めり此內內外人の必らず參觀せんとするは城內の宮殿なり此宮殿は之を金鑾殿と稱し崇德二年の建造に係り太祖高皇帝及太宗文皇帝の宮居せし處なり多く寶物古書等を藏せしも今は皆北京に送りて在らず東陵は太祖高皇帝の陵寢にして風光佳絕なれども城內より三邦里を距てり北陵は太宗文皇帝の寢陵にして松杉鬱蒼し春花秋葉の美は奉天の勝景を獨占す又當地は日露大會戰の行はれし處にて市街の周圍は左顧右眄皆龍爭虎鬪の當年の遺跡ならざるはなし驛より十間房に通する瀋陽大街の南方に我忠魂碑あり之れと相對し一條の市街を隔てゝ露國忠魂碑あり日露親善の今日に於て恩讎兩忘、參拜者の感慨特に深し

貿易業

◉三井物産株式會社奉天出張所　奉天大西關五番（電話日三五番 支一五五番）

營業　輸出入貿易及代理業

當出張所は明治三十八年始めて開設せらる奉天に於ける斯界の巨頭にして營業を肥料、軍器、雜貨、代理の諸部に分ち特産物輸出、綿絲布、燐寸、麥粉、建築材料、鐵器、木材類、其他諸雜貨輸入より銃砲火藥軍器、諸肥料販賣及保險代理等一切を取扱ふ大連支店に隷屬して撫順遼陽時民府の各出張員を管轄す

所長　江藤豊二（人事參照）　次席　小山田廣吉

撫順出張員　（目下支那人）

遼陽出張員　（同　上）

新民府出張員　（同　上）

◉東亞煙草株式會社滿洲總販賣處　奉天小西關　電話（日二一番 支五二番）

營業　煙草販賣

本社は東京に在り明治三十九年十一月創立の資本金三百萬圓、拂込百七十萬圓の株式會社なり本會社は政府より大藏省專賣局の各種官煙を朝鮮及支那全體に於て製造及販賣するの特許を受け現在朝鮮に於ては京城、平壤、全州に、又滿洲にては營口に皆宏大なる製造所を建設して兩切、口附き及刻煙草を盛んに製造し又販賣部を京城、奉天、天津、青島、上海漢口に置き販賣部の下には各地に出張所を置き支人及鮮人には兩切を、在留邦人には口附及刻み煙草を供給せり口附き及刻みは同社製品の獨占なるも兩切には英米煙草會社の大勁敵在りて同社は多年鎬を削りて對戰せるが著々奇勝を博して販路を擴張し特に日支新訂約後は支那の南北に向ふて勇敢に躍進しつゝあり

滿洲總販賣處は當初營口に置かれたるが其販路の益々擴張せらるゝと與に大正三年六月之れを奉天に移したり其管轄は南北全滿及芝罘の廣大なる地域に亘り近頃ろ目覺ましく八方に活動しつゝあり

（東亞煙草會社營口工場參照）

本社　東京市麴町區有樂町一丁目一番地（電話本局一六九四番 一七六四番）

社長　佐々木熊太郎　專務取締役　藤田虎之助

滿洲總販賣所　主任　保々勉（人事參照）

各出張所　大連　營口　遼陽　鐵嶺　四平街　長春　安東縣
新民府　吉林　哈爾賓　芝罘

◉藤田洋行　奉天城内東華門裡（電話日二二四番 支二二四番）

營業　時計、貴金屬、寶石、美術製作品、眼鏡樂器、裝飾品、度量衡、及物、金物、塗料品販賣

當洋行は明治四十年の開設にて個人經營なり

營業主　藤田九一郎（人事參照）

支店　奉天城内鐘樓南（電話日二一四番 支二一四番）

◉小寺洋行奉天出張所　奉天小北門外（電話長一六九番 電略「コテ」）

營業　特産物輸出

當出張所は明治四十年八月の開設にして本店は有名なる營口小寺洋行なり現主任は其來任以來純然たる支那家屋に支那的生活をなし支那人との取引圓滿にして信用厚つし

主任　手塚安彦（人事參照）

◉上田〇商會　奉天城内小北門裡（電話日長二三二番 支三六〇番 電略〇）

營業　支那向雜貨、文具卸賣、兩替

當商會は明治三十九年六月五日の開設にして個人經營なり業務は毎年五割増の比例を以て發展しつゝあり四十四年六月の開業五週年祝に現在の家屋を修築したり

營業主　上田久衛（人事參照）

店員　栗田信次郎外五人

兩替部　奉天小西關（電話長六〇五番）

支店　吉林城内 哈爾賓傅家甸

◉大島洋行　奉天城内鐘路（電話日二四四番 中三〇〇番）

營業　綿布、雜貨類

當洋行は個人經營にして明治三十九年五月の開設なり初め奉天大南門裡に開店せしが大正二年十月現在所に移轉せり

營業主　大島傳兵衛　大阪市東區石町二丁目二四番地 慶應三年十月生、弟政次郎、明治二年一月生、夫人たま子、明治九年三月生、女みつ六歳

◉盛進商行奉天支店　奉天十間房（電話長四五番）

營業　和洋雜貨、食料品

當店は營口盛進商行の支店にして大正三年三月小西邊門より十間房に移轉し同四年五月現處に移る（營口盛進商行參照）

營業主　藤川　猪傳　德島縣美馬郡重清村、明治二十年二月生、夫人なか子二十六歳、男一名

◉石川洋行奉天支店　奉天城內小北門裡（電話日五〇番　支五二番）

營業　雜貨及織物卸專賣

本店は大阪西區本田町通り一丁目にありて明治二十八年の開設なり本家は織物專業にして店主石川要次郎氏は織物專業家に生れ專ら織物の輸出に從事す奉天支店は明治三十九年石川店主が利源調査員として來滿視察の結果同年五月開設せし者なり長春北門外に支店を有す

奉天支店主任　石川治郎　岐阜縣稻葉郡齒部村、明治二十四年二月二十三日生、父君順次郎、安政元年生、母堂あさ子文久三年生

◉寺庄洋行　奉天城內鐘路北（電話二一一番）

營業　石鹼及び雜貨

當洋行は明治四十年四月の開設にして個人經營なり

營業主　寺村清次郎

支配人　吉田繁治郎　滋賀縣坂田郡間居本村古西法寺十番地、明治十七年九月九日生、夫人靜子二十五歳

◉扇利洋行　奉天小西關門裡（電日二二五番　支一二二五番）

營業　酒類、雜貨

當洋行は明治四十年の創設なり營業主上田氏の祖先は扇屋利兵衛とて三百年十二代連綿大阪船場本町に有名なる豪商なり營業主は明治卅八年夏渡滿從兄なる日本菱釀造元池田茂兵衛氏の經營せる池田組出張所に入り遼陽奉天の主任を歷て四十年六月沼野八郎氏と共同にて當洋行を開設し最初清酒を販賣せしも其後主として雜貨を賣ることゝせり

營業主　上田　利一　大阪市東區南久太郎町一丁目四八番地、明治二十年十二月八日生、母堂芳子五十三歳、夫人光子二十歳、長男芳男三歳、長女すま子二歳

◉坂本洋行　奉天小西關（電話日三三九番　支一六五番　振替大連四三二番）

營業　皮革類一切竝に海產物藥種原料

當洋行は日露戰爭後に大連に於て開設されしも三十九年二月より現住所に移轉し來れり目下店員日人二

人支那人十五名あり

營業主　坂本平七郎　大阪市東區北渡邊町二番地、明治二十年一月生

◉名利洋行　奉天小西關（電話日五三五番 支二六五番）

營業　貿易、質屋

當洋行は個人經營にして明治三十九年夏開設す

營業主　出雲喜之助　石川縣能美郡小松町四一番地、明治十九年六月五日生、夫人新子二十九歲、長男敏男六歲

外店員　十七名（日支人共）

◉松茂洋行　奉天小西關（電話日三二三番 支一三三番）

營業　特產物、棉絲布、銃砲火藥類販賣

當洋行は明治四十五年開設す

營業主　瀨尾榮太郎　德島縣阿波郡柿島村柿原、明治十四年九月生、夫人ます三十歲

◉佐伯洋行　奉天小西關第三區警第六一號（電話日一二番支七七番 振替二一五番）

營業　棉絲、麥粉、砂糖輸入、櫻ビール、生命保險、火災保險代理、洋蠟燭製造販賣

當洋行は明治三十九年十一月の開設にして個人經營なり日露戰役後日本及外國より洋蠟を輸入したりしが四十四年七月日本關稅改正と同時に內地品の輸入不可能と爲りしたゝめ之が製造を開始し爾後每年四五萬斤の洋蠟燭を製出し沿線各地に販賣しつゝあり

營業主　佐伯直平（人事參照）

外店員　五名、支那人三十名

◉奉天光明洋行　奉天城內大南門裡大街（電話日二一九番 支二一九番）

營業　紙類、印刷材料一式

當洋行營業主は明治四十年春頃より奉天城內に於て高等雜貨店蓬萊號及同鐵道附屬地に於て蓬萊農場を經營せしが大正四年七月一日株式會社光明洋行の解散するや其奉天支店の全部を讓受け同時に株式會社滿洲日日新聞社代理店として現業を開始せり

大連長春を除き南滿各地には現在日本人經營の紙專門の卸店なければ當店の將來は或は有望なる可し

營業主　余村松之助（人事參照）

外店員　日支人十五名

◉共益社分店　奉天大北關大街（電話二六四番）

營業　綿絲布輸入

本店は京城に在り當分店は大正元年九月の開設なり

主任　大庭　啓　茨城縣稻敷郡阿見村、明治五年六月二十二日生

◎三隆洋行　奉天城內鼓樓北（電話支五四〇番）

營業　石版、活版機械、及材料、並に文房具類
和洋紙、メリヤス諸機械一式

當洋行は明治四十二年四月開設にして個人經營なり

營業主　三井彌作　長野縣下九內郡飯山町、明治十七年九月生、夫人靜枝子二十四歲

◎科埜洋行　奉天大西關什字街（電話長七二番）

營業　建築及び工業用材料、金物類卸賣

本店は大連に在り元來當洋行は從前加藤清吉氏の經營に係りしが大正三年現營業主之を繼承し主として支那人側を顧客として營業せり

營業主　畑中佐太吉

外店員　日本人三名　支那人七名

本店　大連市吉野町二丁目（電話一一七二番）

金融業

◎株式會社横濱正金銀行奉天支店

奉天城內四平街　電話 長一二番（店用）　五三七番（客用）
二五〇番（衛兵詰所）
三五七番（十間房取次所）
一一番（支配人舍宅）
四七一番（支那電話）

營業　一般銀行業

當支店は明治三十九年の創設にして本業務の外特種貸附及中央金庫事務を取扱ふ現支配人は明治四十五年四月以來在任せり

支配人　伊東小三郎（人事參照）

次席　高橋升之助

◎株式會社正隆銀行奉天支店

奉天小西關　電話（日長二五二番　支七五番　振替、連二三四番）電略「セ」

營業　一般銀行業、金銀小銀貨等一切の兩替

本店は大連に在り奉天支店は明治四十二年十二月出

張所として開設され四十四年六月支店に昇格す現支店長は大正四年九月營口支店長より轉任し來れり（大連正隆銀行參照）

支店長　高木　成德（人事參照）
次　席　齋藤源次郎

◉株式會社朝鮮銀行奉天出張所

奉天小西關　電話（局五二一番・五二四番）

營業　一般銀行業

當出張所は大正二年七月の開設にて大連支店に隸屬す初の中村光吉氏所長として來任せしが大正三年十月中村氏の大連に轉任すると同時に現所長代はりて來任す（朝鮮銀行大連支店參照）

所　長　小西　春雄　　次　席　木原　小平
開原派出所　　主任　都留　昭
四平街派出所　　主任　後藤　友慶

◉奉天金融倉庫株式會社

奉天大西關第三區警第三號（電話三〇六番）（振替大連一三二六番）

營業　倉庫寄託貨物に對する貸附、質權又抵當權に依る貸附

當會社は資本金三十五萬圓四分の一拂込の株式會社にして石田武亥、上田久衛、松井小右衛門、長野倬、佐伯直平、古賀松二、沼野八郎、中島右仲、松尾八百藏、上木仁三郎、梶野喜重郎、出雲喜之助、向野堅一の諸氏發起の下に大正三年八月一日を以て設立せり

會社の主たる業務は倉庫、質、抵當貸附、擔保貸附に在りて倉庫業は未だ進んで貨物蒐取を講ずる時期に達せず唯だ入庫貨物に對する直接質權を設定して金融を圖るを常とせり質業には奉隆當、福壽當、義和當、瑞豐當、名利當の五營業所を設けり今大正四年二月より同七月に到る第二期の營業成績に據れば倉庫業に於ては入庫銀一萬六千五百三十八圓六十錢出庫一萬六千五百八十三圓、質業には貸出銀六萬九千六百八十九圓十錢、回收銀七萬五千九百七十七圓五十七錢、又抵當貸附に於て大正二年二月より支那人の土地家屋に對する抵當貸附を開始せるが本期間の取扱高は貸附銀四萬四千七百五十圓、回收銀二萬

三百圓なり、其他の擔保貸附は主として有價證券に對する者にて同期の取扱高は貸附銀一萬九千六十三圓五十五錢、同收銀二萬九十圓六錢にて結局六千一百八十一圓三十四錢の純益金を得て株主に年一割を配當せり

當會社は創業日猶淺く第二期の如きは日支交渉問題の爲め一時市場動搖して營業上の不利を受けたるに拘らず猶前記の如き成績を擧げ得たるは事業の性質が有利なるに因る者にして特に支那人の不動產に對する抵當貸附は頗る確實有望の事業なるが如し而して當會社は本業の外日本生命保險及英國サン火災保險會社の代理店を營めり

取締役社長　石田武亥（人事參照）
取締役　上田久衛（同上）
同　松井小右衛門（同上）
常務取締役　長野偉（同上）
同　沼野八郎（同上）
監査役　佐伯直平（同上）

當會社の百株以上の株主を左に示す

株數	住所	姓名	株數	住所	姓名
九六〇	奉天	石田武亥	七五二	奉天	上田久衛
六六七	奉天	梶野ミツヱ親權者梶野タ一キチ	四五〇	奉天	沼野八郎
四〇〇	奉天	上木仁三郎	四〇〇	奉天	古賀松二
三〇六	奉天	長野偉	三〇〇	奉天	松井小右衛門
三〇〇	奉天	米田悦吉	三〇〇	奉天	藤田九一郎
二五〇	奉天	佐伯直平	二四〇	奉天	村井松次郎
一八〇	栃木	赤井昇二	一五〇	奉天	竹内正八
一五〇	奉天	增田長吉	一五〇	撫順	中島右偉
一一五	滋賀	中居庄平	一〇四	奉天	寺村清次郎
一〇〇	奉天	向野堅一	一〇〇	奉天	松尾八百藏
一〇〇	奉天	老田太文（最近死亡）	一〇〇	開原	松井倉吉

株式會社 南滿銀行
（奉天小西關大街（電話一四五二二番一四番 電略「ナマ」 振替大連一〇二五番）

營業　一般銀行業

當銀行は資本金二十萬圓、四分の一拂込の株式會社にして城野芳次郎外十六名の發起を以て大正二年七月十五日開設せり開業以來營業成績太だ良好にして當初三期の短期間に於て金一萬五千圓の積立金を爲し又撫順及本溪湖に支店を設けて其勢力漸く昂がり來りたる處大正四年七月の突發事件に遭遇して內部の破綻を來たしたり爾來兩支店を安東銀行に讓與し

藤田九一郎氏奮ふて責任の局に當り行務に一大刷新を加へし結果は豫期以上の好成績を現はし近き將來に於て頽勢を挽回し得ること疑なきに到れり

專務取締役　藤田九一郎（人事參照）
取締役　古賀松二
取締役　田實　優（同　上）
同　笹部杉一（同上）　監査役中嶋宇仲（撫順）

◎奉天信託株式會社　奉天十間房第二區警第七十號（電話三七三番 六五〇番）（振替大連一三一八番）

營業　（一）一般財産の管理整理及處分の受託（二）動産不動産及有價證券の賣買仲介（三）運用利殖の爲めにする信託管理金並に信託積立金の取扱（四）委託に依る事務の管理（五）諸貸附（六）其他一般の信託業務

當會社は資本金五萬圓（四分の一拂込）の株式會社なり大正二年十一月佐伯、神宮、上田、望月、古賀、增田、松井、石田、沼野、入江以下諸氏二十名は當會社の設立に著手し同三年七月諸準備完成して八月一日設立を認可され株式は上記の發起人二十名にて引受け同年九月登記を終はると同時に開業したり

大正四年一月一日より同六月三十日に至る上半期の營業成績は創業日猶淺く且つ歐洲戰亂の餘波經濟界の不振なるに加へて日貨排斥の大痛擊ありたるに拘らず各項營業皆相應の成績を擧げ六千五百五十三圓の純益金を得て年二割の配當を爲せり會社の前途太だ有望なるが如し

專務取締役　佐伯直平（人事參照）
取締役　上田久衞（同　上）
同　石田武亥（同　上）
監査役　望月實太郎（同　上）
同　神宮敏男（同　上）

◎共融組合　奉天小西關（電話四六五三番）

營業　金融

當組合は低利資本を在留民に融通するの目的を以て成立せる組合組織なり明治四十四年より組合員五名を以て共融社を起し營業を開始せるが大正二年九月之れを解散し更に奉天在留民二十名より金二萬五千圓を出資し正金銀行の特貸及其他より金四萬圓を借入れて資本金となし現在の共融組合を組織せり當組

合は五箇年間無配當として利益金の全部を積立て以て資本の充實を圖れり其利息低率にして在留民の利便を享くること一方ならず奉天に於ける有力なる金融機關なり

専務理事　上田久衞（人事參照）
理事　向野堅一（同　上）
同　石田武亥（同　上）
同　増田長吉
監事　望月實太郎（同　上）

藥種業

◎合名會社井上誠昌堂　奉天小西關第四區警第一五號地（電話日五番支九七番　振替大連八四番）

營業　藥種賣藥

本社は富山縣高岡市に在り井上一家の合資を以て明治三十七年開店せしが大正二年之れを資本金十萬圓の合名會社に改めたり。

社長　井上鹽六
奉天　主任（代表社員）島田利吉
奉天分店　奉天新市街西二條　主任　阪野源藏
大連支店　大連市浪速町　主任　井上伊次郎
安東縣支店　安東縣市場通一丁目　主任　布村幸太郎
同分店　同　四丁目　主任　岸林造
公主嶺支店　公主嶺大和町　主任　井上伊次郎

◎廣福洋行　奉天城内第二區（電話一六五番）

營業　藥種類

當洋行は個人經營なり營業主は明治三十六年四月ラムネ製造販賣の望太吉號を開設せしが日露開戰となるや之を放棄して避難し三十九年三月舊店を興復して廣福洋行と改稱し現業を開始せり

營業主　望月實太郎（人事參照）

◎村井延壽堂　奉天城内鐘樓南大街（電話二〇五番）

營業　藥種類

當延壽堂は明治四十一年五月の開設にて個人經營なり明治四十五年四月大連伊勢町に支店を開設す當堂は大正四年夏日貨排斥騷擾の爲め店内に爆烈彈を投

入せられたるを以て有名なり

營業主　村井松二郎　（大阪市東區安土町一丁目二番地明治十三年十二月十四日生、夫人ます明治二十一年一月生、長男滿太郎同四十一年七月生）

奉天本店　主任　栗田　琢一

外店員　六名

大連支店　主任　村井松二郎

長春支店　主任　西田清一郎

天津支店　主任　中山　甚吉

◉長壽堂藥房　奉天城內鐘樓南大街（電話三四番電略「チ」振替大連三六六番）

營業　藥種賣藥、醫療機械、衞生材料、化粧品一切の卸及小賣業、竝に製劑

當藥房は個人經營なり明治三十七年五月營口に長壽堂藥房を開設し三十九年一月更に奉天に同藥房を開設し明治四十年一月哈爾賓に同五月吉林に支店を開設し吉林支店は大正元年に閉鎖せり當藥房は東京尾澤藥房の藥品の滿洲一手販賣店なり

營業主　中江十五郎（人事參照）

支店　哈爾賓傅家甸

◉德盛堂藥房　奉天小西門裡（電話三二五番）

營業　藥種

當藥房は明治三十九年三月の開設にして個人經營なり

營業主　竹內　正八　（德島縣名東郡下八萬村二〇七番地明治十年七月生、夫人みつゑ子二十八歳、女さく子八歳）

◉林世生堂藥房　奉天新市街西二條街六號地（電話五〇六番）

營業　藥種、醫療機械竝に貸家

當藥房は個人經營なり營業主は郷里中學校を卒業し四十二年奉天井上藥房の店員となり四十三年九月より獨立して現業を開始す

營業主　林　友七　（富山縣射水郡下關村字赤祖父一一五三番地、明治二十二年一月十一日生、父君助三郎五十二歳、母堂はつ五十一歳、夫人もと二十一歳、女花子四歳）

外店員　三名

石炭業

◉寶業公司　奉天小西關（電話二一五番）

營業　撫順炭煙臺炭及木炭、共保生命保險代理
當公司は明治三十九年六月の開設にて個人經營なり
營業主　古賀　松二　佐賀縣神崎郡西鄕村字横武四四番地、明治十三年一月十六日生、夫人つた三十三歲、てるけさ九歲、もと子三歲
支店　新民府　主任　西島　小一
遼陽　同　金子　源吉

●和盛公司出張所　奉天小西邊門外（電話五四三番）

營業　石炭、羊毛
本店は大連に在り石本鏆太郎氏の經營に屬す石本氏は大正三年共事務所として和興公司を小西邊門外湖廣會館内に開設し實弟石本權四郎氏を主任として專ら牛心臺炭鑛事務及滿蒙の諸調査に當らしめたるが四年十月大連本店の組織變更と與に現名稱に改らる　（大連和盛公司參照）
主任　石本權四郎（人事參照）

●松昌公司　奉天大西關（電話一七四番）

營業　石炭
當公司は明治四十年の開設にて個人經營なり
營業主　松井小右衛門　長崎縣北松浦郡小佐々村字岳免五一七番地、明治十四年十月十八日生、夫人よし二十六歲、興一四歲、政子三歲
支店　開原　主任　松井　倉吉
昌圖　同　同上　四平街　同　野原元治
公主嶺　同　安高德兒

●公益公司　奉天小西關大街（電話長一七四番 三四七番 五四四番）

營業　撫順炭、煙臺炭販賣
當公司は明治四十三年四月の開設にして松井、古賀齋藤、三氏の合資組織なりしが大正四年八月解散して個人經營となる
營業主　齋藤　邦造　新潟縣西島郡日吉村大字島越七三番地、明治二年九月八日生夫人きしの三十五歲、邦義十一歲、禮子五歲、智子三歲

●大昌煤局　奉天西塔大街　電話（長二〇九番 三〇番）

營業　本溪湖炭及コークス販賣
當煤局は個人經營なり營業主は明治四十四年組合にて福記煤局を開設せしが明治四十五年之を廢し改組織して大昌煤局と更稱せり

營業主　笹部　杉一（人事參照）
支店　長春新市街滿鐵構內　主任　瀨下　金

製造業

◉穗積玻璃工廠（奉天大西門外 電話四三一番）
營業　硝子製造販賣
當營業主は日露戰役に從軍して滿洲土人間に將來洋燈の需要大に起る可きを察し愛知縣の資產家穗積氏を說きて出資せしめ三十八年十二月十餘名の職工及事務員を伴ふて奉天に來り翌三十九年三月より當工廠を開始せり爾來重疊たる波瀾の大渦中に幾回か出沒せり滿洲に於ける硝子製造が頗る有望の工業たるに拘らず實際には種々困難の事情ありて今尙苦鬪中なり
營業主　鈴木　基紀

◉隆泉湧燒鍋（神谷高粱釀造所）奉天十間房（電話六六〇番）
營業　高粱酒釀造販賣
當燒鍋は個人經營なり明治四十二年二月九鬼榮助藤田九一郎二氏は匿名組合を以て現在工場に於て中央試驗所研究の新式釀造法に據りて高粱酒釀造を開始せしも其製品の香味に於て支那人の嗜好に適する物を得る能はざるを以て四十四年四月解散せり當營業主は其後該工場家屋其他を引受け舊式法を參加する釀造を開始し現在第二班迄釀造し一日の製品一千二百斤に達するに到れり
營業主　神谷　義隆

◉三林公司　奉天小西門裡（電話四〇番）
營業　煙草製造販賣
當公司は明治三十九年十一月の開設にして個人經營なり支那人向き煙草の製造販賣を專門とす
營業主　岩谷　二郎（東京府下澁谷町七一五番地、明治十年十月十六日、夫人靜子十九歲）

◉佐伯洋行　奉天小西門外
營業　洋蠟燭製造販賣（別項佐伯洋行參照）
營業主　佐伯　直平

◉原田製パン所　奉天小西邊門外（電話二一五四番）

營業　パン製造販賣

當製パン所は個人經營なり營業主は明治三十七、八年の戰役に實業團を組織して竹敷軍港に在り第三軍兵艦部附又東郷艦隊に隷屬し旅順開城迄パンを野戰病院に納め平和後三十九年現所に開業し今日に至る

營業主　原田覺次郎

運輸、土木請負業

◉中日商辦 瀋陽馬車鐵道股份有限公司　奉天新市街鐵道大街第二〇號地（電話一一五番）

當公司は日支合辦の株式會社なり資本額は小洋銀十九萬元にして明治四十年九月設立と同時に全部拂込まる出資者の割合は規定に據り日本側は總資本の四分、支那側は六分にして四十一年一月開業せり

開業當初は舊滿鐵奉天驛より奉天省城小西門に至る約二哩半の距離に於て營業せしが明治四十三年十月奉天驛の移轉と同時に新舊停車場間延長線路の運轉を開始せり現在營業線路は約三哩二十鎖餘にして支線避待線等布設線路全延長約六哩餘なり所有車輛二十九臺、馬匹百七十頭内外にして一日平均約百三十五回の往復運轉をなし乘客一日約三千五百人乃至四千人、收入約銀三百三十元あり

職員は日本側七名、支那側十四名にして車掌驛夫各二十六名、信號夫雜役等五十餘名あり

日本人側　董事　林　幾太郎　坂田　長平
　　監査　男爵大倉喜八郎　島岡亮太郎
支那人側　總理　魯　宗　煦
　　董事　閻　廣　泰　周　登　科
　　監査　崔　興　麟

◉山口運輸公司奉天出張所　奉天西塔大街（電話局一五八番）

營業　運送

當出張所は明治四十年五月開設さる（山口合名會社大連支店參照）

主任　桑本　平一　島取縣東伯郡小鴨村字生田四〇三番、明治十五年五月二十七日生

◉上木組　奉天新市街西一條街九號地（電話一五七番）

營業　土木建築請負
當組は個人經營にして明治四十一年七月開設す
營業主　上木仁三郎（人事參照）

◉大倉組奉天奉天詰所　奉天新市街（電話三四八番）

營業　土木建築請負
當出張所は明治四十五年六月の開設にて大連大倉組土木部に隸屬す（大連大倉組參照）
主任　中島安太郎

◉奉天山葉工務所　奉天新市街西二條十七號地（電話長三〇二番）

營業　土木建築及び請負
當工務所は個人經營にて營業主は明治三十八年十月大連山葉洋行に入り現場代人及び撫順沙河口臨時出張所の主任たること九箇年、大正元年十一月同洋行奉天出張所を廢止すると同時に行主の承諾を得て奉天山葉工務所と改め獨立營業す
營業主　中原文太郎　山口縣阿武郡萩町一二、明治十三年五月一日生、母堂たつ六十歳、夫人すゑ二十九歳、女二名

雜貨販賣業

◉伊豫組　奉天新市街西二條街（電話二〇二番　振替大連一四七番）

營業　雜貨、食料品、吳服類、醬油釀造販賣、貸家
當組は明治三十八年十月の開業にして個人經營なり同四十年秋より醬油製造を始め每年製造額三千石に上る貸家三百餘戶を有す
營業主　峰　八十一（人事參照）
外に店員　二十名

◉株式會社奉天調辨所　奉天新市街（電話二五八番）

營業　日用雜貨
當調辨所は明治四十一年匿名組織にて開設されしが四十二年十二月より資本金一萬圓の株式組織に變更す其營業方法は大連滿鐵調辨所に同じ
專務　古畑吾助
取締役　千田次郎（人事參照）
同　中辻喜作

監査役　神宮敏男（人事參照）
同　小杉與三郎
業務主任　木下金次

◉牧野呉服店　奉天十間房（電話三六番）

營業　呉服反物類

當店は個人經營なり初め明治四十年二月小西關に開店したるが四十四年十月一日現在所に移轉せり撫順に支店を有す

營業主　牧野實四郎　香川縣北太馬場町三九番地、明治十二年四月二十日生、夫人すゑ二十八歳、女二名
外店員　八名

◉喜多商行　奉天十間房第三區（電話一三三番）

營業　食料品雜貨

當商行は個人經營にして明治三十八年十一月に開設さる四十四年現在所に移轉せり

營業主　河野榮　愛媛縣喜多郡大洲村字中村、明治六年四月八日生、夫人たけ子三十五歳、女一名

◉古畑商會　奉天新市街西一條（電話一一四番）

營業　清涼品、鳥獸肉、牛乳、蔬菜、冷藏用氷貯藏卸賣、東洋拓殖會社殖産課産出果物特約店

當商會は個人經營にして營業主は明治三十八年八月旅順に於て古畑商會を開設し要塞司令部及聯隊の御用商を營みたりしが四十三年八月現在地に移轉して現業を開始す西一條街及小東門外に支店を有せり

營業主　古畑吾助　長野縣西筑摩郡福島町四一九番地明治十一年六月三日生、夫人たづ三十三歳、保八歳、清子九歳
支店　奉天驛前西一條街（電話四三七五番）
同　小西門外魚菜市場（電話二二六番）

◉永信號　奉天小西關大街（電話一三六番）（振替大連一一三八番）

營業　銃砲火藥販賣

營業主　山下永幸　高知縣長岡郡本山町、明治八年四月二十五日生、夫人嘉名三十三歳、男基七歳、女光子六歳

◉松本商店　奉天十間房（電話七九番）

營業　和洋小間物類

當商店は個人經營にして明治三十九年七月の開設なり

營業主　松本　庄三　兵庫縣神戸市相生町五丁目九十四番地、明治十六年四月生、夫人すゑ子二十七歲

外雇人　六名

◉○イ吳服店　奉天西塔街二丁目九號地（電話二七三番）

營業　吳服反物、竹内金庫販賣

當店は個人經營にして營業主は明治三十六年尾道商業學校二年を終へ以後家業吳服商を見習ひ後兵役を卒へて四十三年一月奉天に來り十間房に開店せしが四十五年五月業務を擴張して現處に新築移轉す

營業主　入江英一郎　廣島縣芦品郡戸手村三〇五番地　明治二十年五月十日生、夫人小松二十八歲、女二名

外店員　四名

◉小杉洋行　奉天西塔大街（電話一三九番）

營業　食料品雜貨

當洋行は個人經營にして營業主は明治三十九年三月奉天に來りて現業を開設す

營業主　小杉與次郎　滋賀縣愛知郡八木莊村字下八木　明治十六年三月十八日生、母堂いさ七十六歲、夫人よし三十五歲、女すみ四歲

◉義道洋行　奉天西塔大街二丁目（電話三七〇番）

營業　雜貨書籍及び新聞販賣

當洋行は個人經營にて營業主は明治二十四年出郷京都に於て商業に從事し後兵役を終へ日露戰役に被召出征し南山の戰に於て負傷す三十九年四月凱旋同年十月奉天に來りて現業を開始す

營業主　野村　文藏　滋賀縣伊香郡南富永村字柏原、明治十年三月十六日生

◉弁妻木局　奉天新市街鐵路大街（電話五六六番）

營業　材木

當木局は大正三年一月の開設にして個人經營なり

營業主　中川　淺吉

農園、精米業

◉勝弘農場　奉天滿鐵附屬地内五〇七番

營業　農園

當農場は個人經營にして經營主は明治四十一年滿鐵會社土地貸下規則に基きて農場を借入れ種々試驗の結果水田の有望なるを確信して四十三年十一月農場を開設して水田五十町歩を開墾し大正四年更に新民府に水田二十五町歩の開拓を始めたり現在當農場の所有農園は以上水田の外陸田六百五十町歩（水田の豫定地）外に四十一年より開墾せる二十町歩の水田を鐵嶺に有し滿洲斯業者中に在りて最大資本を投下したる者なり

營業主　勝弘貞次郎（人事參照）

◉西宮農場　事務所　奉天滿鐵附屬地内奉天新市街驛前（電話五〇三番）

營業　農園及び精米

當農場は個人經營にして明治三十九年より開墾に著手し現在奉天附屬地に於て水田三十三町歩及び畑四十町歩を有し大正三年に於て一反歩粳四石三斗の收獲を得たり其他大石橋には大正二年より開墾せる水田六十五町歩あり又鐵嶺方面にも多大の水田を有せるも支那側の關係上茲に發表せず當農園は精米所を有して其産米を自ら精搗しつゝあり

滿洲に於ける水田は已に試驗的の議論時代より實際的の斷案時代に入り其可能的の有望事業なることは最早疑を容るゝの餘地なし唯だ其事業の性質として薄利たるを免れざるも若し健實勤儉を以て之れが經營に當らば内地に於けるそれに比して土地原價の低廉なるそれ丈けは慥かに利廻はりの好き譯なり而して當農場主及前記勝弘農園主、撫順大松號主の如きは滿洲に於ける斯界の先達且つ功勞者として孰れも徐々成功に向ひつゝあり

營業主　西宮房次郎　東京市芝區米町六番地、明治十六年七月十六日生、夫人初子明治二十七年二月十九日生

精米所　電話三一〇番

◉合資會社奉天精米所　奉天西一條街二二號地（電話二五九番）

營業　滿洲米搗精及販賣

明治四十三年十一月勝弘貞次郎氏の發起により株式會社三星洋行專務取締役久保田雄三氏と匿名組合を

組織し資本金五千圓を以て精米事業を開始し四十四年十月更に五千圓を增資し現在の場所に工場を新築し關東陸軍倉庫上納米を主とし傍ら市場に精米卸小賣業を營み四十五年九月合資會社大矢組大連支店長大矢麻次郎氏の加入協定纏り同人出資金五千圓を加へ合計一萬五千圓の合資會社に改め別に正金銀行より特貸金五千圓を借款せり

工場はカボーリンダー十馬力發動機一臺、電氣モーター十馬力一臺、搗精器アイデアル式七臺を有し一日の搗精能力百石に達す常傭人夫十名、專屬撰米三十名にして一箇年の搗精販賣額は六千石內外なり滿洲に於ける水稻產額の未だ豐富ならざるため原料糀の供給充分ならずして夏期五六箇月間は休業するの止むなき狀況にあり殊に大正二三兩年の如きは稀有の旱魃のため收獲米の減少を來たし從て事業の幾分縮少を見るに至れり

業務擔當社員　勝弘貞次郞（人事參照）

旅館、寫眞、醫院

◉瀋陽館　奉天新市街西六條（電話長二一四番）

營業　旅館

當旅館は個人經營にして明治三十九年十月の開設なり初め小西門外に於て開館せしが四十四年九月現在地に新築移轉せり蒸汽暖房其他設備の完全なる客室十八を有し奉天第一流の旅館なり

營業主　田實　優（人事參照）

◉大星ホテル　奉天驛前（電話長一三九番）

營業　旅館

當ホテルは個人經營にして明治四十四年五月の開設なり客室十四を有せる完全なる旅館なり

營業主　神谷　敏男（人事參照）

◉常盤館　奉天驛前三階（電話長三五九番）

營業　旅館

當旅館は個人經營にて大正元年十二月開設す奉天驛前の滿鐵貸長屋內に在り屋宇宏大にして眺望に富み暖房其他の設備あり

營業主　國久もせ子　愛媛縣北宇和郡宇和島町、明治五年五月生

◉永清照像館　奉天城内鐘樓南（電話日一八番 支六四二番）

營業　寫眞

當館は個人經營にして明治三十四年開館以來繼續せる斯業の老舗なり

營業主　永清文治郎（人事參照）

支店　鐵嶺附屬地　主任　下川海藏

◉藤永寫眞館　奉天新市街西二條十三號（電話五二番）

營業　寫眞

當寫眞館は個人經營にして明治四十一年奉天十間房に開設し大正元年現在地に移轉す

營業主　加藤新作　岐阜縣羽島郡堀津村四九八九番 明治十五年五月生、夫人ますゑ三十歳、男二人

◉吉田醫院　奉天附屬地西三條一八號地（電話三二七番）

營業　醫術

當院は個人經營にして明治四十五年二月開設す院主は藥劑師及醫術開業免狀を有し栃木縣及新潟縣等の公私立醫院醫員、又同副院長、檢疫醫員、警視廳警察醫、關東都督府醫務囑託等を歷任し四十五年二月以來は奉天に在りて獨立開業せり

院主兼院長　吉田一　栃木縣下都賀郡稲葉村上稲葉村一一番地、明治五年二月二十八日生 夫人信子三十六歳、男一名女五名

質、貸家業

◉茂林洋行　奉天附屬地西塔大街（電話一一〇番）

營業　貸家及び帝國生命保險會社代理

當洋行は明治四十年十一月の開設にして個人經營なり

營業主　向野堅一（人事參照）

◉廣福當　奉天大南關第一區營第五號

營業　質

當廣福當は明治三十九年七月の開設にして廣福洋行主の經營する處なり（別項廣福洋行參照）

營業主　望月實太郎

◉八島屋　奉天十間房

營業　質屋

當店は個人經營にて營業主は東京芝攻玉社及神田國民英學會を卒業して後鄉里にて運送業を營み又新湊銀行中伏木支店支配人に就任せしが勤續一年にして辭し四十年十月渡滿し翌年一月より現業を開始せり

營業主　南島清吉　富山縣射水郡新湊町字放生津町七六〇番地、母堂しむ子七十二歲、夫人しげ三十四歲、女美行三歲

◉福屋　奉天新市街西街十八號地（電話三四〇番）

營業　貸屋及び質

當店は個人經營にして營業主は明治三十八年軍屬として渡滿同三十八年九月凱旋と共に歸還し同三十九年二月再び渡滿奉天にて御用商を營み同四十四年十月より現業を營む

營業主　大竹孝助　福岡縣遠賀郡芦屋町二一一九番地明治十三年二月十九日生、夫人りつ二十九歲、長男孝助九歲、長女政子五歲、次女信子三歲

◉伊豫屋　奉天新市街西二條十六號地

營業　質及び貸屋

當店は個人經營にして營業主は往年臺灣にて菓子製造業を營み後鄉里にて雜貨商及び菓子製造業を營みしが三十八年來奉天に來りて雜貨又は人力車販賣を業とせしも大正二年より現業を開始せり

營業主　西村兵三郎　愛媛縣喜多郡長濱町字長灣甲二二五ノ二、明治十六年十月二十七日生、母堂わさ六十四歲、夫人さかゑ二十歲、長女滿喜子四歲、次女千代子三歲

◉淺野質店　奉天新市街西一條一七號地（電話一七〇番）

營業　質屋

當質店は明治四十一年二月の開設にして個人經營なり

營業主　淺野猪之松　愛媛縣北宇和郡吉田町、明治四年四月生、夫人まき三十七歲、長女ゆき十三歲、二女さみ十一歲、長男俊一十五歲

◉峯商會　奉天新市街西二條（電話一二〇番）

營業　貸家、質

當商會は個人經營なり營業主は明治三十七年五月動員令に依りて從軍し三十九年一月凱旋同年五月渡滿し四十二年三月より現業を開始せり

營業主　峯　節　翁　愛媛縣喜多郡長濱町甲一九番地ノ一、士族、明治十一年一月二日生 父君清次郎、母堂信六十五歲

◎奥田屋　奉天十間房

營業　質

當商店は個人經營にして營業主は明治四十年四月城內に於て藥種店を營み四十一年三月廢業と同時に十間房に移轉し古着店を營みたりしが四十三年十月亦たこれを廢業して現業を開始せり

營業主　奥田竹次郎　富山縣富山市長柄町八十二番地 明治十三年二月七日生、夫人さよ三十三歲、敏夫一歲、なか九歲

新聞、通信業

◎盛京時報館　奉天大西關（電話局二二番）

營業　新聞發行

當館は個人經營にして經營者は明治三十四年十二月順天時報を北京に創立したるが後日露戰爭に際し滿洲に新聞を開設す可く三十八年七月順天時報を上野岩太郎氏に讓與して新に營口に滿洲日報を起こし四十年十月更に奉天に於て當時報館を創立したり

當館發行の四號活號八頁の日刊盛京時報は滿洲に於ける漢字新聞の最大なるものにして亦其發行高は滿洲同業者間に於て最大多數を占め斯界の一大勢力なるが大正三年日獨戰爭以來排日思想の續發、其他經濟界の事情の爲め聊か發行高を減じたるの感あるも其後徐々として之れを恢復し近く工場の新築活字增加等を爲し益々發展の現情に在り大阪支局（大阪市中之島）の外南北滿洲、山東及天津方面に各分局ありて通信及販賣の聯絡完備せり

社長　中島眞雄（人事參照）　副社長　一宮房次郎
主筆　佐藤善雄（同　上）　編輯長　菊地貞二
營業主任　宮川貫作　庶務主任　吉田長之助

◎奉天日日新聞社　奉天小西邊門外（電話局一三五番）

營業　新聞發行

當社は社中幹部員の組合組織にて大正元年九月一日成立せり奉天には明治四十年來山中氏經營の奉天公報、中島氏の滿洲日報、滿日紙附錄の奉天日報等刊行せられたるが孰れも廢刊し其後安東貞元氏南滿日報を創刊したるも之れを柳原蛟氏に讓り柳原氏は久しく自己經營の後又た之れを當社現幹部に讓渡したり由りて大正元年九月現名稱に改題刊行せり中形四頁の夕刊紙にして大正四年十一月御即位大典日より活字を改良し紙面の光彩を增し來れり

主幹　吹野幹（人事參照）
理事（營業部長）友成達治
支局　大連　撫順　遼陽　本溪湖　安東　鐵嶺　長春

◉內外通信社　奉天十間房第四區警第一〇一號（電話長四二番編輯部一七番印刷部）

營業　通信並印刷

當社は個人經營なり明治四十年五月一日第一面及四面は活字（廣告）第二面及三面は謄寫版（記事）を以て印刷する小形の夕刊紙第一號を發行し以て滿洲に於ける謄寫版新聞の濫觴を爲したり爾來刻苦續刊、廣告は料金を徵し紙面は無代に配布して頗る奉天市民其他一般の爲めに貢献する處多く社運漸く隆盛にして其家屋を現在處に新築せり更に大正四年十一月の御大典を紀念として同月十日より全紙を活字に改め以て面目を改新せり

當社は又た別に印刷部を設置し十六頁印刷機及新活字を準備し之れが爲め新築せる工場は大正四年十月を以て竣成し同時に一般の印刷注文に應ずる事とせり現下奉天第一の印刷所たり

社主兼社長　合田愿（人事參照）
主筆　柴原祐之　印刷部主任（社長兼務）

◉滿洲通信社　奉天十間房第五區警第一二四號地（電話長六三二番　電略ホウテンマンツウ　振替大連六七九番）

營業　通信

當社は個人經營にして滿洲及北京事情を電報及文書を以て敏速精確に內外に、又內外事情を滿洲其他各地に報道するの目的を以て大正三年八月卅一日開設さる當時歐洲戰亂より日獨戰爭を惹起したるを以て直に電報通信を以て歐亞の戰況其他の報道に努めた

るが大正四年一月五日よりは日刊滿洲通信（小形謄寫版每號十頁乃至二十頁）を發行して滿洲及北京事情を內外に報道せり當社は業務を擴張して近く北京電報其他漢文通信をも開始するの準備中に在り

社主兼社長　武內　止戈（人事參照）　主筆（最近缺く）
編輯顧問　水野　應佐（人事參照）
大連支社　大連市北大山通一九號　主任（社長兼ぬ）
北京支局　北京西河沿　主任（囑託）　橘　朴
京城支局　京城三坂通一〇二番地　主任　川端源太郎
通信部　旅順　營口　遼陽　鐵嶺　公主嶺　長春　哈爾賓

◉滿洲日日新聞奉天支局

奉天十間房（電話四一〇四番）

營業　新聞販賣並に通信

當支局は本社の創立と同時に開設せらる在大連の本社に電報其他通信を送るの外同新聞の販賣及ひ廣告事務を取扱ふ主任は初代上田黑潮氏の次に原口聞一氏顧問として在任し之れに次ぎて水野應佐氏來任して一時同紙附錄として奉天日報を刊行したり爾後加茂方外安齊源一郎諸氏を經て現主任は明治四十四年就任して今日に迨ぶ

主任　皆川秀孝（人事參照）

營業主任　岡本利德

◉遼東新報社奉天分局

奉天驛前滿鐵貸事務所內（電話四一二五番）

營業　新聞販賣並に通信

當分局は明治三十九年の設立にして在大連本社に電報其他の通信を爲す外同新聞販賣及廣告募集の事務を取扱ふ明治四十年來三明諒夫氏分局長として在任せしが大正四年十月其退任と同時に現分局長之れに代はれり

分局長　水野應佐（人事參照）
營業部主任　中西市松

◉大阪每日新聞通信部

奉天十間房（電話四一〇五番）

當通信部は明治三十九年の開設にして在大阪本社に電報其他通信を送る外に滿洲各地の同社通信員を監督す初代の特派員桑原昌三氏は勤續六年にして去り島崎新太郎氏之に代はり在任半年にして去り以て現特派員に及べり

特派員　田村貞一（人事參照）

◉大阪朝日新聞通信部

奉天新市街滿鐵貸事務所内（電話五二五番）

當通信部は在大阪本社に電報其他の通信を送ると與に滿洲各地の同社通信員を監督す岡野養之助氏を初代特派員として服部暢、中島爲喜の二氏を經て現特派員は大正四年五月來任したり

特派員　岡山源六（人事參照）

官衙、公共機關、宗教團體

◉奉天日本總領事館

奉天小西邊門外（電話四一番）

▲在奉天總領事館は日露戰爭後滿洲に關する日清條約に據り明治三十九年六月一日を以て開館され總領事は特に勅任とし滿洲に於ける我領事館中の重鎮なり管轄區域は最初遼陽出張所、鐵嶺分館をも包含せしも四十一年遼陽鐵嶺共に獨立領事館となり爾來奉天總領事館の管轄する處は奉天省中の安東、長春、鐵嶺、遼陽、牛莊の各領事館管轄區域に屬せざる地方即ち南滿本線の沙河新臺子間、安奉線の奉天連山關間、撫順線の奉天撫順間の小區域に限られたるも東三省政治の中心地點に於ける我政府の代表機關なる爲め開館以來重要なる日支間の交渉問題常に絶ゆすして其事務の繁劇なること世界に於ける我領事館中の第一に居り又其取扱ふ交渉問題は北京公使館に亞ぎて日支兩國の大局に關する重大性質の者多し歷代總領事は初代の萩原守一氏は四十年四月去つて同年九月加藤本四郎氏來り四十一年九月岡部三郎氏領事代理として館務を執りしが同年十一月小池張造氏來任し四十四年十一月より落合謙太郎氏來りて在任五箇年に亘り大正四年九月矢田代理來任せり

▲廳舍は開館以來小西關の支那家屋を以て之れに當てしが明治四十四年十一月現在所に新築工事を起こし翌四十五年七月竣成移轉せり工費は設備費と合はせて二十三萬餘圓に上り宏大なる一廓は恰も堅城の如くにて外觀内容倶に壯麗を極め眞に我外務省の滿洲探題の廣居たるに愧ぢず

總領事代理　領事　矢田七太郎（人事參照）

領事官補　東郷　茂德（人事參照）
同　朝岡　健（同上）　書記生　淺山　龍三
同　國原喜一郎　通譯生　坂東　末三（同上）
同　清野長太郎　同　林出賢次郎

◉奉天居留民會　奉天大西關第三區警第一號（電話三番）

▲當民會は奉天及其附近總領事館管轄に住居する帝國臣民を以て之を組織し官選の會長副會長及び行政委員を置き土木、衛生、教育其他居留民共同の利益に關する事項を審議處理し又之に要する費用の賦課徴收を爲すの機關として明治三十九年七月總領事館令第五號奉天居留民會規則に基き創立せられ同年十月公立奉天小學校及公立病院を開設し翌四十年四月奉天公立圖書館を開設し四十一年消防組を設置し四十二年九月管内を三區に分ち各區に衛生組合を設け各々組合長一名、副組合長一名、委員八名を置くことゝして專ら公共衛生の普及發達を圖るの機關とせり同年十月公立病院を日本赤十字社に移し從來公立病院の執り來れる事項を赤十字病院にて繼承處理することゝせり四十二年大西邊門外に共同墓地を設け四十四年十二月より學務委員を置きて教育に關する諮問事務を執らしむ大正二年九月館令第一號を以て民會規則改正せられ民選評議員十五名及び評議員互選の會長、副會長及會計主任を置くことゝなり同年十二月民會事務規程、會計規則、給與規則、賦課徴收規則等を改正し民會内部の改革を行ひ大正三年七月私立奉天幼稚園を公立奉天小學校の附設幼稚園として民會の經營に移つせり

▲以上は當民會開設以來の沿革及施設の大要なるが諸施設中最も重要なるは教育及衛生事項にて教育に關しては明治三十九年十月奉天公立小學校を開設して同四十一年滿鐵小學校の設置さるゝ迄は全奉天の學齡兒童に對して規定の義務教育を施こしたり又私立奉天外國語學校に補助を與へて商工業者子弟の支那語習得の便を圖りたるが此の補助は大正二年四月限りに廢止して更に幼稚園を開設して之れが經營に任せり又衛生事項に關しては明治三十九年十月奉天公立病院を創立し四十二年一月十間房に分院を開きて公衆衛生の爲めに盡くす處多大なりしが同年十月よりは公立病院一切の事務を赤十字病院に引繼ぎ之

れが代償として毎年民會賦課收入の二割を赤十字病院に提供することゝし民會の負擔は輕減せられたるも一方に於て傳染病豫防消毒種痘、其他公衆衛生上の事務を處理して之れに要する處の經費鮮少に非らず此他民會は消防組の設置、共同墓地の管理より胞衣及産穢物及行路病者取扱に到る各事項に對して其れ〻機關を設けて之れが處理に任せり

▲民會は管內在留民に對して戶別賦課金（第一甲種第二甲種、乙種に分たる）及雜種賦課金を徵收せるが今大正四年度下半季に於ける歲出入豫算を擧ぐれば戶別賦課金五千六百十八圓十錢、雜種賦課金七百八十二圓、過年度收入四百五十七圓五十錢、其他使用料、手數料、雜收入等歲入計六千九百十二圓六十錢にして其歲出は俸給及諸給一千二百圓、雜給四百七十二圓、需用費三百五十一圓二十錢、借地借家料二百四十圓、會議費五十五圓五十錢、營繕費五十八圓九十錢、小學校費一千九百七圓五錢、幼稚園費三百四十二圓八十錢、圖書館費五十圓、衛生費三百二十六圓、警備費三百六十四圓三十錢、救助費百八十圓、共同墓地費五十圓、雜支出百六十六圓、基本金積立金四百圓、豫備費四百四十八圓八十五錢、消防器具庫增築費三百圓、計六千九百十二圓六十錢なり

▲民會會長は井上一男、茂松直順（會長心得）杉原泰雄、三谷末次郎、末松階一郎（會長代理）、西宮房次郎（會長代理）、井深彥三郞諸氏を經て大正二年十月原口聞一氏は民會規則改正後の第一次會長に選擧せられ大正四年同氏退任と與に現會長之れに代はれり

會長　石田武亥（人事參照）
副會長　皆川秀孝（同上）
會計主任　佐伯直平（同上）
評議員　安達都　增田長吉
松井小右衛門　藤田九一郞（同上）
三井物產會社奉天出張所代表者江藤豐二（同上）朝鮮銀行奉天出張所代表者小西春雄（同上）小寺洋行出張所代表者手塚安彥（同上）望月實太郞（同上）
上田久衞（同上）
入江傳六
理事　德久愛馬（同上）

◉奉天商業會議所 奉天小西關子孫堂衚衕（電話六五番）

▲當會議所は明治三十九年十二月總領事館令を以て發布せられたる商業會議所規則に基き杉原泰雄、遠藤藤次郎、三谷末治郎、の三氏發起人となり四十年一月定款を作成し同年二月創立せり即ち當所は奉天及其附近に在留する帝國臣民に依りて公選したる議員を以て組織し議員の定數は十五名とし奉天居留民會に六等以上の賦課金を納付するものは議員の選擧權並に被選擧權を有することゝせり而して其取扱ふ事務權限は左の如し

一、商工業の發達を圖る必要なる方案を調査すること

二、商工業に關する規則の改廢施行に關し行政官廳に意見を開申し尙ほ商工業の利害に關する意見を表示すること

三、商業に關する事故に關し行政廳の諮問に應ずること

四、商業の狀況及統計を調査發表すること

五、官廳の命令又は商工業者の委囑に依り商工業に關する事項を調査し又は商品の產地價格を證明すること

六、官廳の命に依り商工業に關する鑑定又は參考人を推選すること

七、關係人の請求に依り商工業に關する紛議を仲裁すること

八、總領事館の認可を受け商工業に關する營造物を建設し又は管理し其他商工業の發達を圖るに必要なる施設をなすこと

▲以上八項にして當會議所の創立と同時に茂松直順氏會頭に千賀環氏副會頭に選ばれたり爾來同年十月中根齊氏會頭に西宮房次郎氏副會頭に四十一年八月阿部孝助氏會頭に杉隆精氏副會頭に四十二年一月谷口武一郎氏會頭に縣左吉氏副會頭に同年九月三谷末治郎氏會頭に四十三年十二月縣左吉氏會頭に原口聞一氏副會頭に大正元年十二月藤田九一郎氏會頭に余村松之助、瀨尾榮太郎の兩氏副會頭に大正三年十二月中島盛彥、石井久次の兩氏副會頭に選ばれ大正四年九月藤田氏辭任と與に現會頭之れに代はれり

▲當會議所の大正四年度上半期に於ける歲出入豫算

は賦課金二千四百九十六圓九十六錢、前季繰越金三百二十六圓六十一錢、雜收入三百六十圓、計歲入三千百八十三圓五十七錢、にして又歲出は給與一千七百九十圓、備品費五十五圓、所費一千二百六十五圓豫備費七十三圓五十七錢、計三千百八十三圓五十七錢なり

▲當會議所は創設以來奉天在留の有力者常に之れが幹部となりて經濟界の重要問題起る毎に挺然として正議を提唱し南滿中部に於ける斯界の輿論喚起の中堅たり又毎月經濟旬報を發行して當業者を裨益する處尠なからず

會頭　江藤豐二（人事參照）
副會頭　石井久次
議員　小西春雄（同上）　望月實太郎（同上）
上田利一　石田武亥（同上）
阿部孝助　松尾八百藏
岩田鹿之助　余村松之助（同上）

◉日本赤十字社奉天醫院　奉天大西門

▲當院は明治四十二年十月奉天居留民會設立の奉天公立病院と合併創立されし者なり元來公立病院は當時の總領事萩原守一氏が日露戰役後急激なる邦人の增加に對する醫療機關の不備を救濟する爲め居留民會に諮るに公立病院の設立を以てし明治三十九年十月二十三日醫學士檜垣春三氏を院長に聘し檜垣氏は同月三十日醫士姶良政秀氏と與に著任し大西門外の日本領事館內に假診療所を設け一般患者の診察及婦人共濟會の經營に係る藝酌婦の健康診斷を爲す傍ら病院創設の事務に鞅掌せり四十年一月奉天公立病院を城內元奉天府尹衙門跡に設け翌二月一日より一般患者の診療を開始し四十二年一月十間房に出張所を置き同年五月產科婦人科專攻醫員西田謙一氏を聘し同時に出張所を分院に改め西田氏分院長となれり之れより先き萩原總領事時代に於て赤十字病院創設の議あり小西邊門外今の江蘇館一帶の地約五千坪の敷地を支那政府より借受け之に公立病院を併合せんとせしも機熟せずして實行されざりしが四十二年總領事小池張造氏の時代に於て民會との協定成り大西門外元と商品展覽會の家屋を借受け奉天赤十字病院を創設し同時に公立病院を併置するとゝなれり明治四

十三年五月赤十字本社の男爵石黒忠悳氏巡視の爲め來奉し臨時費支出に就き斡旋せられ其後此の臨時費支出に依りて治療器械及普通備品を購入し漸く病院の體裁を備へたり爾來年々各種の施設を加へて終に現在の整備せる醫院を見るに到れり

▲現在病院の敷地三千五百十八坪總建坪一千一百三十二坪にして普通病室、傳染病室、健康診斷所、施療病室皆備はり六十二名を收容するの設備あり其他蒸氣消毒より手術室に到る迄文明醫院としての一通りの施設完備せるも之れを世界的名聲の日本赤十字社の支那滿洲に於ける唯一の事業として（旅順に赤十字病院あるもそは都督府の經營に屬す）猶物足らざるの感なきに非らず同社は人道博愛の上よりする此種の事業が日支兩國民の融合を圖る上に於て重大の結果あるに顧みて更に益々努力する處あるなるべし

院長兼醫長　內科主任　小川勇
副院長兼醫長　外科、耳鼻咽喉科主任　森川千丈
產科婦人科主任　豫備二等軍醫　西田謹一
小兒科主任　田　公登　丸田美登
調劑員　森田時雄
庶務部長　我澤喜太郎

◉奉天本派本願寺出張所　（奉天十間房）（電話二〇六番）

▲明治三十九年日露の役我軍の奉天占領と同時に軍隊慰問部附開教師として從軍したりし安達格致師は本願寺慰問部を現今の警務署長官舍の地に設け布教を開始したりしが其後現在所に新築移轉し本派本願寺を設置するに至れり爾來四十一年三月開教師伊津野法雨師は安達師に代りて駐在することゝなり大正二年十月伊津野師辭職して翌三年六月現開教師神田藏雄師之れに代はれり信徒の現在數は約二千名の多きに達し毎日曜日の奉天佛教婦人會例會に所內布教をなすのみならず赤十字病院並に領事館監獄に一週一回、又軍隊に一ヶ月一回、佛教研究會に毎月二回、蘇家屯虎石臺に月二回宛出張布教をなし又日曜學校の設けありて毎日曜日午前九時より兒童に對し佛典教授の後有益なるお伽話、唱歌等を授けて兒童教育の一端に資し尚ほ婦人共濟會とて藝酌婦を救濟するの途を講ぜり當寺主任は該會の主宰者となり其健全なる發達を企畫しつゝあり

主　任　神田　藏雄　鹿兒島縣薩摩郡上東鄕村淨久寺 明治十年四月八日生、夫人操子明治十九年十月十一日生

◉淨土宗奉天寺　奉天附屬地東一條街

▲當寺は明治四十四年九月廿二日より十間房中央大街に開敎し大正四年十月三十日現在の本堂建築落成せり布敎は主として佛敎靑年會及明照敎會に在りて靑年會は大正四年八月組織され目下發展中なり信徒數凡そ二百五十戸を有す

布敎使　勳七等擬講　田村　智學　福岡縣遠賀郡上津役村稱養寺（東京宗敎大學卒業）

◉奉天東本願寺　奉天十間房

▲當寺は大正三年九月の創設にて山田敎嶽小原開敎員二師を歷て現開敎師は大正四年八月就任せり當寺は本山の補助を仰かずして獨立經營に任せり現在拈華婦人會を開設し又大典記念事業として日曜學校及勞働救濟會を創設せり大正四年十一月より文書傳道を企圖し雜誌を發刊す可く總領事館の認可を受けたり現在信徒數は一百六十戸にて明春を期し本堂建築をなすべく目下敷地選定中に屬す

▲現任開敎師は明治三十九年眞宗大學寮を卒業し爾來韓國開敎使、木浦分監敎誨師、布哇開敎使等に歷任して現任に就けり

開敎使　藤永　環什　福井縣丹生郡志津村字大森第八號十二番地

◉禪宗曹洞宗出張所　奉天新市街鐵路大街

當出張所は大正二年七月の設立にして本山及び信徒の奇附金を以て維持す檀下凡そ三百戸あり布敎には

一、信徒三百餘名を以て組織せる默笑會ありて每月一回開會し禪宗の講義をなす一ヶ月會費二十錢

二、檀下有志の婦人二十餘名の組織せる薰風婦人會あり每月一回開會す

三、又信徒男女二百餘名の組織せる觀音講ありて每月十七日開會す會費一ヶ月十錢なり

主　任　小川　良山　福島縣石城郡三坂村耕山寺住職 明治二十年十月十八日生家族無し

◉高野山大師敎會支部　奉天十間房第五區

▲當敎會支部は大正二年五月開敎す現主任は德島中

學林卒業後高野山本山に於て三年修業す後兵役に就き大正元年大連高野山教會に於て開教師として助務せしが同十二月奉天に出張して教會設立運動を開始し大正二年五月現在所に開教せり信徒凡そ百五十戸を有す

主任　加藤　靜雄　德島縣德島市助任西町七〇七番地　明治二十一年十月二十九日生

◉天理教滿洲布教管理所　奉天西六條街

▲當布教管理所は大正二年十二月廿三日現在の建築落成と與に奉告祭を執行し直に布教を開始し又同時に管内各教會及教師の管理監督事務を開始せり而して管内教會は大連二、旅順二、安東一、遼陽一、長春一、上海一、計八ヶ所にして信徒の戸數一千二百五十戸(大正三年末調)布教師及教師數三十二名なり

天理教滿洲布教管理所
管理者代理主事長　村田慶藏　二十九歲、夫人たね三十歲

◉黑住教講議所　奉天十間房

▲當講義所は大正二年十二月十七日始て奉天新市街西一條に開設され大正四年七月五日現在所に移轉す布教は信者八十四名を以て組織せる黑住養心會ありて每月二回開會し斯教の講義をなす、會費は特別會費一ヶ月一圓、正會員五十錢、通常會員二十錢なり當所は信徒の寄贈金を以て維持し居れり

主任　村田　美宗　岡山縣岡哲郡草間村字足見、明治十一年一月一日生



鐵嶺

概説

▲鐵嶺は奉天の北百卅支里、開原の南六十支里、法庫門の東九十支里、大連を距ること二百九十二哩五分にして鐵道沿線中の主要都會の一なり地勢は東南に蜿蜒せる岡丘を負ひ東方遥かに東山一帶の山脈に連り所々に底平の原野を有す在昔越喜國の領土にして高麗時代には銅山縣を置き後ち渤海大氏の頃銀冶を置きしに緣由し遼の太祖此地を銀州と名け清の康熙三年に至り初めて今の鐵嶺縣を置けり日露戰役の結果我軍之を占領すると共に邦人の此の地に集るもの漸く多く越ゐて四十年滿鐵の經營となるに及び鋭意附屬地の改良發展を計り道路を修築し家屋を建設し以て今日の一市街を現出するに至れり

▲此地氣候は氣壓の變化著敷常に大陸的氣象の支配を受け寒暑共に烈しく氣温夏季三十八度冬季零下三十一度に昇降することあり雨期は普通夏期七八月の交にて渤海の低氣壓南より漸次北進し降雨連日に亘り陰欝を極むれども一年を通ずれば概ね晴天にして風多し

▲行政は支那側には縣衙門、警務署、商務會あり日本側には鐵嶺領事館、領事館警察署、警務署、郵便局、居留民會、滿鐵地方事務所あり此他陸軍側には旅團司令部、聯隊本部、關東陸軍倉庫支庫、守備分遣隊等駐在せり

▲市區は城内居留地及附屬地の三に分かる城内は磚瓦を以て築きたる城壁を繞らし周圍四支里、高さ二丈を越ゆ東西南北に各一門を有す城内大街を最も殷賑なる街衢となし道路甚だ廣濶ならざるも市區整然として商家櫛比し市況頗る活潑なり而して東門外は主として雜穀問屋等の巨商多く其規模何れも宏大なり又西門外は普通之を居留地と稱し日支兩國商人雜居して商業を營み在留邦人の最も多く集合せる處となす三井洋行、鐵嶺銀行、鐵嶺商業銀行、領事館警察署、其他權太商店以下の巨商皆な此一廓に在り而して住民は支那人約三萬、邦人は居留地に一千一百八人（大正四年九月末調べ）あり

▲滿鐵附屬地は面積約百八十六萬坪此内市街宅地として貸付けたるもの一萬四千餘坪あり此地は附屬地外なる日本人居留地と近接し又支那市街の之れに連續せるものあるを以て早く既に小都會たるの形勢を呈せり從て滿鐵會社は明治四十年より工事に著手し現在道路延長二千五百間に達す元來此地は一般に低地なるが故に明治四十二年宅地の盛土を爲し下水溝を設備し水道工事も亦竣成せり其他墓地、火葬場、葬祭場等具はる公園は設備未だ完からざるも六千坪の敷地を有す同會社が市街經營の爲めに投せる所は大正三年度末迄に三十六萬圓を超へ大正四年度に於ては約六千圓を以て水道、給水增設備を施工する計畫なり而して此の他醫院、小學校、實科女學校、實業補習學校、口語學堂、圖書閲覽所及社宅の設備あり居住者約八百餘戶、千七百餘人あり

▲交通は其機關として鐵道、遼河及輕鐵あり元來遼河は鐵道未開以前に於て滿洲唯一の運輸機關たり而して此地は遼河沿岸の樞要位置を占め水運の天惠に浴して夙に奉天以北に於ける市場の霸者として營口とは古來密接の關係を有したるが南滿鐵道が此地に於て遼河と接觸したる以來は兩々對峙して競爭を始め其後京奉鐵道は奉天以北の滿鐵線を利用して此競爭に參加し其運賃に於て破格の割引を爲して奉天以往輸送の貨物を奪はんとし滿鐵亦た之れに對抗して運賃を引下げ大努力するの結果遼河水運は漸く衰へ京奉線は設備其他種々の點に於て滿鐵線に及ばざるを以て滿鐵線は日に優勝の地に立ちつゝあり輕鐵は日支合辦に成り東門外を起點として驛構内及び馬蜂溝に至る手押鐵道にて主として貨物運搬に使用され其運轉期間も遼河解氷中に限らるゝを以て一般利用の範圍廣からず

▲農業は當地東部方面は山岳多きも西部及南部は地味肥沃にして良田多し作物は高粱、大豆、粟を主とし其他煙草、麻、木耳、藍靛、蜂蜜の產出尠なからず而して邦人の農園は多く附屬地内に在りて其貸下面積は八十萬坪に上り森、鍜、吉見、三玉、田邊、勝廣の諸農園あり此内先鞭を着けたるは森農園の森松二郎氏にて氏は後備砲兵大佐なるが明治四十年初めに早くも滿洲農業の有利なるを看破して附屬地十三萬坪の耕地を借受け一部を菜園とし其他に高粱大豆

等を耕作せり鐵嶺の各農園は當初皆菜園及畑作のみなりしが大正元年奉天の勝廣氏は初めて水田を試作し山口運輸公司亦た驛に近き亂石山に於て之れを試み爾來各園皆之れに傚ふに到れり石油發動機の揚水を以て灌漑し種子の選擇、植附方法等種々經驗の結果徐々に好結果を見んとしつゝあり

▲工業には油房、燒鍋あり皆支那人の經營に屬す製粉は我滿洲製粉會社の外多數の支那式磨坊あるも皆舊式製法にて漸次製粉會社に壓倒せられつゝあり煉瓦製造には松茂洋行の近藤九一氏を除く外は皆支那人の製造なるが近來需要減少の爲め其產額は年々減少しつゝあり其他支那人の織布工廠あるも微々たる者なり要するに此地工業は滿洲製粉會社を除くの外猶極めて幼稚の境に在り

▲商業は由來此地は遼河の水運に依る奉天以北の大市場として營口との關係深く鐵道開通後は新に大連との聯絡生じ又近く安東を經由する日本內地との輸送關係密接となり輸出貨物には大豆、豆粕其他雜穀を主とし輸入は綿絲布、雜貨類を大宗とし水運及汽車にて輸入せらるゝ貨物は附近市場に需要せられ又各鐵道沿線及法庫門等に再移出せらるゝ奥地の開發と與に輸入益々增加の傾向あり近來此地の附屬地に過ぎざりし開原の勃興と與に此地か特產物の大集散市場として雄視せし地盤漸く縮小せられつゝありて此地の前途を悲觀する者あるも此地は開原に比して遙に優勝なる特長あり即ち鐵嶺には開放地として免照稅の特典あること營口及奥地との間に深き商的關係を有し隨ふて各種取引機關及信用ある老舖あることれなり故に奥地よりする特產物の移出に於ては鐵嶺は地形上開原の有利なるに及ぶ能はざるも奥地に對する諸雜貨の移入に於ては開原は終に鐵嶺の敵に非らず此形勢が猶當分持續せらる可きことは大正三年度に於ける兩驛の發着貨物の數量の鐵嶺發送十萬二千噸、開原同二十八萬九千噸、到着鐵嶺十二萬二千噸、開原同八萬五千噸に觀は思ひ半に過ぎん

諸營業

◉滿洲製粉株式會社

鐵嶺滿鐵附屬地（電話四一一番　電略「マ」又ハ「マン」振替大連六一三番）

營業　麥粉製造販賣

當會社は資本金一百萬圓、內拂込金額四十五萬圓の株式會社にして明治三十九年十二月八日を以て創立せらる四十年六月工場の建築に着手し四十一年六月より營業を開始し更に大正元年六月長春分工場の建設に着手し翌二年六月より運轉を開始したり爾來營業の成績孰れも良好にて現在の生產高は鐵嶺工場一日一千六百袋、長春工場二千四百袋、計四千袋なり原料には長春以北雙城堡以南の東清鐵道沿線地方より輸入する滿洲產を用ひ其製品は紅龍及黃龍の二種にて品質は色澤純白ならざるも粘着力強くして却て大に滿洲土人の嗜好に適し遼陽以南の各地は全く其勢力圈內の仕向地として販路日に擴張され北は露國製粉を驅逐し南は上海よりの輸入品に向ふて大奮鬪を試み日に痛擊を加へつゝあり當會社の大正四年度上半期決算に據れば利益金二十三萬三千二百六十四圓十一錢、損失金十八萬九千六百十九圓十四錢、差引純利益金四萬三千六百四十四圓九十七錢、前期繰越金一萬七十五圓三十三錢、計金五萬三千八百二十圓三十錢、而して其處分は法定積立金二千二百圓、別途積立金二千圓、固定資產償却準備金八千圓、株主配當金二萬二千五百圓(年一割)役員賞與金四千圓、後期繰越金一萬五千一百二十圓三十錢なり當期は歐洲戰亂の影響を受け粉界未曾有の波瀾に遭ひたるも猶此の好成績を擧げ得たるより觀れば會社の前途は太だ有望なり猶會社は事業の繁盛に伴ひ本年度に於て更に株金十萬圓拂込の豫定なり

取締役社長　吉村鐵之助
專務取締役　中井國太郎(人事參照)
取締役　安部幸之助　染谷濱七
　　　　岩崎清七
監查役　淡中孝八郎　田邊熊一
長春分工場　長春北二街　(電話四一四番)
東京出張所　東京市銀座三丁目一八番地

◎當會社の總株數二萬株株主數二百二十四名其多くは內地人なり此內一千株以上は二、二三五立部幸兵衛(神奈川)一、四二〇立部幸之助(同上)一、一三〇吉村鐵之助(東京)一、〇五〇中井國太郎(滿洲)一、〇〇〇岩崎清七(東京)一、〇〇〇加藤定吉(滿洲)又百株以上滿洲在留者は一〇〇、伊東小三郎(奉天)一〇〇樋太親吉(鐵嶺)あるのみ

㊞株式會社鐵嶺商品陳列館

鐵嶺附屬地東大街（電話長一三番振替大連一一四番 電略「チ」又は「チン」）

營業　內外商品見本陳列、滿蒙貿易、委託販賣、倉庫業、代辦業、其他企業

當陳列館は日露戰役後時の鐵嶺軍政官川崎氏の企畫に係り明治三十九年四月三日軍政署附屬として設立され其後軍政署の撤廢せらるゝや關東都督府の管理に歸し現社長早間氏當初より之れが企畫に參與して館長として鞅掌し明治四十一年始めて開館を見たるが大正二年五月二十九日其組織を資本金二十萬圓全額拂込の株式會社に變更したり

當館は敷地五千六百十餘坪、建坪五百五十五坪の宏大なる建築物にして元來日本商品を陳列して支那人の購買心を喚起增進するの目的を以て設立せられたるものにして出品者は主として東京、大阪、神戶に在りて常に三萬圓以上の陳列品あり即賣及卸賣をなし祭日、緣日などには支那人の來館するもの太だ多し當館は又滿蒙貿易に重きを置きて棉絲布、特產物及石炭の賣買に從事し支店を鄭家屯及洮南に設け東蒙に於ける我商權の擴張の爲め活動しつゝあり

取締役社長　早間正志（人事參照）
取締役　近藤九一　石川五郎
監査役　岡部次郎（同上）　權太親吉（同上）

㊞三井物產株式會社鐵嶺出張所

鐵嶺西門外元町一丁目　電話（長三八番 二四七番）

營業　明治、共同、東京、横濱、日本各火災保險會社代理店、滿洲製粉會社一手販賣、滿鐵撫順炭委託販賣、特產物綿絲布等一切の雜貨輸出入

當出張所の開設は明治三十八年東門外に開店せしに始まるも日露戰爭前より已に出張員ありて大豆引合の爲め營口に往來しつゝありたり商務の發展と與に四十一年現在所に移轉せり開原、四平街、鄭家屯に出張員を常置す

出張所長　佐々江嘉吉（人事參照）
所長代理　宮崎平一
開原出張員　松本久五郎

四平街同上　高野幹
鄭家屯同上　田中左吉

◉横濱正金銀行鐵嶺出張所

鐵嶺西町二號地　電話｛長七五番 主任室／長三六番 營業室／長三二番／長二六番 主任社宅／一六番 行員社宅｝

營業　一般銀行業

當出張所は明治三十八年八月の開設にして特產物の出廻時期に際しては開原に派出所を設置す

主任　武内和吉（人事參照）
主任代理　三崎市太郎　同　岡部丈一

◉鐵嶺電燈局　鐵嶺北町三號地

當電燈局は資本金十一萬圓の日支合辦組織にして初め清和公司の原口聞一氏等當公司の重役と商議し明治四十三年九月營業を開始せり燈力は五千五百燈にて城内外に點燈す開業の初年より引續き年六分内外の收益を揚げつゝあり

主任　松岡勝彥（人事參照）

◉合資會社鐵嶺銀行　鐵嶺西門街五三號地（電話三四番　電略「テキ」）

營業　一般銀行業

當銀行は明治四十一年六月の創立にして無限責任社員權太親吉、尾池福太郎、江村傳三郎、早間正志、近藤九一五氏の合資組織にして資本金五萬圓、内權太氏の出資七分以上を占む利益の總てを積立て基礎の鞏固を圖れり奉天、撫順、本溪湖、安東縣に爲替取組先を有す

頭取　權太親吉（人事參照）
支配人　原福太郎

◉株式會社鐵嶺實業銀行　鐵嶺敷島町二丁目三四號地

營業　一般銀行業

當銀行は大正二年八月十二日の創設にして初め鐵嶺信託會社と稱せしが大正三年十月二日銀行業に變更すると同時に現名稱に改めたり資本金五萬圓、內拂込濟一萬七千五百圓にして積立金千二百五十圓を有せり創立日尚淺きも營業の成績良好にして大正四年度上半期に於ては日支交涉事件に伴ふ經濟界の動搖

ありしに拘らず創立費金千八百十六圓四十五錢を加へて純利益四千十八圓五十八錢を計上して株主に年二割を配當したり

取締役社長　森本文吉（大事業家）
取締役　南鐵猪之吉　三浦　謙吉
　　　　中西五三郎　藤堀喜太郎
監査役　三宅玉次郎　佃　守次郎

▲當會社の五十株以上の株主は

三〇五　南鐵猪之吉（鐵道）
一〇〇　森本　文吉（同上）
一〇〇　三浦　謙吉（同上）
一〇〇　三宅玉次郎（同上）
八〇　中西五三郎（同上）
八〇　藤堀喜太郎（同上）
六〇　林　熊太郎（同上）

● [illegible]

[illegible]

營業　硝子製造

營業所は明治三十八年六月一日の設立にして資本は

鹿島久米民之助南氏の合資組織にして日本實業[illegible]事業者を勧したりしが三十九年十一月二十六日現名稱に改めたり外國煉瓦製造し着々販路を擴張しつゝあり

主任　石井留二（大事業家）

● 樺太商會　[illegible]

營業　[illegible]

當商會は個人營業にして明治三十二年始めて北京に開設すしが同二十七年舊日に移し三十九年四月現樺に來轉せり

營業主　樺太　商吉（大事業家）

大泊樺村二德町支店　主任　宍澤三郎六
樺太市街支店　主任　仙波　倉
大泊支店　主任　江村信二郎
真岡市支店　主任　矢澤有壯次　（電話）

● 森木商會 （鐵嶺[illegible] 電話三二八番）

營業 [illegible]

當商會は[illegible]

店せしが四十年現地に來轄せり

營業主 森木 文吉（人事參照）

● 波多江商會 （鐵嶺敷島町 （電話四八番））

營業 石炭販賣

當店は個人經營にて大正元年十一月の開設なり

營業主 波多江福太郎 福岡縣糸島郡[illegible]波多江村、明治九年三月生、本人ことし三十九歳

● 松茂洋行 鐵嶺日の出町二丁目（電話四二一番）

營業 煉瓦製造

當洋行は個人經營にして明治四十一年五月の開設なり

營業主 近藤 九一 愛媛縣新居郡[illegible]村大字[illegible]明治七年七月生、本人ことし三十[illegible]歳

● 日升洋行 鐵嶺敷島町一丁目[illegible]（電話[illegible]二番）

營業 銃砲火藥、木材販賣、並對支那官憲及陸軍諸用達

[illegible]

[illegible]

て芝罘に[illegible]せしが[illegible]に轉じ鐵嶺に遷へり現業を

營みて今日に及べり鐵嶺に於ける邦商中の最先著た

り

營業主 野崎權次郎（人事參照）

支配人 戸田吉太郎

奉天支店 驛前鐵路大街 主任 松浦 吉藏

開原出張所（現通店）[illegible]大街 主任 前川忠六

● 晶山洋行 鐵嶺城内（電話四三二番 振替大連一四四三番）

營業 綿絲布輸入

當洋行は個人經營にて大正元年十一月二十一日の開設なり

營業主 山田 [illegible]政 [illegible]二十七歳

[illegible] 主任 富田 [illegible]吉

● 松岡洋行 鐵嶺城内[illegible]（電話四七四番 振替大連一三五七番）

ありしに拘らず前期繰越金千八百十六圓四十五錢を加へて純利益四千十八圓五十八錢を計上して株主に年二割を配當したり

取締役社長　森本文吉（人事參照）
取締役　南畝猪之吉　三浦琢磨
　中瀬庄三郎　能地龜太郎
監査役　三宅玉次郎　佃習次郎

▲當會社の五十株以上の株主は

三〇五　南畝猪之吉（鐵嶺）
一〇〇　森本文吉（同上）
一〇〇　三浦琢磨（同上）
一〇〇　三宅玉次郎（同上）
八〇　中瀬庄三郎（同上）
八〇　能地龜太郎（同上）
六〇　林熊太郎（同上）

◉東亞煙草株式會社鐵嶺出張所

鐵嶺城内鼓樓北（電話四五番）

營業　煙草販賣

當出張所は明治三十八年六月一日の設立にて初め江副鹿藏久米民之助兩氏の合辦經營にして日本官製煙草專賣處と稱したりしが三十九年十一月二十六日現名稱に改めたり外國煙と競爭し着々販路を擴張しつゝあり

主任　石井博二（人事參照）

◉權太商會

鐵嶺西門外大街五四號地（電話四二七番　振替大連四〇二番）

營業｛土木建築請負、特產物貿易、建築材料、麥粉、精糖、燐寸、綿糸布輸入、英米トラスト煙草會社特約店、大正生命、帝國生命、上海華洋人壽、英國サン火災、同ニユージーランド保險會社代理店

當商會は個人經營にして明治三十三年始めて北京に開設せられ同三十七年營口に移り三十九年四月現地に來轉せり

營業主　權太親吉（人事參照）
支配人　稲生安吉
長春城內三道街支店　主任　穴澤喜壯次
同新市街支店　主任　仙波介
大屯支店　主任　江村傅三郎
范家屯支店　主任　穴澤喜壯次兼管

森本商會　鐵嶺數島町（電話二二八番）

營業　土木建築請負、特產物貿易

當商會は個人經營にして初め明治三十八年營口に開店せしが四十年現處に來轉せり

營業主　森本　文吉（人事參照）

波多江商會　鐵嶺數島町（電話四八番）

營業　石炭販賣

當店は個人經營にて大正元年十一月の開設なり

營業主波多江福太郎　福岡縣糸島郡波多江村、明治九年三月生、夫人みき三十九歲

松茂洋行　鐵嶺日の出町二丁目（電話四二一番）

營業　煉瓦製造

當洋行は個人經營にして明治四十一年五月の開設なり

營業主　近藤　九一　愛媛縣新居郡金子村大字新須賀　明治七年七月生、夫人こま三十歲

日升洋行　鐵嶺數島町一丁目三號地（電話四二一番）

營業　銃砲火藥、木材販賣、並對支那官憲及學堂諸用達

當洋行は個人經營にて經營者は明治三十六年より鐵嶺に來りて初め雜貨商を營み日露戰爭中捕虜となつて芝罘に追放せられ平和後再び鐵嶺に返へり現業を營みて今日に及べり鐵嶺に於ける邦商中の最先者たり

營業主　野村龍次郎（人事參照）

支配人　戶田吉太郎

奉天支店　驛前鐵路大街　主任　松浦　吉藏

開原出張所（銃砲店）孫家大街　主任　前川忠六

恭山洋行　鐵嶺城內（電話四三三番　振替大連一四四三番）

營業　綿絲布輸入

當洋行は個人經營にて大正元年十一月二十一日の開設なり

營業主　山田　熊致　愛知縣海部郡甚目寺村新居屋　二十七歲

哈爾賓　主任　富田　晉吉

松岡洋行　鐵嶺城內六號地（電話四七四番　振替大連一二五七番）

營業　綿絲布、足袋、雜貨

當洋行は個人經營にて明治三十九年の開設なり法庫門、范家屯、長春、吉林に支店を有す

營業主松岡佐右衛門　愛知縣中島郡萩原町、三十歳、夫人こと二十七歳、女一名

法庫門主任　宇佐美闕治

范家屯主任　松岡佐吉

長春城内主任　松岡佐吉

吉林支店主任　松岡佐吉

◉豐生洋行　鐵嶺櫻町二丁目

營業　日本官煙代理店

當洋行は個人經營なり

營業主　野田美代吉　滋賀縣加茂郡日野村大字日田、明治六年二月六日生

◉中瀨吳服店　鐵嶺櫻町二丁目四二號地（電話一四〇三番　振替大連一〇四六番）

營業　吳服

當店は個人經營にて明治三十九年七月開設す本業吳服の外に四一油房を明治四十一年十一月より千金寨高砂町に開始經營せり

營業主　中瀨庄三郎　滋賀縣甲賀郡水口町、安政三年一月十七日生、夫人きく四十二歳、男二名

油房主任　岡松　虎市

◉熊地商店　鐵嶺櫻町二丁目警第三十六號（電話一五二番　振替大連七三一番）

營業　陸軍用達、和洋酒食料品一切、莨類、和洋筆紙墨類、米穀履物類、小間物類、化粧品、和洋雜貨及特産物貿易

當商店は個人經營にて明治四十年一月開設す

營業主　熊地龜太郎　廣島縣豐田郡西生口村、四十歳、夫人ゆみ三十七歳、女一名

◉力武熊太郎商店　鐵嶺東大街（電話一四七番）

營業　朝鮮米、食料品一切

當商店は個人經營にて明治四十年一月の開設なり初め力武出張所なりしが四十四年獨立經營となる

營業主　力武熊太郎

◉三盛商會　鐵嶺元町二丁目（電話一三八番）

營業　綿、石炭

當商會は個人經營にて明治四十年八月の開設なり

營業主　廣岡勝三郎　大分縣大分郡大分町、明治八年七月生、夫人きみ三十九歳

●藤飯洋行　鐵嶺櫻町二丁目（電話長二四番）

營業　金物雜貨

當洋行は個人經營にて初め營口舊市街にて營業せしが明治四十一年現所に移轉せり大連に支店あり

營業主　藤飯長太郎　大阪府三島郡富田村、明治四年九月生、夫人しう三十七歳、男二名

●裕和盛　鐵嶺大手町三丁目（電話長一四六番）

營業　支那反物、西洋雜貨、洋酒、食料品、貸家

當店は個人經營にして明治三十九年春の開設なり營業主は日本に歸化せり（營口裕和盛參照）

營業主　周鶴林　明治七年八月二十七日生

●鍛農園　鐵嶺滿鐵附屬地

營業　農園

當農園は個人經營にて明治四十五年の開設なり目下水田三十町歩を有し成績頗る良好なり

營業主　鍛治　鳥取縣鍛治町四五番地、明治七年六月生、夫人のぶ二十三歳男二名、女一名

●二十五農場　鐵嶺鐵道附屬地內馬蜂溝

營業　農園

當農園は大正二年の春の創業に係り二十三馬力の蒸汽エンヂンを以て遼河の水を揚げて灌漑し十萬餘坪の畑地を水田に改造するの目的にて投資額既に二萬餘圓に達し更に一萬圓を投じて理想的農園となさむ計畫なるが昨年度は一反歩の收獲籾三石五斗を得たり

營業主　三浦琢磨　廣島縣二見郡板木村　四十五歳

●松華ホテル　鐵嶺敷島町二丁目（電話長一一〇番）

營業　旅館

當ホテルは鐵嶺第一流旅館にして棚田太藏氏の經營なりしが大正四年十月現經營者之れを繼承せり

營業主　橋本政次郎　京都市下京區西洞院通り高辻下る高辻西洞院町、明治六年十一月生、夫人まき四十四歳女一名

●近江屋旅館　鐵嶺日の出町（電話一〇一番）

營業　旅館

當旅館は個人經營にて明治四十年一月十日の開設なり松華ホテルに併はせて高等旅館なり

營業主　三宅玉次郎　岡山縣淺口郡玉島町八三八番地明治十四年二月生、夫人なし三十四歳、女一名

●鐵嶺時報　鐵嶺元町四丁目七二號（電話一一六番）

營業　新聞發行

當時報社は明治四十四年八月一日の創設にして個人經營なり經營者は明治四十年鐵嶺に來住し初め特産物販賣業を營みしが鐵嶺商況日報の四十三年に廢刊し鐵嶺新聞亦四十四年一月廢刊するに及び同年八月より當時報を發行經營せり當報は一二面（廣告）は活字三四面（記事）は鐵筆版の小形日刊新聞なり

社長　西尾信　鳥取縣

●遼東新報鐵嶺支局　鐵嶺元祿町一七號地

營業　新聞販賣並に通信

主任　末廣榮二　東京市牛込區新小川町二丁目、明治五年六月生、夫人あき三十四歳

●滿洲日日新聞鐵嶺支局　鐵嶺柳町一丁目

營業　新聞販賣並に通信

主任　下村修　高知縣高知市金子橋新町文久二年一月生

●滿洲新報鐵嶺支局　鐵嶺櫻町二丁目（電話六一番）

營業　新聞販賣並に通信

本社は營口に在り其創立と與に鐵嶺通信員を置かれしが明治四十三年五月現主任の就任せしより當支局を開設せり猶現主任は大正二年四月より月刊雜誌滿洲野を發刊せり

支局主任　迫田釆之助　廣島縣御調郡末吉村字諏訪明治十七年三月生、夫人おち二十四歳

官衙、公共機關及團體

●鐵嶺領事館　鐵嶺附屬地東及北南大街の交叉附屬地突略地（電話四一五番）

△明治三十九年七月卅一日初めて鐵嶺に奉天領事館出張所を設置さる同年八月十五日同分館に變更四十

一年九月十日本館に昇格して今日に至る歴代領事は三十九年副領事天野恭太郎氏著任、四十一年五月副領事村山正隆氏著任、四十二年八月副領事森田寛藏氏著任、大正三年十月現任領事官補著任せり

▲當領事館の管區は海龍、鐵嶺、開原、遼源、昌圖奉化、康平の諸縣に跨り管內に於ける鎖雜なる日支交渉案は常に絶わず領事館警察署は鐵嶺、開原、昌圖、法庫門、通江口、掏鹿、大荒崩、北山城子、朝陽鎭、鄭家屯の十箇處に出張所を置けり

▲當領事館は大正四年十月新廳舍の工事竣成と同時に敷島町より現在所に移轉せり其工費約四萬五千圓なり

領事代理　領事官補　酒勾秀一（人事參照）
書記生　榑松宇平治　通譯生　河野小七郎

◉鐵嶺居留民會（鐵嶺敷島町四丁目）（電話一六五番）

▲當民會は領事館令第七號に基き明治卅九年八月十五日創設されたり始め會長、副會長及行政委員二十名の名譽職及理事一名、書記若干名の有給職員を置き土木衞生教育其他居留民共同の利益に關する事項を審議せしめたるが四十一年十二月規則を改正して會長、副會長を廢し議事機關として二十名の名譽職議員を置き理事をして專ら會務を處理せしむることに變更せり四十三年三月更に之を改正し名譽職々員十四名中より會長、副會長を互選し會長は有給職員の理事及書記を指揮して會務を處理することゝして今日に至れり而して當民會の設立以來經營せし事業は左の如し

一、明治三十九年九月鐵嶺公立病院を開設す
一、同四十一年五月病院の經營を滿鐵會社に引繼ぐ
一、同四十年四月公立鐵嶺小學校を開設す
一、大正元年九月小學校を滿鐵會社に引繼ぐ
一、明治四十一年五月鐵嶺消防組を組織す

▲大正三年九月末日に於ける當民會管內の人戶及口數を掲ぐれば日本人戶數三百二十八戶、人口男五百五十三名、女五百五十五名、朝鮮人戶數三戶にして人口は男七名、女三名なり又當民會の大正四年度下半期に於ける豫算は第一種賦課金一千六百九圓二十錢、第二種賦課金三百九圓九十六錢、第三種賦課金九百二十七圓十八錢、健康診斷料七百五十圓、雜收入百圓、特別收入八百五十五圓四十四錢、前期繰

越金四千五百三十五圓八十一錢、計九千八十七圓五十九錢にして其支出は役所費金一千七百九十三圓二十錢、教育費金六百三十圓、衞生費一千五百十三圓四十錢、消毒費金三百四十圓、豫備費四千八百十圓九十九錢なり

會長　權太親吉（人事參照）
副會長　松岡勝彦（人事參照）
理事　上田武弘
議員
佐々江嘉吉（人事參照）　近藤九一
武内和吉（人事參照）　石井博二（人事參照）
榊増介　増山音松
森本文吉（人事參照）　能地龜太郎
松岡佐右衞門　鹽田重雄
佃習次郎　河田貞吉

◉本派本願寺鐵嶺出張所　鐵嶺敷島町

▲明治卅七八年日露戰役の際軍隊慰問として現主任來鐵し戰役終了後も引繼き布教に著手し假布教所を附屬地陸軍バラック内に設置せり是れ當出張所の開起なり四十二年五月本願寺出張所と改稱し同時に現地に移轉す猶開原は當出張所々管にして現主任は時々出張布教す

主任開教師　石黒慶（富山縣、五十二歳　男一名、女一名）

◉鐵嶺慈善團　鐵嶺敷島町本願寺内

▲當慈善團は貧民救濟の目的を以て明治四十一年本願寺の附設事業として權太氏の斡旋に依りて成立せり目下基金五百圓を有し無辜の行路病者其他の薄命者を救濟しつゝあり

主任　石黒慶親

開原

概説

▲開原驛は大連を距ること三百五哩九分にて略ぼ鐵嶺昌圖の中間なる通稱小孫家臺に在り其東方は遙に南北に連亘せる一連の山脈を負ひ西南北の三面は一帶の平野にして清江此間を西流して中固附近に於て遼河の本流に合す開原城は開原驛を距る東北十八支里の清河の右岸に在り普通開原と稱するは多く驛所在地の小孫家臺及附屬地を指し或は之れを鐵開原と稱して開原城と區別す

▲此地は高勾麗渤海時代に於て既に著名の都市となり今の開原城は明の洪武二十五年頃の築造に係り清河其南を流れ黃龍岡其北を繞り山河襟帶の要害を占む明時代にありて其繁榮遼陽の都司城に匹敵するの勢ありしが清朝に至りて降りて縣城となり單に北方邊塞の固めとして其存在を保つに及び人煙漸く薄く後ち鐵道附屬地の逐年發展するに伴ひ益々衰退を來たし現今に至りては僅かに其舊態を存するのみとなれり

▲驛の所在地たる小孫家臺及び鐵道附屬地一帶は素と荒寞たる原野なりしが露國は早くも此地の有望なるを看取して廣大なる鐵道附屬地を占取し東清鐵道の進工と與に各種の工事起りたる爲め支那人漸く來聚して一部落を爲したるも露人の退却に際し其全部を燒拂はれたり滿鐵會社の經營に移るに及び鐵道は廣軌に改築せられて其輸送力の增大せられしと共に從來鐵嶺又は當城內に集散せし海龍所產の特產物は當驛附屬地に輻輳し其數量年と共に加はり從て此處に居を構へ各種の商業に從事するもの漸く續出し從來鐵嶺の一附庸に過ぎざりし此地は漸次鐵嶺の繁榮を奪ふて主僕其位置を顚倒しつゝあり其發展する程度の猛烈なること全線第一にして殆ど奇蹟と謂ふ可き程なり

▲氣候は大連を去ること漸く遠くして蒙古內地に接するを以て大陸的性狀を帶び一年を通じて最高氣溫二九、六最低零下一七、八に及ぶ住民は城內は二千五百戶、二萬人、附屬地は大正四年十月末に於て日本

人三百六戶、九百四十一人、支那人一千二戶、七千七百二十四人、外國人男一人、計八千六百六十六人なり附屬地の人口は夏季に於て減少し冬期の特產物出廻期に向ふて漸次增加し其盛季には優に一萬人に上ることあり而して官衙は城內には開原縣公署、防守尉衙門及巡警局あり附屬地には鐵嶺警務署開原支署、郵便局、守備隊あり又滿鐵地方事務所ありて附屬地に於ける地方事務を管掌す

▲滿鐵附屬地は總面積百八十四萬坪此內市街地として貸附けたる者十七萬二千餘坪に上る此地が大豆聚散地として異常の勢力を現はし來るより會社は之れに應ずる大規模の經營案を立て明治四十一年より工事に著手して延長一萬四千間の道路を作り下水溝を備へ又井戶六個を掘りて給水に備へ其他墓地、火葬場等皆具はれり會社は又大正二年度に於て市場敷地の地均しを施こし貸倉庫を建築し公園は其設備未完なるも敷地一萬九千坪を有し漸次施設を加へんとしつゝあり會社が此等の市街經營の爲めに費やす處は大正三年度末迄に三十三萬圓を超ゐたり會社は更に大正五年度に於ては將來の發展に顧み驛の北一里の開原川を水源として水道敷設の計畫中なるが目下の應急策として驛のタンクを利用して宿舍方面の給水を開始せり其他會社の施設には小學校、實業補習學校、公學堂、圖書閱覽場、幼兒運動場ありて其設備至れり

▲邦商の此地にある者皆特產物に關係し三井物產、日清豆粕會社、小寺洋行、松隆洋行、湯淺洋行、山口運輸公司は各支店又は出張所を設置し居れり商業機關として邦人は開原商業組合、支那人は華商商務會を組織せり金融機關は橫濱正金銀出張所派出所、黑龍江官銀號、奉天官銀號、交通銀行の出張貸付あるも近年取引せらるゝ貨物の數量價額は著しき巨額に達し從て金融活潑を極め現在の金融機關にては其需要を充たす能はざるの現狀なるより朝鮮銀行も亦た大正四年九月より其派出所を設置したり

▲大正三年度に於ける開原驛到著貨物は八萬五千八百四十噸にして此內主たるは食鹽石炭にて麥粉、綿糸布、麻袋、木材、石油、砂糖、金物等之れに次ぐ又發送は二十八萬九千七百八十四噸にして此內大豆は其大部分を占め餘は豆粕、高粱、粟なり斯く當

地は移入品として取扱ふ處は言ふに足らず又產業として他に移出するは豆粕あるのみ而も猶異數の發達を見るは農工業の如き基礎的產業の勃興せしに因るに非ずして唯だ交通機關の轉化上物資需給の調節地として恰好の地位を占むるに依るものにして從來鐵嶺は近く馬峯溝を控へ是等奥地市場と中央市場との間に介在し專ら物資需給の調節に任じ其繁榮を見しが時勢の推移と四圍の事情とは漸次其地位を當地に奪はれ是等奥地に集散する各種貨物の當地を經由すること年々其數を增加せるに反し鐵嶺は益す減少するの現象を來たせり此現象は特に移出貨物に於て然りとす而して移出貨物は大豆の世界に於ける地位の變動せざる限り大豆聚散地として開原の價値は今後加ふるあるも減ずること無かる可し關東都督府は夙に此形勢を察し開原に重要物產取引所を設置するの意ありて大正四年四月十二日勅令第五十四號を以て關東州及南滿鐵道附屬地內に設立する重要物產取引場に於ける取引の方法及擔保に關しては關東都督の定むる處に依る旨を公布せり爾後未だ之れに對する府令の發布なきも取引所設立案は既に確定して所長以下も內定せり近く信託會社（株金五十萬圓）の創立するを待ちて大正五年一月より其開所を見るに到る可し人或は開海鐵道の開通の曉には開原が唯通過驛となる可しとて其前途を悲觀するあるも開原取引所の設置は大豆集散地としての重大なる開原の位置を裏書きする者にして此の悲觀は則ち悲觀と謂ふ可し

諸營業

● 滿洲電氣株式會社　開原附屬地第三區第四十五號地（電話一二〇番）

營業　電燈及電力供給

當會社は資本金十五萬圓（四分の一拂込）の株式會社にて（株式內譯日本興業側七分、滿洲各地側三分）外に正金銀行特貸資金五萬五千圓あり大正元年九月大連、營口、鐵嶺其他滿洲各地及大阪日本興業會社を代表する各有力者より開原及公主嶺の附屬地に電燈及電力の供給を目的とする營業を出願せし處同年十一月十六日關東都督府より許可を得て同三年三月三十日現會社成立せり同時に開原の電燈工事に著手し

同年十月四日工事落成し同二十五日より開業するに至れり而して公主嶺の電燈工事著手は大正四年十一月迄延期の許可を得たり發動機は獨逸オットー會社製百十五馬力の吸入瓦斯機關にて又發電機は瑞西國ブラウンボベリー會社製交流七十五キロヴォルトアンペヤーを豫備共に二臺装置せり而して電燈需要は大正四年六月末に於て戸數二七六、燈數一、八七六十燭換算三、一〇九燭にして大正四年一月より同六月に至る第三期決算には特貸に對する七分利子を控除したる純益一千二百五十三圓五十六錢を得たり開原の發展と與に會社の營業は次第に有利となる可し

取締役社長　權太親吉（人事參照）
常務取締役　關甲子郎（同上）
取締役
天春又三郎　岡部次郎（同上）
內田鎮一（同上）　菊池吉藏（同上）
監査役
鈴木春樹　河田昂
倉岡岩（同上）

◉三井物產會社鐵嶺出張所開原出張員

開原第一區（電話三番）

營業　特產物、綿絲布、雜貨、保險、其他代理業

當出張員は明治四十二年秋始めて鐵嶺出張所より特派せられ特產物時期のみ出張し來りしが四十四年八月より常設となれり

出張員松本久五郎　大阪市北區河内町、三十二歳（三井北京留學生出身）

◉正隆銀行開原支店

開原大街一號地（電話長二〇番　電略「セ」）

營業　不動產及荷爲替、大豆特產物囤豆、及倉庫劵兩替、其他一般銀行業務

本店は大連に在り當支店は大正二年十二月の開設なり（大連正隆銀行參照）

支店長　林國彦（人事參照）

◉朝鮮銀行奉天出張所開原派出所

開原附屬地第三區第三號（電話長一〇〇番）

營業　一般銀行業

本店は朝鮮京城に在り當派出所は大正四年九月二十日の開設にして奉天出張所に隷屬す

主任　都留昭（人事參照）

◉小寺洋行開原出張所　開原孫家大街慶泰祥内（電話圓一三三番）

營業　特産物

明治三十九年十一月鐵嶺に小寺出張所を設け安田佳藏氏主任として來任し開原をも兼營せしが大正二年十二月出張所を鐵嶺より開原に移つし開原より鐵嶺を兼管することゝなれり當出張所の管轄は南郭城子より北郭家店に到る間一帶に亘る

主任　安田佳藏　兵庫縣有馬郡三田町ノ内三田村士族、三十六歳、夫人まつ三十一歳、男二名、女二名

◉倉岡岩商店　開原鐵道附屬地第二區第二號（電話圓一〇三番　一〇五番）

營業　高粱酒釀造販賣、質、農園

當店は個人經營なり經營主は明治四十年渡滿鐵嶺及開原に於て商業を營み同年十月鐵嶺を引上げて開原に移つり益和湧燒鍋、益和當質舖、及農園を經營し大正二年秋現所に新築移轉せり

△益和湧燒鍋は高粱酒を釀造し一ヶ年生産三十六萬斤に上り開原附近村落及大連に販賣す

△益和當質舖は純然たる對支那人の質業なり

△農園は附屬地内に十八萬七千九百五十坪を貸下げ純支那式の小作に依りて高粱、大豆、粟、野菜、小麥、小豆、糯、粟等の耕作をなせるが大正四年度よりは自作さすることゝし既に同年度に入りて洋七千圓餘を投せり現在日人二名、支那人七十九名を使役す

營業主　倉岡岩（人事參照）

◉日清豆粕製造會社出張所　開原孫家南街　電話圓二番

營業　特産物

當出張所は明治四十二年開設され出張員常に駐在せり現主任は四十三年十一月就任し四十四年秋現在所に新築移轉せり

主任　柳田宗三郎　茨城縣笠間町、三十二歳　夫人八重二十歳

◉天壽堂藥房　開原商埠大街（電話圓三五番　振替大連二五四番　電略「ム」）

營業　藥種

當藥房は個人經營にて明治四十三年六月の開設なり陶鹿、山城子、双廟子、疙疸子等に支店を有す營業主は開原に於ける斯業の成功者を以て目せらる

店主營業主　村田保之

外店員　五名

◉角田出張店　開原車站街（電話局二二番）

營業　特産物

本店は大連に在り角田庄造氏の個人經營なり當出張所は四十二年六月開設す（大連角田庄藏商店參照）

出張所　主任永登政太郎　大阪市南區東清水町、三十七歳、夫人たね子三十二歳

◉松隆洋行　開原大街　電略「マツ」（電話局六番）

營業　特産物、大正生命保險代理、大阪朝日、安東新報販賣

當洋行は明治四十年十月の開店にして業務擴張と與に大正四年七月現在新築の家屋に移轉す遼陽支店、四平街、郭家店、公主嶺、鐵嶺、新臺子に各出張所あり

營業主　松尾直次　佐賀縣杵島郡荒木村字川口　三十六歳、夫人さた三十六歳、男三名

◉岡部商店　開原第一區五號地（電話局五六番）

營業　特産物

當商店は個人經營にて大正元年十一月鐵嶺より現在所に轉住して開業す大正三年一月四平街に出張所を設置す

營業主　岡部直（人事參照）

四平街出張所　主任　松岡武作

◉友信洋行　開原鐵道附屬地第二區（電話局三八番）

營業　大豆、豆粕、雜穀、其他輸出入、木材及建築材料販賣

當洋行は個人經營にて明治四十五年七月の開設なり大正四年秋現在所に新築移轉せり

營業主　佐竹令信（人事參照）

外店員　邦人二名、支那人八名

◉柴田洋行　開原附屬地第三區四號

營業　貸家、質、酒、及材木販賣

當洋行は大正二年四月一日の開設にして個人經營なり青島早霧町に支店ありて材木販賣を專業とせり

營業主　柴田喜代助　香川縣高松市野方町、三十九歲、夫人まさ三十歲、男四名、女二名

◉洞益源　開原第三區第二號（電話三一番）

營業　麥粉、綿絲布輸入並に質

當店は明治四十三年の開設にして個人經營なり陶鹿北大街に支店を有す

營業主　高橋題助　秋田縣川邊郡牛島町、三十三歲、夫人たい三十一歲、男五、女一

◉三茂洋行　開原興隆街（振替大連六七八番）

營業　藥種並に雜貨

當洋行は個人經營なり經營主は明治三十九年渡滿奉天に來り衛生事務に從事し四十一年より蓋平に於て賣藥及び雜貨商を營み傍ら衛生顧問を囑託せらる四十五年七月開原に來りて開店す山城子に支店を有す

營業主　原田道之助　東京市日本橋區本船町一七番地、三十六歲、夫人なつ三十一歲

◉阪井商店　開原第一區三號（電話四二四番　振替大連一〇三四番　電略（サヌサカ））

營業　サン火災保險並に東海生命保險會社代理店　特產物輸出、諸品輸入、ニージランド及

當商會は個人經營にて明治四十年二月開設す元と特產物商專門なりしか同四十年春より輸入諸品を取扱へり

營業主　阪井三八　東京市麻布區我善坊町二一番地士族、三十四歲、夫人春子二十四歲、女一名、男二名

◉外に　公益公司、雜穀商（松井倉吉）山口運輸公司出張所、運輸業（杉本末吉）高松洋行、雜貨、貸家業（前川忠六）豊泰洋行、雜穀商（田嶋定兵衛）松茂洋行、輕鐵業（楢田吉太郎）丸重洋行、材木及特產物商（則末穗）大東棧、雜穀、枕木（岡村茂）あり皆信用あり

◉開原市民會

▲當市民會は明治四十五年二月の創設にて開原附屬

地内に居住する本邦人の同志相計り會員相互の意志の疏通及親和を圖り其福利を相扶け進んでは官衙、滿鐵の施設及調査に資し母國各企業家の調査を補ひ開原の發展に資する所あらんとするを目的とせり目下會員廿五六名あり將來當地自治機關の階梯と見るべし

組長　山崎豊太郎

副組長　高橋　題助





公主嶺

概説

▲公主嶺は大連を距る三百九十九哩長春より西南僅に二十九哩の地點にあり奉天省懷德縣治下に屬し四周は曠茫たる平野に面す往時此地方一帶の地は蒙古達拉罕旗の所屬にして其後清朝は借地養民を名とし盛んに山東河南の漢人を移殖し蒙古旗界を開墾し初めしより漸次各地に都邑建設せられ光緒三、四年の頃に至りては八家子に懷德縣を創設することゝなれり然るに公主嶺の地たるや元と特種の產物あるに非らず又交通の要衝に當れるにも非らず東清鐵道開通前は僅かに數軒の矮屋散在せしのみにて微々たる一寒村に過ぎざりしが露國が東清鐵道を經營するに及び此地を軍事上重要地となし二百萬坪の附屬地を設立し明治三十六年停車場、機關庫兵營を始め寺院、劇場等を建設せしより支那商工業者の來集する者日に多きを加へ漸く繁榮に赴きしも當時露國官憲は是等支那國民の附屬地內に居住することを禁止せしより曠漠たる二百萬坪の地域は雜草の繁茂に委せしが日露戰役後滿鐵の經營に移るに及び四十年四月滿鐵は附屬地に對する禁制を解き同地內の宅地畑地の貸付を實施せしを以て此より各種の商店粮棧等續々として附屬地內に商舖を構へ漸く整然たる市街の觀をなすに至る之れと同時に支那街も亦迅速なる發達をなせり而して四十一年以來滿洲大豆の名聲世に知らるゝと共に內外商人の此地に入込み伊通州、懷德縣地方の大豆、高粱、豆粕の買付に從事するもの相踵て至り市況益々殷盛となり今や此地は滿鐵沿線に於ける屈指の特產物輸出市場として稱せらるゝに至れり

▲附屬地及支那街を合せ戶數約一千六百、人口八千人、(內邦人戶數六百、人口一千八百人)なり附屬地內の鐵道線路以北は露治時代の建築に係り規模太だ宏大なり線路の南は支那街と共に商業區にして每年十月末より特產物の取引期に入り日々數千輛の馬車來集して市況頓に熱鬧に赴き三、四月輸送の末期に近づくに及び復た其平調に復す此地の氣候は純然たる大陸的にして冬季往々氷點下三十度に下降するこ

とあり

▲滿鐵附屬地は沿線中の最大なる者にて總面積約二百萬坪此內宅地として貸附けたるは面積八萬八千餘坪なり會社は明治四十一年始めて工事に着手し道路延長五千三百間に達し下水溝、水道皆完備せり水道は四十三年機關車用給水タンクの餘力を利用して市街に給水を開始せり又市場、墓地、火葬場、屠畜場、公園等の設備も皆既に成り會社が此等の土木經營に費せし處は大正三年度末迄に約三十九萬圓に上る此他滿鐵會社の施設には小學校、實業補習學校、實科女學校、公學堂及熊岳城產業試驗場あり

▲大正三年度に於ける當驛發送貨物は十四萬三千四百六十九噸にして此內大豆九萬四千二百十八噸其他は高粱、包米、豆粕等の農產物なり又到着貨物は九萬六千三百十六噸にて此內主たるは石炭、綿糸布、鹽、砂糖、石油、木材、諸雜貨なり此地は元より大なる生產地に非らず又消費地にも非らず唯だ移出入貨物の中繼として特に大豆の歐洲輸出開始以來其主たる集散地として俄然發展を來たしたるも近く中間驛に於て特產物取扱を開始したる爲め移出農產物は漸次其數量を減ずるやの觀あるも移入の諸雜貨に到りて與地購買力の發達と與に年々徐々に增加しつゝあり

▲當地の主なる官衙公署は獨立守備隊司令部同第一大隊本部、陸軍衞戍病院、騎兵聯隊、憲兵分隊、警務支署、郵便局（以上日本）交涉局、統稅分局、郵便局、電報局、商務會、議事會（以上支那側）等あり市街の北方約八支里の處に公主陵あり昔時淸の公主蒙王に嫁ぐの途次此地に客死せしを以て祀ると公主嶺の名は之れに起因せりと云ふ

諸營業

株式會社公主嶺銀行

公主嶺敷島町（電話長三六番　振替大連一〇八五番　電略「コ」）

營業　一般銀行業

當銀行は資本金十五萬圓（內拂込四分の一）の株式會社にして襄輪正英氏の主宰せし匿名組合の兩替業公發號解散し其變體の後身として大正四年二月十七日を以て創設せらる株主は公主嶺在留者六分、長春其他四分を占む

大正四年八月一日より預金利息を改正し金勘定には定期六ヶ月年利六分五厘、一ヶ年七分、當座百圓に付日歩金壹錢、特別當座同一錢五厘、又銀勘定には定期六ヶ月年利五分、一ヶ年五分五厘、當座銀百圓に付日歩銀六厘特別當座同銀九厘、とせり開業日猶淺きも漸く好況に向ひつゝあり內地及朝鮮各地に爲替取引あり

專務取締役　和田榮三
取締役　福浦重吉　同　西脇清六
同　伊関新一
監査役　蒔田與一郎　林憲隆
支配人　多田友太郎

◉公主嶺三井出張員（公主嶺東本町一丁目（電話長一三番））

營業　綿糸、特產物、雜貨商

明治四十三年十月三井洋行出資の下に輸出入業の三盛棧起りしが大正二年一月より三井洋行は三盛棧と分離して新に出張員を常置することゝなり出張員は長春出張所より派遣せらる

出張員　小松川寛治　東洋協會學校出身、東京府荏原郡大井町三二番地、夫人ふみ子、二十八歲、男二名

◉海江田兄弟商會（公主嶺鮫島通東雲町一丁目（電話長八番 電話九番））

營業　食料雜貨、特產物輸出媒介

當商會は海江田新之亟、同榮之助、同直議三氏の合名經營にて新之亟、直議の二氏は日露戰爭の際軍隊酒保として隊と與に明治三十九年九月公主嶺に來り軍隊用達及び雜貨を營業し四十一年より特產物の內地輸出を兼營せり四十三年榮之助氏臺灣より來店し爾來兄弟三人協同して店務を視る奉天小西邊門外、大連軍用地區に各出張所あり又附屬地に六萬坪の農園を三年間經營せしも四十四年市街地に變改されし爲め之れを滿鐵に返還せり

代表者　海江田新之亟（人事參照）

◉福博洋行（公主嶺東雲町一丁目二號地（電話長四八番 振替大連四一八番））

營業　特產物仲繼、煉瓦製造販賣、銃砲火藥輸入並に雜貨販賣

當洋行は個人經營にして營業主は明治三十九年來公

し雜貨業を開設せり四十一年公主嶺日本煉瓦製造所を公主嶺河岸に創設し十五萬燒き十三萬燒きの二登りの窯を設置せり製品は赤煉瓦にして主として滿鐵其他官衙に供給す明治四十三年より特産物取扱を開始せしも其大部分仲繼業なりしが本年より内地直輸出を開始せり又大正三年五月より四平街に興正洋行を設け銃砲火藥の輸入販賣を開始す

營業主　箕輪　正英（人事參照）
出張所　四平街興正洋行　銃砲火藥輸入販賣店

◉和田洋行　公主嶺花園町二號地（電話園三九番　振替大連二五六番）

營業　吳服太物、古着古物、家屋の賣買貸與及質業
營業主　和田　榮助　大阪市南區安堂寺橋通四丁目二三番地、五十二歲、夫人きぬ三十八歲

當洋行は個人經營にて明治四十年一月支那街に開設し四十一年十月現處に移轉せり

◉高島屋洋行　公主嶺敷島町一丁目

營業　陸軍用達、味噌製造販賣及農園

當洋行は個人經營なり經營主は明治四十二年四月滿洲獨立守備司令部の開設と與に同部に隨行して同年六月來公し當洋行を開設せり主として軍隊及其他に味噌を供給するの外附屬地内に農場七萬坪を經營せり

營業主　田中　久助　滋賀縣高島郡新儀村、三十七歲、夫人りき三十二歲、男二名、女一名

◉合名會社大矢組公主嶺農場　公主嶺附屬地内

營業　農園

當農場は明治四十二年三月の開設にて大連大矢組に隷屬す果樹園三十七萬坪牧草場四萬坪あり其他は雜穀にて大豆、大麥、粟、野菜類を植へ大麥は軍隊に其他は市場にて販賣す大正三年度に於て水田一反歩を試植し種子は北海道赤毛を取りしも不成功に終れり初め農學士小松正一氏等を聘せしも經費不引合の爲め解傭して自ら監督經營すること〻せり目下馬十一頭、事務員三名、常用支那人十名、臨時支那人夫五十名を使役し耕作用器械は米國式、除草用器械は露國式を用ひ鋤等は多く支那式を採用せり

（大連大矢組參照）

主　任　長尾由太郎　大阪市東區谷町三丁目、五十四歳 夫人さき五十三歳

◉山口運輸公司出張所　公主嶺附屬地（電話四三三番）

營業　運輸

當出張所は山口合名會社大連支店の管轄に屬し土地に於ける斯業界中最も優勢なり現主任は明治四十年十月大連支店詰めとなり爾來奉天、遼陽、鐵嶺各出張所勤務を經て四十五年六月現任に就けり

主　任　田中　精一　兵庫縣出石郡出石町内町八番屋敷士族、勲七等、明治十四年十一月十九日生、夫人きく二十七歳、子女三名

◉荒井組公主嶺出張所　公主嶺驛町（電話二八番）

營業　土木建築請負

當出張所は大連荒井組の出張所にして明治四十三年三月開設す初め五代陶輔氏主任として在勤せしが四十五年二月安東縣に轉任するに及び畠山現主任之れに代はり引繼き在任主として滿鐵の請負事業に從事す當地泰平橋及滿鐵丁號宿舍其他土地に著名なる建築工事には同組の手に成りしもの多し

主　任　畠山源五郎　宮城縣登米郡米川村、三十九歳 夫人しか三十七歳

◉丸福洋行　公主嶺大和町一丁目（電話四一一番　振替五九番・電略「〇ブ」）

營業　陸軍用達、食料和洋酒、世帶道具、唐物西洋雜貨販賣及東海生命保險會社代理店

當洋行は個人經營にて營業主は明治三十九年八月來公し合資的の日本洋行を創立せしが同年十一月分離して現洋行を開始せり

營業主　福浦　重吉　兵庫縣赤穗郡赤穗町、四十八歳 夫人すが四十二歳、男一名女一名

◉丸福旅館　公主嶺花園町（電話四三一番）

營業　旅館

當旅館は初め松尾茂三郎氏の經營にて松尾旅館と稱へたるが明治四十三年濱本義太郎氏之れを讓受け經營したり大正二年六月同氏死去後は同人の妻女引繼ぎ經營に任じ大正三年七月より二階建煉瓦造り客室を增築し同年秋竣成せり土地に於ける第一流旅館なり

營業主　濱本　かめ　兵庫縣赤穗郡鹽屋村、四十二歳 男二名、女二名

◉角屋旅館　公主嶺朝日町一丁目五號

營業　旅館

當旅館は個人經營なり數年來繼續せし大北旅館が大正四年三月廢業せるを以て同年六月一日現營業主之れを引受けて現名に改稱し客室其他に修繕を加へ待遇萬端を改良せり

營業主　杉田せく　愛媛縣知多郡成岩町　五十歲、女三名

◉橘醫院　公主嶺朝日町一丁目二號地（電話一〇〇番）

營業　醫術

當醫院は個人經營にて大正二年五月一日開業す患者の來院するもの每日二十名乃至四十名なり大正四年六月十八日より院內に齒科部を設置す

院長　橘十一郎　兵庫縣明石町、三十五歲、夫人しな二十九歲、男一名、女二名

齒科部主任　片糸仁三郎　金澤市　三十六歲

◉滿洲新報公主嶺支局　公主嶺榮町一丁目

營業　發行物販賣

明治四十一年二月滿洲新報の創刊と同時に木村太一氏其販賣に任じたるが同四十二年二月二十七日支局に改め主任として渡邊寅治郎氏長春より來り爾來在任今日に至る當支局は此外京城日報雜誌大陸及滿洲野の囑託販賣を兼營せり

主任　渡邊寅治郎　宮城縣名取郡西多賀村、三十六歲　夫人うめ二十六歲

公共機關、神社

◉公主嶺協會　公主嶺朝日町一丁目一號地ノ一二（電話一九番）

▲明治四十三年公主嶺實業協會設立せられ四十五年實業協會と改稱せり本會は居留民全部を會員とし公主嶺に於ける公益を圖るを主要目的とす春秋二季に定期總會を開き其他事故ある每に臨時開會す目下附屬事業として公主嶺自由消防團の組織中なり

組長　長尾由太郎　副組長　光武與作

◉公主嶺特產物商組合　公主嶺元公主嶺病院跡

▲當組合は大正三年九月日本人會員十一名によりて組織せらる特產物時期には每日一回集合して商情商況等を談じ且つ會員の親睦を圖るを目的とす會員は

日本人に限れるも今後は支那人にも開放する筈なり

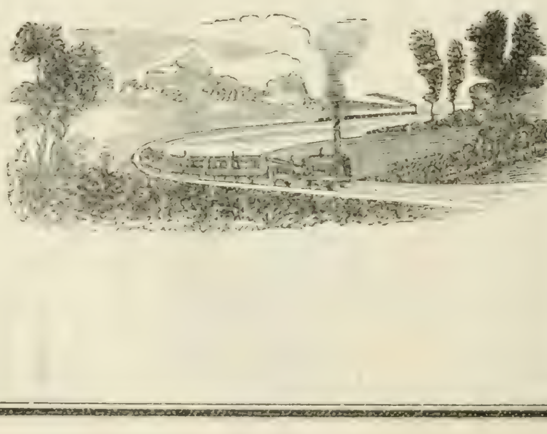
組長　箕輪正英

監査役　小松川寛治　海江田新之亟　佐藤宇治太郎　木下六之助

◎公主嶺神社　公主嶺公園町公園内

▲明治四十二年有志者は靖國神社を建設するの目的を以て市民の喜捨金を募り約一千圓の建築費を投じて神社工事に著手し翌四十三年秋落成し靖國神社の傍に天照大神の小祠を立て更に末社に稲荷神を祭りたるが近く大神を主神とし神宮を造營する筈なり維持費は最初市民の寄附によりたるが其後敬神會起り毎戸十錢宛を徴收し不足は滿鐵公園費中より支出することゝなれり





長春

概説

地勢及氣候

△長春は吉林省の東南東經百二十五度二十九分、北緯四十三度四十八分(殆んど我北海道旭川と同緯度)に位し大連を北に距る四百三十七哩、哈爾賓の南二百二十二露里(一露里は我九町四十五間)、吉林の西北七十九哩の地點にあり海拔七百二十尺、長白山脈の一部哈達山の餘脈丘崗をなして南方より東方に繞り連亘するも勾配緩く交通の便を阻むに至らず而して伊通河は其南東を繞りて北に流れ驛馬河に合して松花江に入る往昔は舟楫の便ありしも今は水涸れて欸乃の聲を聞かす交通上水路を缺ぐと雖も陸上に於ては恰も蜘網の中心の如くに地方八方の大小市場に通じて地勢上自然の都市たるべき要素を具備せり氣候は南滿沿線中大陸的氣象の變化を最極度に現はせり年の平均氣温は四度にして冬季は寒氣凛烈を極め零下三十五度以上に降ること珍らしからずして地下の凍結七、八尺に及ぶ夏季は亦た晝間三十五度を超ゆる炎熱堪へ難きも一度夜に入れば涼風徐ろに至りて頓に暑苦を忘る七八月の所謂雨季を除く外非常に大氣乾燥し雨量甚少なく一年の總量七五二ミリに過ぎず風位は一年中西南風多く風速は冬季に於て最も速く往々一秒間三十米突に進することあり

戸口

△大正三年三月末日の調査に係る附屬地内の日本人は戸數千三十九戸、人口三千三百七十八人支那人戸數二千百五十九戸、人口八千二百九十七人なり城内及商埠地に於ては正確なる統計を缺ぐも大約城内戸數一萬一千、人口六萬六千、商埠地の戸數五千一百戸、人口三萬人と稱す

沿革

△長春は古代にありては肅愼、濊貊、高句麗等の相次で據りし處にして遼金を經て元に至り開元路の屬境となり明時代には蒙古郭爾羅斯前旗の遊牧地たりしが嘉慶五年(一八〇一年)現在の長春の北十數支里の地點長春堡に理事通判を置き名けて長春廳と云ひ

道光五年初めて廳を現今の長春の地に移し仍ほ舊名に依り城垣を修築せり降りて清の光緒十五年に至り廳を改めて府となし同三十四年には兵備道臺一名を置き此地に駐せしめ吉林西南路道臺と稱せしが中華民國となり之を吉林西南路觀察使と稱し更に吉長道尹と改稱し附近の農安、長嶺、德惠の三縣、伊通州及長春府の三縣一州一府を其所管に歸せしむ民國三年全國府州廳の稱を廢するに及び長春も亦縣に改め唯其等級の一等縣たるに留まるに至れり、長春縣の管下（南北百六十支里、東西二百四十支里）は縣署所在の本城以外の恒裕、沐德、撫安の三鄕を六鎭十四の小鄕に分てり

▲長春は明治三十八年十二月日支兩國間に成立せる滿洲に關する北京條約に依りて開放せられたり該條約の結果開放せられたる互市場は奉天省中鳳凰城、遼陽、新民屯、鐵嶺、通江子、法庫門の六、吉林省中の長春、吉林、哈爾賓、寧古塔、琿春、三姓の六、黑龍江省中の齊齊哈爾、海拉爾、愛琿、滿洲里の四、合計十六所にして爾來各地共相當の發展を見たりと雖も就中長春の進歩は之を戰役前の其れに比して殆んど隔世の感ありと稱せらる新たに頭道溝に開設せられし新市街は滿鐵が百數十萬の巨資を投じて經營せる結果當年荒涼の一寒村も今は一變して白堊高樓の甍を接するの大市となり日支露三鐵道の接續點として蔚然たる興隆殷賑の氣象は中滿の天に騰沖せり

商埠地

▲三十九年六月寬城子停車場以南の東淸鐵道及其支線並附屬物件が我政府に讓渡され一時孟家屯が南滿鐵道最北端の停車場となるや長春城內より此地に通ずる西門外路は遽に人馬の交通頻繁を加へ其通路は將來最も有望なる地域となるべしと思惟するもの多かりし中にも吉長の策士等合同して此地域を買占め商埠を創設して以て奇利を得んと計畫せるも滿鐵會社は咄嗟の間に頭道溝一帶の地を買收して停車場敷地と定めたるより彼等策士の計畫は水泡に歸せしと雖も其着想は今日商埠地の繁盛を來せる因を爲せり

▲滿鐵會社附屬地の經營は急速に進行し從來孟家屯に居住せし邦人は擧つて長春に移住し南方より來る

もの亦尠からず彼等は城内北門外支那人と雜居し頗る混亂を極めたり此に於て支那官憲は從來の態度を一變し一定の地を劃して商埠地とし以て外人の居住を制限せんとし馬號門外、北門外、東門外一帶の地積二百六十餘萬坪を以て豫定地とし購地局を設けて土地買收をなし次で開埠局、巡警局等を設け西路道顏世清氏は自ら開商埠局章程なるものを發表せり然れども該章程は條約によりて保有する外人の權利を無視したる頗る珍妙のものにして外務部に於て握潰され其實施を見ざりしも商埠地の開拓は斷はず其歩武を進め終に中途經費問題の一大難關に遭遇したり

▲光緒三十四年陳道臺が始めて商埠經營を企てし時も此經費問題の爲に事成らず顏氏の長春道臺に擬せらるゝや諸任條件として商埠經營費の支出を吉林巡撫に提出して其默許を得たりと云ふされば其任に涖むや彼は鋭意之れが經營に當り商埠經營以外に何物をも顧慮せずして進工を急ぎ就中道臺衙門の如きは十萬兩を投じて人目を驚かす大建築をなし其他道路の修築商埠巡警局の設立等其勢頗る猛烈なりしも之れに伴ふ經費は以外の巨額に上り工事未だ半ならざるに六十萬兩を計上するの狀態にて其不足額は一時吉林永衡官帖局より借入れたるも之が償却に就て確乎たる精算なかりしものゝ如くさなきだに紊亂せし吉林省財政は官帖を濫發して更に其信用を失墜し財界の混亂名狀すべからざるに至れり加之長春商埠に於て私有土地家屋の買收に際し其單價低廉にして或部分は强制的に之れを買上げたる爲め官府の横暴を憤り怨聲四方に起りたり又彼は外人に對しても其擧動の穩かならざりし爲め宣統二年十月遂に革職され後任李道臺亦鼠疫流行に際し監督不充分の故を以て間もなく罷職となり宣統三年前に長春知府として令聞ありし孟憲彝氏其後任に就くや商埠經營につき頗る苦心する所あり遂に大官巨商を大株主とする一營利の興業公司なるものを起し商埠地の一區劃に劇場、妓樓貸家等を建築し半ば强制的に商民の移住を奬勵せるが此方案は頗る機に投じ各商舖の移住するもの日ならずして軒を並べ市街整然として繁華なる一商埠となり爾來穩健なる發展をなしつゝあり

現在の日支官憲

▲日本側にありては商埠地に帝國領事館あり（管轄區域は長春縣、農安縣、伊通縣、洮南縣、昌圖縣、懷德縣）帝國を代表する官廳として對外交渉の任に當るの外滿洲駐在の各帝國領事が皆然るが如くに附屬地外に居住する帝國臣民を保護し之に對する營業の許可其他の行政處分を司り又居留民會の監督をなす猶領事は附屬地の内外を問はず凡ての在住臣民に對し關東都督府高等法院の初級審判廳として民事及刑事の裁判權を有するのみならず關東都督府事務官として附屬地警察官を監督し又領事館警察署を指麾す

▲附屬地内には滿鐵地方事務所、警察署あり長春郵便局は普通郵便電信の事務を取扱ふ外中華民國郵便局との交換局として郵便物の交換をなし又「シベリヤ」經由指定の朝鮮、滿洲及南滿各地方發局郵便物の唯一交換局たり其他觀測所等あり

▲支那側官憲は吉長道尹公署を以て最高の官衙とし道尹は伊通縣外十縣を管し外交事務一切及内政を監督す其他縣知事衙門、地方審判廳、吉林榷運總局、營業稅公所、巡警事務所、統稅局、財務處等あり

▲我獨立守備第一大隊の一箇中隊は四十年九月以來此地に駐屯して鐵道守備に任ず支那軍隊は吉林陸軍混成旅團司令部駐在し外に吉林第二十三師團に屬する一部隊駐屯せり露國は鐵道守備として寬城子に騎兵二箇中隊を駐箚せしむ

滿鐵附屬地

▲三十八年九月日露講和條約第六條に依り露國は長春、寬城子、旅順口間の鐵道及其一部の支線並に諸種の權利を日本に移轉讓渡する旨を協定し其後寬城子停車場問題起り四十年六月露都に於て本野公使とイスボールスキー外相との鐵道接續假條約となり其結果日本は寬城子停車場共有權を放棄するの報償として露國より五十六萬三千百九十三留を日本政府に支拂はしめ政府は此の償金を滿鐵會社に下附することとなりて一段落を告げたり

▲長春停車場の位置たるや軍事上にも深大なる關係あるにより時の滿鐵總裁後藤男爵は滿鐵設立委員長寺内陸軍大臣と協議の上參謀本部員佐藤少佐を現地に派遣して其地形を精査せしめたる結果現在の場所を選定し之が買收を開始せり然れども其位置は清國

官憲に於て商埠地に豫定せしものにて其買收價格に於ても彼我互に主張を固執せしも四十年八月結局我主張通り土地百五十萬三千四百四十八坪（買收價格三十三萬八百七十五圓餘）の買收を了れり滿鐵沿線に於ける多くの附屬地中獨り長春が其性質を異にするは露國より讓渡を受けたるにあらずして同社が新らたに買收したるの點にあり

▲滿鐵の買收せる現附屬地は耕地又は荒地にして蔓草の茫々たる原野なりしを以て滿鐵會社は最初より理想的の市區を建設するの自由を得爲めに動て其發展を容易ならしめたり市街創設の第一着は道路の開設なり長春驛を基點とし正南に走るを長春大街と稱し其道巾二十間、附屬地を二分して以東を十條街、以西を四條街、之れを横八街に、又鐵道北を四條街に分つ、此表區劃四十二あり當初は道路頗る粗惡にして雨天には泥濘膝を沒し晴天には塵埃萬丈往來の難澁言語に絕せしも逐次改良せられ今や完全なる道衢は其延長十三哩に及ぶ

▲明治三十九年頃は邦人の多くは北門外に居住し現附屬地には北門街より二道溝に通する道路の兩側に料理店若干軒を兼ねて居たる位にて當時の貸付坪數は約一萬餘坪に過ぎざりしが輸送業者雜貨商等の漸く移住するに及び市街は現在の東七區を中心として東及南に擴がり四十二年末頃より商埠地に支那雜貨商の居を移す者多く東部は忽ちにして餘地なきに至れり四十三年末頃より東斜街を超ゆて西に伸び今や長春大街以東は殆んど空地なきに至れり現在の宅地貸付坪數二十萬四千九百九十七坪餘に上る上水道は四十四年九月の起工にして機關車及市街一般の給水に充て全計劃概算六十五萬圓下水、幹線は東斜街を通じて頭道溝長農橋附近に放下せられ全計畫概算二十萬圓なり人口の增加は驚く可き者にて四十年十月末には僅かに千五百三十人に過ぎざりしが大正四年二月末に於ては一萬五百五十一人に增加したり

▲長春驛は四十一年度の收入二百七十一萬九千餘圓なりし者が大正二年度には三百六十一萬一千三百餘圓を算し滿鐵沿線百〇七驛中優に其首位を占む公費の收支は市況の繁榮に伴ひ年々膨脹し來り四十一年度歳出は僅々九千四百五十二圓に過ぎざりしが大正二年度に於ては八萬九千四百四十八圓餘即九十四割

強の増額を示すに至れり
▲其他滿鐵會社が經營せる主なる事業は衛生事項にありては清潔法傳染病豫防實施、病院の設置、産業にありては農事試作場を設け水稻、燕麥、亞麻等の主要作物の試作をなし教育機關として尋常高等小學校、公學堂、實業補習學校、實科女學校及圖書館を開設し其他東西兩公園、市場、屠畜場、墓地、火葬場の設備又完備の域に進みつゝあり

交通

▲長春は南滿、東清、吉長三線の接續點に在りて日支露三國鐵道即ち三國勢力は交互接觸し奉天と與に南滿交通界に於て最重要の地位を保てり吉長鐵道は明治四十一年北京に於て締結せられたる日清鐵道協約の結果工費四百三十萬圓を投じて建設することゝなり四十二年末滿鐵會社は其工費の半額を貸與し四十三年春工事に著手せしが爾來天災地變に惱まされ四星霜の歳月を經て大正元年其開通を見るに至れり全線八十哩吉林に起り九站、樺皮廠、土門嶺、馬安山、營城子等を經て長春に達す而して滿鐵との接續は客貨共に滿鐵長春驛に於て之れを行ひつゝあり
▲東清鐵道は世人の知る如く明治二十九年九月清國政府と露清銀行との間に締結せられたる條約に依りて布設さるゝことゝなり翌三十年起工して三十六年全線竣工し同七月を以て營業を開始せり當時の線路は東西一千四百四露里、南北九百十八露里なりしも「ポーツマウス」條約の結果長春以南を我國に割きたるため南北線は二百二十露里に減縮したり東清鐵道の南枝線末端は露寬城子にあるも四十二年三月滿鐵の長春驛構内にも便宜上東清鐵道の停車場を設け日露貨客連絡の便宜を計り來りしが大正元年五月更らに該連絡上最も實際的の協定成りて左の三十二驛の相互間に貨物の連絡輸送を取扱ふに至れり

公主嶺、四平街、開原、鐵嶺、奉天、撫順、遼陽、營口、大連、旅順、安東、（以上滿鐵線）　米沙子、海窰門、陶頼昭、叉河、蔡家溝、双城府、哈爾賓、齊々哈爾、胡拉爾、吉布哈特、海拉爾、滿洲里、阿什河、一面坡、横道河子、海林、綏芬河、ウスリスキ、浦鹽、（以上東清線）　ハバロフスク、（烏蘇里線）

產業及貿易

▲當地附近は地味肥沃にして有名なる農作の大產地なり作物は大豆、高粱、粟を主とす大正二年度に於て長春城に移入せられたる雜穀は大豆五十萬一千石高粱七萬四千石、小麥三萬九千石、小豆一萬一千石玉蜀黍三萬九千石、大麥一千九百石等なり長春地方事務所の管轄附屬地は長春鐵道附屬地百五十萬餘坪の外に長春驛以南本線沿線の附屬地を合せ其全面積二百五十八萬餘坪にして內市街面積約百五十萬坪を控除せる土地は之を耕作地として日支人に貸付居れり故に邦人の農事經營をなす者年々增加せり

▲工業としては燒鍋、油房、製粉、煉瓦、燐寸製造及製革業を擧ぐべし油房を營む者凡て二十五軒、一ヶ年の產額約豆粕七八十萬枚、豆油三百卅萬斤を製出す燒酒釀造業者二軒にして年產額百萬斤なり舊式製粉は一ヶ年九百萬斤の麥粉及二百四十萬斤の麩子を製出す新式機關を有する滿洲製粉會社は二年十月當地に分工場を建設して（一晝夜の生產力約九萬斤）製粉に從事するに至り長春附近の輸入外國品を既に驅逐せり邦人工業經營の嚆矢なる日淸燐寸株式會社は城內二道街にあり一日の製造高約百五十箱一箱の平均價格四圓六十錢內外なり

▲當地は滿洲中央部に於ける經濟的大要地にて近年著敷其貿易額を增加し大正三年度に於ける輸出入總額六千五百六十萬圓に上り同年度に於ける長春驛發著貨物は發送四十一萬七千噸、到著四十七萬七千噸、計八十九萬四千噸、之れを明治四十一年度に比し殆ど倍額を增加し實に沿線各驛中大連を除きたる（撫順は石炭の移出あるを以て例外とす）最大なる貨物聚散地たり又同年度に於ける當驛乘降客數は五十萬一千八百四十一人にして此れ亦奉天を除きては其右に出づる者なし以て此地の貿易的及交通上の偉大なる地位を知る可し近く吉會鐵道の開通は更に長春の經濟的及交通的價値を向上せしむべし今大正三年度に於ける重要輸出入の品名及數量を掲ぐれば

輸入

綿布	一四、四九八、四七二斤	亞鉛板	五〇二、四七七斤
綿糸	二、二八八、二一七	鐵製品	八、〇一三、三五五）
銅	三五、九一七	鍋作品	一七五、〇六八
農具	六三七、七一七	鐵線	三四、三二一
セメント	四、八六二、五一七）	鐵板	四八七、七七三

硝子板	六六九、三六八	鐵材	二、六六九、八二五
鐵釘	一、三五、八三七	鉛及錫	二二、一九五
石炭	三、二二七、三四九	和洋紙	七、八一三、五〇五
時計	四一、七九五	白米	八、三二九、〇九
日本酒	四三、三九五	罐詰	二五四、三三四
石油	一二、〇六五、五三五	麥粉	一、七八六、五五七
陶器	二、八三四、四九〇	藥品	一三三、六二〇
砂糖	一三、六〇、六三三	煙草	一、五七一、〇〇七
燐寸	二、三三、七一六	麻袋	五五、五九九
雜貨	一三、一六六、一九一	機械類	五八二、六六八

輸出

大豆	二四一、四〇二噸	小麥	一八、四七五噸
高粱	一四、一三二	葉煙草	六、一〇八
材木	四二、九三二		

而して輸入品の内八百萬圓は哈爾賓方面に直送せらる

金融機關

◎長春に於ける邦人經營の金融機關には正金銀行出張所、同行頭道溝分店、正隆銀行支店、北滿銀行、朝鮮銀行出張所あり又外國銀行には露亞銀行支店あり支那銀行としては中國銀行支店、交通銀行支店、吉林官銀局分號等あり此外附屬地居住邦人間の金融機關として長春共立株式會社、長春貯金株式會社あり又支那人金融機關としては當舖、銀爐、票莊等あり從來當地にて本位貨と稱せられしは吉林に於て鑄造せられたる制錢なるが既に實質を失し現今支那人間の取引に使用せらるゝは吉林永衡官帖なり然るに此官帖も亦實質の伴はざる不換紙幣的のものなれば信用頗る薄く支那幣制整理の機だに到らば直ちに廢紙となるべき危險物なれば外商との間に用ゐらるゝは主として露貨、正金銀行鈔票、支那小銀貨等なり附屬地邦人間の取引は殆んど日本銀行兌換券及補助貨、正金銀行券、朝鮮銀行券等の金貨本位を以てせり

諸營業

◎日清燐寸株式會社　長春城内西二頭街（電話四六六番　電略ニシ或はニニ）

營業　燐寸製造販賣

當會社は資本金三十萬圓內拂込金額九萬圓の日支合辦の株式會社（株數六千株、一株五十圓日本人持株

數五千六百株、支那人持株數四百株）にして明治四十一年十一月を以て創立せり

明治三十八年十月現津久井專務取締役は農商務省の囑託を受け滿洲利源調査委員として渡滿し熱心なる實地調査の結果支那人日常の必需品なるマッチ工業の將來太だ有望なるを看取して日支合資を以て其製造工場を通江口に設置するの案を立てしが其後工場豫定地を長春に變改し支那側には趙卓立、郝興徳、張松亭等五人より一千圓宛を又津久井氏自ら一萬五千圓を出資し合計二萬圓を以て明治三十九年十一月合名會社廣仁津火柴公司の名を以てマッチ工場を長春城内西二道街に設立したり爾來頑冥なる支那官憲の壓迫其他各種の困難に打勝ちて事業漸く盛大に赴き徐世昌氏は其奉天總督時代に工場を巡閲して附近在住二千餘名の支那老幼が家内手業として多大の賃銀を得つゝあるを見て非常に感賞したるなどの事ありて勢力信用益々加はり其製品は需要に應ずること能はざるに到りたるを以て津久井氏は事業擴張の爲め廣島市有志團と協定して明治四十一年十一月資本金三十萬圓の現會社に改組織したり

昨今工場使用の職工は大小男工三百人（寄宿舍在宿）又通勤男女工二百人内外、就業は午前五時より午後五時迄にて一日平均百五十箱（毎箱二百打入り）一個年六萬箱を製造し主として長春及長春以北に販賣せり目下歐洲戰亂の結果藥品暴騰して内地品輸入不引合の爲め當社の製品好況なるのみならず日支合辦の準國貨なるを以て排日貨の風なく例年夏期には一萬箱の滯貨あるに反し毎日製造に追はるゝの有樣にて大正四年七月の結算季には開業以來始めての好配當を爲すに到れり

本社　廣島市細工町六一番地

社長　高阪萬兵衛（在廣島）

專務取締役　津久井平右衛（人事參照）

出張所　哈爾賓

●橫濱正金銀行長春出張所　長春城内（電話一二七番）（主任室）

營業　一般銀行業

當出張所は明治四十年の開設にして輸出入貿易に對する資金の融通を主たる業務とす毎年特産物の出廻期に到れば其貸出高三百餘萬圓に達す附屬地には派

出所ありて内外在留人の爲めに利便を圖れり前主任工藤金三郎は永年在勤せるが大正四年十月現主任と交迭したり

主任　森本啓太郎（人事參照）

派出所　附屬地東區第二區

◉株式會社三井洋行長春出張所

長春附屬地第二九區八號地　電話（長六三番七七番 長一二番 社宅）

營業　一般輸出入及火災生命保險代理店

當出張所は日露戰後に出張員を派遣し城内に開店せしに始まる明治四十二年十月出張所に昇格し大正三年六月現所に移轉せり城内に輸入係の分店あり又公主嶺、吉林に出張員を特置せり

所長　浦保壽（人事參照）

次席　服部邦久

公主嶺出張員　小松川寛治

吉林城内北大街（電話長六四番）　出張員　山田渉雄（ワタオ）

◉朝鮮銀行長春出張所

長春附屬地東第二區二二號地　電話（長一〇六番 長二八番）

營業　銀行業併に生金買入

當出張所は大正二年九月開設す同四年五月より黑龍江吉林方面に於ける生金の買收を開始せるが同行本店は漸次設備の完全なる同分所を滿洲に開設する筈なり

所長　松原純一（人事參照）

次席　藤岡繁太郎

◉株式會社正隆銀行長春支店

長春滿鐵附屬地東一八區二八號地　電話（長六一〇番）

營業　一搬銀行業

當支店は大正元年十月開設にて貯蓄奬勵及特產物取引に對する小銀貨勘定を設けて一般の利便を圖れり

支店長　三宅圓（人事參照）

次席　田中水穗

◉株式會社北滿銀行　長春北門外（電話長四一一番）

營業　一般銀行業並に銀取扱

當銀行は大正元年十月三十日の創立にして資本金十五萬圓（拂込四萬九千五百圓、積立金一萬六千三百圓）の株式會社なり大正四年六月の當行第六期結算に於て總益金一萬九百四十三圓六十錢、總損金五千二百六十圓六十五錢、差引利益五千六百八十二圓九十五錢、其他前期繰越金九百四圓九十五錢、計六千五百六十七圓九十錢、此内一千四百八十五圓を株主に配當（年六分）し其餘は積立金となせり

專務取締役　田原稔　福岡縣粕屋郡須惠村字須惠五八八三番地、明治十九年十月生、夫人みつる二十四歲
取締役　相生由太郎（人事參照）
同　夏秋龜一（同　上）
監査役　四戸友太郎
出張所　吉林糧米行

◎滿洲製粉株式會社長春出張所

長春北二街（電話長一四番）

營業　製粉販賣

本社は鐵嶺にありて當出張所は明治四十二年十月の開設なり四十五年六月より製粉分工場の建築に着手し大正二年五月六日より製粉を開始せり一ヶ月一萬五千石の原料を挽碎し其製品は吉林長春及南滿洲各地に販賣す（鐵嶺滿洲製粉會社參照）

主任　上田安次郎（人事參照）

◎東亞煙草株式會社長春販賣所

長春城内東三道街（電話長一三一番）

營業　煙草販賣業

當出張所は明治三十九年十一月東亞煙草株式會社長春支店として開設され吉林、哈爾賓の兩出張所を管轄し來りしが四十二年七月長春支店を長春販賣所と改め吉林哈爾賓の出張所は各販賣所として分立せり大正三年七月より更に吉林及四平街の兩出張所を監督することゝなれり

主任　八代　爲城
吉林出張所主任　丸毛武男　四平街出張所主任　岩谷竹次

◎合資會社加藤洋行長春支店

長春東一三區一一號地（電話長三二番 振替九七一番）

營業　雜貨、及土木建築請負

當支店は大連堀藤洋行の支店にして明治四十三年十一月開設す（大連堀藤洋行參照）

支店主任　櫂田虎城　栃木縣那須郡大田原町一四四番地　慶應三年十一月生

◉高橋材木商會　長春東一區二二番地（電話四七番）三五番（材木置場）振替大連二一九七番）

營業　材木

當商會は個人經營にして明治四十年の開設なり

營業主　高橋庄之助（人事參照）北海道札幌區北一條西十一丁目、四十三歲

◉松茂洋行長春支店　長春新市街（電話四四二番、五三七番　振替大連八八九番）

營業　米穀、石炭、麻袋、運送、委託販賣、

本店は大連に在り當支店は明治四十年十月の開設にして本店監督の下に經營せり專ら輸送業を營みしが時勢の變化に伴ひ同四十三年十月以降哈爾賓双城堡に出張所を設け現營業を開始せり現在の販賣高は石炭一ヶ年約三萬噸、米穀二千石、麻袋十萬枚なり

支店　主任　土橋大次郎　長野縣松本市大字北深志一八二八番、

幹部員　赤星武房　竹内　昶

哈爾賓主任　飯野德之助

双城堡主任　朝谷孫三郎

◉藤田誠昌堂藥房　長春七區三四號地（電話四一六八番）

營業　藥種賣藥、質、並に貸家

當藥房は藤田與市郎、同政太郎兩氏の共同經營にして明治四十一年の開設なり

主任　藤田與市郎（人事參照）

城内支店主任　藤田　勇吉

◉隆泰公司　長春新市街東一二區（電話二四六番）

營業　土木請負

當公司は個人經營にて明治四十年一月の開設なり

營業主　島名繁十郎（人事參照）

◉阿川工程局　長春七區二號地（電話三六番）

營業　土木請負

當工程局は個人經營にて明治四十二年の開設なり

營業主　阿川　甲一　山口縣美禰郡伊佐町七〇一番地　明治三年十一月生

支配人　宇野　常吉

◉村岡呉服店　長春新市街東七區四六號地（電話一二四番）

營業　呉服商

當呉服店は個人經營にて明治四十一年三月の開設なり

營業主　村岡　久次　佐賀縣庄郡久保田村、明治四年一月生、夫人くに、明治六年十一月生、女二名

◉金泰洋行　長春東斜街（電話一五九番）

營業　西洋雜貨

當洋行は個人經營にして日露戰役後公主嶺に於て開設せられたるが其後現在所に移轉せり

營業主　石黒仲次郎　愛知縣中島郡稻澤村字重本、明治十二年三月生、夫人ふく二十八歲

◉西脇洋行　長春東二二區（電話四二四〇番）

營業　建築材料販賣

當洋行は個人經營にして明治四十年夏の開設なり

營業主　西脇　清六　和歌山縣海草郡[illegible]川村字木野一〇一六番地、明治九年三月生、夫人たつ三十三歲

◉長春共立株式會社　長春東七區三四號地（電話一六八番）

營業　金銀貸附及各種代理業

當會社は資本金五萬圓内拂込額一萬九千圓の株式會社にして大正二年十一月の創設に係る而して會社の目的は金銀貸附及各種の代理行爲を營み又一定の會員をして積立を爲さしめ且つ之に金圓を貸與し相互の融通と殖利蓄財の便を圖るにあり諸積立金三千九百三十一圓、繰越金七千三百八十四圓六十四錢、現在貸附金約五萬圓にして大正四年六月末日決算に於て金三千六百七十二圓三十八錢の純益を擧げたり

專務取締役藤田與市郎　　取締役　細川耕之助

取締役　村岡　久吉　　同　西脇　清六

同　西村清兵衛　　監査役　多田友太郎

監査役　田村松太郎　　支配人　大關誠一郎

◉田中東三一藥房　長春新市街東一八區第三五號地（電話四三七番　振替三一八番）

營業　藥種賣藥

當藥房は個人經營にして明治四十年五月の開設なり初め城内に開店せしが四十四年三月現地に移轉せり

營業主　田中繁次郎　富山縣中新川郡相ノ木村四六九番地、三十四歳、夫人なか子二十九歳、男一名

長春支店　長春城内　主任　志摩直太郎
大連支店　大連監部通り　主任　長澤　錠吉
開原支店　開原揭鹿街　主任　太田　浩
齊々哈爾支店　主任　粟村豊太郎

◉西村洋行　長春東第七區一號地　電話六〇一番　振替大連一三六七番

營業　質、農園、貸家、清酒販賣、並帝國生命保險會社代理店

當洋行は個人經營にして明治四十一年六月質及貸家業を開始し同四十二年より農業を兼營し大正三年一月より清酒澤の鶴特約販賣店として販路擴張に努め傍ら帝國生命保險株式會社の長春及公主嶺代理店たり

營業主　西村清兵衛　佐賀縣杵島郡山口村、四十三歳夫人ため子四十二歳、男三名、女二名

◉三島屋　長春新市街東一二區（電話五三五番）

營業　吳服商

當店は個人經營にして明治四十五年三月の開設なり

營業主　明坂　謙三　大阪市南區難波新地一番地明治八年十一月生

店員　三名

◉長春罐詰製造所　長春新市街東八區四號地

營業　罐詰製造

大正二年の開設なり

支配人　杉山　勘彌　北海道札幌郡琴似村字琴似二五番地、明治六年一月生、夫人きよ三十歳、女一名

◉山口運輸公司長春出張所　長春新市街東一區四八號地　（電話四一三三番）

營業　運送

支配人　生駒菊次郎　兵庫縣武庫郡西門村字池田慶應三年九月生

◉木村吳服店　長春東一三區三四號地　電話一四五番

營業　吳服太物販賣

當店は明治三十八年營口に開設し長春に出張所を置きしも後營口本店は火災の爲め烏有に歸したるを以て明治四十一年現在所に移轉せり

營業主　木村・藤吉　兵庫縣揖保郡龍野町一三番地、安政五年九月生、夫人いさ子三十八歲

外店員　五名

◉赤木洋行　長春東二三區一號地（電話二七三番　振替大連三〇九番）

營業　雜貨、並質商

當洋行は個人經營にして明治四十二年十一月開設なり

營業主　赤木德右衛門　岡山縣都窪郡庄村栗坂九九七番　明治十五年三月生、夫人常盤三十一歲、男一名

◉丸山組　長春新市街東一一區（電話七五番）

營業　土木請負

當組は個人經營にて明治四十年の開設なり

營業主　丸山直助　鹿兒島縣薩摩郡西水引村字網津六一三三番地、明治元年七月生、夫人さも三十五歲

外店員　二名

◉工棟組　長春新市街東一二區（電話二四三番）

營業　土木請負、並に煉瓦製造

當組は個人經營にて明治四十三年秋の開設なり

營業主　工棟佐一郎　山口縣熊毛郡上關村字祝島、安政五年十月生、夫人その子三十七歲

◉和登商行　長春新市街東七區二八號地（電話四四〇番）

營業　鐵工、電氣機械類販賣

當洋行は個人經營にて明治四十四年の開設なり

營業主　和登　良吉　大阪府南河内郡相原村一八番地　明治十四年一月生、夫人さく二十四歲

◉平本洋行長春支店　長春東一二區第二五號地（電話四一五八番）

營業　和洋雜貨商

本店は營口にあり當支店は大正二年七月の開設なり

主　任　岡田小太郎　廣島縣賀茂郡竹原町四七番地、四十歲、夫人もと子二十八歲、長男榮一四歲、長女章子二歲

◉長春製材合資會社　長春驛北側工業用地（電話四四四番）

營業　製材販賣

當會社は資本金一萬圓の合資組織にして大正三年九月の創設なり時恰も日獨開戰の爲め一時製材を中止せしも翌四年五月より再び營業を開始せり電氣機械三臺を据附け日本人職工四名を使役し吉林材北滿村

の製材を專らとし成績良好なり

社長　木原千楯　熊本縣熊本市上通り町五九番地　慶應三年十二月生、夫人たみ子、男二名

◉梶原洋行　長春東七區三二號地（電話二五五番　振替四七八番）

營業　食料雜貨日用品販賣

當洋行は個人經營なり經營主は明治三十九年渡滿し新臺子に於て御用商を開始せるが四十年五月長春城內に轉來し現業を開始せり四十一年現在所に移轉し大正三年五月范家屯驛構內に支店を設置す

營業主　梶原米吉　香川縣高松市井口町二六番戸、三十六歲、夫人よし子三十一歲、男一名、女二名

外店員　五名

◉林洋行　長春新市街東七區三二號地（電話一六五番）

營業　紙類

當洋行は個人經營にて明治四十二年の開設なり

營業主　林代藏　岐阜縣武儀郡吉田村二〇〇六番地　夫人たけ子二十九歲、男一名、女一名

◉西村商店　長春東八區第一九號地（電話一三三番　振替大連四〇五番）

營業　米穀食料雜貨

當店は個人經營にして營業主は明治三十八年三月大連大山通に開店し同年十月遼陽に移轉し翌三十九年九月更に步兵第五十九聯隊の酒保として公主嶺に移轉し同四十一年二月亦た現地に移轉せり

營業主　西村儀三郎　長崎縣佐世保市島田町一五〇番地　元治元年生、夫人さよ子四十二歲

外店員　日本人一名、支那人一名

◉田村洋行　長春東八區五一號地（電話一七一番）

營業　砂糖、白米、麥粉販賣

當洋行は明治四十一年の開設にて初め支那雜貨店を營みたりしが大正二年二月廢業と同時に現業を開始せり

營業主　田村松太郎　愛媛縣[illegible]八十六番地、士族、五十歲、夫人[illegible]子四十二歲、男[illegible]二十八歲、嫁[illegible]子二十二歲、孫[illegible]四歲

外店員　三名

◉阿曾時計店　長春東七區四三號地（電話四六八番　振替大連五九〇番）

營業　時計、貴金屬、寶石、蓄音機類販賣
當店は個人經營にして明治四十二年二月開設す
營業主　阿曾市太郎　滋賀縣栗太郡大石村字淀一一番地、三十九歲、夫人たま子二十五歲、男一名
外店員　四名

●藤井公司　長春東八區一二號地

營業　貸家及質
當店は個人經營にして營業主は明治三十八年渡滿四十年現地に於て運送業を開始し二箇年にして廢業す同四十三年より貸家業を營み大正二年より質屋業を兼營せり
營業主　藤井多賀藏　岡山縣小田郡北山村大字新賀二六四二番地、三十五歲、夫人はなよ二十八歲、男二名、女一名

●森野商店　長春東八區三一號地（電話一五一番　振替大連三一一六番）

營業　小間物日用雜貨
當店は個人經營にして營業主は明治三十八年二月衞生部員として從軍長春に在留し明治四十一年五月現業を開始せり
營業主　森野常五郎　兵庫縣朝來郡生野町白口町六三番地、三十七歲、夫人さくゑ子二十八歲、男二名
外店員　五名

●酒井商店　長春東一二區二一號地（電話四六四番）

營業　古着、古物並陶器類販賣
當商店は明治三十九年十一月孟家屯に於て食料雜貨を販賣せしが同四十二年六月廢業し翌四十三年三月長春に移り現業を開始せり
營業主　酒井伊三郎　山口縣熊毛郡關村四九七番地、三十三歲、夫人まい子二十歲

●岡女庵　長春東斜街三號地（電話五三八番　振替六六四番）

營業　菓子製造販賣
當店は個人經營にて明治三十七年の開設なり初め安奉線鷄冠山に於て開店せしが大正元年現地に移轉し今日に及ぶ
營業主　細井萬次郎　埼玉縣入間郡東吾野村字平戸二四番地、四十三歲、夫人たつ子三十七歲、女一名

●名古屋旅館　長春新市街東一一區（電話四二〇七番）

營業　旅館

當館は個人經營に係り明治四十四年七月新築に著手し同年十一月落成と共に開業せり總煉瓦の二階建にて客室十六を有す階上の三客室を開接すれば五十四疊の大廣間となる防寒其他の設備完全にして滿鐵ヤマトホテルを除きては長春第一の旅館なり吉林に支店あり亦た同地第一流の旅館なり

營業主　遠藤志貫太郎　愛知縣碧海郡大濱町、四十五歲　夫人につ子四十歲、男一名女二名

支店　吉林名古屋館　吉林

◎初音旅館　長春驛前（電話四七一番）

營業　旅館

當旅館は個人經營にして明治四十一年十一月の開業なり

營業主　大西藤次郎　大阪府下三島郡福井村、三十五歲　夫人につ子三十九歲、

◎杏林堂　長春新市街東七區一四號地（電話五二〇番）

營業　醫術

當堂は個人經營にして明治四十二年の開設なり

院主兼院長　中嶋信之　栃木縣足利郡北郷村字田島　男一名

◎同仁醫院　長春新市街東七區（電話六〇六番）

營業　醫術

當醫院は個人經營にして大正三年十二月の開院なり

院主兼院長　川原晉太

◎長春日報社　長春北門外商埠地頭立屯（住稲荷町）（電話五五番）

營業　新聞發行

當日報社は個人經營にして明治四十二年一月一日を以て創立し小形の日刊新聞を發行す當初は謄寫版なりしが約二年後に於て活字版の現形に改新せり

社長　箱田琢磨（人事參照）

主筆　泉　廉治　北海道厚岸町四〇番地、明治十六年一月生、同人孝子二十三歲、同文書院出身

◎滿洲日日新聞長春支局　長春附屬地東八區四三號地（電話二五八番）

當支局は明治四十一年七月小北門外に開設されしが其後現所に移轉せり主任は桑原喜八氏を初代とし安

東、佐藤、平瀬、西村の諸氏を經て現主任は大正元年五月就任せり

主任　伊原孝之助　島根縣松江市、四十八歳、妻九直子三十九歳、男二名、女一名

◉遼東新報長春支局　長春附屬地東三條通四二號地（電話四三四番）

營業　新聞販賣並に通信

當支局は明治四十一年三月現主任之れを引受け引續き經營せり初め城内にありしが四十三年六月現地に移轉せり

主任　伯原孝久（人事參照）

營業主任　石井亥之吉　東京府下荏原郡玉川村字瀬田四十一歳、夫人たつ子二十五歳、女一名

◉滿洲新報長春支所　長春附屬地第八區一五號地（電話二四八番）

營業　新聞販賣

本社は營口に在り明治四十一年二月本社創立と同時に城内に新聞販賣所置かれしが其後支局の開設となり高橋正親氏編輯主任となりて長春附錄を發行したるも間もなく廢刊となれり爾來主任は泉廉治、森本小太郎諸氏を經て現主任は明治四十五年三月より引續き在任せり

主任　石井亥三吉

官衙、公共及宗教團體

◉在長春日本領事館　長春北門外新立屯（電話四一番　一七〇番）

△當領事館は明治四十年の設立にして吉林省中の長春、農安、伊通、奉天省中の洮南、昌圖、懷德の諸縣を管轄す歴代領事は初代松村貞雄氏より松原一雄、木部守一の二氏を經て現領事は大正三年來任せり

△當領事館は日支露三國接觸の中滿の要樞に在りて其交渉事務の頗る重大なるに加へて日支新訂約後は管轄區域擴大せられて其任務に一層の重きを加へたり從來の廳舍は假屋にて瞻仰の威望を缺ぎしが大正二年九月工費數萬を投じたる現在の新廳舍に移轉したり

領事　山内四郎（人事參照）

領事官補　村井倉松

書記生　河野　清　　貴布根康吉　　船津　文雄

通譯生　郡司　智麿

長春貿易協會　長春附屬地東斜街（電話四一番）

△當協會は大正二年十一月在留有力商人の全部が相謀り商業會議所と同一の目的の下に創立したる者にて現在會員數六十名、毎月例會を開き在留邦商の公益增進の諸項に就き研究討議す

理事　岩永裕吉

評議員　浦保壽　外十名

長春倶樂部　長春附屬地東一八區一三號地（電話四二番）

△從來長春には長春倶樂部ありしが大正四年四月末之れを解散して更に全在留民を包含せる當倶樂部を翌五月一日組織し其會場たる家屋を八千五百圓にて買入れたり煉瓦造建坪約百餘坪の清楚なる建築にて五十六疊の大食堂、十二疊の應接間、娛樂室十五疊以上、及七十疊の球戲室あり維持費として會員より毎月會費二圓を徵收す

會長　山内四郎

幹事　五名

會計監督　一名

長春頭道溝商務會　長春東四區一號地

△當商務會は明治四十二年十月の創立にして附屬地在住の日支人商家を以て組織せる一の商業會議所なり同四十三年現在所に新築移轉し四十四年より錢行、銀行即ち重要物産及日露支貨幣の取引を開始し大正元年十二月三十一日附の南滿洲鐵道株式會社の商務會通則に依り商務會と認められ同時に總理及協理は同社總裁の任命に由りて一切の經營施設に任じ且つ同社の指揮監督を受くる事となれり事業の概要としては滿鐵の管理を受けて日支當路の連絡を圖り隨時商工業の狀態を調査發表し其報告機關として日刊商務日報を發刊せり猶會員相互の親睦を圖るを目的とし現に此目的に依て益向上しつつあり

△當地は日支露三國折衝の焦點たるを以て他地方に見ざる經濟狀態の錯雜なる者あり通貨の如き其種類十數種に上り從て貨物取引上貨幣價格に變動を來たす此等危險の負擔を免るる必要上當商會にて貨幣の先物取引を開始せり爾來此の錢行の經營は逐年盛況を來しつつあり又此地が地勢及交通上北滿重要物産

吸聚の關門たるを以て近來大連特産物取引の盛行に連れ粮行の經營も亦逐年盛況を呈しつつあり

總理　李子[illegible]　協理　鍾歩雲
同　馬玉軒　幇辦　森崎茂樹
座辦　馮作善

◎本派本願寺長春出張所　長春附屬地東二二區三號地（電話三四六番）

▲當出張所は明治四十一年十二月二十三日油小路力演師始めて來りて開設し四十三年十月同師歸國して安溪雅亮師來り同師の去るや大連より藤澤師來りて臨時代理を務めしが四十四年六月石塚隆聞師來れり師は東三區十二號地の支那家屋を布教所に當てて熱心に布教に努め大正二年五月境内千二百坪の現所に建坪七十五坪の本堂建築に着手し同年九月竣工十月十三日管區内の主任を招待して遷佛式を執行したり猶石塚師は遷佛式後他に轉任せり

主任　猶未定

◎曹洞宗布教所　長春新市街東一二區

▲當布教所は大正二年九月の設立に係り爾來布教に熱心せり

布教師　前川泰賢　靜岡縣志太郡葉梨村、四十歲、夫人、まさ子四十歲、男一名



撫順

概説

▲撫順は奉天を距る東八十支里の地點に在り南北の二面は低き山丘を以て圍繞せられ東は老虎臺、西は李石寨に開き東山一帶に通ずる咽喉を扼し渾河其源を興京界滾馬嶺に發し撫順城南を西流して遙かに渤海に注ぐ此地は元と微々たる一寒村にして住民の如き僅に五十餘戸を算せしに過ぎざりしが一度露國の此地に採炭を開始するや露支人の來り住むもの漸く多く次で日露戰後採掘權我有に歸し四十年四月滿鐵會社の經營に移るに及び百般の設備整頓し日支商人の此地に居を構へて業を營む者踵を接し炭坑の施設と相俟て現今の市街を建設するに至れり而して撫順驛は初め千金寨驛と稱し專ら旅客及運轉事務のみを取扱ひ貨物事務は殆んど擧げて之を東北三哩を隔つる當時の撫順驛に委せしが大正二年八月當驛は撫順驛、從來の撫順驛は永安橋驛と改稱せり

▲當地の東北里許に撫順城あり明時代の築造に係る城北を繞れる山脈は西、葛布街北方より東は薩爾滸山に連亘し天命三年の明清役も三十八年日露戰爭も皆此山脈を天險として開始せられ今猶丘頂到處に露軍の築きし保壘線の殘影あり北門外の丘頂には一基の白塔あり星霜幾百年を經て古色愛すべく之に登臨すれば脚下に渾河の流るるあり楊柳青々たる處炭坑一帶の建築物隱見して風光最も佳なり城內及撫順を通ずる渾河の架橋は沙河會戰の前後に露軍の軍橋たりしものにて鴨綠江軍の南海師團之を占領して撫順を攻擊せしより四國橋の名あり現今支那政府の有に歸せり

▲氣候は寒暑共に奉天に比し烈しく氣温最高三十七度最低零下三十六度に達し大氣常に乾燥す

▲此地の生產としては石炭を除きて僅かに農產物、(米、大豆、包米、高粱)を有するに過ぎず而かも其大部は當地に於て消費せらる之れに反し物資の需要狀態は炭坑なる一大集團を控へたれば各種食料品及び日用雜貨の移入巨額に達し換言すれば當地は生產地にあらずして消費地なり而して特產物の取引は炭

坑を以て其生命となすが故に金融は緩漫にして其機關として認むべきは唯だ一の安東銀行の支店あるのみ

▲此地の生命は言ふ迄もなく撫順炭坑なり炭坑は此地の生命なると與に亦た滿鐵會社の生命なるを以て會社は其經營に全力を注ぎて壯大なる最新式の諸設備をなすの外附帶事業として大市街を建設して土木衞生、敎育等の一切を自ら經營せり故に此地には例外として滿鐵地方事務所の設置なく其總ての地方行政的事務は炭坑庶務課に於て之れを管掌せり

撫順炭坑

▲本炭坑は奉天省撫順縣に屬し撫順城と渾河を隔てて相對し其流域内に發育せる一大炭田なり鑛區の境界は西古城子河より東、東洲河に至る其距離約四里幅約一里、礦區坪數千八百十九萬五千四百二十坪にして其量約八億噸と稱す而して之を撫順炭坑と稱する所以は蓋し地撫順縣に屬し露國採掘の時代に於ても撫順煤鑛公司の名を以て經營したるが爲めなるべし

▲撫順炭田に於ける石炭の最初の發見及採掘に付ては記錄の徵すべきものなく之を判定すること能はざるも現に今日に於て各處より陶器製造窰の發掘せらるること古錢又は陶器の破片等の發見せらるること舊坑の存在する狀態等に稽へ或は土人の口碑等に由りて察するに今より六七百年以前高麗人に依りて盛に採掘せられて陶器製造の燃料に供せられたるものの如し發掘せられたる古錢の年代によりて之を徵するに今日より二千廿餘年前なる前漢武帝時代に鑄造せる五銖錢あり或は唐朝の古錢を混ずと雖も其最も多數なるは北宋時代のものにして年代の最新なるは今より六百五十餘年前鑄造の正隆元寶なりとす以上の事實に因りて考察するに年代の最も新たなる時代に於て石炭の採掘せられたりと觀るを以て正當とす換言すれば高麗人が此地に於て石炭を採掘し盛に陶器を製造したるは遼金の旺盛を極めたる時代にして當時の通用錢として前漢以後隋唐五代に至る古錢は北宋南宋の頃に於て鑄造せられたる古錢の內に混合通用せられたるの事實を想像するを得べし

▲其後滿洲に愛親覺羅氏起り次て其都を瀋陽に奠むるに當り撫順炭坑は清朝祖宗の寢廟たる東に永陵西に北陵福陵を距る遠からざるの故を以て風水に害ありとして乾隆年間其採掘を嚴禁せられ爾後百餘年間何人も公然之を採掘すること能はざりしが最近世に至り光緒二十七年（明治三十四年）五月候選經歷王承堯なる者榮綸英凱等の資本主と共同して撫順千金臺地方の石炭を開掘せんことを時の奉天將軍に出願し又候選知縣翁壽及候選區長顏之樂なる者之れと殆んど同時に千金臺地方の炭鑛開掘を同將軍に出願し各其許可を得るに及び撫順炭は再び世上に現出せり爾後幾多の變遷を經て三十八年三月十日奉天大會戰の結果我軍の有に歸し次で滿鐵の經營に移り今や一箇年二百餘萬噸の出炭を見るに至る

▲撫順炭は日本炭と同じく第三紀層の石炭に屬し其色漆黑にて光澤強く其質堅硬なる瀝青質鎔合炭にして揮發分に富み燃燒盛にして七千五百「カロリー」の火力を有する有煙炭なり該炭の特色は灰分極めて少量にして「クリンカー」を生ずること少なく又硫黃分を含有すること少なきが故に汽罐を損傷すること少なし尙ほ揮發分に富むが故に瓦斯製造用としては日本の如何なる石炭も此炭に匹敵すること能はず燃燒力熾盛なるが爲めに汽罐の焚料として日本產一等炭に比肩すべく特に鐵道機關車又は船舶用に適す

▲撫順炭を使用するより生ずる利益は甚だ多きが就中其最も著しきものは（一）、粘結性少なきを以て燃燒の際火架上に粘着せざるに因り火夫の技能を要すること少なく且大に火夫の勞力を省略することを得（二）、繼火の際燃れ移り易きが故に釜換を容易ならしめ且汽壓の下降を少なからしむ（三）、燃燒力充分なるにより煤烟薄く不燃分の逃出少なきを以て危險の虞なく煙筒掃除をなすに他炭を用ふるに比し凡三分の二の勞力を省約するを得（四）、硫黃分少なきを以て汽罐の保存上に利益あり次に撫順炭の使用上に要する注意は第一、燃燒力強く火力一時に發作し「ファンネル」を過熱する虞あるを以て通風を加減すべきこと第二粘結性少なく其灰分は火床下に落ち易く使用に慣れざる火夫は過ちて火を落し汽力を低下するの虞あること第三、該炭を貯藏するに凡そ十尺高位迄

は排氣裝置の必要なきも其以上積み嵩ぬる時は排氣裝置を施すべきこと是れなり

▲撫順炭の分析表に據れば比重一、二七六、水分五、七一七、揮發分四〇、六三五、骸炭五三、六四八、灰分三、八九〇、硫黄分〇、五三〇、發熱量六、八二〇カロリ窒素含有量百分中一、五〇〇にして其重量は四十二方尺を以て一噸とす

▲撫順炭坑の始めて滿鐵經營に移りし當時に在りては各種の施設未だ備はらず採炭量の如き僅に一日四百噸以內に過ぎざりしが爾後前坑長松田博士の計畫に基き從來の千金寨、楊柏堡、老虎臺三坑以外新たに大山、東郷二坑を開鑿して之を營業坑とし更に大正三年古城子露天掘及萬達屋斜坑を開鑿せり此等諸坑の完成する曉には一日能く七千噸の出炭力を有するに至るべし各坑とも電氣機械其他附帶の諸設備を施し採炭運炭共に些の遺憾を見ず殊に大山、東郷の二坑は當路者の最も意を注ぎし處にして最新學理を應用して排水、通氣其他一切を完備し世界稀れに見る所と稱せらる、而して各坑を通じて汽罐（BW水管式二十四箇ランカシャー型十九箇小形汽罐二十二箇）汽動諸機械（運炭機十六箇、喞筒二箇、扇風機三箇）電動諸機械（運炭機四十三箇、喞筒六十七箇、扇風機二箇、空氣壓搾機二箇、選炭機八箇、採炭機六箇、採砂機四箇、其他使用電動機七十二箇）安全燈、（ザイベル一萬一千三百七十四箇、ウォルフ測量燈五十一箇、瓦斯檢定用二箇）炭車（鐵製車輛數四千七百八十二箇）等を設備せり

▲滿鐵會社は撫順炭坑の開發と共に炭坑の附帶事業として千金寨に新市街を建設せり街區は殆んど碁盤形をなし道路は全部土砂を敷き込み人道及車道に分れ其兩側には下水溝の設備完全す家屋は凡て煉瓦造にして平屋二階建相半ばし炭坑事務所、驛、學校、病院等結構壯麗なり附屬地內の戶數日本人二千四百六十六戶、支那人一千五百九十七戶、人口日本人六千五百七十三人、朝鮮人五十三人、支那人一萬三千四百三人なり

▲會社は市街經營と共に社宅、公園、公會堂及炭坑倶樂部を設けて炭坑就業員の利便を圖り教育機關として小學校、實業補習學校を設け衛生機關として炭坑醫院あり一般患者を診療し又炭坑用の外水道、電

氣、瓦斯を市民に供給し其他市場、屠畜場、火葬迄場墓地に至る迄各種の設備完全せり

▲炭坑使用人は職員二百四十五名、雇員二百五名外に傭人日本人千四百四十八人、支那人一千八百九十二人、採炭苦力九千八人（支人）、苦力世話人三百四十六人（支人）、常役夫日本人百五十五人、支那人七千二百四十四人、臨時夫日本人一名、支那人二千七百二十九人、總數人員二萬三千二百七十五人の多數に上る（大連滿鐵會社參照）

諸營業

◉日東洋行　撫順曙町五番地（電話六三番）

營業　土木建築請負

當洋行は個人經營にて明治四十一年六月の開設なり

營業主　坂本　格　福岡縣八女郡豊岡村一五三三番地慶應元年三月生、夫人すみ三十五歳、男二名、女二名

◉大松號　撫順明石町二丁目二番地（電話二九番　振替大連七一九番）

營業　農園、精米及石炭販賣

當號は個人經營にて明治四十二年三月の開設なり同年四月老虎臺に所有する水田五反三畝に對し備前及札幌の種籾を試作したるに備前種は失敗に歸したり翌年は興京附近に於ける種籾を植へたるに成績佳良なりしを以て四十四年度に滿鐵會社より古城子に五町歩を借受け炭鑛の餘水を無償にて貰受け水田を開拓し爾來年々擴張して二十五町に達したる處大正三年會社が露天堀りを開始せし爲め右貸下地の內十五町歩を沒收せられ大正四年には其全部沒收せらるゝに到りたれば更に會社に交渉して其援助の下に奉天驛より西六日里なる太堡に七十町歩を、撫順の東六日里の東祠に四十町を支那人より一年の契約にて租借し土佐衣笠の種子を栽培したるに成績太だ佳良にして一反歩に對し二石五斗の收獲ありて斯業の前途確實となりたれば近く東祠に模範農村を設立する筈精米業は四十三年十月より開始し清水式、敷島式、グランド式各一臺宛を裝置し一ヶ年の精米高一千五百石に及ぶ

營業主　大江惟慶（人事參照）

◉藤間洋行　撫順元町七番地（電話一六番）

營業　質、並雑貨

當洋行は個人經營にして大正二年八月の開設なり

營業主　藤間嘉一郎　島根縣邇摩郡宅野村七一番地、明治二年八月二十日生、夫人くら二十三歳

◉牧野呉服店　撫順　電話四番

營業　呉服反物類

本店は奉天十間房にありて當店は明治四十年六月の開設なり（奉天牧野呉服店參照）

營業主　牧野實四郎

◉梅田洋行　撫順西町一六番地（電話四一番）

營業　呉服並雑貨

當洋行は個人經營にして明治四十年四月の開設なり

營業主　梅田榮之助　大阪市南區安土寺橋町三丁目二四番地、慶應二年四月三日生、夫人りう三十五歳、男一名

◉玉井洋行支店　撫順仲町（電話三九番）

營業　米、酒、醬油及び雑貨販賣

當洋行は個人經營にして本店は大阪に在り當支店は明治三十九年五月の開設なり（遼陽玉井洋行參照）

營業主　玉井信之輔

支配人　竹田敏忠

◉和泉競賣所　撫順新町一番地（電話一一番）

營業　呉服並に雑貨

當競賣所は個人經營にて明治四十一年八月の開設なり

營業主　和泉槇次　香川縣綾歌郡阪出町一六八二番地、文久二年十月二十五日生、夫人さき四十七歳、男一名、女一名

◉石原時計店　撫順元町五番地（電話七番）

營業　時計商

當時計店は個人經營にして明治四十一年六月一日の開設なり

營業主　石原純一　廣島縣廣島市西地方町一九九番地、明治十四年四月十五日生、夫人いわ二十九歳、男一名、女一名

●荻野洋行　撫順上町二一番地（電話六番）

營業　質

當洋行は個人經營にして明治三十九年二月十一日の開設なり

營業主　荻野　玄八　東京市芝區西久保巴町六一番地明治三年七月生、夫人まさ子三十八歳、男五名、女二名

宗教團體

●本派本願寺撫順出張所　撫順敷島町（社内電話九六番　公衆電話一〇三番）

▲日露戰役當時笠達師從軍開敎師として撫順に來り平和後留錫引續き開敎所を設けて布敎に從事し小學校をも經營せしが其後小學校は滿鐵會社に引渡せり四十年滿鐵會社は工費一萬四五千圓を投し炭鑛寺院として現在の本堂を新築せり大連別院を除いては沿線第一の規模壯大なる者なり開敎師は笠達師の後薩雲謙敬二師を經て大正二年十一月現長岡師來任せり現在檀家は在留民の六分を占め戸數は七百戸に達す大正三年五月眞行會起り會員五百餘名にて山上炭坑庶務課長は其副會長たり同年七月より日曜學校を開始し在籍兒童二百餘名に上る

主任　開敎師　長岡　覺性（人事參照）

信徒總代　坂本　格

●曹洞宗撫順布敎所　撫順

▲數年前石見國禪僧門行則師は撫順新町に於て醜陋なる支那人家屋を借受け土間に起臥して苦行托鉢しゐたりしが大正三年六月より師の爲めに一寺を建立せんとの議信徒の間に起りて同月末より工事を計畫し終に工費三千餘圓を投じて本堂を新築し其竣成するや同寺は大正四年二月大連常安寺の末寺となり開基の行則師は去つて他に往けり目下檀信徒の數一百餘戸あり更に建築費三千四百圓を投じて庫裡其他の增築計畫中なり

主任　佐々木詮馬　島根縣濱田町地久寺住職



本溪湖

概説

▲本溪湖は奉天の東南百二十支里の地點にあり市街は火連寨河の太子河に注入する交會點より支流に沿ふて龍洞に至るの各地に擴がり四面殆んど山岳を以て蔽はる此地元と遼陽府の治下にありしが光緒三十二年縣衙門を置き初めて縣治を施したり然るに土地邊僻なるに加へ清朝の運命漸く傾き威令殆んど行はれず遂に馬賊の巣窟と化し其後日露戰爭に際し我軍此地を占領するに及び馬賊等我軍の指揮を仰ぐに至り本溪湖の統治權は全く我軍政の下に在るに至れり此時に當り時の知縣周朝霖氏は適宜邊界を劃清して諸般の制度及機關を整頓し大に縣治に努めしかば彼是相俟て商民此に始めて小康を得、次て鐵道の布設に伴ひ交通の利便は一層産業の發達を促進して終に今日の現況に到れり住民の多くは漢人にして滿人は之に次き其數五千人内外なり市街は東西に長く火連寨河は市の中央を流れ河西には煤鑛紅窰等多く河東は商業區をなす附屬地(新市街)は河東街の東端に接し日支人の移住する者日に増加しつゝあり氣候は大陸的にして夏は最高氣溫三十三度を示し冬は零下二十五度以下に降る衛生狀態は佳良ならず

▲滿鐵附屬地は面積約十六萬坪、安奉線改築に伴ひ明治四十三年始めて工事に着手し道路延長千間に及び水道下水溝、墓地、火葬場、葬祭場等の設備皆完成せり會社が此等の爲めに費やせし處は大正三年度末迄に十九萬圓に達せり此他小學校、日語學堂、醫院及社宅の設備あり在住者一千二百餘人にして炭鑛及製鐵事業の發展に伴ひ益々増加する傾向あり而して官衙には我れに警務支署、郵便局あり支那側には知縣衙門、審檢廳、巡警分局、兵營等あり

▲當地は炭坑及製鐵を以て名あり此の外煉瓦、石灰製造あり商業は僅に礦山就業者に雜貨品を供給するに止り金融機關の大なるものなく安東銀行支店及小規模の貯金組合あるのみ輸出は石炭、煉瓦及石炭コークス等にして輸入は麥粉、綿布、石油、其他日用雜

貨品なり而して大正三年度に於ける當驛發着貨物は發送三四一、八二九噸、到着六〇、三五一噸なり

諸營業

◉本溪湖煤鐵公司　本溪湖（電話煤鐵局四七番）

營業　採炭、製鐵、コークス製造販賣

當公司は資本金七百萬圓の日支合辦の株式組織にして滿洲に於ける同組織中の最大なる者なり本公司創立者なる今の男爵大倉喜八郎氏は明治三十八年十一月時の關東總督府（在遼陽）に石炭採堀を出願して其許可を得、翌三十九年一月開坑式を擧げたり當時は其內容も猶微小なる者に過ぎざりしが爾來五箇年來支那官憲側に種々交涉の結果大倉氏は奉天總督錫良氏と會見して資本金二百萬圓（日支等分出資）の日支合辦の本溪湖煤鑛公司を成立せしめて四十四年一月一日其開辦式を擧行せり然るに大倉氏は石炭のみにては近く撫順の大炭山を控へ且つ海岸線を去ること遠くして經營至難なれば製鐵業を兼營するの要を認めて同年十月六日奉天に於て總督趙爾巽氏との間に製鐵事業經營の調印を終り資金を四百萬元に增加し本溪湖煤鐵公司と改稱したるが更に大正三年一月の總會に於て三百萬元を增資して總額七百萬元の資本となしたり

炭脈は本溪湖市街の一端より照山を貫き太子河床を橫りて顯王墳の地下に達し其炭質は無煙炭にして最も製鐵用に適し又コークスを製造するに宜し現在採炭高は一年四十萬噸にして滿鐵、八幡製鐵所、德山海軍練炭所及滿鮮市場に供給し外に副產物のコークスを廣く滿鮮市場に販賣せり

製鐵所は目下製鐵の第一步たる銑鐵の製造に熱中し製鋼は漸次著手するの計畫にして其設備としては一日の製產高百三十噸の熔鑛爐二基を建設（其一基は本年一月より作業を開始せり）捲揚塔、送風機、（獨逸ＡＥＧ會社製ターボブローワー）三臺、熱風爐（マックルァ式三重煽道）六基、除塵器二基、瓦斯洗滌器、其他鑄床、鑛滓池、給水喞筒、原動力用のボイラー發電所等一切を具備し大正四年一月十三日午後四時半大倉氏親ら壯嚴なる熔鑛爐の開爐點火式を擧

行したり爾來成績最も良好にして其出鐵量は一日平均百二十噸にして最大銑量一晝夜に百四十六噸なり而して其品質標準は炭素三パーセント以上、「シリコン」三乃至四パーセント、燐〇、〇六萬分の六前後、礦黄〇、〇五以下、滿俺〇、二〇位の處に在り製鐵原料として公司が今日採掘するものは廟兒溝鐵山を筆頭とし梨樹溝、歪頭山、太河沿、八盤嶺、通遠堡、臥龍村、貴石溝、馬騎溝、青山背、王子崗、駱駝背、鞍山店等にして鑛量豐富に亦其の種類も磁鐵鑛、赤鐵鑛、褐鐵鑛、其他炭酸鐵鑛等各種に亘り其中の最富鑛は實に七十パーセント近くの鐵分を含有し之れを他の東洋產即釜石、輪西、タタ、ベンガル產等に比し遜色なきのみならず燐の分量僅少なる點に於ては他に類例なく之を西洋製ヘマタイド鐵鑛に比するも殆んど同等の品位を保てり最も斯る富鑛は其量に於て無盡藏と云ふを得ざるも三十パーーセント乃至四十パーセントの鐵分を含有する鑛石は無盡藏なるが如し要するに當公司の製鐵事業は創業日頗る淺く猶幼稚の境に在るも此業の最大基礎たる原料の鑛石及コークスに適する石炭の分量品質共に優良なる上に配合劑として必要なる石灰石の產出も附近に多量にして亦た地形が交通運搬の便にも缺如する處なければ國家的最重要の大事業として其前途を祝福す可し

總　　辦　島岡亮太郎　總　　辦　趙　臣　翼
販賣科長　高橋　利吉　秘書科長　宮崎　豐策
會計科長　矢幡　健五　庶務科長久野治郎太郎
熔鑛科長　杉本　惣吉　機械科長　梶山　又吉
坑務科長　堀　市次郎　製材科長　竹田　錬二
機械科電氣技師　小島喜久馬
坑務科技師　吉田佐太郎
附屬病院長　小河愛之助

◉溪廠輕便鐵道　事務所本溪湖永利街

營業　鐵道輸送

本溪湖より太子河上流に沿ふて城廠に到るの間概測八十哩の內本溪湖より牛心臺炭鑛に到る本支線十五哩は大正二年秋開通したり此鐵路の起源に就きては日支人間に幾多曲折せる徑路を經て後大正二年秋某支那人は支那政府より其敷設權を獲得し鐵嶺の權太

親吉氏其工事を受負ひて大正三年一月本溪湖牛心臺炭鑛間本支線十五哩の工事竣成して運轉を開始したるが大正四年四月より滿鐵會社に於て之れを引受け經營し本溪湖地方事務所主任其管掌の任に當れり本線路の未成區域たる牛心臺以往は山嶽重疊、溪谷盤旋して其工事頗る難苦なる可きが鑛山鐵道としての本線路は頗る有價値なれば滿鐵會社に於ては早晩之れが敷設工事に着手するならんも其時期及之れを舊安奉線式の輕便式となすか或は完全なる廣軌式となすかに就きては猶愼重の研究調査を重ねつゝあるが如し

主任　増尾鉞三郎

◉日支合辦 牛心臺煤鑛彩合公司　奉天省本溪湖牛心台（電話本溪湖四三番）

營業　炭鑛

本炭鑛は二百年前より支那人の採堀せるものなりしも微々として振はず邦人の本炭鑛に指を染めたるは明治三十八年庵谷忱氏が軍政署の許可を得て採堀したるに始まる同四十五年石本鏆太郎氏之れを繼承し大正二年奉天商務總會等と合辦の契約を訂立し日本側は石本鏆太郎氏を、支那側は周自新氏を各總辦とし當初の鑛業條例に據り日支合辦組織として採鑛し居れり

南滿鐵道株式會社鑛業部販賣課に採炭全部を委託し其熱心なる努力により漸次販路を擴大し滿洲一帶及山東省朝鮮其他内地に試賣せられつゝあり現在の採炭高は一日三百噸内外なるも販路擴張せらるゝ曉には目下の設備にて猶一日一千餘噸を採堀し得べし

總辦　石本鏆太郎（人事參照）
協理　石本權四郎（人事參照）
總辦　周自新
董事　庵谷忱（人事參照）
協理　劉化南
出張所　本溪湖太子河畔

◉安東銀行支店　本溪湖永利街（電話二一番電略「アホ」又は「ア」振替大連八六八番）

營業　一般銀行業

本店は安東縣に在り奉天の南滿銀行は創立後本溪湖

支店を開設し營業好良なりし處大正四年夏同行業務蹉跌し整理の結果同支店を安東銀行に讓渡たし同年八月二十七日より現名稱に改變したり

主任　鈴木　致　東京市京橋區南紺屋町一六番地　四十一歲、夫人あや三十六歲、男三名

◉野村號　本溪湖永利街（電話長一八番）

營業　石灰製造、質

營業主　野村　一郎（滿鐵諮問委員）

◉伊東組　本溪湖永利街（電話長八番）

營業　建築受負、煉瓦製造

營業主　伊東　豊吉

◉大塚商店　本溪湖永利街（電話一〇番）

營業　雜貨

營業主　大塚治太郎

◉小野商店　本溪湖永利街（電話一六番）

營業　雜貨

營業主　小野才三郎

◉松林商店　本溪湖永利街（電話二〇番）

營業主　松林　爲吉

◉岡崎商店　本溪湖永利街

營業　雜貨

營業主　岡崎　慶治（滿鐵諮問委員）



安東縣

概説

▲安東縣は北緯四十度六分五十二秒、東經百二十四度四十秒に位し奉天を距る東南百七十一哩、鴨綠江を溯ること十六哩の地點にあり群山西に峙ち大江東に環りて朝鮮新義州と相對し北靉河に枕して形勝の地位を占む氣候は前に大江を環らし後に山脈を控へたる爲め幾分緩和せらるゝと雖も猶氣温最高三十七八度、最低零下三十餘度に昇降し且つ大氣濕潤に過ぎて冬季は極度に乾燥するを以て概して健康地と稱するを得ず一年を通じて最も好季節なるは四、五月の交にして百花一時に開き山青く水清し

▲當地附近一帶の地は元と廣漠たる原野にして狐兎の窟なりしか前に不涸の大江を控へ其上流には幾多の利源を包藏せる爲め清の咸豐、同治年間山東及遼東沿岸より漁夫農民等の移住し來るもの多く遂に一小部落をなすに至り初めて其名を沙河子又沙河鎭と稱せり是れ今日の安東なり從來支那政府は此地方を邊外と稱し王化不洽の處とせしが光緒二年時の鳳凰城道臺陳氏能く治を謀り農を勵まし商を招き自ら邊外開拓の任に膺り縣治を沙河子に建設せり積匪已に平らくに因り安と云ひ地の東隅に位するを以て東と云ひ以て安東と命名す其後日淸日露の二大戰役は當地發展の緣由となり三十七年當時には僅に七千の支那人と若干露軍の駐屯するに過ぎざりしも我戰捷に伴ひ兵站基地として幾千の苦力を招致し次で京義鐵道の竣工と安奉鐵道の起工とは邦人の渡來を促し數年を出でずして鴨綠江岸の一大都會となり現今に在りては滿鮮貨物の中繼地として將た又戎克貿易港として經濟上重要の地位を占むるに至れり

▲元來安東なる名稱は新舊市街を總稱せるものなるが現在にては普通七道溝なる新市街を指し舊市街は沙河鎭と稱し之を區別せり新市街は明治三十七年時の我軍政官が經營せし日本式市街にして市區井然として碁局の如く道路は凡て砂利を敷込み其中主要街に在りては人道及車道に區分し境界には樹木を植ゐ美觀を保てり又市街の周圍には堤塘を築きて江水の

氾濫を防ぎ溝渠を鑿ちて排水に備へたり

▲安東驛は元と鐵一浦と稱し現驛を距る東半里の鴨綠江岸に在り日露戰役當時急設せられし安奉輕便鐵道の起發驛なりしが四十年四月同鐵道の滿鐵會社に引繼がるゝに及び當驛も其所管に移り初めて驛名を安東縣と稱し同六月一般營業を開始し次で四十四年十一月には輕便線は全く標準軌條に改築せられて當驛に於ける諸般の設備も亦整ひ四十五年六月更に安東驛と改稱したり廣軌鐵道の開通と同時に朝鮮總督府所管の鴨綠江大鐵橋も亦竣工するに及び滿鮮鐵道の連絡は直ちに實行せられ當驛は其中繼驛として一躍事實上主要驛の伴に入り次で大正二年六月滿鮮國境通過輸出入貨物に對し支那政府は成規の關稅額より其三分の一を減免するに至り從來大連を經由せし綿布類の當驛を經由するもの漸く多く加之、院、鮮、滿の三線聯絡特定運賃實施せられ驛勢頓に發展せり然れども當驛は畢竟旅客貨物の通過驛にして大正三年度に於ける當驛乘車客數七萬五百八人（内連絡扱に係る者二萬六千七百二十九人）、降車客數六萬四千二百三十九人、（内連絡扱に係るもの二萬三千五百九十七人）、貨物發送十六萬一千八百四十九噸、（内連絡扱に係るもの四萬四千四百十噸）、到著貨物三十二萬千四百八十五噸、（内連絡扱に係るもの十萬六千九十三噸）なり又安奉鐵道は今や世界的の交通機關となり其沿線の山水は滿洲に稀れなる奇勝にして二十四の隧道、二百餘の橋梁を過ぐる毎に眼界改まりて千山萬水の交々旅眼を迎ふるの勝景は筆紙猶之れを描き難し

▲住民は邦人、支那人、朝鮮人の外若干の歐米人あり支那人は多く沙河鎭に居住し約三萬と稱す邦人は約二千戸七千人鮮人約六十戸三百人となす當地方の支那人は、性訴訟を好み賭博を嗜み風習甚だ惡劣なり家屋は煉瓦造りの者あるも大部分は木造二階建にて一體に日本風を帶び他の滿洲各地より來れば宛も母國の地方都會に到るの思ひあり

▲安東市街は營口に同じく其大部分居留民團の管理に屬し各般の施設亦皆民團の經營に係れり新市街は明治三十七年軍政當時の應急施設にて太だ不完全なりしが市民の發展と與に道路及水道改修工事は必須問題として當事者は常に之れが計畫に腐心したるも

多額費用の出處に苦み行惱みの姿なりしが大正二年三月居留民會通常會に於て該一部工事改修費として金二十四萬圓借款の議を決定し同年五月十四日監督官廳の認可を經て即時著手し全工區を三區に分ち大正二年六月二十一日第一區第二區の工事を起こし同年十一月十五日を以て竣工し大正三年十月第三區も亦た竣成し街衢の面目全く一新せり而して滿鐵の經營する附屬地は市街地の西隣約百五十萬坪にして從來會社は唯應急の設備を爲すに止まりしが安奉線改築と共に市區計畫を立て四十三年以來工事に著手し道路延長約六十間を築造し橋梁を架し下水溝を設け水道は四十三年より著手し附屬地外居留民團地域に亘りて其の必要部分を竣工せり又墓地、火葬場、葬祭場は既に其設備を終はり公園は未だ完成せざるも鎭江山腹勝景の地八萬餘坪を之に當て以て曳杖散策するに足る會社が是等經營の爲めに投せる處は大正三年末迄に約六十七萬圓に上る此他醫院及社宅の設備も既に完全となれり

▲當地を起點又は終點とする交通機關に鐵道及水運あり而して鐵道には安奉及京義の二線あり安奉鐵道は安奉輕便鐵道を改修したるものにして此の輕便鐵道は日露戰役中運輸機關として急設せられ我鐵道大隊は晝夜其工を急ぎ卅八年十二月全線の開通を見たるが同月北京に於て締結せられたる滿洲善後協約第六條を以て輕便鐵道を廣軌に改築し永遠に交通機關となすべきを規定し滿鐵會社は政府命令に基づき四十二年八月工事に著手し四十四年十一月を以て其全部を竣工して開通式を舉行せり時恰も朝鮮總督府所屬の鴨綠江大鐵橋竣工せしかば滿鮮鐵道の連絡は直ちに實行せられ安奉線は一躍世界的の交通機關となれり京義鐵道は其名の如く京城と新義州間を結び付くるものにして三十七年陸軍鐵道監部に依りて起工せられ翌三十八年竣功せり爾後統監府の管理に歸し次で朝鮮併合後は總督府の經營に移り以て今日に至る全線三百十哩標準軌條にして京城に於て京釜鐵道に接續し以て朝鮮縱貫線をなし又鴨綠江の鐵橋に依り安奉線に連結して歐洲通路の部分をなす

▲水運には五航路あり大阪安東線、（朝鮮輕由）芝罘安東線（大連寄港）天津安東線（大連寄港）營口安東線（大連芝罘經由）大孤山安東線是なり鴨綠江口より當

地迄十六哩の區間には龍岩浦口、三道浪頭及五道溝の三四箇所に淺灘ありて大型汽船の航行には適せざるも水勢稍々緩かにして水量亦豊かなれば滿潮を利用して一千餘噸の汽船を航行することを得又當地の下流約五哩三道浪頭には能く二千噸の汽船を泊すべく安東の副港として其缺を補ふに足る然れども海洋航路汽船の投錨地は鴨綠江口朝鮮側に屬する多獅島及門白にして同所と當地との交通は專ら滿鐵埠頭支所の小蒸汽曳船浮艀又は日本型帆船數十隻にて水陸の連絡を保てり又當地より上流帽子山に至る九十邦里間は平水にありては二三十石の艜子は自由に溯航することを得帽子山より長白府に至る約五十邦里間は急流にして水量少く木材編筏の流下區域たり

▲當地附近は山嶽起伏し平地乏しくして農産物の見る可きものなし林業として長白山麓鴨綠江上流の右岸一帶の地は千古斧鉞の入らざる一大天産林にして其面積鴨綠江渾江兩流域を合せ約二百平方里にして三十一萬餘町歩の陸地の全部が欝蒼たる綠林を以て掩はるゝ處は實に天下の壯觀なると與に亦天與の一大富源なり樹木の種類は黄花松（ラクヨウショウ）、紅松（チウセンマツ）、杉松の針葉樹、柞木、核桃木、楡木（ニレ）、椴木、水栢榴等の濶葉樹にして白松（ビャクシン）、赤柏松（アララギ）等の貴重樹も亦之を産す此等の樹木は其多數は山地にありて角材に造られ百數十里の流筏を經て安東に達す其流下期は六月乃至九月とす彼の江上舟を埋め木材賣買の盛に行はるるは實に此期節にあり、龍岩浦を中心とせる一帶の海面は魚族極めて豊富なるも漁期短かきを憾とす日本漁夫極めて少數なれば一帶の海上殆んど閑却せられたるの觀あるは惜む可し

▲輸出品の重なるものは木材、豆粕、大豆、小豆、山繭等にして重要輸入品は麥粉、砂糖、燐寸、セメント、雜貨等なり要するに當地は産物には木材の外山繭あるのみ其商業は通過貿易と謂ふに過ぎずして急速なる大發展を望み難きが如し

▲金融機關には朝鮮銀行、正金銀行の兩出張所、安東銀行、安東貯蓄銀行あり金融狀態は夏季閑散にして秋季には支那側に開淩豆の取引始まり豆粕の日本向輸出あり又冬物輸入期に入るを以て稍活潑となるを例とす通貨は馬蹄銀、小洋錢、朝鮮銀行券、日本兌換券、正金銀行鈔票及支那銀行發行紙幣とす當地

の馬蹄銀は一名元寶銀又は錦寶と稱し名の如く馬蹄狀をなし銀爐之を鑄造す其品位は牛莊芝罘のものに比し優良にして相場亦割高なり支那商人間の大取引には凡て之れを用ふ

△諸官衙には日本側は領事館、同警察署、警務署、郵便局あり又居留民團、獨立守備第四大隊本部、憲兵分隊、其他實業機關としては商業會議所あり支那側には縣、海關、稅務局、警務總局、郵政局、其他奉軍營及水師營等あり

△勝地には驛を去ること西北數町に鎭江山あり大江前に流れ安東の市街は脚下に開き滿鮮の山水悉く眸中に入る山に日露戰役の忠魂堂あり又禪刹臨濟寺あり最も登眺に適す

△安東は前に流域百餘里に亘る鴨綠の大江を控へ後に大連、營口、天津、芝罘に通ずる水運の便あると安奉及京義線に接續する本邦聯絡の機關あるとに依りて物資の聚散場地として次第に人口を增加し特に日露戰爭後に其數一時一萬人に達せしも秩序の回復と與に市況漸く萎靡して衰退に傾き安奉線改築工事に由りて姑く此頹勢を挽回したるも其竣功後は再び蕭寂たる舊態に返へれり安東の頹勢を挽回するの道は、一、上流東地方の經濟的發展、二、水田業經營の發達、三、鴨綠江の浚渫、四、吉林方面に通ずる鐵道の開設等に在るへし上流地方の發達は之れを急速に望み難きが鐵道は時機熟せは開設さる可し水田は大孤山近傍に約千町歩の良田ありて其開拓は現に太だ有望なり浚渫は近ろ滿鐵會社に於て二萬圓餘を投じて試行せしも失敗に歸し更に周密なる試驗的工事を施こす由にて前途見込あり若し成功せば此地の繁榮は立ろに期す可し

貿易、及雜販賣業

●三井物產會社安東縣出張所

安東縣四番通四の四號地　（電話一二七番）

營業　一般輸出入貿易

當出張所は明治三十九年の開設なり

出張所　主任　永原　正雄　（人事參照）

次席　佐久間　務

●東亞煙草會社 安東縣販賣所　安東縣三番通二丁目（電話二四九番）

營業　煙草販賣

本社は東京に又滿洲總販賣所は奉天に在り當販賣所は明治四十一年五月の開設なり

主任　大澤富二三（人事參照）

●滿洲屋呉服店　安東縣市場通六丁目一號地（電話一〇七番　振替京城二六六五番）

營業　呉服商

當呉服店は個人經營にて明治三十八年五月の開設なり

營業主　藤田榮次郎　大阪府堺市小林寺町一六番地、三十九歳、夫人いさ三十九歳、男一名

●日東洋行　安東縣市場通九丁目（電話二七番 二〇四番　五二番　振替一一三八番）

營業　精米販賣並に貿易

當洋行は個人經營にて明治三十八年十月の開設なり

大正二年十一月敷島式精米機五臺、研磨機一臺、を裝置し精米部を開設す新義州及平安北道宣川に出張所あり

營業主　久間善助（人事參照）

●石崎材木店　安東縣市場通二丁目

營業　材木

當店は個人經營にて明治四十年十一月の開設なり

營業主　石崎久三郎　岐阜縣岐阜市東材木町、四十歳　夫人すみ三十二歳

●渡邊支店　安東縣市場通五丁目（電話一〇五番）

營業　和洋雜貨

本店は大阪市西區靱南通四丁目にあり個人經營なり當支店は明治三十七年七月の開設にして安東縣舊市街興隆街に分行あり新義州に支店あり

營業主　渡邊末吉郎　大阪市西區靱南通四丁目六番地

●藤田洋行　安東縣市場通五丁目

營業　金物雜貨、鍛冶屋

當洋行は個人經營にて明治四十一年十月の開設なり

營業主　藤田駒吉　鹿兒島縣薩摩郡隈之城向田六六番地、四十八歳、夫人ふさ四十三歳男三人、女二人

村木洋行

安東縣大和橋通七丁目二番地（電話六七番 電略「ム」又「ムラ」 振替大連一四一三番）

營業 日支貿易、並諸雜貨食料品一切卸賣、土木建築請負、日本石油會社販賣店

當洋行は個人經營なり明治三十七年五月の開店にして食料品を販賣し各官衙其他の用達をなし四十一年より土木建築業を兼營せり大正三年十二月出火の爲め全燒し翌四年五月宏壯なる煉瓦二階建の現新築家屋に移轉せり

營業主 村木助治（人事參照）

工事擔當員 村木光治

達摩商會

安東縣市場通五丁目（電話七〇番 九五番）

營業 貿易、並に銃砲火藥、精米、自轉車、疊製窯、並に帝國海上運送火災、大同生命、大正生命の各保險會社、日本公債株式會社、帝國公債信託會社代理店、帝國麥酒會社特約店

當商會は個人經營にて明治三十九年の開設なり大正四年一月安東名産館を開設して其理事となる

營業主 高橋貞二（人事參照）

（別項安東木工廠參照）

村岸呉服店

安東縣市場通五丁目

營業 呉服

當呉服店は個人經營にて明治三十九年四月の開設なり

營業主 村岸治三郎 滋賀縣犬上郡豐郷村字石畑 四十五歲

渡邊呉服店

安東縣市場通七丁目（電話一四〇番）

營業 呉服並雜貨販賣

當店は個人經營にて明治三十八年十一月の開設なり

營業主 渡邊源吉 滋賀縣犬上郡豐郷村四九院、慶應三年一月生、夫人たき四十歲、女一名

井上誠昌堂藥房

安東縣市場通七丁目（電話七三番）

營業 藥種賣藥

本店は富山市に在り當支店は明治四十年の開設なり（奉天井上誠昌堂參照）

主任 井上 嘯六 富山縣高岡市愼町一〇番地、文久元年三月十六日生、嗣子精一三十八歳

●岡村洋行 安東縣大和橋通九丁目（電話三三〇番 振替東京七七三七番）

營業 柞蠶輸出

營業主 岡村 泉 東京市下谷區五條町四番地、四十二歳、夫人ます子二十九歳

當洋行は個人經營にて明治四十二年九月の開設なり

●井原商店 安東縣四番通六丁目（電話三三三番）

營業 金物船具塗料販賣

營業主 井原 關藏 德島縣美馬郡貞光町、三十一歳 夫人むつ子二十一歳、女一名

當商店は個人經營にて明治三十八年五月の開設なり

●中原商店 安東縣市場通七丁目（電話三五番 振替京城一三二四番）

營業 和洋紙文具類販賣

當商店は明治三十八年二月の開設にして個人經營なり經營者は當店の外泉屋と稱する酒類販賣店並に中原印刷所を兼營せり

營業主 中原 政吉 廣島縣賀茂郡川尻村一〇三番地 三十八歳、夫人いつ三十二歳

●山下商店 安東縣江岸通二丁目（電話二七四番）

營業 製材販賣

營業主 山下 五郎 熊本縣上益城郡七瀧村二九五五番地、四十八歳、夫人秋子三十歳、男一名

當商店は個人經營にて明治四十年四月の開設なり

●合資會社西播洋行 安東縣市場通一丁目（電話一三九番）

營業 貿易並に精米

當洋行は資本金一萬二千六十四圓の合資會社にして大正二年九月十三日の創業なり積立金二千六十四圓を有す

代表社員 和田與一郎

貿易部主任 阿部 繁男

精米部主任 大西 助治

●文榮堂 安東縣市場通四丁目四號地（電話三七番 振替京城一二八七番）

營業 文具類書籍、並に新聞取次販賣

當堂は明治三十八年十月の開設にて個人經營なり

營業主 弓倉 悦藏 和歌山縣日高郡稻原村南谷六六三番地、二十九歳、夫人操二十歳

◉田中商店　安東縣四番通六丁目（電話二一五九番　振替大連一〇四七番）

營業　履物類一切販賣並に精米

當商店は個人經營にて明治四十年三月の開設なり翌年二月より精米所を創設す

營業主　田中　文助　山口縣大島郡家室村西方字地家室　三十八歳、夫人しも三十六歳、男三名、女一名

田中精米所　三番通六丁目（電話三五一番）

主任　田中　淺吉

◉陳　天　號　安東縣舊市街（電話四三番）

營業　柞蠶輸出

當號は個人經營にて明治四十四年四月の開設なり

營業主　近藤松五郎　三重縣員辨郡白瀨村本郷、三十九歳、夫人ゆき子二十九歳

◉頭川洋行　安東縣市場通七丁目四番地（電話二二四番）

營業　日用雜貨販賣

當洋行は個人經營にて明治三十八年の開設なり

營業主　頭川　善平　富山縣高岡市金屋町四一番地　明治五年四月生

◉寺田商會　安東縣市場通六丁目（電話二三一番　振替京城一三五二番）

營業　時計並に貴金屬類販賣

當商會は個人經營にて明治三十七年五月の開設なり

營業主　寺田駒二郎　滋賀縣滋賀郡下坂本村五三一番地　四十八歳、夫人たか四十歳、男一名

◉本莊酒店　安東縣大和橋通七丁目（電話一一七番　振替大連一〇五六番）

營業　酒類並に精米販賣

本店は京城永樂町二丁目にありて個人經營なり當店は明治三十八年に開設す初め宇都宮支店と稱したりしが大正三年十月現名に改稱せり

營業主　本莊彌之助　福岡縣三潴郡三潴村草場、四十四歳、夫人たつよ二十五歳

銀行業

◉正金銀行安東縣出張所　安東縣大和橋通九丁目一號地（電話一四三番　五番）

營業　一般銀行業

當出張所は滿洲各地の同行出張所と同じく軍用手票の回收と金庫事務取扱等の特種目的を以て日露戰役當時設立せられたり現今に於ては金庫事務の外同行の特色たる爲替業務を主とし傍ら一般銀行業及滿洲特貨を取扱ひ猶銀勘定をも取扱へり

主任　平塚半次郎（人事參照）

◉朝鮮銀行安東縣出張所

安東縣市場通七丁目（電話四二一番　振替大連六〇三番　京城一一五番）

營業　一般銀行業

當出張所は日露戰役當時我鴨綠江軍の金庫證券を取扱ふべく三十七年五月在京城第一銀行支店員同軍に從事して當地に滯在し傍ら邦人の爲替及預金事務を取扱ひたるに起因し平和克復後は當地の位置朝鮮に接し對岸新義州との取引盛にして金融機關の存續を必要としたれば從來同行の朝鮮に於て發行せる銀行券の流通を圖り且つ國境に於ける幣制の統一を期するの目的を以て其儘出張所として一般銀行業務を開始したり其後第一銀行は韓國銀行の創立と共に其事業を後者に引繼ぎ更に四十三年九月朝鮮併合後朝鮮銀行と改稱せらるゝや同行出張所として今日に及ぶ由來京城本店の直轄なりしが大正四年十一月より同行大連支店の監督を受くることゝなれり當地邦商間とは最も密接なる關係を有す

出張所長　阿部　讓（人事參照）所長代理中野　滋

◉安東銀行

安東縣五番通八丁目（電話一三番　振替大連二四六番）

營業　一般銀行業

當銀行は資本五十萬圓（內拂込額十二萬五千圓）總株數一萬株より成る日支合辦の株式會社にして明治四十年三月の創設に係る當時土地有力者の合同出資に成る安東貯蓄ありて貸金業を營み來りしが四十四年五月安東銀行と改稱して現組織に改めたり爾來營業の成績順調にして大正四年上半季に於ける結算に於て純益金一萬三千六十七圓四十七錢、前期繰越金一千五百六十一圓九十八錢を合せ計金一萬四千六百二十九圓四十五錢を計上し內法定積立金、別途積立金營業用建物償却金、什器償却金、役員賞與金及交際費、損失補塡準備金等を差引き金六千二百五十圓（年

一割）を株主に配當し猶後期に千九百七十九圓四十五錢を繰越せり

專務取締役　渡邊喜八郎
取締役　黃慶階　河內芳太郎
高橋貞二（人事參照）　渡邊末吉
村本助治（同　上）
監査役　王筱東　藤田駒吉
藤田榮次郎　青井佐太郎
支店　撫順、本溪湖、安東縣舊市街

◉安東貯金銀行

安東縣五番通八丁目二號地
（電話日一六八番　支一二八番）
振替（京城二六五一番
大連一六二番）

營業　一般銀行業

當銀行は資本金拾萬圓（內拂込濟二萬五千圓）總株數二千株より成る株式會社にして明治四十四年四月の創立なり普通銀行業務の外貯蓄預金を取扱ひ零碎なる預金の吸收に努めつゝあり近く市場通に新築移轉の計畫あり

大正四年上半季に於ける決算に於て純益金五千二百八十八圓三十七錢を計上し內法定積立金、別段積立金役員賞與金等を差引き金一千五百圓（年一割二分）を株主に配當し尙後期に八百四十八圓三十七錢を繰越せり

專務取締役　藤平泰一（人事參照）
取締役　藤平伊藏　山田造酒治
式村茂　杉原佐一郎（同　上）
監査役　平尾爲彥

製造業

◉鴨綠江採木公司

安東縣八番通四丁目

營業　製材販賣業

鴨綠江採木公司は明治三十八年十二月二十二日北京に於て締結したる滿洲に關する日清條約附屬協約第十條の規定に基き明治四十一年五月十四日協定の日清合同材木會社に關する取極並に明治四十一年九月十一日奉天に於て兩國政府委員の協議決定せる業務章程に依り兩國政府の合同事業として成立したる日

支合辦の國際的會社なり
本會社に關する兩國政府の協定したる處に據れば本會社の資本金は三百萬元にして日清兩國より各半額宛出資し營業期限は二十五箇年、滿期後更に清國政府に出願して延期の許可を求むることを得會社は其の收入中より一切の費用を引去りたる純益の百分の五を報効金として清國政府に上納し殘餘の利益は日清兩國株主に均等分配す純益の百分の五を積立金とす此積立金の額は資本金の三分の一に達するを以て限度とす本會社に督辦一人を置き奉天督撫より東邊道臺に命じて之を兼任せしめて會社の事業を監督す
本會社は鴨綠江右岸帽兒山より二十四道溝に至る間該江面を距る六十清里内を畫定して界となし界内の木材採伐業を經營す而て畫定界外及渾江の森林は從來の清國木把の採伐に歸するも此等の木把の要する資本金は會社より貸與し其の採伐せる木材は江浙鐵路公司所要の枕木及渾江沿岸居民自用の木材は木把より直接買取り得る外其の餘は全部會社の買收に歸し會社は市價を案して之を發賣することゝせり本會社は此協定に基き明治四十一年九月二十五日を以て開業したり
鴨綠江右岸より年々產出する木材は年に依り甚だ不同あるも平均約百萬尺締内外にして明治四十四年度に於ける各種木材生產量は紅松、杉松、黃花松、雜木の角材及丸材を合せ總計九十八萬六千七百二十一連にして大正元年度は八十五萬六千二百八十三連に減じ同二年度は更に減じて五十五萬八千七百二十四連となりしが同三年度にありては一躍百七十二萬九千四百五十九連に增加したり今三年度に於ける生產木材の樹種別を示せば角材にありては紅松七十二萬六百五十三連、杉松五十八萬六千九百五十四連、黃花松二萬一千百八十八連、雜木十七萬七千二百七連、丸材にありては紅松四萬一千五百九十七連、杉松十六萬百三十四連、黃花松九千七百三十四連、雜木一萬二千〇十連にして此等運搬の筏數は六千二百六十六なり
鴨綠江材の販路として第一に數ふべきは天津を中心とせる渤海沿岸諸港にして北は營口、錦州等より南は龍口、芝罘、威海衛、靑島の諸港に及び此等地方は何れも鴨綠江材と深き緣故を有し既に二十年來殆

んど鴨綠江材の獨占に歸せり就中天津は其背後に北京の大市場を控へ其範圍頗る廣大なるが故に毎年鴨綠江材中の三割乃至四割を輸入す其れに次ぐは青島營口、芝罘等にして近年上海市場にも新販路を開き尙ほ進んで南京、漢口等の市場に及ばんとしつゝあり而して一面南滿洲に於ける大連、旅順は勿論奉天方面も亦安奉線の開通により鴨綠江材の新販路を開拓するに至れり元來大連、旅順は殆んど北海道材、奉天方面は北滿材の獨占にして鴨綠江材は僅に其一部に使用せらるゝに過ぎざりしが今日に於ては大部分鴨綠江材を使用するに至れり尙朝鮮に於ける木材界は殆んど內地材なりしも海運業の發展と木材に對する鮮鐵運賃の低減は翕然として其勢力を增大し今や朝鮮南海岸に於ける諸港は勿論鐵道沿線は近く平壤、京城より遠く釜山、元山に及べり斯く鴨綠江材の需要は年一年と增加し朝鮮に於ける鴨綠江材の輸入は年額二十萬尺締に達せり四十四年度に於ける本材の輸出總高は一百十萬連にして大正元年度に於て九十二萬四千連に下り同二年度は更に下りて七十三萬二千連となり大正三年度に至り百四十四萬八千連に增加したり今大正三年度に於ける本材の輸出先及數量を示せば安東四十四萬一千連、山東諸港四十二萬六千連、天津三十八萬一千連、朝鮮六萬七千連、營口二萬一千連、大連、旅順一萬七千連、奉天六千連、上海六千連、錦州三千連、其他滿洲一帶八萬連なりとす大正四年も亦木材の產額多量にして其輸出隆盛なれは會社の業務は益々好況に向ひつゝあり

督辦　方大英
理事長　林學博士　村田重治
同　錢　燦
總務課長技師　岩崎正一
同參事　葉家朗
度支課長參事　近藤錦太郎
同　王學來
通化縣通化分局長　副技師　宮津盛三郎
同分局長　副參事　張　鏗
長白縣長白分局長　技師　猿川直治
同分局長　副參事　黃鍾塊
臨江縣十三道分局長　技師　八木條次郎
同分局長　副參事　郭彥碩
同帽兒山分局長　副技師　平賀敬三
同分局長　副參事　沈愷濟
同八道江分局長　副參事　渡邊武夫
同分局長　副參事　譚保泰
安東縣六道溝貯木所　主任　技師　大津峻

安東縣漂木整理局長　參事　尾崎　濟
同分局長　參事　鄭　宗　達

◉鴨綠江製材無限公司

安東縣六道溝（電話四五一番　振替大阪一二六九四番　大連四一一三番　電略「オ」又ハ「オセ」）

營業　各種製材及販賣、各種製函及販賣、原木賣買、各種製材賃挽

明治三十七年日露戰役の初期大倉組は安東縣及び龍岩浦に大倉製材所を開設經營し來りたる處大正四年九月之を解散し鴨綠江採木公司と大倉喜八郎氏との合資を以て新に當公司を創設し從來大倉製材所の事業一切を繼承して同年十月一日より營業を開始せり

出資代表者　鴨綠江採木公司理事長　林學博士　村田重治
同上理事長鋑鑅　出資者　男爵　大倉喜八郎
業務擔當者　式村　茂
監査役　井坂直幹　同　近藤錦太郎

◉合資會社日興油房

安東縣江岸通一丁目二番地（電話三二番　振替京城四二六番）

營業　豆粕豆油製造

當油房は資本金八萬圓（全額拂込）の合資會社にして安部幸兵衞（在橫濱）金井佐次、金井佐左衞門の三氏及日陞公司の出資に由り明治四十二年十二月創立せり

代表社員　金井佐次（人事參照）

◉株式會社安東油房

安東縣江岸通二丁目一一番地（電話三六〇番）

營業　豆油、豆粕製造販賣

當油房は資本金五萬圓（內拂込金四萬五千圓）の株式會社にて明治四十五年五月の開設なり

社長　中野初太郎（人事參照）
專務取締役　久間善助（同上）
取締役　河口芳太郎　大木與二郎　山中正吉
監査役　平尾爲彥　藤田榮次郎　村木助治（人事參照）

◉安東縣窯業株式會社

安東縣大和橋通六丁目四番地（電話一三二番）

營業　煉瓦及瓦、其他窯業品製造販賣
當會社は資本金五萬圓（內拂込金一萬五千圓）の株式會社にして大正元年十二月の創業なり
取締役社長　中野初太郎（人事參照）
專務取締役　河口芳太郎
取締役　石原正太郎
監査役　式村　茂　久間　善助（同　上）

◎安東木工廠　安東縣七番通二丁目二番地（電話二一六番）

營業　建具、椅子、テーブル、象牙細工、木工細工一切
當工廠は資本金一萬圓（一口二百圓）より成る日支合同の組合經營にして鴨綠江材を加工して輸出すると同時に廣く同材を紹介して安東の利益を圖るを目的とし大正四年六月創設せり
主　事　藤平泰一（人事參照）
理事　高橋貞二（同上）　小濱爲五郎（同上）
監事　式村　茂（同上）　中野初太郎（同上）
相談役　近藤錦太郎（同上）　彼末德雄

◎福島日東號　安東縣舊市街（電話四四番　振替大連一二七六番）

營業　味噌、醬油製造販賣
當號は明治三十七年十一月の開設にて個人經營なり初め支那街に於て雜貨商を營みたりしか四十三年之を廢し同時に現在所に移轉し現業を開始せり現今一ヶ年の製造高は味噌二萬五千貫、醬油四百石內外に達す
營業主　福島　熊一　長崎縣佐世保市相生町、三十九歲夫人よし三十五歲、男二名、女三名

◎西利精米所　安東縣六番通六丁目三號地（電話二五一番　振替大連一一七一番）

營業　精米
當精米所は個人經營にて明治四十五年六月の開設なり精米機二臺、研磨機二臺を裝置す
營業主　池原　秀吉　奈良縣北葛城郡磐城村竹內、三十二歲、夫人いし子二十七歲、女二名

海運、及輸送業

◎三省洋行

安東縣市場通七丁目四番地
電略「サンセウ」又「サン」
電話四四〇番　五二一番
支電話九四番
振替大連一三〇九番

營業　大豆、豆粕、麥粉、砂糖、燐寸輸入、商船會社代理店、横濱火災海上保險、日本海上保險、英國サン生命保險、帝國生命保險、淺野セメントの各會社代理店

當洋行は個人經營にして明治三十八年四月舊市街にて輸出入貿易商を開始し三十九年三月より大阪商船會社代理店となり爾來三四年間は浮沈ありしも四十二年後漸く順調に向ひ四十四年三月現在所に移轉せり新義州濱町及龍岩浦に出張所を有す

營業主　中野初太郎（人事參照）
支配人　鹽谷孫七　外店員　四名
船舶部主任　大驛勝太郎　外四名

◉大連汽船會社安東縣出張所　安東縣舊市街財神廟街

營業　海運

本社は大連に在り當出張所は大正四年四月開設せらる都督府の命令航路なる安東、大連、天津間を天潮濟通二隻を以て毎月三回以上往復す貨物は鴨綠江木材を主とし其他柞蠶絲等あり貨客の汲收は支那買辦をして之れに當らしむ開店以來鴨綠江木材の出荷多くして業務殷振に赴けり

主任　是松盈進

◉山形材木運送店　安東縣江岸通二一號地（電話二一〇番）

營業　運送業

當運送店は個人經營にて經營者は明治三十九年渡滿初め大倉製材所に勤め四十年辭任し四十一年五月小沙河子に於て運送業を始め大正三年五月現在所に移轉し小沙河子を出張所とせり

營業主　山形壽軒彌　兵庫縣川邊郡尼ヶ崎町舊城內、四十八歲、夫人はく三十四歲

土木受負業

◉大倉組詰所　安東縣市場通三丁目（電話三一四番）

營業　建築請負業

當大倉組詰所は大正四年八月の開設なり

主任　田中彦三　栃木縣下都賀郡都賀、三十三歲、夫人榮子三十歲、長女百合子六歲、二女千枝子二歲

◉菅原組出張所　安東縣四番通四丁目（電話三二三番）

營業　土木建築請負業

本店は大連に在り當出張所は明治四十一年九月の創業なり（大連菅原工務所參照）

營業主　有賀定吉

出張所主任　田崎十三郎　岩手縣西磐井郡一關町一九番地、四十三歲、夫人さく三十一歲、男一名

◉支岐組安東縣出張所　安東縣五番通八丁目

營業　土木建築請負

當出張所は明治四十一年の設立なり

主任　小林遙　山口縣厚狹郡鵜崎村下今井、三十二歲、夫人たつよ二十四歲、長男滿須平二歲

◉山口組　安東縣六番通二丁目四番地（電話一〇一番）

營業　土木建築請負並に材木

當組は個人經營にて明治三十八年八月の開設なり

營業主　山口文次郎　東京府北豐島郡王子町大字王子、四十八歲、夫人ろく四十歲、男一名

◉重松建築部　安東縣堀割南通八丁目（電話三一八番）

營業　土木建築請負

當建築部は個人經營にて明治三十九年五月の開設なり

營業主　重松福次郎　愛媛縣伊勢郡原田村庇、三十三歲、夫人ひさ二十七歲

質、及貸家業

◉大原質店　安東縣四番通八丁目二番地（電話二〇六番）

營業　質並に貸家

當質店は個人經營にて經營者は明治四十一年三月渡滿同年九月當店を開設せり

營業主　大原清造　廣島縣沼隈郡田島村口ノ三〇二四番地、三十九歲、夫人いそ子二十七歲、男一名

◉椿井質店　安東縣五番通五丁目一番地（電話一六三番　振替大連二四三番）

元寶館　安東縣市場通三丁目

營業　旅館

當館は個人經營にて明治三十八年十二月の開設なり

營業主　久保勇吉　東京市京橋區[illegible]町一四番地、安政五年四月二十五日生、夫人こう四十三歳、男一名

安東旅館　安東縣大和橋通[illegible]丁目（電話五七番）

營業　旅館

當館は個人經營にて大正四年三月の開設なり館主は本業の外鴨江牧場を兼營せり（鴨江牧場參照）

營業主　矢吹寅吉　岡山縣[illegible]津[illegible]野村字北方、慶應二年八月生、夫人[illegible]四十六歳、男二名、女二名

富久壽美旅館　安東縣市場通四丁目

營業　旅館

當旅館は個人經營にして明治四十年一月の開設なり

營業主　山田造酒治　福岡縣山門郡柳川町、五十九歳、夫人さめ五十歳、男四名、女一名

喜久旅館　安東縣三番通四丁目一號地（電話一〇四番）

營業　旅館

當館は個人經營にて明治三十八年二月の開業せり

營業主　岡野平九郎　山口縣[illegible]、[illegible]歳、夫人[illegible]三十[illegible]歳、[illegible]

牧畜業

鴨江牧場　安東縣七番通[illegible]三番地（電話二二八番）

營業　牧畜

當牧場は個人經營にて明治四十一年十二月の開設なり牧場面積千八百坪、現在牛二十頭を有す新義州にも八百三十坪の支牧場ありて牛二十頭を收容す此他安東旅館をも兼營せり

營業主　矢吹寅吉

七道溝牧場主任　矢吹賢太郎

新義州支場主任　武井九馬吉

官衙、公共機關、宗教團體

在安東日本領事館

▲安東領事館は明治三十九年の設立にして其管轄區域は奉天省中鳳凰、興京、莊河、安東、寛甸、通化、懷仁、東平、臨江、の諸縣にして明治三十九年四月岡部三郎氏初代領事として赴任以來木部守一、萩嶋怡氏副領事の二氏を經て大正元年九月現領事就任し今日に及ぶ

領　事　吉田　茂（[illegible]）
領事官補　田村　幸策
外務書記生　小林開之助　小野田之良

●安東居留民團

▲明治三十九年十月一日安東軍政撤廢と共に施政の大部を駐安東縣日本領事に引繼ぎたる時已に安東市街は井然たる區劃をなし日本市街を形成せしを以て爲政の必要上領事は七名の行政委員と三名の豫備行政委員を任命し居留地自治行政の機關とし役所を五番通りに設け行政委員會役所と稱す

四十年八月外務省告示第十八號を以て天津、上海、漢口、牛莊、安東の五民團を設立し同年九月一日より居留民團法並に之に附隨する諸令規に基き組織を改め處務するに到れり此より役所を安東居留民團役所と改稱す四十二年十月安東官有財産管理委員會の組織成り從來民團役所に於て保管處理せし官有財産は同會に引續き爾來益大の發達を見今日に到れり

▲安東民團は牛莊民團と其事情を同うして官有財産管理會より每年補助金の交附を受く營口に於ては官有財産管理委員會は解散して其財産は民團に併合さる沿線各地が滿鐵會社の勢力圏内に在りて從ふて會社が其地に於ける諸般の公共的施設に任ずるに反し此地と營口とは各民團親ら此等施設の大部分を擔當せり即ち當民團に於ては土木、衛生、教育、消防、救恤等の各事項を處辨するの外に公會堂、圖書館、安東神社、陳列館等の維持に當り又商業會議所幼兒運動場をも補助せり大正四年度に於ける當民團歳出入豫算は其收入經常臨時共合はせて十四萬七百二十九圓に上る此內官有財産管理會よりの交附金は二萬五千七百圓なり又其支出中に於て三萬七千五百六十三圓は居留民團債（道路改修工事費）の消却に充てり

行政委員會

議長　阿部　讓　議長代理　近藤錦太郎

會計主任　渡邊喜八郎　委員　藤平　泰一
同　高橋　貞二　同　久間　善助
同　藤田　駒吉

民團役所

理事　小濱爲五郎　庶務課長　中川　憲義
會計課長　西　水要
土木課事務取扱囑託　手塚　虎喜

◉安東商業會議所　安東縣六番通五丁目（電話一五〇番）

△日露戰役中驚くべき發展を遂げたる安東は戰後諸般の市勢著々整頓し開港場として其面目を備ふるに至りたれば安東領事は商業的公共機關の必要を認め明治四十年十一月領事館令第二十號を以て安東商業會議所規則を發布し同時に創立委員を任命し爾來各般準備の爲め多數日子を費し翌四十一年七月議員の選擧を終はり領事の認可を經て成立せり其事務權限は略ぼ内地と同じく議員は十五名より成り議員選擧權者は當地居留民團課金十二等以上を納付する帝國居留民に限り其經費亦有權者に依りて負擔せらる創立以來些額の經費を以て同胞實業の發展のため著々成績を收め商業上の代表機關として其機能を發揮しつゝあり會頭は大庭敏太郎、中野初太郎、三崎賢二諸氏を經て第二次會頭再選せられたり

會頭　中野初太郎　副會頭　永原　正雄
常議員　式村　茂　常議員　藤田　駒吉
同　高橋　貞二　同　藤平　泰一
同兼會計委員久間善助　書記長　笠井仁三郎

◉安東縣漁菜市場

△當市場は明治三十七年八月の開設なり最初時の軍政署は新市街市場通りにバラック式建物を建築して漁業市場を開設したる處同四十年二月五日火災に罹りて烏有に歸し同月更にバラック式二棟の假建築を爲し同年六月二十四日建坪九十坪二棟、道路上家六十七坪五合の新建築工事に著手し同年九月七日竣成せり其後四十四年五月二十一日更に建坪四十五坪一棟、道路上家六十七坪五合の增築工事に著手し同年六月二十二日竣成せり現在戶數三十八戶にして屋賃銀三百二十七圓に上る

◉安東公會堂　安東縣六番通六丁目電話一五〇番

▲當公會堂は安東居留民團より工費二萬圓を投じて新築せる大建物にて階下に安東倶樂部安東商業會議所等あり附設せる食堂ありて一般に公開す階上には宏大なる廣間あり當館は安東唯一の公會的機關として居留民團之れが經營に當れり

◉安東屠獸場　安東縣舊市街小沙河子

▲當屠獸場は明治三十八年市政準備會に於て新市街大和橋通りに假屠獸場を設置して軍隊及在留民用の屠殺を爲し同年四月より日清兩國人共に本場に於て屠殺を爲し得るの制を設け四十年十月より更に清國官憲と協約し日清合同の一會社となし同時に從來の屠殺場を廢して之れを舊市街小沙河子に移つし之れに要する經費及利益の負擔配當は清國側は四分の三を、日本側は四分の一を收得することゝせり當場一日平均の屠殺數は牛十四、山羊十七、豚二十五に達し大正四年八月中の屠殺總數一千九百三十二頭にして其收得は銀二千五百九十四圓二十錢に上れり

獸醫　赤尾　甚作
事務員　茶木清太郎　支那人　張　某

◉安東神社　安東縣新市街七番通一番地及三番地

▲當神社は元と大神宮と稱し明治三十八年軍政署に於て之を建立したり爾後安東居留民の寄附及居留民團の會費を支出して四十三年より四年に亘りて神殿を移轉修繕し拜殿及社務所を新築せり四十三年十月市本神職を伊勢大神宮に參向せしめ神樂殿に於て特別大廟を申請し同年十一月二日神職之れを奉じて歸著し翌三日神靈鎭座式を執行し公幣安東神社と稱す維持費は民團より支出し每年五月一日及十月三十一日の兩日に春秋大祭を執行するを例とす

神職　市本　憲政

◉本派本願寺出張所　安東縣七番通六丁目

▲當出張所は日露戰爭中より既に軍隊慰問の爲め開教師の留錫するありしが其後次第に教勢を擴張して明治四十一年六月より本堂の工事に着手し同年十一

月上棟式を擧げ四十三年十月内外内部竣成せり本堂は純木造日本式にして間口七間、奥行八間三尺、内陣の餘間、廉間、後堂の下陣に區分し安置佛は本尊阿彌陀如來、見眞大師の明上如人、七高僧、聖徳太子、慧灯大師の六尊なり

主任　開教師　田中行善（人事參照）

◉東本願寺布教所　安東縣堀割北七丁目二號地

▲當布教所は明治三十七年日露戰役に際し軍隊慰問として和田龍意師を派遣せられしに始る師は戰後猶安東に駐錫して傷病兵及在留民の慰問に努めたり其後一般信者の懇望に依り明治四十一年現在所に本堂建築の大工事を企て四十三年八間四面の殿堂大半の建設を終へしが大正元年秋現主任の就職するや更に努力の結果大正四年に至り終に殿堂の完成を遂げたり

主任　猪原現昭

◉曹洞宗相音寺　安東縣堀割通四丁目一號地（電話三二五番）

▲當相音寺は明治四十一年九月本多祖信師布教師とし來任開教に着手せしに開基す初め八番通七丁目に假布教所を設け爾來屢々堂宇新築の議を講じ四十三年九月より現在所に庫裡の工事に着手し同年十一月落成引續き同年十二月本堂新築起工式を擧げ四十四年四月二十二日上棟式を行ひ同六月三十日を以て内外全部の落成を遂げたり四十五年一月現主任は本多祖信師の後任として來任し今日に及ぶ

布教主任　河谷正憲　島根縣邑智郡川島下村、三十歳

◉淨土宗安東寺　安東縣山手町一號地

▲當安東寺は明治四十二年四月の開教にして初め新遊園地に假布教所を設けたりしが大正元年現在所に新築移轉す信徒數七十餘名

教主　乃美堯夫　山口縣玖珂郡柳井町瑞相寺、三十六歳、夫人しな子二十五歳

◉鎭江山臨濟寺　安東縣七道溝

▲當臨濟寺は明治三十八年六月の開教にして其後各信徒の喜捨により五萬坪の滿鐵用地を借入れ建坪百坪の宏壯なる堂宇を建築せり

教主 釋 佛 海 愛媛縣松山市末廣町 四十八歳

◉日 蓮 宗 安東縣六番通三丁目

▲當日蓮宗は明治四十三年八月の開教にして同四十五年信徒の喜捨に依り約三百坪の土地を買收し目下六千圓を投し建坪六十坪の本堂を新築中なるが大正四年末竣工の筈なり

教 主 中込 湛隆 山梨縣甲府市横澤町二八番地 四十四歳

◉日本基督教會 安東縣五番通四丁目

▲當教會は明治四十一年五月の設立にして牧師は經費の關係上新義州教會より出張布教することゝなれり

牧 師 村 上 治



◉五 龍 閣 五龍背驛 （電話特設一番）

營業 温泉旅館

五龍閣は安奉線五龍背驛より南三町の處に在る温泉旅館にして背に小丘を負ひ構内には花卉樹木を移殖して風致を供へ規模頗る宏大なり元と庵谷忱氏の所有に係るも現今安東の料亭元彌生の女將之を借受け營業しつゝあり

當温泉の湧出は古來人に知られたるも所謂邊外の僻地なりし爲め何等の設備もなく幾歳月を經過したり日清戰役の際木越支隊は始めて臨時浴槽を設けたるも我軍の撤兵後は廢絶せり明治三十五年庵谷氏特別任務を帶び旅行の途次之を發見し三十七年日露戰役中同氏は其土地を所有せる支那人と租借を訂約し三十八年鴨緑江軍の療養所に充てたり三十九年其閉鎖と共に一般に公開して漸次客室の增築を施し安奉線改築後浴客の劇增に伴ひ滿鐵會社亦多大の援助を與へ更に增築して嚴寒に對する設備を完全せり今や荒寥たる滿洲の東邊、朝鮮平北に於ける唯一の慰按場となれり前年東久邇宮殿下の御旅館に充てられたる

露國は數十年來精密なる研究調查の結果此地を相して東方經營の大策源地となし同鐵道南枝線の分岐點に選定し松花江の水路と鐵道とを併用して平時に於ては流域の富源無盡なる北滿一帶を開發して地方の物產を振興し盛んに商工業を起して以て極東に於ける經濟的市場となし有事に際しては供給の不盡なる地方物資を吸取して沿海州及關東州に對する軍事上の兵站基地たらしめんとせり此に於て全力を此市の經營に傾倒して既に四千萬留を費やしたりと傳へらる現時純然たる歐洲式の大都會を形成し大街小衢井然として白堊石層巍峩として雲表に聳へ全然露都に遊ぶの感あらしむるも偶然にあらざるなり

▲新市街は中央の高地にて支人は秦家崗と稱し露人は俗に鐵道町と呼ぶ停車場、東清鐵道廳、守備隊本部を始め各國領事館、露清銀行、其他學校、病院、郵便局、大寺院等皆此内にあり我總領事館、日滿商會も亦玆處にあり市衢清潔にして宏莊なる建築物は樹木庭園を以て圍繞せられ白壁翠蔭に掩映して歐都に遊ぶの想あり埠頭區は松花江に面したる低地にして商業地なり鐵道線路によりて新市街と分たれ線路の上に架する鐵道橋を以て兩區交通の唯一の大道をなせり各街大小商店軒を列ね日露支の商賈雜處して營業す松花江埠頭は東清鐵道會社汽船、黑龍江汽船會社汽船等の客貨汽船、曳船、戎克等常に著發し鐵道輸送の連絡完全せり我邦人は多くモストワヤ街及プテワヤ街に團集せるが此區は家屋高低美醜相錯雜し歐風大厦高樓の間に在りて太だ遜色あるを免れず舊哈爾賓は新市街より東南約三露里を隔て東清鐵道敷設當時に於て唯一の市街なりしも新市街及埠頭區の發達と與に全く其價値を失せり傅家甸は元と露國の哈爾賓經營に隨伴して自然に形成發達せしものなれば哈爾賓の支那街と看做すを適當となす穀物其他貿易上哈爾賓と重要なる關係ありて本邦商も多數在住す

▲東清鐵道は哈爾賓の母にして又生命なり其哈爾賓に於ける關係は恰も大連に於ける滿鐵會社の如し同鐵道は私立會社の經營なりと云ふも事實純然たる露政府の鐵道にて其資本金は悉く露國々庫の支出に係れり敷設當時に於て實に六億六千二百萬留の巨額を支出したるが爾來每年缺損して政府の補助費は平均年額千九百四十餘萬留に上りたり近年當局者は之

れを商業的經營の下に置き各種の施設を改善しつゝあるも猶其經費項目に於て普通鐵道會社の課目に見出さざる守備兵費、民政部費等の大支出あり東清鐵道廳の職員は臨時雇、日給者及勞働者を除き一萬六百餘名の多數に上り本部を官房、經理、印刷、法律、商業、計算、保線、哈爾賓市區、營業、電信、運轉、用度、航路の諸課に又民政部を行政、租借、交涉、教育、寺院、地方、衞生、新聞の各課に分てり而して東亞第一の宏莊を以て名ある石造大建築物は此等の全部を包容し巍然として北滿に雄視せり

▲其他露國側の官衙は警察所、國境地方裁判所あり陸軍は後黑龍州軍團本部、後黑龍鐵道守備旅團、後黑龍鐵道第二旅團、風紀衞兵隊等あり支那側にありては濱江道尹署、吉林及黑龍江交涉局、稅關、巡警局、統稅局、郵船總局、郵政局、電報局等あり

▲此地は東西千五百二露里、南岐二百二十二露里に亘る東清鐵道の中心點にして加ふるに舟楫二千露里に達する松花江水路の中腹なれば實に四通八達の要地なり東清鐵道は西線區哈爾賓滿洲里間は八百七十六露里、西比利亞本線に接續して露本國に通じ本線區哈爾賓「ポクラニーチナヤ」間百十二露里より烏蘇里本線に連絡して浦鹽斯德、「ハバロフスク」に出で南線哈爾賓長春間二百二十二露里より滿鐵に接續して大連に達す松花江は大抵解氷期四月中旬より十月下旬に至る六箇月間半は航行をなすを得而して松花江本流及嫩江、呼蘭河二大支流の水路は五航區に分たる、一、吉林、伯都訥間（三百二十七露里）、二、伯都訥、三姓間（五百八十露里）、三、三姓、松花江口間（二百九十四露里）四、嫩江、富拉爾同河口間（四百露里）、五、呼蘭城同河口間（二十五露里）是なり航業者の重なるは東清鐵道の汽船部にて大小汽船二十三隻、貨船五十八隻、大戎克三隻を有し松花江本支流は勿論、黑龍江及烏蘇里江の臨時交通をなしつゝあり其他黑龍江汽船會社支社、外數社あり

▲農產は北滿の生命にして大豆、大小麥、粟の多量を產し此他各種野菜に富み養豚、養鷄及牛、羊等の牧畜亦た盛んにして生產の過剩を來たす又森林豐富にして黑貂、狐、栗鼠、狽其他毛皮の多量を產す工業の主なるは製粉、麥酒、甘菜糖、蠟燭、各種酒類、石鹼、皮革、硝子等にして此內製粉最も盛大にて哈市

に於ける製粉能力は最大一箇年一千五百萬布度に達す地方住民の手工中に於て盛んなるは製油、高粱酒釀造なるも猶微々たる者なり漁業は東淸西部線に近き蒙古及其他の河川、湖水に於て近年著るしく發展しつゝあり

▲金融機關としては露亞銀行、上海香港銀行、第一第二借款銀行、（此銀行は我信用組合、勸業銀行及農工銀行を混合せし如き組織の者）交通銀行、中國銀行及我正金銀行あり此地に於ける商人は多く猶太人にて金融上太だ不信用なり

哈爾賓貿易の大勢

▲哈爾賓は北滿に於ける唯一最大なる輸出入貨物の聚散場にして玆處に出入する貨物は毎年約一割宛を增加して一千九百八年の二千八百萬留より一千九百十三年度の五千八百萬留に激增せしも一千九百十四年に於ては歐洲戰亂の影響として五千四百萬留に減下せり今同年度貿易に就て言へば輸出に於ては大豆の一千三百五十萬留、麥粉及小麥の五百八十萬留、雜穀の三百萬留、家畜家禽の二百萬留を最大とし輸入に於ては洋反物及紡績の七百二十萬留、煙草の二百五十萬留を最大とし其他火酒類、麻袋、麥粉袋、石油、茶、石炭、雜貨類を主要品とす更に之れを國別すれは其六割五分は支那滿洲品、一割六分は露國品一割二分は諸外國品、而して八分は日本品なりしが近來諸外國の輸入は益々減少するに反し日本品の輸入は益々增加して優に其一割以上を占有するに到れり

▲北滿は滿洲の穀倉を以て稱せられ其一年の農產額は高粱七千萬布度、大豆五千萬布度、小麥二千萬布度、大麥一千五百萬布度、粟一千五百萬布度に上る從來小麥は北滿第一の農產にして其多量を沿黑兩洲に輸出せしも例の五十里地帶課稅の爲め（一布度四十錢の課稅）輸入困難となり又之れを歐露に送るには運賃の關係上不引合たるを免れずして今の處小麥は產額の增加に伴ふ消費地を見出すこと能はざるに反し大豆は歐洲の大市場を控ゆる上に又製粕の好得意を日本に有し土人間にも油房を開營する者續出するに至り從ふて大豆の需要は殆ど無限なれば最近小麥の產額は減少して大豆は益々增加し其將來の產量

は殆ど豫測し能はざるの現狀に在り

▲北滿農産の大王なる大豆は哈爾賓を中心市場として其一部は黑龍江省内に於て製油原料として消費され又其一部は滿洲里より後貝加爾州に油房用として輸出さるゝも其大部分は大連及浦鹽を經て海外に輸出さる大豆の歐洲初輸出の明治四十一年に於ては其額十三萬噸に過ぎざりしが翌四十二年には十五萬噸となり又其翌年には二十五萬噸に激增し爾後同樣の增率を以て大正三年度には四十萬噸に上り同四年度には四十五萬噸となりたる可し大豆商としての最大勢力は日本人にて大正三年度に於ける輸出四十萬噸中邦商の取扱ひたるは二十萬噸に上り之れに次ぐは丁抹人ワッザルド商會十五萬噸、其他露獨人五萬噸の割合にて今や滿洲特産物の商權は漸く我邦人の手に歸し彼等外人等は皆後に瞠着たるの看あり

▲北滿に於ける我邦人の商勢は獨り特産物輸出に於て覇權を握れるのみに非ずして雜貨輸入界に於ても亦次第に牛耳を取らんとしつゝあり從來我强敵たりし獨逸商等が戰爭の爲め退却せし以來は邦商の獨舞臺となり露人の如きは終に我敵手に非らざるが如し特に日露の益々親善を加ふ可き將來に於ては北滿に於ける我商權の伸展は測る能はざる者あらん

▲要するに北滿は南滿が既に壯年者となれるに反し猶未丁年者にして其發展は將來に在り我邦人は長春以北を南滿と稱して之れを北滿と區別し北滿を勢圏外として之れを滿洲より除外せんとするも元と滿洲なる者は經濟圏に於て南北に區別し得べき者に非らず又滿洲經營なる者は北滿を除外して立論し得べき者に非らざれば我邦人の對北滿の研究及施設には更に大に努力する處あるを要す可し

諸營業

◉北滿製粉會社　哈爾賓舊市街　（電略「ホクマン」）

營業　製粉並に販賣

當會社は資本金五十萬圓（内四分の一拂込濟）の株式會社にして大正二年十一月より其業務を開始せり株數一萬株、一株五十圓にして株主の主なる者は皆滿鐵會社、三井物産、正金銀行等の關係者なり近く第

二回（一株五圓宛拂込）の拂込を爲す筈なり當會社は初め露國人ロバチヨツフ氏の經營なりしを大正二年七月其土地建物等全部を買收して重もなる職工を日本より招き業務の改善に努めたり機械は皆露國式にして品種を五等に分ちて製粉す開業以來日尚淺きも粉質の最優良なるにより頗る順調なる發達をなし創始當時は其販路南滿洲及哈爾賓附近に過ぎざりしも近來浦鹽を經由して東京に輸送せられ又歐洲戰亂の結果南洋及遠く歐洲方面に輸出せらるゝの狀態にして前途太だ多望なり大正三年九月一日より同四年二月末日に至る當社收支を觀るに販賣高十萬五百七十七圓三錢、外に雜收入を合はせ計金十萬五千二十二圓五十八錢此内支出（工務費、事務費、運賃、諸掛、諸税、保險及倉敷料等）金九萬五千八百圓八十九錢、を差引き金九千二百二十一圓六十九錢の純益を擧げ準備積立金、機械建物、什器消却積立金、役員賞與金等を控除したる金六千二百五十圓（年一割）を株主に配當し猶後期に金一千三百六十六圓三十五錢を繰越せり

專務取締役　河井松之介（人事參照）
常務取締役　高木幸次郎
取締役　長谷川辰五郎　同　吉富　環一
同　夏秋　龜一（人事參照）
監査役　藤村　義苗　相生由太郎（同上）
支配人　高木　直行
支店　東京日本橋區本町二丁目六番地

◎三井物産會社哈爾賓出張所

哈爾賓モストソヤ街（電話六七〇番）

營業　特産物竝に北滿製粉販賣

明治四十年秋出張員を派遣し大豆を歐洲に輸出せり此れ歐洲に對する大豆輸出の始めなり双城堡、石頭城子、陶賴昭、對青山、呼蘭、齊々哈爾、北團林子、巴彥蘇々、浦鹽に出張員を派遣しあり

所長　長谷川作治（人事參照）
次席　中村　準輔　森島　雄三
倉庫　傅家甸　電六二二番

◎株式會社横濱正金銀行哈爾賓出張所

哈爾賓モストソヤ街（電話五七二番）

當出張所は大正元年十一月の開設なり

主任　津山英次　次席　河野長彦

◉小寺洋行哈爾賓出張所
哈爾賓埠頭區モストヤ街

營業　滿洲特産物貿易

本店は營口に在り當出張所は明治四十五年に開設さる目下商業上の當出張所管轄區域は長春より浦鹽迄にて浦鹽には小寺洋行船舶部と小寺洋行出張所とあり其他各要地には日本人又は支那人の出張員を派遣しあり斯く營業上の區域廣大にして其取引も頗る活潑なれば漸次支店に昇格す可く又事務所は開店當時建築材料騰貴の爲め中止せるも是れ亦た近く建築せらる筈なり

主任　笠井保　島根縣邇摩郡井田村（早稲田大學出身）三十四歳　外店員　七名

◉株式會社松花銀行
哈爾賓モストワヤ街（電話七三五番　振替大連一二六七番）

營業　一般銀行業

當銀行は大正三年六月日本商法に基きて創立せる資本金十五萬留（内拂込濟七萬五千留）の株式會社にして株數三千株、株主數七十一名、重なる在留民全部を網羅せり哈爾賓に於ける邦人の金融機關なる當行の預金者は主として當地及沿線の在留民にて何れも留取扱なるが其額既に十萬留に達し更に益々増加しつゝあり又貸出は支那人を第一位とし日本人之に次ぎ露國人は第三位に在るの順序なり

大正四年六月に於ける第二期決算に於て一割の利益を株主に配當し其餘は全部之れを積立金に計上せり

専務取締役　河合松之介（人事參照）
取締役　軍司義男
取締役兼支配人　吉雄豊（同上）
監査役　夏秋龜一（同上）
同　志方虎之助（同上）

◉日滿商會
哈爾賓新市街（電話一六九番　電略「ニチマン」振替大連二一一番）

營業　運送並日露貿易

當商會は個人經營にて明治四十二年八月の開設なり

營業主　夏秋龜一　外店員八名
代理店　長春新市街石山商會

● 東亞煙草會社哈爾賓販賣所

（哈爾賓新市街モストワヤ街）

營業　煙草販賣

當販賣所は明治三十九年十一月瀧澤氏主任として來り一個所を設したり現在の販路管域は北滿全體に亙り北は黑龍江よりブラゴエ、黑河、東清沿線各地に及び年々賣行增加し頗る好況なり

主任　中島　監査役事務取扱　商員　矢澤　義也

● 合名會社協信洋行哈爾賓支店

（哈爾賓モストワヤ街（電話六七八番））

營業　西伯利亞北滿雜穀輸出、綿布絲輸入販賣 並精米輸入販賣

本店は神戸に在り大幸喜三郎氏外二名の合同經營にて明治三十九年十一月を以て開設せる總支店を浦鹽に設け幹部員は常に浦鹽に在りて各店を指揮す浦鹽總支店は對露人綿物、美術品、雜貨の卸小賣西北利亞及北滿の雜穀、肥料、沿海州の海產物の買入輸出を爲す外精米所を設きて西貢及朝鮮米を精米せり

本店　神戸三宮町三丁目　主任　武部參武郎

哈爾賓支店主任　三好　政次

（哈爾賓埠頭區〔illegible〕三十一號）

浦鹽支店　アレウーツスカヤ街　主任　大幸喜三郎

ブラゴエチエンスク支店　クラスカヤ街

ハバロフスク支店　ゴルシコイ街

釜山支店　埋立新町

モスコウ出張所

● 梅田商會哈爾賓支店

（哈爾賓モストワヤ街（電話六五〇番　電略ウメダ〔illegible〕））

營業　藥種貿易竝雜業、賣藥製造販賣

本店は東京四谷區愛宕町七十六番地に在り梅田深氏の個人經營なり露國本位の藥種貿易商にして初め浦港に本店を設立したりしが明治四十年本店を東京に移し大阪、浦鹽、及哈爾賓に支店を置けり當支店は明治四十年十月の開設にして露支兩國に對する藥種貿易を主とし露國に日本藥品を販賣するは實に當店を以て最始とす目下露都に出張員を派遣しあるが漸次其他にも出張所を開設するに到るべく露國及歐洲方

面に於て大節に信用を博しつゝあり

哈爾賓支店　主任　金丸信吾治（大分縣大分郡明治村、三十五歳 [illegible]）

大阪支店　北區曾根崎上二丁目七六（對露支業務、貿易業、纖維業製造販賣業）

主任　白龍　芳夫

浦港支店　ペンキンスカヤ街（石炭其他貿易）　主任　竹村四郎

傳家店分店　大街（電一五四番）　主任廣瀬岡吉

● 池上大藥房　哈爾賓埠頭區十字街（電話七一一番　振替大連三〇一番　電略イケ）

營業　藥種、各賣藥、醫療器械、包帯材料、銃砲火藥販賣

當藥房は個人經營にて經營者は日露戰役後明治卅九年十月 [illegible] 西門外に池上藥局を開設し四十年哈爾賓に移り中央寺院を四道街に開設し四十二年十月同關 [illegible] を開業し現地に現業を開始し主として [illegible] の支那人に對して藥品の卸及小賣を爲せり經營者池上氏は哈爾賓に於ける斯業の開山にして頗る優勢なり滿鐵會社との取引多し氏は資産を有し現に郷里に於ても自ら池上藥店を經營しつゝあり

營業主　池上　信美（岡山縣 [illegible]、四十四歳、妻女一名）

● 加藤商會　哈爾賓 [illegible]（電四一〇番　振替大連五〇八番）

營業　北滿農産及綿絲布賣買、日露貿易雜貨委託賣買、其他仲介代理業

當商會は個人經營にて明治四十五年五月の開設なり

營業主　加藤　明（[illegible]、三十七歳）

店員　馬場　進　外露國人ブローカー十餘名

● 鐘ヶ江支店　哈爾賓キタイスカヤ街

營業　雜貨、化粧品、食料品等一切

本店は浦鹽セメイフスカヤ街にあり鐘ヶ江利三郎氏の個人經營に係る兄弟三名は孰れも本店にありて店務を管理す當支店は明治三十九年十月に開設せり

營業主　鐘ヶ江利三郎（福岡縣三瀦郡 [illegible]、四十三歳、妻女一名）

竹内商會 （哈爾賓キタイスカヤ街、電話七三四番 長春大連二三九番）

營業　撫順炭、本溪湖炭、本溪湖銑鐵、機械用鑛油販賣

當商會は個人經營にして明治四十一年八月の創設なり營業者は北滿地方に未だ石炭使用者の少なかりし時代に三年間非常なる努力の結果終に炭界今日の盛況を致せるものにして實に北滿石炭界の元勳なり最初本溪湖炭を輸入せしも炭質不適の爲めに實行かず明治四十二年春より撫順炭を輸入することゝせるに購買者の氣受良好にして目下露支人經營の哈爾賓各工場及松花江沿岸各地方に於ける重もなる支那人の燒酎、北燈、油房、製材等各工場に要する石炭は何れも當商會より之を供給せり又當商會は露支人の造幣所及各鐵工場に銑鐵を供給せり

營業主　竹内案次郎　（福岡縣田川郡後藤寺町字西寺□番地、五十一歳、雇人七名三十六歳男一名、女一名）

支配人　中原　丹□　外店員四名

貯炭場　哈爾賓第八區　同　松花江岸

同　黑龍省對青山　同　呼蘭府

東亞洋蠟合資會社 （哈爾賓アトナーヤ十七街（電話一〇〇番）長春大連一三〇四番）

營業　洋蠟燭製造販賣

當會社は明治四十四年五月富田大作二氏の出資に由りて創設せり上海ライジングサン會社の原料を用ひ一日の製造高二千斤內外にて其製品は美麗式のレッテルを貼附し北滿各部落に代理店を置き漸次販路を擴張し信用を博しつゝあり顧客は主として露支人たり當會社は本營業として露支人に需求を販賣し需用益々增加の勢なり

無限責任社員　富田荒作　（長崎縣西彼杵郡□□村、三十五歳、雇人七名、二十四歳、女一名）

有限責任社員　木野岩兵衛　（在福岡）

松茂洋行長春支店哈爾賓出張所

哈爾賓第八區 （電話七一四番）

營業　撫順炭、本溪湖炭の仲買

本店は大連にあり當出張所は長春支店の管轄下にありて明治四十三年十二月開設す

主　任　飯野德之助　（宮城縣仙臺市東三番町、三十六歳 雇人二名二十七歳）

貯炭場　第八區

●東洋旅館　哈爾賓モストワヤ十街（電話七三七番）

營業　旅館

當館は個人經營にて明治四十年一月の開設なり建坪二百坪、堅牢なる煉瓦二階建の建築内には客室十三室に四十餘の大廣間ありて宴會及會合其他諸般集會に充當さる館内にはスチーム其他の設備皆具備し哈爾賓第一の完全なる高等旅館なり

營業主　三角　二郎　熊本縣[illegible]、四十二歲、夫人[illegible]、三十四歲、[illegible]、二歲

●門元商店　哈爾賓[illegible]（電話[illegible]　振替大連二四二番）

營業　雜貨賣藥、日露雜貨販賣並に貿易

當商店は個人經營にて明治四十三年七月の開設なり露國本國との取引を主とする營業とす本外國雜品を大連日本商社、門司支店、其他内地、仁川、同地方面に輸出販賣す

營業主　門元　節夫　[illegible]三十一歲、[illegible]

●長壽堂藥局　哈爾賓[illegible]（電話七〇番　振替大連三三四番）

營業　賣藥、雜貨、其他化粧品販賣

當藥房は奉天長壽堂の支店にして明治四十年五月の開設なり營業は對支人の卸及小賣にして其内六分迄は卸賣なり東清沿線並に松花江沿岸一帶の方面に逐日販路を擴張しつゝあり

主　任　山本六太郎　福岡縣[illegible]郡千手村大字千手　三十二歲

●疋田洋行　哈爾賓[illegible]（電話一一五番　振替大連二三〇番）

營業　綿絲布雜貨輸入

當洋行は個人經營にて多年露國に於て營業せしが明治四十四年十一月現地に移店せり販路は北滿全體に亘り針類雜貨を專門とす

營業主　疋田　豊藏　[illegible]四十二歲、夫人[illegible]四十二歲、長子二十五歲

●加藤醬油製造公司　哈爾賓[illegible]（電話八三番　振替大連三二七番）

營業　醬油並に味噌製造販賣

當公司は個人經營にて明治四十一年六月の開設なり最初[illegible]月百二、三十樽（一斗樽）

内外なもしが漸次増加して昨今月五百挺内外に到る買手は北滿全體の支那人にて日本人の需要は二割内外に過ぎず目下使用人は日本人は林氏一名にて他は全部支那人なり

營業主　加藤德三　長崎縣西彼杵郡上長崎村、四十八歳、夫人にる五十歳、（一女に養子す）

◉外に熊澤洋行（埠頭區）松浦洋行（新市街）あり日本絹布及美術品其他諸雜貨の對露貿易をなし太だ優勢なり

◉日本同仁醫院　哈爾賓ミストヤ街

營業　醫術

當院は個人經營にて明治三十九年十一月の開設なり

院長　志方虎之助（人事參照）

◉成田醫院　哈爾賓新市街（電話七一三番　電略「ハルピンナリタ」振替大連三〇七番　大阪八三五一番）

營業　醫術

當醫院は個人經營なり

院長　成田十郎

◉森病院　哈爾賓新市街（電日清商會取次き）

營業　醫術

當醫院は明治四十一年九月の開設にて個人經營なり患者は全部露國人なり我領事館の囑託醫を兼ぬ

院長　森　矯　岐阜縣武義郡南武義村、三十八歳、夫人みち二十六歳、男三名

◉村井醫院　哈爾賓プリスタン街

營業　醫術

當醫院は個人經營なり

院長　村井周次郎

◉河合醫院　哈爾賓新市街停車場通

營業　醫術

當醫院は個人經營にして耳鼻咽喉科を專門とす

院長　河合友治

◉北滿洲社　哈爾賓モストワヤ街（振替大連一四六番）

營業　新聞發行並印刷

當社は北滿唯一の新聞にして明治四十二年三角氏外一名に由りて創立され四十二三年頃布施氏之れを繼承し一時露文をも併刊したるも四十四年八月廢刊の止むなきに至り大正三年八月現社主は之れを再興せり小形四頁の週刊紙にして汎く露領方面に購讀さる
當社は亦印刷業をも兼營せり
社　主　木野清一郎　　編輯人　大河原厚仁

官衙、公共團體、宗教團體

◎在哈爾賓總領事館　哈爾賓ノボウイトルコーキャ街

▲哈爾賓總領事館は明治四十年の創設にして其管轄區域は吉林省中新城、依蘭、（湯原、大通、臨江の各縣を含む）密山、五常、雙城、綏芬、賓州、楡樹、長壽の各縣及び黑龍江省中、嫩江、陶兒河の會合點より拜泉縣を經て黑龍江とブレイヤ河の會合點に至る線以東の地方全部に亘る此管內に於ける在留邦人（哈爾賓在留者を除きて）は大正四年六月末に於て男百七十四人女六百二十四人、計七百九十八人なり當館には總領事駐在し初代川上俊彥氏より本多熊太郎氏を經て領事官補川越茂氏の代攝となり大正三年十二月現總領事代理着任せり
總領事代理領事　佐　藤　尙　武（人事參照）
外務書記生　佐々木靜吾（同上）杉野鋒太郎（同上）
川南　省一
通譯生　平　田　稔　　根津　芳造
外務省警部　木佐貫牛之助

◎哈爾賓居留民會　哈爾賓モストワヤ街

▲明治三十七八年前迄は哈爾賓在留の邦人は三百名內外に過ぎざりしが戰役後俄かに增加し遂に自治機關創設の必要起り明治四十年一月加藤明氏等主動の下に頗る盡力する處ありしが同氏の南滿に去るに及び志方氏其後を繼ぎて斡旋し四十年四月總領事館開設せられ四十一年初めて民會の創立を見たり
▲民會の事業としては病院、郵便事務及び小學校を經營せり小學校はは明治四十三年以來の開設にて民會樓上に在り目下在學男女三十名あり月謝は尋常科一留、高等科一留五十哥にして助教師二名を置けり經費の不足は民會より補助し居れり

會長　河合松之助（人事參照）副會長　志方虎之助（同上）
專務理事　郡司義勇
外に評議員十五名及び各營業別に部長十二名を置き連絡を保てり

◉哈爾賓共立日本醫院　哈爾賓モストワヤ街

▲明治四十三年頃外務、滿鐵、三井の關係者等相議し基本金を醵出して當醫院開設の基礎を作り京都大學卒業の渡邊醫學士を院長に迎へたり其後民會の發展と共に正金銀行より特貸を得て地面を買收し現地に新築移轉せり目下民會の附屬事業として經費は同會にて負擔せり病室七、ベット十四の設けありて外來入院患者合せて一日二十名外に露支人の患者もあり收入も漸次增加しつゝあり

院長　町田稔（人事參照）

◉本派本願寺哈爾賓出張所　哈爾賓モストワヤ街

▲日露戰爭前に谷口常之師浦鹽より來りて此地に駐在せしが戰後哈爾賓有志相議して本願寺本山に布教所設立を願ひたるよりブラゴエチエンスク出張所駐在の中村義晃師は明治四十一年春來りて當出張所を開設せり四十五年六月現任押野慶淨師は義晃師に代りて來駐し今日に到る現在の假本堂は大正三年修築したる者なり當出張所は北滿唯一の布教所なるを以て一般邦人の信仰深く有志者等は明治四十三年四月白道講を起こせり同講は北滿在留の佛教信者若くは佛教同情者の全部を網羅して七八百に及び講員は每月最低十錢を納め之れを當出張所の維持費とし其餘は銀行に預入して本堂の建築費に充當しつゝあり近く佛陀の慈光を宣揚する寺院の北滿の野に現出するを見るならん

主任　押野慶淨（石川縣小松町正覺寺、三十四歲、夫人美佐保二十五歲、男一名、女一名）
管轄區域　東清線一帶

◉哈爾賓青年夜學校

▲大正三年八月より有志者三十餘名は相會して露支語學の研究を始めしが翌四年五月に至り廢止のやむなきに至りたれば同六月領事佐藤尙武、夏秋龜一、

吉雄豊諸氏の發起により夜學校を創設し學課を露支語及法制經濟、簿記、珠算、國語、漢文の各科に分ち授業を開始せり現在の生徒八十七名あり又附屬事業として圖書閲覽場設立の計畫中なり

◉傅家甸共濟會　哈爾賓傅家甸四頭街

△當共濟會は大正三年冬傅家甸在留邦人三十四軒全部の團結を以て創設さる毎月甲種一留、乙種五十哥を醵出して會員の共濟費並に郵便物の配達及送局費（毎日朝一回午後一回）に充つ目下積立金六百留に達す

會長　加藤德三

會計　山本六太郎

滿洲輿信錄奥附

定價金參圓五拾錢

大正五年一月二十六日印刷
大正五年一月二十九日發行

著作兼發行人　武内忠次郎

印刷者　松本彌平

大連市大山通七十四號地
印刷所　小林又七支店

奉天十間房警第二區第百二十四號
發行所　滿洲通信社
電話(四)六三二一番
振替大連六七九番

2